その竜族は狙撃手なり

ぱっつぁん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その竜族は狙撃手なり

【Ｎコード】
Ｎ０４４３Ｒ

【作者名】
ぱっつぁん

【あらすじ】
テンプレートの如く神に殺された俺こと『黒神織（クロカミシキ）』。転生先は『魔法先生ネギま！』と来た……。とりあえず神には力を貰ったし、生き残るために戦うか。魔法？　そんなん要らねえよ。魔法なんか使うよりぶち抜いた方が早いだろ？　さあ、今からそっちに逝くぜ、魔法使い（クソッタレ）共。テメェらに死の弾丸を魅せてやるよ！！
※三日に一回更新予定

第零撃『神様だってよくミスる。つまりはエピローグでプロローグだ』（前書き）

懲りずにまた新作……。
新作のアイデアが溜まりに溜まってしまい、その内の一つを投下してしまいました……。

反省はしている。後悔はしてない。

ではどうぞ！

※若干修正されているために、書き方が現段階の最新話仕様になっています。
次話からは書き方が旧式になっていますが、後に修正を加えるので、ご了承下さい。

第零撃『神様だってよくミスる。つまりはエピローグでプロローグだ』

ここはドコだろうか？
俺はそんなコトを思いながら周りを見渡す。
その空間は見渡す限り白で統一されており、本来であればあるはずの影すらも見当たらない。
さらには地平線の如く空間がドコまでも続き、行き止まりが見えない。
と言うよりも俺の肉体すらもこの場にあるかすらも分からない。
なんせあると思うだけで、何の感覚もないのだからな。
そんなコトを俺が思っていると、目の前に髭を蓄えた爺が現れた。
「君が黒神織（クロカミシキ）じゃな？」
「……そうだが、お前は誰だ」
「わしは神じゃ」
……テンプレみたいだな。
この展開で神を名乗るジジイが現れた時点でテンプレは決定だな。
確か俺は居眠り運転をしてる奴に引かれたんだったな。
「お主が思ってる通りじゃ。お詫びに転生させてやるのじゃ」
話によれば人の寿命が書いてある書類にコーヒーをこぼしてしまったらしい。
幸いにと言うべきかは分からないが、コレにより死んじまったのは俺だけだったらしい。
「お詫びとしてお主には好きな能力を三つほどやろう」

三つか……。多いといえばかなり多くなるが少ないと言えば少ない数だな。

まあ、俺としたら十分なくらいの数なんだが、能力を決めるとしたらドコの世界に行くかを教えてもらってからだな。

「俺はドコの世界に行く予定なんだ？」

「お主は……『魔法先生ネギま！』の世界になっておるの」

ネギま！か……。正義を掲げる魔法使い（バカ）共の集まりの世界か……。

この世界にはバケモノみたいな奴らがごまんとしてるからな。

自分の身を守れるくらいの強さが無ければダメだな。

「決めたぜ、じいさん」

俺がもらった能力は今から言う三つだ。

一つは『氣』をある程度制御でき、修行をしたらいくらでも力が上がり、上限が存在せずにさらには劣りもしない能力。

コレがあれば修行さえすれば、誰にも負けない力を手に入れることが出きるだろう。

二つ目は『竜族』の力だ。

『真祖の吸血鬼（ハイディライトウォーカー）』でも構わなかったのだが、さすがに不老不死は精神的にキツいため、ある程度は長命種である『竜族』にしたのだ。

そして最後に『直死の魔眼』の力を備えている『魔銃』だ。

別に自らにこの力を持っていなくとも、スコープを覗けば死の点が見える銃があれば戦うには十分だろうからな。

「うむむ……なかなか以外な力を望むのじゃな。しかも『直死の魔眼』を備えた銃か……」

「そんなに以外か？　別に俺は自分から戦おうなんては思わない。必要最低限には戦うがな」
「それじゃったら『ナギの百倍の魔力』やら、『王の財宝』やら『無限の剣製』でも良かったのではないのか？」
「要らねえよ、そんな能力」

だいたい貰ってる力だけでも十分に戦えるだろうが。
……と言うよりそこまでテンプレにしたら俺が詰まんねえだろうが。
それに『無限の剣製』を持つ錬鉄の英雄に失礼だ。
彼は文字通り血の滲むような思いをし、自分の信念を貫き、英雄となった。
俺みたいな奴がそんな力を使うなんて、おこがましいにも程がある。

「うむ、とりあえず準備は良いか？」
「あぁ、大丈夫だ」
「なら行くぞ！」

ジジイがそう言った瞬間に俺の足下に穴があいた。
まあ、テンプレ尽くしなんだからコレくらい普通だよな。
俺はそんなコトを思いながら意識を失った。

第零撃『神様だってよくミスる。つまりはエピローグでプロローグだ』（後書き）

次回は主人公設定を載せます！

感想待ってます！

主人公設定（2月20日）（前書き）

サブタイ通りです！

ではどうぞ！

主人公設定（２月２０日）

転生前→転生後

名前：黒神織（クロカミシキ）→黒神織（クロカミシキ）
イメージＣＶ：坂本真綾
身長：１６２ｃｍ→１６２ｃｍ
（変化なし）
体重：４６Ｋｇ→４８Ｋｇ　（後に説明）
一人称：俺→俺
容姿：黒髪黒眼→銀髪蒼眼。
銀髪の髪は腰あたりまであり、それを三つ編みにして纏めている。
顔は女の子が見れば美男に見え、男の子が見れば美女に見える中性的な顔立ち。
頭からテオドラと似ている角が生えた、さらに『竜族』の体になったために、わずかに体重が増えてしまっている。
性格：ドが付くほどのＳ。
基本的には馴れ合いを好まないが、人となりによりそれは変わる。
年齢：人間で言えば１６だが、竜族からすればまだ１０にも満たない。

『能力（スキル）』

・氣をある程度使える力。
現在は氣を使えるも、戦いには使用できるほどではない。
・鍛えればいくらでも強くなる力
その名の通り鍛えればいくらでも強くなる。
上限も存在しないし、さらには鍛えなくてもそれまで蓄積した力

は、一生衰えることはない。

・竜族

体が竜族であるため竜族の力が使えるが、長命の主人公はコトだけ考えてたためにすっかり忘れている。

『魔銃（仮）』

ライフルのような形をしており、スコープに『直死の魔眼』の力が備わっており、覗けば者（物）の死の点が見えるようになる。
さらにこの『直死の魔眼』はありとあらゆる者（物）の死の点が見える。
（見えないのは不老不死だけ）
ただ、その点に向かって弾丸をぶち込めるか否かは鍛錬次第である。
現在は十メートル離れていれば、１０発中良くて2発しか当たらない。
ちなみにこの魔銃の弾丸の媒体は魔力である。

『強さ』

筋力：C
耐久：D
俊敏：C
魔力：D＋
気　：B

気だけはある程度使える能力があるので、Bクラスである。

『備考』

神様に殺され転生した不幸な人物。
ただ神様が自分を殺したことに対しては何も思っておらず、一つ言えばなぜ転生先を『ネギま！』にしたんだと思っている。
転生前はオタク予備軍だった。
現在の強さは『闇の魔法』を会得する前のネギと同等かそれ以下の力。
主人公が飛ばされた時系列は大戦期が始まる二十年前で、修行して最終的には（多分）ナギすらも指一本で倒せるようになってもらいます。
修行方は後々考えます。
では感想待ってます！！

主人公設定（2月20日）（後書き）

大戦期が始まるまでオリキャラで進みますが、ご了承ください…。

感想待ってます！

第一撃『異世界に来ても普段とやることは大して変わらない……はず』（前書き）

最初は短めですが、徐々に長くしていきます！

ではどうぞ！

第一撃『異世界に来ても普段とやることは大して変わらない……はず』

ｓｉｄｅ　シキ

「……ドコだ、ここ」

俺が目を覚まして一番最初に俺の視界に入ってきたのは、雲なんかが全くない澄み切った青空だった。コレだったら別にさっきまでのやりとりが全部夢だった、で済ませることが出きる。

だがどうやら倒れていたようだったので、上半身だけ起こして周りを見てみればそこは荒野が広がっているばかりだった。見渡す限り荒野が続き、人っ子一人居る気配がない。

まあ、歩いてればいつか街にでも着くだろ。問題なのは俺が視線を下げたときに目に入った、なんか銀色でキラキラした長い何かだ。……紛れもなくコレって髪だよな？　それでこの場にいるのは俺だけだよな？　つまりはこの銀髪は俺の髪ってコトか……。

前は黒髪で肩ぐらいまでしか無かったのに、今は明らかに俺の身長ぐらいあるじゃねえか……。別に長くなることは構わないが、手入れをするのが面倒だな。そんなコトを思いながら、俺は頭を触る。

「っ……。なんだ、コレ」

頭を触ると何かに刺さった。なんだ、と思いながらずっと触ってたんだが、結構硬い。……なるほど、そう言えば俺の体は竜族になったから角が生えてても問題はないか。

とりあえず角が生えてようが、この場所が荒野だろうが俺には些細な問題でしかない。問題なのはどっちに行けば安全且つ、最短で人が居るところにたどり着けるかってコトだ。

いくら神から力をもらって転生したとは言え、俺は喧嘩程度しかしたことが無いわけで、実際に魔獣やら魔法使いと戦いになったら確実にお陀仏だ。『直死の魔眼』を備えた魔銃を持ってるからって、使い方はド素人。狙いなんかつけられねえからな。

「……やっぱり普通に転生させてもらった方が良かったか」

今更そんなコトを思っても仕方ないんだが、後先考えずに願いを叶えてもらうもんじゃねえな。せめて力は貰いつつ、一般家庭に転生させてもらった方が良かったな。

そんなコトを思いながら勘を頼りに、とりあえず俺が向いていた方向に歩くことにした。それで街に着ければ一番良いんだが、さすがにそれはねえか。せめて魔獣には会わないように祈るだけだな。

◆　◆　◆　◆　◆

そんなコトを思っていた時期もあったな。

「……デジャヴか？」

「グルルルル……」

あれからしばらく歩いていたんだが、最悪の事態に陥った。会わないようにしたいな、なんて思ってた魔獣に早速出会しちまった。

しかもなんだっけ……えっと、確か……鷹竜（グリフィン・ドラゴン）だったか？

とりあえずそんな感じの魔獣と出会した。翼を広げれば目算で全長五十メートルくらいはある、かなりのデカブツだった。しかもなんか腹が減ってるか何なのか知らねえが、嘴（？）から涎をダラダラ垂らしてやがる。汚ェったらありゃしねえ。

じゃなくて、戦闘経験０、さらに実力も一般の魔法使いに勝てるかも分かんねえ俺がどうやったらこいつから逃げられるかを考えねえとな。あ？　戦わねえのかって？　バカ言うな。熟練の魔法使いでも手こずりそうな魔獣に、俺みてえな雑魚が勝てるわけねえだろ。

遮蔽物を陰にして逃げようにもさっきも言ったようにここは何にもない荒野だ。遮蔽物なんかあるわけがない。ちっ、こいつは本格的に絶体絶命だな……。転生前は車に跳ねられて、転生後は鷹竜に食われて死ぬだと？

「……そんなんごめん被るぜ、クソッタレ」

「グガァァアアアアアアアッ！！」

俺がそう呟くと同時に鷹竜は俺に向かって突っ込んできた。速さに表すんだったらだいたい自動車くらいってところか。動きは直線的で、真横に避けりゃあかわせる。だがもしも翼に当たったりしたらお陀仏確定だ。

……仕方ねえ、どうせ逃げきれないんだったら、わずかでも生き残る可能性が残っている‘戦い’を選ぶしかねえじゃねえか。そう思った俺は恐怖で縮こまった身体に鞭を打ち、タイミングを合わせて後のことなんか何も考えずに、力一杯真横に飛ぶ。

その瞬間、俺の脇をまるで台風が過ぎ去ったような凄まじい衝撃が来る。頬にわずかにチクリ、としち痛みが駆け抜ける。触れてみれば濡れており、それが血だと言うことが分かる。だがそんな些細なコトを気にかけられるほど、今の俺には余裕はない。

俺は鷹竜がこちらに向き直る前に、即座に転んでいる状態から体勢を立て直す。ライフルを構え、スコープを覗き込む。するとスコープを通してみた世界は、様々な物体に『死の点』が刻まれていた。もちろん俺に背を向けている鷹竜も例外ではない。

銃口が震える。狙いが定まらない。冷や汗が背中を伝う冷たさを感じる。頬の血が垂れてきて、顎を伝い地面に落ちる。それと同時に俺はライフルの引き金を引いた。だがライフルから放たれた弾丸は鷹竜に当たらないどころか、掠りすらしない。

そして鷹竜が弾丸を放った俺の方にゆっくりとした動作だったが向き直る。スコープを通して鷹竜の縦割れの獣特有の瞳と目があってしまい、恐怖でさらに銃口が震えた。鷹竜はそれをあざ笑うかのように人鳴きすると、俺に向かって再び突っ込んできた。

「舐めんじゃねえぞ、トカゲが！！」

怖さを吹き飛ばすかのように、俺はわざと大声を出す。やらなければこちらがやられてしまう。そう思いながら俺は引き金に掛けている指に力を込める。そして一気に引き金を引いた。

――一発目、当たらない。
――二発目、当たらない。
――三発目、当たらない。

――四発目、当たった。

だが弾丸は文字通りただ当たっただけで、死の点をつくどころか鷹竜にダメージすらも与えることが出来ていない。鷹竜との距離はまだある。俺は再びスコープを覗き、引き金を引く。

――五発目、当たらない。

俺が無駄玉を撃っている間にも鷹竜は俺の目前まで迫ってきている。集中しろ、恐怖を捨てろ。やらなきゃ俺があいつのエサになるだけじゃねえか。

――六発目

俺が放った弾丸は鷹竜の死の点に吸い込まれるかのように、向かっていく。そして弾丸は鷹竜の硬い皮膚を貫通し、血が吹き出る。鷹竜はまるで糸が切れた人形のように地面に崩れ落ち、二度と起き上がり俺の前に立ちはだかることはなかった。

「生き残った……のか……？」

俺は誰に問いかけるわけでもなく、ただ無限に広がっているのではないかと錯覚させるほど広大な荒野にて一人呟く。‘勝った’ではなく‘生き残った’だ。すでに俺が居る世界は前にいた世界の喧嘩なんてレベルじゃない。これが今俺が居る世界なんだと改めて感じることが出来た。

「ありがとう……。さようなら……」

俺は息絶えて屍となった鷹竜を見ながら言う。たまたまだったと

は言え鷹竜（こいつ）には俺にそのことを教えてくれた。鷹竜（こいつ）はこの世界の厳しさを教えてくれたんだ。

殺しておいてなんだが俺は感謝している。そんなコトを思っていると、さっきまでの張り詰めた緊張が解けたせいか、体から力が抜けていくのが分かる。

さらには視界がだんだんと暗くなっていくのもわかる。そして意識がなくなる前、最後に俺の目が見たのは一人の男の姿だった……。

第一撃『異世界に来ても普段とやることは大して変わらない……はず』（後書き）

感想待ってます！

第二撃『お人好しとはすぐに人を信用するものである。俺なら考えられねぇけど』

side　シキ

俺が目を覚まして一番最初に視界に入ってきたのは見知らないドコかの家の天井だった。この場合だったら『知らない天井だ』とか言った方が良いのかもしれないが、生憎と俺はそんなギャグセンス（？）を持ち合わせてないから絶対に言わない。

それよりもいったいここはドコなんだ？　今の状況で視界なはいる限りの景色を見てみるだが、とても『人間』が住むような部屋の造りではなかった。洋風とも和風ともとれる造りで、必要最低限の暮らしをする上で、明らかに必要ないほどの広さだった。

周りを見渡しながら俺がそんなコトを考えていると、不意にこの部屋のドアが開いた。さっきの鷹竜（グリフィン・ドラゴン）とのコトもあるために、俺は近くに置いてあった銃を手に取り引き金に指を添える。

そして俺は引き金に指を添えたまま、入ってきた人物に向けて銃口を突きつける。さらにはいつでも撃てるようにスコープを覗き、『死の点』の場所もしっかりと押さえる。

「ひぅ！？　な、なに……っ！？」

「……は？」

銃口を向けた途端に聞こえてきた予想外な間抜けな声により、さっきまで張り詰めるように俺にまとわりついていた警戒心と毒気が

一気に抜かれてしまい、思わず俺も間抜けな声を出しちまった。

入ってきた奴を改めてみてみれば、褐色の肌にわずかに赤みの掛かった、肩で切りそろえられた髪。瞳の色は茶色で、頭から小さめの角が生えていた。なんか顔つきは妙にひ弱そうなんだが、どうやらこいつは俺と同じ『竜族』のようだった。

「……お前、誰だ」

俺は銃口を入ってきた奴に向けたまま、再び警戒心を高めながらそう訊ねる。見た目とさっきの言動は確かにひ弱そうなんだが、それは演技かもしれない。こんな世界にきたからには初見の奴なんざ信用できねえからな。

俺はこの世界にきたばかりで雑魚も良いところだ。もしこいつが敵だとするならば、こうでもしなきゃ確実にお陀仏だ。だから俺は奴がなにをしても即座に対応できるように銃口を向けたままにしたのだ。

「ぼ、僕は『ユーリ・アスタロト』、君が倒れてたからお父さんが君を連れてきたんだよ……？」

ユーリと名乗った竜族の女の子は俺に恐怖を抱いたような表情をしながら、そう言ってくる。普通の奴だったらこれで警戒心を少しは弱めるのかもしれないが、こいつはお父さんが連れてきたんだって言ったな。

つまりはこいつ以外にもう一人この家にいるってコトだ。余計に銃は下げられねえな。そんなコトを思いながら俺は質問を続ける。

「……ここはドコだ」

「こ、ここは『竜族』の村――――『アイギス』だよ……？」

ユーリと名乗った竜族の女の子は相変わらず俺にビビりながらここがどこだかを教えてくれた。それにしてもここが『竜族』の村だと？　都合が良すぎるような気もするが、こいつも『竜族』だとすれば嘘を言っているわけでは無さそうだな。

そう思った俺はとりあえず銃を下げる。するとユーリは安心したような表情になり、特に何かを仕掛けてくると言うことはなかった。するとユーリが俺に質問してきた。

「あ、あの……君の名前は……？」

「黒神織（クロカミシキ）だ」

「クロカミシキ？　珍しい名前だね？」

ユーリはそう言いながら何故か俺のことをまじまじと見つめてきた。理由は分からないが、まじまじと見られても気分は良くねえな。

「何まじまじ見てんだ、お前」

「えっ……？　あっ、ご、ごめんなさい！！」

別に謝らせたかったわけじゃねえんだが、ユーリは俺に土下座をせんばかりの勢いで俺に謝ってきた。会って数分しか経ってねえんだが、だいたいこいつの性格が分かったような気がするな。

気弱で腰が低い。典型的ないじめられっこタイプだな。俺がそんなコトを考えているとユーリの後ろからもう一人誰かが現れた。見た目はユーリと似ている部分が多かったのだが、体格が圧倒的に違っていた。

目測でしかないが俺とユーリの身長はだいたい同じくらいだ。それにも関わらずユーリの後ろに立っている男はユーリの身長より頭二つ分以上は大きい。

「おぉ!!　やっと起きたのか!!　あーんと……」

「……黒神、織だ」

「シキか!!　変な名前だな!!　がっはっはっは!!」

何なんだこいつの異常な暑苦しさは……。しかもさっきユーリは俺の名前を珍しいって言ったが、こいつはドストレートに変な名前だとか言いやがったし……。失礼にもほどがあるだろうが。

「そういうテメェは誰だ」

「俺か？　俺はそこの娘の父親のバルドだ!!」

「あっそ……」

この無駄に暑苦しい親父（ジジィ）の血を受け継いでるってのに、この娘はどうしてここまでひ弱なんだろうな。まあ、俺にとっちゃそんな些細なコトはどうでもいいし、こんな暑苦しい奴が二人も居なくて助かったがな。

「シキ！！　しばらくここに住みな！！　怪我もしてるみたいだしな！！」

「……は？」

確かに怪我してるみてえだな……。じゃなくてその誘いは住居を持ってない俺からしたらかなり良い申し出なんだが、今の会話のどこからそういう話しになるんだよ……。

「どうもユーリがお前さんのコトを気に入っちまったみたいでな！！」

なるほどね。要は娘のユーリが何故かは分からんが俺を気に入っちまったから、言えに住めってコトか。なんつームチャクチャな話だ……。

「ぼ、僕、お兄ちゃんが欲しかったんです！！」

そんなコトを考えているとユーリがわずかに頬を染め、目をキラキラと輝かせながら俺にそう言ってきた。

こいつ……。拾った奴に向かって兄貴になれとか唐突すぎるんじゃねえのか？　まあ、お兄ちゃんって呼ばれることには慣れてるし、何よりも拠点を確保できるという点では受け入れる手はないな。それに俺はあまり初見の奴は信用しない主義なんだが、この親子は大丈夫だな。

なんつーか目が真っ直ぐだ。こういう目をしてる奴にあまり悪い奴はいない、多分。だが完全には信用するにはまだまだ時間が掛かるかもしれないな。

「分かった。しばらく世話になる」

「がっはっはっは！！　じゃあシキは今日から家族だな！！　俺のことはお父様と呼んで良いぞ！！」

「……は？」

俺はバルドが発した言葉に本日二回目の間抜けな声を発してしまった。こいつは今なんて言いやがった？　俺がこいつらの家族になるだと？　話が全然違ェだろうが。しばらく居候するだけだったのが、いつの間にか家族になるにすり替わってんじゃねェか。

「よろしくね！！　お兄ちゃん！！」

「……仕方ねェか」

俺はユーリの満面の笑みを見ながら溜め息混じりで俯きがちになりながら呟く。今のこいつらに何を言っても無駄そうだし、こいつらの家族になっておくか。

だが家族になるからってぬくぬくその余韻に浸ってる場合じゃないな。ずっとアスタロト親子と一緒に居るわけじゃねェし、一人で戦えるくらいに強くならねェとな。

「ところでお前ら二人で勝手に決めて良いのか？　母親にも訊かねェとダメだろ」

俺が何気なく二人にそう言ったんだが、そういった瞬間にユーリの表情が暗くなり俯いてしまった。バルドの方を向いてみると、バ

ルドはやっちまったな、と言わんばかりの表情をしてやがった。

……まさかとは思うがもしかして俺、地雷踏んじまったか？　さすがに今のは俺にも悪い部分が……つーか全面的に俺が悪いな。父（バルド）親と一緒に母親が来なかった時点で気づけば良かったぜ……。さすがにこの空気には耐えられねェな。なんか話題を振らねェとな。

「そ、そうだ……。俺は強くなりたいんだが、ここらで強い奴は居ないか？　ユーリ」

「……強い人？　ならお父さんが強いよ！！」

俺がそう訊ねた途端にユーリはさっきとは打って変わり、自慢話をするかのような表情になってバルドのコトを話し始めた。

ユーリの話しによればバルドは拳闘士だったらしく現役時代はかなり名が売れていたらしい。現役時代は負け知らずで、拳闘大会の優勝を総なめにするほどの実力だったそうだ。今のこの姿を見たら全然想像がつかねェがな……。

今は最後の拳闘大会の決勝の怪我が元で現役は退いているものの、その実力は未だに衰えることを知らずに、拳闘士の取材などがたまに来るようだ。現役時代のバルドの攻撃の主体は、『竜族』が使える『竜化』と『氣』によるコンビネーションによる接近戦らしい。

俺は銃による遠距離が主体になってくるとは思うが『竜化』の使い方と『氣』のコンビネーションは知っておいて損はない、と言うより知らないとダメだな。となればバルドは俺の師として仰ぐには最適と呼べる相手だろう。それを踏まえた上で俺はバルドに向かって言う。

「バルド、俺を鍛えてくれないか？」

「お？　別に鍛えるのは構わねえが俺は厳しいぜ？」

「上等だ。それぐらいじゃなかったら意味がない」

「がっはっはっは！！　ますます気に入ったぜ、シキ！！」

バルドは愉快そうに豪快に笑いながら、俺の背中をバンバンと勢い良く叩いてきた。とりあえず俺とテメェとの体格差はメチャクチャあるんだから、力加減を考えてくれ……。すげー痛ェぞ……。

「とりあえず修行は明日からだ。今日は飯食って寝るぞ！！」

バルドがそう言ってから部屋にある窓から空を見上げてみると、辺りはすでに暗くなっていた。確か俺が戦ってたときはまだ結構明るかったはずだが、それを考えてみると俺は相当な時間を寝てたことになるみたいだな。

「飯の支度はシキも手伝えよ？」

とりあえず考えるのは後にして今は飯を作ることにするか……。

◆　◆　◆　◆　◆

「まさか風呂まであるなんてな……」

俺はもはや風呂場と呼ぶには余りにも巨大で、大浴場と呼んだ方が適切なんじゃないかと思うほどに、バカでかい風呂に浸かりなが

ら一人呟く。にしてもあの二人……今までどんな食生活を送って来やがったんだ……。

とりあえず俺は二人が料理を作っている様子を後ろから見てたんだがヤバかった。どのくらいヤバいかっつうと、マジヤバい。もはやアレを料理と呼ぶことすらおこがましいほどの悲惨な状況だった。

とにかくあのまま料理を続くさせていれば間違いなく、黒い何かしか出来上がらない。あれを二人で食うってなら何も手出しはしねェんだが、あれを俺も食うとなるとさすがに無理があるため、料理をしている二人を黙らせた後に俺が料理をした。

俺が作った料理を二人が食べた感想を述べるならば『お前ヤバすぎだぞ！？　どのくらいヤバいかっつうとマジヤバい！！』とか『お、お兄ちゃん……これ食べて良いの……？　なんか全然焦げてないよ！？　まともな色してるよ！？』と言った感じだった。

この二つの感想を聞いただけで、あの二人がどれだけヒドい食生活を送ってきたか手に取るように分かるな……。

「てーか俺ってマジで竜人だな……」

俺は風呂に入る前に鏡があったから、自分の姿を鏡で確かめてみたんだが、見事に竜人だった。俺の背丈ほどの長さもある艶のある凛とした銀髪に、わずかに褐色に染まった肌。さすがに瞳孔が縦に割れてる、なんてコトはなかったが頭に角があった。これはこっちに来てからすぐに分かったことなんだけどな。

まあ、角に関してはあんまり邪魔にはならない程度で助かったがな。あっ、そう言えば尾が生えてなかったが竜族で尾が生えてない

奴なんか居るのか？　俺的にはない方が好都合なんだけどな。そんなコトを考えいると、ユーリが話しかけてきた。

『お湯加減はいかがですかぁ？』

「ちょうど良い」

『なら良かったです！！』

すげー嬉しそうな声だな。なんかユーリのまるで太陽みたいに明るい満面の笑顔が容易に想像できるな……。そんなコトを思いながら俺は風呂を堪能した。

◆◆◆◆◆

結局、俺が風呂を上がったのはあれからだいたい一時間後だった。風呂を上がった後に俺は無駄に長い銀髪の手入れをしてたんだが、メチャクチャ面倒だった。前までは肩ぐらいまでの髪だったからそこまで時間は掛からなかったが、今は俺の背丈ほどもありやがる。

手入れをしないと変にパサパサしたり枝毛が出たりして色々とウザイから丁寧をやってたんだが、それだけで入浴時間を楽に超えてしまっていた。それで、現在は寝るときの竜族衣装とやらを着て、未だに髪の手入れをしている。ちなみにこの竜族衣装ってのは人間で言う温泉上がりの浴衣みたいな感じだが、動きやすさが重視されてるようだ。

ちなみになんの素材で作ってるかをバルドに訊いてみたんだが、何の素材かを言われたんだが何が何だかさっぱり分からなかった。にしてもめんどくせェ……。いつになったら終わるんだよ手入れ…

…。

俺がそんなコトを考えていると、貸してもらった部屋のドアが二回ノックされた。ちなみにこの部屋もさっきの風呂と同じで部屋と言うより……まあ、この辺りは察してくれ。

「お兄ちゃん、まだ起きてる……？」

「あぁ。どうしたんだ、ユーリ」

どうやら俺の部屋にきたのはユーリみたいだったんだが、こんな時間にわざわざ俺の部屋を訪ねてくるなんてどうしたんだ？

「あの……一緒に寝たいんだけど、ダメ……かな？」

いつもの俺だったんなら速攻でそんなん断ってるところなんだが、ユーリは俺の家族になって、何より信頼できるから無碍に断るわけにもいかないな。断ったらでめんどくさそうだしな……。

「別に構わねェよ」

俺がそう言うとユーリがドアを開いて俺の部屋に入ってきた。ユーリは俺が着ているのと同じ竜族衣装に身を包み、何故か両手で枕を抱えていた。そして嬉しさ満開の笑みを浮かべながら俺の隣に座ってきた。

「お兄ちゃん、髪の手入れしてるの？」

「あぁ。長いから時間がかかってな」

「うーん……なら僕がやってあげようか？」

「良いのか？」

確かに嬉しい申し出なんだがこんな長い銀髪を手入れさせんのは色々と大変そうなんだけどな……。

「うん！」

まあ、やってくれるってんならその善意に甘えさせてもらおうか。そんなコトを思ってるうちにユーリが俺の髪の手入れをし始めた。さすが長い髪を毎日手入れしてるだけあって手慣れてるみたいだな。

「お兄ちゃんの髪ってキレイだね」

「……まぁな」

これは転生させてもらう際にデフォルトでこんな風になっちまったんだが、転生のことなんか言えるはずもなくそう答えるしかなかった。そしてユーリはあっという間に俺の髪の手入れをやり終えると、俺の布団に潜り込んできた。しかも何故か俺の腕に抱きつきながら嬉しそうにしてる。

「えへへ。僕、お兄ちゃんと一緒に寝るの夢だったんだぁ」

「そうか」

俺はユーリの言葉に短く一言だけ答える。するとすぐに隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。ユーリの方を見てみればもう眠ってしまっているようだった。

さて、明日から修行もあるし俺も寝るか。俺はそんなコトを思いながら目を閉じた。

第二撃『お人好しとはすぐに人を信用するものである。俺なら考えられねェけど』

連合軍√か帝国√か……。

はたまたアリアドネー√か……。悩みます……。

感想待ってます！

第三撃『修業は業を修めると書く。俺はまだ修めれてねェけど……』（前書き）

何故かこっちの筆は進む……。

と言うことで第三撃、どうぞ！！

第三撃『修業は業を修めると書く。俺はまだ修めれてねェけど……』

ｓｉｄｅ　シキ

俺が『アスタロト』一家の一員になってから早くも二週間が経過した。今、俺は『シキ・Ｋ（クロカミ）・アスタロト』と名前を改名してすっかりアスタロト一家に馴染んでいた。まあ、アスタロト一家からすれば俺は料理担当なんだろうがな。

それにこの村の竜族達はよそ者（種族的には同じなんだが……）の俺を快く歓迎してくれた。正直もう少し警戒してくれても良いと思うが、俺もずっと警戒心を張り詰めてたらさすがに疲れる。そういう点からすれば、これはこれで良かったと言えるな。

そんなコトはさておき、俺がバルドに拾われて次の日から早速修業が始まったんだが、あれはさすがにねェだろ……。

体が竜族の体になったとはいえ、特に前世で鍛えてたとか言うことはなかった。それにもかかわらずバルドは俺の両手両足に合計四十キロの重りを付けさせられ、修業やれとか言われた。

もちろんさっき言ったとおり俺は鍛えたとか言うことはなかったから、動けるはずもなく修業にならなかった。バルド曰わく『竜族だったらこんなん普通だぞ！？』とのコトだった。

ちなみにユーリに訊いたから分かるんだが、竜族でも最初からアレをやるのはキツいらしい。もちろんユーリも出来ないそうだ。だがバルドは合計二百キロの重りを常時付けているにも関わらず日常

に支障なく生活してるのは驚かされた。

そんなコトはどうでも良いんだが、結局最初に修業する事になったのは『氣』の修業だった。神にもらった『ある程度氣を制御出来る力』のおかげで最初から『氣』を使うことが出来ていた。

そのおかげで『氣』の修業はハイペースに進んでいき、一週間を過ぎた辺りで瞬動も虚空瞬動も使えるようになった。その後も修業を繰り返し、日常においてはかなり使えるレベルにまでなってきたんだが、戦闘ではあんまり意味なかったりする。

で、現在は竜族の村のはずれの森でバルドと『氣』を使った修業をしている。『氣』を拳に乗せて岩を壊す修業なんだが……全然砕けねェ……。

「シキ！！　そうじゃない！！　こうだァ！！」

バルドはそう叫びながら俺が砕こうとしている岩の三倍以上はある岩を殴りつけた。すると岩は皹が入ったとかいうレベルではなく、木っ端微塵に砕け散った。……どうやりゃあそんなんになれんだよ……。

「コツとかねェのか？」

「コツ？　そんなんシュッ、ってやってドーンだ！！」

……やっぱりこいつ、見た目通り大雑把だ……。この『氣』の使い方を頭で理解してるとかじゃなくて、もはや本能でやってるんだな。うん。

「お兄ちゃん！！　頑張って～！！」

そんなコトを考えていると不意に後ろからそんな声が響いてきた。もちろん俺を兄と呼んで慕ってくれるのは俺の義妹であるユーリしかいない。……最近ひそかに妹属性に目覚めてしまった俺からしたらその声援はかなりのパワーになる。表には絶対ェ出さないがな。

とりあえずバルドが言ったのは『氣』の流れを感じ取り、それを拳に乗せろってコトなんだろうな。そう思った俺はバルドがとっている構えと同じ構えを取りながら、右腕に『氣』を集中させる。すると俺の中の『氣』が右腕に集まってくるのを感じ取ることが出来た。

「おっ、いい感じの『氣』の練りだな。……そこだッ！！　いけッ！！」

バルドがなんか叫んでるみてェだがこんなんじゃ全然足りねェよ……。体に流れる『氣』を右腕の拳にすべて集中させる。イメージするは最強の拳。そして『氣』の練りが最大限に達した瞬間に拳に溜めていた『氣』を爆発させながら岩を勢い良く殴りつける。

するとさっきまでいくらやろうと皹すら入らなかった岩が粉々に、と言うよりも塵となっていた。『ある程度氣を制御出来る力』があるからとはいえ、まさかここまで『氣』を使えるようになってるとはな……。自分でやってなんだが、正直驚き以外の何者でもないな。

「シキ、お前！！　スゴすぎんぞ！？」

「まあな」

俺は驚いた表情を浮かべながら、興奮気味に言ってくるバルドの言葉に短く一言だけ返した。すると不意に後ろからユーリに抱きつかれた。

「お兄ちゃんスゴいね！！」

「ありがとよ」

俺は抱きついてきたユーリの頭を撫でながらそういう。俺に撫でられたユーリは気持ちよさそうに目を細めながら、俺が動かしている手の動きに連動して、頭を動かしている。

「いよぉーっし！！　なら今日の最後の仕上げに俺と組み手をやるか！！」

「……いいぜ、やろうか」

まさかこんなにも早く組み手をやる段階にいけるとは思ってもみなかったな。こんなんでもバルドはかなり強いことで有名な拳闘士だ。そんなバルドと組み手を出きるとなればかなりの経験になる。

それに今の俺がどの程度の実力になったかも知っておきたいところだしな。そう思った俺は俺に抱きついているユーリを避難させる。さすがにバルドとの組み手にユーリを巻き込むわけにはいかないからな。

「そんじゃあ行くぜ！！　シキィィィィッ！！」

ユーリを避難させた途端に構えていたバルドが俺の懐に潜り込んできて、俺の鳩尾に向かって拳を突き出してきた。突き出された拳

はうねりをあげながら、全然手加減してないってぐらいの『氣』が練り込まれていた。

こんなんに当たったとしたら確実に骨の二、三本が折れるぞ……。だがそんなバルドの拳ではあるが、見切れないってほどではない。俺は体を半身にすることによりバルドの拳の軌道から、俺の身体をはずす。さらにより確実にバルドの一撃を避けるために、バルドの拳が向かっているベクトルに逆らわず、外側に受け流す。

そして拳を受け流されて無防備に腹を晒しているバルドの腹に向かって俺の『氣』を込めた一撃を突き出す。さっきのイメージのおかげで組み手程度には『氣』を使えるようになっていた。

そして今俺が拳に乗せている『氣』の練りはさっき岩を塵にしたのとほぼ同じくらいだ。だがあのくらいの『氣』の練りでもバルドクラスになれば、自分の『氣』をぶつけて、俺の『氣』を相殺するのなんかわけないだろう。

「おっと、危ねぇっ！！」

バルドはそう言いながら俺が先ほどやったように、身体を半身にすることにより俺の拳を避ける。さらに俺を中心にして俺の後ろに回り込むように回転する。またその回転した勢いを殺さないまま拳に乗せ、俺の頭に向かって裏拳を繰り出してくるのが見えた。

もちろん岩をも粉砕するバルドの拳を受けちまえば、一溜まりもない。下手すればそのまま死んじまうかもしれねェな……。だから俺はその場にしゃがみ込み、バルドの一撃を回避する。バルドの裏拳が頭の上を通過すると轟ッ！！　と言う音と共にものすごい衝撃が俺を襲ってくる。

しかしそんなコトにいちいち気に取られている場合ではない。俺は飛び跳ねるように膝を伸ばし、バルドの顎に向かって飛び膝蹴りを放つ。しかしバルドは瞬動を使うことにより俺の後ろに回り込む。だが俺はそんなバルドに向かって回し蹴りを放つが、あっさりと防がれてしまった。

それに俺は舌打ちをしながらその場から距離をとり、バルドから離れる。今の攻防を時間に換算してみるならばわずかに五秒。たったそれだけの動きだったにも関わらず俺は息が上がり、呼吸が乱れている。

だがそんな俺に対してバルドは全く疲れている様子はない。百戦錬磨のバルドとたかが二週間程度しか修業をしていない俺。やはりと言うべきか経験の差がありすぎてこの組み手の勝敗は火を見るよりも明らかだった。

「もうへばっちまったのか？　あぁん？」

そんなコトを考えて膝を地面についている俺を見下ろしながらバルドがそう言ってきた。バルドの言うとおりへばってないと言えば嘘になる。だがこいつの前でそんな弱みは見せたくねェ。

「誰がへばるって？　本番はコレからだろ」

俺は立ち上がりながらバルドの目をまっすぐに見据えながらそう言う。するとバルドも面白いと言わんばかりに口元を吊り上げながら俺に言ってくる。

「だよなァ。じゃあ、こっからは少しだけ本気で行くぜ？」

バルドがそういった瞬間にバルドの体からは先ほどまでとは比べものにならないくらいの凄まじい『氣』が放出された。さっきまでのが手加減ってのには驚かないが、俺相手にここまでの『氣』を放出したらとんでもねェことになるぞ。分かって……ねェよな、完全に。

「行くぜェエエエエエエッ！！」

「ちっ、言っても無駄そうだな」

俺はそう呟きながら近くに置いておいた銃を手に取り、スコープを覗く。それと同時に俺に向かって『氣』による光線を放ってきた。今の俺の実力じゃあれは防げない。

だから俺は光線の『死の点』に向かって魔力弾を放った。

◆◆◆◆◆

俺が咄嗟に『氣』の光線の『死の点』に魔力弾を撃って光線を『殺した』から良かったが、アレがそのまま放たれてたら確実に環境破壊もんだったな。そんなコトを思いながら俺は顔をわずかに右に向ける。

するとそこには娘のユーリから『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆』をされているバルドの姿があった。俺が来たときはあんなに気弱だったユーリは今はそんなコトもなくなってきたみてェだ。

にしてもさっきのバルドの『氣』の量……アレが少しだけ本気を出したバルドの実力か……。あそこまでスゲェのに少ししか本気を

出してねェってなら、どれだけスゲェことになるんだろうな……。
想像も出来ねェな……。

まあ、今すぐにでもバルドに勝ちてェってわけじゃねェし、たった二週間しか修業してないにも関わらずバルドに少しだけだが本気を出させるほどのレベルになったってことを、素直に喜んでおくか。
さて、体術および『氣』の修業が終わったことだし、次は銃の修業にだな。

「ユーリ、バルド。今日も手伝ってくれ」

そんなコトを思いながら未だに『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆』をしているユーリと、されているバルドに向かってそう言う。つーかバルド……格好悪ぃな……。

「うん！！　ちょっと待ってて！！　行くよ、お父さん！！」

「へいへい」

「はいは一回！！」

「へーい」

とアスタロト親子の漫才のようなやりとりを見てため息をつきながら、俺は右手に構えた銃の調子を確かめつつアスタロト親子が準備を整えるのを待つことにした。

この二週間、自主トレとして銃を使っていく上で分かったことがいくつかあった。まずこの銃の形状がライフルのような形状だったにも関わらず、引き金を引くだけで銃弾が出る辺り、本物のライフ

ルとは中の構造が大分違ってるんだろう。まあ、本物のライフルと魔法具としてのライフルが同じ構造の方が無理があるかもな。

二つ目に分かったことは、この銃の銃弾は普通のライフルのような銃弾ではなく、俺自身の魔力を媒体としている魔力弾になっていると言うことだ。神にもらった『修業をすればいくらでも力が上がる能力』のおかげで俺自身の魔力も上がっていくはずだが、現時点の俺の魔力じゃあせいぜい二十発が限界だ。

それに魔力弾を二十発撃てるとはいえ、その一発一発の威力は『サギタ・マキカ』三発分程度の威力しかねェはずだ。まあ、威力を上げようと思えば上げることは出来るが、その分撃てる数は少なくなるし、強くて『雷の暴風』と同等がそれ以下程度の威力しかねェ。

だが威力自体は俺の銃には関係がない。スコープを通して映し出される『死の点』に向かって正確に魔力弾をぶち込むことが出来さえすれば、神の奇跡だろうが異能の力だろうが、神様だって殺すことが出来る。そうは言っても魔力弾を多く撃てるようになるに越したコトはねェな。

「お兄ちゃ～ん！！　準備できたよ～！！」

そんなコトを考えているとユーリの可愛らしい声が俺の耳に聞こえてきた。その声に対して、俺は銃を持っていない左手を軽く挙げることにより答える。

すると俺の周りから縄に繋がれた人間よりも遥かに大きな丸太が四方八方から俺に向かってきた。数にしてみれば八つだ。もちろんこんなんが俺に当たれば、竜族の身体になったからとは言え、怪我程度じゃ済まねェだろうな。

だがそのくらいのハイリスクがねェんだったら、わざわざ修業なんかやる意味がねェ。この修業はどれだけ早く、尚且つ正確にスコープに映し出された『死の点』に魔力弾をぶち込めるかって言う修業だ。

丸太は俺に向かって動いてる、と言うことは『死の点』も絶えず動いてると言うことになる。コレは動いている敵に見立てた修業でもある。バルドはこういった分野には精通してなかったから、自分で考えた結果こんなんになっちまったんだがな。

そんなコトを思いながら俺はスコープを覗き、丸太に映し出されている『死の点』の位置を確認し、すぐさま引き金を引く。銃口から放たれた魔力弾は動いている丸太の『死の点』を正確に貫き、丸太を粉々に粉砕していく。

一つ、二つ、三つ……六つ、七つ――――ッ！？　ちっ、最後の一つは外しちまったか……。合計八つの丸太のうち七つまでは粉々に粉砕する事が出来た。だが最後の最後で外しちまった。このままじゃあ俺は丸太の餌食になっちまうので、わずかに体を反らしながら丸太を回避する。そして通り過ぎた丸太の『死の点』に向かって魔力弾を放ち、それを粉々にした。

「まだ今の俺程度じゃ、全部正確にぶち抜くのは無理みてェだな……」

どうやら二週間程度じゃこのくらいが関の山だったみてェだな……。俺は粉々になった丸太を見下ろしながらそんなコトを思う。この修業をやって二週間とはいえ、この程度じゃバケモノ揃いのこの世界で一人で生き残るなんてのは、無理を通り越して不可能だ。

「お兄ちゃん、惜しかったね」

「俺ァ、こう言うの分かんねえけど、スゴいんじゃねえの？」

そんなコトを考えていると手伝ってくれていたバルドとユーリが、俺に近寄りながらそんなコトを言ってきた。

「いや、まだ足りねェ……」

二人はそう言ってくれてるが所詮はド素人のユーリと百戦錬磨ではあるが、遠距離関係に関しては全くの無能のバルドの言葉じゃ意味がねェ……。まだだ、まだ力が足りねェ。もっと……もっと強くならねェと……。

「お前なぁ……別に、孤高、の強さを求めなくても良いんじゃねえの？」

俺の呟きにバルドが呆れた、と言わんばかりの表情を浮かべながら俺に向かってそんなコトを言ってきた。

「別にお前ぇ一人で戦ったりするんじゃねえんだからよぉ、そこまで強くなくて良いんだよ。ガキは親に頼れ」

「……」

バルドはそう言ってくれるが、一人で戦わないなんて言う保証はドコにもない。むしろそれを否定せずにはいられない。元より俺は誰かと一緒に何かをするなんてのは性に合ってねェんだ。だからこそバケモノ共を圧倒的に凌駕できる力を得る必要があるんだ。

「さぁーって！！　今日の修業はこれで終いにして、飯にしようぜ！！」

俺はバルドの言葉を受けて空を見上げた。そこには、もうじき夜を迎えると言わんばかりの夕日が浮かんでいた。

◆　◆　◆　◆　◆

すでにいつも通りの日課となった三人分の夕食作りをやり、それを食べたユーリとバルドが風呂に入った後に俺も風呂に入っていた。そして俺は風呂に浸かりながら先ほどのバルドの言葉を思い出す。

『別に‘孤高’の強さを求めなくても良いんじゃねえの？』と言うバルドの言葉だ。確かに今の俺が求めている力ってのは、バルドの言うとおりなのかもしれねェな。別に‘孤高’の強さだろうが何だろうが、俺は強くなれるんだったら何でも良い。もう二度と、俺は家族を失うようなことはしたくない。

……俺がこの世界に転生する前、つまり前世では俺が九歳の時に親を二人とも失った。なんでも信号無視をした車に突っ込まれて巻き込まれ、死んじまったらしい。聞かされた話では即死だったみてェだ。

そのときの俺には二つ年下の、今の生活で言えばユーリみたいな妹がいた。俺の妹は病弱でいて、さらに弱虫な性格だった。親が死んだと聞いたとき、妹はわんわん泣いた。

だが俺は泣かなかった。いや、正確に言うならば泣けなかった。だって俺は妹の兄貴分だったから。それから俺たちは親戚の家に引

き取られたんだが、その親戚のコトを俺は信用できなかった。俺たちを引き取った親戚は親の遺産目当てに目が眩んでやがったからだ。

だから俺は強くなると誓った。このままじゃあいつか俺や妹にまで親戚（クズ）の魔の手が伸びるかもしれなかったからだ。だから俺は妹を親戚（クズ）から守り抜くと誓った。例えそれが間違った選択だったとしてもだ……。

「ちっ、イヤなこと思い出しちまったぜ……」

俺は吐き捨てるようにそう呟きながら風呂をあがり、竜族衣装に身を包む。髪をタオルで拭きながらリビングに向かうと、そこには酒を飲んでいるバルドの姿があった。

「バルド、飲み過ぎんなよ。明日も俺の修業を手伝ってもらうんだからな」

「がっはっは！！　大丈夫だ、竜族は人間とは違ってちょっとやそっとじゃ酔わねえよ！！」

バルドが言っていることはどうやら本当のようだ。テーブルに視線を向けるとそこにはすでにもう飲み干したと思われる酒瓶が何本も置かれていた。そしてテーブルに視線を向けたときに、テーブルに一枚の紙が置かれていることに気づいた。

「バルド、なんだそれ」

「これか？　これは『拳闘大会』の申込書だ」

「バルドが出るのか？」

確かユーリからはバルドは拳闘士をすでに引退したって聞いたんだが、聞き間違えでもしたか？

「俺じゃねえよ。俺は引退したって言ったろ？　これはお前のだ」

バルドはそう言いながら俺に拳闘大会の申込書を俺に渡してきた。拳闘大会って……バルドに一分もまともに戦り合うコトも出来ねェってのに拳闘大会なんか出たって一回戦で負けるのなんか目に見えてるだろ。

「安心しろ。今のシキでもそう簡単には負けやしねえよ。それにその拳闘大会は半年後のだ。そろまでみっちりしごいてやるから、覚悟しろよ？」

半年後か……。確かにそれぐらいの時間が合れば、拳闘大会に出ても良いところまでいけるだろうな。だが出るんだったら俺は負ける気なんかさらさらねェ。狙うのは優勝、それだけだ。

「なら頼むぜ、バルド。俺を強くしてくれ」

「あったりめえだ！！　テメェには才能がある！！　いつか世界に名を轟かせる英雄になるくらいにな！！」

英雄って……別に英雄なんぞになりてェとは全然思わねェが、バルドの期待に添えるように頑張るか。とりあえず今からの目標は半年後の拳闘大会の優勝に決まりだな。

第三撃『修業は業を修めると書く。俺はまだ修めれてねェけど……』（後書き）

次回は拳闘大会に出します！

感想待ってます！

第四撃『ドコの世界にもナンパをする輩はいる。妹に手ェ出すなら俺がぶち抜くぞ』

side　シキ

あれから早いもので半年が経過した。その間に俺はバルドより本格的な修業を受けていた。たまにバルドが家を空けるときがあったのだが、どうやらそのときは村で依頼を受けて魔獣の討伐等に向かっていたらしい。

最近ではその討伐依頼に俺も連れて行ってくれるようになった。もちろん最初に行ったときは、全然……と言うほどでもなかったが、かなり手こずってしまった。それでも銃を使わないで『氣』だけで討伐する事も出来るようになった。

まあ、銃なんか使ったりしたら瞬殺出来ちまうから修業にならねェんだけどな。で、銃の方は『氣』の修業をやるよりもかなり捗り、今では村一番の狙撃手と呼ばれるくらいになった。村一番って言っても竜族でわざわざ狙撃手なんかになる奴は居ないため、あんま意味ねェんだがな。

竜族で狙撃手になる奴っつったら怪我をして前線での戦闘が出来ないが、それでも戦いたいって奴がなる場合と、元々後衛型の奴がなる場合だけだ。ちなみにバルドは怪我したにも関わらず何故前線で戦えるかと訊いたら『気合いだ』と返された。バルドらしいと言えばバルドらしい。

「おーい!!　シキ!!　エントリーしてきてやったぞ!!」

そんなコトを考えているとバルドが俺にそう叫びながら歩み寄ってきた。そう、現在俺たちアスタロト一家はオス……何ちゃらに来ている。もちろん目的は俺の拳闘大会の参加だ。

拳闘大会に出るには拳闘士になるための試験を受けて、合格する必要があった。それをバルドはすっかり忘れてたらしく急遽試験を受けに行ったんだが、俺が試験官を瞬殺したら他の試験官にかなり驚かれた。

瞬殺って言ってもさすがに試験官をぶち抜くわけにもいかなかったから、『氣』を拳に集め瞬動で一気に近づいて、鳩尾に拳を叩き込んだらあっさりと終わった。

正直試験官ってのはバルドクラスには　及ばないものの、俺よりは上の実力だと思って本気でやったんだが、雑魚過ぎて拍子抜けしたな。

「サンキュー、バルド。にしても何でこんなに集まってんだ？」

オス……何ちゃらは俺が周りを見渡す限りの人、獣人などといった奴らがたくさん居て、店などもかなり繁盛している様子だった。竜族の村では見たことがないような装飾品や、武器などが売られていた。

「そりゃあ、拳闘大会が開かれるからだな。まあ、そうじゃなくてもここらはいっつも盛り上がってるけどな！」

「そういやバルドは何回もここに来たことがあるんだったな」

バルドは昔、拳闘大会が開かれるところには行ける限り回ってい

たらしい。もちろん拳闘大会が多く開催されたこのオス……何ちゃらにもよく顔を出していたらしい。言うなれば第二の故郷って言っても過言じゃ無いらしい……バルド談。

「そうだな。昔っから賑わってたっけな。シキ、はぐれると悪いからユーリと手ぇでも繋いどけ」

「あぁ。ユーリ、ほら」

ユーリもオス……何ちゃらには初めて来たらしく、物珍しそうに周りを見渡している。もちろんそんなコトをやってれば田舎から来たってのは丸出しだが、んなことはどうでも良い。そんなユーリに俺は左手を差し出す。

「手、繋ぐの？　やったぁーっ！！」

何が嬉しいのかは分からないが、ユーリは俺が手を繋ぐと言ったとたんまるで飛びつくように俺の手を握ってきた。いや、まるでじゃなくてマジで飛びついてきたんだがな。

「お父さんも！」

ユーリは俺の手を握ったあとに、空いている左手をバルドに向かって差し出した。それにバルドは最初に驚いた顔をしていたんだが、すぐにいつもの自信満々な表情に戻ると、ユーリの手を握った。

「いよぉーっし！！　じゃあとりあえずシキの拳闘服を買いに行くか！！」

「拳闘服？　このままじゃダメなのか？」

現在俺が着ている服は竜族衣装の戦闘服バージョンだ。動きやすい素材で作られているだけでなく、耐久性にも優れている一品だ。ただ、竜族衣装はかなり目立つ格好である。

「別に構わねえけど、拳闘服の方がカッケーだろ？」

「……そういう問題か？」

「そういう問題だ。強ぇ奴ってのはカッケー拳闘服を着てるもんだ」

別に拳闘服がカッコいいとかどうでもいいと思うんだがな。拳闘服がカッコいいからってそいつが強いってわけじゃねェし、逆に服装だけにこだわって弱かったら意味がねェってもんだ。ただ、カッコいい拳闘服が着たくないのか、と訊かれたら着たいとしか答えられない。

「お兄ちゃんのカッコいい服見てみたいな♪」

「行くぞバルド。案内しろ」

「お前ぇ……性格変わったか？」

「別に」

バルドはそう言ってくるがそんなコトはねェ。ただ妹主義（ユーリ）になった、とだけ言っておこう。それ以外は何も変わってねェ。そんなコトを思いながら、バルドの案内に従って衣装屋に向かって歩き始めた。

「そう言えばお兄ちゃん、それ使うの？」

ユーリが手を楽しげに振りながら俺の腰に携えている銃を見ながらそんなコトを言ってきた。ただ、その表情は使えるかどうかの不安ではなく、使ったら危ないって言う不安だったんだが何故なんだ？

「相手による。『氣』だけで勝てるんだったら使う意味が無いからな」

「そんなんいったら使うときなんかねえだろ？」

「そうか？」

バルドがなんか呆れた視線を俺に向けながらそんなコトを言ってきた。バルドはそう言ってくれるが、正直銃を使わないで勝てる自信なんかほとんどねェ。今回の大会はバルドが言うにはかなりの猛者共が集まるらしい。

もちろんそれはこの大会に参加したバルドだから言えることだ。今でこそここまで強いバルドだが、それでも優勝するにはかなり時間が掛かったらしい。結局優勝しちまったみてェだがな。

「前にも言った気もしねえでもないが、お前は才能の塊だ。俺からみっちり半年間も修業を受けたんだから負けねえよ」

「言われてねェけどな。まあ、バルドがそう言うんなら……と言いてェが、俺は慢心なんかしねェ」

「がっはっはっは！！　良い心がけだシキ！！　それでこそ我が

弟子だ！！」

そう言いながら俺の背中をバルドが叩こうとしてくるので、それを俺は身をよじることによりそれを回避する。あんなんいくら強くなっても叩かれたら痛ェんだよ。

「でも――――ひゃあっ！？」

「ど、どうした、ユーリ」

そんなたわいもない話をしているとユーリが何故かそんな声をあげていた。そのあとに何故か後ろを押さえながら周りをキョロキョロしてるんだが、何があったんだ……？

「うぅ……お尻触られた……」

――――ブチン！！

「「ぶち抜く（ぶん殴る）！！」」

それを聞いた俺は腰に携えている銃を構えて、バルドは尋常でないほどの『氣』を放出している。街中だって言いてェのは分かるが、ユーリの尻を触った奴を許すわけにはいかねェ……。見つけ出してぶち抜いてやらァ……。

そしてちょうどよく街のみんなが俺たちにドン引きして周りを空けてくれた。普通ならドン引きしたとこに反応するんだろうが、今はそんなコトはどうでも良い……。そして周りを探していると、俺の視界にこっちを見て顔を真っ青にして逃げる奴を見つけた。

「バァルドォォォッ！！　あそこだァァァッ！！」

「いよっしゃあァァァッ！！　人の娘に痴漢しやがってエェェッ！！　ぶん殴ってやるゥゥゥッ！！」

俺は銃のスコープでユーリに痴漢したクソヤロォの死の点を完全に捉え、バルドは腕に『氣』を集中させて光線を放出しようとしている。バルドめ……俺より先にはやらせねェぞ……。そして俺が魔力弾を、バルドが『氣』の光線を放とうとした瞬間、後ろから誰かに掴まれた。

「お兄ちゃん、お父さん！！　僕は大丈夫だから恥ずかしいからやめてよ！！／／／／／」

「「分かった」」

ユーリがそう言うんじゃ仕方ねェな。そんなコトを思いながら俺は銃を引いたんだが、何故か俺たちのところに何か武装した変な奴らが向かってきてるのが見えた。

「ヤベッ、はっちゃけすぎた。逃げるぞ！！　シキ、ユーリ！！」

「待てや、バルド。ちっ、ユーリ、少し恥ずかしいかもしれないが我慢しろ」

「えっ？　ひゃっ！？」

俺はユーリのコトをお姫様抱っこで抱き抱えると、バルドのあとを急いで追いかけた。あれって明らかにアリアドネーの奴らだよな……。目ェ付けられてねェと良いが……。

◆◆◆◆◆

「最近は顔を見せないと思いましたが、見せたと思ったらまたですか、バルド」

「うっせーな。てめぇは相変わらず堅物だな、シェリル」

只今、現在進行形で俺たちはバルドがシェリルと呼んだ女性に絶賛『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆』中である。いや、正確に言えばバルドだけなんだがな……。まあ、俺たちが衣装屋に向かってたのはバレバレだったみてェで、店に入った途端にさっきの女性に捕まえられた。

バルドがシェリルと呼んだ女性はアリアドネーの警備服に身を包み、まるで日本人のような黒髪を腰ほどまでに伸ばし、それをポニーテールにしている。その顔つきは凛と引き締まっており、歴戦の剣士と思わせる。

そして腰には、二メートルは越えてるのではないかと思うほどに長い刀が携えられている。ちなみにスタイルはボン、キュッ、ボンとだけ言っておくとする。

「あいやー、久しぶりに見たねぇ、あの組み合わせは」

「ん？　店主、あの二人を知ってるのか？」

俺がそんなコトを考えていると衣装屋の店主がバルドとシェリルが話し合っているのを懐かしそうに、それで居て微笑ましそうに眺めていた。

「まあね。昔もああやってよく喧嘩してたもんさ」

店主の話によればバルドがまだ拳闘士として現役、そしてまだ結婚してないからユーリが居なかったときからあの二人は知り合いらしい。なんでもバルドが拳闘大会に出るためにここに来る度に問題を起こし、それをとっちめてたのがシェリルって言う女性のようだ。

にしてもバルドが現役ってコトだから何年も前の話だよな？　つーことはそのときからバルドと同じ歳だと仮定しても、若すぎやしねェか？　あの美人過ぎる外見でババァ――――。

「何か、変なことを考えませんでしたか？」

「イ、イエ……ナニモ」

ヤ、ヤバい……あのシェリルとかいう女……ハンパなくヤバい。なんかいつ抜刀したかは分からんが、腰に携えてた刀を俺の首に突きつけてきてるよ……。つーかちょっと切れてる……。

だが、よくよく考えてみれば昔のバルド、つまり全盛期のバルドと何回も戦いとまではいかないものの、やり合ってきたってことは相当の実力なんじゃねェのか……。

「全く……。あなたは引退したと聞きましたが、子供を連れて参加ですか？」

「違ぇーよ。参加するのは俺じゃねえ、あいつだ」

バルドはそう言いながら俺を指さし、シェリルに説明する。する

とシェリルが俺の顔をジッと見つめたあとに、俺にこう言ってきた。

「あなたにも、彼女にも似てませんが、本当にあなたの子供ですか？」

「あぁ、正真正銘俺の義理の子供さ」

「義理？　彼は本当の子供ではないと？　ならばあなたの本当の子供はドコにいるのですか？」

シェリルに言われて俺はユーリが隣にいるだろ、と言おうとしたのだがそこで俺は絶句した。さっきまで隣にいたはずのユーリがドコにも居なかったのだ。おかしい……ここに来たときは確かに居たはずだが……。

「さっきの嬢ちゃんだったら、向かいの装飾品の店に行ったはずだよ？　あんたらが話に夢中で気づかなかったんだろうね」

店主にそう言われた俺は衣装屋を飛び出して、向かいの装飾品店に向かったのだがユーリの姿はドコにもなかった。そして後ろからやってきたバルドとシェリルに言う。

「ユーリがいねェ……」

「面倒なコトになったな、おい」

「そうですね。最近ではここもかなり入り組んできています。さらには女子（おなご）に良からぬコトをする輩も最近は増えましたからね……」

くそっ、ユーリが勝手に居なくなるわけねェし十中八九そいつら

に連れ去られって考えた方がいいな……。

「バルド、シェリル。探すの手伝ってくれ」

「あったりめえだ。娘を探さねえ親がドコにいる。あとシェリルのコトはさん付けでな？　斬られるぞ？」

「そんな野蛮な真似はしません。それに好きに呼んでくれて構いません。そんなコトより早くバルドの娘さんを探しましょう」

「だな。じゃあ三手に分かれて探すぞ。一時間探して見つかんなかったらまたここに集合だ」

珍しく真面目になったバルドに少々驚きながら話を聞いてたんだが、話をやり終わったあとにバルドとシェリルはまさに神速の如く動き出していた。あんなバケモノみてェな二人が居るんなら心強いな……。そんなコトを思いながら俺もユーリを探し始めた。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ユーリ

僕はお父さんのお友達が来てて、お兄ちゃんも店の人と話してたから向かいのアクセサリー店に来てました。最初はすぐに戻ろうと思ってたのに、後ろから知らない人に捕まえられて暗い場所に連れてこられました。

僕を無理やり連れてきた人は三人でした。一人はお父さんと同じくらい大きな人、一人は小柄な人、最後は金髪を無造作に切りそろえた魔法使いの人でした。多分、後ろ二人も魔法使いです。

「へへっ、兄貴、今日はかなりの上玉ですぜ」

「そうだな。この俺様に釣り合う良い女だ。まあ、まだ子供（ガキ）みたいだが、なかなか良い体つきをしている」

兄貴と呼ばれた人はそう言って汚い笑みを浮かべながら、僕の身体をジロジロと見つめてきます。そんな不快な視線を防ぐために僕は両手で身体を隠す。

「ぼ、僕をどうする気、ですか……」

「どうする気だぁ？　決まってんだろ。良いことだよ、良いこと。最初は嫌かもしれねえがすぐになれるさ。おい、誰かが来ないように見張ってろ」

金髪の人は後ろにいた二人にそう言うと、その二人はその場から去っていきました。そして取り残されたのは僕と金髪の人だけ……。

「さて、じゃあ拝ませてもらおうか」

「い、いや……」

「貴様に拒否権などは、ない！！」

そう言って金髪の人は僕の服を無理やり脱がせてこようとします。

「助けて……助けて、お兄ちゃん！！」

「バカめ！！　誰も来るはず――――」

金髪の人がそこまで言うとその金髪の人がいきなり吹っ飛んでいた。そして僕と金髪の人の間に銀髪をなびかせて、銃を構えて怒りを露わにしているお兄ちゃんが居た……。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

ユーリの声が聞こえたと思って来てみれば……まさかこんなクソッタレに変なことをされそうになっているとはな。俺はユーリに何かしようとしていた金髪のクソッタレを見据えながらそんなコトを思う。

あのクソッタレもそうだが、ユーリにこんな怖い思いをさせちまった自分に怒りがこみ上げるな……。そしてクソッタレを見据えながらユーリに言う。

「ユーリ、何かあいつにされたか」

「う、ううん……お兄ちゃんが助けてくれたから何も……」

「そうか」

それだけを聞ければ十分だ。ユーリに何かしたってんなら許すわけにはいかなかったが、何もしてないなら少しマシだ。だからって許すわけにはいかねェがな。

「くっ、この俺様の顔を……。貴様、何者だ！！」

「テメェみてェなクソッタレに名乗る名前なんか生憎持ち合わせてねェんでな。とりあえず、死ね」

俺はそう言いながら全くの躊躇いもなく、銃口をクソッタレの心臓に向けて引き金を引く。銃口から魔力弾が放たれたのだが、奴は魔法障壁を展開しそれを防ぎやがった。

「ふん、不意打ちとは言えこの拳闘大会優勝候補の俺様に一撃を入れられたことが嬉しかったのか？　残念だったな、下郎。貴様程度では俺に二回も触れることは出来ん」

今、あいつはなんて言った？　拳闘大会優勝候補だと？　あんなクソッタレがこの拳闘大会の優勝候補だって言うのか……。ハッ、そうなるとこの大会のレベルもたかがしれるな。

「テメェが優勝候補？　だから何だ？　テメェは所詮候補止まりだ」

「何だと？」

「聞こえなかったか？　ならもう一回言ってやるよ。テメェは優勝なんか出来ねェ。俺に倒されて終いだ」

俺がクソッタレにそう言うとクソッタレはいきなり狂ったかのように笑い始めた。

「貴様程度がこの俺様を倒すだと？　クハハハハハ！！　冗談にもほどがあるぞ？　まあ、よい。ならば拳闘大会で決勝まで上がって来るがよい。公衆の面前で貴様を恥曝しにしてやろう」

「悪いが、逃がす気はさらさらねェ」

俺はそう言いながら引き金を引き、連続で魔力弾を放つのだが奴は、それをすべて悉くかわしていく。そして奴は壁を蹴り建物の上に上がったあとに俺に言ってきた。

「首を洗って待ってるがいい、下郎！！」

それをクソッタレは言うと逃げていったのか、気配が遠ざかっていった。

◆　◆　◆　◆

あのあとバルドとシェリルが駆けつけてくれた。もちろんその間はユーリはずっと恐怖により泣いていた。そしてバルドとシェリルに今まであったことを全て説明したあとに、拳闘大会が始まる時間だったので拳闘場に向かった。

「シキ。ユーリを泣かした野郎を決勝まで上がってぶん殴ってこい」

そして第一回戦が始まるので、選手入場入り口に立っていると、明らかに怒りを露わにしているバルドが俺にそんなコトを言ってきた。おそらくは俺と同じで、ユーリに怖い思いをさせちまった自分への怒りなんだろうよ。

「あぁ、当たり前だ。ところでユーリは……」

「今はシェリルが見てるよ。女同士の方がユーリも良いだろうからな」

「そっか……。じゃあ行ってくる」

「おう」

俺はバルドにそう言うと右手の拳をバルドに突き出す。それをみたバルドもニヤリとしながら拳を突き出してきて、俺たちはそれを一回だけぶつけた。

そして俺は一回戦の相手が待つ拳闘場に向かった。こんなとこで躓いてる暇はねェ。あのクソッタレだけは、俺が直接ぶん殴る。

第五撃『万物には全て綻びがある。人間にも……めんどいから以下省略』

side　シェリル

『勝者！！　シキ選手！！　初参加ながらの決勝進出！！　このまま圧倒的な強さで優勝をしてしまうのか！？』

バルド達がこちらに来てから早くも数日が経過しました。来て早々にあのような事件があったからかは分かりませんが、シキ君からは思い威圧感を感じる……。バルドとも私とも違う、言うなれば禍々しい威圧感……。

並大抵の者であればあの威圧感に当てられただけで戦意を喪失してしまうほどのものです。あんな威圧感を出せるのは百戦錬磨のバルドや私でも不可能。それにもかかわらずシキ君はそれを出している。

バルドの話によればシキ君は本格的な鍛錬を始めてからまだ半年ほどしか経ってないと聞きましたが、あの実力で半年ほどしか鍛錬をしてないというのなら、恐ろしいほどの才能としか言えませんね……。

だからといって今のシキ君程度ではバルドは愚か、私にも届きはしないでしょう。バルドのような者を師として仰いでるからか、まだまだ動きは荒削り。肝心なとこでの攻めが甘いなどがある。ただ、あと数年もしたら越されるでしょうね。全く、近頃の子供は恐ろしいですね……。

「ああいうのを才能の塊って言うんだろうよ。ったく、その才能を俺にも少し分けてほしいってもんだ」

「何をいっているのですか。そういうあなたにも才能はあるでしょう」

私はおかしなコトをいっているバルドに呆れながらそう言う。私とバルドが初めてあったときは私が圧倒的に強かったのに、あっという間に越されてしまいましたからね。……言っておきますが私とバルドは同年代です。

「いんや。あいつに比べたらかわいいもんさ」

「そうはいってもすでにあなたは引退してるのですから、もう強さを求める必要はないでしょう」

「まあな。さあて、次はようやく娘を浚ってくれやがったクソヤロォとだな」

そう言ったバルドからは全盛期を凌駕するのではないかと思われるほどの氣が放出されていた。昔の自己中心的な性格からよくここまで変わったものですね。

そしてバルドがそう言ったとき私の隣に座っているユーリさんの体がビクッと震えるのが伝わってきた。やはり初めて大規模な都市に来て、あのようなコトに巻き込まれてしまったために心が深く傷ついてしまってるようですね。

「大丈夫です、ユーリさん。あんなコトは二回も起きませんよ」

「本当に……？」

ユーリさんは怯えるように体をビクビクと震わせてきながら私にそう訊ねてくる。……バルドやシキ君が守りたくなってあげるのも何だか分かった気がします……。

「えぇ。もし起こったとしてもあなたのお兄さんが必ず助けてくれますよ」

「うん……そうだよね……。お兄ちゃんは強いもん」

ユーリさんは自分を元気づけるように闘技場で異様な威圧感を発しているシキ君を見る。そしてシキ君がユーリさんの方を見ると、ユーリさんはシキ君に向かって手を振っていた。

シキ君もそれに気づいたようでユーリさんに小さく手を振っていました。そのときにはすでにあの異様な威圧感は消えていた。……もしかしてあの威圧感って言うのは金髪の魔法使いに対する怒りだけだとでも言うのでしょうか……。

それにあの金髪の魔法使い――ゲイル・ラインハルトの家系では良い噂を聞きませんからね……。決勝で何を引き起こすか分かりませんし、一応警戒はしておきましょう。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

今日の相手も本当に対したことが無かったな……。コレで中規模

な大会だっていうなら、大規模な大会もあまり期待できそうにも無いな。俺がこんなコトわ思っているが、仕方がないだろ。

今までの全八試合で俺が銃を抜くときは一回もなく、すべてが氣だけで勝利している。しかも相手の実力は俺の氣の籠めた拳を防げないほどにレベルが低い。これじゃああの金髪クソヤロォの実力もたかがしれてくるな。

そんなコトを思いながら闘技場から出ると、不意に誰かが俺に抱きついてきた。抱きついてきたのが誰かを確認するまでもない。

「ユーリ、危ないから勢いよく抱きついてくるな。支えきれなかったら危ないだろ」

「大丈夫だよ！　お兄ちゃんならちゃんと受け止めてくれるでしょ？」

この半年で俺はいくらか身長が伸びたようで、今のユーリの動きを表すならば俺を上目遣いで見上げながら小首を傾げての問いかけ。はぁ……俺もずいぶんと丸くなっちまったみたいだな。義理とはいえ妹を可愛いと思っちまうなんてな。

「まあな。可愛い妹を傷物に出来ないからな」

「か、可愛い……／／／／／／ふみゅう……／／／／／／／／」

「ユーリ？　ユーリ！？」

俺がそう言うとなぜかユーリが顔を赤くしながら、糸の切れた人形のように脱力してしまっていた。いったいどうしたって言うんだ、

まさかあの金髪クソヤロォが何かしてきたのか！？

「全く……。ここまで初なのも珍しいですが、ここまで鈍感なのも珍しいですね」

「ど、どういう意味だ？」

「はぁ……。今はユーリさんを宿に連れて行ってあげてください。それが今のあなたの義務ですから」

何故かシェリルに溜め息混じりでそんなコトを言われてしまった。しかも何で俺がそこまで呆れられたような目で見られないといけねェんだよ……。わけ分かんねェ……。それに宿に連れてってやるのなんか当たり前ェだろ。

「あっ、そうだ」

俺たちが宿に向かって歩いてる（ユーリは俺が背負っている。背中に当たってる柔らかいものを気にしたら俺の負けだ）と俺はシェリルに訊きたかったことを思い出した。

「シェリルってさ」

「はい、何でしょう」

「結婚してないのか？」

俺がそう訊ねるとその場の空気が急に冷たくなった。まさに絶対零度の如く、体感でも寒いと感じるほどに寒かった。バルドを見てみればやっちまったな、と言わんばかりの表情をしている。そして

シェリルは何故か震えていた。

「シキ。ユーリは俺が連れてくから、お前は逃げる準備した方が良いぞ」

「お、おう？」

バルドはそんなコトを言いながら俺が背負っていたユーリを変わりに背負ってくれると良い、ユーリを俺の背中から離した。するとユーリが離れた瞬間に俺の眼前を何かが通り過ぎた。

そう感じた時には俺の視界に銀髪の何かがはらりと落ちるのが目に入った。コレってもしかしなくても俺の前髪だよな……？　それが落ちたってコトはまさか……。

「フフ、フフフフ……。死ぬ覚悟はよろしいですか？　無くても斬ります」

「ま、待ってくれシェリル……俺が何を――」

「問答無用だ、ド素人がァ！！　私にそれを訊いたことを後悔して……三回死ねぇぇぇえええええッ！！」

こ、怖ェ……なんで怒ったかは分からないが、本気（マジ）で怒ったシェリルは死ぬほど怖ェ……。やばいぞ、本格的に命の危機を感じる……。そう思った俺は本気の逃走を開始した。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シェリル

全く……近頃の子供は訊いて良いことと悪いことの区別もつかないと言うのですか。私が一番気にしているコトを、まさかピンポイントで訊いてくるとは思いもしませんでしたが、声に出すなんて失礼すぎます。

義理とはいえさすがバルドの息子ですね。いつか私が直接礼儀をたたき込んでやります。それは私だって〈放送できません〉歳なんですから結婚の一つも憧れます。ですが仕事があるために出会いが無くてですね……って私は誰に言い訳をしてるのでしょうか……。

結局あのあとは試合が終わってから夜までずっとシキ君を追いかけていました。本気ではないとは言え私の剣戟を受け流す辺りさすがでしたね。この大会もシキ君が戦うと弱者の集まりにしか見えませんが、実際はかなり高位の実力者が集まる大会ですから。

その実力者を簡単に圧倒してるのですから納得も出来ますね。今更ですが現在は次の日になり、私たちはすでに決勝の舞台に来ています。あとはシキ君とゲイル・ラインハルトが出てくるのを待つだけですね。

そういえばシキ君が『美人なんですから言い寄る男も居るんじゃないッスか!?』と言ってましたが、私は本当に美人なのでしょうか？

「ユーリさん。その訊きづらいのですが、その……私は美人なのでしょうか……？」

「……」

「ユーリさん？」

私が訊ねたのに返答が帰ってこなかったためにユーリさんが座っているはずの隣を見たのですが、そこにはユーリさんの姿はありませんでした。どこに行ったのでしょうか？

「バルド、ユーリさんがどこに行ったか知りませんか？」

「お？　ユーリなら確か便所に行ったはずだぜ？　おーい、姉ちゃん！！　こっちにも頼むぜ！！」

べ、便所って……私も女なのですからもう少しそこの辺りを考慮してほしいものです……。

『さあさあ、やってきました決勝戦！！』

そんなコトを考えているとようやく決勝戦が始まるアナウンスがなった。シキ君……相手は今までとは違い一筋縄ではいきませんよ？　一手目が重要になってきます。気を付けて……。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

ったく、あのクソババァめ……決勝前日だってのに夜中まで思いっきり追いかけて来やがって……。しかも何だよあの剣戟は。ギャグ的な感じでやるだけかと思ったら本気だったじゃねェか……。いや、ありゃ本気じゃねェな。

あのクソババァが本気だったら今頃俺は五体満足じゃいられねェ

だろうからな。こっちは本気の逃げに対してあっちは手加減の追いかけ。はぁ……力の差がここまであると正直凹むな……。

だが今は俺とシェリルの実力に差があることを嘆いてる場合じゃねェな。今日、俺はようやくあのクソッタレをぶん殴ることが出来るんだ……。ユーリに怖い思いをさせやがったあのクソッタレを許すわけにはいかねェんだ……。最低でも半殺し、もしくは四肢の一部を貰っていく。

油断も慢心もいらねェ……敵は俺よりもかなり格上だと想定して最初から全力全開で弾丸をぶち込む。今日は手加減なんざ必要ねェからな。俺がそんなコトを思っているとアナウンスが鳴った。それを聞いた俺は闘技場に向かって歩き出した。

闘技場に到着するとそこには今までの観客とは比べものにならない数の観客が会場を埋め尽くしていた。そして俺の目線の先にはあの金髪クソヤロォが居た。

「ふん、まさか本当に貴様のような下郎が決勝まで来るとはな」

「テメェこそ、雑魚のくせによくここまで来れたな。八百長でもしたか？　あァ？」

腕組みをして偉そうに話しかけてくる金髪クソヤロォを真っ直ぐに見据えながら、挑発するように俺はそう言う。

「はっ、こんな低レベルの拳闘大会にそんなコトをする必要がどこにある！？　それにこの俺様に勝てる奴など、そうそうに居ないのが分からぬか！？」

「はぁ……御託は済んだか？　旧世界の言葉でこういうのがある。今のテメェにぴったりの言葉がな」

俺はそう言いながら戦闘を始めるための準備を整える。そして準備を整えたあとに俺にしては珍しく歪んだ笑みを浮かべながらいう。

「弱い犬ほどよく吠える……ってな」

「き、貴様……。良いだろう、気が変わった。いたぶる程度で済ませてやろうと思ったが……死んでも後悔するなよ？　下郎」

金髪クソヤロォがそう良い放ったと同時に俺の体に金髪クソヤロォの殺気がビリビリと伝わってきた。伊達に決勝まで来てねェってコトか……。良かった、最初に……奴をぶち殺す気で来といてなァ……。

『決勝戦！！　シキ・K（クロカミ）・アスタロトVSゲイル・ラインハルト！！　開始（インキピア）！！』

司会者の人がそうアナウンスした瞬間に俺は一瞬だけ銃を抜いて、奴の三カ所の『死の点』に向かって魔力弾を放った。そのあとに俺は自らも瞬動を使い金髪クソヤロォ――ゲイルに瞬動を使い一気に接近する。

奴が俺に対処するために動いてしまえば、事前に奴に向かって放った魔力弾は無意味になってしまうが、それでも奴は同時に二つの動きを対処せねばならなくなり、かなりの隙が出来るはずだ。その隙をついて一瞬で終わらせてやる。

俺はそんなコトを思いながら懐に潜り込み、奴の鳩尾に向かって

拳を叩き込もうとする。しかし奴は後ろに向かって瞬動する事により俺の攻撃を回避する。もちろん奴がそんな動きをするパターンはいくつも想定している。

「ガルド・ザ・ボルト・ヴァイツ――――」

だから俺はさらに瞬動を使って奴に向かって接近する。すでに俺が事前に放っておいた魔力弾を追い越してしまってはいるが、遅れての攻撃に対処するのは難しいはずだ。そんなコトを考えていると奴がニヤリとしたのが見えた。

「来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐!!　『雷の暴風』!!」

「ちっ……」

俺が奴に接近したときに奴は俺に右手を突き出してきた。それと同時に奴が『雷の暴風』の詠唱を完了させたらしく、俺に向かって雷が竜巻状になった暴風が襲いかかってきた。くっ、さすがにこっちからもあっちからも近づいてる状況で『死の点』をぶち抜くのは不可能か……。

そう咄嗟に判断した俺は突っ込むのを中断して真横に向かって瞬動で移動した。それとほぼ同時に俺が居た場所を『雷の暴風』が通過した。まさかこんな序盤に中級呪文を使ってくるとはな……。しかも今までの奴らとは桁違いの威力だ。

「考え事か？　ずいぶん余裕だなァ!!　三下がァ!!」

「あぁ、余裕だな。準備運動にもならねェよ」

俺が『雷の暴風』に気を取られているうちに奴が接近してきていたのだが、俺はそれに焦らずに対処する。奴が放ってきた魔力を込めた拳の一撃を俺は外側に弾く。

そして奴の顔面に向かって氣を込めた蹴りを放つのだが、ゲイルはバック点の要領で後ろに回避する。すると俺に右手を突き出してきた。

「『白き雷』」

「ぐっ……」

奴が『白き雷』の詠唱をしたときには俺はすでに一歩出遅れてしまっていた。そのために俺は完全には『白き雷』を避けきることが出来ずに、左手にかなりのダメージを負ってしまった。

だがそれでも動かせないってほどではない。竜族の体に感謝しねェとな。人間のままだったら確実に焼けて溶けるか、完全に無くなってるところだったな。まとめると死ぬほど痛ェ……。

「ふん、これで死なないとは……。決勝に来ただけはあると言うことか。だがこの程度で手こずってると言うならば、俺様には勝てない！！」

奴はそう叫んだかと思ったら俺に向かって突っ込んで来やがった。やれやれ、もう少し高位の魔法使いの動きに対して‘修業’をしていたかったところだが、コレ以上やったらもう少し痛い目にあっちまいそうだな。

仕方ねェな……。気はあんまり進まねェが、ちょいと本気を出させてもらうとするかね。そう思った俺は腕と足に付けている‘枷’を外す。

「今さら何をやっても無――――がはあっ！？」

俺は奴が何かを言っていたようだが一瞬で奴に接近して奴の顔面を思いっきりぶん殴る。すると奴の体はまるで砲弾のようにぶっ飛んでいき、闘技場の壁にぶつかってようやく勢いが止まる。

だが俺はそんなゲイルに再び接近してゲイルが体勢を整える前に鳩尾にさらに拳を叩き込む。ゴキゴキッ！！　と鈍い音がしたことから骨の二、三本はいったんじゃねェか？

「き、貴様……何をした……」

「分からねェのか？　ただぶん殴っただけだ」

たださっきの‘枷’を外したことにより速度（スピード）と火力（パワー）は桁違いになってるがな。最近ようやく最初にバルドから言われた両手両足に合計四十キロの重りを付けて鍛錬出来るようになった。

つまりはこの拳闘大会中はずっとこの四十キロの負荷を背負って戦ってたことになる。ただシェリルから逃げるときは外したけど……。とにかく枷を外したんだったらバルドやシェリルならともかくこんなクソヤロォには負けねェよ。

「俺様をバカにしてるのか貴様ァァァアアアアアア！！」

「動きが単調なんだよ。クソッタレが！！」

ゲイルは俺の隙をついたと思ったろうが、この隙は俺があくまでも自らが作ってたに過ぎない。そこにみすみす掛かってくれたんならカウンターの餌食だ。

だから俺の拳がゲイルの顔面に突き刺さって、拳闘場のさらに反対側にまでぶっ飛ばされてるんだよ。そのことにまだゲイルは気づいてねェだろうがな。そんなコトを思いながら俺は瞬動でゲイルに接近して、銃口をゲイルの『死の点』に突きつける。

「この大会で死んでも恨むんじゃねェぞ。じゃあな、死んでも地獄にしか行けねェと思うが、地獄で妹に手ェ出したことを後悔しやがれ」

俺が銃の引き金を引こうとした瞬間に、ゲイルが俺の目の前に何かを出してきた。そしてそこに映し出されていたのは……刃を突きつけられて今にも殺されそうになっているユーリの姿だった。

「……ただじゃあ死なねえ……。俺様が死ねば、貴様の大事な妹も道連れだ。さあ、遠慮なく殺すが良い。貴様の妹と共に逝こう」

「テ、テメェ……」

この期に及んで人質を取りやがっただと……。この腐れ外道が……ユーリが人質にされてなかったら塵も残さずにぶち殺してやるところだってのによォ……。

「やらないのか？　ならば、貴様が死ぬが良い！！」

ゲイルがそう言ったとき俺の体を五本の『魔法の射手』が貫いて

いた。

◆◆◆◆◆

side　シェリル

「何やってんだよシキィッ！！　なんでそこまで行って逆転されてんだ！？」

枷を外したあとのシキ君とゲイルの実力の差はまさに圧倒的。ライオンと兎が正面から殺し合っているのと同じくらいに圧倒的な力の差があったというのに、あそこで逆転された？　バルドはそれを見ておかしいとは思わないのですか……？

シキ君はゲイルのコトを心の底より恨んでいる。殺しはしないまでもあそこで銃の引き金を引けば彼の復讐は確実に遂げられていたと言うのに、なぜあなたは躊躇ったのです。

シキ君に動揺が走ったのはゲイルがシキ君に何かを見せたときから……。あの激しい攻防の中で持ち物が破損されてないと言うことを考えなかったとしても、あの状況でシキ君が誰でも分かるほどの同様を見せた代物……。

「バルド。ユーリさんは本当にお手洗いに行ったのですか？」

「そうだよ。うおぉーいシキ！？　何してんだ反撃しろよ！？テメェなら一発で仕留めれんだろうがぁぁあああああ！！」

バルドがあのようにイライラしてるのも無理はありません。今のシキ君は防戦一方、いいえ、防御すらままならずにゲイルの攻撃を

一方的に喰らっているだけの状態になっている……。

シキ君があそこまで攻撃することを躊躇うことなど、考えてみれば一つしかありません。ゲイルはユーリさんを人質に取っているか何かをしている、としか考えられませんね。このままですと、シキ君は確実に良くて敗北。最悪殺されてしまいますね……。

「バルド。シキ君が殺されそうになった場合は無理矢理にでも介入してください」

「あぁ？　どういう意味だ？　つーかシキは負けねえし」

「良いから。私は別の用件がありますので」

私はバルドにそう言うと闘技場から出て街全体を見渡せるほどに高い場所に上がる。そして目を閉じて全神経を研ぎ澄ませる。ふぅ……コレを使うのはバルドを探したとき以来ですね。

私が今からやろうとしていることは、ユーリさんの魔力もしくは氣を感じ取り今ユーリさんが居る場所を特定すること。コレはバルド相手にしかやったことはありませんでしたから、完璧に上手くいくかは分かりませんが、ユーリさんがバルドの娘なら魔力の質量も氣の流れも似ているはず……。

……見つけた！！　くっ、ここからかなら離れた位置に居ますね。コレでは第三者が居なければ確実にシキ君が死んでいましたね。私はそんなコトを思いながらユーリさんが居るはずの場所に向かう。

ここからの距離は数値に換算するならば約八キロ程度ですか。全

力で私が移動するならば五分とかかりませんが、シキ君のためにはもっと早く動かないとなりませんね。

そんなコトを思いながら限界を感じながらも移動しましたが、結局は五分ほど掛かってしまいましたね。私が到着した場所はどこかの倉庫のような場所。この中にいる気配の数は約二十。この数ならユーリさんに怪我させる前に助け出すことは可能。

そう思った私は腰に携えている刀――『夜刀』の柄を握りしめ、倉庫の中に一気に飛び込む。

「――ッ!?　何者ぐわっ!?」

「すみません。今は名乗っている暇はありません」

私は私が入ってきたことに気づいた一人を切り裂いたあとに、静かに残っている十九人に言い放つ。そしてその十九人も全員切り裂いた。もちろんこんなコトをする外道であっても私は街を守るために派遣された者。無碍に殺すわけにはいきません。

ただ‘助けるために多少の怪我’は致し方ないでしょう。私はそんないいわけじみたコトを自分に言い聞かせながら縄で縛られているユーリさんに駆け寄り、縄を切ったあとにユーリさんに呼びかける。

「ユーリさん、ユーリさん!!　大丈夫ですか!?」

「うみゅう……あれ……?　シェリルさん……?」

良かった……。手遅れと言うことは無かったようですね。そんな

コトを思いながら不思議そうに周りを見渡しているユーリさんを見る。

「あのシェリルさん……ここは……？」

「ここはただの倉庫ですよ。それより早く会場に向かわないとシキ君が危険です。早く向かいましょう」

「えっ？　わわっ！？」

私は未だに状況を把握できていないユーリさんを抱き抱えると、急いで会場に向かって動き始めた。その間に私はユーリさんに今がどんな状況かを簡単に説明したのですが……まさか泣き出されるとは思いませんでした……。

「僕のせいで……お兄ちゃんが……」

「大丈夫ですよ。彼は負けませんし、あなたを恨んだりはしません」

「……本当ですか……？」

「えぇ、もちろんです」

私は未だに泣きながら聞いてくるユーリさんに短くそう答える。会場が見えてきましたが、一般入り口から入るよりも、少し派手ですが上から入った方が近道ですね。そう思った私は多少痛い目で見られるのを我慢しながら、会場に入る。

「ユーリさん、シキ君に声を掛けてあげてくださいッ！！」

「は、はい。お兄ちゃーん！！　頑張ってーッ！！」

ユーリさんがそう声をかけた瞬間、シキ君の目つきがガラッと変わった。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

「ほらほらァ！！　さっきまでの威勢はどうした！！　三下ァ！！」

「ぐ……っ」

畜生……ユーリが人質に取られてなかったら、こんな奴一瞬でぶち殺せるって言うのになんでこんな奴の攻撃を受けてねェといけねェんだ……。ヤベェ……大分意識が削られてきやがった……。

こんなコトになるんだったらユーリを連れてくるんじゃなかった。強引にでもユーリを置いてくるべきだった……。今さらそんなコトを思ったって仕方ねェ……。俺が死のうと構わねェ……。だから誰かユーリを助けてくれ……。

俺がそんなコトを思っているうちにゲイルの拳が俺に迫ってくる。しかもあれは魔力を込めた拳だ……。今の俺にあれを受け止めるほどの力は残ってねェ……。だがそんな俺の耳に聞こえてきた。

『お兄ちゃーん！！　頑張ってーッ！！』

――ユーリの声が。

それを聞いた俺はゲイルが突き出してきた拳を右手で受け止める。左手は『白き雷』と追加ダメージで使い物にならなくなってるからな……。そんなコトより今はこいつを……ブチコロス。そう思った俺はゲイルの顔面に蹴りをぶち込む。

「よぉ、ずいぶんいたぶってくれたじゃねェか……。ユーリが戻ってきたんだ。もう手加減する必要ねェよな」

「ぐっ、黙れ黙れ！！　死に損ないの貴様に何が出来ると言うのだ！！　『雷の暴風』！！」

クソヤロォはそう叫びながら俺に『雷の暴風』を放ってくる。だが俺は『雷の暴風』の『死の点』に向かって魔力弾をぶち込む。

「なっ！？　クソォ！！　『雷の暴風』！！　『白き雷』！！　『雷の投郷』！！」

クソヤロォは俺がたかが魔力弾で『雷の暴風』を消し去ったことに驚いてたみたいだが、すぐに追加で魔法を放ってくる。だが俺にそんなんは通用しねェんだよ。俺は各魔法の『死の点』に向かって魔力弾をぶち込んでいく。

『死の点』を貫かれた魔法は魔力を維持できずにまるで空気に溶けるように消滅していく。一回ならまだしも何回もただの魔力弾で魔法を消し去ったことにクソヤロォが疑問を持ったのか、焦ったような表情を浮かべながら俺に叫んできた。

「き、貴様……いったい何をした！！　何故俺様の魔法をただの

魔力弾で打ち消せるんだ！？」

「――――万物には全て綻びがある」

俺は奴の問にただ静かに一言だけ発する。すると会場がだんだんと静まりかえっていくのが分かる。そして完全な会場が静まりかえったところで、俺は再び口を開く。

「――――人間には言うにおよばず、大気にも意志にも、時間だってだ。

――――始まりがあるのなら終わりがあるのも当然。

――――俺の銃はね、物の死をぶち抜けるんだ。

――――だから……」

俺はゆっくりとクソヤロォに向かって銃を向ける。

「――――生きてるのなら……」

引き金に指をかけ、いつでもぶち抜けるために準備をする。

「――――神さまだって殺してみせる」

俺がそういい終えると、再び会場が盛り上がる。もちろんそんなふざけたことを言ったから盛り上がったのかもしれねェが、これは事実だ。

「物の死をぶち抜ける？　神さまだって殺してみせる？　三下が……自惚れるのもほどほどにしろォォォオオオオオオオッ！！

――――契約に従い、我に従え、高殿の王！！　来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷雲！！　百重千重となりて、走れよ稲妻！！　『千の

雷』！！」

クソヤロォはそう叫ぶと全ての魔力を『千の雷』に込めて俺にぶっ放してきた。こいつは分かってねェみてェだな……。『千の雷』だろうが、何だろうが俺には『魔法』が効かねェってことがな。

俺は『千の雷』の『死の点』に向かって魔力弾を一発だけ放つ。もちろんどんだけ魔力を込めようが、『死の点』をぶち抜いた以上『殺せない物』はない。案の定『千の雷』は消滅する。

そして『千の雷』を『殺した』あとにクソヤロォの目の前にまで迫り、銃口を突きつけながら言う。

「選ばせてやる。俺に殺されて卑怯者の汚名を被るか。卑怯者の汚名を被りながら、惨めに生きるか。選べよ、クソヤロォ」

「ぐっ……俺様は……」

「答えは訊いてねェよ、三下」

俺はクソヤロォに向かってそういい放つと、クソヤロォの体を魔力弾が貫いた。だが『死の点』はぶち抜いてねェ。これからこいつには卑怯者の汚名を被って、惨めに生き地獄を味わってもらうためにな。

『大逆転勝利！！　勝者！！　シキ・K（クロカミ）・アスタロト！！』

それを聞いた俺はまるで糸が切れた人形のように倒れ込み意識を失った。ヤベェ……超キツい……。

◆　◆　◆　◆　◆

あれからどのくらい眠ったのだろうか？　それはよく分からなかったが、俺は顔に当たる何かで目を覚ました。目を開けてみればそこには泣き顔のユーリの顔があった。

ったく……起きて早々にお前はなんて顔してんだよ……。俺はそんなコトを思いながら体を動かそうとするのだが、体に全く力が入らない。と言うか力を入れるとマジ激痛なんだけど……。

「ごめんね……お兄ちゃん……」

「何がだ？　別にユーリは謝るようなコトはしてねェだろ？」

「だって……僕のせいでお兄ちゃんが……」

はぁ……ユーリは自分のせいで俺がこんなにボコボコにされたと思ってんのか……。悪いのは俺だってのによ……。俺がユーリの安全を考えて動いてればこんなコトにはならなかったんだからな。

「ユーリのせいじゃねェよ。俺の修業不足だ。むしろユーリが言わないといけないのは、‘おめでとう’だろ？」

「ぐすっ……うん、優勝おめでとう！！　お兄ちゃん！！」

「あぁ。ありがとよ、ユーリ」

俺が珍しく笑みを見せながらそう言うと、ユーリに驚いた顔をされたと同時に何故か顔を真っ赤にされた。しかもなんかブツブツ言ってるんだけどどうしたんだ……？

「あの……お兄ちゃん、兄妹でこんなコトしちゃダメだと思うんだけどね……」

「思うんだけど……？」

「うぅ～……ちゅっ」

「……へ？」

なんだかんだ考えてる間に俺の頬に何か柔らかいものが当たった。起きたばっかりだからなんだかは分からないが、それが何かを理解するのに数秒を要した。そしてそれを理解した俺はと言うと……ヤバかった。どのくらいヤバいかって言うとマジヤバイ。

「ラブコメイベント発生中のところ悪いのですが、少し話があります」

「「シェリル（さん）！？」」

俺は珍しく驚いてしまったが、今のこの状況からのシェリル発生はかなり心臓に悪い。つーか絶対ェ今のシェリルに見られたよな……。しかもユーリも同じコト思ってるのか顔が真っ赤だし。俺の視界に入るのはユーリの顔だけだから丸わかりだし。

「えっと、話ってのはなんだ？」

とりあえずこの重い空気を破壊（ブレイク）するためにシェリルに何用かを訊ねてみる。

「明後日に私は故郷に帰るのですが、私の故郷でも二週間後に拳闘大会があります。しかもかなりの猛者が集まります。優勝したばかりでこの話と言うのは野暮だとは思いますが……」

「……出るよ。その拳闘大会」

「そうするならばしばらくは家族と会えなくなりますが、どうしますか？」

シェリルの話によればシェリルの故郷はこっからかなり離れてるらしく、バルドの竜族の村の反対側に属してるらしい。しかもこっからシェリルの故郷までに通ってる新幹線（？）みたいのが数ヶ月に一回だけみたいで、それを使わないで行くとなるとかなり時間が掛かるらしい。

つーかそれじゃあどうやって移動すんだって聞いたところ、シェリルの故郷の住民はこっちに来ることが無いから、どうでも良いらしい。

「バルドとユーリさんにはあなたがユーリさんの膝の上でぐーすか寝てる間に話しておきました」

「……まだ昨日の根に持ってんの？」

「私はそこまでしつこくありません。ただあなたが妹に情けない姿を晒していたと報告してるだけです」

……この人メチャクチャ根に持ってやがるよ……しつこすぎるよマジで。さすがにアレは俺が悪かったけどさ、気になったんだから仕方ねェだろ……。

「はぁ……。俺はユーリを――」

「お兄ちゃん、行ってきても良いよ？」

「ユーリ……」

「出たいんでしょ？　拳闘大会。大丈夫。僕にはお父さんも居る。お兄ちゃんが居なくてもへっちゃらだよ」

それはそれで悲しいような気もするんだが、ユーリがそう言ってくれるんだったら安心してシェリルの故郷についていけるな。

「じゃあ俺はシェリルの故郷に行くよ。明後日までは一緒に居れるがな」

「うん！！」

俺はユーリの笑顔を見て再び微笑んでしまった。

そして二日後、ようやく動けるようになったので俺はシェリルと共にシェリルの故郷に向かった。ユーリのキスをもらってからな……。

第六撃『悪魔襲来。何回も言うが妹に手ェ出したらぶち抜く』（前書き）

第一章も大分大詰めになってきました！！

だからどうと言うわけではないのですがね……。

ではどうぞ！！

第六撃『悪魔襲来。何回も言うが妹に手ェ出したらぶち抜く』

ｓｉｄｅ　シキ

俺がシェリルの故郷に来てから既に数ヶ月の歳月が経過していた。この数ヶ月間で俺は拳闘大会が開かれると聞けば、西へ東と翻弄し、もはや『拳闘大会に狙撃手あり』と言われるほどに参加し尽くした。

シェリルが言っていたとおりこっちで開かれている拳闘大会は、俺が初めて参加したオス……何ちゃらでの拳闘大会よりもレベルが非常に高く、最初にこっちで拳闘大会に参加したときにはコテンパンにやられて一回戦で敗退した。

優勝したことからの慢心も確かにあったが、こっちの大会のレベルは明らかに一ランク上だった。どうやらシェリルが強いのは周りに強い奴らが一杯居て、それにもまれてるうちに強くなったんだろうな。

……ちなみに『もむ』という表現を使ったが、シェリルについてる男を惑わすけしからんものではないことを理解してもらいたい。そっちを揉んでしまった日には上半身と下半身がスパッとスライスされるとかいうレベルじゃなくて、塵も残らないと思う。

――――ヒュッ！！

「ぐ……っ」

「余計なことを考えている暇があるのならば、私に一撃でも決め

てみなさい」

そんなコトを考えていると、いつの間にか俺の懐に潜り込んできていたシェリルが、俺の首目掛けて刀を躊躇なく振るっていた。その一太刀を俺は銃を盾代わりにすることにより防ぐ。さっきまであんなコトを考えてはいたんだが、実はシェリルと模擬戦をしている真っ最中だったりする。

とりあえず刀の直接的な斬撃を防いだは良いのだが、現在シェリルと空中戦にもつれ込んでいたために、氣によって強化された一太刀の威力を殺しきれずに、宙から地面に向かってたたき落とされる。

そんな俺に向かってシェリルは虚空瞬動を使って一刀両断せんとばかりに急接近してくる。この体勢を崩されたままの状態だったらシェリルの一太刀を防げるはずもなく、喰らってしまうと咄嗟に判断した俺は、シェリルの急所に銃口を向けて引き金を連続で三回引く。

音もなく銃口から放たれた三つの魔力弾がシェリルの首、肩、膝の三カ所に真っ直ぐに向かっていく。この状況で常識が通用する相手だったならば、回避の行動に出るだろう。そうすれば俺は避けた直後に『死の点』に向かって魔力弾をぶち込んでそれで終いだ。

だがこの言い回しから分かるようにシェリルには常識などという枠に収めきれない存在だ。シェリルは魔力弾に背を向け、刀の刀身を横にするように刀を構える。

「秘剣――」

シェリルがそう呟くと同時に俺はシェリルという大まかな的に銃

を向けるだけで、『死の点』などといった細かい的になどに目もくれずに魔力弾を連射する。だがあの技を発動しているシェリルに対して大量の魔力弾などは無意味に等しい。否、無意味であると断言できる。

「――――燕返しッ！！」

一瞬のうちに振るわれた三太刀が俺の放った大量の魔力弾を全て切り裂き、消滅させる。切り残しなどなく、全て切り裂いている。正確に表現するならば一の太刀で魔力弾を全て切り裂き、二の太刀で俺が氣により構築した物理障壁を破壊する。そして三の太刀で俺の肩を切り裂いた。

だが実際に目で追うことが出来ていたのは二の太刀までだ。三の太刀は俺の肩に刀が当たっているのが見えたときにようやく気づくことが出来た。しかもご丁寧に刃がついてない方でやってやがる……。

はぁ……この数ヶ月で俺もだいぶ強くなってきたと思ってたんだが、どうやらシェリルから見たら俺はまだまだ半人前の位置付けにされてるみてェだな。その証拠に俺は額から汗が滲み息が上がってるのに対し、シェリルはどこぞの吹く風だとばかりに涼しい表情を浮かべ、相も変わらず凛とした表情を俺に向けている。

言うまでもないが息の乱れなんか全くしてない。かれこれ既に一時間以上も戦りあってるってのに、こっちばっかり体力が持ってかれてるな。少しは疲れろよ。まあ、さすがは『騎士団長（ナイトリーダー）』と称されるだけの実力者ってところか。だが、男が女に負けっぱなしってのはやりきれねェよな。

「――――ッ！？」

そう思った俺は肩に当てられていた刀を弾き返して、シェリルの腹に銃口を突きつけ０距離で引き金を引き、魔力弾をぶっ放す。いくら油断してたにも関わらず、俺の不意打ちにみ即座に対応し、俺の魔力弾を回避する。だが攻めが売りのシェリルが回避に回った時点で俺に幾分の勝機が巡ってくる。

「なるほど。その荒削りな動きと言い往生際の悪さと言い……本当にバルド譲りですね」

「そうだな。悪いが俺は負けるのが嫌いなんだ……勝たせてもらうぜェ、シェリル」

「やれるものなら好きにしなさい」

軽口を叩きながらも俺たちは攻防の応酬を忘れない。俺が魔力弾を放てばすかさずシェリルはそれをかわす。たださっきまでと違うのはシェリルは俺の魔力弾を斬っているのではなく、回避に徹してるってところだ。つまりは俺のペースに持ち込めていると言うことだ。

俺にはシェリルのような必殺技というか、大技は持ち合わせてねェ。ならば性能（スペック）・火力（パワー）・速度（スピード）で勝てないシェリルに勝つには数で押し切るしか方法はねェ。そういう考えに至った俺はシェリルに反撃の隙を与えまいと、魔力弾を連続で放っていく。

シェリルに反撃の隙を与えなければいつかガタが来る。そのときに勝負を決めるしかねェ。だが俺がそう思った直後にシェリルの体に魔力弾が幾つもの被弾した。あのシェリルがこうもあっさり攻撃

を受けるなんてどうもおかしい……。

「――――なっ！？」

そんなコトを考えていると目の前にいたはずのシェリルの姿がまるで空気に溶けるかのように消滅した。

「どういう――――がはっ！？」

そのことに僅かに動揺してしまった俺は後ろからきた誰かの気配に反応することが出来ずに、そのまま後ろから押し倒される。そして俺の首に何か冷たい物がピッタリと当てられた。あー、そういうことかよ……シェリル。

「二点を高速に移動して残像を作り、あたかも被弾したように見せる技法ですよ。まさかアナタ相手に使うことになるとは思いませんでしたが……」

シェリルは俺の首に刀を押しつけたまま驚かされたと言わんばかりに呟く。要するに影分身的なコトをして、俺の魔力弾を回避したってコトだろ。やれやれ、まだこんな隠し玉を持ってやがったとはな……。そんなコトを考えているうちにシェリルが俺から退いてくれた。

「まあまあですね」

「誉めてんの？　それ」

「少しだけ」

どうやらシェリルからの俺の評価は『まだまだヒヨッ子』の位置付けみてェだな……。

◆　◆　◆　◆　◆

「バルドのところに帰るのですか？」

「あぁ。そろそろ妹（ユーリ）の顔が恋しくなってきたからな」

模擬戦を終えた俺はシェリルの家にお邪魔していた。というかこっちに来てからずっとシェリルの家でお世話になってたんだけどな。シェリルは一人暮らしで部屋が余ってるから、といって使わせてくれた。

最初にこの街に来たときに街のみんなから『シェリルの婿か？』などと訊かれたんだが、俺なんかがシェリルの婿になるなんざ勿体ねェだろ。ちなみに今は夕食でシェリル特性料理をご馳走になってるんだが……テラうめェ……。

才色兼備ってのはまさにシェリルのためにあるって言っても過言じゃねェだろうな。剣技（そっち）に関しても剣技方面に関しては無知の俺でもスゲェと思うし、頭も良いし、美人で料理までうめェ。

シェリルが結婚出来ねェのは、シェリルが高嶺の花すぎて男共が声をかけれねェんだな、絶対。しかもシェリルと一緒に歩いてると男共の視線が痛ェしよ……。

「そうですか。……ならば私も同行しましょう。そちらには刀の名工が居るので」

「なるほどね。刀の新調か」

「そのついでにバルドとユーリさんの顔も見ておきたいですしね」

そう言いながらモクモクと食事を進めていくシェリル。完璧すぎるってのも考え物だよな……。他人をみて初めてそんなコトを思ってしまった俺だった。

◆◆◆◆◆

side　バルド

シキの野郎がシェリルんとこに行ってから数ヶ月の月日が経過した。村では特に変わったことは起こらねえんだが、家庭内では多大な変化が起こっちまった。まずは飯の問題だ。今まではシキが全部料理を担当してたからそれに慣れちまってたんだが、シキが居なくなってからは俺とユーリでやらねえといけねえ。

まあ、一応は作ってみたんだが食った次の日にゃあ体調崩すやら腹下すやらで……シキが来るまで俺たちがどんな飯やってたか改めて思い知らされたぜぃ……。うん、シキ、早く帰ってこい。

こんなんは別に大した問題じゃねえんだが、ユーリはシキが居なくなっちまっから滅法暗くなっちまってかなわねえな。口を開けばシキの話ばっかしてくるしよ……。べ、別にお父さんが寂しいわけじゃないからねッ！？

まあ、とりあえずシキの話題だったらコトを絶たねえってこった。話の内容はシキがシェリルに取られねえかだとか、シキがシェリルに襲われねえか、だとかだったがあの二人に限ってそりゃあ絶対に

あり得ねえ。

天と地がひっくり返ったとしても、そんなコトは絶対ぇにあり得ねえ。あの堅物シェリルがそんなコトをやるたぁ思えねえからな。そんなコト出来るんだったらもうあいつは結婚してるっつうの。

俺がそんなコトを考えていると俺の家に村の奴がドアをぶち破って入って来やがった。いつもだったら『何いきなり入っときとんじゃあぁぁぁあああああッ！！　誰がそれ直すと思ってんだよバカタレ！！』って叫んでるとこなんだが、そいつの表情が余りにも焦りで埋まっていたために、俺も知らず知らずのうちに気が引き締まった。

「た、大変だ……悪魔が攻めて来やがった！！」

「はぁ！？　悪魔だと！？」

その話を聞いた俺は急いで家を飛び出した。そしてそこにいたのは空を埋め尽くすのではないかと思えるほどの悪魔の数だった。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

現在、竜族の村『アイギス』には大量の悪魔が押し寄せてきていた。数を数えようならばおそらくは数日をようするような余りにも大量な数だった。だがこの村は悪魔の食料場になっているわけでもなければ、恨みを買うようなコトをした者も誰一人としていない。

ならばなぜ『アイギス』にコレまでに大量の悪魔が襲来してきたのか……。その答えは実に簡単だった。

「シキ・K（クロカミ）・アスタロト……。この俺様を侮辱したことを、その命を持って償ってもらうぞ……」

そう言ったのは無造作に切りそろえられた金髪を靡かせ、目を血走らせている青年。顔は怒り、悲しみ、憎しみと言った負の感情により、歪んでいなければそれ相応に整った顔立ちをしている青年――ゲイル・ラインハルトだった。

そう、何を隠そうこの大量の悪魔を召還したのは他ならない彼の仕業だ。ゲイルはシキに敗北してから悲惨な毎日を送ってきた。卑怯者の汚名を被り、人々から戒められた。元は自分が悪いと言うのにも関わらず、その復讐心と言う名の矛の切っ先はシキに向けられた。

「全部壊してやろう……。貴様の大切な者（物）を全て、一つ残らずなァ！！」

復讐者の叫びが『アイギス』に響きわたった。

――――――

この村に襲来してきた悪魔の数は計り知れない。元々、この村（アイギス）に居る竜人の数は多くなく、多く見積もったとしても約１５０人ほどしか居ないかなり小規模な村だ。そんな村が悪魔から生き残るためには、その１５０人が全員悪魔を１００体以上倒さねばならないだろう。

さらに言えばこの村の竜人の全員が全員戦えるというわけではない。この時点ですでにこの村は死んだと同じだろう。そんな中、村

の住民を逃がすために奮闘している一人の男がいた。赤色の髪を短く切りそろえ、その体格は二メートルを超える大男――バルド・アスタロトだ。

「うおあぁぁぁあああああッ！！」

バルドの氣を込めた拳が次々と悪魔を消滅させていく。悪魔が襲来してきてからすでにバルドは何１０体もの悪魔を倒している。だがそれを『も』と示すのか『しか』と示すかは火をみるよりも明らかだ。

コレまでの悪魔の数に数十程度の損害などというのはほとんどないと同じだ。それにいくら一騎当千のバルドとはいえ、この数の悪魔を全て倒すなどという芸当はまず不可能だ。だがそれでもバルドにはこんなところで立ち止まっている暇はなかった。

（くそっ、ユーリはどこに居やがるんだッ！？）

バルドが思っているとおり悪魔が襲来してきたとき、バルドの娘であるユーリは家には居なかった。買い物に行ってくる、と家を出て行ったっきり戻ってきていないのだ。すでなバルドは彼女が向かいそうな店を全て回ったのだが、どこにもユーリの姿は見当たらない。

どこかに避難しているのか、それともすでに殺されてしまった、のどちらかに限られてくるのだろう。しかしバルドはユーリがどこかに避難していると信じたかった。すでにこの悪魔に対する魔法軍の援軍の要請は済ませている。

せめて……せめて、魔法軍が援軍として到着するまで娘を守り抜

きたい。バルドはそう思う。しかしそんなバルドの思いを打ち砕くように、悪魔は次々とバルドの目の前に現れバルドに襲いかかる。

「邪魔だぁぁぁあああああああああああああああああッ！！」

バルドはそう叫びながら悪魔を次々に打ち倒していく。十、二十、三十……八十と倒していくのだがやはり数の減る兆しは全く見えない。むしろ増えていっていた。数による差がある分、バルドはかなり不利だ。例えこちらが悪魔を倒したとしても悪魔は蟻のようにぞろぞろと現れ、疲労が溜まるなどと言うことは一切ない。

だがバルドはどうだろう。彼は一人で戦っている、つまり数を減らすことが出来たとしても疲労がだんだんと蓄積されていき集中力が途切れてしまうだろう。いや、すでにバルドの体には疲労が溜まり、集中力も切れかかっている。

そんなバルドに向かって一体の悪魔が凄まじい速さで接近してきた。手には剣が携えられており、その剣でバルドを切り裂くつもりなのだろう。それを咄嗟に判断したバルドはその場から転がるように移動して、その悪魔の一撃を回避し、拳をふるう。

さっきまでの下級の悪魔であったならば、今の疲労しきったバルドの拳でも受け止めることは不可能だっただろう。しかし現にバルドが相手にしている悪魔はバルドの拳を受け止めていた。いくら疲労が溜まってるとは言えバルドの拳を止めたと言うことは、かなり上位の悪魔だと言うことが分かる。

「あなたがシキ・K・アスタロトでしょうか？」

「残念だったな。俺ぁ、バルド・アスタロト。テメェが言ってんのは俺の息子、だッ！！」

バルドはそう言いながら空いているもう片方の腕で悪魔に殴りかかる。しかし悪魔は背に生えている一対の翼を羽ばたかせて宙に飛ぶことによりそれを回避する。

「なるほど。シキ・K・アスタロトのご家族でしたか。結構、結構、召還主のターゲットですね」

「ターゲットだと？」

バルドは目の前の悪魔が発したターゲットという単語とシキという言葉に反応した。今の話の一部からはあたかもこの街にきたのは『アスタロト一家』が狙いでそのほかはついでと言わんばかりの口調だったからだ。

「えぇ。召還主はこういいました。『アスタロト一家を全て殺せ。他はついでだ』とね。私も不本意な殺生は避けたいのですが、召還された以上は召還主に従わなければなりませんからね」

「……その忠義は見事だ。だがな――――」

バルドがそこまでいうとバルドの姿が悪魔の視界から忽然と消えた。そして次の瞬間、悪魔の後ろからバルドの声が聞こえてきた。

「――――それをみすみす見逃すわけにゃあいかねえなァ！！」

バルドはそう叫びながら悪魔に向かって拳を振り下ろした。その一撃はまさに全力の一撃だった。だが、その拳は悪魔に届くことは

なかった。何故なら、悪魔が自分に届く前にバルドの腕を切り落としていたからだ。

バルドも自分の腕が切り下ろされたことを理解するまで数秒を要した。もちろんそんな多大な隙を上位の悪魔が見逃すはずもなく、バルドを地面に向かって叩き落とす。

「ごあぁっ！？」

地面に叩きつけられたバルドは受け身を取ることも出来ずに、モロにダメージを受ける。バルドの右腕が肩の辺りからすっぱりと切り落とされ、大量の出血をしていた。そんなバルドの元に悪魔が降りてくる。

「全快のアナタであったならば私は確実に死んでいましたね」

だが、と悪魔は言葉を一回切ると、手に持っていた剣をバルドの首に突きつけるという。

「今のアナタは疲労しきって本来の半分以下の力しか出せていません。そんなアナタにタイミングを合わせて反撃をするなど、造作もありません」

悪魔のもっともな言葉にバルドは言葉を詰まらせる。実際にバルドはすでに自分の体の限界を感じていた。バルドは拳闘士を怪我により引退したことによりすでに本来の力は失われている。

さらに大して強敵とも戦わずに平和ボケしていたバルドにはすでに長時間戦うだけの力は最初から残ってはいなかったのだ。それを理解していたバルドは短期決戦に持ち込んだ結果が、この様である。

「アナタには恨みはありませんが、敵対したことを恨んでください」

悪魔はそう言うとバルドの首に突きつけていた剣を振り上げた。

（ちっ、ここまでか……。俺も落ちぶれたもんだな……）

バルドは自嘲気味に笑いながら、自分の死を悟り目をつむる。だがどうだろう。死を覚悟したというのにもかかわらずバルドに明確な死はやってこない。未だにバルドの意識はある。何故だ、とバルドは思った。

「この程度で諦めてもらっては困りますよ、バルド」

だがそんなバルドに聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。そちらを見てみればそこには長い黒髪をポニーテールにまとめ、バルドの背の丈ほどもありそうな刀を構えている女性が居た。

――――――

ユーリ・アスタロトは今の状況に困惑しながらも、悪魔から必死に逃げまどっていた。今の状況について来れていないユーリではあったが、一つだけ確実に分かることはあった。これに捕まってしまえば『死』しか待っていない、ということを。

今日もユーリはいつものように兄（シキ）がいつ帰ってくるのだろうと思いながら、街へと夕食の買い出しに来ていた。シキが居なくなってから自分の料理の下手さに気づいたユーリは、シキに喜んでもらおうと密かに料理の練習をしていた。

最近では真っ黒焦げな何かからようやく何かが分かるくらいのレベルにまでなってきていた。それでもまだ食べられる、というほどではなかったのだが、シキなら食べていただろう。今日もシキのために料理の練習をしようとしていた。

（何なの……これ……。お父さんは……みんなはドコにいるの……）

しかし悪魔が襲来したことによりその足りないまでも充実した日常の歯車が一気に狂い始めた。ユーリは最近ではよく事件に巻き込まれるようになった。オスティアに行ったときも二回も巻き込まれた。

（これって僕のせい……？）

故にそんな考えに至ってしまう。一概にユーリのせいではないとは言えない。わずかながらにもユーリはこの事件に関わってしまっている。だがそうだとしてもユーリは被害者側だと言える。そしてユーリは焦りのあまり、足をもつらせ転んでしまう。

膝からは血が流れ、目に涙が溜まる。そんなユーリの元に数体の悪魔が近寄ってくる。そのうちの一人、おそらくは上位の悪魔がユーリに話しかけた。

「君がユーリ・アスタロトかな？」

「あ、あなたは……」

ユーリは突然に聞こえてきた悪魔の声に恐怖しながら、目を真っ

直ぐに見据えながらそう問い返す。すると悪魔にしては整っていた顔が不意に醜く歪み、そいつは天を仰ぎながら汚い笑い声を出した。

「ギャハハハハハハハッ!!　良いね良いねェ!!　その恐怖しながらもそれを悟られないように強がるその目!!　そそられるねぇ……」

歪んだ笑みを向けられたユーリは押し込めていた恐怖が再び盛り返してくる。悪魔の表情からは人を殺して楽しんでいるというコトしか伝わってこない。この悪魔は殺すことを楽しんでいるのだ。

「どうせ死ぬんだったら、一回ヤらせてもらおうかねぇ……」

「や、やめて……」

ユーリのその声は悪魔には効かない。悪魔の手がゆっくりとユーリに伸びていく。だがその手が不意に止まり、隣にいた悪魔の首をつかんだ。そしてその悪魔はそのまま掴んだ悪魔を盾代わりのようにして右側に構えると、そこに一発の魔力弾が撃ち込まれてきた。

「なぁんだ……。来ちまったんだ。まあ、いいや。いきなりで悪いけど死んでくんね？」

「死ぬのはテメェだクソッタレ」

悪魔の言葉に対してその竜人は殺気を剥き出しにしながらそう返した。その竜人は身の丈ほどもある銀髪を三つ編みにまとめ、右手にライフルを構えているユーリにとっての英雄（ヒーロー）でもある狙撃手だった。

第六撃『悪魔襲来。何回も言うが妹に手ェ出したらぶち抜く』（後書き）

第一章はあと二話で終了します。

第二章は序盤はオリキャラだけで、途中からは原作キャラと絡め……れば良いと思ってます。

感想待ってます！

第七撃『集合する四人。父親としてのガキには戦わせれねえよな』

シキとシェリルは竜族の村『アイギス』に帰ってくる途中でアイギスの上空だけが何故か暗くなっていることに気づいた。最初はそこだけ天気がおかしくなってるんだ、と思っていたシキだったのだがシェリルの表情は何故か曇っていた。

どうしたんだろうか、などとシキは思いながらアイギスの方を見ていたのだが、今までなにも感じていなかったシキも近づくに連れてただ曇ってるのではなく、何か異変があるように見えてきた。

「……何かあるみたいですね。急ぎましょう、シキ君」

「あ、あぁ」

いつものシェリルとは全く持って違う雰囲気にシキは若干圧されながらもシェリルの言葉に頷き、急いでアイギスに向かっていった。

――――――

「嘘だろ……なんだコレ……」

アイギスの村に到着したシキは今のアイギスの惨事を見て絶句してしまった。アイギスの村にある家のところどころから火が上がり、地面にはアイギスの竜人がピクリとも動かずに転がっている。

それをみたシキもそれが死んでいるのだと知ることが出来た。もちろん人ではないとは言え、ほとんど人と同じ見かけをしている竜

人の死体を初めて見たシキの喉に何かが来るが、なんとかそれを飲み込む。

「この村で何かがあったのは間違いありませんね」

「それは間違いねェけど、誰がこんな……」

シキがそこまで言うとシキとシェリルの二人に大量の何かが接近してくるのを感じた。シェリルはこの村に来る前から気づいていたようではあったが、シキはまだそんな感覚までは鍛えられていないために、ここまで接近されなければ分からなかったのだ。

そしてそんな二人の目の前に現れたのは、人と呼べるような姿をしている者もいれば、バケモノのような姿をしている異形が居た。

「どうやら……この悪魔の仕業らしいですね」

「理由は分からねェが、とりあえずぶち抜く」

シキとシェリルの二人はそういい放つと、シェリルは自らの刀――『夜刀』を鞘から抜き放ち、目の前に現れた悪魔の数体を一気に切り裂いていく。そしてシキは銃を腰から抜き放ち、宙に浮かんでいる悪魔の『死の点』に魔力弾を貫く。

いくら悪魔とはいえこの二人の前からすればただの雑魚の集まりとしか言い様はない。それでも悪魔の数ははかり知れずに、なかなか数は減っていかない。

「シェリル、家に戻ろう」

「そうですね。バルドがユーリさんの近くにいれば安全ですが……」

シェリルの言うとおりバルドの近くにユーリが居るならば、ほとんどの確率でユーリが怪我するなどと言うことはないだろう。ただ逆に言えばユーリはバルドのそばにいなければ無力な存在だ。

つまり、バルドの側にユーリが居なければ死んだも同然だろう。この村の人々が死ぬのも耐えれることではないが、シキにとってユーリと言う存在は何にも代えられない掛け替えのない存在だ。だからこそシキは焦っていたのだ。

そして途中で悪魔に襲われている村人を助けながらシキの家向かう。悪魔の襲撃を受けて、壊れてはいるものの燃えたりはしていないようだった。シキは壊れていたドアを潜り中に入る。しかし家の中を探し回っても、ユーリどころかバルドの姿すらなかった。

「二人とも居ねェ……。ちっ、とりあえずバルドと合流するしかねェな」

「そうですね……。二手に別れましょう。私たち個人でも悪魔を振り切って逃げることも可能です」

シェリルの言い分はもしバルドとユーリが一緒に居なかった場合、早くユーリを見つけなければならない。それに捌ききれない量の悪魔と戦うことになったとしても、最終的な決断では一人で逃げることも可能。

ならばそんな二人が固まっているよりも、複数に分かれて探した方が効率が良いとのことだった。そのシェリルの意見にシキは頷き、

二手に分かれて探し始めた。

――――――

（くっ、斬っても斬ってもキリがありませんね……）

シキと分かれたシェリルは自らに迫り来る悪魔を一刀両断にしていきながら、バルド達を探しながらそんなコトを思う。既にシェリルが斬った悪魔の数は三桁を越えている。疲労は溜まってはきてはいないが、精神的にこの圧倒的な数の差は堪えてくる。

シェリルは迫り来る悪魔に苦い表情をしながら、敵を切り裂き街を進んでいく。そしてシェリルが家の屋上を蹴って移動すると、シェリルの視界の端にとある光景が目に入った。

（バルド！？　まさかバルドがやられた！？）

シェリルが視界に捉えたのは一体の悪魔に地に伏せさせられ、今にも首が切り落とされそうになっているバルドの姿だった。しかもバルドの右腕が肩から無くなっているところを見ると、かなりの痛手を受けていることをシェリルは瞬時に悟った。

だがシェリルはその光景を信じられないでいる。シェリルは昔からのバルドとの付き合いだが、この程度の悪魔に後れをとるような実力じゃなかったはずだ。それでも現にバルドは殺されそうになっている。

（今は後先考えてる暇は無さそうですね）

シェリルはそう思うと、無理矢理に進行方向を変えてバルド達が

居る方に向かって虚空瞬動で一気に接近していく。そして悪魔が振り下ろそうとしている悪魔とバルドの間に割り込み、自らの刀で悪魔の剣を受け止める。

「この程度で諦めてもらっては困りますよ、バルド」

ギチギチと二つの刃が拮抗しあう中、シェリルは倒れているバルドに視線は向けなかったが、そう言った。対してバルドはその光景に信じられなかった。

シェリルはこの村からかなり離れた街でシキと拳闘大会に出場していると思ったからだ。しかし今はそんなコトはどうでもいい。今はただ自分が生き残ったことを感謝するべきだった。

「けっ、誰が諦めるかよォッ！！」

バルドは口元をニヤリと歪ませると立ち上がり、残っている左腕でシェリルが刃を交えている悪魔の他の悪魔を殴り飛ばした。しかしいくら強がったとしても、右腕を無くし大量の出血をしている状態のバルドでは下級の悪魔を相手にするので手一杯だ。

もちろん、そのことは自分の体の状態を理解しているバルドが一番分かっていることだ。

「シェリル……。悪ぃが、そいつを任せても構わねえか……？」

「ふっ、構いませんよ。代わりにアナタはシキ君とユーリさんを探してください」

バルドはシェリルの言葉に渋々と言った感じに頷いたあと、シキ

とユーリを探しに向かおうと動きだそうとした。だがそんなバルドの背中にシェリルは告げた。

「死ぬことは許しませんよ、バルド」

「それ、死亡フラグだぜ？」

バルドは分かっていた。シェリルがバルドの肩の力を抜かせるためにわざとそのようなことを言ったことを。それにバルドは笑みをこぼしながら、シキとユーリを動き始めた。

そしてそれを見送ったシェリルも改めて気を取り直して、悪魔の剣を弾き返して一旦悪魔から距離を置く。刀を構え、警戒心を高めながら悪魔を真っ直ぐに見据える。

「やれやれ……彼を逃がされるのはこちらとしても困るのですがね」

「そうですか。こちらとしては逃がさなければなりませんので……。――――ふっ！！」

シェリルはそう言うと瞬動でわずかに開いていた距離を一気に埋めて、悪魔の胴体を切り裂くかのように刀を横凪に振り抜く。まるで言葉は交わす気などないとばかりの早めの攻撃。しかし悪魔は剣を縦に構えてシェリルの一太刀を防ぐ。

ガキィィイイイン！！　と言う金属同士を打ちつける独特の音がアイギスに響き渡る。だがそんなコトを気にするシェリルではなく、そのまま回転して反対側から悪魔に向かって刀を振るう。だが悪魔はそれを完全に見切り後ろに飛ぶことによりそれを避ける。

「ふふっ……いいですね。同じ剣士として心が踊ります」

「悪いですが戦闘狂（バトルマニア）に付き合っている暇は私にはありません」

悪魔の言葉をすぐに切り捨てるとシェリルは悪魔の懐に潜り込み、居合い抜きの要領で刀を振り抜く。悪魔はシェリルを飛び越えることにより、それを回避してシェリルの頭に向かって剣を振り下ろす。だがシェリルはそれに振り向くことすらもせずに刀を防ぐ。

「良いですね、素敵ですよ。もしこんな形で出会っていなければ求婚しているところです」

「されていたとしてもそれに答えることは、皆無ですッ！！」

「っ……、それは残念……っ、ですねっ！！」

シェリルは刀を巧みに動かし悪魔の剣を弾き返す。シェリルのあまりにも鋭い刀の動きにより悪魔の動きが鈍る。もちろんそんな隙をシェリルが見逃すはずがない。

「秘剣――」

悪魔に背を向けるように身体を位置し、刀を真横に構える。そして未だに体勢を立て直せていない悪魔に向かって必殺の一撃を叩き込む。

「――燕返しッ！！」

一瞬のうちに放たれた三太刀が悪魔の体を切り裂く。するっ悪魔

の体はまるで灰になるかのように足元から消え始めた。

「やはり楽しい。強敵と戦うことこそ、我が楽しみ……」

「戦闘狂（バトルマニア）ですね。ですが、それも悪くありません」

「おや、惚れましたか？」

その悪魔の言葉にまさか、といいたいかのようにシェリルは肩をすくめる。そしてシェリルはその悪魔が完全に消滅する前にシキとユーリを探すために移動し始めた。

そして残された悪魔は薄い笑みを浮かべて空を見上げながら、誰に言うでもなくただ虚空に向かって一人つぶやく。

「あれほどまでに美しい女性は、もう二度とお目にかかれませんね……」

悪魔はそうつぶやくと、消滅した。

――――――

ｓｉｄｅ　シキ

シェリルと分かれてユーリを探し始めた俺はなるべく悪魔をぶち抜いていきながら、移動していた。ただ悪魔の数は尋常ではない。何が引き金でこんなコトが起こっちまったかは分からねェが、悪魔を召還した奴がドコカに居るはずだ。だがその前にユーリを見つけださねェコトには始まらねェ……。

そんなコトを思いながら俺は街を移動して回る。すると裏地にて一際大きい悪魔の気配を感じた。このまま放っておいても構わねェんだが、もしそいつがユーリに危害を与えかねない存在だってなら、早めにぶち抜くしかねェな。

そう思った俺はそちらに入っていったんだが……どうやらビンゴだったみてェだな。俺の視界に入ってきたのはユーリに手を出そうとしてやがる悪魔の姿だった。ったく、ユーリは誰にでもモテるな。

俺はそんな場違いなコトを考えながら悪魔に向かって容赦なく魔力弾をぶっ放す。だが俺が魔力弾をぶっ放した悪魔は他の悪魔を盾にして俺の魔力弾を防ぎやがった。

「なぁんだ……。来ちまったんだ。まあ、いいや。いきなりで悪いけど死んでくんね？」

「死ぬのはテメェだクソッタレ」

その悪魔はまるで下らないものを見るかのような目で俺をみてくる。だが俺もそれに負けねェくらいの目で奴を睨みつける。奴は見た目こそふざけてるような姿ではあるが、実力は今までの悪魔とは桁違いだ。

だが今は止まるわけにはいかねェ。奴の魔の手からユーリを一時的に救ったとは言え未だにユーリは悪魔の範囲内に居やがる。そう思った俺は一気に瞬動を使い、ユーリを助け出すために怪我覚悟で接近する。

「良いね良いねェ、その決死の覚悟。だけどな、それを砕くのはもっと楽しいよなァ」

奴は顔を歪ませて笑いながらそう言うと俺に右手を向けてくる。
すると奴の右手から紫色の光線が俺に向かって放たれてきた。だがそんなのは予想範囲内だ。俺はわずかに身をよじることによりその光線を回避し、ユーリを抱きかかえる。

そしてそのまま奴に向かって蹴りを一回放つが、奴はあっさりとそれを回避する。だが俺の狙いは奴に一撃を与えることではない。奴に隙を作り出すことで、奴から一気に逃げるのが俺の狙いだ。

ユーリを助けた以上、無駄な戦いを続けてても意味はねェ。今はユーリを安全なところに逃がすのが俺の役目だ。俺はそう思いながら全力で奴から逃げる。しかし敵もそうバカじゃねェ。すぐに俺をユーリを抱き抱えている追いかけてくる。ちっ、このままじゃあ捕まるのも時間の問題か……。

「ユーリ、しっかり掴まってろ!!」

「う、うん!!」

ユーリにそう言うとユーリは俺の首に手を回して振り落とされないようにがっちりと掴まってくる。これがこんな展開じゃなかったらどんだけ嬉しかったことか……と場違いなことを考えながら、俺は宙に浮いたまま後ろから追いかけてくる悪魔に銃口を突きつける。

「ぶち抜け!!」

俺はそう叫びながらろくに狙いを付けないままに引き金を連続で引いていく。これじゃあ『死の点』をぶち抜くコトは出来ねェが、今の俺が放つ魔力弾は『白き雷』クラス以上の威力が出せる。上手

く当たれば消すことも出来るし、そうでなかったとしても時間稼ぎ程度なら出来るはずだ。

そして案の定、俺の魔力弾に被弾した悪魔共は次々と地面に落下していく。だが、その中の上級なあの悪魔だけは上手く回避したり弾いたりして着々と俺との距離を詰めてきている。あいつを相手にするなら一筋縄じゃいかねェだろうな。だったら尚更ユーリを巻き込むわけにゃあいかねェ……。

だが今の俺でユーリに、絶対に、怪我をさせないで立ち回ることなど可能なのか？　いくらあいつがシェリルクラスじゃないとは言っても確実に俺と同等くらいに力はある。それなのに巻き込まないで勝てるわけがない。

クソッタレ……どうすりゃあいい……。『死の点』を狙いに行ったとしてもまともにぶち抜けるわけがない……。やっぱり逃げに徹するしかねェのか……。

「おらおらおらァァアアアッ！！　愉快に素敵にケツ振ってんじゃねえよ！！　誘ってんのかァッ！！」

「――――――ッッッ！？」

奴がそう叫ぶと同時に俺の肩に今まで感じたこともないような激痛が駆け抜ける。鮮血が舞い、叫びにならない声が出る。肩を見てみれば黒色の鋭利な何かが貫通していた。それの正体が何かは分からないが、あの悪魔が俺に攻撃してきたということだけは確かだ。

何かが突き刺さったことにより俺のバランスが崩れ、真っ直ぐに地面に向かって落ちていく。俺一人だったんなら受け身でも何でも

とれば良いが、今はユーリを抱き抱えてる状態だ。ユーリに怪我させねェように着地しねェとダメだ。

そう思った俺は足の裏に氣を集中させて、着地する瞬間にそれを爆発的に解放する。そうすることにより落ちた瞬間の衝撃を和らげる。だが着地出来たからって安心は出来ない。

即座に俺は移動を開始する。それとほぼ同時に俺が居た場所に数本の槍のような物が突き刺さる。どうやらアレがさっき俺の肩を貫いた物の正体みてェだが、なぜあいつは最初からあれを使わなかった……。ごちゃごちゃ考えてる暇もねェな。

「真っ正面からバカ正直にやるより、逃げる相手の後ろからぶっすり刺す方が楽しいよなァ！！」

「ごちゃごちゃ、うぜェんだよ！！　クソッタレ！！」

俺はそう言いながら奴に向かって魔力弾を放つのだが、やはり魔力弾の全てが悉く回避されていく。マズいな、これじゃどの道追いつかれち――。

「お兄ちゃん！！　前からも来てるよ！？」

そこまで考えて俺の思考はユーリの声により強制的に遮断された。ユーリの言葉に反応し前を見てみればそこにはかなりの数の悪魔が待ち受けていた。そういや俺の敵はあのイカレた悪魔だけじゃねェ……この村には敵しか居ねェんだった……。

クソッタレがッ、このままじゃ悪魔の群に突っ込む形になっちまうじゃねェか……。仕方ねェ、ユーリに怪我させねェように突っ込

むしか――――。

「ギャハハハハハハハッ！！　逃がすわけねえだろ！？」

突っ込む決意を固めたにも関わらずイカレた悪魔は俺に槍を何本も放って来やがった。どうすりゃあ良い……弾けば弾いてる間に悪魔の群の中に。だが悪魔の群の中にユーリを守りながら行けば確実に貫かれる……。打つ手がねェ……。

「悪ぃが、俺の息子と娘にゃあ手は出させねえぜ？」

するとイカレた悪魔の側から聞き慣れた男の声が聞こえてきた。それと同時にイカレた悪魔はその声の主に殴られ、まるで砲弾になったかのように地面に叩きつけられた。

「全く……。しっかりしなさい、シキ・K（クロカミ）・アスタロト」

さらに悪魔の群の方からも声が聞こえてきたためにそちらに向き直ってみれば、さっきまでいた大量の悪魔は一人の刀を持っている女性によって全員が切り捨てられていた。そんな二人をみた俺は二人の名を呟く。

「バルド……シェリル……」

「おう。つーか何呆けた声出してんだ？　シャキッとしろ、シャキッと！！」

バルドはそう言いながら俺の背中をバシバシ叩いてくるのだが、俺はあるものを見て絶句していた。いや、正確にはあるものが無くて絶句していたと言う方が正しい表現だ。俺の目がおかしくなかっ

たならば、バルドの右腕が肩から切り落とされていた。

もちろんそれをみたユーリも泣きそうな、いや泣きながら口元を押さえてバルドを見ていた。シェリルはすでに知っていたのか、気まずそうに俺たちを見ている。そして当のバルドは何事もないと言わんばかりに俺たちに言ってくる。

「何変な顔してんだお前ら？　んな顔する暇あったらさっさと逃げろ。子供の出番は終ぇだ」

「何言ってんだよ……。逃げるのはテメェだろ？　右腕のねぇテメェより、俺が残った方が良いに決まってんだろ」

コレばっかりはバルドの良いなるになるわけにはいかねぇ。村のみんなの命が掛かってんだ。怪我してて明らかに限界が来てるバルドが残るより、まだまだ戦える俺が残った方が良いに決まってる。

「あんなぁ……。テメェにゃあ親らしいことなんざ一回もやれてねえんだ。最期ぐれぇ、親にさせろよ」

ユーリはその言葉の意味は分かってねぇみたいだったが俺とシェリルはその言葉の意味を瞬時に理解することが出来た。バルドは……この戦いで死ぬ気なんだ。いや、例え先に逃がしたとしてもあの出血じゃもう間に合わないと悟ってんだ。

よく見てみれば今も無理していつものように振る舞ってるが、すでに限界ってのは見えてる。

「……分かった。行こう二人とも。ここはバルドに任せて、俺たちは元凶を叩きにいく」

「分かりました。バルド……。いえ、何でもありません」

「へっ、頑張れの一言もねえのか？」

「欲しいのですか？」

「いらねえよ。さっさと行っちまいな」

「えぇ」

バルドとシェリルが話し終えるのを確認すると俺たちはこんなクソッタレな事件を起こした元凶を潰しに向かった。そしてシェリルが密かにバルドに頑張れの一言を送っていたのは俺しか知らなかった。

第八撃『別れとは人を良くも悪くも成長させる。俺はどちらかと言えば……』

ｓｉｄｅ　バルド

……あいつ等には早く行け、的なコトを言ってカッコ付けちまったは良いんだが、正直俺ってばもう限界だったりするんだよね。主に生命的に。このまま気ぃなんか抜いちまった暁にはそのままコロッと逝っちまうよな、いやマジで。

俺の身体って繊細だからさ、こんな右腕ぶった斬られたり腹貫かれたり、骨が折れたりしたらさもうのたうち回りたいわけよ。今すぐにでも回復魔法掛けてもらいたいわけよ。だって死んじゃうし？

まあ、ここで生き残ろうが生き残るまいが俺はもうダメだ。だったらせめて息子（シキ）と娘（ユーリ）のために、せめて最期ぐれぇ親らしいことを見せねえとな。俺がそんなコトを思っていると、目の前の奴が何故か怒ってるように見えた。

「あーあーあー、何ですかァ？　美しき親子愛ってかァ？　んな下らねーコトで俺はテメェみたいな死に損ないを相手になんかしねえといけねえのか？」

「そう言うことになるな。まあ、安心しな。死に損ないでもテメェの百倍強ぇからよ」

百倍は言い過ぎたか？　訂正しよう。十倍ぐれぇかな？　あっ、右腕ねえから同じぐれえか？　そういや俺と同じぐれえの実力の奴と戦うなんざシェリルと戦（や）り合ったとき以来だな。どうせならドン

パチやらせてもらうとしますか。

「死に損ないが舐めた口を利くな！！　死に損ないは大人しくスクラップになりなァ！！」

悪魔はそう言うと俺に向かって黒い槍みてえのを突き出してきた。いや、槍ってのは間違いか？　ありゃ自分の身体の一部、今なら指を変化させ硬化させて突き刺し的たっつったほうがしっくりくるな。

「まあ、アレだ。お前ぇは挑発に乗りやすい」

俺はそう言いながら奴が突き出してきた黒い槍を、氣を集中させて同じように硬化させて強化した左腕で掴む。そしてそのままそれに膝蹴りを食らわせて、黒い槍を折る。その後に折った槍の先端を悪魔に向かって俺は投げつける。

挑発に乗りやすいバカだが、シキを手こずらせてたぐれえだからそんなんは当たらねえと思ったが、予想以上に動きは良いみてえだな。俺は顔面めがけてぶん投げたんだが、微妙に顔をずらされて避けられちまったか。

「そんなのが当たると思ってんのかよォ！！　三下ァ！！」

「思ってねえよ。とりあえず、お前ぇはバカだ」

奴は頭に血を上らせたまま俺に向かって真っ直ぐに突っ込んでくる。微妙に変化を加えても良いような気もするんだが、別に敵にわざわざ教える必要もねえし、叩き潰しますか。そう思った俺は微妙に身体をずらして奴の攻撃を避けて、奴の腹に膝蹴りを叩き込む。

膝蹴りを鳩尾（つーか今更だけど悪魔って竜族と肉体構造一緒なのか？）に喰らった悪魔は宙に浮かび上がる。そこにすかさず肘打ちを食らわせる。向かってきた方向の逆に肘打ちを放ったことにより、威力は高くなってやがる。いくら悪魔でも耐えきれなかったみてえで、うめき声を上げていた。

「そんなんじゃシキどころか今の俺にすら勝てねえよ、お前ぇ」

「ぐっ、死に損ないがァ……、死に損ないは黙って寝てろォ！！」

悪魔はそう言いながら俺の体に再び槍を突き出してくる。何回ぇやってもおんなじだってのが何で分かんねえかな。俺は呆れ半分でそんなコトを思いながら、のばしてきた槍を掴む。

そしてそのまま自分の方に引き寄せてそのまま悪魔の胸に向かって蹴りを放つ。だがさすがにそこまでは当たらなく、避けられちまった。ったく、早く降参してくれよ。俺ももう長くねえけど、テメェと一緒に逝くなんざお断りだぞ。

「畜生……死に損ないのくせにたてつきやがって……」

「死に損ない死に損ないってさっきからウゼェんだよ。」

俺から距離をとり俺のことを睨みつけている悪魔に向かって俺は苛立ちを全く包み隠さず言う。確かに死に損ないだが、頑張ってテメェみたいな雑魚の相手してやってるんだから有り難く思えよ。まあ、いいや。そろそろ、全開でいけそうだからな。

「知ってるか？　人間ってのは本来持ってる力のほとんどを使い

切れてねえんだ。それは竜人だろうが悪魔だろうが大体同じだ」

「だから何だ死に損ないがァッ！！」

悪魔はそう叫びながら俺に突っ込んでくるんだが、人の話は最後まで聞いた方が良いと思うんだがな。まあ、聞こうが聞くまいが大差ねえか。俺はそんなコトを思いながら、ただ腕を振る。

「が……っ」

すると俺の振った腕から爆風が生まれて、悪魔の体を切り裂いていく。腕が、脚が次々と千切られていき爆風が収まったとき、悪魔の体は見るも無惨なほどにグチャグチャになっていた。確認しなくても死んでるのが分かるな。

「それを百パーセント使いこなすことが出来たら、はっきり言って無敵だぜ？」

俺はグチャグチャになって死んでいる悪魔に背を向けながらそう言う。さて、あとはこの悪魔共を一掃して、俺の最期の仕事を終わらせるとするか。そう思った俺は竜族の力をすべて解放した。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シキ

バルドと別れた俺たちは出来るだけ悪魔を倒していきながら、この騒動を引き起こした元凶を探していた。ただ誰がこの悪魔を召還したかの目処がまるで立ってないために、どこを探せば良いか全く分からない。

クソッタレ……こんなコトで時間を取られてる場合じゃねェってのに、探すだけで手間取ってるんだったらもう完全に取り返しのつかないことになっちまうじゃねェか……。

「シェリル、どうにか召還主を探すような魔法とかはないのか？」

「済みません。そう言った魔法はあったとしても私は使えないんです」

どうやらシェリルは簡単な魔法は使えるようだったのだが、魔法を使う才能が無かったために中級レベル以上の魔法が使えないらしい。だがシェリルが魔法を使えたとしても、そう言った魔法がねェんじゃ意味がまるでねェ……。いったいどうすりゃあ良いんだ……。

「ただ方法が無いわけではありません」

「どうやるんだ」

シェリルの話によれば悪魔を召還する際に召還主の魔力を使い悪魔が召還されるらしい。つまり悪魔に流れている魔力と違う魔力を悪魔から探し出すことが出来れば、あとはその魔力の痕跡を辿れば自ずと召還主にたどり着けるらしい。

「俺は魔力とか感じ取るのは無理だから、シェリルに頼んでも構わないか？」

「分かりました」

俺はシェリルが了承するのと同時に近くで村を壊してやがった悪

魔の首を掴み、そのまま地面に殺さない程度に思いっきり叩きつけた。そしてシェリルがその悪魔に手を添えた。

「少々時間が掛かりますので、悪魔の殲滅を頼みます」

「了解」

俺はシェリルにそう答えるとこちらに向かってくる悪魔共の『死の点』をつくのではなく、魔力を大量に込めた魔力弾で一掃していく。魔力を感じ取るとかは無理だけど、この銃を使うなら魔力調整とかやらなくて済むから威力を調整できる。

イメージとしては氣を込める感じで引き金を引けば勝手に銃の方が調整してくれる。そんなコトを考えながら俺は悪魔共に魔力弾をぶち込んでいく。今更に思うんだがこいつら、俺達ばっかり狙ってないか？　俺達が来るまでは無差別に狙ってたみたいだが、俺達が来た途端にこっちばっかり狙ってきやがる。どうなってんだ……？

「お、お兄ちゃん！　上からも来てるよ！！」

「サンキュー！！」

考え事に没頭しすぎたのか上からの悪魔の接近に気づいてなかったのだが、ユーリのおかげで事なきを得ることができた。考え事如きで周りの気配が感じ取ることが出来なくなるなんて、まだまだ弱いな俺も。

「シキ君！！　召還主の魔力を掴みました！！　あとはそこまで行くだけです！！」

「分かった。行くぞ、ユーリ」

「うん！！」

俺はシェリルの言葉を聞いたあと、再びユーリをお姫様抱っこで抱えて、シェリルの向かう先についていった。

◆◆◆◆◆

シェリルについてきて俺たちがやってきた場所は村から少し離れてはいるが、村全体を見渡すことができる場所だった。そこから見た村の風景は、炎が燃え上がり無数の悪魔と戦う仲間の姿が見えた。

良い趣味してやがるなクソッタレが……。こんな場所から村が消えるのを高みの見物って訳か……。しかも仮に見つかったとしても対応できるようにと、一際強い悪魔を周りに侍らせておく、と……。俺はそんなコトを考えながらこんなコトをしでかしたクソッタレを見据える。

「テメェだったのか。ゲイル・ラインハルト」

「そうだ。貴様に復讐するためだけに俺様は悪魔を召還した。お気に召してもらえたか？」

ゲイルは楽しげに笑いながら身振り手振りを大袈裟にして俺にそう言ってくる。

「あァ、十分にな。クソッタレがッ！！」

そう叫んだ俺は瞬動を使って一気にクソッタレに接近していく。

その際に上級の悪魔が俺に何かしようとしてたみてェだが、いちいち何かされんのは面倒だ。だから先に『死の点』をぶち抜いて退場してもらった。

するとクソッタレはいきなり余裕の表情を消しやがった。どうやら俺やシェリルじゃ、上級の悪魔に勝つのは無理だと思って慢心してたみてェだな。あんな雑魚で俺達に勝てると思うとは……舐められてるにもほどがあるな。そんなコトを考えながら俺はゲイルを押し倒し、頭に銃口を押しつけたまま言う。

「こいつらを全部消せ。今すぐに」

「はっ、残念だったな。悪魔は呼び出した時点で俺ではなんとも出来ぬわッ！！」

「ぐ……っ」

ゲイルはそう言いながら俺の腹を蹴り上げ、その場から離脱する。そして右手を天に掲げながら詠唱を始めたが、あいつが詠唱を終わらせる前にぶん殴る。そう思った俺は瞬動で接近していく。

「契約に従い、我に従え、高殿の王！！　来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷雲！！　百重千重となりて――――」

「やらせるかよッ！！」

そして詠唱をやらせる前に目の前にたどり着いた俺は全力でゲイルを殴り飛ばす。俺に殴り飛ばされたゲイルはまるで砲弾のようにぶっ飛んでいくが、休ませる気なんざさらさらねェ。

そう思った俺はゲイルがぶっ飛んでいった方向に先回りして、ゲイルがこっちに来たときにゲイルを宙に向かって蹴り上げる。虚空瞬動で打ち上げられたゲイルに接近してさらに宙に打ち上げる。

そして再びゲイルが向かう先に先回りして今度は地面に向かって叩き落とす。さらにその向かった先に、とそれを何回も繰り返してゲイルを殴りつけていく。もう何回やったか分からなくなって、ゲイルに止めを刺そうと俺の全ての氣を右手に集中させる。

「テメェさえいなけりゃ……この村のみんなはこんなくだらねェコトに巻き込まれねェで済んだんだ……。テメェだけは絶対ェに……許さねェ！！」

そう叫んだ俺はゲイルの腹に全ての氣を込めた拳を叩き込もうとした……だがそれをシェリルに止められた。

「離せシェリル！！　こいつだけは許さねェ！！」

「分かってます。ですがもうゲイルは……」

シェリルは首を横に振りながら俺にゲイルを見るように促す。俺の視線の先にはもはや人間だったことも分からねェくらいに無惨な姿になったゲイルが居た。すでに生死を確かめるまでもない。

ゲイルは死んだ……だがまだこの騒動が解決したわけじゃねェ。元凶（ゲイル）が悪魔を召還した時点でどうやら悪魔達はすでに召還主から隔離された存在になったみてェだ。つまり召還主が死んだとしても消えることはねェ……。

そんなコトを考えていると村の確かバルドが戦ってた辺りの場所

から巨大な竜が現れた。全長はおそらく百メートル以上は軽く越してやがる体にまるで太陽のような黄金の体……。同じ竜族だからって分かるわけじゃねェが、あの竜にはおそらく誰も勝てねェ……。

あんまり離れてないとは言え、その威圧感に呑まれてしまいそうになるほどの、重い力。全神経を集中させたとしてもあと何分耐えきれるか……。ユーリに至ってはすでに気絶してやがる。あれに太刀打ちするとしても、それこそ神格クラス以上の奴じゃねェと無理だろ……。

「シキ君、ここを離脱しましょう。アレに……バルドに巻き込まれます」

「……は？　あれがバルドだと？」

そう言ったシェリルは冗談を言ってるのかと思ったが、どうやら冗談じゃねェみてェだ。何故かと言えばそう言ったシェリルの表情が蒼白になってたからだ。あのシェリルがこんなになるほどのコトなんだから、今のバルドはそれほどに危険なんだろうな、だが……。

「悪いな。逃げるなら二人だけで逃げてくれ」

「――――ッ！？　何を言ってるのですか！？　近くにいるだけで苦しそうにしているのに、アナタが残って何が出来ると言うのですか！？」

確かにシェリルの言うとおりこの場にいるだけでもう苦しいし、さっさとこの場から離れてェさ。だけど俺はシェリル達と一緒に逃げるわけにはいかねェんだ。

「俺は狙撃手だからな。シェリルと違ってバルドの援護が出来る」

そうだ。俺は狙撃手なんだ。前衛（バルド）の援護をするのが狙撃手であるこの俺、後衛（シキ）の役目なんだ。

「ですが、今のバルドには援護など必要ありません！！　それに……」

「分かってる。俺は死なねェよ」

俺はシェリルにそう言いながら地に膝をつけ、ライフルを構える。銃口を覗き、バルドの周りにいる悪魔に狙いを定める。引き金を引き、悪魔を撃ち落とす。

「シェリル、ユーリを頼む」

「……分かりました。ご武運を」

「あぁ」

俺はシェリルの言葉に短くそう答える。そしてシェリルがユーリを連れて行ったあとで一息つく。シェリルにはあんなコト言っちまったが、実際体を動かすのも苦行だ。そんな空間を作り出してるバルドに援護なんか必要ねェと思うけど、引くわけにはいかねェ。こいつは俺が撒いた種なんだからな……。

そんなコトを思いながら俺はライフルの引き金を連続して引く。『死の点』に魔力弾がぶち込まれた悪魔は次々と消滅していく。そして何体目かを倒したとき、今まで動いていなかったバルドがようやく動き出した。バルドは尻尾を一回悪魔の群に向かって振るった。

たったそれだけの動きだったのだが、空を埋め尽くすように存在していた悪魔が、一瞬にして居なくなりまるで鉛筆で真っ黒にした紙の一部を消しゴムで消したかのようになっていた。さらに言えばそれの余波がこちらまで来て俺をぶっ飛ばした。しかもあんまり離れてないと言っても一応は四、五キロ以上は離れてる。それなのにも関わらず、踏ん張りきれなかった。

三キロほどぶっ飛ばされたところでようやく勢いが止まったのだが、あんな威力の技やったら俺より近い村はどうなってるんだ……？　と思いながら再び戻ってみると……まあ、だいたい察してくれ。

「後先考えないところがバルドらしいな……」

戦いの中だと言うのにも関わらず、俺の口元に思わず笑みがこぼれる。だが……アレを見れなくなると思うと寂しくなるな。そんなコトを考えていると俺の頬から何かが伝った。上を見てみればさっきまでは晴れていたのに、そこには雨雲が君臨していた。

「グガァァアアアアアアアアアアッ！！」

すると村の方からバルドの叫びが聞こえてきた。するとその叫びの衝撃波により周りにいた悪魔が一瞬にして消滅していく。もはや千単位で消滅していく悪魔を見ながら俺は思う。規格外過ぎるだろ……と。

だがあんな規格外な技をリスクなしで使えるとは思えねェ。だいたいアレがリスクなしで使えるんだったらバルドなら仲間を救うために村なんか破壊することを簡単に選ぶ奴だ。なのに今それを使ったって事は……。

「ちっ、ゴチャゴチャ考えんのはあとだ、クソッタレ……。今は……何すりゃ良いんだ……？」

はっきり言って今の状態のバルドの援護しようとか思っても、援護したうちに入んねェしな……。だったら今はあのバルドの強さを盗むのと最期の、親としての姿を見送るしかねェじゃねェか……。

力が無いことを俺は恨みながら、バルドの戦いを見守ることにした。

◆　◆　◆　◆

戦いは終わりを告げた。バルドがあの姿になったことにより戦況など火を見るよりも明らかで、数分とかからずにあの空を埋め尽くしていた悪魔の全てが消滅した。だがまだ空は雨雲に包まれている。

そして俺はと言えばこの悪魔の全てを倒した、最強の男もとい俺の義理ではあるが、この世界に来て身元も分からない俺にぶっきらぼうながらも優しくしてくれたバルドのところにいる。バルドは半壊した建物に背中を預け、もはや息が絶え絶えになっていた。

斬られて失ってしまった右腕の部分からは今でも出血がヒドく、とめどなく溢れ出している。そんなバルドに近寄り俺は話しかける。

「よぉ、英雄。辛そうだな」

「シ……キか……？　悪い……な……もう目……も……見えねえ……んだ……」

俺の言葉に答えてくれたバルドではあるが、明らかに苦しげだった。今浮かべている笑みと呼べるかも分からない表情も明らかに無理してるように見える。

「あんた英雄だよ……あんたのおかげで村の大半の奴は……助かった」

「そう……か……。良か……った」

「良くねェよ!!　あんたが……バルドが居なかったら俺もシェリルもユーリも……誰も喜ばねェだろうがッ!!」

俺は思わずバルドに叫んでしまっていた。自分を犠牲にして誰かを救おうとするなんて有り得ない。そんなんじゃ、救われた奴には罪悪感しか残らねェじゃねェか……。

「そう……だな……。だが……俺は、もう……無理だ……」

「……」

「最期の……頼み……聞いて……くれるか」

「……あぁ」

「一服……してえんだ……」

そういってバルドは自分の来ている竜族衣装の胸ポケットを示した。そこを探ってみればタバコではないが、タバコに似ているものが入っていた。俺は箱の中から一本タバコを取り出して、火をつける。そしてバルドの口にやった。

「へっ……、久しぶりだが……悪く……ねえな……」

「……そうか」

「シキ……本当の……最期の……頼みだ……」

バルドはそう言いながら、動かないはずの手を動かす。目が見えないために手がさまようが、その手は俺の頭に置かれた。バルドは俺を無造作に、だけど力なく撫でながら言う。

「ユーリと……シェリルを……頼ん……だ……ぜ……」

「……あぁ、任せとけ。アンタの分まで俺があいつ等を守ってみせる。いや、絶対ェに守る」

バルドは俺の言葉に満足したのか、今度は本当の笑みを浮かべた。そしてすぐにその笑みがなくなり、俺の頭に乗せられていた手は力無く、濡れた地面に落ちた。俺はバルドが持っていたタバコの箱の中から一本取り出して、俺も加える。

「ゴホッ、ゴホッ……バルド、アンタよくこんなの吸えるよな」

俺は立ち上がり空を見上げる。そのときすでに雨雲は晴れ、雨が止んでいた。ただ、それなのに俺の頬を何かが濡らす。

「目にしみるぜ、コレはよ……」

このとき、俺は死ぬと言うことを完全に理解した。

◆◆◆◆◆

結局、魔法軍が駆けつけてくれたのはバルドが全てを終わらせてからだった。魔法軍が早く来てくれれば、もしかしたらバルドが助かったかもしれない。それにあんな魔法使いが居なければ、そもそもこんな悲劇は起こらなかった。

そんなコトを思い続けること三日間。今日はこの事件で死んでしまったみんなの葬儀が行われている。魔法軍が開いた弔いらしいが、俺はと言えばその葬儀の場所には居ない。半壊した自分の家から必要なものだけを纏め、旅に行く準備をしている。そんな俺の元に一人の女性が近づいてきた。

「このようなところに居たのですね」

「シェリルか……。お前こそどうしたんだ？」

俺が向いた先にはいつもの私服姿のシェリルではなく、全身を黒で覆った正装に身を包んでいた。

「アナタが居ないので抜けてきましたよ。……行かないのですか？」

「悪いな。魔法使いなんかが開いた葬式なんかクソ食らえだ」

あれから俺は魔法使いを恨むようになっていた。多分、今魔法使いを見ちまったら確実に殺しちまう。

「ユーリはどうしたんだ？　一緒じゃないのか？」

「今は親戚の方と一緒に居ますよ。今の彼女に、私は必要ありません」

「……そう、か」

ユーリはバルドが死んだと知ってからずっと泣いていた。唯一の本当の家族であるバルドの死は、ユーリには受け入れがたいものだった。

「シェリル、一つだけ頼んでも良いか？」

「構いませんよ」

「俺が強くなるまでユーリを頼む」

俺はそう言うとシェリルから遠ざかった。

俺は強くならねェといけないんだ。バルドの最期の願いはあの二人を守ること。

俺は強くならねェといけないんだ。世界の全てを敵に回したとしても、大切なものを守れるくらいに……。

俺は強くならねェといけないんだ。二度とシェリルやユーリに悲しい思いをさせないために。

第八撃『別れとは人を良くも悪くも成長させる。俺はどちらかと言えば……』

次回はキャラ設定です。

感想待ってます！

主人公設定＋α

一章最終話↓二章開始時。

名前：シキ・Ｋ（クロカミ）・アスタロト
イメージＣＶ：坂本真綾
身長：１６２ｃｍ↓１７３ｃｍ
体重：４８Ｋｇ↓６２Ｋｇ
一人称：俺↓私
容姿：銀髪蒼眼。
銀髪の髪は腰あたりまであり、それを三つ編みにして纏めている。
顔は女の子が見れば美男に見え、男の子が見れば美女に見える中性的な顔立ち。
頭からテオドラと似ている角が生えた。
↓容姿に変化はないが、悪魔襲来事件以来、目がまるで死んだ魚のように濁ってしまっている。
性格：ドが付くほどのＳ。
基本的には馴れ合いを好まないが、人となりによりそれは変わる。
↓過去の体験から『ユーリ』と『シェリル』を除き、誰とも一定以上の距離を取っている。
基本的に魔法使いなら『ユーリ』と『シェリル』関係以外なら容赦なく殺す。
年齢：人間で言えば２１だが竜族からすれば１０を過ぎたばかり。

『能力（スキル）』

・氣をある程度使える力。
この能力のおかげで現在は原作の『ジャック・ラカン』より強い程度。

・鍛えればいくらでも強くなる力：ＥＸ
その名の通り鍛えればいくらでも強くなる。
上限も存在しないし、さらには鍛えなくてもそれまで蓄積した力は、一生衰えることはない。

・竜族
体が竜族であるため竜族の力が使える。
現在自己流で修行中のためあまり使えていない。

・鷹の目：Ｓ＋　Ｎｅｗ！！
魔力で視力を強化することにより、五十キロ以上離れていたとしても、『死の点』のように小さいものも見える。
竜族のくせに鷹とかツッコんじゃダメ。

『魔銃（仮）』

ライフルのような形をしており、スコープに『直死の魔眼』の力が備わっており、覗けば者（物）の死の点が見えるようになる。
さらにこの『直死の魔眼』はありとあらゆる者（物）の死の点が見える。
前までは不老不死に対しては『死の点』は見えなかったが、悪魔襲来事件により死を理解し、現在では不老不死の『死の点』も見える。

・射撃：Ｓ＋＋
現在ならば五十キロ以上離れていたとしても、九割以上正確に『死の点』をぶち抜ける。

『強さ』

筋力：Ａ↓Ｓ（ＥＸ）
耐久：Ｃ＋↓Ａ（Ｓ＋）
俊敏：Ｂ＋↓Ｓ（ＥＸ）
魔力：Ｄ↓Ｂ
氣　：Ａ↓Ｓ＋＋

（）↑は枷を外した場合の強さ。

『備考』

現在の強さは枷を外せば原作の『ジャック・ラカン』よりは確実に強い。
ただ、当初の目標にはまだまだ到達していない。
現在の枷の総重量は百キロ。
悪魔襲来の事件以来、金さえ貰えれば殺しだろうが護衛だろうが何でも引き受ける『何でも屋』のような職に就いている。
悪魔襲来事件以降、死したバルドの意志を継いでかは不明だが、よくタバコを吸うようになった。
魔法使いを見ると殺人衝動に駆られるようになった。

『一言』

シキ
「『実は俺、ポニーテール萌なんだ』……いや、どちらかと言えばツインテ派かな？　つかなんだ、この台本？」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：ユーリ・アスタロト

身長：１６２ｃｍ→１６３．５ｃｍ
体重：――ｋｇ
一人称：僕→僕
容姿：わずかに褐色に染まった肌に赤色の肩で切りそろえられた髪。目は茶色
→腰ほどまである髪をそのままにしている。他は変化なし。
参考は『真・恋姫†無双』の劉備。
性格：引っ込み思案ではっきりと物をいうことが出来ない。
ドジっ子でブラコン。
→はっきりと物を言えるようにはなったが、ドジっ子とブラコンはそのまま。
年齢：人間でいうならば十七歳、竜族からすればだいたい十くらい。

『能力』

・竜化：Ａ
自らの体を竜に変化させることが出来る。
ただ制限時間が短いためにランクが下がっている。

・シェリル流剣技：Ａ
シェリル仕込みの我流の剣技。
現在はそんじょそこらの魔法使いには負けない程度。

筋力：Ｄ
耐久：Ｃ
俊敏：Ｃ
魔力：Ｂ
氣　：Ｃ

『備考』

アスタロト一家の一人娘。
現在は父であるバルドが死したために、義理の兄であるシキのみが家族。
シェリルの手引きによりアリアドネー魔法学院に入学する。
過度のブラコン。

『一言』

ユーリ
「『ただの人間には興味ありま（以下省略）』な、長いよ、コレ～……」

◆◆◆◆◆

名前：シェリル・アリウス
身長：１７９ｃｍ
体重：――ｋｇ
一人称：私
容姿：腰ほどまである黒髪をポニーテールにまとめている。
二章が始まっても変化なし。
参考は『とある魔術の禁書目録』の『神裂火織（ねーちん）』。
性格：どんな物事においても真面目である。
几帳面で曲がったことが嫌い。
色恋沙汰には縁がなかったらしく、そう言うのに対しては非常に初な反応をする。

『能力（スキル）』

・我流剣術：Ｓ＋＋
自らに出来る技を極限まで引き上げた状態の剣術。
我流であるために自分のための剣術。

・秘剣・燕返し：ＥＸ
某聖杯戦争に参加していたアサシンと全く同じ技。
剣術の修業中に完成した偶然の産物。

『強さ』

筋力：ＥＸ
耐久：Ａ＋
俊敏：Ｓ
魔力：Ｓ＋
氣　：Ｓ

『備考』

剣術から何から何まで近衛詠春を凌駕している。
シキには追い抜かれてしまったものの、その強さはジャック・ラカンを上回る。
アリアドネー騎士団のお偉いさんで、かなり有名だったりする。
現在恋人募集中である。

『一言』

シェリル
「『にょろ～ん♪』……何ですか、この台本は……」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：バルド・アスタロト
身長：２０３ｃｍ
体重：８９ｋｇ
一人称：俺
容姿：赤色の髪を短く切りそろえて、肌の色はユーリよりわずかに褐色。
たつみーとかよりは褐色ではない。
性格：大雑把で脳天気。
なんでも気合いで済ませてしまうところがあり、原作の筋肉達磨とかなり似ている。
ただ実力は天と地の差。

『能力』

・完全竜化：ＥＸ
自らの身体を完全に竜の姿に戻し、本来の力を解放する。
その力は計り知れない。

・限界突破：ＥＸ
人間や悪魔、竜人はこの小説内では現実と同じように、本来の力の数％しか普段は力を出してない。
だがバルドは限界突破を使うことにより１００％の力を使うことが出来る。

『強さ』

筋力：ＥＸ→（？）
耐久：Ｓ＋＋→（？）
俊敏：ＥＸ（？）

魔力：Ｓ＋（？）
氣　：ＥＸ（？）
（）↑の中は全ての力を解放したとき。
測定不可能なほどに強い。

『備考』

アスタロト一家の大黒柱。
悪魔襲来事件で村を悪魔から守り死亡。
ただ最期にバルドが使った技には色々と不明な点がある。
第二章でまだ出番あり。

『一言』

「ふもっふ！！　……俺こんな爽やかじゃねえし」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：ゲイル・ラインハルト
身長：１７０ｃｍ
体重：６３ｋｇ
一人称：俺様
容姿：面倒なので典型的な悪役を想像してください。
性格：唯我独尊、極悪非道、我が儘。
『強さ』と『能力』は省きます。
もう出番はないので（笑）

『備考』

拳闘大会にてシキに負けた負け犬。

その腹いせにシキの村を悪魔に襲わせたのだが、拳闘大会にてユーリをさらってシキにボコボコにされての腹いせなので、完全に逆恨み。

悪魔襲来事件の時にシキに殴り殺された。

出番はもうありません（笑）

『一言』はあげません。

◆◆◆◆◆

『裏話』

当初の予定ではユーリは男の娘でシキの弟にする予定でした。

さらに言えばシキも女にする予定でしたが、結局は男に……。

本編ではシキの口からあえて自分が男だと言うことを発言させてないので、今からでも実は修正可能。

女の方が良いのでしたら意見ください（笑）

第二章も何だか長くなりそうです……。

第二章も完全オリジナルで原作キャラが出ません……。

第二章ではオリキャラは少し出ますが、それ以降は一切でないのでご了承ください……。

では感想待ってます！！

主人公設定＋α（後書き）

教えて！！　バル八（はち）先生ーっ！！

バル八
「はい、本編で死んじまったので、しばらくはこっちにでます。
では最初はペンネーム『アヴァンシア』さんからのお便りです。
『直死の魔眼』は厳密には魔眼ではないので銃には付けられないと思います。そこのところどうでしょうか？

はい、お答えします。

うちのバカ息子は一回死んでるので、脳は死を理解できてます。
だが『直死の魔眼』は開眼しなかったので使えない。
だから銃のスコープを『直死の魔眼』の眼の代わりにしました。
よってスコープを覗いても、シキ以外にはただのスコープにしか見えません

分かりましたか？
では『アヴァンシア』さん。貴重なご意見ありがとうございました」

第九撃『時間とは人を大きく変える。それは誰にでも言える』（前書き）

地震の影響で更新が一日遅れました……。

ではどうぞ！！

第九撃『時間とは人を大きく変える。それは誰にでも言える』

side　シキ

「これが依頼料です」

「……確かに承った」

‘私’はそう言いながら目の前の男から依頼の契約書と依頼の前払いされるわずかな依頼料を受け取る。依頼と言うのは私が引き受けている暗殺・護衛・運搬などを纏めて言うのだが、簡単に纏めれば『何でも屋』と言うところだろう。

私はこのようなことを我が師であり父であるバルド・アスタロトが死んでから始め、すでに五年の月日が流れた。あの五年前の事件より私はいろいろと変わった。誰とも関わりを持たずに、いつも一人で単独行動をしている。

こういった仕事柄についているため、功績を立てれば長期で私を雇おうとする輩が居るが、生憎私は繋がりを作りたくないものでな。なるべく長期での依頼を受けないようにしている。ただ依頼料金が破格値であれば付かないこともないが、基本的に長期で受けることはない。

そして私はこの五年間で自らの力を磨きに磨き上げた。だが未だに私は弱い。今抱えている数少ない大切なものでさえ守りきることが出来ないほどに、私の力は微々たるものだ。そんな私が繋がりを持ったとしても守りきれず、五年前のような気持ちを味わう羽目になる。故に私は誰とも繋がりを持たない。

「ですがこんな危険な依頼にこの程度でよろしいのですか……？」

「問題ない。コレだけで十分だ」

私は男の言葉に短く一言だけ答える。この男より受けた依頼はこの村の近隣に現れるというドラゴンを退治してほしいという依頼だ。この程度ならばこの男も心配などしないのだろうが、現れるというドラゴンの数が、十数体に及ぶほどであるから心配しているのだろう。

いくら熟練の者とはいえ一匹のドラゴンにもある程度手こずると言うのにも関わらず、そんなものが十数体も居ればたまったものではないだろう。そんな難易度にすればＳＳランク以上に及ぶ依頼にもかかわらず、私が受け取った依頼金は日本円に換算するならば、五万円ほどだ。

故にこの男も後ろめたいのだろうな。だがこの村は明らかに寂れている。コレ以上の依頼金を受け取るわけにもいくまい。そう思った私はイスから立ち上がり、男の家をでる。そして私は契約書と一緒に貰ったドラゴンが現れるおおよその位置を記した地図を頼りに、ドラゴンが現れるという場所に向かった。

◆　◆　◆　◆

私が指定された荒野にたどり着くと、そこにはちょうど良くドラゴンの群れが集まっていた。私はドラゴンの群れから五キロほど離れた位置から、岩場に身を隠してドラゴンの数を数える。一、二、三……十六体か。

報告にあった最大数では十七体と記載されてはいるが、一体ぐらい少なかろうが多かろうがさして違いはないだろう。ただ後に再び出向けと依頼されるのは適わんし、ここら一帯に近づけばどのようになるかを示すために少々派手にやらせてもらうとしよう。

もし私に同じような種族同士で殺し合うのは辛くないのか、などと訪ねる気があるならばやめた方が良い。私は仕事のためであるならばあの二人意外ならば誰だろうと殺すし、敵に回す。例え世界を敵に回すとなろうとも、あの二人を守りきれるというならば、どうという事はない。

「ふっ……我ながら下らないことを考えたな」

私は自分の考えに対して一瞬だけ笑みをこぼすが、すぐに気を引き締める。そしてスコープを通して一体のドラゴンの姿を捉える。距離は五キロほどあるが、この程度であれば風向きなどを考えずとも、『死の点』を貫くなどどうと言うことはないな。

私はそんなことを思いながら改めてドラゴンの『死の点』に狙いを定めると、銃の引き金を引く。音もなく銃口から放たれた蒼色の魔力弾は真っ直ぐにドラゴンに向かっていき、五キロの距離を十秒ほどで埋め尽くし、そのまま『死の点』を貫いた。すると『死の点』を貫かれたそのドラゴンは糸の切れた人形のように崩れ落ちて、動かなくなった。

「あと十五体……すぐに済ませるか」

私は誰に言うでもなく、ただ虚空に向かってそう呟いたあとに他のドラゴンの『死の点』に狙いを定める。様子を見る限り、まだあちらは私の存在には気づいていないようだな。気づかれたとしても

大差はないのだが、気づかれればこちらに接近され、‘少々’狙いがつけにくくなる。

やはり気づかれる前に終わらせた方が良いかもしれぬな。それにこの程度の敵に場所が気づかれる程度では、私も鍛錬が少ないと反省するしかない。そう思った私は残っているドラゴンの『死の点』に向かって魔力弾を連続で放つ。

銃から放たれた魔力弾は撃ち漏らすこともなく全弾がドラゴンの『死の点』に吸い込まれる。もちろん『死の点』を貫いたのだから、今更生死の確認をとる必要はない。ただ私の死角にドラゴンが潜んでいるかもしれないからな。そう思った私はドラゴンの死体がある場所まで瞬動で移動した後に周りを見渡す。

「……大丈夫だな」

周りにはいくつか気配があったが、特に敵意を私に向けているとかではないので、無視するとしよう。私としても無駄な殺生は避けたいものでな。それに最近ここにドラゴンが現れたことにより、ここらで取れる物資の入手が困難になってきている。確か重複して受けている依頼の中に、ここらの薬草を調達してほしいという依頼があったはずだな。

そう思った私は何枚か契約書を取り出す。やはり受けていたようだな。二度手間をするのも面倒だ、採取しておくとしよう。そう思った私は近くの岩場にしゃがみこむ。ふむ、やはりこういった見にくいところに生えているようだな。だが依頼ではもう少し料が必要だったはずだな。それを確認した私は、ここにはもう薬草は無かったために歩き出した。

そしてしばらく歩いているのだが、後ろから誰かにつけられているな。隠密にやっているならば私もいくらか警戒したのだが、ピタピタと足音を立てておりさらには気配を隠す気もないようだ。

この場合自分の実力に自信がある者と、何かに分かれるのだが実力に自信がある者でも私の後を付けるならば足音は無くすだろう。つまりは必然的に後者になる。そんなコトを私は思いながら振り返る。

するとそこには服と言って良いか分からないほどにボロボロになった布を着用し、ボサボサのある程度長い髪。そしてまだまだ幼さの残る顔立ちをした少女が居た。ただ種族は何なのかは見た目だけでは判断しかねるな。

「どうしたんだ？」

私は昔の口調をしながら、距離を置きつつも怖がらせないように話しかける。

「たべものちょうだい！！」

女の子は満面の笑みを私に向けながら両手を伸ばしながら私にそう言ってきた。ただこの行動と彼女の服装を見てわかったことがいくつかある。まずはこの子は戦争でかは分からぬが、親を失って一人で生活をしていると言うこと。

もう一つは他人を疑うと言うことを全く知らない、と言うことだ。見ず知らずの人物に笑みを向けながらあのようなセリフを言えるのは、疑うことを知らない故の行動だろう。

「悪いけど、食べ物は持ってないんだ。村に行けば食べれるから、一緒にくるか？」

「うん！！」

全く……一体私は何をやっているんだか……。これまで悉く繋がりを切り捨ててきたというのにこんなにも簡単に一緒に行動するか、などといってしまったんだか……。やはりあの笑顔がユーリに似ていたからだろうか……。

◆　◆　◆　◆　◆

「依頼は完了した」

「もうですか……！？」

あれから数十分後に私は依頼主の男のところに戻り、依頼が終わったことを報告していた。本来であれば何日もかかるはずの依頼をものの数時間で終わらせてきたとなれば、疑いたくなる気持ちも分からなくもない。

「信じられないと言うならば、ドラゴン十六体の死骸を見せよう。それで文句はあるまい」

「い、いえ、大丈夫ですよ。ところで、その女の子は……？」

やはり聞いてきたか……。いや、訊かない方がおかしいかもしれぬな。なぜなら私が拾ってきた女の子が私の腕に抱きつきながら、今までの会話をしてきたのだからな。行くときは、一人。帰りは子供連れとなれば訊きたくもなるだろう。

「拾った、としか言いようは無いな」

「ひ、拾った……？　ドラゴンが居た場所でですか？」

「それ以外に何がある」

信じられないのも分かるが、考えればすぐに分かるようなことを一々詮索してもらいたくはないな。少しは頭をひねることを覚えろ。

「この辺りに飲食店はあるか？」

「斜め向かいにありますが……」

「そうか。ならば、またあとで来る」

私は男にそういいながら立ち上がる。今はこの女の子の空腹を動にかせねば離れてくれそうにも無いものでな。やれやれ、何故私はこうも子供に弱いんだ……。そんなコトを思いながら男に言われた斜め向かいの飲食店に向かう。

中にはいるが、そこは寂れており盛況している街などから比べればドコカの小屋程度にしか見えない。だが女の子は気にしている様子はない。とりあえずここで済ませよう。そして私は空いている席に座り、その向かいに女の子も座る。メニューを取り、中を見るのだがなかなかに高いな……。

「じゃあ、あたしはコレとコレと……」

「……」

その小さな身体のどこにそれだけの量の食事をため込む気だ？
それにここの食事代はなかなかに高いのだからもう少し控えて……
もらえそうにはないな。相手はまだ子供だからな。そんなコトを考
えている間にも注文は続いていたようで、それを聞いた店員が私に
言ってきた。

「お客様……あの、お代の方は大丈夫なのでしょうか……？」

「……大丈夫だ」

女の子が頼んだ量を見てみたのだが、明らかに契約金と報酬額を
合わせた以上に頼んで居るみたいだな……。やれやれ、今回の仕事
は無駄骨と言うことで終わりそうだな。

とりあえず注文を終えたところで私は女の子に訊ねなければなら
ないことを訊ねるか。

「俺は黒神織。見ての通り傭兵崩れだ。君の名前は？」

私が依頼を受けるときなどはなるべく『アスタロト』の姓は使わ
ないようにしている。理由は大したことはないのだが、本名でこん
な仕事をしたくないのでね。

「えっとねー。あたしはミカエル！　ミカってよんでね！！」

ミカエル……まさか神の名前が付けられているとは思わなかった
が、神などとは関係ないのだろう。そもそも、この世界で私が以前
にいた世界と同じように、神に名前がついてるとは思えないしな。

「ミカか、良い名前だな。じゃあ、ミカはなんであんなところにいたんだ？」

「うーんと……わかんない！！」

笑顔で言われて思わずガクッとなってしまう私。あんなところに居たのも不思議ではあるが、何故自分があのような場所に居たかも分からないとは、何とも奇妙な話だ。コレでも私は人の心理を見抜くのが得意なのだが、ミカエルは嘘をついてるようには見えないな。

「まあ、いいや。帰る家はあるのか？」

「ないよ？　あたしはずっとひとりだったもん」

「……」

何事もないようにミカエル、いや、ミカはそう言ってはいるがそれは普通では考えられないようなことだ。家族もなく、天涯孤独で過ごしてきたにも関わらず何故このように無垢でいれるのだ……？

「どうしたの？　おにいちゃん？」

「いや、何でもない」

とりあえず今は空腹を満たすことだけを考えよう。ミカのコトはあとでから考えれば問題はない。

◆　◆　◆　◆　◆

「この子の面倒を、ですか……？」

「そうだ。この子の面倒を見てくれるならば契約時の契約金も返し、報酬金も受け取らぬ」

私とミカが食事を終えてからすぐに私は依頼主の男の家に来ていた。食事代の方だが、契約金と報酬金を合わせたとしても優に足りなかった。ただ、それを自腹で払ったために私の懐はかなりの大打撃を受けてしまったがな。

「こちらとしては構わないのですが……」

男は気まずそうに私の右手の方に視線を向ける。そこには満面の笑みを浮かべているミカが私の手をしっかりと握っている姿が映っている。それを見た私も久しぶりにため息をついてしまう。私は膝をまげてミカの視線に合わせながら言う。

「ミカ、今日からここが君の居場所なんだ。あの人がミカを引き取ってくれる」

「やーだー！！　あたしはシキといっしょがいいのーっ！！」

頑として私と一緒にくる気で居るミカ何だが、困ったな……。もう少し年齢が上ならば無理矢理にでも置いていくのだが、相手はまだまだ幼さの残した子供。理由を説明せねば無理か……。

「いや、だから……な？　俺と一緒に来るといろいろと危ないんだ」

「やだやだーっ！！　あたしはシキとずっといっしょにいるのーっ！！」

ずっと一緒に居るって……。参ったな。いくら口調を変えてなるべく人を突き放したとしても素直の子供の前では本来の性格の根っこが出てしまうものだ。どうやら私は根っこの部分からお人好しのようだ。

しかしミカを私と一緒に連れて行くことは絶対に出来ぬ。私の受ける依頼はどれもがSランク以上。いつでも死と隣り合わせの私の日常に子供を巻き込むわけにはいかない。

「どうして俺なんだ？　他にも優しい人はたくさん居るだろ？」

「おにいちゃんよりやさしいひとなんかいないよー。それに……」

ミカはそう言うと私に顔を近づけて耳打ちをしてきた。

「貴方なら、きっと私を守りきれます」

そう言ったミカからは今まで感じ取ることが出来なかった不思議な力を感じ取ることが出来た。その力は魔力でもなければ氣でもない。魔力を第一の力、氣を第二の力をするならばミカから感じた力は第三の力。

良くは分からないがミカは普通の子供ではないことを瞬時に理解することが出来た。第三の力を感じたときに思わず銃を抜きそうになってしまったのは秘密にしておこう。

「はぁ……。済まない、先ほどの話は無かったことにする。あぁ、報酬金は受け取らないことにするよ。今更もらうなどとは言わぬから安心しろ」

「そんな、悪いですよ」

「私に金を渡せるならこの村の治安を少しでも良くできるように励め」

私はそう言うとミカを連れて依頼主の男の家をあとにした。

◆　◆　◆　◆　◆

とりあえず今日明日辺りはこの村でいろいろと支度を済ませることにしよう。まあ、支度と言っても私ではなくミカの方ではあるのだがな。私の支度などする事がないからな。

ただミカの場合は身だしなみを整える必要があるな。伸びきったボサボサの髪に、もはやぼろ切れとしか言えぬ衣服。いくら寂れているとはいえ、衣服くらいは揃えられるだろう。

「たかいたか～い！！」

「あんまりはしゃぐと落ちるぞー」

現在、私はミカを肩車して衣服を売っている店に向かっている。何故肩車をしているかと問われれば、ミカがしてほしいと言ってきたからだ。あんな泣きそうな顔をされて頼まれれば断るわけにもいくまい。

……おい、どこかで私をロリコンだと思った奴が居るな。ちょっとこっちに出向いてきてもらおうか。私が直々に『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆』をしてやろうではないか……。まあ、冗談だがな。と

りあえずこんな光景を見られればいつもの‘私’と今の‘俺’じゃ人違いだと思うはずだ。

「おにいちゃん！　あそこにおみせあるよ！」

「あぁ、見えてるよ」

私はそういいながらミカが言った店の中に入っていく。ふむ、かなり独創性に溢れてはいるが、センスが悪いとは言えぬな。あまり繁盛してはいないようだがな。

「ミカ、好きなの選んできて良いぞ」

「ほんとに！？　じゃあ待っててね！！」

ミカはそう言うと器用に私から降りて服を探しに向かっていってしまった。やれやれ、子供が元気なのは良いが少々現金ではないか？

それにしてもさっきの一瞬だけであったがあのミカは何だったんだ……？　今のはしゃいでいるミカをみる限り、何か特別な力を持っているようにも見えぬし、もしかすれば私の見間違いもとい、感じ間違いかもしれぬ。

だがそれをふまえたとしたら、ミカを私なら守ってくれると言う言葉、あの言葉の説明がつかなくなる。全く、私も厄介な拾いものをしてしまったな。

「おにいちゃん！　あたしコレがいいー！！」

「おう。……マジか」

そんなコトを考えているとミカが服を持って俺のところにやってきたのだが、ミカの持っている服にプリントされていたのは何やら良く分からぬバケモノがプリントされていた。分かりやすく説明するのであれば、趣味が悪いの一言に尽きる。

「そ、それが気に入ったのか？」

「うん！」

……そのような満面の笑みで言われてしまったならば、買わぬ訳にもいかぬか……。と言うことで私は結局、良く分からぬバケモノがプリントされている服を買う羽目になったのだった。

第十撃『授業参観に行こう！！……何故私が行かねばならないんだ』

拝啓、シキ兄

最近は寒さが抜けてきて、何だか暖かくなってきました。
今、シキ兄が居る場所ではどうかは分かりませんが、僕が通っているアリアドネー魔法学院では、暖かくなり薄い制服の着用になりました。
でも僕はこの薄い制服があまり好きではありません。
何というか……胸がとても苦しいからです。
それに少々、知り合いの男の子達にこの姿で会うと胸ばかり見られるのですが、どうしてでしょうか？　シキ兄は分かりますか？
魔法学院は女子校ですから、男の子と言うのは僕の友達の友達です。
シキ兄は魔法を嫌っていましたが、魔法学院での生活はなかなか楽しいです。友達もたくさん出来ましたし、シェリルさんからの剣術修業も順調です。
何だか、話がそれてきましたね。本当はシキ兄に話したいことはたくさんあるのですが、今は目的だけ簡単に説明させてもらいます。
今度、アリアドネー魔法学院で授業参観、と言うものがあるのですがシキ兄に来てもらいたくて手紙を出しました。
嫌なら来なくても大丈夫ですが、僕は久しぶりにシキ兄を見たいので来てほしいです。
ではシキ兄が来てくれることを楽しみにしてます。

ユーリ・アスタロトより

◆　◆　◆　◆　◆

side　シキ

私がミカと出会ってからすでに一週間の時が過ぎようとしていた。すでに私とミカはあの村から旅立ち、次の街もしくは村に向けて歩いていた。しかし今は夜、ミカが居なければ夜通しでも行動しても構わないのだが、さすがに子供に無理をさせるわけにもいくまい。

街にも村にも着いていないために、森の中での野宿になってはいるが致し方ないだろう。今は近くでとった食材で夕飯の仕込みをしているところだ。そんな私の元に一通の手紙が届いた。

ふむ、そう言えば五年前からユーリの顔は一回も見ていなかったな……。会いに行こうと思えば会いに行けるのだが、魔法使い共（まあ、見習いだが……）が居るために行きたくなかったのだ。間違って殺してしまわないとも言えないからな。

それにしても授業参観か……。私が元居た世界のようなことがこの世界でもあり得るのだな。まあ、そのようなことはどうでも良いのだが、授業参観に来てほしいか……。他の誰でもないユーリの頼みとあれば行かないわけにもいかないが、魔法使いの巣窟に潜入か……。

うむ、殺人衝動を押さえ込めるかどうかが問題になってくるな……。こんな職業柄についているせいで魔法使い共がどれだけ汚いことをやっているかが嫌でも分かってくる。そのために前から魔法使いに対して殺人衝動を抱いていたのだが、最近はそれがかなりヒドくなっている。

それなのに魔法学院になど行ってしまったら死体の山の出来上がりだな……。さて、これはいったいどうすれば良いものか……。そ

んなコトを考えているとミカが私の膝の上にちょこんと座りながら言ってきた。

「そんなむつかしいかおしてどうしたの？　おにいちゃん？」

「ん？　いや、ちょっとな」

ちょこんと座ってきたミカの頭を撫でながらそう言う。そう言えば行くとしたならばミカも一緒に行くことなるのだったな。ユーリにミカの事も紹介せねばならないな。

「ひとりでなやんじゃダメなんだよ？」

「はいはい、ミカは優しいな」

「えへへ……」

全く、こんな幼い子供にまで心配されるようでは私もまだまだ未熟者だな。にしてもどうしたものか……確か魔法学院にはシェリルも居たはずだな。だからと言ってどうという事はないが……。

「……考えるのはあとにするか。よし、そろそろ食べれるぞ」

「わーい！！　おにいちゃん！！　あたしおおもり！！」

「……」

その明らかに普通の丼の三倍以上ある丼に大盛りにしろって……どんだけ食べる気なんだ、お前は……。まあ、今に始まったことでもないが、何回見てもスゴいとしか言いようがないな……。

◆　◆　◆　◆　◆

夜が明け、相変わらず私はミカを肩車して移動をしている。本当に子供は無邪気で私がどんなに高いところを移動していても喜んでいるだけで、怖がったりをする素振りを全く見せない。逆にスゴくはしゃいでいる。

そのために何回か私の首から落ちたのだが、相変わらず懲りてはいないようだ。もちろん完全に落下する前にキャッチしたがな。ん？　落ちたのに妙に冷静だな？　だと。人間（私は竜人だが）、慣れてしまえば多少のことでは驚かなくなるものだ。

アリアドネー魔法学院まではあと少しで到着するのだが、未だに魔法使いに対する殺人衝動をどうするかは思いついていない。いっそのこと目隠しでもしてみようか？　いや、そんな変な姿で授業参観に参加したならばユーリに迷惑がかかってしまう……。く、くそ、私はどうすれば良いのだ！？

「わーっ！！　スゴーっい！！」

「おー、ホントにすげーな」

おっと、思わず本口調が出ちまったな。おっほん、思わず本口調で話してしまったが、それほどまでに私たちがやってきた場所はすごかった。今までに比べるべくもなく豪華な造りをしており、オスティア並の都市だな。

魔法学術都市アリアドネーと呼ばれるだけあって魔力溜まりが多いな。コレだけの魔力溜まりがあるのだから殺人衝動が起こっても

不思議ではないのだが、不思議と殺人衝動が起こらないな。

まあいい。今は起こらないに越したことはないからな。さて、授業参観は今日の午後から行われると手紙には書いてあったが、思いの外早く到着してしまったな。魔法学院までの道のりは手紙に同封されていた地図に記載されていたから迷うことはない。

「さて、時間までどのように時間を潰したものか……」

「おにいちゃん、おにいちゃん」

「ん？　どうしたミカ」

魔法学術都市アリアドネーを見渡しながら歩いていると、未だに肩車をしているミカが私の頭をポンポンと叩きながら言ってきた。

「あそこでながいけんもったおねえさんが、おにいちゃんのことよんでるよ？」

「長い剣？　お姉さん？　あぁ、なるほど」

ミカが指さした方向を見てみればそこには私を見て手招きをしている女性が居た。私が知っている女性の中で長い剣いや、長い刀を持っている女性など一人しか知らない。そして私はその女性に近づいていく。

「久しぶりだな、シェリル」

そう、私が知っている長い刀を持っている女性とはシェリルしかいない。ただミカはお姉さんと言ってはいるが、シェリルも長命種

であるために若く見えるが実際は婆さんである事を覚え――。

「シキ君、久しぶりに会いましたが、変なことは考えませんでしたか？」

相変わらず固有スキル、『地の文読み』は健在のようだなシェリル。まさか五年ぶりの再会でいきなり喉元に刀を突きつけられるなど思いもしなかったぞ。そんなコトを思いながら私は刀を払う。

「久しぶりの再会でそれはねェんじゃねェの？」

「私と話すときは昔と同じようにしてくれるのですね」

「当たり前ェだ。俺がこんな風に話す奴なんかシェリルとユーリと……ミカくれェか？」

私はそう言いながら肩車をしているミカをみる。するとさっきまでいつもの凛とした表情だったシェリルが鬼気迫るような形相で、私の肩をがっちりと掴みながら言ってきた。

「シキ君……」

「な、なんでせう？」

ヤバい……。いくら五年前からいくらか強くなったとはいえ、このシェリルの異常なまでの威圧感の前では無意味だ。そしてシェリル、お前の顔を鏡で見せてやりたいな。おそらく自分でもビックリするような顔をしているぞ。

「いつの間に結婚したのですか！？」

「……は？」

何故いきなり結婚したという話になるのだ？　ミカが肩車してるからとはいえどこから結婚の話に……あぁ、なるほど、そう言うことか。ようするにミカが私が結婚して結婚相手との間に生まれた子供と勘違いしたと言うわけか。この発言でシェリルが未だに結婚出来てないことを暴露したようなものだが、本人は気づいてないようだから、私も気づかなかったことにしよう。

「結婚はしてねェよ。こいつは拾ったんだ。名前はミカエル、まあ、ミカって呼んでくれれば良いよ」

「あたしはミカ！　よろしくね、おねえさん！」

「お、おねえさん……！？」

満面の笑みを浮かべながらシェリルにお姉さんと言うミカ。そしてお姉さんと言われて異常なまでに感激しているシェリル。だからその行動が自分の歳を表してるようなものだと……いや、この際言わないでおこう。それが私の身のためである。

「感激しているとこ悪いんだけど、俺は結婚する気なんざさらさらねェよ。可能性があるとしたらユーリ？」

「お姉さん……はっ！！　き、兄妹で結婚など出来るはず無いでしょう！！」

シェリルめ、いつまで感激に浸っている気だ。私が言葉を発したにも関わらずいつまでもお姉さんの言葉を引きずりやがって……。

だいたい私とユーリは義理だからやろうと思えば結婚は可能……なはずだ。やる気はないが。

それにシェリルは同様をまるで隠し切れていない。ふむ、このまま追い討ちをかけてみるのも悪くないやもしれぬな。

「ユーリがダメなら、シェリルかな？」

「わ、私！？／／／／／／」

おー、良い感じに顔を赤くしてるなシェリルよ。……何だか無性にいじめたくなってきたのだが、このままいじめても良いだろうか……。あとでからの仕打ちが恐ろしいが、そうなったらそうなったで受け流すか。

「そうだ、シェリルだ。シェリルは才色兼備の出来る女だ。多分、男共は高嶺の花すぎて声をかけられなかったんだろうよ」

「才色兼備……／／／／／／／　ほ、誉めても何も出ませんよ？／／／／／／」

どんだけ初々しい反応なんだよ。アンタ、ホントに私より年上なのか？　明らかに私と同年代かそれ以下の反応にしか見えぬのだが、どうしたものか……。さすがにここまで初々しい輩に冗談でした、などと言えないな。

「まあ、今言ったのは俺の感想だけど、シェリルにはいつかきっと良いパートナーが見つかるさ」

「……そうだと良いんですが」

そう言ったときのシェリルの表情はどこか悲しげでもあり、寂しげでもあるように私は見えた。思い人でも居たのだろうか？

「そ、そう言えば、シキ君はユーリさんの授業参観に来たのですよね？」

「まあな。時間はまだまだあるからどっかで時間でもつぶそうと思ってたんだ」

「……やはり、魔法使いが居る場所には居きづらいですか……？」

シェリルは不安げな表情を私に向けながらそういってくる。直接会ってはいないとは言え、シェリルとユーリとは度々手紙を交換したりしている。それで私の魔法使いに対する殺人衝動のコトを教えたから、シェリルはそのことを心配してるのだろう。

「なんでかは分かんねェけど、今は大丈夫だ」

おそらく、このまま魔法学院に行ったとしても殺人衝動は起こらないだろうな。もしかすればだがユーリの友達、母校であることから殺人衝動が和らいでいるのかもしれんな。

「では今から向かいますか？　魔法学院には食堂もありますし、昼食もそこでとれます」

「いや、部外者がそこで食ってたらおかしいだろ」

「問題ありません。私が居るのですから」

なるほど……確かにシェリルは魔法学院の責任者、しかもかなり最高権力を持っている人物なのだから、そのシェリルと一緒にいる私は不審がられこそするが、疑われるなどということはないだろう。ふむ、こう思うと随分と偉い人物と親しい仲であったのだな。

「おねえさん、まほーがくいんって、ごはんいっぱいたべれるの？」

「えぇ、もちろんです」

「やったーっ！！」

飯がたくさん食べれるという事で喜ぶミカと、再びお姉さんと呼ばれて内心ではかなり喜んでいるシェリル。やっぱり長命種の歳ってのはぱっと見で分かるようなものではないな。私も人間でいうならば成人してはいるが、まだ中高生位にしか見えぬからな。

「ミカ、シェリルはこう見えて実は――――」

「何を言ってるんですか？」

……だからそうやってすぐに人の首に刀を突きつけるのはやめろ、シェリル。こんなんでもお前は有名人であろう、と私は思いながらシェリルと共に魔法学院に向かうのだった。

◆　◆　◆　◆　◆

「あの……ホントにミカさんは子供ですか……？」

「見りゃ分かるだろ。子供だ」

「ミカはこどもじゃないよー」

まあ、シェリルがそういうのも仕方がない。なんせ、食堂でミカが食べた量は多く食べる私の約三倍ほどの量。それでも腹八分目だと言うのだから末恐ろしい。将来は大食い番組にでも出る気ではないのか？　出たら平気でお代わりを求めそうだがな。

それに食堂に居るときは少々視線が私たちに集まって不愉快きわまりなかったな。よくよく考えてみれば魔法学院とはいえ、ここは女子校。そこに自分達とほとんど年齢が違わないように見える男の私が居たら、嫌でも注目されてしまうだろう。

極めつけは私と一緒にシェリルとミカだ。端から見れば私とシェリルは夫婦関係で、ミカはその子供に見えてしまう。しかも有名人であるシェリルと結婚している疑惑があるならば、注目されないわけがない。おまけでミカの大食いも注目れていたかもな。

で、現在俺たちは魔法学院に内備されている図書室に居る。まあ、図書室と言っても図書室って呼べるほどの小ささではない。その大きさは屋敷ほどの大きさだ。しかもその量は世界中の本を集めたんじゃないのか、と言うほどの多さだ。

「図書室に来て何をするのですか？」

「図書室来たら調べ物とかしかすることねェだろ。暇だからここで時間潰すんだよ。ミカの面倒見ててくれ」

「分かりました。時間になったら呼びますので、それまではゆっくりしててください」

「あいよ」

私はシェリルにそう答えると歴史の書物が揃えられてある場所に向かう。私がいた世界ではこの世界はマンガの世界でしかなかった。だが今はこのマンガの世界が私が生きていく世界になっている。

そのためにこの世界にどういう歴史があったかが気になったものでね。このような場所に来たのだからそれを確かめようと思ったのだ。そんなコトを思いながら、歴史の書物がある場所に向かう。

――ドン

「「……」」

そして書物が並んでいる棚を曲がろうとしたときに誰かとぶつかってしまった。この時に『キャッ!?』とか言って転んでくれればラブコメ的な展開になったかもしれんが、生憎とぶつかってきた人物は私の胸に顔を沈めてジッとしていた、しかも無言と来た。するとその人物は何事もなかったかのように、私から一歩遠ざかる。

「大丈夫かね?」

「……（コクン）」

ぶつかってきたのはどうやら少女だったようで、私の問いに一回だけ首を縦に振った。少女の容姿は薄い黄緑色の髪を肩辺りで揃え、顔立ちはかなり整っていた。制服を来ている辺り、どうやらこの学院の生徒のようだ。

ただ。眼がそうだな……説明が難しいのだが、絵で表すならば横棒に半円を書いたような現実では有り得なさそうな眼をしていた。まあ、現在進行形で起こっているのだから有り得ない、と言うことは有り得ないのだろう。

「済まなかったな。よそ見をしていた」

「……大丈夫」

少女はポツリ、と一言だけ答えると私の脇を抜けていき図書室を出て行ってしまった。出会うことはあったとしても、私には関係のないことだ。基本的に繋がりは作らない主義だからな。そんなコトを思いながら、とりあえず一番最初に目について書籍を手に取る。

「『旧文明と旧魔法』？」

私は手に取った書籍のタイトルを思わず声に出して読んでしまった。『旧文明と旧魔法』というタイトルからして昔の文明と魔法について書いてあることが理解できるな。魔法について無知（むしろ知りたくない）私でもこれは少しばかり心が惹かれるな。

そして私はそれを開いた。そして私は書物を読み始めたのだが、なかなか興味深い歴史だな。遙か昔には旧文明人と呼ばれる今とは違う独自の文化を築いていた種族が居るらしい。それを総称して旧文明人と呼ぶようだ。

旧文明人は身体能力に優れ、一般の者でさえ現代で言う上級魔法使いに匹敵するようだ。さらにその中でも『神格』と呼ばれる存在は一人で全世界を破壊できるほどの力を保有していたようだ。現代にそのような者が居たら、まず世界が滅びるだろうな。

さらには魔法の使い方までもが違うようだ。旧文明の魔法には詠唱などが存在せずに、その人物に見合った魔法が勝手に発現するらしい。そのため同じ魔法を使える人物は存在しなかった。

旧文明は現代の文明よりもずっと発達していたのだが、発達しすぎた故に反乱・内部での争いが起こった。対立した『神格』同士の戦いにより、文明は滅んでしまったようだ。ただ、その『神格』の血を引く者も現代に残っているらしい。にわかに信じがたい話ではあるが、有り得ない、というのは有り得ない。

「シキ君、そろそろ時間になりますよ」

「そうか。じゃあ行くか」

私はミカを抱き抱えているシェリルにそういったあとに『旧文明と旧魔法』の書物を棚に戻す。そのときにミカから再び不思議な力を感じたのだが、それも一瞬だけ。シェリルも別段、何かに気づいた様子はないようではあるが、勘違いだったのか……？

「どうしたの？　おにいちゃん？」

「いや、何でもない。じゃあ行こうか」

「えぇ」

そして私たちはユーリが居るという教室に向かって歩き出した。しかし、まだこのときの私はこのあとに事件が起こるなどとは思いもしていなかった。

第十撃『授業参観に行こう！！……何故私が行かねばならないんだ』（後書き）

第二章が終わったら何話か番外編をやろうと思うのですが、何が良いでしょうか？

『そんなんやってねぇで、本編進めろ！！』や『～～～が良いです！！』など意見がある方はどしどしお願いします！！

感想待ってます！！

……コラボも可能です（ボソッ）

第十一撃『五十キロマラソン開始！！私の妹は事件体質なのか……？』（前書き）

あとがきにアンケートがあります。

ではどうぞ！！

第十一撃『五十キロマラソン開始！！私の妹は事件体質なのか……？』

ｓｉｄｅ　ユーリ

今日は待ちに待った……ってほどじゃないけど、授業参観の日。
シキ兄には来てくれるように手紙を出したけど、来てくれるかな……？　シキ兄は五年前の事件から魔法使いのコトを極端に嫌っている……。

僕が魔法学院に通って魔法を学びたいって言ったときも、今までに見たことが無いくらいの、ううん、実際にあんなに怒ってるシキ兄の顔は僕は見たことがなかった……。最後は許してくれたけど、今でもあのときのシキ兄の顔は覚えてる。

あの顔は魔法使いを心の底から憎んでいる復讐者の顔でした。そんなシキ兄が来たら危ないと思うかもしれないけど、きっとシキ兄ならいつか魔法使いも認めてくれる……はず。

あとこの五年間で変わったことといえばシェリルさんから剣術を教わってることかな？　僕はシキ兄みたいな狙撃手にはなれないから、シェリルさんみたいな立派な剣士になってみたいなって思う。だって僕が前衛を勤めて、シキ兄が後衛を勤めれば最強のコンビだよ！！

……い、今はクラスでもあんまり成績は良い方じゃないけど……。で、でもでもシキ兄みたいに努力すれば強くなれるよね？

「おーッス。相変わらずのほほんとしてんなー、ユーリは」

「あっ、ティアちゃん。のほほんとしてるは余計だよ～」

そんなコトを考えていると後ろから声をかけられた。振り向けばそこには女の子にしては髪を短くしてて、ボーイッシュって言うのかな？　とにかく女の子なのに男の子みたいな女の子の『ティアレンス・バイシタル』ちゃん、通称ティアちゃんが居た。

ティアちゃんは僕が魔法学院に入学してからの最初のお友達で、今では親友の仲になってます。当時は引っ込み思案だったけど、ティアちゃんのおかげで引っ込み思案も治ったんだよね。

「のほほんとじゃなかったら、ボケッとか？」

「違うよ！　考え事してたんだよ！！」

「考え事ってどうせ愛しのシキお兄様のコトだろ？」

ティアちゃんはニヤニヤとしながら僕にそう言ってくる。うぅ…実際にシキ兄のコト考えてたから違うなんて言えないし、だからってこのままそうだよ、なんて言ったら負けた気がするし……。

「まあ、どうでも良いけどさ。そのシキお兄様って魔法使いが嫌いなんじゃなかったのか？」

「……うん」

僕はティアちゃんの言葉に頷くしかなかった。魔法使い嫌いのシキ兄が来てくれるなんて事やっぱり無いのかなぁ……。そんなコトを考えてると、何だか教室がいつにも増してざわざわしてるのに気づいた。しかも何だか緊張してたり、嬉しそうにしてる子がいっぱ

い居るよ？

「ティアちゃん、どうしてみんなざわざわしてるの？」

「ユーリはあんまり驚かないと思うけど、今日の授業参観にシェリルさんも来るらしいよ」

あっ、だからみんなこんなになってるんだ……。僕はここに来る前からシェリルさんと知り合いだったからあんまり実感わかないけど、シェリルさんってスッゴく偉い人だったんだよね……。そんな人に、稽古付けてもらってる僕もちょっと有名人気分♪

「あと、そのシェリルさんが食堂で銀髪の男と一緒にいたのがざわついてる一因でもあるよ」

「銀髪の男……？」

「あぁ。あと四、五歳くらいの子供も一緒にいたから、結婚してるんじゃないかって話だ」

「えっ……？」

シェリルさんと一緒にいる銀髪の男の人っていったらシキ兄しか思いつかないけど、シェリルさんとシキ兄が結婚……してる？　しかも四、五歳くらいの子供連れって……。結婚するなら僕に言わないはずがないし……。

というかシキ兄が僕以外の人と結婚するなんて絶対嫌だよ。それが例えシェリルさんだったとしても。……はっ！？　そう言えば僕がシキ兄と会ってない年月はだいたい五年……。や、やっぱりもう

結婚してて子供を作る行為まで……。

ふふふ……だけど僕には関係ないよ……。待っててね、シキ兄、今すぐシェリルさんの魔の手から救って上げるからね……。ドンナテヲツカッテモタスケルヨ……。

「ゆ、ユーリ？　なんか黒いオーラ出してるけど、どうしたんだ……？」

「ううん、何でもないよ」

「なら良いんだけどさ……って眼が黒いぞ！？」

ふふふ……僕はシキ兄のためだったらどこまでも黒くなれる魔性の女なんだよ、ティアちゃん……。まあ、実際に考えたらシェリルさんなんか太刀打ちは出来ないし……。

「いつになく怖いな……。おっ？　うーッス、エル」

僕がそんなコトを考えてるとティアちゃんが教室の扉の方を見ながらそう言った。僕も扉の方を見てみれば、そこには本を両腕にたくさん持っている女の子の『エル・イーグルス』ちゃんが居た。

エルちゃんはティアちゃんと比べて、と言うか無口の女の子だけど、誰よりも優しくて面白い女の子です。クールで女の子から人気があったりします。そんなエルちゃんが僕に言ってきた。

「……図書室」

「図書室？　誰か居たの？」

「……シェリルさんと銀髪の男。あと子供」

「エルも見たのか。良かったじゃんか、愛しのシキお兄様が来てたじゃんか」

シキ兄が来てくれたことはスッゴく嬉しいけど、やっぱりシェリルさんとの関係をはっきりとしないと、何だか落ち着かないね……。

マッテテネ、シキニィ……。

◆◆◆◆◆

side　シキ

――ゾクッ

「な、なんだ!?」

「どうかしましたか？」

「い、いや、今尋常でない殺気が……」

いや、有り得ないだろう……このような公共の場でみすみす殺気を垂れ流すような輩が居るはずがない。それに殺気が放たれたならばシェリルが気づくはずだが、シェリルは全く気づいた様子はない。

……待て、もしかしてギャグ補正で私にしか感じれないような殺気だとでも言うつもりか？　冗談はやめてほしいものだ。私が唯一どんなに努力しようと勝てないのは……ギャグ補正のついた相手だ。

なんせ私はギャグ補正の前ではどのような能力も無効化されてしまうと言う最悪なスキルを備えているのでな。

とりあえずギャグ補正ならば私にしか向けられることはないので、安心（？）しておこう。それよりも今は周りの視線が妙に苛立つ。確かにシェリルと一緒に歩いてはいるが、そこまで注目するようなコトではないだろう。

「おにいちゃん？　おこってるの？」

「怒ってないよ、ミカ。ちょっとイライラしてるだけさ」

「……イライラするだけならば、殺気をだだ漏れにするのはやめてください。みんなが怯えてます」

シェリルがそう言ったので周りを見渡すと、私と視線が会った者はすかさず眼を逸らしていた。なるほど、こうしてれば注目されなくなるのか……。だが公共の場でこんなコトはしたくないので、私は殺気を沈める。

「今日の授業参観って何するんだ？」

「授業参観ですか？　ちょっと待っててください」

シェリルはそう言いながら着ている上着から、何やらボロボロのメモ帳を取り出して、パラパラとめくり始めた。そして探していたページが見つかったのか、そこでめくるのを止めた。

「ユーリさんのクラスでは最初に魔法の応用講習ですね。あとは、箒を使った百キロマラソン。今日は授業参観なので、半分減らして

います」

魔法の講習の方は暇そうではあるが、どうでも良い。だが、箒の百キロマラソンだと？　そう言えば原作でもそのようなことをやっていたような気がするな……。ほとんど忘れてしまったが……。しかし半分とはいえそれでも五十キロ、長いな。

「心配しなくても中継されますよ？」

「いや、そんなコト心配してねェよ」

我が妹の勇姿を見れると言うのは嬉しい限りだが、箒から落ちたりしないか怪我したりしないか、その他諸々が異常に心配だ。今まではあまり考えてなかったが、ユーリはうまくやっているのか？

「シェリル。その百キロマラソンに俺もこっそりついて行っちゃだめか？」

「ダメです。あなたがついて行けば何をしでかすか分かりませんから」

失礼な。別に騒ぎを起こそうなどといった無粋なことを考えでいるわけではないと言うのに。ただ、妹に害をなすバカ共が居たらそれを殺やるつもり……おっと、思わず本音が。とにかく妹を守るつもりなんだが、まあ、何かあればすぐに駆けつければ問題はないだろう。

そんなコトを思っているうちに、シェリルがとある教室に入っていった。おそらく、あそこがユーリの在籍しているクラスなのだろう。とりあえず私はシェリルのあとから中に入ったのだが、物の見

事ににクラス中から注目されてしまった。

……そこまで男が中に入ってくることに違和感があるのか？　それとも何故私がシェリルと一緒にいるのかが知りたいのか？　良く分からぬが、良い気分ではないな。

「シキ兄ーっ！！」

そんなコトを考えていると、誰かがそう叫びながら私に抱きついてきた。確認せずともこの声と私の呼び方を聞けばすぐに誰だかなど判断が出来る。まあ、私にこのようなことをするのは、このクラスでは一人しか居ないがな。

「久しぶりだな、ユーリ。元気だったか？」

「うん！　シキ兄も元気だった？」

「おう。ばっちりだ」

私は笑顔でそう問いかけてきたユーリに同じように笑顔を浮かべながら答える。すると後ろにいるユーリの友達らしき二人が、と言うか一人だけだがユーリを見てニヤニヤしていた。しかももう一人はさっき図書室で会った輩ではないか……。

「あんたがユーリの愛しのシキお兄様か？　ユーリの話通りカッコいいじゃん。オレはユーリの親友のティアレンス・バイシタル。長いからティアで良いよ」

「そうか。私は黒神織。妹が世話になっている」

「？　いえいえ、世話ってほどじゃ……あるか？」

「ないよ！！　あんまりシキ兄が心配するようなこと言わないでよ！！」

どうやらユーリに対する話し方と自分に対する話し方に違和感をティアは感じたようだが、ユーリの友達ならばこのくらいでちょうどいいだろう。本当の赤の他人ならば、もっと無愛想に振る舞っているからな。

それに今の会話だけでもユーリがこの学院で、元気に過ごしていることが分かっただけで十分だからな。私は楽しそうに言い争っているユーリとティアを見ながらそんなコトを思う。するともう一人の女の子が私の外套の袖を引っ張ってきた。

「……エル・イーグルス」

「エルか。妹が世話になってる」

「……（コクン）」

エルは見た目通り無口なようだ。二次元ではよく見かけるようなタイプではあるが、実際に見るのは初めてだな。こう言うのをよくよく考えてみると、非常識を過ごしていることを実感できるな。

「ところでシキ兄」

「ん？　どうした？」

「シキ兄はシェリルさんと結婚してるの！？」

「な……っ／／／／／／／」

「はぁ？」

「「「「「「「「ッ！？」」」」」」」」

……何故そこで私とシェリルの結婚してるのですか、質問が出てくるのだ？　しかもそれをユーリが言った途端にクラスが急に静まり返り、私に穴が空いてしまうと錯覚させるほどに視線を集めている。さらに隣では、いきなりそのようなことを言われたシェリルが真っ赤になっている。

うむ、確かにシェリルと二人で歩いていてさらにミカがいるとなれば結婚して、子をなしたと思われても致し方ないだろう。シェリルのような美人のパートナーに間違えられるのは決して悪い気はしない。だがそのようなことを嘘をついても仕方あるまい。

「結婚はしてねェよ」

「じゃあシキ兄が肩車してる子供は何！？　まさか結婚はしてないのに、そういうことだけ……」

「待て……勘違いを招く言い方はやめてもらいたい」

とりあえず誤解を招くかもしれないので、ミカを拾ったあたりのところからユーリ達に説明した。それを話すと誤解は解けたようで、皆は興味がなくなったとばかりに話し始めた。私としてはこの方が良いがな。

「良かったぁ……。まだ結婚してなかったんだ……」

何故そこで安心するのかは分からぬが、結婚はシェリルかユーリと決めているのでな。

「ユーリはシキさんがシェリルさんと結婚したんじゃないかって心配してたんだぜ？」

「ティアちゃん！？／／／／／／」

ティアにそういわれたユーリが顔を真っ赤にして驚いたような顔をしていた。それにしても……ふむ、まさか知らぬところでユーリに心配させてしまっていたとはな。

「……義理なら結婚できる」

「エルちゃんまで！？／／／／／／　た、確かに僕もシキ兄は好きだけど……結婚は早いような……／／／／／／／」

ま、まあ、とても個性的な友達ではあるが学院生活は順調のようで安心したな。コレならこれからも心配する必要などは無さそうだな。出来れば、君達二人はずっとユーリの友達で居てくれ……。

◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　ユーリ

授業参観が始まって最初の講習はあっという間に終わりました。みんながシェリルさんが気になってざわざわしてたって言うのもあるけど、何よりもみんなの希望で早く五十キロマラソンをやりたい

と言うことから、講習は早めに切り上げられた。

みんなシェリルさんに誉めてもらいたいんだろうなぁ～。シェリルさんは男の人にも女の人にもモテモテだもん。だけどどうして結婚してないんだろ？　前にシェリルさんに直接訊いたけど正直そのときの反応ときたら……今思い出すだけでゾッとするよ……。それで今は五十キロマラソンの準備の真っ最中。

「ティアちゃん、エルちゃん、頑張ろうね！」

「……（コクン）」

「だな。愛しのシキお兄様のためにな」

「うん！！」

「素直だな……」

素直に言ったのに何でか分からないけど、ティアちゃんに呆れられたような顔をされた。シキ兄のために頑張るのが本音なんだけど、何かおかしかったかな？　心なしかエルちゃんも呆れてる……？

そ、そんなコトはさておき、この五十キロマラソンのルールを確認しないとね。まずはレース中は攻撃魔法の使用は禁止で必然的に『武装解除』の魔法の打ち合いになります。あくまでも攻撃魔法の禁止ですが……。三人一組のチーム制で一位になれば単位をもらえるので、絶対に勝たなければ……。

「ユーリは良いよな。魔法発動媒体が杖じゃなくて刀で」

「良いでしょー？　シェリルさんから選んでもらったんだよ？」

僕は腰に携えている刀をティアちゃんに見せながら言う。僕の魔法発動媒体はみんなが杖なのにも関わらず、僕が使っているのは刀。おかげで杖を斬れば魔法を使えなくさせることが出来る優れもの。

「……危ないから、抜刀しない」

エルちゃんの言うとおり僕が使ってる刀は本物だから当たったら怪我しちゃうから抜刀しないようにしないと……。ちなみにエルちゃんの魔法発動媒体は指輪だったりします。

「では、位置について……スタートッ！！」

そしてスタートの合図がなったので僕たちは箒にまたがり一斉にスタートしました。スタート時の僕たちのチームは比較的前の方に居ます。まだ始まったばかりだから何とも言えないけど、やっぱり狙うなら一位だよね！！

前方にはクラスでも成績上位のメンバーが揃ってるし、勝負をかけるのはまだまだ早いかな。それにコレは三人がゴールした時点で順位が決まるから、ティアちゃんとエルちゃんと相談して決めないと。

『風花・武装解除！！』

そんなコトを考えていると後ろから武装解除の魔法を唱える声が聞こえた。振り向いてみればすでに武装解除によって服を脱がされちゃった子がたくさん居た。相変わらず嫌な種目だなぁ……。

「もう始まったのかよ。にしても街中で服が脱げんのは勘弁してもらいたいな」

「……同意」

「だよねぇ……。じゃあ一気に全員追い抜こっか？」

「それが良いな。エルもそれで構わないだろ？」

「……（コクン）」

僕たちは同意しあうと杖に魔力を込めて詠唱する。

「「「加速（アクケレレット）！！」」」

そして僕たちは三人同時に詠唱すると移動速度が段違いに速くなる。速くなったから前屈みで箒に掴まって振り落とされないようにしないといけないんだけど、風当たりがスゴいんだよね。結構スピード出てるから仕方ないけど……。

そんなコトを思いながら僕たちは一組、二組と次々に追い抜いていく。そして最前列にいたチームが僕たちの方を見ながら詠唱しているのが見えた。僕たちが今居る場所は狭い路上……。

「やべー、はめられたか。しゃーねーな、脱がされんのだけは勘弁だ。対抗するぜ、エル、ユーリ」

「……了解」

ティアちゃんがそう言うとティアちゃんは練習用の小さな杖を、

エルちゃんは右手の中指に填めている指輪を敵チームに向けながら詠唱しようとする。

だけどそのときに敵チームの一人がニヤリとしたのが見えた。そしてそれと同時に敵チームの子が杖を降ると、僕たちに武装解除が来た。僕とエルちゃんはギリギリで当たらなかったけど、ティアちゃんには直撃してしまった。

直撃してしまったティアちゃんの上の制服が吹き飛ばされたんだけど……サラシ？　マンガとかでは見たことあったけど、実際に下着の替わりにサラシ巻いてる人なんて初めて見たかも……。

「にゃろう……やってくれやがったな、クソアマ……。エル！！殺っちまえ！！」

「……殺らないよ」

エルちゃんはそう呟くと事前に詠唱していた武装解除の魔法を放つ。だけどあっちも武装解除の魔法を使ってきたために、エルちゃんが放った武装解除と相殺されてしまった。さらに他の人が僕たちに向けて武装解除の魔法を使おうとしてるのが見えた。

「……間に合わない」

「マジかよ！？　コレ以上はシャレになんねーぞ！？　仕方ない、やっちまえ！！　ユーリ！！」

「僕も脱がされるのは嫌だから仕方ないよねッ！！」

僕はそう叫ぶと箒の移動速度をさらに上げて、敵チームに一気に

接近する。その際に僕は右手で鞘に納めてる刀の柄を握る。

「氷結・武装解除！！」

氷結系の武装解除……氷結系に効果的な属性は……炎かな？　そう考えた僕は武装解除に向かって鞘から刀を抜き放ち、一気に振り上げる。

――――魔力装填・魔刀炎影化！！

魔力装填をしたことにより刀に炎が纏われ、それを振るうことにより武装解除が成功する前にそれを打ち消す。コレは前にまだお父さんが居たとき、シキ兄がやってた銃に魔力を込める修業をやってるのを刀でも出来るかな？　と思ってやってみたら出来た偶然の産物。

とにかく、僕が武装解除を打ち消したのに驚いている間に、僕たちは最前列のチームの脇を抜けてトップに躍り出る。だけど脇を抜けるときティアちゃんが魔法を使った。

「風花・武装解除！！」

ティアちゃんは武装解除を使って服を吹き飛ばしていた。……さっきのことずいぶん根に持ってたみたいで、脱がせたあとに『ざまぁみろ！！』とか言ってました。

「……やり過ぎ」

「良いんだよ。こっちだって脱がされたんだ。脱がさねえと割に合わねえだろ？」

前から思ってたけどティアちゃんは負けず嫌いみたいです。クラスでも負けることが嫌いって有名だけど、だからってそこまでこだわらなくても良いと思うけど……。今日は本当のレースじゃなくて、一応練習みたいなレースだし。

それにティアちゃんは男勝りの性格で全然女の子らしくないし……。ティアちゃんも女の子らしくしてたらエルちゃんみたいにモテると思うんだけどなぁ。だってティアちゃん可愛いし。

そんなコトを考えながら二位との差をどんどんと広げながらゴールに近づいていく僕たち三人。だいぶ距離を突き放したし、あとはゆっくり行っても一番でゴール出来るかな。

――――ギガァアアアアアアアアアアッ!!

すると、僕たちが気を抜いていると今までに聞いたことがないような、声か音かも判断できないのが聞こえてきた。ビリビリと伝わってくる雰囲気は前に見た魔獣というよりもずっと強い雰囲気だった。

おかしい……。先生の話だと、今の時期は強力な魔獣は居ないって言ってたのに……。もちろん僕たち三人は魔法学院の学生とはいえここまでに強い威圧感を持つ相手の場所に気づけないはずが無く、僕たちは近くにある魔獣の森に視線を向ける。

「な、なぁ、コレってヤバくないか……？」

「……危険。逃げる」

「じ、じゃあ、早く逃げ――――」

僕がそう言いきる前に魔獣の森から一体の何かが飛び出してきた。まるでライオンのような体に、鷹龍（グリフィン・ドラゴン）のような大きな翼、そして最後にドラゴンのような強靭な尾を持つ生物だった。

その大きさは明らかに普通のドラゴンの三倍以上もある大きさで、僕たちじゃ触ることすら出来ないと瞬時に判断できた。それだけじゃなく、逃げ切ることも不可能だと思った。

――――ギガァアアアアアアアアアアッ!!

そしてその生物は僕たちに向かって突進してきた。咄嗟のことで反応できなかった僕とエルちゃんだったけど、唯一反応できたティアちゃんが僕とエルちゃんを掴みながら何とか避けてくれた。

「気をつけろ、二人とも!!　授業で死ぬなんざシャレになんねーぞ!?」

「う、うん、ありがと」

「……感謝」

僕たちはそう言いながら見たこともない生物に視線を向ける。でも何でだろ……あの生物からお父さんが完全に竜化したときと同じ感じがする……。

「で、どーする？　戦っても負けるし、逃げても負けるぜ……？」

「……絶体絶命」

こんな感じで話してはいるけど、これは恐怖を隠すため。二人の額から冷や汗が流れて、体は微妙に震えている。かといって僕も怖くないわけじゃない。だけど、僕たちじゃアレには勝てないけど、今の僕たちには――。

「ティアちゃん、エルちゃん。戦うんでも、逃げるんでもないよ」

「……？」

「そう言うことかよ」

僕たちはそう言いあうと謎の生物に自らの魔法発動媒体を向ける。

「ちょっと情けないけど、助けに来てくれるまで生き残るんだよ！！」

「情けない？　なわけねえだろ！！　それが今のオレたちに出来る唯一のコトだしな！！」

「……至極同意」

僕たちはそう言いあうと生き残るために、動き始めた。

第十一撃『五十キロマラソン開始！！私の妹は事件体質なのか……？』（後書き）

まだまだ先ですが、第四章では真名√かザジ√で行きたいと思ってます。

私は単行本しか買ってないので分からないのですが、マガジンの方で、どちらかの過去話が出たでしょうか？

出たならば教えてもらえると助かります……。

出たならば私はわからないので、他の√にします。

そこでアンケートなのですが、真名√とザジ√、もしくは誰√が良いでしょうか？

1．真名√

2．ザジ√

3．他√

4．迷うな！！　どうせならどっちもやってれ！！√

5．甘いな……男なら三つともやれ！！　女でも三つやれ！！√

の五つから選んでください。

ちなみに他√を含む場合は誰が良いかもお願いします。

第三章終了時点でアンケートを終了し、一番多かった√を第四章にします。

では回答、感想待ってます！！

ちなみに

第一章：その狙撃手は転生者なり
第二章：その神格は旧文明人なり
第三章：その狙撃手は帝国の影なり
（ネタバレですが……）
第四章：その狙撃手と幼き少女
第五章：その狙撃手と英雄の息子
第六章：その狙撃手が再び魔法世界に

となっております。

第十二撃『動き出した歯車。世界なんざどうでも良いが、大切な奴らは守る』

side　シキ

「何ですか……？　アレは……？」

レースをリアルタイムで見るために用意されたモニターを見ながら、シェリルは信じられないとばかりにそう呟いた。周りにいる生徒の親や、この魔法学院の魔法教師達などもシェリルと同じような反応をしている。

先ほどまでは生徒内で繰り広げられる魔法合戦（というよりも脱がしあい）に目をとられてはいたが、現在は他のものに目を奪われている。何かと言えば、まるでライオンのような体に鷹龍（グリフィン・ドラゴン）のような翼、そしてドラゴンのような強靭な尾を持っている謎の生物にだ。

アレをバケモノと言うには余りにも神々しく、魔獣と言うには余りにも強大な力を持っていた。あれが居る場所はゴール付近と言うことは、ここから離れていても約五キロから十キロ内。それほどに離れているというのにも関わらず、アレの力がここまで伝わってくる。

さらに言うならばアレの力は五年前、バルドから感じたものと非常に酷似していた。ここまで酷似しているとなると、どうにもバルドの力とは無関係だとは思えない。しかもアレの姿は先ほど読んでいた『旧文明と旧魔法』の書物に載っていた『神格獣』に姿が似ている、否、そのままと言える。

もしアレが本当に神格獣と言うならば何故滅んだにも関わらず、今現在この場所に居るのかが気になるところではあるが、まずはその神格獣と対峙しているユーリとティア、エルを助け出すのが先決か……。

「アレは何だ、ではないであろう。君は魔法生徒の避難を優先すべきだ」

「そ、そうですね。ですが、ユーリさんとティアさん、エルさんはどうするつもりですか？」

私が仕事の口調にするとシェリルは一瞬だけ戸惑ったような口調になるが、そのようなことに構っている場合などはない。

「助けるに決まっているであろう」

「ですが、ここから全力で向かったとしても間に合うかどうか……」

おそらくはシェリルもアレの強さを本能のうちから感じ取っているのだろう。ここからあの場所に今出せる全力で向かったとしても、着いたときには癪ではあるが、すでに手遅れになってしまうだろうな。

「まあ、間に合わぬだろう」

「……何故そのように冷静でいられるのですか、あなたは」

「冷静？　悪いが冷静などではない」

口調こそこんなではあるものの、実際はかなり焦っている。今はユーリ達は巧みに動いてアレから逃げているものの、あの調子では二分も保たぬだろうからな。大切な人の死が迫っていると言うのに、冷静でなどいられるはずがない。

「アレの処断は私に任せてもらおう。シェリルは魔法生徒の非難の優先を」

「あなたは魔法使いを嫌っていたのではないのですか……？」

全く……。今はそのようなことをわざわざ問うている暇などないと言うのに……。私はそんなことを思いながら腰から銃を抜き放ち、構える。

「あぁ、嫌いだね。あのようなクソッタレ奴ら」

「では何故……」

「愚問だな。そんなもの理由は一つしかない。
――私の大切な人が困っているから、というだけだ」

私はそう言いながらアレが居ると思われる場所に銃口を向ける。さすがにこの遮蔽物のせいで『死の点』の確認などは出来はしないが、魔力弾を当てるだけならば可能か。ただ、そうなるといくらか街破壊になってしまうな……。

「シェリル。人の命と街の外壁、どちらが大事だ？」

「そのようなこと人の命に決まって居るではないですかッ！！」

「それを聞いて安心した」

私は当たり前なことを訊かれて怒声を放ったシェリルを一瞬だけ横目で見たあとに、何の迷いもなく銃の引き金を引く。すると銃口からは蒼色の魔力弾が放たれ、目にも留まらない早さで真っ直ぐに進んでいく。

無論、アレと魔力弾の間にある外壁などは破壊して進んで居るがな。そして数秒後に、モニターに映っているアレに魔力弾が被弾したことを確認した私は立ち上がり、シェリルに言う。

「私は今すぐにアレを処断してくる。他は頼むぞ」

私はそう言うと、ユーリ達が居る場所に向かって瞬動で動き始めた。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ユーリ

「「はぁ……はぁ……」」

「はぁ……っ、くそ、超キッツい……」

僕たちは自分たちなりに考えてアレから逃げ回っていたけど、今までに相手にしたこともないような大きさと威圧感の前に僕たちは五分と立たないうちに息切れを起こしてしまった。

僕はシェリルさんから実践訓練を受けてたから何とか動きについていけたけど、実践経験のないエルちゃんは動きについていけずに、

ティアちゃんにフォローしてもらって、なんとか事なきを得てます。だけどティアちゃんも実践訓練を受けてるわけじゃないのに、どうしてついていけてるんだろ……？

――ギガァアアアアアアアアアアアッ！！

「く……っ！？」

「ヤベェッ！？」

「……っ！？」

雄叫びを上げたかと思ったらアレは僕たちに突っ込んできた。しかも今までの速さと違って見切れないほどの速さだった。僕はギリギリで軌道が見えたからそこから避けれた。

同じようにティアちゃんも避けれたみたいだけど、今回ばかりはエルちゃんへのフォローが間に合わなくて、エルちゃんが狙われていた。

「チッ、エルッ！！」

「エルちゃんッ！！」

僕たちはそう叫ぶけどもうエルちゃんが避けられるだけの時間も距離もない。もうだめだ、と僕が思ったときエルちゃんの目の前まで迫っていたアレに蒼色の魔力弾が被弾した。

そのおかげでエルちゃんにアレがぶつかる前に、アレの体勢が崩れて何とかエルちゃんが怪我せずに済んだ。さらに、そんな体勢を

崩しているアレに向かって何発もの蒼色の魔力弾が連続で被弾していく。

「間に合ったようだな」

そしてエルちゃんの目の前には最高にカッコイイ英雄（ヒーロー）であるシキ兄が居た。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

「間に合ったようだな」

私はアレを視界の端に入れてエルの前に立ちながら呟く。それにしても何キロも離れてさらに遮蔽物があったからこそ『死の点』が狙えず、何もない場所ならば一撃で終わらせるつもりだったのだがな。

明らかな不意打ちにどうやって対処したかは分からぬが、まさか私が『死の点』を狙ったというのに外されるとはな。そんなコトを思いながら三人に言う。

「よく持ちこたえたな。ここは私に任せ、お前等は戻れ」

「ういッス！　ユーリ、エル、行くぞ！」

「う、うん……。シキ兄気をつけて……」

「……頑張って」

三者三様に答えると三人は私の脇を通り抜けてゴールに向かっていった。さて、私の方もさっさと終わらせたいところではあるが、どうやって『死の点』にぶち込んだ不意打ちを回避したかも分からぬ今は容易に動くのは良策ではないか……。

――――ギガァアアアアアアアアアアアッ！！

そんなコトを考えているとアレが雄叫びを上げてきた。やはりこの感じは五年前にバルドから感じたものと一緒。見た目や種族は違うのに何故バルドと同じような力を使えるか……見せてもらおうか。

そう思いながら私はアレに向けた銃の引き金を引く。蒼色の魔力弾はアレに真っ直ぐ向かっていくのだが、アレは全く避ける素振りを見せない。このままであれば『死の点』が貫かれてしまうが、先ほどのは私の狙いが甘かったと言うことか？

「……なんだと？」

私がそんなコトを考えているとアレは『死の点』に魔力弾が向かっているというのにも関わらず、私に向かって突っ込んできた。だがそれに対して私が疑問を持ったわけではない。私が疑問を持ったのは確かに『死の点』を狙い、被弾したのを確認した。

それにも関わらずアレの動きは止まらずに私に突っ込んできている。『死の点』を貫きさえすればあらゆる生命活動は『殺される』はずなのだが、アレは生きたままだ。となれば貫けてないことになるが、どうやって回避した？

そう思いながら私は直線的な動きを必要最低限の動きで回避し、

ほとんど距離がない状態から『死の点』に向かって魔力弾を放つ。しかし先ほどと同じように『死の点』に撃ったはずの魔力弾は『死の点』には当たらない。

「全く……。何の力かは分からぬが、厄介な力だ」

私はそう一人呟きながらアレを視界に納める。『神格獣』のような姿をしているが、さしてや特別な力を使っているようには見えぬ。継続型の能力か？　だが私が二回も見たというのにネタが全く分からぬ。ネタがないのであれば純粋な力で劣っていると言うことになるな……。

私は頭の中で相手の動き、魔力弾のスピード、『死の点』の位置などを計算して確実に『死の点』に魔力弾をぶち込むようにしている。純粋な力で劣っているならば外すことも考えられるが、アレが『神格獣』だとしても私が劣っているとは考えられない。

「試してみるか……」

私はそう呟くと銃を腰にしまったあとに、虚空瞬動を使いアレの腹に接近する。そして大量の氣を右腕に溜めて、その溜めた氣を爆発的に解放させながら腹に向かって拳を振り上げる。

そしてそこで変化が起こった。アレの腹に拳を接近させあと一メートルと言うところから、急激に私の拳の速度が落ちた。そのせいで私の拳がアレに当たる前に回避されてしまう。なるほどな、ネタなど知ってしまえばどうというコトはない。

アレの能力は自分を中心に半径一メートル以内に近づいた者や物を例外なくスピードを激減させるという能力。半径一メートルであ

ればあまり使えないのかもしれないが、アレのスピードであれば一メートル圏内に入ってからでも十分に回避が可能なレベルだ。

――ギガァアアアアアアアアアアアッ！！

そんなコトを考えている私に向かってアレが突っ込んでくる。やれやれ、恵まれた能力を持ちながらも知性を持たず直線的な動きしか出来ないとあれば、宝の持ち腐れというものだ。それに貴様の攻略法はすでに整った。

私は直線的に突っ込んできたアレの動きを片手で受け止める。ふむ、見かけは『神格獣』に似て稀少な能力を持ってはいるが、所詮はその程度。それを十二分に発揮できねば私には勝てぬ。そして私は銃口を頭にピッタリと当てる。

「終わりだ」

私はそう一言だけ呟き全力の魔力を銃に装填して、引き金を引く。すると今までと比べものにならないほどに巨大な魔力弾がゼロ距離から放たれ、アレを包み込む。もちろん『神格獣』かもしれない、と言うことを考慮して『死の点』に放った。

そして蒼色の光線が消えると、そこには『神格獣』もどきの姿はなかった。それを確認した私はタバコを取り出し、加えて火をつける。

「ふぅ……。任務完了」

そして皆が待っているはずのゴール地点にゆっくり向かっていった。

◆◆◆◆◆

――――ワァァアアアアアアアアアアアッ！！

私が魔法学院に帰ってくると、何故か異様なほどに歓迎されてしまった。あの短時間でどうやって訊きたくなるような祝い道具に、全校生徒ではないかと言うほどに多い魔法生徒の数。さらには魔法先生などまでもが私を歓迎ムードで迎えていた。

一番先頭にはユーリやエル、ティア。そしてミカを抱き抱えているシェリルまでもが居る。そして私は一番先頭に居たシェリルに訊ねる。

「コレは一体何の騒ぎだ？」

「あなたの戦いが中継されていたのですよ」

シェリルの言葉を聞いた私はモニターに視線を向けたが、そこに映っていたのは見事なまでに私が戦っていた場所だった。それで私の戦いがみれたと言うことか……。やれやれ、あまり私の戦いを見せたくはなかったのだがな……。

「あなたがあの魔獣を倒してくれなければ、魔法生徒に被害が出ていたかもしれません。皆を代表してお礼を申し上げます」

「魔獣……か。まあ、魔獣と言うことにしておこう」

私の言い回しにシェリルは疑問を抱いたようではあるが、人が集まりすぎている場所でアレが『神格獣』だったかもしれない、など

とは言えないからな。このことは後に話すことにしよう。

そんなコトを考えていると不意に誰かに抱きつかれた。まあ、抱きついてくる者などユーリしか居ないがな。と思いながら抱きついてきた人物を見た私は言葉を失った。

「え、エル？　なぜ私に抱きついているのだ……？」

「……嫌？」

そのように上目遣いで小首を傾げながら訊かれても……。嫌だとは思わないが、私としては安易に私に関わってほしくないというのが本音なのだが、こう言うときはどのように反応すれば良いのだ？

「その……アレだ、君のような可愛らしい女性が私のような男にいきなり抱きつくのは良くないであろう？」

「……？」

いや、だからそのように首を傾げられても困るのだが……。そして何故周りの皆は微笑ましい光景を見てるように私たちを見るのだ？　そして何故に一部はエルを見てうっとりしているのだ？

「ようするに……恋人同士でもないのにこの様なことをするのは感心できない、と言っている」

「……なら、なる」

「……一応訊くが何になると言うのだ？」

「……恋人同士」

私は一体どうすれば良いと言うのだ……。コレはいわゆる告白と呼べる行為なのか？　仮にそうだとしても何故今日あったばかりの女性にそのようなことをされねばならんのだ？

エロゲーとかではないのだからそのような展開がホイホイあるわけがないだろう。それに私が彼女に何か好意を寄せられるようなことをした覚えもまるでないぞ？

「シキ兄は渡さないよ！！」

そのようなことを考えていると右側から抱きついているエルに対して、ユーリが左側から抱きついてきた。ついでに言えばすでにミカは私に肩車をしてスタンバっている。

「……譲れない」

「コレばっかりはエルちゃんにだって負けられないよ！！」

と私に抱きついてきている二人の少女はまるで火花が散ると言う表現がピッタリと当てはまるくらいに、壮絶な睨み合いを繰り広げている。やるなら私に抱きつかないで余所でやってくれ。私を巻き込まないでもらいたい。

私が再び考えに浸っていると今度は後ろから誰かに抱きつかれた。首だけを動かして誰が抱きついてきたかを確認すれば、そこにいたのはティアだった。

「君は私の話を聞いていたのかね……？」

「もちろん聞いてたぜ？　アレだよ。ノリだよ、ノリ。助けてもらった三人のうち二人も抱きついてんだから、三人目も抱きついたほうがいいんじゃねーかな、って思ってさ」

「ノリで抱きつくのはやめてもらいたい……」

はぁ……今まで何もかもを突き放してきたと言うのに、たった一日、いや数時間程度でここまで好かれてしまう羽目になってしまうとは……。やはり魔法学院などには来るべきではなかったのかもしれんな。

「なら、三人とシェリル。少しばかり付き合ってもらいたい」

「五人でデートする気なの？　シキ兄」

「……構わない」

「オレは行かねーよ。三人で楽しんでこいよ」

「私も行く気はありません……って最初から数に入ってませんでしたね」

何なんだこいつらは……。話が飛躍しすぎて居るではないか。それにいつ私がデートなどをすると口にした。今さっきあった出来事の整理をするに決まっているだろう。私は溜め息混じりでそんなコトを思いながら、タバコの煙を吐き出した。

◆　◆　◆　◆　◆

「コレか……」

アレから数時間が経過した。本来であればあのあとすぐに図書室に足を運びたかったのだが、色々あったために来るのが数時間も遅れてしまった。とりあえず来れたは良かったが、私が見たい資料がなかったために、連れてきた皆にその資料を探してもらった。

本の数にすれば『旧文明』について載っている書物は数百冊にも及んだのだが、それほどまでに詳しく記載されている書物がなかったために時間をかなり潰してしまった。数時間経ったあとにさらに本探しをやらせてしまったために、すでに夜。

ユーリ達はすでに各自の部屋に戻らせ、シェリルはアリアドネーの最高責任者の一角と言うことで現在はこの場には私とミカしか居ない。まあ、ミカも眠ってしまってはいるのだがな。

「やっぱりアレは『神格獣』だったのか……。名前は『合成竜（キマイラ・ドラゴン）』か……」

『旧文明』の人間や生物、魔法といったものは今では全て滅んだと読んだはずなのだが、そうなら何故『合成竜』があのような場所にいたのだ……？　仮に絶滅しそうになっている、とだけだったとしてもあのように人目がつくような場所にいて発見されていないのはおかしい。

似ているだけと言うのは有り得ないな。身体的特徴も保有能力までもが一致しているのだ。どう考えても『旧文明』時代に生きていた『合成竜』で間違いはない。しかもアレほどの実力で『神格獣』内では雑魚も雑魚、私たちで言うただの魔法使い程度と言うのだから末恐ろしい。

「どうなってんだ？　いったい……」

『それには私（わたくし）がお答えします』

「ッ！？」

私は突然に聞こえてきた声と、前に一度だけ感じたことのある第三の力を感じた私は思わず近くに置いておいた銃を声のした方に構えてしまった。そしてその方向にいたのは、ミカの身体から現れている、幽霊のような女性だった。見た目こそは金髪美女ではあるが、気配もなく近づいたことに私は警戒した。

『警戒しないでください。私はあなたの敵ではありません』

「……」

確かに見た限りでは敵、と言うわけではない。だからといって味方かどうかと訊ねられたらすぐには答えられない。むしろ敵だと答えるだろうな。しかし、今この時点で私を襲うデメリットはあってもメリットはない。

『信じてくれたコトに感謝いたします』

「完全に信じたわけではない」

『それでも構いません。私はあなたに伝えなければならないことがあり、あなたの前に現れました』

幽霊（？）は手を胸の前で組みながら私にそう言ってきた。

「その前に私の質問に答えてもらう」

『私に答えられる範囲であれば何でもお答えします』

「なら、一つ目は貴様は何者か。二つ目は何故ミカからでているのか。最後に何故以前に私に助けを求めてきたかだ」

『分かりました。ちょうど全てお話しようと思っていたことです』

そして幽霊（？）の口から語られた話は信じられないものだった。まず彼女の名前はミカエルで間違いないらしい。いや、その表現は間違いだったな。ミカエルと言うのがこの幽霊（？）の名前で私が今まで接してきたミカには名前がないらしい。

ゴチャゴチャになるために私が知っているミカエルはミカ、幽霊（？）の方はミカエルと呼ぶことにする。どうやらミカエルはとうの昔に滅んだとされる『旧文明人』の魂らしい。とある理由からミカの体に憑依している。

二つ目で何故ミカの体にミカエルが憑依しているかと言えば、ミカはこのミカエルの『旧文明人』の血を色濃く受け継いでいるらしい。先ほど言ったように『旧文明人』はとうの昔に滅んだが、その血縁は途切れることはなく、今でも続いている。

ただ、その『旧文明人』の血を色濃く受け継ぐのは極稀なコトのようだ。そしてその『旧文明人』の血を色濃く受け継いでいるミカに憑依し、あることを止めなければならないらしい。

そして最後に何故私に助けを求めてきたか、と言う質問の答えだ

がこの答えがミカエルがミカに憑依していることと、『神格獣』が現在に現れたかを示していた。

「『旧文明人』……それも『神格』クラスの復活だと？」

『……はい』

そう、私が今言ったように現在、世界では『旧文明人』の『神格』クラスが復活しようとしているとのことだった。それも同じように『旧文明人』の血を色濃く受け継いでいる者を利用しての……。ただ、コレを聞いただけならばどうと言うことはない。

「復活して何が悪いのだ？　別に不都合があるわけではあるまい」

『いいえ、旧文明人の神格が復活してしまえば、必ずこの世界は神格によって破壊され、支配されてしまいます』

「……どういう意味だ？」

ミカエルの話によれば旧文明人が滅んだのは神格同士による自らの力の証明、自らの誇りを賭けた戦いの末に滅んでしまったらしい。そしてその旧文明人を滅亡に追い込んだ神格は未だに諦めていない。

だから今一度地に足を付け、自らの存在理由を証明したいらしい。しかも神格の血を受け継いだ者は、旧文明人を復活させるためだけに今は動いているらしい。

ただ、本家の神格が復活するには条件があるらしく、その条件と言うのがミカエルの魂らしい。もしも鍵であるミカエルの魂が生け贄に捧げられれば世界は破滅、ってコトらしい。

「感想としては……信じられないな。そのよう話」

『……』

「そんな突拍子もないことを信じろ、と言われても不可能だ」

『……』

私の言葉にミカエルは俯いて黙り込んでしまう。まあ、せっかく協力をしてくれそうな人物からそのようなコトを言われたらそうなるのも仕方がないな。

「だが、私は君を信じよう」

『本当ですか！？』

「そのような嘘をつくとも思えぬしな」

それにすでに旧文明の復活の兆しを見せていることは、さっき戦った『神格獣』が証明している。旧文明人の魂であるミカエルも居るのだから、信じるしかあるまい。

「ようするに私はミカエルを守れば良いのだろう？」

『はい。ですが、本家の神格ではないとはいえ、神格の血を受け継いでいる者はそれこそ最強クラスの実力です。それでも構わないのですか……？』

全く……。自分から守るように言ってきたと言うのに、今更にな

って私の心配をしてくるとは……。

「構わねェよ。相手が神様なら、俺は神様だって殺してやる」

私は信頼した者にのみにやる昔の口調でミカエルにそう言う。こうして人知れずに世界の命運を賭けた戦いが幕を開けたのだが、このときの私はまだそれを実感していなかった。

だが、誓っていた。世界などはっきり言ってどうでも良いが、大切な人たちだけは相手が死神だろうが神様だろうが絶対に守り通す、と。

◆　◆　◆　◆　◆

月明かりに照らされた場所にて二人の男女が仲も慎ましく話し合っていた。ただ、その内容はとんでもないものである。

「よーやく役者が揃ったか」

「おい、なんであいつも巻き込んでんだよ」

男は少々苛立ったように女に向かって言う。男の体格は二メートル以上もある大柄だった。対して女の方は平均的といえる。しかしそんな二人から放たれている威圧感は異常だった。

「仕方ねえだろ。あいつが鍵を保護してたんだからよ」

「ちっ……」

男は女の言葉に舌打ちをした後に懐からタバコを取り出し、口に

加えて火を付ける。

「なんでテメェが鍵（ミカエル）を保護してんだよ、シキ……」

男の言葉は誰にも届かない。そしてすでに計画は始まっていた。

第十二撃『動き出した歯車。世界なんざどうでも良いが、大切な奴らは守る』

アンケート（前話あとがき参照）実施中です！

感想、アンケート待ってます！

第十三撃『惚れ薬事件。何故私にそれを使うんだ？』

ｓｉｄｅ　シキ

私が魔法学院に来てからすでに一週間の時が過ぎようとしていた。本来であればここにとどまる理由もありはしないのだから、授業参観の次の日には旅に出ようとしていた。あの二人とこの学院の者達と関係を築くような真似をしたくはないからな。

したくなかったのだが、ユーリがどうしてもここに残ってほしいと言うものだから仕方なく滞在している。仕方ないであろう、あのように涙目で上目遣いでお願いをされてしまったら断りたくても断れん。言っておくが決して私はシスコンと言うわけではない。

まあ、そのようなコトはどうでも良いのだが、この一週間で私は魔法学院の図書室にて旧文明について載っている書物を隅々まで調べたのだが、調べれば調べるほどに旧文明について分からないことが多くなってくる。

夜になり人気がなくなればミカエルにその疑問を訊ねることが出来るが、ミカエルでも旧文明の全てを熟知しているわけではない。そのために分からないことも発生してくることになる。ただ、その分からないことと言うのはほんの些細なコトのために気にする必要はない。むしろ調べれば調べるほどに分かってくる二人の『神格』の方を気にすべきだ。

一人は『ガブリエル』と呼ばれた神格。その物質の限界点の境界線を全て取り払い、それの最大の力の何倍の力を引き出す能力を持

っている。さらに自らの限界点すらも取り払うことが可能。少なくとも、こいつが居れば惑星の十や二十は軽く滅ぶな。

もう一人が『ウリエル』。その目で見て、その耳で聞いた能力の全てを例外なく自らの力に取り込み、その力の何倍もの力を引き出すことが可能。さらには創造と破壊を司っている。言わずもがなこいつも惑星の十や二十は軽く滅ぼせる。

この二人は『神格』の中でもずば抜けた力の持ち主であり、現代に居る全ての能力保持者、全ての兵器を使ったとしても軽くあしらわれるだろうな。こんな奴らを復活させた暁には人類が滅ぶのも頷ける。なにをすれば良いかは分からぬが、ミカエルの魂の器になっているミカを死守することが現在、私がやるべきコトなのだろう。

「はぁ……神格獣の件もあるし、どうしたもんか……」

『神格獣』が現代に現れたのはおそらく神格の力が現代に漏れてきたコトが原因かもしれぬし、神格の血を引く者がミカエルをさらうために呼び出したのかもしれぬ。とにかく今の私では最高位の『神格獣』が出てきたら、手も足も出ないだろう。

今から修業をしたとしても得られる力はたかが知れている。やはり旧文明に対抗するには旧文明の力を使って修業をするしかないのか……。しかし、旧文明の力はどれもが異質すぎる。旧文明の修業法は確かに記されてはいたが、どれが私に適しているかが分からぬ。と言うよりもそれをやったとしても強くなれるという保証はない。

「全く……知っていたこととは別に世界の危機……しかも原作キャラより強い相手に原作キャラより弱い私が立ち向かう、か……」

私が知りうる知識の中ではこのようなコトは有り得なかった。その世界が一つの物語として語られていたからだ。しかしここはその世界とは違ういわば平行世界（パラレルワールド）。有り得ないことが起こっても不思議ではない、と言うことか……。

「こうなるのだったらもっと強い力をもらっておくのだったな……」

私は自嘲じみた笑みを浮かべながらそんなコトを呟く。だが仮に今の力よりも強いものを貰っていたとしても、生半可な力であれば手も足も出ないな。おそらくは考え得る最強の力を貰えねば抵抗は不可能だ。

私は自分の考えに思わず頭を抱える。考えれば考えるほどに『神格』の復活を阻止できる可能性が低くなっていく……。それほどまでに『神格』の力は規格外だ。最終手段としてはミカエルを『殺す』しか方法はない、か……。

一を切り捨て九を救う、まるでどこかの赤い弓兵のような考えだ。だが私はあの考えは嫌いじゃない。……最近私の考え方が変わってきたな。なぜ私が世界を救わねばならんのだ？　私が守りたいのは九ではなく一だと言うのに……。

「シキ兄、来たよーっ！！」

「やっほー」

「……来た」

私がそのようなコトを考えていると図書室にそのような声が聞こ

えてきた。頭の色は赤に黄緑に青の信号トリオのようだった。信号トリオの手には弁当箱があり、今日もここで食べる気のようだ。

「全く……自分たちの教室で食べろと言っているだろう」

「いいじゃん。今日もシキ兄のお弁当作ってきたんだよ？」

ユーリはそう言いながら私に弁当箱を手渡してくる。最初に手作り弁当を貰ったときは、あの悲惨な料理しか頭に残っていなかったために、かなり覚悟を有したのだが、食べてみるとそうでもなかった。ここで安心したのは私だけの秘密だ。

「はぁ……。何を言っても無駄なようだな」

「そうそう。ユーリの奴、授業中もシキさんのことばっかり話してんだぜ？」

「ちょっ、ティアちゃん!?」

ティアがそう言うと、言わないでって言ったじゃん、とばかりに驚きの表情をするユーリ。私のことを考えてくれるのは嬉しいのだが、魔法学院に通って授業を受けているのだから、真面目に授業を受けてもらいたいものだ。

「……こっちも」

「おっ、エルもシキさんに手作りか？」

私に弁当箱を渡してきたエルを見たティアはニヤニヤとしながらエルに言う。無表情であるために感情を読みとるのが難しいな。そ

してユーリ、なぜお前はそのような目をしてこっちを見ているのだ？

「エルちゃん、負けないからね！！」

「……負けない」

……良くは分からぬが、この二人には今は関わらぬ方が良いだろう。何だか、こちらにまで飛び火が飛んできそうな気がするものでな。そんなコトを考えていると、そんな二人の傍観者だったティアが話しかけてきた。

「なあ、シキさん。シキさんの銃見せてもらえないか？」

「私の銃を？　何故だね？」

「いや、何故って言われてもな。強いて言うならそこに銃があるからさ」

つまりはただ見てみたいと言うわけか。まあ、私の銃のスコープは真の意味で『死』を理解していなければ、『死の点』が見えるなどと言うことはないから、ティアにも見えないはず。

どうにかしようと言うならば、すぐに取り返せば問題あるまい。そう思った私は机の脇に立てかけておいた銃をティアに渡す。一応念を押して人には向けないように促しておく。この銃は魔力を媒体にしているだけに、引き金を引けば誰にでも撃てるからな。

「普通の魔法具の銃みたいだけど、なんであんな距離、撃てんだ？　――――ッ！？」

そう言いながらティアはスコープを覗き込んだ。すると何故か驚いたような表情になったのだが、まさか『死の点』が見えたとでも言うつもりか……？　私のように転生した者ならば分からなくもないが、人の死を見たこともないような輩が『死の点』を見たというのか？

「あんなとこに金が！？」

「……」

心配して損をしてしまったようだ。全く……金が見つかった程度でそこまで驚いたような表情にならないでもらいたいものだ。そんなコトを思いながら私はティアから銃を受け取る。

「シキ兄！！」

「……シキ」

「ど、どうしたのかね？」

何なんだこの二人……。異常なまでの威圧感、こんな威圧感出せるくらいに強いんだったら並大抵の奴らなら瞬殺できるほどの強さだぞ？　このような威圧感が出せるなら、他のところで生かしてもらいたいものだ。

「僕とエルちゃんの手作り弁当、どっちが美味しいか食べ比べしてよ！！」

「……貴方の意見が聞きたい」

「分かった。分かったから、落ち着け」

私はそう言いながら二人に落ち着くように促す。やれやれ、エルの手作りの方は食べたことはないが、ユーリの方はかなりの美味さだ。シェリルほどではないが、かなりの上位のランクに入る。それにエルは対抗できるのか……？　私はそう思いながら両者の弁当箱を開ける。

するとユーリの弁当箱はいつも通りな美味そうな弁当だった。しかしエルの方がスゴい。見た目はシェリル以上の出来栄えと言ったとしても過言ではない。よくあるパターンとしては、見た目と味のギャップがあるためにまだ気は抜けない。

「さあ、食べて！！」

「……食べる」

だから怖いっつうの。具体的にどれほど怖いかと言えば、リリカルでマジカルな主人公第三期の部下に『頭、冷やそうか……』とか言いながら砲撃ぶっ放す魔砲少女ぐらい怖い。

今更に思うがアレはもはや少女では――――はっ！？　この殺気は別次元から！？　まさか私の発言に反応したとでも言う気か！？　このままではスターでライトなブレイカーが来てしまうかもしれぬ！？　ならこちらも対抗を！！

「シキさん……そんな別作品からは来ないから……」

「そうか。珍しく取り乱してしまった」

ふむ。たまにはギャグも入れないといけないと思ったのだが、最近はめっきりギャグが苦手になってしまったものだ。ん？　現実逃避をしてないかだと！？　ナンノコトカワカラヌナ……。

「早く食べてよ！！」

「……なんなら食べさせる」

「あっ、エルちゃんズルいよ！！」

「いや、自分で食べるから」

このままにしておけばこの二人に食べさせてもらうことになってしまう。さすがにそれは回避せねばならぬな、私の個人的な威厳に関わって来るものでな。そんなコトを思いながら二人の弁当を一口ずつ頂く。

「ど、どう……？」

「……（ドキドキ）」

味は普通に美味い。言い換えればいつも通りに美味いと言うことなんだが、何だろうか……何だかいつもと何かが違う感じがするんだが、気のせいだろ――――ッ！？

「し、シキ兄！？」

「……ッ！？」

食べて少しして突然に来た違和感に私は胸を押さえてしまう。な、

なんだこの妙な感じは体が熱い……。意識も何だかおかしくなっていくぞ……。私はそんなコトを思いながらユーリとエルの方を見る。

「――――ッ！？」

見たのだが私はすぐに顔を逸らしてしまった。何故だ……ユーリとエルが可愛く見える。いや、元から可愛いと言えば可愛いのだが、今私が感じる可愛いと言うのはいつもと違う可愛いだ。言うなれば好きな人が可愛い、と言うのと同じだ。

なぜ急にこのように見えるようになって……急に？　まさかとは思うがこの弁当のどちらかに仕掛けられてたとでも言うのか？　コレばかりは聞き出さないわけにはいかない。私は二人の顔を見ないようにしながら、口を開く。

「ユーリ、エル。お前ら、まさかとは思うがこの弁当に『惚れ薬』を仕込まなかったか？」

「（ビクッ）な、何言ってるんだよシキ兄。そんなコトするわけないじゃん」

「（ビクッ）……やらない」

どうやらコレは二人ともビンゴだったようだな……。確か惚れ薬と言った人の心を操るような代物は禁止されていたはずだが、いったいドコから仕入れてきたのか……。くっ、このようなコトを考えている間にも惚れ薬の効力が広がってきてるようだな……。

このままではどちらにしろ私がここにいるのはマズい。誰もいないところに逃げて、惚れ薬の効力が切れるのを待つのが得策だな。

そう思った私は銃を腰に戻し、図書室の窓から逃げようとする。

――ガシッ

しかし右腕をユーリに左腕をエルに、そしてさっきまで傍観者だったティアが何故か私の身体をがっちりと掴んで、逃がさないようにしていた。惚れ薬の効力で同じようにティアの顔も見れないのだが、見なくとも分かる。こ奴は面白そうだから逃がすまいとしてるに違いない。

「離してもらおうか。惚れ薬が私に効いている間は隠れさせてもらう」

「ダメだよ!!　せっかくバレないように仕込んだのに!!」

「……（コクコクコクコク）」

「面白そうだから逃がさねーぜ!!」

やはりティアは面白そうだからという理由で参加していたのだな……。致し方ない、少々手荒な真似になってしまうが、最悪な結末になるよりはマシだ。そう思った私は体全体から氣を放出する。

「きゃっ!?」

「ッ!?」

「うおっ!?」

すると氣の放出量に耐えきれなかった三人は吹き飛ばされる、と

までは行かなかったが尻餅をつく程度の勢いがつく。怪我がないことを確認した私は窓から街に向かって飛び出した。

◆　◆　◆　◆　◆

……街に来たのは些か迂闊な考えだったかもしれんな。コレは私の根となっている性格か、それとも惚れ薬のせいかは分からんが、女性と見れば体が反応してしまうようになってしまった。出来れば惚れ薬のせいだと信じたい……。

とにかく、あまり女性を見ないようにとローブを購入したのだが、その店の店員が女性（美人）だったためにかなり苦労した。アレはかなり怪しまれただろうな……。で、街に来て失敗だと思ったのは、街にも女性はたくさん居るだろと言うことだ。

女子校である魔法学院に比べればいくらかマシなのだろうが、かなりヤバい。息も乱れてきているし、端から見てしまえば変質者にしか見えぬな。普段はこうではないから間違わぬように。さて、今は知り合いに会う前に、身を隠す――。

「そんな格好で何をしてるのですか？」

「……なんでさ」

思わず某正義の味方の口癖が出てしまったが、この際気にしている場合ではない。知り合いに会う前にどこかに身を隠そうと思っていたにも関わらずに、知り合いに出会してしまうだと？　今日は厄日か……。

しかも見つかった相手がシェリルときた。ただでさえ彼女の容姿

は思わず見とれてしまうほどに美しいというのに、どうしてこのような状況下で見つかってしまうのだ。都合が悪いにもほどがある。

「どうしたのですか？　ローブなど着て。魔法使いの真似事ですか？　それとも、顔を隠さなければならない何かをしたのですか？」

「……んなわけねェだろ」

「何ですか、今の間は？」

バカ正直に惚れ薬を仕込まれました、などと言えるはずがない。シェリルは街を守るいわば警察のようなものだ。そんな彼女相手に違法な物が使われたと知られれば、捕まらなくとも何かしらあるに違いない。

私としてもユーリにどうこうなってほしくはないからな。不本意ではあるが、嘘を突き通すほか、この状況を乗り切る方法はあるまい。

「特に意味はねェよ。ところで、シェリルはこんなとこでどうしたんだ？」

「私は近くの店で昼食をとっていました。学食は生徒のためにあるものですから」

「そ、そうか……」

シェリル……出来る女であるならば空気を読んで、と言うより今の私の状態を察してこのまま解放してもらいたいのだが、してくれそうにもないか……。

「特に用事が無いなら俺は行くぞ」

「何か用事でもあるのですか？　それに顔が少々赤いようですが、熱でもあるのですか？」

「――――ッ！？」

シェリルはそう言うと前髪を上げた後に、私の額と自らの額をこのような街中だというのにも関わらず合わせてきた。すると私の身体に雷が駆け抜けたように痺れる感覚に襲われる。実際に雷を受けたのか、と訊かれれば受けたことがあるからその表現で間違いはない。

「少し熱があるようですが……。あの、どうしたのですか？」

や、ばい……。正直このままではシェリルをどうにかしてしまいそうだ……。くっ、このようなコトになるのだったら、嫌だなどと思わずに魔法の修業をいくらかするのだったな……。

「シェリル、今の俺には近寄らない方が良い」

「どういう意味ですか？」

「分かんねェのか……。腰砕き……に……されんぞ……」

「ッ！？／／／／／／　いきなり何を言ってるのですか！？／／／／／／」

私の言葉にシェリルは顔を真っ赤にするのだが、さすがに今の状

況でそれをどうこう言えるはずがない。正直今はこの場から早く去ることだけを考えている。不自然に逃げてしまえば、後に怪しまれることに繋がるのでな。

「とりあ……えず……今は近づ……くな、いいな」

「良く分かりませんが、わかりました」

私はシェリルのその言葉を聞くと急いでその場を後にするのだった。やれやれ、もう少しあのままであったならば、どうなっていたことか……。とりあえず今は誰も居ない場所に身を隠すほかあるまい。

この惚れ薬がいったい何時間、何日で切れるのかは分からないが、切れるまでは誰にも（特に女性には）会わない方が私のためだろう。私はそう思いながら身を隠せる場所を探した。

◆　◆　◆　◆

殺人の犯人は殺人現場に戻ると言うが、こう言った類のコトでも始まった場所に戻ってきてしまうものなのだな。アレから私は身を隠しながら場所を転々とし、夜になり最終的には魔法学院の図書室に戻ってきていた。

今の時間帯ならば魔法生徒もこの場所に立ち寄る輩など居ないはずだし、何より調べ事をしたいのでね。久しぶりに旧文明について考えることがなく、よい休暇にはなったが、正直もう勘弁してもらいたいものだ。

しばらく女性とは会っていないから、惚れ薬の効力が切れたかは

良く分からぬが、明日になれば効力も無くなっているだろう。仮に無くなってなかったとしても、生徒如きが手に入れられるような惚れ薬だ。そう長続きはするまい。

そんなコトを考えていると、机の片隅で何かが動くのを視界の端で見た。そちらの方を見ると、そこにはミカの体から現れているミカエルの姿があった。

――――ドクン！！

「がっ……」

マズい……効力が弱まるどころか夜になってから最大になってきたではないか……。夜行性の惚れ薬を使うとはあの二人は夜にいったい何をやらかそうとしていたのだ……ではない。今はミカエルが居るのだから、早く離れなければ……。

『ど、どうしたのですか!?　ま、まさか神格にやられたのですか!?』

「ばっ、今近づいたら……」

あっ……もう体の制御が利かない……。相手は霊体だから掴めるとは思わない。だったらこの体の渇きに任せても大丈夫かもしれんな……。

そんなコトを思っているうちに私の手は伸びて、ミカエルの肩を掴……む？　掴めるだと？　霊体にも関わらず触れるのか？　今はそのようなことではない。掴めるならば話は変わってくる。

『え？　あの……シキさん？　どうしたんですか……？』

動きを止めようとしているのだが、体がそれに逆らえずにミカエルの方に近寄っていく。ダメだ、コレは逆らうのは不可能だ。だったら……。

「先に謝っとく……」

『え？　え？　な、何で謝るんで――――むっ！？』

そして私はミカエルに口付けをした。もはや霊体などと言った疑問はどうでも良い。すでに私の身体には惚れ薬による効力で反抗が出来なくなって……ん？

何だか体がだんだんと軽くなっていくんだが、どう言うことだ？まさかコレは惚れ薬ではあるが、キス一つやるだけで効力が切れるようなタイプだったのか？

『あ、あの……／／／／／／』

そしてようやく私の意識も冴えてきたのか今の状況の判断が出来るようになってきた。ふむ、どうやら私は霊体相手にではあるものの、無理矢理にキスをしてしまったらしい。全く、バカなものだ。

「ミカエル、その……済まなかったな」

『い、いえ……私も初めて、と言うわけでもないですし、先に謝られましたから……』

ミカエルは胸の前で手を残像が残るほどに速く振っているのだが、

その様子からしてかなり動揺しているように見えるのだが？　と私が思っていたのだが、不意にミカエルが真面目な表情になった。

『問題は私とき、キスをしてしまった事です』

「それにどのような問題が？」

『私の旧魔法は『口移し』というのですが、その条件がキスをする事なんです』

話を要約するならば旧文明の人間一人一人に別の能力（旧魔法）があるように、ミカエルにも能力（旧魔法）があった。それの名前が『口移し』で、それはキスをした相手に何かしらの能力（旧魔法）を与えるものらしい。ただ、その能力（旧魔法）というのはランダムに決まるものでミカエルには決定権がないらしい。

「つまりは昔はキスを頻繁にしていた、と言うことか」

『ち、違いますよ！！／／／／／／』

「まあ、人の行動にあれこれケチをつける気はないので安心するがよい」

『あ、安心出来ませんよ！！　もうっ！！』

私がそう言うと頬を膨らませてそっぽを向くミカエル。それが可愛い行動などとは、思ってはおらんのだろうな。それに今更ながらに思ったが、私の周りに居る女性は魅力的な人達ばかりだ。可愛い、と頻繁に思っても致し方ないことだ。

それに偶然とはいえ、私も旧文明と戦える力を手に入れたことになる。未然に防げれば問題ないが、それでも戦いは避けられまい。

そう考えれば今回の騒動も悪くなかったといえる。さて、あとは私の力次第か……。私はそう思いながらタバコに火をつけた。

第十三撃『惚れ薬事件。何故私にそれを使うんだ?』（後書き）

アンケートまだまだ実施中です！！

詳しくは第十一撃を！！

感想待ってます！！

第十四撃『動き出した計画。連れ去られる命運をかけた鍵』

ｓｉｄｅ　シキ

惚れ薬の事件からまだそうも時間が経ってない日の夜、私は相も変わらず図書室にて『神格』に対抗するための策を考案していた。前も言ったかもしれないが、調べれば調べるほどに私が勝てる確率が低くなってくる。

神格の代名詞足り得るガブリエルやウリエルの各個の能力は調べることは出来たが、神格獣の各個の能力はそこまで詳しく記されては居なかった。おそらくは旧文明人も、神格獣各個の生体全てを調べ上げることは不可能だったのだろう。

にしても旧文明の知識は非常に興味深いな。現代魔法とは違い同じ魔法が使える者が居なかった故に、能力は何億通りと存在している。それだけ能力が存在するならば一つぐらいは現代に残っていても良いと思うのだが、記されていないとなればやはり旧文明は滅びたのだろう。

「それにしても私に付与された能力というのは何なのだ……」

私は調べながらもそんなコトを呟く。アレから色々なことを試してみたのだが、俄然と私に付与された能力が一体何なのかが判明しなかった。何かしら条件があるのかもしれないが、現時点での発動条件は分からず終いだ。

旧文明と戦うのであれば、やはり偶然ではあるが手に入れた旧文

明の力を使いこなすことが重要になってくる。何とかして発動条件を調べねばなるまいな……。といったは良いが、正直そこまで危険が迫ってきてるとは到底思えないな。

「……まだ、居たの？」

そのようなコトを考えていると後ろから不意に誰かに話しかけられた。振り向いてみればそこには妹のユーリの友人である少女のエルの姿があった。蝋燭に火をつけているところを見ると、私と同じように忍び込んできたようだ。

いや、私の場合はアリアドネーのお偉いさんであるシェリルの許しを得ているのだから、忍び込んだという表現は些かおかしいかもしれぬな。まあ、ろくに明かりもつけずに蝋燭で照らしてるだけとなれば、忍び込んだと言われても致し方ないだろう。

「ちょっと調べ物をね。君はどうしたのかね？」

「……夜は、独占できる」

そういってエルは私の腕に抱きついてくる。やれやれ……独占できるというのはそう言うことか。私も鈍感の仲間に入るのだろうが、某聖杯戦争の正義の味方志望のあの男よりは鈍感ではないつもりだ。何にしても私に好意を寄せてくれるのは有り難いが、何も夜まで来る必要はないと思うのだがね。

「……旧文明？」

「む？　旧文明に興味が有るのか？」

「……前にちょっと読んだ」

ふむ、この図書室については外部者である私よりもここの生徒であるエルの方が詳しいだろう。だからといって関係のないエルを巻き込むわけにはいくまい。ここは趣味程度に調べていると誤魔化すのが良いだろう。

「私も少しばかり興味があったものでね。暇だったから調べていたのだよ」

「……？」

「どうしたのだ？」

何故かいきなりエルが私の顔を不思議そうにのぞき込んできたのだが、何か私はエルが不思議がるようなことでもやらかしたとでも言うのか？

「……口調が、違う」

なるほどな。どうやら彼女は自分に対する口調と、ユーリやシェリルに対する口調の違いが気になったようだな。だがそのようなコトを言われても、変えるつもりなど無いのだからどうしようもないのだがな。

「済まないな。私は仕事でこちらに来ているのだ。仕事とプライベートは分ける主義なのでな」

「……なら、仕方がない」

エルはそう言うと私の腕から離れて図書室から去っていってしまった。やれやれ、彼女は一体何をしに来たというのだ？　とりあえずもう少しだけ旧文明について調べ上げることにしよう。そう思った私は書物を開いた。

◆　◆　◆　◆　◆

「もう朝か……」

結局あれからずっと図書室にこもっていたのだが、いつの間にか朝になっていた。やれやれ、没頭しすぎると言うのも考えものかもしれないな。にしても……多すぎる。何なのだ、この書物の量は……。

私は机に積み上げられている旧文明関係の書物に視線を向けながらそんなコトを思う。ここに来てから何日と経つのにも関わらず、旧文明関係の書物が無くなることはない。それだけ旧文明関係の書物の数が多いのだろうが、正直同じような書物が多かったな……。

私が溜め息混じりでそのようなコトを考えていると、いきなり図書室の扉が開け放たれた。何事かと思いながらそちらの方を向いてみれば、そこには全長二メートルもの長さのある太刀を携えているシェリルが立っていた。さらにはいつもの冷静なシェリルからは想像できないほどに、焦りが鮮明に浮かんでいるように見えた。

「どうしたんだ？　そんな血相を変えて」

「落ち着いている場合ではありませんッ！！　今すぐ私についてきてくださいッ！！」

「お、おい、何なんだよ」

何故かいつもからは考えられないほどに焦っているシェリルに手を引かれながら、私はどこかに連れて行かれた。そして私が連れてこられた場所は、魔法学院の屋上だった。

ここの屋上からはこのアリアドネーのほとんどが見渡せるほどに広く、さらに私の視力強化を使えばアリアドネーの全体を隈無く見渡すことが可能だ。まあ、そのようなコトはどうでも良いのだが、何故私がこのような場所に連れてこられなければならないのだ。

「シキ君、あちらの方角を視力強化して確認してみてください」

「よく分からねェけど、やれば良いんだな？」

私はシェリルにそう言いながら言われた方向を視力強化して確認してみる。だんだんと私のみれる範囲が広くなっていき、五十キロ四方が見渡せるようになる。

そこで私の視界に入ったのは驚くべきものだった。五十キロ以上の距離を見れるようになってやっと分かったが、その先には巨大な何かが居た。首が八つもあり、その一つ一つが意識を持っているように動いている。確か書物によれば神格獣の『八又ノ大蛇』だったはず……。

神格獣の中での階級はかなり上位のものであり、その実力もかなりのものであったはず……。だが、何故八又ノ大蛇がこちらに向かってきて……いや、考えればすぐに分かる。八又ノ大蛇の狙いはミカエルか……。

「見えましたか？」

「あぁ。全く……この間に引き続き神格獣のお出ましか……。シェリル、ミカを頼む」

「何故ミカちゃんをなのですか？」

確かに何の関係もないはずのミカを守れ、と言われれば疑問に思うのも仕方がないが、今はそれを詮索せずに素直に頷いてもらいたいものだな。

「いずれ話す。今はミカを守ってくれ。アレの相手は私がする」

「分かりました。気をつけて」

私はシェリルの言葉に片手をあげて答えると、瞬動を使い魔法学院の屋上から一気に飛び出す。八又ノ大蛇の狙いは、魔法学院に居ると認識しているミカのはず。ならば八又ノ大蛇が向かうのは必然的にこちらになってくる。

ならばやはり意識を逸らして誘導するか、手っ取り早く一瞬で終わらせるのが常套手段と言える。ただ、神格獣相手に長期決戦など挑む気などはさらさらない。よって選ぶ選択肢は手っ取り早く一瞬で終わらせるになってくる。

そう思った私は八又ノ大蛇から一定の距離を保ったところで立ち止まり、銃を構える。そしてスコープを覗き八又ノ大蛇の『死の点』に狙いを定め、引き金を引く。銃口から放たれた蒼色の魔力弾が放たれ、真っ直ぐに八又ノ大蛇に向かっていく。

だが八又ノ大蛇に当たる前に何かに弾かれてしまったのか、魔力弾が弾け飛ぶ。当たる前に弾けた、と言うことは魔力障壁でも展開されていたのか？　だがそれならばその魔力障壁の『死の点』もスコープを介すれば見ることが可能なはずだ。

やれやれ……。神格獣というのはどれもが固有な能力を保持しているために、攻略が些か難しくなっているな。書物にも八又ノ大蛇の名前しか載っておらず、ドコが弱点だとかいうのは載っていなかったな。

――ゴアァァアアアアアアアアアアッ！！

八又ノ大蛇がそう叫ぶと十キロ以上も私から離れているのにも関わらず、私の周りから氷の槍が現れた。なるほどな、空気中の水分を凍結して氷の槍を形成したのか……。しかしコレだけの数の氷の槍を形成するとは、逆に相関するな。

しかしただの氷の槍などで私を仕留めようとするなど、思い上がっているにもほどがある。私はそう思いながら、周りの氷の槍に魔力弾を撃ち込んでいく。この程度の強度ならばわざわざ『死の点』を確認するまでもない。

「数が多すぎるな……。あまり強引なのは好きではないが、今の私程度では考えている暇はない、か」

私は氷の槍を撃ち落としていきながら自嘲じみた笑みを浮かべながらそう言う。言った後につけている枷を全て解除した後に、さらに距離を置き十五キロほど離れた位置までいくと、再び銃を構える。今まで魔力弾に込めていた魔力を増幅し、一撃で『千の雷』五発分の威力が出るようにする。

銃口の先に二重螺旋の円のような魔法陣が展開される。二重螺旋の円の間に、見たこともないような文字が描かれているが、この際気にしている余裕はない。魔法陣の中心に魔力弾が形成され、それに魔力が集まり、ドンドンと魔力弾が巨大化していく。

銃口がギチギチと軋みが走っている。さすがにここまでの魔力を込めたことがなかったから、銃が耐えきれるかが分からないな……。いや、耐えてもらわねば困る。

そして魔力を最大まで溜めた瞬間、引き金を引く。最大まで溜められた魔力弾が光線のように放出され、真っ直ぐに八又ノ大蛇に向かっていく。八又ノ大蛇が氷の槍を魔力弾に放つが、私が放った魔力弾はそれをものともせずに向かっていく。

そして八又ノ大蛇に当たる前にやはり何かに当たり、八又ノ大蛇に直撃はなしない。しかもアレだけの威力を込めたのにも関わらずに防がれるとはな。今なら絡繰りを暴けるかもしれぬな。

そう思った私は再びスコープを覗き、八又ノ大蛇を見る。さっきまでは見えてはいなかったが、今ならはっきり見える。どうやらあの結界のようなものは一定距離内に入った砲撃、打撃を有無を言わさず防ぐようだな。旧文明にはアレを破壊する術が有ったかどうかは分からぬが、相手が悪かったな。

「私に『殺せない』ものなど存在しない」

私はそうつぶやき、最大に魔力を溜め込んだ魔力弾を防いでいる結界のようなものに対して、魔力弾を放つ。何かを『殺す』には威力などは必要ない。ただ、それを『殺せる』かどうかと言うことだ。

そして後から放った私の魔力弾が結界を『殺す』。結界という壁がなくなったために、私が最初にはなった魔力弾を邪魔するものはもう何もない。そして魔力弾が八又ノ大蛇に向かう。

――――ゴアァァアアアアアアアアアアッ！！

だがその魔力弾を八又ノ大蛇がブレスのようなものを吐き出して、私が放った魔力弾を相殺しようとしてきた。さすがに八つ分のブレス相手では私が放った魔力弾も勝てなかったようだな。

「だが、それも計算のうちだ。言ったであろう？　私に『殺せない』ものは、ないッ！！」

私は八又ノ大蛇が私が放った魔力弾に意識が向かっている間に、八又ノ大蛇に接近していた。そして魔力弾が殺された瞬間に、八又ノ大蛇の『死の点』に向かって魔力弾を放った。

事前に結界を『殺して』おいたために八又ノ大蛇を守るものは何もない。魔力弾により『死の点』を貫かれた八又ノ大蛇はまるで空気に溶けるかのように消滅していった。

「任務完了、といったところか。やれやれ……自分のためとは言え、コレぐらいの仕事ならば、軽く一軒家が買えるな」

最近私の相棒となりつつある口癖（やれやれ）を呟きながら、タバコに火をつけた。さて、あとは魔法学院に帰るだけか。

◆◆◆◆◆

side　シェリル

私はシキ君と別れてから魔法学院に戻り、ミカちゃんを探していた。それにしてもシキ君の口からでた『神格獣』と言う言葉……。また、と言うことから以前に現れたあの謎の生物も神格獣ということになりますね……。

神格獣は旧文明が滅びたときに一緒に滅びた、と何かの文献で見たような気がしたのですが、何かの間違いだったのですかね？

とにかく、今のシキ君が頼むというくらいですから、再び何かの事件に巻き込まれたと思った方が良いかもしれませんね。全く……ここまで事件に巻き込まれる、というのはバルドの時以来ですね。

私はそんなコトを思いながら、ミカちゃんがいつもシキ君と一緒にいるはずの図書室に向かう。するとそこにはミカちゃんと一緒にユーリさんとエルさんの二人がいた。何というか、久しぶりに会いましたね。

「お久しぶりです。ユーリさん、エルさん」

「あっ、シェリルさん！！」

「……どうも」

私のことを見つけたユーリさんとエルさんがいつも通りと言うところを見ますと、ここに危険が迫っていたと言うことはないのでしょう。ミカちゃんも元気そうですし。

「ちょうど良いです。シキ君が来るまで私もここにいても構いま

せんか？」

「シキ兄も来るの？」

「えぇ。しばらくすればここに来るはずです」

今のシキ君ならば最上級の神格獣ではなければ負けるなどと言うことはあり得ませんし、すぐに来ることでしょう。私はそんなコトを思いながら、旧文明について調べていたシキ君が戻していない本を手に取る。

最上級の神格獣は『黒装龍（ディオス・ドラゴン）』。歴史に名を残すほどの神格には及ばないもののその力はまさに天下無双。現代の魔法で太刀打ちするとなれば、いくら魔法軍を投入したとしても勝てる望みは薄いですね……。

「……シェリルさんも、旧文明に興味ある？」

私がそんなコトを考えていると、旧文明について記されている本を見ている私を見上げながら、エルさんがそう訊ねてきた。

「あっ、いえ。興味があると言うわけではないのですが、旧文明の剣術は見習うところが多いですから」

「……そう」

なんだかあまり感情が読めない子ですね……。ユーリさんの友達なのですから、悪い子ではないのでしょうが、もう少し感情を豊かにしてもらえると私としても助かるのですが……。

と、私がそこまで考えると近くに異様な威圧感を感じた。戦いの雰囲気などを知っているはずもないユーリさんとエルさんの二人でさえ、その異様な威圧感に気づいたようですね。ですが、いったい何者でしょうか……。

何にしても、このような威圧感を与えながら近づいてくると言うことは、敵であることは間違いなさそうですね。私は腰に携えている刀の柄に手を添えながらそんなコトを考える。

「ユーリさん、エルさん。私の後ろに。あとミカちゃんも頼みます」

「う、うん……」

「……（コクン）」

私は二人が返事してくれたのを確認すると、図書室の扉に意識を集中する。刀を握る手に汗が滲む。まさか私が戦う前にここまで緊張するなど、思いもしませんでしたね……。私がそんなコトを思っていると、扉が開けられた。

それはまるで、ここの生徒がただ図書室に来ただけのように軽やかな動作だった。ただ、入ってきたのは魔法学院の生徒ではなく、全身をローブで覆い顔に包帯を巻いて素顔を隠している人物だった。その出で立ちには全くの隙がなく、歴戦の戦士と思わせる。

「……鍵だけかと思ったんだが、どうやら邪魔がいたみてえだな」

その人物は図書室に入ってきて私たちを見ながら、溜め息混じりでそんなコトを呟いた。

「アナタは、何者ですか」

「悪いが、黙秘させてもらう」

「アナタの目的は」

「鍵の回収だ」

「鍵とは何ですか」

「それも黙秘させてもらう」

今の短いやり取りではほとんど分かりませんでしたが、それでも分かったことがある。まず私たちを見て邪魔、と言ったのですから少なくとも敵意を向けている私は邪魔の一因にはいるのでしょう。

次に鍵、と言うことですが邪魔というくらいですから私が遮っているもの、つまりは後ろにいる三人の誰かにあたる。そしてシキ君のミカちゃんを見てて、という言葉から推測するとあの者の狙いは……。

「アナタの狙いは……ミカちゃん、ですね」

「おいおい、今の会話でそこまで分かったのか？　とんだ名探偵だな」

目の前の人物は軽口を叩いていますが、未だに隙は見せない。マズいですね……この状況を見る限りあの者は私より一段も二段も実力が上、そんな物を相手にみんなを守りきれるのでしょうか……。

「賢いアンタなら分かるだろ？　さっさと鍵を渡してもらおうか」

「生憎、私は彼女の保護を頼まれてまして。ドコの誰かも分からないアナタに、渡すわけにはいきませんッ！！」

私はそう叫びながら瞬動で一気に謎の人物の懐に潜り込む。瞬動をしたときの衝撃で図書室の床が抜けてましたが、今はそのようなことは気にしてられません。事前に柄にかけておいた手に力を込めて、刀を首もとめがけて一気に抜刀する。

だが次の瞬間、私の表情は驚愕に固まった。今の私の一撃はまさに全力の一撃、仮に倒すことは不可能だったとしても、致命傷の一撃を与える自信があった。しかし、謎の人物は私の本気の一太刀をただのナイフで受け止めていた。

「さすが『騎士団長（ナイトリーダー）』の二つ名を持つだけはあるな。正直、‘今のオレ’じゃギリギリだったぜ」

「それはまだ二段目、三段目があるみたいですね。いったいドコの魔王ですか？」

「魔王じゃねえけど、二段目、三段目があるのは確かだな」

くっ、今の状態でも私が勝つには決死の覚悟でやらなければならないにも関わらずに、まだ上の力があるなんて正直勝てる気はしませんね。ですが、彼が来るまでは持ちこたえてみせますッ！！

「おっと、さすが騎士団長（ナイトリーダー）様だ。刃物同士で刃物を斬るなんてな」

私は刀を無理矢理に振り抜き謎の人物のナイフを切り裂き、そのまま謎の人物をも切り裂こうとしたのですが、あっさりと避けられてしまいましたね。それにしても、何かの魔法をかけて強化してるのかと内心では思っていましたが、斬ってみれば種も仕掛けもないただのナイフ。

コレだけを見ても実力の差は明らかですね。全く……つくづく世界の広さを教えられますね。そんなコトを思いながらも距離を空けられる前に、謎の人物の懐に潜り込む。二メートルもある長刀ですと、中距離戦が定石なのですが私の場合は近距離戦の方が動きやすい。

「うおっ！？　長刀のくせにこの距離はねえだろ！？」

「戯れ言をッ！！」

私は謎の人物が軽口を叩いている間も絶え間なく刀を振るっていく。しかし私の刃はあたることは愚か、掠ることすらままならない。完全に遊ばれてるとしか思えませんね。ならば、その余裕をこの一撃で断ち切るまでですッ！！

「秘剣――」

私は一瞬だけ謎の人物から距離を置き、私がなせる最大の技を使うための構えをとる。すると今まで余裕そうにしていた謎の人物から余裕が消える。

「さすがにそいつはマズい。しゃーねーな、試してみるか」

謎の人物はそう呟きながら、目の辺りにつけていた包帯を少しだ

けずらし、目だけを見えるようにする。何をするつもりかは分かりませんが、コレが私にできる最大の技……。

「――――燕返しッ！！」

そして私がなせる最大の技を謎の人物に向かって放つが、それで謎の人物を切り裂くと言うことはなかった。何故ならば謎の人物は私の三太刀を全て『殺した』から。私の刀は刀身の半ばほどから、綺麗に切り落とされ、もはや刀としての機能を失っていた。

謎の人物の手にはさっき私が切り裂いたナイフとは違うナイフが握られており、それで私の刀を切り裂いたことが分かる。どういう原理で切り裂いたかは私には理解できません。私がやったように力でねじ伏せたのか、だとしても『秘剣・燕返し』をどうやって防いだかは理解不可能です。

「なかなか使い勝手が良いな。この力はコピーしといたかいがあったぜ」

謎の人物はそう呟きながら私に蒼色に染まった眼を向けてくる。その瞳はドコまでも綺麗でありながら、濁りきっているという矛盾した瞳だった。そして私の鳩尾に拳を叩き込んでくる。ただの拳だと言うのに私はその一撃を喰らい動けなくなる。

「さて、渡してもらおうか」

謎の人物はユーリさんとエルさんに近づいていきながらそう言う。何故でしょう……謎の人物はあの二人にはまるで敵意を向けていない。むしろアレは……。

「嫌だ！！　絶対に渡さないよ！！」

「……ダメ」

ユーリさんとエルさんの二人は謎の人物とミカちゃんを遮るように前に立つ。ダメです、アナタ達ではその者には勝てない……。早く……ミカちゃんを連れて逃げてください……。くっ、声が出ないだけでなく、体まで動きません……。動かせても片手一本、さらに一回限りですか……。

「そっか……。あんまりお前らには手荒な真似はしたくなかったんだけどな……」

そう言ったとき、今まで全く隙を見せていなかった謎の人物に大きな隙が出来たのが分かった。仕留めるコトは不可能ですが、致命傷を与えるだけならば可能です。そう思った私は半ばから折れてしまった刀を謎の人物に向かって投げつける。

狙いが上手く定められてなかったのですが、私が投げた刀は真っ直ぐに謎の人物の肩に突き刺さる。いくら半ばから折れてしまったとは言え、それでも肩を貫通するほどの長さは残ってます。肩に突き刺さった刀は貫通し、鮮血が舞う。

「ぐ……っ。気絶させとくべきだったか……。まあ、いい。もうすぐ……もうすぐ全てが終わる」

謎の人物はそう呟くと一瞬にしてユーリさんとエルさんを気絶させて、ミカちゃんを連れ去ってしまった。追いかけなければ、と意識では思うのですがそれとは裏腹に私の意識はだんだんと闇に沈んでいく。

「スミマセン、シェリルさん……」

そして謎の人物がそう言ったのを境に、私の意識は完全に闇に沈んだ……。

第十四撃『動き出した計画。連れ去られる命運をかけた鍵』（後書き）

アンケートまだまだ実施中です！

感想待ってます！

第十五撃『現れた理想郷（アヴァロン）。乗り込みしは一人の狙撃手』

ｓｉｄｅ　シキ

魔法学院に帰ってきた私の目に最初に飛び込んできたのは、何者かにより気絶させられている魔法学院の生徒達の姿だった。だが気絶させられているのは生徒だけではなく、教師も気絶させられていた。

先に進んでいくが例外など一人も居らず、全員が全員気絶させられている。幸いに、と言うべきかコレだけの人数を気絶させられたのにも関わらず、怪我らしい怪我は誰一人として負ってはいなかった。

ただ、それだけコレをしでかした者の実力が上だと言うことを示しているのだがな。だが実践経験を積んでいない魔法生徒や魔法先生ではこうなるのも致し方ない。シェリルならば相手がどれほど強かろうと、手も足も出ないと言うことはあるまい。

そんなコトを思いながら急いでシェリル達が居ると思われる図書室に向かう。だが、私はそこで驚愕してしまった。図書室には何者かによって気絶させられているユーリとエル。シェリルまでもが気絶させられている始末だ。

さらに何者かと交戦したらしきシェリルの刀が、半ばほどから折れていた。しかもユーリ達の近くに落ちていた柄の部分に、わずかに残った刀身に何者かの血がついていた。床にも血が広がってることから、相手に手傷は負わせたらしい。

「大丈夫か、シェリル」

私は気絶しているシェリルを抱き起こしながらそう問いかける。目立った外傷はドコにもない……か。まさかシェリル相手でも無傷で済ますことが出来るほどの実力者が来たというのか……？

「う……っ……。シキ……君……？」

「そうだ。いったい何があったんだ？」

目を覚ましたばかりで思考が回復してなかったのか、最初はワケが分からないと言った感じだったのだが、すぐに思考が回復したシェリルは私の肩を掴みながら言ってきた。

「ミカちゃんが、さらわれました……っ……」

そういっている途中でシェリルが腹を押さえながら急に顔をしかめた。なので失礼ではあったが、私は服をまくり様態を確認した。するとそこには明らかに殴られたと思われる青あざが出来ていた。

なるほどな……さすがの敵もシェリル相手には手荒にやらなければならなかった、ということか。最近よく思うようになったが、回復魔法くらいは学んでおくべきだったな。こういう時に何もしてやることが出来ない……。

「怪我は大したことはない。あとでユーリかエルに治してもらえ。それより、ミカが……」

「済みません……。私の力が及ばないばかりに……」

「いや、シェリルが気にすることではない」

むしろ今回のことには私に非がある。なぜ神格に狙われていると分かりながら罠の一つも仕掛けなかった？　なぜ彼女に事情を説明せずに都合のいいことばかりを言っていた？　私の非をあげていけばキリがない。

とにかく今は一刻も早くミカをいや……ミカエルを連れ戻す必要がある。このままでは神格が復活してしまうのも時間の問題と言える。

「相手の特徴は分かるか？　魔力の痕跡でも構わない」

「あの者は魔力は使っていませんでした……。見た目は顔に包帯を巻いていて、ローブを羽織っています」

マズいな、魔力を使っていないとなればそれを伝って本人を捜すことも出来ない。さらに見た目が顔に包帯を巻き、ローブを羽織っていると言うことは完全に誰かは分からないと言うことだ。

「ただ……」

「ただ、なんだ？　わずかでも良い。情報がほしい」

「……あの者は私の燕返しを『殺して』いました」

シェリルの燕返しを殺していた……？　威力を相殺したという意味で使っていたならば使い方は間違ってはいない。だがシェリルが言ったのは燕返しの威力を『殺して』いたのではなく、燕返しを『

殺した』だ。

有り得ない……この世界に『直死の魔眼』の力を持っているのは私しかいない、否、居るはずがない。しかも私も持っているとは言え私自身にではなく、銃のスコープに備わっているだけに過ぎない。どういう経緯で手に入れたかは分からぬが、厄介極まりないな。

「分かった。あとは私に任せろ。シェリルはユーリとエル、あと魔法学院の皆の介抱を」

「待ってください！！　あの者の実力は明らかに私やアナタよりも上です！！　一人で行ったとしても返り討ちに遭うだけです！！」

「知るか、そのようなコト。私は守るべきものは命を懸けて守る主義だ」

「そうはいっても敵の居場所がドコか分かっているのですか！！」

「さあな。だが昔っから相場が決まっているだろ？　バカと悪役というものは高いところが好きだ」

私はそう言いながら魔法学院の図書室の窓を開けて、空をみる。すると雲でいっぱいになっていた空から割って出てくるように一つの戦艦のようなものが現れた。しかも明らかにその造りは現代魔法じゃ造れないような構造をしる。

どう見てもあれが神格のいる場所だと告げているようなものではないか。堂々と見せていることから、私達ではあの船を落とすことは出来ないと確信しているのか、それとも落とそうとしても返り討ちに出来ると考えているのか……。どちらにしても、探す手間が省

けたというものだ。

「あれは『神隻』……！？　かつて神格が乗っていたといわれる伝説の戦艦……！！」

シェリルが言ったように、あれは神格が乗っていたとされる過去にも今にもない最強の戦艦。どのような魔法も全て力でねじ伏せる不条理の戦艦。それを見ながら私は告げる。

「あそこにミカは居る」

「この前の騒ぎといい今日といい……アナタは、何を知っているのですか……？」

シェリルは真剣な眼差しで私の眼を真っ直ぐに見据えながら問いかけてくる。すでに世界を巻き込むような事態に発展してしまった今、誤魔化していても意味はないだろう。そう思った私は今までのことを全てシェリルに話した。

「それではミカちゃんのに宿っているミカエルを鍵として神格を復活させようとしている……と」

「その通りだ」

「なぜ今まで言ってくれなかったのですか！？　言ってくれれば何かしら対策は練れたはずです！！」

「……無理だな。シェリルも戦ったならば分かるだろう？　今回の相手は規模が違いすぎる」

私の言葉にシェリルは俯き、黙り込んでしまう。仮に私が話していたとしてもおそらく結果はさして変わりはなかっただろう。今の魔法世界でシェリルに勝てる者は探したとしても十人も居まい。

そんなシェリルが簡単にあしらわれてしまった以上、人選でどうにかなるとは思えんし、そんな信憑性もない話を信じ、罠を構築してくれる者も居るまい。実際、私も神格獣を見るまでは神格の復活など、ただの絵空事と思っていたからな。

「さて、私は行かせてもらうよ。早くしないと、世界の危機らしいからね」

「なら、私も行きます。彼女がさらわれたのは、私にも非があります」

シェリルはそういうが彼女には全く非などはないのだがね。君は私がなんの説明もしなかったのにも関わらず、何のことかも分からずに戦ってくれた。そんな君を誰が責められるものか。

だが、そういったとしても君はついてくるのだろう？　なんせ、君は責任感の強い女性だ。一度頼まれたことは断れない、悪く言えば頑固な性格だからね。

私がそのようなコトを思っていると、神隻から大量の神格獣が出てきた。なるほどな、たとえ神隻の力で近寄れないとしてももしものコトを考え、神格獣までも出してきたか。それだけ、この儀式は重要ということか。

「済まないが、やはり神隻には私一人で乗り込む。君は各所に連絡し、あの神格獣をどうにかしてもらえるか？」

「……」

「頼む、コレは君にしか出来ないことなんだ」

シェリルは私の言葉に一回だけため息をつき、仕方ないと言わんばかりの表情をしながら私に言ってきた。

「不本意ですが了承しましょう。よくよく考えてみれば、今の状態の私がアナタについて行ったところで、足手まといになるだけですから」

「……悪いな」

「いえ、別に構いません。ただし、ユーリさんとエルさんのために、生きて帰ってきてください」

私はシェリルの言葉に片手をあげて答える。タバコに火をつけ、口に加えながら気絶しているユーリの方をみる。

やれやれ、平和そうに眠って……少しは俺の身にもなってもらいたいな。

私はそんなコトを思いながら改めて気を引き締める。神隻から現れている神格獣の数は数え切れない、と言うほどではないがアレだけの数が居たら対処しきれまい。全てを倒すほど時間はないが、神隻にたどり着くまでに、いくらか減らさせてもらおうか。

「シェリル、神格獣の方は任せるぞ」

私はシェリルにそういった後、返事も聞かないまま瞬動を使い空に浮かんでいる神隻に接近していく。そんな私の存在に気づいた神格獣がこちらに向かってくるが、生憎と全てを相手にしてる暇はない。

腰から獣を抜き放ち、私の進行方向にて私の進行の妨げとなっている神格獣の『死の点』に向けて魔力弾を放つ。もちろん、前にみた『合成竜（キマイラ・ドラゴン）』なども居たが、それを考慮した上で進む速さを緩めないように神格獣を殺していく。

「……なんでさ」

また某聖杯戦争の正義の味方の口癖が出てしまったが、今回ばかりは勘弁してもらいたい。なぜかって？　なぜかと問われれば至極簡単だ。あの神隻の砲台が私の方に向けられているからだよ。

しかもこの地に溢れている魔力を吸収して巨大な魔力弾を形成していっている。アレを『殺す』には殺せるのだが、私が魔力弾に狙いを定めて引き金を引こうとも、神格獣がそれを弾いてしまう。

神格獣の『死の点』に魔力弾を放っているわけではないため、『雷の斧』程度の威力しかない魔力弾を弾くのは簡単だ。くっ、アレが放たれてしまえば確実にアリアドネーが機能しなくなるぞ……。仮に放たれてからあれを殺したとしても余波で影響がでる。なんとしても放たれる前に、あれを殺さなければ……。

そう思った私は移動するのをやめて、銃を構える。銃口の先に二重螺旋の魔法陣が現れ、巨大な魔力弾が形成されていく。魔力が溢れるこの場での魔力の蒐集がかなり早い。そして最大まで溜まったとき、未だに形成されている神隻の魔力弾に向かって私の魔力弾を

放つ。

私の放った魔力弾は神格獣を撃破していきながら進んでいき、神隻が魔力弾を放つ前にその魔力弾を殺すことに成功した。

ちょうど良く邪魔者も消えたか……。私はそんなコトを思いながら、虚空瞬動をしている足に力を込め、一気に神隻に接近する。そしてようやく神隻の内部に潜り込むことに成功した。

周りを見渡すが神隻の壁や天井の造りなどが、現代とはまるで異なる造りをしており、何かしらの罠が仕掛けられているようにも見える。なので罠に警戒しながら進んでいくと、一層開けた部屋にたどり着いた。

ふむ、普通ならここに誰かしら居ても良さそうなのだが……ってお出ましのようだな。私がそのようなコトを考えていると、突如として床に現れた魔法陣から『神格兵』が現れた。

神騎兵とは神格を守るためだけに創られたいわば人造人間（ホムンクルス）のような存在だ。感情も何もなく、ただ侵入者を排除するためだけの存在。能力事態は大したことはないが、一体一体の身体能力が高いのが面倒なところだ。

だが……

「私相手にこの程度の数で、時間稼ぎを出来ると思っているのか？」

私は言葉を理解しているとは思わぬが神騎兵に向かってそう言いながら、目の前にいた神騎兵の五体の『死の点』を貫き殺す。神騎兵の数はおよそ三十。五分もあれば十分――。

「時間稼ぎするのに、雑魚しか用意してないはずがないだろ？侵入者」

「ちっ……」

突如として後ろから聞こえてきた声に私は咄嗟に反応し、前に飛び退く。その際に私に一番近かった神騎兵を数体殺しておく。そして私が飛び退いた直後に私の居た場所に一閃が振り抜かれていた。

わずかに感じた頬の痛みに私は手を添えてみると、指が濡れた。つまりはさっきの一撃で頬が斬られていたことになる。生死に関わるような重大な一撃でなかったのは幸いと言えるだろう。

私は床に向けていた視線をあげて、私の後ろから現れた者をみる。右手には、何かの強化がかけられてるとも思えない、ただのナイフ。ローブを羽織り、顔には誰だか判別できないように包帯を巻いている。

そして眼の辺りでわずかにずらしている包帯から覗く眼……あれは明らかにこの世界ではあり得ないありとあらゆる全ての死を視ることが出来る眼――直死の魔眼だった。

「へぇ、今のを避けるなんて。大した奴だな、お前」

「誉めてもらえて光栄だよ。単刀直入に訊ねよう。貴様は何者だ」

「敵に自分のことを教えるわけないだろ？　それくらい、あんたなら分かるはずだぜ？」

尤もだ、と私は軽く笑いながら立ち上がる。言葉を交わしながら隙を探ってみたのだが、全く隙が見当たらない。やはりあ奴がシェリルを倒した者と見て、間違いはなさそうだ。

私がそのようなコトを考えていると神騎兵背を向けているように立っている私に、神騎兵が襲いかかってきた。もちろん動きが簡単に読める相手に、私が後れをとるわけがない。引き金を引き、近づいてきた神騎兵の『死の点』を貫く。

「話の最中に攻撃を仕掛けてくるとは、ずいぶん姑息な手を使うのだな」

「姑息な手？　それは違うぜ。オレが離してる間に他の奴らにあんたを攻撃させる……立派な作戦だろ？」

「それを姑息な手、と言うのではないか？」

「おいおいテレビの見過ぎだぜ、あんた。ヒーローが変身してる間に怪人は攻撃しないってのがあるみたいだが、オレからしたら考えられないな。これもそれと同じだろ？」

確かにあ奴が言っていることは実に理にかなっている。変身してる間に怪人が攻撃しないのは、それでは番組が成り立たなくなるからだ。だが現実は違う。そのようなコトを現実でしているならば、狙い撃ちをされるのが普通だ。それを姑息と言う私が間違っているとしか、言いようがないな。

「無駄話もここまでにしようぜ。あんた攻める側でオレは守る側。役回りがハッキリしてんだ……やることは一つだろ？」

「そうだな。私が貴様を下して、ミカを助ける」

「オレはあんたを倒して、それを阻止する。実に簡単な話だ」

奴はそういって目を瞑った後、一気に目を見開き私の懐に潜り込んできた。くっ、かなり速い。だが、見切れないと言うほどではない。私は真横に瞬動で移動し、奴に向かって魔力弾を連射する。

それと同時に私に攻撃をしてきた神騎兵を撃ち抜き、殺した後に奴から素早く距離をとる。苦手な距離はないが、銃とナイフではどちらが接近戦に向いているかなど、火を見るより明らかだ。

さらにはあ奴は『直死の魔眼』を持っているのだ。迂闊に近づけばこちらの『死の点』を穿たれたり、『死の線』を斬られたりして終わりだ。

「あんたも分かるだろ？　この眼には、魔力弾なんか効かないってコトは」

奴はそう言いながら私が放った複数の魔力弾の『死の点』をナイフで貫いていきながら、私に接近してくる。もちろん近づかせまいと魔力弾を放つが全て殺されている。

「分かっているさ。だが、死が見えるだけで身体能力そのものがあがるものではあるまい」

私はそういうと現在つけている枷を全て外し、一瞬で奴の背後に回り込む。枷を外した私の速さは先ほどまでとは天と地ほどの違いがある。そして回り込んだ私はスコープを覗き込み、『死の点』の

位置を確認しようとしたのだが、そこで驚愕してしまった。

完全に奴の背後をとったというのに奴はすでにこちらに向き直り、ナイフを振るってきているではないか。私はスコープを覗くのを中断すると瞬動を使い床を蹴り、奴の真上にあがり魔力弾を連続で放つ。しかし奴はそれにも反応し、魔力弾を殺した後に私に接近してくる。

「オレは『神格』の血を引いてんだ。甘くみない方が身のためだ」

「なるほどな。だが、貴様も私を甘くみない方が良い。射撃がいつも正面から来るとは限らぬだろう？」

「なに？」

私は奴が怪訝そうな表情をし、私から気を逸らした隙を見逃さずに懐に潜り込んできた奴から一気に距離をとる。いくら『神格』の血を引いているとはいえ、所詮今の時代に生きるならば神格でも何でもない。

「戦いとは騙すのも戦略のうちだ」

私はそう言いながら未だに動き出していない奴に向かって銃口を向ける。銃口の先に二重螺旋の魔法陣が現れ、一気に魔力が収束されていく。

「そうだな。騙すのも策略のうちだ」

「――――ッ！？」

目の前にいた奴が一瞬にして私の視界から消えたかと思えば、不

意に後ろから声が聞こえてきた。振り向けば、すでにナイフを私に向かって振り下ろそうとしてくる奴の姿がある。だが、それも計算のうちだ。

「後ろにも、注意した方が良いぞ」

私はそう言いながらそのまま誰もいない方向に魔力弾を放つ。もちろん誰もいるはずがないのだから、奴には当たるはずがない。だが――。

「今度は――がはっ!?」

――その先に転移型の魔法陣があったらどうかな？

私が魔力弾を放った方向には、銃口から現れているのと同じ二重螺旋の魔法陣が現れている。さらには奴の後ろにも全く同じ形の魔法陣が展開されている。

この二つの魔法陣は繋がっており、そこを通りだけで二点を移動できるようになっている。つまりはその魔法陣に魔力を溜め込んだ魔力弾を放つことにより、奴の後ろから魔力弾を当てることが出来た。

正直ギリギリだった……。少しだけ学んでいた魔法、転移魔法の応用版でこのようにやってみたのだが、成功するとは思わなかった……。だが何にしても、私の溜め込んだ魔力弾が直撃したのだ。死んでいなくとも、もう立ち上がれま――。

「だから、甘くみない方が良いって言ったろ？」

その声が聞こえた瞬間、ゴトリ、と言う音が聞こえた。一瞬、何が起こったのか思考が追いつかなかった。いや、追いつけなかったと言った方が適切だ。少しして、ようやく思考が戻ってくる。

そんな私の戻った思考で最初に目にしたのは右腕が肘の辺りからすっぱりと切り落とされ、右腕が銃ごと床に落ちていた光景だった。痛みはすぐにやってきた。感じコトもないような激痛に私は思わず膝をつくが、あまりそうしている時間はない。

「大丈夫。全てが終わったら、元に戻る。だから今は……死ね」

奴が私を殺すべくナイフを振るってきていたからだ。このままでは本当に死んでしまう……。目の前に感じる『死』に恐怖しながらも、左手で銃を拾い上げ奴から距離を置く。

だがそんなわずかな距離などすぐに埋められてしまう。奴が強いことなど、最初から分かっていたではないか。だが私はそれ以上に自らの力に内心は慢心し、勝てると思いこんでいた。その結果がこの様だ。

この際そんなコトはもうどうでも良い。考えろ、どうすればこの状況を打開できる？　考えろ、どうすれば私は生き残ることが出来る？　考えろ、どうすれば私は……奴に勝てるのだ！！

「諦めろ。お前の負けだ」

奴はそう言いながら私にナイフを振るってくる。それを最小限の動きで紙一重で避け、ナイフを持っている手に手刀を喰らわせてナ

イフを落とさせる。その後に鳩尾に向かって蹴りを放つ。

「ぐ……っ。まだ悪足掻きを……なっ！？」

さらに鳩尾を抑えて私に何かを言っている奴の『死の点』に向かって魔力弾を連射するが、利き手でないために『死の点』からわずかにずれた位置に放たれる。

しかし今回の場合はそれが役に立った。奴も『死の点』が見えるだけに完全に『死の点』だけをガードしていたために、私が放った魔力弾をモロに喰らい、そのまま吹っ飛ばされる。

そして私は銃を腰に戻すと奴が落としたナイフを拾い上げる。どうせ魔力弾を放ったところで、今の私では紛れでしか『死の点』は貫けまい。ならば、事前に確認しておいた『死の点』を直接貫くしか、私が勝つ方法はない。そう判断した私は一気に奴に接近する。

「狙撃手が接近戦か……。面白ぇ、乗ってやるよ！！」

奴はそう叫びながらローブの中から同じようなナイフをもう一本取りだし、私とナイフでの斬り合いを挑んでくる。激突した二つのナイフからガギィィィィンッ！！　と言う金属同士を打ち付けた独自の音と共に衝撃波が発生する。

その衝撃波は床を砕き、壁に亀裂を作る。幾度となくナイフを打ち付けあい、そのたびに衝撃波が発生し部屋を破壊していく。衝撃波により奴の顔に巻いてある包帯が切れていく。私の頬や腕に切り傷が入る。コレだけを見れば互角の戦いをしてるように見える。

だが、それは全く見当違いだ。私のナイフにはすでに皹が入り、

今にも砕けてしまいそうなほどだ。元々、遠距離での戦いを得意とする私に対し、奴は接近戦を主体とする者だ。どちらが優勢かなど、言わずとも分かる。

「接近戦なら、オレはあんたには負けないッ！！」

奴の『直死の魔眼』により完全にナイフの『死の線』が斬られ、私のナイフの刀身が半ばほどから斬れ落ちる。そしてそれと同時に私の腹に奴の蹴りが入り、壁際まで吹き飛ばされる。

壁にぶつかると肺の中から強制的に息が吐き出される。すでに止血はしたが、それでも大量に血を失ってしまいながらも、無理な動きをした私にはすでにほとんど力は残っていない。そんな私に奴は一歩ずつ近寄ってくる。

「あんたとは……」

奴は私の目の前にまで来るとそう呟いた。奴はあれだけ打ち合いながらも息一つ乱していない。なるほど……やはり神格の血を引く者とは、ここまでに強い者だったのか……。

「もっと別の形で会いたかった」

「あぁ……私もそう思う」

何故だかは分からぬが、不思議と奴には殺意が沸かない。シェリルやユーリに怪我をさせていないとは言え、手を出したコトには代わりはない。それにもかかわらず、奴には殺意が沸かない。それはかりか、私は奴を大切な者のように感じてしまう。全く……おかしな話だ。

「安心しろ。全てが終われば、平和で、みんなが笑って過ごせる世界になってるはずだ」

そう言いながら奴はナイフを振り上げる。

私は奴の言葉に嘘だ、と言いたかった。そういった奴の表情、いや、目がそうはならないと語っていたからだ。その目には悲しげな感情が籠もっており、何故こんなコトをしなければならないのだ、と言っている。

やりたくないことをやらされてるのかもしれない。もしかしたらこれは演技なのかもしれない。……どちらにせよ、私は負けるわけには行かないんだッ！！

「――――ッ！？　何だよ……それ」

奴はそう言いながら一歩だけ後ずさる。奴が何だ、と言ったのは私のないはずの肘から先に現れている、黒い霧で形成された獣のような腕のことだ。この腕は私の意志によって動くみたいだが、私にもよく分からぬ。

よく分からないが今のもう何の打開策のない状態からすれば、こんな力でも使える。

「私にも分からないが、隙だらけだッ！！」

私はそう叫びながら奴の頭を黒い霧のような腕で掴み上げる。

「ぐ……っ。嘗めるな！！　この眼に殺せないものは、ないッ！

！」

奴はそう言いながらナイフを振るい、黒い霧状の腕を切り裂く。奴の頭は離してしまったが、この黒い霧状の腕はすぐに再生する。だが、すでに反撃の機会は私にはなかった。何故なら、奴のナイフが私の『死の点』を貫いていたからだ。

「く……そ……」

『死の点』を貫かれた私にはもう死しか待っていない。体から力が抜けていく。視界がだんだんと暗くなっていき、瞼が重くなっていく。そんな暗くなっていく視界で奴の包帯が解けるのが見えた。

もし私が死の直前でなかったならば、驚愕していたところだろう。なぜなら、包帯の下の奴の顔は私の良く知っている顔だったからだ。名前を……。

――――ティアレンス・バイシタル。

第十五撃『現れた理想郷（アヴァロン）。乗り込みしは一人の狙撃手』（後書き）

アンケートまだまだ実施中です！

感想待ってます！

第十六撃『狙撃手の戦線離脱。オレを恨め……そしていつかオレを殺せ』（前書

前話を投稿したらお気に入りが増えるどころか、急激に減った…
…。

かなりショックを受けたので、連続で投稿します……。

ではどうぞ！！

第十六撃『狙撃手の戦線離脱。オレを恨め……そしていつかオレを殺せ』

ｓｉｄｅ　ティア

「安心しろ。全てが終われば、平和で、みんなが笑って過ごせる世界になってるはずだ」

オレはこの神隻に侵入者としてやってきたシキさんに、持っているナイフを振り上げながら言う。

オレはこう言ったけど、全てが終わってもきっと笑って過ごせるような世界には絶対にならない。神格が蘇れば、世界なんか終わったも同然だ。オレはそんな世界に住むのは嫌だった。

だからそれを止めたかった。だけど、神格の血を引くオレにはそれにあらがう手段を持ち合わせていなかった。悲しかった……。この世界に生を受けたときから、オレは神格の復活を遂げるだけのただの道具に過ぎなかった。

「――――ッ！？　何だよ……それ」

オレがそんなコトを考えていると、オレが『殺した』はずの右肘から黒い霧状の腕が現れていた。一目見ただけでオレはあれが旧魔法で有ることを理解した。しかもかなり危険な部類に入る旧魔法だ。

どうしてシキさんみたいに神格の血を引かない者が旧魔法を使えるか分からない。元々、現代で旧魔法が使えるのは神格の血を濃く受け継いだオレとあいつと、ミカだけだ。何故使えるかは分からな

かったが、あれの危険性を感じ取り思わず後ずさってしまう。

「よく分からないが、隙だらけだッ！！」

シキさんはそう叫びながらオレの頭を握りつぶすかのように掴み上げてきた。しまった……この腕が何の能力を持ってるか分からねえ以上、長時間捕まえられてるのはマズい。

「ぐ……っ。嘗めるな！！　この眼に殺せないものは、ないッ！！」

オレはそう叫びながら黒い霧状の腕の『死の線』をなぞり、その部分を『殺す』。すると頭に加えられていた力はすぐに抜け、オレの身動きが取れるようになる。黒い霧状の腕を『殺した』ときに、体から何か抜き取られるような感じがしたが、今は機にしてる場合じゃない。

黒い霧状の腕は『殺した』にもかかわらずすぐに再生してくる。あの腕にどういった力があるか分からない以上、このまま生かしておくわけにはいかない。殺してもオレの旧魔法『創造再生』があれば、死人すら蘇る。

そしてオレはシキさんが次の行動を起こす前に、シキさんの『死の点』をナイフで貫いた。大した血が出ることはなかった。だけど、『死の点』を貫かれた以上、誰であろうと生き残ることは出来ない。

「く……そ……」

シキさんはそう呟きながら糸の切れた人形のように崩れ落ちる。それと同時にオレが顔に巻いといた、誰だか分からないようにする

ための包帯が解けた。きっと……シキさんも死ぬ間際にオレの顔を見たよな……。

なるべくなら誰にも見られたくなかった。オレが、みんなを裏切ったことには違いない。だけど、それでも裏切ったなんて知られたくなかった。全てが終わってから、前と同じようにみんなと過ごせないことは分かってた。だけど、素顔が分からなければそれも可能だと思ってた。

まあ、元々こんなコトをしてるオレがみんなのところに戻れる訳なんてなかったんだ。そんなコトを思いながらオレはシキさんを見下ろす。この人は強かった……オレが神格の血なんか引いてなければ、絶対に勝てないほどに。

「テメェ……シキを殺したのか!!」

そんなコトを考えていると後ろからそんな怒声がかけられた。オレが振り返るとそこには身長は二メートルは越す、赤みのかかった髪を短く切りそろえている竜人――バルド・アスタロトが居た。

「安心しろよ、オレの力があれば、死人だろうと蘇る」

「そういう問題じゃねえんだよ!! 殺さねえまでも、テメェの力でいくらでも捕まえとくことも出来んだろッ!!」

「それが出来たら苦労はしない」

シキさんは例え神格の力を使いオレが作った捕縛具を使ったとしても、必ずそれを破壊して進んでくる。この人は自分の大切な者を守るためならば、自分の命すら厭わない人だ。だからこそ、殺して

おく必要があった。

「だいたい、バルドさんがシキさんとは戦いたくないからって言ったから、オレが戦ったんだ」

「……」

正直言うとオレもシキさんとは戦いたくなんかなかった。オレの大切な親友達の好きな人を、例え生き返らせることが出来たとしても、手にかけるような真似なんかしたくなかった。

「大丈夫だ。役目さえ終えれば、オレたちの大切な者は全て守られる。……残りの全てを犠牲にして」

オレたちは‘一’という大切な親友達を守るために‘九’という魔法世界の全てを犠牲にする。それは一生許されるコトじゃない。願わくば、全てが終わった後にオレを殺してくれ。

そんなコトを考えながらオレはシキさんの死体に背を向けて、バルドさんに向かって言う。

「あなたの守りたかった者を殺したのは謝る。だが、それ以外に、シキさんを止める術はあったか？」

「……ねえよ。あいつは俺の息子なんだ」

バルドさんはオレを殺しかねない目で睨みつけながら言ってくる。そうだ、オレを絶対に許すな。こんな下らないコトのために世界を犠牲にするようなクソッタレなオレを……。

「状況を見に行くぞ。あと少しで……全てが終わる」

「……あぁ」

オレはバルドさんにそう言いながら、部屋をあとにして鍵が居る部屋に向かった。だがその途中で新たな侵入者が来たことに気づいた。

「――――ッ！？　そんな……」

「どうしたんだ？」

「……いや、なんでもない」

なんで……なんで来ちまったんだよ、お前ら……。くそっ……いくらお前らでも通すわけにはいかねえ……。神騎兵は……ダメだ、あいつらじゃ相手にすらならねえ……。

……いや、シキさんを見たら否が応でも止まるか。残酷なやり方だが、仕方ねえんだ……。恨め、憎め……そしていつかオレを殺せ……。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シェリル

「く……っ、数が多すぎます……。各隊、連携して攻撃に当たってくださいッ！！　決して一人では当たらないでくださいッ！！」

「「「「「「「「「「はいッ！！」」」」」」」」」」

私は連絡して駆けつけてくれたアリアドネー騎士団の皆にそう叫ぶ。シキ君が神隻に乗り込んでからしばらく時間が経過しましたが、やはり相手は神格獣……一筋縄ではいきませんね。

私もある程度は一人で相手にすることは出来ては居ますが、シキ君のように一人で何体も倒すことは不可能です。しかも騎士団も複数の隊に別れて撃破に挑んでいますが、一隊で一体の神格獣。しかもかなりの時間がかかっています。

このままでは被害が出るのも時間の問題としか言いようがありません。私も愛用の刀が折られて、予備の刀で戦ってるために『秘剣・燕返し』も安易には使えません……。正直、かなり厳しい状況です……。

「シェリルさん！！」

「――――ッ！？　ユーリさん！？」

私がそんなコトを考えながら神格獣の撃破に当たっていると、不意に後ろから声をかけられた。振り向いてみればそこには、私が先ほどまで介抱していたユーリさんとエルさんが、私に近づいてくるのが見えた。

「何をしているのですかあなた達はッ！！　早く避難してくださいッ！！　あなた達が出てきてどうにかなる相手ではないんですッ！！」

私は近づいてくる二人に向かって怒鳴りつける。今回ばかりはこうしないわけにはいきません。騎士団ですら隊で当たらなければ神

格獣を相手に出来ないと言うのに、魔法学院も卒業していない者が出てきても、死にに来てるようなものです。

「だけど、シキ兄やみんなが頑張ってるのに、僕たちだけ何もしないなんて出来ません！！」

「……手伝う」

確かにその志は立派です。ですが、今の状況からしたらそれはただの無謀で、命を無駄にするような行為でしかありません。それに私はシキ君にあの二人を守ってほしい、と言われています。だから、ここで絶対に戦わせるわけには行かない。

「ハッキリと言いましょう。あなた達が戦場にいるのは……足手まといだ、と言っているのです」

「ッ……。そ、それでも僕は……シキ兄の力になりたいんです！！」

私の目を真っ直ぐと見据えながらユーリさんはそう言ってくる。このまま気絶させて参加させないのは簡単ですが、おそらくユーリさんはそれでは納得しません。だからといって、神隻の中に入ればここよりさらに危険が待っています。

その前に乗り込むとしても私が二人を守りながら行かなければならないのですが、私で二人を守りながら乗り込むことが出来るかどうか……。

「騎士団長（ナイトリーダー）！！　上ですッ！！」

私がそんなコトを考えていると、アリアドネー騎士団の騎士からそう叫ばれて私はハッとした。上を見上げてみれば、以前にこの近くに現れた『合成竜（キマイラ・ドラゴン）』が私に向かって、強靭な尾を叩きつけてくるのが見えた。

くっ、戦場だというのに考え事に夢中になりすぎましたか……。三人で回避するのは不可能。瞬時にそう判断した私は杖に乗っている二人を押し飛ばしたあとに、刀でその尾を受け止める。

「ぐ……っ。私を余り嘗める、なッ！！」

私は刀を巧みに動かして尾の勢いを受け流したあとに合成竜（キマイラ・ドラゴン）の尾を切り裂く。そのあと合成竜（キマイラ・ドラゴン）の首を切り裂く。そして私は二人に向き直ったあとに言う。

「見ての通り私も自分自身を守るだけで精一杯です。それでもあなた達は行きますか？」

「行きますッ！！」

「……行く」

私がそう問いかけるとすぐに二人が答える。なるほど……二人の意志は最初から決まっていた、と言うことですか。ならば、私もそれに答えるしかありませんね。

「分かりました。ならば私が道を開きます。絶対に離れないでください」

「分かりました！！」

「……至極了解」

私は二人がそう答えるのを確認すると、改めて刀を握り直し神隻を見据える。あの魔力砲は短時間ではあまり撃てないようですね。まあ、撃たれても困りますが……。

「行きますよ。ちゃんとついてきてくださいッ！！」

「「はいッ！！」」

私は二人が返事をするのを確認すると、虚空瞬動を使い一気に神隻に近づいていく。もちろんそんな私たちに神格獣が近づいてくるのですが、私が攻撃の隙を与えると思っているのですか？

私はそう思いながら倒せないまでも、動けないように神格獣を切り裂いていく。……こういってはいますが、実際は倒せないから動けないようにしているだけなんですがね……。

そして神格獣を切り裂いていき、神隻の目の前にまで来ると一体の神格獣が私に近づいてくるのが見えた。漆黒の体に深紅の瞳、鋭利な牙に強靭な爪、二本の角……まさかあれは『黒装竜（ディオス・ドラゴン）』！？

「二人とも下がってくださいッ！！」

「えっ？」

「……ユーリ！！　下がる！！」

私が言った直後に黒装竜（ディオス・ドラゴン）が私に突っ込んできた。刀で勢いを受け

流そうにもそんな余裕は全くありません。くっ……ここに来てこんな隠し玉を用意しているとは……。

なんとかユーリさんはエルさんのおかげで事なきを得たようですが、正直この神格獣を相手に、二人を神隻に乗り込ませるのは難しいかもしれません……。が、決めた以上は負けるわけにはいきません。

「はあああああああああああああっ！！」

私はなんとか黒装竜（ディオス・ドラゴン）の勢いを受け流したあとに、ユーリさんに向かって叫ぶ。

「ユーリさん！！　刀を私にッ！！」

「えっ！？　は、はい！！」

ユーリさんは最初は困ったような声を出していましたが、すぐに私に刀を渡してくる。そして私は受け取った刀を鞘から抜き放ちながら、後ろにいる二人に向かって言う。

「黒装竜（ディオス・ドラゴン）の相手は私がします！！　あなた達二人で乗り込んでくださいッ！！」

「分かりました！！　シェリルさんも気をつけてください！！」

私はユーリさんの言葉に無言で頷く。そしてユーリさんとエルさんの二人が神隻に乗り込んだことを確認すると私は改めて黒装竜（ディオス・ドラゴン）に向き直る。刀を握る両手に汗が滲む……正直、黒装竜（ディオス・ドラゴン）に対してまともな斬撃が通じるかどうかと問われれば……通じない、と答えてし

まうかもしれませんね。

普通の神格獣にも手を焼くというのに、最高位の神格獣相手に立ち回れるかどうか……。いえ、立ち回れるかどうかではなく、シキ君もユーリさん達も頑張ってるのですから、勝つしかありませんね。

――ゴガァアアアアアアアアアアアッ！！

「ぐ……っ！？」

私は黒装竜が雄叫びを上げたと同時に、二本の刀を十字に重ね合わせるように振るう。だがその刀は最後まで振り抜くことが出来ない。と言うよりも最初から私は攻撃のために刀を振るったのではない。

黒装竜が雄叫びを上げるとその声量により衝撃波が放たれ、それに対抗するように私は刀を振るったのだ。それにしても……くっ、ただの雄叫びがなんという威力……。腕の筋肉が叫びを上げ、刀からは火花が散る。たったコレだけの行動しかしてないというのに、私の体力がかなり削られてしまっています……。

私はそんなコトを考えながらも黒装竜の衝撃波を弾き返し、黒装竜の腹部に潜り込み刀を振り上げる。だが、その刃は通ることはなく強靭な鱗により弾かれる。

――ブンッ！！

刀が弾かれて仰け反った私に向かって黒装竜が尾を叩きつけてくる。私は刀を重ねるようにしてそれを受け止めるのですが、強力すぎる一撃だったために勢いを殺しきることが出来ずに、そのまま地

面に落とされる。

勢いよく落とされた私はちょうど良く民家も何もない場所に落とされた。幸いと言うべきかそこは平地だったためにすぐに体勢を整えることが出来た。しかしそんな私に黒装竜が突っ込んでくる。体勢を立て直す暇があっても、休む時間がないために息が乱れる。

そんな私を休ませまいと黒装竜は立て続けに私に攻撃を繰り出してくる。強靭な尾での一撃、鋭利な爪での一閃、その一つ一つに死を間近に感じるために本能的に体が恐縮する。それにあそこまでの巨体だというのにそこらの素早い魔獣よりもずっと早い。

――――ゴガァアアアアアアアアアアアッ！！

それにあの咆哮、ただの咆哮だというのにまるで鎌鼬を想像させるような衝撃波が来ます。正直、戦い慣れしていなければ今頃、肉塊（ミンチ）になっていましたね。

「ですが、負けるわけにはいきませんね」

私は縦割れの瞳孔をこちらに向けて、威嚇するかのように唸っている黒装竜を見ながら呟く。騎士団長（ナイトリーダー）として、シキ君の帰る場所を護る者として、負けるわけにはいきません。

「行きますッ！！」

私はそう叫び黒装竜に向けて踏み込んだ。

◆　◆　◆　◆　◆

side　ユーリ

シェリルさんのおかげでエルちゃんと一緒に神隻に乗り込むことが出来た僕は、見様見真似ではあるけど警戒しながら神隻の内部を進んで行っている。こ、こういうラスボスが居そうな場所って、そこにたどり着くまでの敵も強いんだよね……。

ただの魔法生徒の僕とエルちゃんで何とかなるのかな……？　でもシキ兄がこの道を進んでいったんだったら、敵も倒されてるのかな……？　うぅ……勢いで乗り込んで来ちゃったけど、よくよく考えたら敵に遭遇しちゃったら逃げるしか出来ないよ……。

「き、緊張するねエルちゃん……。敵にあったらどうしよう……？」

「……戦う」

あ、あれ？　エルちゃんがいつになくやる気になってる？　なんかいつもは死んだ魚の目をしてるのに今日はなんか燃えてる……？　あ、あれは恋する乙女の目!?　え、エルちゃんだけには負けられないよね!!

だけどエルちゃんの言ったとおりここまで来たんだから、敵にあっても逃げるわけにはいかないよね。僕たちにも何か出来ることは……あっ、刀がないから何にも出来ないじゃん!?

「……ユーリ」

「どうしたのエルちゃん？」

「……武器」

そう言ってエルちゃんは僕にどこから取り出したかは分からないけど、見たこともないような構造をしてる刀を渡してきた。コレってもしかして確か……神格って言うのが使ってた刀……？

よく分からないけど武器のない今の状況からしたら武器があるのは助かるよ。僕はそんなコトを思いながら刀を受け取り、一回だけ素振りする。うん、バッチリ。

「よし、頑張ろう、エルちゃん！！」

「……（コクコク）」

僕はエルちゃんが頷いたのを見ると一緒に慎重に神隻の通路を進んでいく。幸いと言うべきか、僕たちが通る通路には敵が現れず、僕たちは体力を温存しながら進むことが出来ました。

そしてしばらく進んでいると、通路の先が明るくなっているのが見えた。もしかして通路が終わって部屋にでるのかな？　僕はそんなコトを思いながら、より一層警戒心を高めながら進んでいく。

そして部屋の入り口のところで立ち止まって敵が居ないかを確認するために、部屋をエルちゃんと一緒に見渡す。かなり広い部屋だけど、遮蔽物とかはないから、敵が隠れてるかどうかはすぐに分かるね。

「（エルちゃん、そっちは敵居た……？）」

「（……敵は居な――――ッ！？）」

エルちゃんは何かをみたのか僕の言葉の返答をする前に、敵が隠れてるかもしれないのに部屋を飛び出し、どこかに一直線に走っていった。そして僕もそっちを見て驚愕してしまった。

だってそこには血だらけで倒れている――シキ兄が居たから。

「シキ兄ッ！！」

僕は思わず叫んでしまったけど、今はそんなコトはどうでも良い。今はシキ兄が……シキ兄が死んじゃいそうだってコトだよ！！　僕は先にシキ兄に駆け寄っていたエルちゃんと反対側に寄ってシキ兄の怪我の状態を確認する。右肘から腕が切断されてるし、腹部からの出血もヒドい……脈は、もう――ない。

シキ兄が死んだって言う現実が突き刺さる。イヤだ……イヤだよ、シキ兄……言ってくれたじゃん……。ずっと……ずっと一緒にいるって……言ってくれたじゃん……。僕の頬を何かが伝う。触れてみればそれが涙だと言うことが分かった……。

許せない……。シキ兄にこんなコトをした奴らを僕は許すわけにはいかない。そう思うと、何故か力が沸いてくる。今なら、誰にも負けない自信がある。そう思った僕は刀を握り直し、立ち上がりながらエルちゃんに言う。

「エルちゃん、シキ兄をお願い」

「ユー……リ？」

「僕はシキ兄を殺した奴を許さない。僕がシキ兄の仇をとるんだ」

僕はそう言いながらエルちゃんとシキ兄に背を向けて、部屋の先にある通路に進もうとする。すると騎士のような兵士が出てくるけど、僕は刀を振るって一瞬で切り裂いていく。今の僕にはこの程度じゃ通用しない。

そして急に増えてきて僕の進行を妨げようとしてくる騎士を鬱陶しく思いながら、切り裂いて進んでいく。こんな雑魚で今の僕を足止めしようなんて……嘗めてるにもほどがあるよ。

そんなコトを思いながら進んでいくと一層開けた部屋に到着した。真っ直ぐに視線を向けると、培養基のようなものに入れられているミカちゃんの姿があった。その培養基のようなものにはいくつものラインが繋がっており、何かの力を吸収しているようにも見える。

「なんで……来ちまったんだよ、ユーリ」

不意に聞こえてきた声に僕は驚愕してしまった。声がした方向を見ればそこにいたのはティアちゃんだったから。

「ティア……ちゃん……？　どうしてここ――――」

「何で来ちまったんだよ、ユーリ」

ティアちゃんは僕の言葉を遮るように言葉を発してくる。そんなティアちゃんの右手には血の付いたナイフが握られており、いつもは茶色の瞳が今は蒼色になっている。明らかに僕と敵対している証拠だった。何より血の付いたナイフ……まさか！？

「ティアちゃん……ティアちゃんがシキ兄を殺したの？」

自分でも驚くほどに冷たく、低い声が出ていた。だけど、もしもティアちゃんがシキ兄を殺したんだったら、相手が親友のティアちゃんでも許すわけには……。

「そうだ。オレがシキさんを殺した」

それを聞いた瞬間、僕の中で何かが弾けたような気がした。無意識に僕はティアちゃんの目の前にまで迫り、左手でティアちゃんを殴り飛ばしていた。僕の拳を受けたティアちゃんは後ろに仰け反るけど、倒れたりはしない。

「どうしてティアちゃんがシキ兄を……どうして！！」

僕に頬を殴られ未だに俯いているティアちゃんの胸ぐらを掴み上げながら僕は言い放つ。だがティアちゃんは僕を突き放したあとに片手を振り上げた。頬にチクリとした痛みが走る。

ティアちゃんのナイフにはシキ兄の固まった血ではなく、まるでたった今ついたかのような血がついている。そして僕の頬からも血が流れている。コレがどう言ったことを意味するのか、最初僕には理解できなかった。

「決まってるだろ。オレが、お前らの敵だからだ。構えろよ、ユーリ。じゃねえと、すぐに死ぬぞ」

ティアちゃんはそう言いながら僕にナイフを突きつけてくる。そうか……ティアちゃんは敵になっちゃったんだ……。事情はよく分からないけど、この神隻の外で起こってることはきっと、ティアちゃんが引き起こしたことなんだ……。

こんなコトをするのは絶対に間違ってるよ。シキ兄を殺したことは絶対に許すわけにはいかない。だけどやっぱり、それでもティアちゃんは僕が変わるきっかけになってくれた親友なんだ。

「ティアちゃんが間違ってることをしてるなら、僕がティアちゃんを止める。だって、僕とティアちゃんは親友だから」

「親友？　そうかよ。だったら、勝手に思っとけよッ！！」

ティアちゃんはそう叫びながら僕に突っ込んできた。僕とティアちゃんの戦いが始まった。

第十六撃『狙撃手の戦線離脱。オレを恨め……そしていつかオレを殺せ』（後書

前話何が悪かったんでしょうか……？

ティアを敵にしたかな……？

前話で何が悪かったか分かる方は、是非ともメッセージを……。

あぁ……ショックだ……。

第十七撃『あなたを許すわけにはいかない。だから止めるよ、だって親友だから』

side　ティア

オレが魔法学院に入りユーリに接近したのは、バルドさんと同じ神格（ガブリエル）の血を引くユーリを監視するためだった。もしバルドさんと同じ神格（ガブリエル）の血を引き、覚醒するようなコトがあれば、オレたちの目的に引き込まなければならない。

それが神格の血を引く者の運命（さだめ）だったからだ。神格の血を引く者と言うのは、神格を復活させるためのただの道具でしかない。偽りの顔をして、何も知らないユーリに接近し、オレは実に五年間の時を一緒に過ごした。

その過程でオレとユーリはエルと言う人物と親しい仲になった。本来、監視する上で四六時中、近くにオレ以外の人物が居るのはあまり好ましくない。だが、オレはそれを受け入れた。

何故だろうか？　その時の、偽りの仮面を被るオレにとってそれを理解することはできなかった。そして、この五年間でオレの一番の誤算だったのは、この五年間が非常に充実したものだったからだ。

ユーリやエルと笑いあい、励まし合い、共に同じ課題に取り組んだり……。時には喧嘩をしたりもした。だけど、それが空っぽのオレの中身へとなっていった。

それでオレはようやく気づくことが出来た。最初からオレは友達が欲しかったのだ、と。だけど神格の血を引いてる以上、オレには

本物の友達など出来るはずがなかった。いや、絶対に出来ないんだ。

だってオレは神格を復活させようとしているから。神格のコトは全て知っている。生まれた瞬間に、オレは神格を復活させるための道具であったから、神格がどれほどに強大で危険であるかを。復活させれば、ユーリの住んでる世界が滅ぶことを。

だが神格は復活させれば、一つだけ願いを叶えてくれると言った。その言葉を信じることは出来なかった。だけど、オレは願ったんだ。ユーリやエル、魔法学院のみんなだけには、手を出さないでほしいと。

オレは本物の友達にはなれない。だけど、偽りの友達にはなれる。だから偽りの友達として、九、を切り捨て、一、だけを守る者となろう。そう決めたんだ。

「ティアちゃんが間違ってることをしてるなら、僕がティアちゃんを止める。だって、僕とティアちゃんは親友だから」

だからこそユーリの言葉は嬉しかった。本物の友達でもなく偽りの友達でもなく、こんなオレを親友と言ってくれたから。だけど、今のオレにとってそれは苦しいだけだった。

オレを親友だと思ってくれてるからこそ、止めてくれるユーリ。危険を犯してまでここに乗り込んできたユーリ。そんなユーリだからこそ、オレは護らなければならない。

実の兄を殺したオレにでさえ、優しく手を差し伸べてくれる優しき女の子を、護らなければならない。

「親友？　そうかよ。だったら、勝手に思っとけよッ！！」

だからこそオレは切り捨てなければならない。ユーリをではなく、ユーリを危険に晒そうとしているオレを……。

そしてオレはシキさんから能力『物真似幻想師』で奪った全てのものの死を見ることが出来る眼の力を解放して、ユーリの首筋にナイフを振るう。もちろん気絶させるだけだ。この眼を解放したのも、ただの脅しだ。

だけど、ユーリは持っていた刀でオレのナイフを受け止めていた。そうか、ユーリも神格（ガブリエル）の力が目覚めたのか……今頃、この計画に巻き込むなんてコトはしない。だから、眠っててもらう。

オレはそんなコトを思いながらそのまま片足を軸にして回転し、そのまま逆方向からナイフを振るう。だが、ユーリは後ろに飛躍することでナイフの一閃を避ける。

「今の僕は誰にも負ける気はしないよ。それにティアちゃんを止めるために、負けられないッ！！」

ユーリがそう叫んだとたんにオレの視界からユーリの姿が消える。ちっ、神格（ガブリエル）は厄介だな。神格（ガブリエル）の旧魔法は『限界突破』。文字通り自らの限界を超えた動きを可能にすること。

おそらく今のユーリは竜族での限界での速さを越えた動きで、オレの周りを動いている。止めるのはなかなか至難の業だ。ユーリが神格（ガブリエル）の力を使いこなせていたらな。

「負ける気はしない？　嘗めるなよユーリ。神格（ガブリエル）に目覚めたばか

りのお前が、オレの神格（ウリエル）に勝てると思うなッ！！」

オレはそう叫びながら後ろに向かってナイフを振るう。

「く……っ！？」

それと同時にユーリの我慢するかのような声と、刃同士がぶつかり合うことで発生する火花が散った。いかに旧魔法が優れていても、戦闘経験の無い素人の動きを読むなんてワケないって話だ。

ユーリはオレのナイフを押し返そうとしているが、そんなコトはさせない。オレはユーリが動きを見せる前に、ユーリの腹部に蹴りを入れて、ユーリをぶっ飛ばす。余り怪我はさせたくねえけど、怪我したらオレの『創造再生』で怪我を治せば良いだけだ。

……こんな考えを持ってるだけで、人の死を軽く考えてる証拠か。いや、所詮〝一〟しか救おうとしてないオレは命の重みを分かってねえんだな、絶対。

「オレを止めてえんだろ？　もっと、本気で来いよ！！　ユーリ！！」

オレはそう叫びながら壁にぶつかり体勢を崩しているユーリに瞬動を使い接近する。そして接近する勢いを殺さないまま、ユーリの鳩尾に向かって拳を振り下ろす。だが、オレの拳はユーリに当たることはなく、そのまま壁にぶつかり壁を砕く。

ドコに行った？　なんて考えるまでもねえ。オレはその場で回転して遠心力を乗せたナイフを後ろに向かって振り上げる。すると上から振り下ろされてきた刀とぶつかり合う。火花が散り、筋肉が軋

む。

「さすがは神格（ガブリエル）の血を引く者。『限界突破』は伊達じゃねえってコトかッ！！」

ナイフでユーリの刀を受け止めたまま、ユーリのわき腹に向かって蹴りを放つ。だが今回はオレの蹴りが、ユーリのわき腹にオレの蹴りが当たることはなかった。何故ならユーリが、それを受け止めていたからだ。

「神格（ガブリエル）とか神格（ウリエル）とか、そんなの関係ないよッ！！」

ユーリはそう叫びながらオレの足を掴み、宙に放り投げた。そして宙に浮かんでいるオレにユーリは接近しながら、自らの刀を振り上げた。刀には炎が纏われていく。

「――――魔力装填・魔刀炎影化！！」

そして魔刀となった刀をユーリが振り下ろしてくる。だがオレは『直死の魔眼』の力を使いユーリが刀に纏わせている炎だけを殺す。そのあとに刀を受け流して、その場から離脱する。

「話し合いだけで解決できるとは思ってないよ。だから、僕は無理矢理にでもティアちゃんを止める」

そう言ってユーリは刀を構えながら、オレの目を真っ直ぐに見据えてくる。良い眼だ……戦人（いくさびと）の強い意志の籠もった眼だ……。さっきまでも決意は籠もっていた。だけど、今の打ち合いで分かったんだろうな。戦わずして、オレは止められないってな。

「やってみろよ。オレはもうあとには引けねえ。もう……進むしかねえんだッ！！」

オレはそう叫びながらユーリに向かって接近した。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シェリル

――――ゴァアアアアアアアアアアアアアアッ！！

「ぐ、ぐぅ……っ！！」

アレから幾度となく黒装竜（デュオス・ドラゴン）に切り込んでいますが、未だにあの強固なる鱗に傷一つ付けられていないのが現状です。それに対して私の方は体中に切り傷が出来、防御用に装着していた騎士団の鎧もすでに破壊され鎧がない状態になっています。

骨も二、三本折れてしまっているために少し動くだけで激痛が全身を駆け巡り、とてもではないですが反撃に移る暇などありません。さらにはあまりにもの神格獣の多さに、騎士団の皆にも疲労が出てきています。

俄然として援護養成を頼んだ魔法軍も訪れませんし、魔法使いはいったい何をのんびりしているのですか。五年前のバルドの時と言い、今回のこれと言い……魔法使いには『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』が居ますが、名だけではありませんか。

「はぁあああああああああっ！！」

私はそんなコトを考えながら黒装竜に向かって接近する。アレだけの巨体を誇りながらもかなりの体力（スタミナ）があるために、動きは一向に鈍る兆しはありません。

――ゴァアアアアアアアアアアアアッ！！

私が途中まで近づいていたところで黒装竜の咆哮が私の全身を襲う。騎士鎧がないために、その鎌鼬にもにた衝撃波は私の全身を切り刻んでいく。しかし私はその痛みを無理矢理押し込み、黒装竜に接近する。

こちらの体力が限界に近づいているのか、いつもは軽く感じる刀すらもまるで何十キロもあるかのような、重りのように感じてしまう。刀を振り上げ、黒装竜の顔面に向かって振り下ろす。しかし強固な鱗に弾かれ、やはり傷が付かない。

「まだ、まだァッ！！　秘剣――燕返し・二連ッ！！」

私は接近した状態のまま燕返しを使う。一瞬にして放たれた三太刀が黒装竜の額を切り裂く。だが一回の燕返しでは終わるつもりはありません。片方の刀は燕返しをやったときに折れてしまったので、もう片方の刀で燕返しを放つ。

――ガァアアアアアアアアアアアッ！！

黒装竜の額に傷が付き、ようやくダメージらしいダメージを黒装竜に与えることが出来た。その証拠に燕返しを喰らった黒装竜はさっきまでの咆哮とは違い、苦しげな声を出している。

刀は一本折れてしまいましたし、これから残りの刀であの強固な

る鱗を砕き、肉を露わにするのは不可能でしょう。なら、あの額の傷を中心的に狙っていくしか、勝てる見込みはありませんね。それに私の体力的にも肉体的にも、精神的にもそろそろ限界が近いです……。

私がそんなコトを考えていると目つきの変わった黒装竜がこちらに向き直っていた。くっ、ここに来て狂化状態（バーサーカー）になったとでも言うのですか……。

――――ゴァアアアアアアアアアアアアアアッ！！

「なっ！？　速い！？　ぐ……っ！！」

さっきまでと桁違いの速さで私に接近してきた黒装竜は、勢いを殺さないまま私に噛みついてきた。避けきれなかったために、私は上に下にと黒装竜の顎の力にて潰されそうになる。

刀をつっかえ棒の代わりにでもしたかったのですが、余りにも動きが速すぎたためにそれが間に合わず体で受け止める羽目になる。それに黒装竜の唾液の酸性が強すぎるため、私の体に唾液が垂れる度に炎で焼かれるような痛みが走る。

「まだ、食べられるわけにはいかないんです……っ。切り抜けさせて……っ、貰いますよ。文字通りッ！！」

一瞬だけ両腕で押さえていた上顎を片手で押さえ、もう片方の手で黒装竜の口内を切り裂く。すると先ほどまでは全く血が出なかったにも関わらず、今の一撃で大量の出血がでる。

――――ゴガァアアアアアアアアアアアアッ！！

すると先ほど額を切りつけたときと同じような悲痛な叫びが黒装竜から漏れる。それと同時に私に噛みついていた力が抜けたので、その隙に一気に離脱して黒装竜から距離を置く。

「はぁ……はぁ……。そろそろ……キツいですね……」

私は息を整えながら黒装竜を真っ直ぐに見据える。すでに体力も底をついており、必殺の一撃すらも傷を付ける程度のダメージしか与えられない。それに対して黒装竜はまだまだ力が残っており、一撃一撃がわたしにとっち必殺の威力を秘めている……。

このままでは私があの爪に切り裂かれて死んでしまうのも、時間の問題かもしれませんね……。私はシキ君やユーリさんのように稀少能力を持っているわけでも、固有能力は……ないわけではありませんけど。とにかくて、諦めるわけにはいかないんですよ。

あまり使いたく無かったのですが……この際そんなコトを言っている場合でもありませんしね。使うしかありませんね、あの技を。

「邪剣――」

私がそう呟くと刀身に黒いオーラが纏われていく。そのオーラは徐々に巨大化していき、刀身の大きさが十メートル以上になる。ぐっ……さすがにコレはキツいかもしれませんね……。

「――羆返しッ！！」

そしてそのまま黒装竜の胴体を目掛けて十メートル以上にもなった刀の刀身で斬りつける。すると先ほどまでは鱗に邪魔され切り裂

かれなかった体にようやく傷を付けることが出来た。

ダメージを負った黒装竜は体勢を崩し空中でよろめく。だがそれでも致命傷には至らずにすぐに体勢を整え、私に向き直ってくる。

私の『魔族』の全てを使った『邪剣・罷返し』でもあの程度のダメージしか与えることが出来ないのですか……。すでに私が『邪剣・罷返し』を使うために刀を握っていた右腕の感覚は全くありません……。

――ゴガァアアアアアアアアアアアッ！！

そんな私に対して黒装竜が突っ込んでくる。私はそれをギリギリで避けるが、すでに反撃をする余裕はありません。それにこの勢いでは反撃をするにも迂闊には手を出せない。

そんなコトを考えていると黒装竜に大量の『魔法の射手』が被弾するのが見えた。上空を見てみればそこには今頃になって到着した魔法軍が見えた。今頃の到着ではありますが、非常に心強いですね。

「さて……私も弱気になっている場合ではない、ということでしょうね」

私は一人そう呟きながら動く片腕で刀を握り直す。『秘剣・燕返し』も『邪剣・罷返し』も使えるとしても一回が限界、それで黒装竜を仕留めるコトが出来なければ、黒装竜を倒すことはほぼ不可能。

なんとしても、私の最強の一撃を最も威力の高くなる場所に放たなければなりませんね。そんなコトを思いながら、魔法軍が攻撃しているのを見て、隙が出るのを伺う。それにしてもさすがです。ア

レだの魔法の嵐を喰らいながらも、私が作った傷に当たったときしかダメージらしきダメージはありません。

「邪剣――――」

それを見ながら私はいつでも最大の一撃を放つことが出来るように刀に力を込める。私自身にしてもみても、刀にしてみても必殺の一撃を放てるのは一度きり。重要になってくるのは、タイミング……。

刀に私の魔族としての力を全て込める。この一撃で黒装竜を仕留めるために、一切の隙を作るわけにはいかない。イメージするのは最強の刃、何者もこの刃を砕くことは出来ない……。そして創るんだ、全てを守る最強の剣をッ！！

「――――罷返しッ！！」

そして私は隙を見せた黒装竜の胴体の傷目掛けて魔族の力で強化した刃を深々と突き刺した。もちろんその時点で私の左腕は使い物にならなくなり、両腕をだらけている状態になっています。

これで仕留めることが出来なければ、完全に私の負けです。そう思いながら私は黒装竜に刀を突き刺したまま、距離を置く。すると、黒装竜の体勢が崩れ落ち、地上に落ちていった。

動き出すのではないかと思い、警戒していたのですが、地に落ちた黒装竜が動くことは二度となかった……。とりあえず私の最低ラインはクリアです。残った神格獣は魔法軍と騎士団に任せても大丈夫でしょう。そう思った私は、ユーリさんやエルさんが乗り込んだ神隻に乗り込む。

「どうやら、ユーリさん達は無事に先に進んだようですね……」

通路には様々な騎士の鎧の破片のようなものがあると言うことは、少なくともこの通路は無事に進んでいった、と言うことでしょう。それに、こんな場所で敵に出てこられても困りますし。

今の私は両手が使えない状態であるために刀は振るえません。つまりは蹴りのみの体術で戦うことになるのですが、神格に準ずる相手に接ぎ焼き場の体術では、相手にはならないでしょう。

警戒をしながら進むこと約数分。私の視界の先に光が見えてきた。ようやく通路を抜けて部屋に出るようですね。そんなコトを思いながら通路を抜けて、部屋を見渡した私は絶句した。

部屋の端の方にてシキ君が血を流して壁にもたれ掛かるように、倒れていたからだ。その隣では倒れているシキ君の手を握って俯く、エルさんが居ました。そんなエルさんに急いで私は駆け寄る。

「エルさん、大丈夫ですか？　何があったのですか？」

「ぐすっ……シェリル……さん」

エルさんは最初に私に声をかけられたときビクッとしていましたが、話しかけた相手が私だと分かるとエルさんが抱きついてきた。その肩は震えており、泣いていることが容易に理解することが出来た。

「……シキさんが……」

エルさんはそう言ったきり言葉を発さなくなった。シキ君の顔は青白くなっており、右腕は肘のあたりから切り落とされていた。まさか……シキ君は……。

「エルさん、ユーリさんはどこに」

「……先に、進んだ……」

「分かりました。エルさんは彼を見ててください」

私はそう言いながらエルさんひ離して、立ち上がり部屋の先にある通路に視線を向ける。どうやら、無理にでも戦わなければならないようですね。シキ君の仇を討つためにも……。

そう思った私はエルさんに背を向けたあとに一気に走り出す。通路の先から剣戟の音が響くのが聞こえてくる。通路を進めば進むほどに剣戟の音は大きくなる。

そして通路を抜けるとそこには傷だらけのユーリさんと無傷のティアさんが、私とは次元の違う戦いを繰り広げていた。くっ、早く止めなければ……。そう思いながら二人の戦いを止めようとしたのですが、不意に誰かに止められる。

「――ッ!?　バル……ド……!?」

私を止めたのは五年前、死んだはずだったバルドだった。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　ユーリ

シキ兄を殺したことは絶対に許すことの出来ることじゃなかった。相手がティアちゃんでも、シキ兄を殺した以上は許すことが出来ないと思ってた。ティアちゃんが言うには僕も神格（ガブリエル）の血を引き継いでいるみたい。

だからその気になればティアちゃんを斬ることも出来た。だけど僕はティアちゃんを斬ることは出来なかった。だって今は、シキ兄を殺したことよりも親友（ティアちゃん）が間違ってることをしてるなら、止めなきゃいけないと思うから。

ティアちゃんも神格（ウリエル）の血を引く者のために、止めるとなると倒すよりもずっと大変になってくる。もちろん今力に目覚めた僕より、前から目覚めてるティアちゃんの方が一枚も二枚も上手。

ティアちゃんが無傷なのに対して僕は体中が傷だらけで、息も上がっている。ティアちゃんはその気になれば僕を殺すことが出来るのに、首や鳩尾に斬撃じゃなくて打撃を打ち込んできてる。もちろん僕はそれを何とか防いでる。

「絶対に……ティアちゃんを止めるよ……。はぁ……はぁ……こんなの間違ってるよ！！」

「それはお前の考えだろ？　お前の考えを、オレに押しつけんなッ！！」

ティアちゃんはそう叫びながら僕の首筋に向けてナイフを振るってくる。それを僕は刀で何とか受け止める。だけど、ティアちゃんはすぐにナイフを引いて、僕に突き出してくる。

僕が使っている刀は太刀のために、極近距離では防御にも使えない。僕は何とか体を動かしてナイフを避けるけど、完全には避けきれなくて脇腹を抉る。痛みに耐えながら、僕はティアちゃんから距離を置く。

やっぱりティアちゃんは僕を殺す気なんかない……。今だって戦った経験が豊富なティアちゃんなら、簡単に僕にナイフを突き刺すことが出来たはずなのに、わざと外したように見えた。

「ティアちゃんは本当にこんなコトがやりたいの!?　違うでしょ？　やりたくないんでしょ!?」

「なわけねえだろ。オレがお前に近づいたのも、お前が神格（ガブリエル）に目覚めるかもしれなかった、それだけだ」

「じゃあなんでそんなに悲しそうな顔してるの？」

僕にそう言われたティアちゃんはハッとした表情になったあと、まるで雑念を振り払うかのように首を振ったあと、キッと僕の目を真っ直ぐに見据えてくる。

「悲しそうな顔なんかしてねえよ。御託は良いから……さっさと楽になれッ!!」

「やだ!!　ティアちゃんを止めるまで、刀は引かないよッ!!」

僕はそう叫びながら僕に突っ込んできたティアちゃんに対抗するように刀を横凪に振るう。しかしティアちゃんは刀が当たる前に宙に飛び、落下してくる勢いを殺さないままナイフを僕に振り下ろしてくる。

だけど僕はそれを床を転がって回避して、刃引きのされている方をティアちゃんに振り下ろす。瞬時に体勢を立て直したティアちゃんは、ナイフを斜めに構えて、刃を滑らせるように僕の一撃を受け流す。

「刃引きのしてる方で斬るなんて、嘗めてるのかよ、ユーリ！！」

「僕はティアちゃんを傷つけたいんじゃない。止めたいんだよ！！」

「（ギリッ）だったら……オレを殺す気で来いよッ！！」

ティアちゃんは刀を受け流したあとに僕に向かって連続でナイフを突き出してくる。僕は咄嗟に神格（ガブリエル）の旧魔法の『限界突破』を使い、胴体視力を底上げしてティアちゃんのナイフによる攻撃を避ける。

だけど戦いの経験が僕よりも何倍もあるティアちゃんは、即座に『限界突破』の胴体視力に反応し始めてだんだん掠るようになってきている。このままじゃティアちゃんを止めるどころじゃなくなるよ……。

そんなコトを考えていると視界の端でシェリルさんがこの部屋にやってくるのが見えた。それ見たティアちゃんはしかめ面になるけど、ただそれだけ。攻撃の手は緩めない。

「『限界突破・身体能力』！！」

僕は身体能力を限界突破で強化して一瞬にしてティアちゃんの後ろに回り込む。僕は神格（ガブリエル）に目覚めたばかりだから、一度で一つしか

『限界突破』出来ないから、今は胴体視力は『限界突破』されてない。

「甘いんだよ。それじゃあ、オレを殺すことは愚か、止めることだって出来ない」

ティアちゃんがそう言葉を発したとき、僕の肩にナイフが深々と突き刺さっていた。初めて感じた激痛に呻き声を漏らしながら、ティアちゃんから距離を置きナイフを抜く。

引き抜くとそこから血がたくさん出てくるけど、すぐに回復魔法を使い止血する。『限界突破』のおかげで回復魔法も尋常じゃない回復力になってる。

「愚かだって良い……甘いって言われたって良い……。だけど――自分の信念は曲げたくない！！　だから僕はティアちゃんを止める！！」

「……」

僕はそう叫び『魔力装填・魔刀炎影化』を使い、ティアちゃんに真っ直ぐに突っ込む。コレが僕の全力全開、コレでティアちゃんを止められなかったら、僕にティアちゃんを止める手だてはもうない。だとしても僕は絶対にティアちゃんを止めないといけないんだ。

そして炎を纏わせている刀をティアちゃんに向かって振り下ろす。それに対してティアちゃんがとった行動はナイフを刀に向かって一振りするだけ。たったそれだけで『魔刀炎影化』が解除されて、刀が刀身の半ばほどから折れてしまった。そしてティアちゃんは、僕の喉元にナイフを突きつけながら言ってきた。

「ここから立ち去れ。そうすれば、お前の命だけは助かる」

「イヤだよ。僕はティアちゃんを止めるって決めたんだ」

「無理だ。もう後戻りは出来ないんだ。だから、お前だけは助けてやる」

「ダメだよ。僕だけじゃない。エルちゃんもティアちゃんもみんなが居ないと、意味ないよ」

僕たちの意見は平行線をたどる。だけど僕はティアちゃんを止めるって決めたんだ。だから、僕が折れるわけにはいかないんだ。

そしてティアちゃんとにらみ合っていると、ティアちゃんの蒼色の瞳がいつもの茶色の瞳に戻っていき、喉元に突きつけていたナイフをティアちゃんは落とした。そして俯きながら言ってきた。

「なんでだよ……。何でお前はそんなに……オレを止めようとするんだよ……。オレはシキさんを、殺したんだぞ……」

ティアちゃんにそういわれて胸がズキッとする。確かにティアちゃんは僕の家族であるシキ兄を殺した、それは絶対に許されることじゃないよ。だけど、きっと僕とシキ兄が逆の立場だったとしてもこうしたと思う。

「僕はティアちゃんの――――親友だから」

「……」

僕がそう言うと膝から崩れ落ちて床に座り込んでしまった。そんなティアちゃんの顔のしたに、水がポタポタと垂れている。泣いてるのかな……？

「オレの……負けだ」

そしてティアちゃんがポツリと呟いた。そんなティアちゃんに声をかけようとすると、後ろから誰かの足音が聞こえてきた。振り向くとそこにはシェリルさんと――お父さんがいた。

「お父……さん……？」

「何だよ、そんな幽霊を見るみてえな目ぇして」

え？　だってお父さんは五年前に悪魔にやられて……あれ？　なんだかよく分からなくなって来ちゃったよ！？　と僕が混乱していると、お父さんが僕に説明してくれた。

ティアちゃんの旧魔法には『創造再生』と言うのがあって、その旧魔法は死人でも蘇らせることが出来る旧魔法で、ティアちゃんがお父さんを蘇らせてくれたみたい。

「じゃあ本当に……お父さん？」

「おう。今まで心配かけて悪かったな」

「うぅ……お父さん！！」

僕は思わずお父さんに抱きついてしまった。そしてこの計画の全てを僕と一緒にいたシェリルさんは訊いた。

この計画で復活させようとしているのは神格でも神格でもなく――旧文明王を復活させようとしてるみたい。その旧文明王は一つだけ願いを叶えてやるから、自分を復活させるのを手伝えって言ってたみたい。

その願いと言うのはティアちゃんは僕やエルちゃんを含めた魔法学院のみんなの安全を確保すること、お父さんはシキ兄やシェリルさん、僕の安全を確保すること……。シキ兄はティアちゃんが旧魔法で蘇らせてくれるみたい。

「……ですが、それを知った以上、みすみす見逃すことは出来ません」

シェリルさんの言うとおり旧文明王が復活したら、僕たちの安全が確保されるかも分からないけど、少なくとも他のみんなは危険に晒されてることには間違いない。

「だったら早くミカちゃんをあの中から出さないと!!」

僕はそういってミカちゃんが入ってる培養基みたいのを開けようとする。だけど、触った瞬間にバチっとして思わず手を引いてしまった。すると後ろからティアちゃんが話しかけてきた。

「こいつはオレの眼じゃねえと、壊せねえよ」

ティアちゃんがそう言うとまた眼が蒼色に変わる。そしてその状態でナイフで培養基みたいのを斬ると、キレイに斬れて中からミカちゃんが落ちてくる。それを僕は受け止める。

「ミカちゃん……？」

僕がミカちゃんに声をかけるけど、全然反応がなかった。まさかもうミカエルさんの魂が鍵となって、旧文明王が復活しちゃったからミカちゃんが動かなくなっちゃったの!?

「安心しろよユーリ。そいつは眠ってるだけだ。ミカエルの気配もちゃんと中にあるみてぇだからよ」

「そうなの？　僕も神格（ガブリエル）に目覚めたのによく分からないよ？」

「そりゃ、まだユーリが完全に目覚めてねえからだ。今は閉じちまってるよ」

お父さんにそう言われるけど、僕自身、神格（ガブリエル）に目覚めた感覚もなければ閉じた感覚も全くないんだよね……。とにかく、旧文明王の復活は阻止できたのかな……？

だけど、旧文明王を復活させるのを止めれるのに、どうしてティアちゃんとお父さんは自分から止めようとは思わなかったんだろう？　不意にそんな疑問が上がったために、ティアちゃんとお父さんに訊いてみた。

「オレたちが旧文明王に選ばれたのは、オレたちが最強だったからだ」

「どういうことですか？　そういうなら今でも私達よりずっと強いと思いますが？」

シェリル（リエル）さんの言うとおりティアちゃんははっきり言って僕の神（ガブ）

格の何倍も強い。それは使いこなせてるからってこともあるけど、仮に僕が神格（ガブリエル）を使いこなせるようになっても、ティアちゃんには勝てないと思う。

「いや、オレは全力でやってユーリに負けた。だから、オレは旧文明王の加護もなくなったし、捨てられたと言っても過言じゃない」

ティアちゃんの話によると神格同士の戦いで負けたティアちゃんは、旧文明王からの加護もなくなってリンクも途切れた。それで本来だったらティアちゃんに勝った僕が旧文明王の駒になるはずだったんだけど、僕の神格がまだ完全に目覚めないために、旧文明王がアクセス出来なかった。

だから僕が強制的に動かされるなんてこともなく、今こうして普通に出来てるってコトみたい。もし制御できてたらどうなってたこととか……。考えただけでゾッとするかも……。ちなみにお父さんは五年前からリンクは切れてるけど、ティアちゃんの監視のためにティアちゃんの側にいたみたい。

「とにかく、あとはティアちゃんがシキ兄を蘇らせて全部終わり……かな？」

「あぁ。全部終――――」

ティアちゃんがそこまで言い掛けると、急に神隻が揺れ始めた。あまりに凄まじい揺れだったため、僕たちは立っていることが出来ずに、床に座り込んでしまった。だけど、何なの！？

「おいおい、ティアレンス……。まさかミカエルの魂の一部だけで、旧文明王の扉が開いちまったのか！？」

「そうかもしれねえ。――ッ！？　来たぞッ！！」

何かにティアちゃんが気づいたのか僕たちの前に出て、何かを切り裂いていた。何を切り裂いたのかと思って、その先を見てみると、そこには黒い霧状の体をしているバケモノが居た。

黒装竜よりも巨大で、骨格は人間を象ってるように見える。だけど人間とは違い、腕は六本もありその手の一つ一つにまるで断罪するかのような、鎌を持っていた。そしてまだ完璧に神格（ガブリエル）に目覚めてない僕でも分かる。あれは――

「「「「旧文明王ッ！？」」」」

どうやらシェリルさんも神格の力を長時間感じてただけあって、旧文明王（バケモノ）から発せられる異常なまでの神格の力を感じ取ったみたい……。

「ヤベェな……。まだ完璧にゃあ復活してねえみてえだが、たった三割ぐれぇで何つー力だ……」

「ゴチャゴチャ言ってる場合じゃないよ、バルドさん。あれに対抗出来んのは、オレとあんただけだ」

お父さんは拳を構えながら、ティアちゃんはナイフを裏手で構えて旧文明王（バケモノ）を真っ直ぐに見据えながら言う。怖い、だけど……逃げるわけにはいかない。そう思った僕は立ち上がる。

「お父さん、ティアちゃん。僕も戦うよ」

「なっ！？　バカ言うな！！　ユーリじゃ旧文明王には勝てないんだよ。頼むから、ミカエルを連れて逃げろ。旧文明王の狙いは、ミカエルだッ！！」

ティアちゃんがそういっている間に旧文明王から黒い霧状の大量の、触手にも似た槍がこちらに向かって放たれてくる。それをティアちゃんは巧みに切り裂いていく。

「僕は逃げない。ティアちゃんと同じ神格の血を引く者、旧文明王を一緒に倒すよ」

「だけど、オレはお前を護りたいんだ。頼むから……」

「大丈夫。ティアちゃんが僕を護りたいように、僕もティアちゃんを護りたい」

僕がそういってる間にも触手にも似た槍が僕たちに向かってくる。『限界突破』を咄嗟に使って魔力制御能力と魔力を底上げして、魔力で創り出した刀でそれを切り裂く。

「一緒に戦うよ、ティアちゃん」

「……仕方ねえか。じゃあ、シェリルさん……ミカエルを頼みます」

「分かっています。今の私では、足手まといですから」

シェリルさんはそういってミカちゃんを連れて、部屋から逃げるために走り出した。だけどそんなシェリルさんに向かって何本もの触手槍が向かっていく。

もちろん僕たちがそんな簡単にシェリルさんに攻撃を許すわけがなく、シェリルさんに触手槍が当たる前に僕とティアちゃんがそれを切り裂く。

「悪いが旧文明王、あんたに従う義理はもう無いんだ。あんたを――殺すぜ」

ティアちゃんがそういった瞬間、最後の戦いが幕を開けた。

第十七撃『あなたを許すわけにはいかない。だから止めるよ、だって親友だから』

次回で、神格編を終わりにします。

後のキャラ設定で、いろいろ補足しますのでよろしくです。

感想待ってます！

第十八撃『全ての終わり。我が身の全ては仲間を護るために』

ｓｉｄｅ　シェリル

私は旧文明王と神格の血を引く者三人との戦いから、離脱して一つ手前の部屋にてシキ君を保護しているエルさんの元に向かっている。

私もあの場に残り、戦いたくはあったがもはや私の実力と彼らの実力とでは、余りにも次元が違いすぎる。仮に私の実力が一と表すならば、彼らの力は十にも百にも到達している。それに彼らは旧文明王の魔力を感じ取っていたみたいですが、私は旧文明王がスゴいと言うだけで、魔力事態は感じるコトは出来ませんでした。

私はまた何も出来ないのか……。五年前もユーリさんだけを避難させることしか出来ずに、今回もエルさんだけを避難させることしか出来ない……。今回も両腕を潰しても黒装竜一体を倒しただけで、皆を守ることは出来なかった……。

自分の弱さに嫌気がさします……。だけど、自分に出来ることと出来ないことを理解できなければ、それはそのまま死につながること。やはり私にはこれぐらいしか出来ません……。

そんなコトを私が考えながら通路を駆け抜けている間にも、バルド達が戦っている部屋からは激しい戦闘音が聞こえてくる。絶え間なく鳴り響く戦闘音で、戦いの激しさを簡単に想像することが出来ます。

早く……早くエルさんを脱出させなければ……。この戦いの激しさの中で神隻の強度が保つ可能性など、皆無でしかありません。崩れる前に、早く。

「エルさんッ！！」

通路を抜けた私は部屋にいるエルさんに向かって声をかけた。エルさんはこの戦いの激しさに怯え、もはや動かなくなっているシキ君の頭を胸に抱えていた。今更ながら、この神隻に乗り込んできた中で、エルさんは唯一本当の『殺し合い』と言うものを知らない。

怯えるのも無理はないでしょう。私はそこまで考えて、だんだんと神隻の壁にに輝が入ってきているコトに気づく。それを見た私は急いでエルさんの本に駆け寄る。

「ここはもう危険です。早く脱出しましょう」

「……ゆ、ユーリは……？」

エルさんは怯えながらも私にそう問いかけてきた。確かに戦えないと思ってたユーリが居なくて、逆に戦えると思われてた私がここに来たならば疑問に思うことでしょう。

ですが、今ここでそのことを説明している時間は余りないようですね。ここにいれば狙われているミカちゃんにいつ危害がくるか分かりませんし、第一にすでに神隻の壁は崩れかかっているために、ここにいれば危険です。

「ユーリさんのコトはあとで話します。今は一刻も早く脱出することが先決です」

「で、でもユーリが……」

「大丈夫です。ユーリさんならティアさんが連れてきます」

私がそう言うとエルさんはさらに不安げで、不思議そうな表情をしますがとりあえずもう本当に時間はありません。

「早く行きましょう。エルさんはミカちゃんを頼みます。私はシキ君を運びますか――――ッ！？」

そういって私がエルさんにミカちゃんを預けようとしたとき、ただならぬ力を下から感じた私はシキ君とエルさんを掴み、急いでその場から離脱する。ただ腕に余り力が入らないために無理な体勢の回避になり、うまく受け身をとれなかった。

そして私が飛び退いたと同時に私達が居た場所から、黒い霧状の触手のようなものが現れてきた。これは旧文明王が使っていた……。そしてその黒い霧状の触手は私達に向かって動いてくる。やはり狙いはミカちゃんですか。

「エルさん。キツいかもしれませんが、走りますよ」

「は、はい」

やはりエルさんは全く状況についていけていませんね。エルさんの眼には恐怖の色しか映ってはいない。そんなコトを考えながら、私はシキ君を背負いミカちゃんを抱きかかえながら出口に向かって走る。

もちろん攻撃が来ないわけではなく、それを回避しながら進んでいる。狙いはミカちゃんであるため、狙われるのはミカちゃんを抱える私だけ。そしてエルさんを先行させているために、イヤでも速度は自分より遅くなる。

そして出口に着く直前に、出口が崩れ去り唯一脱出できる退路が塞がれる。

「くっ、エルさん。魔法でそこを貫通させてください。私は時間を稼ぎます」

私はそう言いながらシキ君をエルさんの側に寝かせたあと、そのまま瞬動を使ってエルさんの側から離れる。それに連動して黒い霧状の触手もこちらに向かってくる。

この広い部屋でならば逃げ回ることは可能ですが、万全の状態でない今の状況からしたら早めの脱出が好ましいですが、あの出口を防いでいる瓦礫の山を魔法学院の生徒が破壊するのは時間がかかります……。

すると今度は床の下からだけでなく、ひび割れている壁からも黒い霧状の触手が現れる。しかも壁から出てきたのは私を捕まえるのではなく、殺すことに特化した槍の形状になっている。

マズい……今の状況からしたら殺傷力のあるものは回避が出来ない。魔法で撃墜しようにも、魔法発動体を持ち合わせていないために、反撃は不可能。そう考えながら私は瞬動を駆使して、ギリギリではあるが避けていく。

最初から完全に見切ることは出来ずにいるために、時間が経つに

つれて私の体には傷が刻まれていき、動きが鈍くなっていく。

「シェリルさん！　行けます！」

そして何とか回避していると、そんなエルさんの声が聞こえてくる。それを聞いた私は急いで切り返して、出口に瞬動で向かっていく。だが、ようやく出口に到達すると言うところで私の腹部に何かが刺さった。

「が……あ……っ……」

「シェリル……さん……っ！？」

見てみればそこには黒い霧状の槍が私の腹部を貫通していた。しまった……まさかここで致命傷……。ヤバい、動くことが出来ない……。

「エルさん……。ミカちゃんを連れて早く……」

「し、シェリルさ――――」

「――――早くッ！！」

私はエルさんの言葉を遮り有らん限りの力でエルさんに叫ぶ。一瞬だけビクッとしたエルさんはすぐにミカちゃんを抱えて逃げようとする。だけど、その前にミカちゃんは触手に捕らえられた。

「待……て……。が……はっ……」

私がそういっている間に腹部に刺さっていた槍が抜かれ、そこか

ら大量の出血が出る。そして私が何も出来ないままにミカちゃんが連れ去られ、ミカちゃんが居なくなると同時に神隻の床が崩れ去る。

「シェリルさん！！　ぐ……っ！！」

床が崩れ去り地上に落下していく私とシキ君をエルさんが何とか掴み、箒で浮遊する。周りを見てみればあらかた神格獣は撃墜されていたようで、ほとんど神格獣の姿はありませんでした。

そしてエルさんはゆっくりと地上に私とシキ君を降ろす。動こうとするにも黒装竜との戦いと、先ほどの致命傷により動くどころか気を抜けば意識すら危うい状態です……。そんな私にエルさんが必死に回復魔法をかけているみたいですが、正直魔法学院の生徒の回復魔法では、回復する怪我は限られてきます。

そんなコトを考えている間に神隻の壁が完全に崩壊し、バルド達の戦う様子が露わになりました。にしてもあの巨大な黒い霧状で構成された人型は旧文明王のはずですが、私が見たときはあそこまで禍々しい姿はしていませんでした。まさかもうミカちゃんの中に宿る鍵（ミカエル）を使ってもう復活した……？

『面白い。ならばやってみよッ！！』

ここまで聞こえてきた旧文明王の声と一緒に旧文明王は何かをなぎ払うように、六本の腕に携えている鎌の一本を振るう。たったそれだけの動きで、まるで空間が断ち切られるような現象が起こる。

あそこでバルドや生徒であるユーリさんやティアさんが戦っているのに、私は何も出来ない……。もし私に力があれば、彼らに力を貸すことが出来たのに……。

「――歯痒いか？　力がないことが」

すると不意に後ろからそのような声が聞こえてきた。まさか……有り得ない……。だって彼はもう……。振り返らずとも、隣にいるエルさんの表情を見るだけで、何が起こったかが分かる。それ以前に声だけで分かります……。

「だったらあとは私に任せてもらおう。私の弾丸で、全てを終わらせる」

その言葉と同時に銃声音が聞こえた。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ティア

「嘘だろ……」

オレは驚愕せずには居られなかった。完全に復活していない旧文明王ならば、神格の血を引くオレたちでも倒すことが出来るのではないかと思ってたからだ。だが、現実は全く違った。

バルドさんやユーリによる『限界突破』の攻撃もオレの『物真似幻想師』でコピーしたシキさんの能力も全く歯が立たなかった。いや、シキさんの能力は効かないわけではなく、『死の点』がつけなかったのだ。

旧文明王の『死の点』は旧文明王の中心核にしか存在せずに、『死の線』をなぞり殺そうとしてもすぐに再生してしまい、意味がな

いのだ。くそっ……何なんだよこの理不尽な強さは……。

ヤバいな……。旧文明王と戦う前にオレと戦ったユーリはすでに限界を迎えちまってるし、それ以前にユーリは神格の力が開花したばかりであるだけ使ったんだ。むしろ保った方だと言える。

バルドさんの攻撃もほとんど無意味だ。バルドさんは極近距離での戦いが主なのにもかかわらず、氣弾による攻撃しか出来ずに、なかなかダメージが与えられていない。

オレもほとんど無意味だ。アドバンテージである身体能力の高さも旧文明王には全く意味をなさない。『物真似幻想師』もあるんだが、旧文明王の旧魔法が何であるか分からねえからコピーしようにもしようがねえ……。

そんなコトを考えていると床に突き刺さっていた触手が抜けた。だがそこでオレは再び驚愕した。なんせその触手の先には、シェリルさんが連れて逃げたはずのミカエルが居たからだ。旧文明王は、今にもミカエルを取り込もうとしていやがる。

「やらせるかッ！！」

オレは瞬動を使いミカエルを捕まえている触手を切り裂こうとする。だがそんな俺に別の触手が襲いかかってくるが、それの『死の線』をなぞり殺していく。しかし向かっても向かっても触手が邪魔をし、たどり着くことが出来ない。

そしてあと一歩手前と言うところで、ミカエルは旧文明王の体に取り込まれた。刹那、今まで感じたこともないような衝撃波が発生し、オレは吹き飛ばされる。バルドさんが何とかオレをキャッチし

てくれたが、その衝撃波は神隻の壁をぶち抜き、崩壊させた。

旧文明王の姿が変わっていく。まるで鷹竜のような胴体に、顔の部分にヒトのような上半身を組み合わせたような姿。上半身からは六本の腕が生えており、その一つ一つに巨大な鎌を携えている。しかもさっきまでの意識のないような容姿とは打って変わり、今の旧文明王からはハッキリと意識を感じる。

旧文明王の顔がこちらに向く。攻撃は未だに来ない。今ならば旧文明王の中心核を『殺す』コトが可能なはずだ。だが、体がまるで言うことを利かない。本能が動くことを拒んでいるかのようだ。

『我は神格を束ねる神格王……。訊ねよう、貴様等は何故王に刃向かう』

言葉を聞いただけ。たったそれだけで、押し殺していた恐怖がわき上がる。こいつにはどんなに足掻いても、策を用意しても勝てる気がしない。オレがそんなコトを思ってる中、ユーリが叫んだ。

「あなたが、みんなを不幸にするから!!　あなたを、復活させるわけにはいかない!!」

『ならば問おう。文明の発展には、指導をする者が必要だとは思わぬか？　我は取り込んだミカエルの記憶から、貴様等の生き様を垣間見た……。実に、下らないものだ』

「だから何だってんだ?」

旧文明王の言葉にバルドさんが叫ぶ。

『我が今の文明を支配し、より発展した文明を築き上げてやる。今の文明には我と張り合える者はいない。存在意義を証明できないのだ。ならば、そうするしかあるまい』

要するにこいつは自らの力を証明したいがために今のこの世界を支配して、旧文明のように仕上げて、自分と対等に戦える者を生み出したいってわけかよ……。下らねえ、どこぞの悪役だ。

「悪いが、そんなコトは必要ねえ。お前はここで、オレが殺す」

オレは恐怖を再び押し殺して、ナイフを旧文明王に突きつけながら言う。すると、旧文明王の力が一気に増大した。

『面白い。ならば、やってみよッ！！』

旧文明王はそう叫んで手に持っている鎌を一振りした。だが、たったそれだけでさっきの衝撃波とは比べものにならないほどの衝撃がオレたちを襲う。次元が歪むほどの一撃にオレたちが耐えきれるわけもなく、呆気なく吹っ飛ばされる。

すでに神隻の壁は破壊されていたためにオレたちは宙に放り出される。オレとバルドは虚空瞬動でその場に踏みとどまり、ユーリは虚空瞬動は使えないために箒に乗って止まる。

『どうやら、我の力はまだ半分も出せぬらしいな』

旧文明王の言葉にすでにオレたちは絶句する以外出来なかった。別に何の魔法も使ったわけでも、旧魔法を使ったわけでもなく、ただ鎌を一振りしただけでこの力だってのに、コレでもまだ半分も力が出せてないだと……。

勝てるわけがない……。衝撃波はオレの眼で『殺す』コトが出来ても、近づくことは出来ない……。じゃあどうやってあれを止めれば良いんだよ……。ユーリやバルドさんも同じように思ったのか、表情が恐怖で支配されている。

――――もう勝てない。

オレはそう思った。だが次の瞬間、旧文明王を取り囲むように無数の二重螺旋の魔法陣が現れた。刹那、二重螺旋の魔法陣から大量の蒼色の魔力弾が旧文明王に向かって放たれた。その一発一発が旧文明王の体に傷を付けていく。

「勝手に諦めてもらっては困るのだがな」

不意にそんな声が聞こえた。有り得ないと思った。だってあの人は、確かにオレが殺したはずだから。オレはその声の主を確かめるために、振り返った。するとそこには黒い外套を羽織り、銀髪を靡かせ、片手に銃を構えた男――――シキ・K（クロカミ）・アスタロトが居た。

◆◆◆◆◆

side　シキ

「勝手に諦めてもらっては困るのだがな」

私は奇妙なバケモノと対峙しているティア達にそう告げた。するとティアとユーリ、何故か生きていたバルドが信じられないものを見るような目で、私を見ていた。

まあ、死人がいきなり後ろから声をかけてきたならば、このような反応になってしまうのも無理はないだろう。私はそんなコトを思いながら、未だに惚けている三人に声をかける。

「ぼけっとするな。敵はまだ健在だぞ」

私はそう言いながら奇妙なバケモノに向かって魔力弾を二重螺旋の魔法陣を介して、連続で放っていく。奇妙なバケモノの周りに展開させた魔法陣から魔力弾が放たれ、被弾していくのだが全くダメージを負っているようには見えない。

「な、なんでシキさんが生きて……」

「話はあとだ。今はあれを倒すのが先決ではないのかね？」

「あ、あぁ……」

私の言葉にティアが頷く。ふむ、どうやら私が死んでいる間にミカエルの魂で扉を開けてしまったようだな。奇妙なバケモノの中からミカエルの気配を感じる。そこまで考えた私は肘あたりから無くなっている腕から、黒い霧状の腕を創り出す。

すると目の前のバケモノの表情がわずかに変化した。何事かと思ったが、私が口を開く前にバケモノの方から私に話しかけてきた。

『何故貴様のような雑種が我の旧魔法――――『能力喰い』を持っている』

ふむ、あのバケモノの言うことが本当ならばコレがミカエルが私に与えてくれた旧魔法なのだろう。にしても名前が『能力喰い』か

……どうりで私がこれ以外にも旧魔法が使えるようになっているはずだ。

「さあな。生憎、貴様に答える口は持ち合わせていないものでな。無駄話はここまでにして、始めようか。古き者は、古き時代へ還るが良い」

『雑種如きがほざくなッ！！』

バケモノはそう叫ぶと六本の腕に持っていた鎌を振るってきた。すると次元が歪むほどの衝撃波が発生し、私達の方に向かってくるが、たかがこれしきの強さで私を倒せると思っているのか？

私はスコープを介して衝撃波の『死の点』の位置を確認する。そして『死の点』に向かって魔力弾を放つ。真っ直ぐに向かった魔力弾は衝撃波を殺す。それを見た私は瞬動を使い一気にバケモノに接近していく。

そんな私の周りにいきなり氷の剣が現れた。見る限りでは隙間無くと言う表現がぴったり合うほどの氷の剣の多さに私は感嘆するが、所詮はその程度。

私は『能力喰い』で発生させた黒い霧状の腕でそれを全て『喰らう』。私の『能力喰い』は旧魔法で創り出した物質であれば大小、密度の濃い薄いに全く関係なく、問答無用に我が力に変えることが出来る。また『能力喰い』とは言っても旧魔法にしか使えぬ代物だがな。

「自らの旧魔法の能力を忘れたのか？」

『馬鹿め。忘れるわけがないであろう。貴様はまだ使い方を分かってはおらん。だからあえて喰らわせたまで』

「戯れ言――ッ！？　ガァッ！？」

言葉を紡ぐ途中で氷の剣を『喰らった』私の体に変化が起こる。体の内側から氷の剣が突き出てきて、私の体を蜂の巣状態にする。痛みで意識が飛びそうになるが、それを堪えてバケモノを見据える。

『我は神格王。全ての魔法を司る者だ。たかが一つの魔法の対処など、造作もないことだ』

「なるほど……な。だが、私も嘗められたものだ」

私がそういうと同時に私の体から飛び出ていた氷の剣が消え、体の傷がまるで元から無かったかのように修復される。もちろん私はこのような力は兼ね備えては居ない。

この力は私がティアに殺される直前にティアから『喰らった』旧魔法の『創造再生』の力だ。この旧魔法は傷は愚か、死んだという概念すら死んだあとに取り消すことが出来る代物だ。偶然にも私がこの旧魔法を喰らっていたからこそ、私は今戦うことが出来ている。

「貴様が全ての旧魔法を使えるというならば、私がその全ての悉くを喰らい尽くしてやろう。行くぞ神格王――旧魔法の貯蔵は十分か」

『ほざくなッ！！　雑種如きがッ！！』

神格王はそう叫ぶと手を天に掲げた。すると天より私に向かって

何本もの光線が降り注いでくるが、避けるまでもない。私はその光線に向かって魔力弾を放ち、相殺させる。もちろん威力ではあっちが圧倒的に勝っているため、『死の点』を貫き相殺した。

だが神格王の攻撃は終わらない。大地より私を捕らえようと土の槍が私に向かってくる。無論そんなものに捕らえられる気は私にはない。私は二重螺旋の魔法陣を展開し、『死の点』をついて『殺す』のではなく、単純な威力でそれを破壊する。

「どうした神格王。私はまだ一歩も動いてはおらんぞ？　これならば、ティアの方がよほど強い」

『雑種如きが我を愚弄するかッ！！』

神格王の体から異常なまでの魔力が放出される。だんだんと増幅していく魔力は、途中から感じ取ることが出来なくなる。おそらく、それほどまでに魔力が高まったのだろう。だが、それだけだ。

すると私の体が捻れるような感覚に襲われる。見てみれば足に不可視の力が加わり捻り切ろうとしていた。私は『創造再生』を使いその部分を切断し、新たに創造する。そのあと私は再び神格王の周りに二重螺旋の魔法陣を大量に展開させる。

「ならば雑種を侮るな、神格王。貴様程度ではその雑種にすら勝てん」

私はそう呟き引き金を引く。二重螺旋の魔法陣から大量の魔力弾が放たれ、神格王に被弾した。刹那、その魔力弾の全てがこちらに反射してきた。さすがに王を名乗りだけ有り、一筋縄ではいかないか。

だが、私は負ける気はしない。圧倒的な力を持ちながらも、その力だけに頼り動こうともしない輩に私は倒せない。そう思いながら私はこちらに向かってきた魔力弾を全て撃ち落とす。

そして神格王の居た方向に視線を向けるが、そこに神格王の姿がなかった。気配を探るもどこにも神格王の姿はない。すると不意に私の後方の歪みを感じた。

咄嗟に私は『能力喰い』で創り出した腕をそちらに向かって振り抜くと、私の腕に巨大な鎌が振り下ろされた。威力自体は咄嗟に旧魔法で構成された鎌を、『能力喰い』で喰らうことにより回避できたが、衝撃までは喰らうことが出来ずにそのまま吹き飛ばされる。

まるで砲弾のように吹き飛ばされた私の行き先にはすでに神格王が回り込んでいた。くっ、やはりさっきまでは‘動いていない’からこそ翻弄する事が出来ていたが‘動いている’ならば身体能力が天と地ほども差がある私では歯が立たぬか……。

『勝てぬだと？　寝言は寝てからいうのだな』

刹那、私の体に言葉では表せないほどの痛みが来る。途中で痛みを通り越し、何が起こったか分からなくなるが、すぐに体が消滅させられているのだと判断し『創造再生』で修復する。

おそらくはあの鎌にて切り落とされ、旧魔法で体が消滅させられたのだろう。『創造再生』で体を修復出来るとはいえ、このままでは勝つことはおろか、触れることすらままならぬ。いくらティアからいくらか『神格の身体能力』を喰らったとはいえ、相手は神格の王。どうしても決定打に欠ける……。

『どうした雑種。あんな大口を叩きながら、この程度か？』

「そうだ。私の実力はこの程度だ。所詮は『死の点』を貫くか、旧魔法を使い騙し騙し戦うしか、私には戦う手段は持ち合わせてはいない」

だがな、と私はニヤリとしながら神格王に向かって言葉をかける。

「だからといって、貴様に負ける道理は存在せん！！」

『そうか。もう貴様の言葉には飽いたわ。貴様を滅ぼし、終わらせてやるとするとしよう』

神格王がそういうと神格王の手に何かが集まるのが目で見ることが出来た。アレは何だ……？　天然で不条理な力を備えている旧魔法を全て使える神格王に安易に近づくわけにはいかない、と判断した私はいつでも対応が出来るように魔力によって構築された二重螺旋の魔法陣を銃口の先に展開する。

だがその二重螺旋の魔法陣は形状を維持できずに、その魔力がそのまま神格王の手に吸い込まれていく。どういうコトだ、と思いながらも二重螺旋の魔法陣を展開しようとするが、同じように形状を維持できなかった。

それを見た私はある考えにたどり着く。神格王はこの魔法界に溢れている今の時代の魔力を自らの手に集めているんだ……。だから魔力で構成された魔法陣は形状を維持できずに、そのまま神格王に集められてしまう。さらに周りを見れば私が展開した魔法陣と同じように、人物からも魔力が吸収されてしまっている。

マズい……。あのまま魔力が吸収され続ければ、魔法界の住人が死に至ってしまう。そればかりか魔法界の均衡が崩れ、崩壊してしまう……。ここは魔力を殺すのではなく、魔力を球状に形成している魔力制御能力を殺すしかない。

そう思った私は『死の点』に向かって魔力弾を放とうとするが、ここであれが魔力を吸収していることを思い出す。つまりは魔力弾を放っても吸収されるだけだ。しかもスコープを介して『死の点』の場所を確認するが、障壁を張ってるのか『死の点』が重なっている。

「ティア！！」

それを確認した私は魔力が吸収されてしまって動きが鈍ってしまっているティアに叫ぶ。確かティアは私の銃に付与されている『直死の魔眼』の力をコピーしたはず。それを『能力喰い』で喰らえば私も『直死の魔眼』を使えるようになるはず。

そう考えた私は近づいてきたティアに、そのことを説明する。

「分かった。オレにはもうこの能力は必要ない……。こんなこと言えた義理じゃないが……頼む」

「あぁ」

私はティアの言葉を聞きながらティアの頭に手を置き、『直死の魔眼』の力を『能力喰い』で喰らう。すると私の視界が、スコープを介して見たのと同じ景色になる。そして私はティアからナイフを受け取ると、神格王に向かって瞬動で接近していく。

そんな私を近づかせまいと神格王は力を振るってくるが、私は見えるようになった『死の線』をなぞり、殺していきながら神格王に接近していく。だが、遠距離から狙うのと近距離から直接狙うのとはまるで訳が違う。

遠距離での戦いに慣れた私では神格王の旧魔法の乱発により、なかなか神格王に近づくことが出来ない。そんなコトをしている間にも、魔力はどんどんと溜まっていき、周りがどんどんと錆びれていっている。

それが指すのは魔力が無くなってきてるということ。くそっ……やらせるわけにはいかねえんだ!!　そう思った私は怪我をすることなどお構いなしに、神格王に突っ込んでいく。

脚が千切られ、腹を貫かれ、肩を抉られ、腕が潰されようとも私は『創造再生』を使い瞬時に再生させる。そして自らを守るために展開している、旧魔法で創られた障壁を殺す。

全ての障壁を殺し、魔力制御能力を殺そうとした瞬間、私の視界がいつの間にか神格王から遠く離れた位置にあった。

『愚かな。我の魔法が攻撃や防御だけしかないとでも思うたか?』

「――――ッ!?」

しまった……。神格王は私の刃が魔力制御能力を殺す前に、私を旧魔法を使って転移させたのか……。奴は私を殺そうとしてる以上、私をここから遠く離れた位置に飛ばすことなどないはず……。

そんなコトを考えていると不意に私の体が何かに縛られたように動かなくなった。まるで十字架に縛られたような体勢になり、動こうにも全く力が入らない。ちっ、捕縛用の旧魔法か！？

『どうする雑種？　この状況をどう打破する気だ？』

「ッ……」

神格王は私をあざ笑うかのように見下しながら、そう言ってくる。打破する方法なんか、動けない以上何もない……。私は『創造再生』で失った魔力を生み出しているが、他の奴らは魔力を奪われ動ける状況下ではない。

どうする……。このままじゃ全てが無に還る……。誓ったではないか、命を投げ出してでも大切な人は何が何でも護りきると……。すると神格王の手に集まっていた魔力が一気に分散した。どういうコトだ、と私が思っていると神格王が叫んだ。

『ぐ、がぁぁッ！？　おのれミカエル……。何故我の邪魔をする！？』

ミカエル！？　そうか……。神格王は鍵（ミカエル）の魂を取り込んだ。つまりはあの体はミカエルのものでもあるということか。ミカエルは内側から神格王の動きを止めている……。

「終わりだ、神格王」

私はそう言いながら銃を構える。ミカエルが神格王の動きを止めている今、神格王は旧魔法が使えないことになる。つまりは『死の点』を貫けば、この騒ぎの全てが終わる。

『良いのか？　貴様が我を殺せば、我の体に仕掛けた魔法が発動する』

「そんな脅しが通用すると思っているのか？」

今はミカエルが神格王の体を支配している。そんな中、体に旧魔法を仕掛けたといわれてもただの脅しにしか聞こえぬ。

『ならばやるが良い。貴様が我を殺せば我に仕掛けた『原子帰還』により、世界が滅ぶ。さらにいえばミカエルの魂も死ぬぞ？』

「――――ッ！？」

『言っておくが貴様が何の力を持っているか分からぬが、貴様と同じように我も『創造再生』は使えるのだぞ？　殺したとて、意味がない』

そういう、コトかよ……。つまりは世界が滅ぼうが神格王自身は消滅することがない。仮に世界が滅んだとしても、神格王ほどの力ならば新たに世界を創ることなど造作もないはずだ……。

『ククク……。考えるが良い。その間に、ミカエルから我は体を取り返すからな』

「いや、その必要はない」

『なに？』

私の言葉に神格王は怪訝そうな表情を浮かべてくる。全く……何

を悩む必要があったのやら。神格王を殺せば世界もミカエルも滅んでしまうならば、殺さなければいい、話だ。

「貴様の全てを『能力喰い』で喰らい尽くす」

そうだ。神格王を殺さずとも、私の体に神格王の全てを取り込めば、良い話だ。神格王の旧魔法も、意識も何もかもを『能力喰い』で喰らい尽くし、私の一部にすれば良い。

そうすれば神格王が本当に仕掛けたかは分からぬが、『原子帰還』の旧魔法は発動せぬし、何よりも何の罪もないミカエルを殺さずに済むからな。

『ククク……クハハハハハッ！！　面白い、やれるものならやってみろ！！　雑種！！』

「強がりはそこまでにしておけ、神格王」

「なんだと？」

「貴様はまだ知らないのだ。今、貴様が抱いている感情を」

私はそう言いながら『能力喰い』で創り出した腕を神格王の頭に向かって突き出し、神格王の頭を貫く。

「覚えておくと良い――――」

今にして思えば私は護ると言いながらも、何一つとして救うことが出来ていない。五年前はバルドを失い、今までにも何人もの仲間を犠牲にしてしまった。私はまだまだ弱い……。

「貴様の抱いているその感情こそが――――」

ならば力を付けるしかない。もう、誰一人として私の大切な人たちに怪我をさせるような真似はさせない。護るんだ……。私を受け入れてくれた皆を。

「――――『死の恐怖』だァッ！！」

刹那、世界が真っ白な光に飲み込まれた。

第十九撃『狙撃手の伝説。歯車はまた回り始める』（前書き）

今回で神格編を終わります！

ではどうぞ！

第十九撃『狙撃手の伝説。歯車はまた回り始める』

ｓｉｄｅ　シキ

《シェリルさんはポニーテールだから可愛いんですッ！！》

《愚かなりミカエル。あの女ならばツインテールの方が美しい。貴様は何故それが分からんのだ！？》

カーテンから朝日が差し込み、私の目に当たり私は目を覚ました。私が今居る場所はアリアドネーの医療施設のとある一部屋。あの世界の命運すらかけた戦いから早くも三日が経過していた。

あのあと私が神格王の全ての力を喰らい、光が迸ったのだがそれは各地から集まっていた魔力が、元の場所に戻っていく光だった。もちろん私は神格王の‘全て’を喰らい尽くしたために神格王の魂は私の中に居る。

神格王のあの体は旧魔法により構築された力、さらには神格の力を具現化したいわば霊体のようなものだったため、難なく喰らうことが出来た。

改めてこの『能力喰い』という旧魔法を試してみたのだが、どうやらこの旧魔法で喰らうことが出来るのはあくまでも能力だけで、実体は喰らえないようだ。さっきも言ったように神格王の体は霊体のようなものだったために、喰らえただけにすぎない。

《くぅ……カクちゃんのくせに生意気です……》

《カクちゃん言うな。我は王であるぞ！！》

《今はシキさんの一部で旧魔法も何も使えないじゃないですか》

《それは貴様とて同じであろう！！》

はぁ……。さっきも言ったように私は神格王の‘全て’を体内に取り込んだ。つまりは体の一部になったわけなのだが、どう言うわけか私の中に神格王（カクちゃん）とミカエルの魂が個別に存在していた。

もちろん主人格は私なのだが、頭の中で神格王（カクちゃん）とミカエルが騒いで非常にうるさいのだ。別に体が乗っ取られるなどと言ったことはないために、構わないのだが四六時中騒がれるのは勘弁してもらいたい。

ちなみに神格王（カクちゃん）は私の体に喰われてからは性格が丸くなったような気がする。本人曰く『弱肉強食の世に生きているから、大人しくしてやっているのだ。べ、別に体を乗っ取ろうとしてるわけではないからな！！』らしい。男のツンデレは余り見たくない……ではなく要するに隙あらば私の体を乗っ取るつもりのようだ。

まあ、何の力も持っていない神格王（カクちゃん）ならばきっとミカエルが止めてくれるだろう。何だかんだ言ってミカエルも自らの危機が無くなったからか、性格に堅苦しさが無くなってきている。

《こうなったらシキさんに決め手もらいましょう》

《仕方がない。おい雑種、あの女はポニーテールとツインテール、どちらが似合うと思う？》

……正直、敵対していたはずの二人が異常なまでに仲が良くなってきていることに、私は疑問を抱いているのだが私は間違っているだろうか……？　否、断じて否だ！！　……と、信じていたい。

《どっちでも良いよ。めんどくさい》

《めんどくさいだと？　おい雑種、嘗めているのか？　コレは重要な問題であるぞ！！》

《カクちゃんの意見に同意するのは癪ですが、私も同じです！！》

神格王（カクちゃん）の性格が変わりすぎてるんだが、別人ではないだろうな……？　まあ、別に良い意味で変わってきてるだけマシと言うものだろう。相変わらず私を呼ぶときは雑種扱いではあるが……。

《じゃあポニーテールで良いよ……》

《ふふん、やっぱりポニーテールの方が良いみたいですよ♪》

《ぐぬぬ……。まだだ、まだ我は諦めぬぞ！！》

……うん、もはやギャグ要員となっているな、この二人は……。少しは大人しくしてもらえると助かるのだが、ギャグ要員となった二人に言ったとしても、無駄だろうな……。はぁ……これから先、疲労だけが待っているのだろうな……。

《そうだ、カクちゃんに訊きたいことがあったんだ》

《カクちゃん言うな。で、何が訊きたい？　王である我が答えて

やろう》

ふむ、私の一部になったくせに生意気だな。貴様の精神はもはや私の意志によってどのようにも出来る。例えば縛り付けてミカエルの説教を延々と聞かせたり、ミカエルに調教してもらったりと色々と出来るのだ。

ん？　消したりしない乃香だと？　それでも構わぬが、何というか……自分の一部を消すというのはなんだか複雑な気持ちでな。おっと、話がずれてたな。

《貴様を取り込んだ私の強さは実際どれくらいなのだ？　正直、どれほどの力になったか分からなくてな》

《そうだな……。本気を出せば、最高神くらいなら指一本で倒せるほどだな。実際、我も昔は神殺しをやっていたものだ、うん》

……なんだかスルーしてはいけないような言葉が出てきたような気がするのだが、今はあえてスルーさせてもらう。と言うか神格王（カクちゃん）を取り込んだ私の強さはそこまで強くなっているのか？　全く持って実感が沸かぬのだが……。

《今はミカエルが貴様に枷をつけている。それでも一般的な神くらいならば相手に出来よう。……む？　そういえば何故我ではなく、ミカエルが枷を持っているのだ！？》

《カクちゃんに預けると色々悪さしそうだからです！！　現にシキさんが眠ってるときに体を乗っ取ろうとしてたじゃないですか！！》

《貴様！！　それは言うなと口を酸っぱくして言ったではないか！！！》

また始まったか夫婦漫才が……。いつかどうにかして、こ奴らの魂を入れる器を創らねばな……。もちろんあのようなコトを二度と起こさないためにも、神格王（カクちゃん）には一切力を与えずに、一般人程度にするがな。ミカエルは言わずとも大丈夫だろう。

にしても枷をつけた状態で神を相手に出来るほどの強さか……。ふむ、さすが神格の力と言うべきか神格王（カクちゃん）の力と言うべきか……。とにかくチートからテラチートに進化したことは言うまでもあるまい。

ただ、神格王（カクちゃん）のように全ての旧魔法が使えるわけではなく、ミカエルから貰った『能力喰い』と、これでティアから奪った『創造再生』、あとは同じように喰らった『直死の魔眼（強化ｖｅｒ）』しか使えぬようだ。

そのようなコトを考えていると私の病室のドアが開かれた。そちらの方を見てみれば、一人の少女が立っていた。

「ちょっと……着いてきてもらえないか……？」

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シェリル

「まあ、その程度で良かったんじゃねえの？　俺ぁ、一回ぽっくり逝っちまったけど」

「良くありません！！　というか、死んだことを適当に説明しすぎじゃないです――――痛ッ！？」

「ほら、一番ヒデェ怪我してんのにそんな騒ぐから、そんなんなんだよ」

「誰のせいですか、誰の……」

現在、私はシキ君と同じ医療施設の個別の部屋にて入院しています。あの戦いでの私の怪我は、両腕の重度の火傷から始まり、体の所々の骨折。出血多量に、腹部に穴ができて挙げ句の果てに、三途の川すら渡りそうになるほどの重傷でした。

正直、生きていることが不思議なくらいの重傷だったらしいです。ですがそこは魔族の体に感謝しなければなりませんね。魔族の中でも長命種でさらには回復能力に優れた一族だったから、こうして生きられています。

とはいえ、現在は自分で体を動かすことも出来ずに食事も着替えも、とにかく全てにおいて他人に頼らなければならない状態です。まあ、バルドの言うとおり、命があっただけでも良しとしましょう。命あっての人生です。

「ですが、未だに信じられませんね……」

「あぁん？　お前ぇも一応戦ったんだから分かんだろ？　それだけ旧魔法は非常識な代物なんだよ」

私が何故死んだはずのバルドが生きていたかを訊いたところ、ティアさんの持っている旧魔法『創造再生』により、バルドは蘇った

らしいです。確かに戦ったのですから旧魔法がどれほどに非常識な代物かは知っています。

神隻も私たちの前に現れた黒装竜を含む神格獣も、全てティアさんの『創造再生』で生み出したものだったのですからね。戦って、聞きもしましたが未だに信じられませんね。

「おねえさん、だいじょうぶ？」

「えぇ、大丈夫ですよ」

私はパイプ椅子に座っているミカちゃんに優しくそう言う。あのときシキ君が神格王の全てを取り込んだ際に、唯一霊体、もしくはそれに準じていなかったミカちゃんだけは、シキ君に取り込まれることなく元気に暮らしています。

ミカちゃんには特に変わった様子はなく、私たちが戦っていたときの記憶だけがないようです。おそらくはミカちゃんの中に居たミカエルが、その記憶を消したのでしょうね。

それにしても、私のことをお姉さんなどと言ってくれるのはミカちゃんだけです。確かに年齢は一般からしたらかなりアレですが、私は長命種ですから一般的な数値に換算すれば、まだ私は二十代前半です。

「ミカ。こう見えてもシェリルはおば――」

「バルド？　余計なことは言わなくて良いですよ？」

私はバルドに笑みを見せながらそう言う。ちなみに私はバルドの

顔面めがけて果物ナイフを投げました。何故動けたかは不明です。

「お、お前ぇ……動けねえんじゃねえのかよ!?」

「何故でしょう。今だけ動けました」

とりあえずアイコンタクトで『あとで絞める』とだけ送っておきましょう。するとバルドの顔が真っ青になりましたが、まあ、今日も平和ですね。そう思いながら窓から外を見るととある人影が目に入った。

「あれはシキ君と……」

「あぁ？　何やってんだあいつら？」

「分かりませんが、行ってみましょう」

私はバルドに車椅子に乗せてもらうと、医療施設の外に向かった。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ユーリ

「お兄さんのサイン貰ってきてよ！」

「減るものじゃないんだし、良いでしょ？」

「お願いッ！！　一生のお願いッ！！」

「ダメだよ！！　シキ兄は僕だけのシキ兄何だから！！」

今、僕はまだ復興はしてないけど魔法学院の教室にいる。復興するまでまだだいぶ時間がかかるみたい。で、今僕はクラスのみんなに囲まれて、こんなコトを言われてる。

何がどう伝わったかは分からないけど、シキ兄が世界の破滅を救った英雄として祭り上げられてるみたい。確かに世界が破滅しそうなってたけど、別にシキ兄だけが戦ったわけじゃないよ……。

今回はシキ兄だけじゃなくて、お父さんやティアちゃんや僕、色んな人の協力があったから救えたんだよ。……まあ、結局最後は全部シキ兄に美味しいところを持って行かれちゃったけど……。

本当はそんなコトはどうでもよくて、女の子にシキ兄が好かれることが問題なんだよ。英雄って言うのは結構女の子に持てる。つまり、シキ兄に好意を持つ女の子が増える。結果、シキ兄が他の女の子に盗られる……それだけは絶対ダメだよ!!

「……違う。ユーリのじゃない」

そんなコトを考えていると、同じようにシキ兄のサインを貰ってきて、とせがまれているエルちゃんがそう言ってきた。むむむ……そういえば何気にエルちゃんも関わってるからなぁ……。

「……シキはエルの」

「それも違〜う!!　シキ兄は僕の!!　――ハッ!?」

思わず叫んじゃったけど、みんなが僕を見る目が笑ってるよ……。うぅ……思わず口走っちゃうコトってなんでこんなに恥ずかしいん

だろ……。だけど、間違ってないから大丈夫だよね……？

「……でも兄妹」

「ぎ、義理だから大丈夫だよ！！」

「……兄妹は兄妹」

むむむ……強敵だねエルちゃん。こうなったら神格（ガブリエル）の力を使って……ってそういえばもう神格（ガブリエル）は使わないからって、シキ兄から抜いてもらったんだった。

「こう言うのは本人の意志が大事だよね？」

「……確かに」

「だったらシキ兄に訊きにいこう！！」

僕はそういいながら立ち上がりエルちゃんとティアちゃんと一緒にシキ兄のところに行こうとしたんだけど、ティアちゃんの姿がドコにもなかった。あれ？　さっきまで居たのにどこ行っちゃったんだろ？

「ティアちゃんってドコ行ったの？」

「えっ？　うーん……よくわかんないけど、深刻そうな顔して出てったよ？」

深刻そうな顔してたってどうしたんだろ？　僕はそう思いながらエルちゃんと一緒にシキ兄のいる医療施設に向かった。

◆◆◆◆◆

side　シキ

私は現在、先ほど私の病室を訪ねてきた人物と医療施設の中庭にて対峙している。すでに中庭にはすでに人除けの魔法が掛けられたのか、関係者以外には立ち入れないようになっている。

そして私が対峙している人物と言うのは――ティアレンス・バイシタル。結果的に世界を救うことに貢献してくれたが、元を辿るならば世界を危機に陥れた張本人だ。まあ、そのようなことは私を含め、誰も気にしていないのだがな。問題はティアが言ってきた言葉にある。

――オレを殺してくれ。

コレが彼女が病室を訪ね、ここに来たときに一番最初に発した言葉だった。どうやら彼女は今回の騒動のけじめ、さらには守るためだと言いながらも傷つけてしまった皆への謝罪らしい。私は唯一彼女に殺されたから、代表者としてティアに呼ばれたようだ。

「全く……。私は気にしてないと言ったであろう？　それに世界を危機に陥れたのは事実だが、しっかりけじめはつけたであろう？」

「シキさんはそう思ってるかもしれない。だけど、オレは違うんだ……。みんなを傷つけて、みんなを犠牲にしようとして……復活させられるとは言え、オレはあんたを殺した。……こんなオレに生きる資格なんてねえんだ……」

ティアは俯きながら私に向かってそう言ってくる。はぁ……コレは何を言っても無駄そうだな。そう思った私は、『創造再生』で治した腕に黒い霧状の腕を纏わせる。どうやら『能力喰い』は別に腕があろうが無かろうが使えるようだ。

「なら望み通り殺してやろう。……後悔はないな」

「……あぁ。いや、一言だけ。ユーリ達に――」

ティアはそこまで言葉を言い掛けて私の後ろを見て驚いたような表情になっていた。何事かと思いながら振り返ると、そこには今回の騒動に関わったシェリルを始め、エルまで全員が揃っていた。

「ティアちゃん！！　死んじゃダメだよ！！」

「……悪いな。もう決めたんだ」

ユーリは目の端に涙をためながらティアに言う。だが、ティアはすでに気持ちは決めているらしい。どうやら人除けの魔法でユーリ達が入れるようにしてたのを見ると、来ることを予想してたみたいだな。遺言を託す真似などされても、私はそんなもの伝える気はないからな。

「なんで……悪いのはティアちゃんじゃないのに……」

「いや、オレが居なかったらこんなコトにはならなかったし、何よりみんなを傷つけた。オレは裁かれないといけないんだ」

「そんなの……間違ってるよ！！」

ユーリは泣きながらティアに向かって叫んでいる。隣では同じようにエルが涙を流している。相も変わらずシェリルとバルドはコレを傍観してるようだ。

「ユーリ、ティアはもう覚悟を決めてるんだ。その覚悟を汲んでやるのが、親友なんじゃねェのか？」

「親友が死ぬのを黙ってみてるのは親友じゃないよ！！　シキ兄も止めてよ！！　どうして……ティアちゃんを……」

「……」

私はそういいながらも涙を流すユーリに背を向けて、ティアに向き直り改めて『能力喰い』の腕を構える。

「シキ兄……止めてよ」

そんな私にユーリが後ろから抱きついてくる。だが私はそれをそっと突き放しながらティアに向かって言う。

「……言いたいことはもうないな？」

「あぁ。大丈夫。言いたいことはもう全部言った」

「そうか」

私はティアのその言葉を聞くと同時に地を思い切り蹴り出す。距離にしてみれば私とティアの距離は十メートル。後ろからは私を止めようと魔法を放つエルとユーリが居るが、私はそれを全て避ける。そして私は『能力喰い』の腕をティアの胸に向かって突き刺した。

「そん……な……」

それを見たユーリとエルの表情が固まる。なんせ『能力喰い』、能力だけを喰らうことに特化し殺傷能力がまるでない、突き刺そうとも切り裂こうとも、掠り傷一つつけられない腕がティアの胸を貫いていたのだからな。

ティアは呻き声一つ上げない。突き刺さったはずなのに鮮血も舞わない。当たり前だ。今の私の腕では異能の力‘しか’喰らう、または殺すことが出来ないのだからな。

「何でだよ……。なんでオレを殺さないッ!!」

つまりはティアは死んでいないことを示している。元から‘ティア’を殺す気などは無かったからな。そしてティアは胸に『能力喰い』の腕を突き刺されながらも私に向かって叫んでくる。

「何のことだ？　ちゃんと私は殺したはずだぞ？」

私はティアの胸から『能力喰い』の腕を抜く。そして『能力喰い』を解除しながら、ティアに向かって言葉を紡いでいく。

「私を殺した‘神格としてのティア’を、な。生憎、私は‘ユーリの親友のティア’を殺せとは言われてないものでね」

私は軽く手を振りながらティアに背を向けて、未だに固まっているユーリとエルの脇を通り抜ける。すると死んでないと分かったユーリとエルはティアに駆け寄っていった。

それを見ながら私はタバコを取り出して一服する。すると何もかも分かっていたかのようなシェリルが私に言ってきた。

「全く……。あなたも随分な演出家ですね？　あそこまで劇的にやる必要はないと思いますが」

「少しぐらい劇的の方が良いんだよ。その方が主人公を際だたせる」

「主人公とは貴方のことですか？」

「ん？　違ェよ。主人公は彼女達（あいつら）だ」

私はそう言いながら空を見上げる。そこにはまるで、私たちを祝福するかのような晴れ晴れとした青空が広がっていた。

第十九撃『狙撃手の伝説。歯車はまた回り始める』（後書き）

次回は雨季様とのコラボになります。

感想待ってます！

番外撃『チートじゃ済まない転生者。ふむ、私とどちらが強いか見物だな』（前）

～あらすじ～

・雨季様とコラボ
・過去最長！？
・クロカミ無双！！
・ヴィータ閣下万歳！！

番外撃『チートじゃ済まない転生者。ふむ、私とどちらが強いか見物だな』

side　シキ

神格事件が一段落してから早くも一ヶ月。傷はすっかり癒えたのだが、色々あって私はアリアドネーに滞在している。その間も依頼が絶え間なく来ているのだが、全て保留と言うことにしている。なんせ、しばらくはゆっくりとしたい気分だからな。

それに『神格王』の本来の力を取り込んだコトにより、私の力は正直パネェことになっているそうだ。先日、力を試すために力を完全解放したバルドと戦ったのだが、そんなバルドをデコピン一つで倒せてしまった。

しかも私は力を解放してなかったのだぞ？　そのときばかりはもう一つ強力な枷をつけなければならないと思ってしまったな。結局はつけてはいないのだが、まあ、別に今すぐにやる必要もあるまい。

そうそう、そう言えばようやく完全竜化を出来るようになったのだ。思えば竜族として生まれて早五年、一度も完全竜化のことなど考えてなかったが、よく考えてみると使えなかったなと思いバルドに教わったのだが……使っただけで大惨事になっていたのを覚えている。

ふむ、チート過ぎると言うのも考え物だな。というかアレはチートじゃ済まないだろうな。そんなコトを考えながらタバコを吹かす。最近ではタバコの良し悪しが分かるようになったな。こっちのタバコは体に害はないようだし、便利なものだ。

私がそのようなコトを考えていると、木陰で休んでいる私の元にティアがやってきた。ティアの服装は相変わらず男物の服装であり、性別が分かってなかったら、どちらか分からぬな。

「またタバコ吸ってんのか？　よくそんなん吸えるな」

「五年も吸ってればなれるさ。で、ティアは授業サボリか？」

「何だよ、シキさんのために抜けてきたんだぜ？」

ティアはそう言いながら私の隣に腰を下ろしてくる。全く……最近ようやく授業が出来るようになったのだから、しっかり受けて欲しいものだ。まあ、すでにアレだけ戦えるティアからしたら、ほとんど基本しか教えていない学院は暇なだけか。

「……あの戦いが、嘘みたいだな……」

隣に座っているティアが唐突に呟いた。私はこっそりティアに『直死の魔眼』の力だけ返しておいたのだが、それをティアが気づくと『オレから力を全部取ったんじゃないのかよ！！』と何故か起こられた。

おそらくは全ての力を強奪され、少しは罪を償いたいと思ったのだろうが、私は逆にその力で人々を助けて罪を償って欲しい、と言うことで返したことを説明した。それで納得してくれたらしいが、未だに使っているところを見たことがない。

「もしシキさんやユーリが居なかったら、オレは間違ったままだったかもしれない。ありがとな」

「謝るくらいだったらやらかすな。大変だったんだぜ？　お前に殺されるわ、神すらも凌駕する力を手に入れるわで」

「うっ……そのことについては謝ったじゃんか……」

私がそう言うとティアは急にシュンとなって、頬を膨らませながらそっぽを向かれた。何というか……ネコみたいな感じだな。何が言いたいかと言えば、ティアも女の子みたいに可愛いところがあるんだな、と言うことだ。

そんなコトを思っていると不意に不可思議な力を周りに感じた。立ち上がり周りを見るが特に異常がある様子はない。ティアも同じように異常を感じたのか立ち上がり周りを見渡している。

すると急に景色がガランと変わった。白一色に統一された不思議な空間にいつの間にか転移させられていた。それにしてもこの場所は……天国か……？　この場所は確かに私が死んだときにやってきた場所のはず……。まさかまた死んだのか？　だとしたら『創造再生』が使えるはずなんだがな。

「こんにちは」

すると後ろから声が聞こえてきた。振り向けばそこには……金髪のイケメソが居た。畜生……イケメソかよ。別に羨ましくなど思ってないぞ！！

「うん、まあ、君の思考は読めたよ。神だから」

「ふむ、悪いが神には良い思い出がないな」

私を手違いで殺してくれたり、転生した世界でつい最近強敵として立ちふさがったり、それを取り込んだら神格の二人がずっと漫才繰り広げてるし……。ヤベェ、ぶち殺してぇ……。

「やめてほしいな。君が本気を出さなくても、こっちは一瞬でミンチだよ」

「読めても思考は読まないでもらいたいな。だいたい、貴様なら再生は可能だろう」

「まあね。だけで、痛いもんは痛いんだよ」

神が思考を読むことに驚きはしないが、コレでは隠し事が出来ないではないか。まあ、この対応からして死んだ、と言うわけではなさそうだな。それに何故ティアまでここに居るんだか……。

「あぁ、彼女は……手違いかな？」

「疑問系にするな。で、用事は何だ」

「そうだね。単刀直入に力試ししたくない？」

「力試し？」

ふむ、確かにこの力を手に入れてからは私と同等の力の持ち主には会えてないからな。むしろ会えた方がおかしいかもしれないが、自慢ではないが今の私と対等の力を持つ者が居るのか？

「対等、とまではいかないけど、君が本気を出さないならきっと

良い勝負になるんじゃない？」

「本気を出したらどうなるのだ？」

「一瞬でミンチ」

それでは意味がないと思うのだが……。まあ、枷はミカエルに言わねば外してもらえぬし、逆に外すほどなら世界を壊しかねないからな。

「じゃあ、飛ばすよ？　世界は『魔法先生ネギま！』の平行世界だから。じゃあ、飛んでけーっ！！」

私は神がそう言った瞬間、瞬動を使い後ろに飛躍する。それとほぼ同時に私とティアの足元に巨大な穴が出来てティアが落ちていった。やれやれ、やはり神と言うのはこのパターンが多いのか。用心しておいて助かった。

「……避けないでもらえるかな？」

「だが断る！！　といいたいが、ティアが落ちてしまったので、追いかけるとするよ。で、私の相手の名前は？」

「一条要（いちじょうかなめ）だよ」

私は神からそれを聞いた後に神が作り出した穴に入る。そしてやはりと言うべきか、意識を失った。

◆　◆　◆　◆　◆

「む、目を覚ましたようじゃな」

「シキさん寝過ぎ」

私が目を覚まして最初に私の目に入った光景というのは、私をのぞき込むように見ていた二人の人影。一人はティアでもう一人は誰だ？　ティアとも仲が良いようだしな……。

そんなコトを思いながら私は上半身だけを起こす。どうやら私が寝ていたのはベンチで枕代わりになっていたのはティアの膝のようだった。つまりは膝枕って奴のようだ。とりあえず他の世界に来たようだな。何というか……何かが違う。

「お主の名前はなんと言うんじゃ？　儂は一条鏡（いちじょうかがみ）じゃ」

「私は……シキ・K（クロカミ）・アスタロト」

何がどうやって膝枕の経緯に居たったかは分からぬが、とりあえずティアと一緒に、看病的なコトをしてもらったのだから本名を名乗るのが礼儀だろう。だいたい、異世界に来てまで偽名を名乗るほどでもあるまい。

「ところで何故上から落ちてきたのじゃ？　いきなり落ちてきたときは驚いたぞ」

「落ちてきた……？」

鏡さん（一応恩人だからさん付け）の話によれば、鏡さんが『麻帆良学園』を散歩していたら、いきなり私とティアの二人が鏡さんの真上に落ちてきたらしい。幸いに、すぐにそれに反応した鏡さん

が後ろに身を引くことでぶつからなかったらしい。

で、私がティアの下敷きになったことにより、ティアの方が気絶してた時間が短かったらしい。おかしいな……何故私の方が遅く落ちたはずなのに下敷きになっているのだ？ちなみに私が気絶してる間にティアと鏡さんは仲良くなったらしい。

というかまさか自分の世界に来る前に、他人の世界で『麻帆良学園』に来る羽目になるとは思わなかったな。別に私の世界で行くなどと言う予定はないがな。……ん？

「鏡さんの名字って一条、だったか？」

「そうじゃがそれがどうかしたのかの？」

「一条要の知り合いか何かか？」

「儂はオリジナルのマテリアルじゃ」

……マテリアルって確か『魔法少女リリカルなのはA's』のゲームのキャラじゃなかったか？　というか私はそちらについては知識が乏しいからよく分からぬな……。それは良いが、何故ネギま！の世界にリリカルな輩が居るのだ？　どうなってるのだ、この世界は……。

「オリジナルに何か用か？　もしや転生者かの？」

「……何故、転生者で通じる」

横目でティアを見たがティアは異世界の景色に夢中になっている

ために、私たちの会話を聞いていない。うむ、聞かれても別に構わぬが、聞かれたら聞かれたらで説明が面倒だからな。やはりなるべくなら聞かれたくないな。

「この世界は異常じゃからの。オリジナルのところに行くなら儂に着いてくるが良い」

「了解した。ティア、行くぞ」

「ん？　あぁ、分かった」

そして私たちは鏡さんの後ろについて行き、一条要の居場所に向かった。

◆◆◆◆◆

「……なんでさ」

鏡さんの案内で私たちがやってきたのは立派な三階建ての家。もう一度言うが三階建ての家だ。言った意味は特にないのだが、転生者が頻繁に来る世界の主人公の家が普通ではないと想像してた私がバカみたいに思えただけだ。

ちなみに私が何故あんなことを呟いたかと言えば、一条要の家に上がった（一条要は居なかったが、鏡さんが良いと言ったから上がらせてもらった）のだが、家の中にいたメンバーがおかしかった。

ここは『魔法先生ネギま！』の世界なのであろう？　それだというのに何故、この家には『魔法少女』が五人も居るのだ……。

一人は言わずと知れた魔『砲』少女の『高町なのは』。一人は金髪の『フェイト・T・ハラオウン』。一人は戦闘機人である『スバル・ナカジマ』。一人は永久幼女（エターナルロリータ）の『ヴィータ』。最後に吸血鬼の血を引く『月村すずか』の五人だ。

「驚いたかの？」

「驚くも何もここの世界はおかしいのではないか？」

「そうじゃな」

できれば否定して欲しかったよ鏡さん。そんなコトを考えていると後ろにいるティアが鏡さんに向かって、いきなりとんでもないことを言い出した。

「鏡、オレと模擬戦してくれないか？」

「よいぞ？」

……は？　何故いきなり貴様は鏡さんに模擬戦を挑んでおるのだ？　しかも鏡さんもさらっと一言でそれを了承しているし、何を考えているのだこ奴らは……。本来であれば私が一条要と戦うだけで良かったはずなのに、何故貴様等まで戦う必要があるのだ……？

はぁ……。多少のコトで驚くことなどないとは思ってはいたが、まさかたった数十分の間にここまで驚かされるとは思いもしなかったな。私がそんなコトを思っているうちにティアと鏡さん、魔法少女一行は模擬戦をするらしき場所に向かって行っていた。

やれやれ、勘弁してもらいたいものだ……。私は溜め息混じりで

そんなコトを思いながら、七人についていった。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　ティア

オレが最初に鏡を見たときから、この人はかなり強いと思った。
ここが異世界だって言うのは信じられないが、鏡から感じる力をみる限りここが異世界だってのが分かる。とにかく、鏡を見た途端にオレの本能が戦いと叫んでいた。

さて、やるからには勝しかないな。ちなみにシキさんには『神格（ウリエル）』の力を一時的に返してもらっている。さすがにコレがなかったら、相手にならねえだろうからな。

そんなコトを思いながらオレは一度だけ目を瞑り、再び開く。するとオレの視界に映る世界が、死に溢れかえる。これは『直死の魔眼』を発動しただけだ。すると、コレを見た鏡がオレに言ってきた。

「『直死の魔眼』かの？　珍しいものを持っておるな……。お主も転生者かの？」

「転生者？　よく分からないが、この眼はコピーしただけだよ。さて、無駄話はここまでにして……始めようぜ？」

「良い殺気じゃ。心が踊る」

オレが『神格（ウリエル）』の力を解放しながら殺気をぶつけてるってのに、逆に楽しそうにするなんてな……最高だよ、アンタ。この戦いは初めてのオレのための戦いになる。その相手がアンタだなんて、光栄

だぜ……。

「では、開始ッ！！」

オレはシキさんが開始の合図をすると同時に、神格の身体能力の高さを使って鏡の周りを高速で動いていく。鏡はオレが動き始めてから全く動いてないから、着いてきてるのか来てないのかが分からないな……。

そう思ったオレは懐からナイフを取り出して、鏡に向かって一瞬で踏み込む。ナイフを鏡の『死の線』に向けて振るうが、鏡の蹴りがオレの胴体を捉える。ギリギリでナイフで防いだものの、その威力は殺しきれずにそのまま吹き飛ばされる。

空中で体勢を立て直し鏡が居た場所を見るがすでにその場所に鏡の姿はない。すると後ろからきた殺気に気づき、オレはとっさにナイフを振り上げる。するとそこには、明らかに聖剣と思わせるような剣をオレに振り下ろしている、鏡の姿があった。

「さすがに速い、な！！」

オレはそう叫びながらナイフを動かして聖剣の『死の線』をなぞり、さらにもう一本ナイフを取り出して鏡の『死の点』に向かってナイフを突き刺す。勝った、と思った。だが次の瞬間、それが間違いだったと知らされる。

「さすが『直死の魔眼』じゃの。じゃが、儂もそこまで甘くはないぞ？」

不意に聞こえてきた鏡の声。目の前で『死の点』を貫いたはずの

鏡の姿が丸太に変わる。しかもそれに驚く間もなく、鏡の蹴りがオレの脇腹を捉え、オレは吹き飛ばされる。

「ぐ……っ！？」

ゴキゴキッ！！　と嫌な音が響き、肋骨の何本かが折れた感じがする。だがオレはすぐさま『創造再生』を使って怪我をなかったことにして体勢を立て直す。くそっ……ただの蹴りでなんつー威力だ……。

「何だよさっきの技は。どうやって切り抜けたんだ？」

「変わり身の術と言う忍術じゃよ。ついてに言えばさっきお主が斬ったエクスカリバーは投影魔術で投影したのじゃ」

に、忍術に投影魔術？　全然聞いたことのない言葉が入ってきたな。とにかく異世界の技は驚かされるな。チラッとシキさんの方を見れば、鏡の言葉を理解したかのように感心してる。

……って一応は神ですらも一瞬でミンチに出来るほどの実力なんだから、そんなに簡単に感心するなよ……。なんか負けた感じがするじゃねえかよ……。

「ほれ、よそ見しとる暇があるのか？」

「ぐ……っ！？」

いつの間にか接近してきていた鏡の拳がオレに迫る。二本のナイフを交差させて、盾代わりにするんだが、一瞬だけ拮抗してすぐに砕け散る。おいおい……ナイフを拳で砕くってどんな腕力してんだ

よ……。

オレは鏡の力に呆れながら、拳を避けるために床を転がり鏡に向かって蹴りを放つ。だが、蹴りは当たったは良いがそのままオレの足が鏡の体に飲み込まれる……って、はぁ!?　飲み込まれた!?

「スライムは知っとるか？」

「それぐらい知ってるさ」

「儂はその力を取り込んでおってな。体をスライムのように出来るんじゃよ。捕まえたら……たこ殴りじゃ」

鏡はそう言いながらマジでたこ殴りにするために拳を振り上げてくるが、あんな馬鹿腕力でたこ殴りにされる趣味はねえ。オレは新たにナイフを取り出して、鏡の体に飲み込まれている足を『殺す』。

そしてそのまま鏡から距離を置いて『創造再生』で足を再生する。畜生……異世界の技ってのはすげーな。『神格（ウリエル）』の身体能力を使ってここまで追いつめられるなんてな。

だが力自慢な『神格（ガブリエル）』とは違って『神格（ウリエル）』は相手に保有能力があればあるほどに有利になる。すでに準備はだいたい整った。鏡はご丁寧に能力の説明をしてくれたのもあるからな。

「まさか自分の足を斬るとはの。少し驚いたの」

「それはどうも」

オレは立ち上がりながら鏡の言葉に答える。驚いた、って言いな

がら全く驚いた様子がないのがムカつく。まあ、いいや、こっからはオレの反撃の番だ。

「準備は整った……。お前の能力、オレが悉く模造してやろう。行くぞ、一条鏡。能力（スキル）の貯蔵は十分か？」

◆◆◆◆◆

side　一条鏡

儂に勝負を挑んできた少女――ティアレンス・バイシタル。最初にまさか『直死の魔眼』を持っているとは思わなかったが、オリジナルの世界じゃから仕方がないの。それに動きも中々のものじゃ。

下手なチート転生者などよりは強いじゃろうな。じゃからと言って儂やオリジナルから比べればずっとヒヨッ子じゃ。とるに足らない強さじゃ。むしろ儂はあの男――シキ・K（クロカミ）・アスタロトの方が気になるの。

儂も体内に化物（ＯＲＴ）を内包しておるが、あの男はそれ以上のものを内包しておるみたいじゃな。儂的にはあっちの方と戦ってみたかったのじゃが、オリジナルを所望のようじゃから仕方がないの。儂はそんなコトを思いながら、ティアレンスを見る。

まさか、スライム状となった儂の体から逃げるために、自らの足を『殺す』判断を下して脱するとはの。しかも瞬間再生能力を持っているからとは言え、転生者でもないあそこまで幼き者が、そんな判断を下すとは……。

「準備は整った……。お前の能力、オレが悉く模造してやろう。

行くぞ、一条鏡。能力（スキル）の貯蔵は十分か？」

立ち上がったティアレンスは儂の眼をじっと見据えながらそう言ってくる。面白い。転生者共から奪った儂の能力、模造出来るというならば模造してみるが良い。儂はそう思いながらエクスカリバーを投影する。

「それはもうコピー完了だ」

ティアレンスはそう言いながら儂と同じようにエクスカリバーを投影していた。うむ、どうやら本当に儂の能力を模造したようじゃな。じゃがどうやって儂の能力を模造したのだ？　先ほどまではそのような素振りも見せなかったし、第一にティアレンスに変化も見られない。

そんなコトを考えている間にティアレンスは儂との距離を詰め、儂の首もと目掛けてエクスカリバーを振るってくる。もちろん反応できぬほどの速さではなかったために、儂はエクスカリバーを盾代わりにする。じゃがティアレンスのエクスカリバーが儂のエクスカリバーを切り裂き、そのまま儂の首に向かってきた。

そう言えばティアレンスは『直死の魔眼』を使えるんじゃったな。そう思いながら儂は身を屈めてエクスカリバーの一閃を回避し、ティアレンスの胴体に拳を叩き込む。じゃが儂の拳がティアレンスの体に飲み込まれ、抜けなくなる。なんと!?　これまでもコピーしたのか!?

「仕返しだッ！！」

「甘いの」

ティアレンスは叫びながら儂に連続で拳を突き出してくるが、儂はそれを全て受け止める。どうやらティアレンスはナイフの扱いには長けておっても、拳同士の戦いには慣れてはおらんようじゃな。まあ、この年でコレぐらいやれるなら強い方には入るかもの。

儂は拳を受け止めながらそんなコトを考え、そしてティアレンスの体から拳を引き抜きティアレンスから距離をとる。儂に体勢を整わせまいとティアレンスが儂に突っ込んでくるが、ティアレンスは儂を見た途端に体勢が崩れ落ちる。

正確には儂の左目の『万華鏡写輪眼』をじゃがな。そしてティアレンスは汗だくになりながら、すぐに立ち上がりこちらを睨みつけてくる。ほぉ、あれで精神が破壊されないとは……。

「はぁ……はぁ……。何だよ……今の……」

「どうじゃったかな？　三日三晩刃物を突き刺された気分は？安心せい、体に害はない。お主は儂の目を見て、幻術にはまっただけじゃ」

「はぁ……っ。親友を傷つけることに比べたら……どうってこと……ねえ……」

ふむ。かなり強靭な精神力じゃ。まさか三日三晩刃物を突き刺されるコトよりも、親友を傷つけることの方が苦しいとは……。全く、オリジナルと言いティアレンスと言い、なぜこの眼を使う輩は精神力がこのように強いのだか……。

「ついでに言えば……そいつもコピー完了だ……ッ！！」

そう言いながらティアレンスは儂の目を見てくる。あれは『万華鏡写輪眼』？　どうやら儂の能力をコピーするとは本当のようじゃな。現にはめられとる。そしてなんとか耐えきり、ティアレンスに言う。

「コピー出来るというのは本当のようじゃな。コレではキリがない」

「くっ……アレを受けて平気そうな顔しやがって……」

ティアレンスは片膝を床につけながら、悔しげに儂を睨みつけてくる。今のティアレンスの目は『万華鏡写輪眼』ではなく、『直死の魔眼』に戻っておる。別にお主が見ておるより平気、と言うわけではないのだが……。

「お主は儂の全てをコピーすると言ったな？」

「あぁ、やってやるよ」

「ふむ、ならばコレも出来るかの？」

儂はそう言いながらＯＲＴを解放する。オリジナルとは違い、黒いＯＲＴじゃが今は黒かろうが何じゃろうが関係はない。ただ単にコピー出来るかどうかが問題じゃ。そんなコトを思いながらティアレンスをみる。

「……さすがに無理だ。まあいいや、オレの負けだ」

ふん、なかなかに強かったが、この世界ではまだまだ甘い方じゃ

な。

◆◆◆◆◆

side　シキ

ティアと鏡さんの戦いを観戦している私と魔法少女五人。それにしても、何故魔法先生の世界に魔法少女が居るのか未だに気になるのだが……。全く……神に異世界に行ってこいと言われたり、違い世界の原作キャラが居たりと、おかしな世界だな。

……ん？　今更ながらに思ったのだが何故魔法世界の世界に転生したというのに、魔法少女の原作キャラの方が早く会っているのだ？　おかしいのではないか？　どうもこちらの世界に来てからは頭を悩まされる……。

「お前はこっちに来たのは初めてだよな？」

そんなコトを考えていると、私の隣でティアと鏡さんの戦いを観戦している魔法少女の一人、永久幼女（ヴィータ）が私に話しかけてきた。

「テメェ、アイゼンの頑固な汚れになりてーのか？」

「勝手に地の文を読まないでもらいたい」

するとヴィータが私の首もとに自らのデバイスを突きつけてきた。やれやれ、先ほどの神と言いヴィータと言い……他人の心の中を読むのが好きだとでも言うのか？　まあ、シェリルも『地の文読み』は使えるのだから、さしてや珍しくない技なのかもしれんな。

「まあ、それはよいが、こっちに来たのは初めて、とはどういう意味かね？」

「いや、要の世界は他んとこからも転生者がたくさん来るからな……って頭押さえてどうしたんだよ」

「いや……あまりにもおかしな世界だと思ってな」

「あたしもそう思う」

頭を押さえているとヴィータに慰められた。今からヴィータなどと呼び捨てでなく、ヴィータ閣下とお呼びすることにしよう。私を気遣ってくれたのはヴィータ閣下だけだからな。

それにしても転生者が頻繁に来る世界とは……。おかしいにも程があるだろうに……。あぁ……胃が痛い、早めにこの異常な世界に慣れるとしようか。でなければ胃痛だけでなく、頭痛まで来るやもしれん。

「何騒いでるのかと思ったら、戦ってたのか……」

そんなコトを考えていると私の後ろよりそんな男の声が聞こえてきた。振り向いてみればそこには青白い髪を持つ、推定二十歳ほどの男が立っていた。教師でもしているのか、今はスーツに身を包んでいる。

「見ない顔だな。また新しい奴か？」

「また、か。本当に来ているのだな……」

私の言葉に男が不思議そうな顔をしていたが、この際気にしないでおこう。気にしたら負けだ。というかよくよく見てみれば、この男の顔、鏡さんとそっくりと言うか同じだぞ？

「お前が一条要で間違いないな？」

「あぁ。あんたは」

「シキ・K（クロカミ）・アスタロト。金髪イケメソに力試しやらないかと言われ、飛ばされた」

またあいつか……、と一条が頭を押さえながら呟いていた。また、と言うあたり本当に何人も転生者が来てるのだろうな。おそらく、この世界ほど異常な世界は他にはあるまい。そんなコトを思っている間に、鏡さんから黒い何かが出てきた。

あれは蜘蛛のような形をしてるあたりタイプマアキュリーのORTか？　だが私が見たことがあるのは黒くはなかったはずだが……ん？　『この世の全ての悪（アンリマユ）』を取り込んでいるようだな。……おかしいだろ!?　何故ふつうに異世界を渡れるのだ!!

「考えるな、感じろ、クロカミ」

「ヴィータ閣下……。了解だ」

膝をついて考え込んでしまった私に、ヴィータ閣下がそのような言葉をかけてくれた。なるほど……理論的に考えるから胃痛がくるのか。ようするに慣れてしまえ、と言うことだ。そうだ、慣れてしまえば問題ない。

「で、あの子も転生者なのか？」

「いや、ティアは転生者ではない。私の世界の仲間だ」

「ティア？」

私がそう言うと一条が再び疑問があるような顔をしてきた。話によれば一条は一度魔法少女の世界に転生し、そこで五人の魔法少女を妻にし、再び転生してこの世界にきたらしい。

そこでもティアと呼ばれていた少女が居たために、一瞬だけ疑問わ持ったらしい。まあ、いろいろ規格外ではあるが、今の私にはヴィータ閣下の教えがある。そう簡単に胃痛にならない。

「おぉ～オリジナル。やっと来たようじゃな」

「何やってんだ、お前は」

「いやの、ティアレンスが模擬戦をしたいと言うものでな」

一条と話している鏡さんは余裕なのに対して、こっちのティアは疲労困憊って感じだな。まあ、アレだけの能力を使いながらも自らの身体能力も高い鏡さん相手によくやった方であると言えるな。

「おいおい、大丈夫かよ？」

「全然……平気じゃない……」

ヴィータ閣下と話すティアは息が切れ切れでかなり疲れているようだ。そんなティアの頭に『能力喰い（ウリエル）』を使った右手を乗せて『神

格』の力を喰らう。

「さて、一条要。私と戦ってもらおうか」

「別に構わんが、強いのか？　あんた」

「安心しろ。貴様よりは強い」

私がそう言うと一条はムカッとしたような表情になるが、すぐに冷静な表情に変わる。まあ、さすがにこのあたりはこうでなければ、わざわざ異世界に来た意味がないからな。

「その言葉、後悔するなよ？」

「望むところだ」

そう言い合い私と一条は戦いの準備に入った。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　一条要

俺はシキと名乗る新しくここに来た奴と対峙している。だがアレだけの大口を叩くだけあって、相当な力の持ち主だな。戦闘タイプは狙撃手だっていうのに自信があるのかシキは、中距離に位置とっている。

最初に『シキ』の名前を聞いたときに『直死の魔眼』関係の転生者と思ったが、案の定それ関係の転生者だった。ただ、自身に『直死の魔眼』を宿してるわけじゃなく、銃のスコープに宿してるんだ

ったな。とりあえず……。

「身体能力・魔力１００％解放。アルティメットワン発動」

様子見を兼ねて最初はこの程度でやることにするか。魔力だけを感じるんだったら、あいつほどの魔力を持つ奴はあまり多くはないが、居ないわけではない。俺はそう思いながら、シキの背後に回り込む。

だが次の瞬間に、俺の視界は回転していた。それがシキに飛ばされたことだと気づくのに数秒を要したが、なんとか体勢を立て直す。ちっ、一瞬で飛ばされた？　だがどうやって……。

「ふむ、速さだけなら私が見た中で二番目の速さだ」

二番目？　ということはあいつの世界で俺より強い奴が居たってコトか、もしくは他の転生者と戦ったかってコトだ。俺はそう考えながらシキをみる。どうやら俺は近づいた瞬間に狙撃されたみたいだな……。

「さて、様子見をするつもりならやめた方がよい。貴様の実力は把握した」

「そうかよ。身体能力・魔力１５０％解放」

俺はシキに答えると身体能力と魔力をさらに解放する。それと同時に俺に向かって魔力弾が放たれたのが見えた。俺は一瞬でその場から動き、シキに反撃しようとする。

だが俺が移動した場所にすでに魔力弾が放たれており、俺が反撃

をする前に移動する羽目になる。しかも移動した先で再び魔力弾が向かってきた。まさか動きが読まれてるのか？　そうは見えないが、現に狙い撃ちされてるんだから、そう考えた方が良いな。

「らあァッ！！」

そして俺はシキの放った魔力弾を殴って相殺する。つーかただの魔力弾だってのになんて威力だ……。とか思ってるうちに俺に向かってさらに魔力弾が向かってくる。それを俺は殴り、蹴りで相殺していくんだが……もしかして嘗められてんのか？

さっきからあいつはあの場から一歩も動いてないし、魔力弾しか撃ってきてない。……完全に嘗められてんな。ふざけやがって、後悔させてやる。そう思った俺は魔力弾を全て回避し、一気にシキの懐に潜り込む。そしてシキの体に拳を叩き込む。

「強いな。だが、軽い。『限界突破』、ほら、よッ！！」

だがシキには全くダメージがある様子はない。それどころか殴り返して来やがった。咄嗟に身を引いて避けたは良いんだが、狙撃手のくせにただの右ストレートがその威力はないだろ……。

しかも俺の拳が軽い程度で済まされるか。こいつはここに来てる転生者の中でもかなり強い方に入るんじゃないか？　俺がそんなコトを思っている間にシキの魔力弾が迫る。あくまでも狙撃にこだわるのか。

そんなコトを考えているとシキの姿が一瞬にして見えなくなる。すると俺の腹部に衝撃が走る。だがそれに反応する間もなく、第二撃三撃と立て続けに衝撃が来る。全力じゃないとは言え、ここまで

歯が立たないだと……。

「『限界突破』を使った今の私の拳を受けて尚立つか。伊達に今まで生き抜いてきたわけではない、と言うことか」

「当たり前だ。嘗めんなよ。武装・ＯＲＴ」

俺は自らの皮膚をＯＲＴの外殻に変化させる。どうにもあいつにはこうでもしておかないと届きそうにないからな。実際、まだ一発しか叩き込めてないしな。それに引き替え、あっちはまだまだ手加減してるのにも関わらず、すでに何発ももらってる。

「ＯＲＴか……。そう言えば鏡さんは一条のマテリアル、つまりはコピーであるのだから、使えてもおかしくはないか」

「鏡と俺のとは違うんだが、別に今はどうでもいい」

というか何で鏡はさん付けなのに俺は名字なんだ？　鏡は俺のコピーなのになぜか俺より敬われてないか？　まあコレもどうでも良いことなんだがな。全く……世界は広いな。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シキ

一条の肌が変化した。アレはＯＲＴの外殻を自らの肌にしたのだろうが、実に器用な真似をする奴だ。だが、あいつはＯＲＴ以外は自らを鍛え上げてチートとなっている。

私も途中までは自ら鍛えていたが、神格を体に取り込んだからど

ちらにしろ、鍛えたのとは違う。そう考えると一条は尊敬に値する存在だ。一条レベルなら並大抵の実力者ならば、歯が立たぬだろうな。だが相手が悪かった。

神すらも一瞬で殺せる狙撃手へと進化した私に対して、対人効果程度じゃまるで意味がない。確かに一条の速度（スピード）も火力（パワー）も大したものだ。だが、あくまでも対人に対して。

「らあァッ！！」

「甘い」

私は一条の拳を回避して、そのままカウンターを行う。咄嗟の判断で一条は体を捻ることにより、直撃は逃れる。だが、衝撃波には対応できずにそのまま壁にたたきつけられた。

そんな一条の四肢に対して魔力弾を撃ち込むが、やはり皮膚がＯＲＴの外殻と同じになったならば、‘ただの’魔力弾で傷つけることは難しいか……。まあ、神格の力が無かったら確実に一条には勝てないな。

「ミニスライサーッ！！」

そんなコトを考えていると小さな円盤のようなものが何枚も私に向かってきた。コレは円盤の側部が刃物のようになっているのか？動きも読まれないように複雑に、しかも速さも音速以上にしてるあたり、中々なものだ。

だが、今の私からしたら遅すぎるくらいだ。私は銃を動かして一瞬で全ての円盤を撃ち落とす。『死の点』をつくまでもなく、単純

な威力で撃ち落とせるほどだったか。そして一条に視線を戻すが、すでに一条の姿はない

「――――全納力完全解放、星の枷解除!!　だらァッ!!」

だが次の瞬間、いきなり一条が私の後ろより現れた。しかも何をしたのかは分からぬが、先ほどとは比べ物にならないほどの力が放出されている。この状態の一条の拳をまともに喰らったら、さすがにキツいか？

そんなコト思ってるうちに一条の拳が私の背を捉える。肉が裂け骨が砕け、その拳は私の肉体を貫通する。鮮血が舞う、普通ならすでに致命傷だ。そう‘普通’ならな……。

「一条要。私は貴様を少々過小に評価していたようだ」

「腹に穴あけたままよく平気そうにしてられるな。今のは確実に殺りにいってたんだがな」

「まあ、一度死んでいるのでな。コレぐらいわけないさ」

私はそう言いながらティアの方をチラッとみる。するとそっぽを向かれてしまった。やれやれ、嫌われてしまったか。

「これで終わりにしよう。これ以上やるならばここが保たない」

「そうだな。……で、その腹の穴どうするんだよ」

「こうする」

私はそう言いながら『創造再生』を使い一条から受けた傷を全て‘なかった’コトにする。さらに私と一条、ティアと鏡さんとの戦いでここもボロボロになってしまったので、その傷を全て‘なかった’コトにする。

「目的は達した。実に楽しい戦いだったよ」

「楽しい、か。こっちは割と本気だったんだが」

まあ、そうは言ってもＯＲＴを完全に解放していない君が言っても、何ら説得力がないのだがね。だが、まさかこの枷をしてる状態とは言え、腹に穴を開けられるとはな。

私もまだまだ精進が足りないと言うことだろうな。そう思いながら私たちはここを出た。

◆　◆　◆　◆

「なるほどな……。そっちもいろいろ大変なんだな」

「どうりでオリジナルを赤子のように扱えるわけじゃな」

「……うっせ」

現在、私たちは一条の家にて私の力について料理をしながら、説明している最中だ。私が一条の力を知ったのだから、私の力も教えろと言われたので教えたのだ。神を内包していたら、普通は驚きそうなものだが、一条や鏡さんは驚いている様子は全くない。

おそらくは一条の知り合いで私とは違うだろうが、神を内包して

いる、もしくはそれに準じた者を内包している転生者が居るのだろう。私もそれにはもう驚かないがな。

で、なぜ私が料理をしているかと言えば……何故だろうか？　まあ、成り行きで料理する事になってしまったが、料理は得意分野であるから嫌ではないな。

「ところで、一つ気になったのだが、ティアはどうしたのかね？」

「む？　ティアレンスならオリジナルの妻達に連れていかれていたぞ？」

「何やってんだ？　あいつら」

私に訊かれても分かるわけがあるまい。というか私が訊いたのに、訊き返さないでもらいたいものだ。ふむ、とりあえず一条の妻達に連れて行かれたらしいが、いったい何をされているんだ？

「クロカミ、あんた料理もチートか……？」

「ん？　そうか？」

「そうじゃな。そこらの高級レストランでもお目にかかれなさそうな出来映えじゃの」

ふむ、別段変わったことはやっていないのだがな。急に押し掛けてきた詫びとしてと、一条一家は異常に人が多いために、腕を振るったのは確かだが……。そこまで誉めるほどではないと思うがな。

「いや、これで普通ならそこらのプロの料理人なんか素人同然だ

ぞ？」

「ふむ、ならば店に勤めてみるのも良いかもしれぬな」

「そうしたら儂は毎日行くぞ」

「待遇しよう」

まあ、勤める気などはさらさらないし、私の世界ではまだ大戦期すら始まってはおらぬ。平和な世になってからなら、少しは考えてみるのも悪くはない。そんなコトを話していると、ドコからか声が聞こえてきた。

『ちょっ、待て！！　そんな女の子丸出しの服なんか着れるか！！　ってヴィータ閣下は何でゴスロリメイド服！？』

『ごちゃごちゃ言うな。元が良いんだから、キレイになりたくねーのかよ』

『いや、それは……ってなのはさん！？　なんでナース服を！？』

『ティアレンスさんなら似合うかな、って』

『そんなん絶対着ない！！　ってスバルは巫女服！？　着ない、絶対着ない！！』

『え～、いいじゃん。ティアなら絶対似合うって♪』

『そうじゃない！！　ってなんでフェイトさんとすずかさんは腕をワキワキさせてそんな服を！？』

『『良いではないか良いではないか♪』』

『うわぁーーーっ！！』

「「「……」」」

なんだかとても愉快なコトになっているようだな。ティアはあの妻達に着せかえ人形のようにされていると言うわけだ。気になったのは何故一条家にゴスロリメイド服やらナース服、巫女服といったものがあるかなのだが……追求しないでおこう。これは一条一家の問題だ。

「大変そうだな」

「……分かるか？」

私はこの世界に来たときは胃痛がひどかったものだ。まあ、今は慣れてしまったからか胃痛などはならなくなったがな。……慣れてしまったのか。

そんなコトを考えながらたわいもない話をしていると、部屋の扉が開く音が聞こえた。そちらの方を見てみればそこにいたのは……。

「「「両儀式！？」」」

「は……？　り、両儀……？」

なぜか一条妻達と一緒に両儀式が居た。なぜ両儀式が居るのかと言えば一条の世界だから、でどうにでもなるんだが、一条と鏡さん

が驚いてるところを見ると、元から居たわけではないようだな。
しかも両儀式（？）も何がなんだか分からないって顔してると同時に、恥ずかしいって表情をしている。何がどうなっているのだ……？

「両儀式？　違うよ。この子はティアレンスさんだよ？」

「なに？」

私はなのはさんの言葉にそう呟き両儀式（？）に近づく。う～む……本当にティアのようだな。まさか着物を着たティアが、ここまで両儀式に似ているとはな。正直本人かと思ってしまったほどだ。

そういえば『直死の魔眼』も使えるしナイフの扱いにも長けていたな……。もしやティアは平行世界の『両儀式』だったのか？　一人称も『オレ』だしな。

「シキさん。そ、その……に、似合ってるか……？」

「む？　あぁ、似合っている。女の子らしくて、可愛いよ」

「～～～～ッ！？／／／／／」

私が素直に感想を述べるとティアは顔を真っ赤にしながら、そっぽを向いてしまった。なぜなんだ、と思いながらなのはさんを見たのだが、やっぱりねと言わんばかりの表情で見られた。全く……いったい何だと言うのだ。

「これってクロカミさんが作ったんですか？」

「む？　あぁ、そうだ」

「すごいですね！！　食べても良いんですか？」

「あぁ、構わんよ」

私がそう言うと一条妻達が席に座り、各々が食べ始めた。ふむ、なのはさんやフェイトさん、すずかさんの方は絵になるのだが、スバルとヴィータ閣下は大食いの食べっぷりだな。

「ギガウマだぞ！？　ギガウマだ、クロカミ！！」

「気に入っていただき光栄です、ヴィータ閣下」

「おう！！」

ヴィータ閣下は本当に美味そうに食べるな。また今度こちらに来たときは腕を振るわせてもらうしよう。私の料理をここまで美味そうに食べてくれるのは、嬉しい限りだからな。

「さて、私たちはこの辺で失礼させてもらおうか」

「ん？　もう少し居ても構わんぞ？」

「生憎と私もやることがあってね」

私はそう言いながらこの世界と私の世界を繋ぐ扉を、想像し創造する。どうやらやろうと思えば動とでもできるようだな。

「では失礼します。ヴィータ閣下」

「おう、また作ってくれよ？」

「承りました」

「なんで俺じゃなくてヴィータなんだ……」

「何となくだ。行くぞ、ティア」

「あ、あぁ」

私はそう言うとこの世界と私の世界を繋ぐ扉をくぐる。こうして私とティアの異世界旅行は、幕を下ろした。

番外撃『チートじゃ済まない転生者。ふむ、私とどちらが強いか見物だな』（後

感想待ってます！

主人公設定＋α【2】（挿絵追加）

名前：シキ・Ｋ（クロカミ）・アスタロト
イメージＣＶ：坂本真綾→櫻井孝宏
（お好みで脳内再生してくださると助かります……。）
身長：１７３ｃｍ→１８０ｃｍ
体重：６２Ｋｇ→７０Ｋｇ
一人称：私→私
容姿：銀髪蒼眼。
銀髪の髪は腰あたりまであり、それを三つ編みにして纏めている。
顔は女の子が見れば美男に見え、男の子が見れば美女に見える中性的な顔立ち。
頭からテオドラと似ている角が生えた。
→容姿に変化はないが以前のように濁っている目ではない。
性格：ドが付くほどのＳ。
基本的には馴れ合いを好まないが、人となりによりそれは変わる。
年齢：人間で言えば２６歳。

＞ｉ２３８２４―２２９６＜

ＲａｉＮ様より描いて頂きました。
ＲａｉＮ様、心より感謝致します。
ちなみになぜ銃でなく鎌を持っているのかは……お楽しみにｗｗ

『能力（スキル）』

・氣をある程度使える力。

文字通り氣をある程度使える。
現在はすでにこの力は無意味になっている。

・鍛えればいくらでも強くなる力：ＥＸ
その名の通り鍛えればいくらでも強くなる。
上限も存在しないし、さらには鍛えなくてもそれまで蓄積した力は、一生衰えることはない。

・竜族：ＥＸ
体が竜族であるため竜族の力が使える。
現在は完璧に使いこなすことが出来ているが、使うときは余りない。

・鷹の目：ＥＸ
魔力で視力を強化することにより、百キロ以上離れていたとしても、『死の点』のように小さいものも見える。

竜族のくせに鷹とかツッコんじゃダメ。

『魔銃（仮）』
ライフルのような形をしており、スコープに『直死の魔眼』の力が備わっており、覗けば者（物）の死の点が見えるようになる。
さらにこの『直死の魔眼』はありとあらゆる者（物）の死の点が見える。
前までは不老不死に対しては『死の点』は見えなかったが、悪魔襲来事件により死を理解し、現在では不老不死の『死の点』も見える。

・射撃：ＥＸ
現在ならば百キロ以上離れていたとしても、九割以上正確に『死

の点』をぶち抜ける。

・無限の狙撃　Ｎｅｗ！！

対象の周りに二重螺旋の魔法陣を大量に展開させ、そこから魔力弾を放つ技。

二重螺旋の魔法陣には『破壊されない』と言う概念が付与されているため、囲まれたら最後、相手が気絶するか死亡するまで撃ち続ける。

また自動的に『死の点』を狙うようになっている、正に最終奥義。

実は未だに修業以外で使ったことがない。

『旧魔法』

・能力喰い　Ｎｅｗ！！

『神格王』の旧魔法。

使用すると右腕の肘のあたりから黒い霧状の腕が出てくる。

この腕で相手の頭を掴む、もしくはどこかを貫けば相手の能力を問答無用で奪い取ることが出来る。また、与えることも可能。

・限界突破　Ｎｅｗ！！

『神格（ガブリエル）』の旧魔法。

触れたものの限界の境界線を取り払い、限界以上の力を使うことが出来る。

・物真似幻想師　Ｎｅｗ！！

『神格（ウリエル）』の旧魔法。

その目で見て、その耳で聞いた能力を我がものと出来る。

ただ、聞いた場合は具体的な使い方を聞かなければならない。

この旧魔法で得た力は本来の力の何倍もの力を出すことが出来る。

・創造再生　Ｎｅｗ！！
『神格（ウリエル）』の旧魔法。
その対象に起こった事象を拒絶し、何かが起こる前の状態に戻す。
さらに、想像し創造することが可能。
命の再生は愚か、自分が死んでからもコレが使えるため、殺し合いではこの能力を何らかの方法で封じない限り、シキは絶対に死なない。

『強さ』

筋力：ＥＸ＋＋（？）
耐久：ＥＸ＋＋（？）
俊敏：ＥＸ＋＋（？）
魔力：ＥＸ＋＋（？）
氣　：ＥＸ＋＋（？）
（）↑は力を完全解放した場合。
解放せずとも神を瞬殺できるが、解放したら……言葉に表せません。正直測定不可能のために（？）になっている。

シキ（完全解放ｖｅｒ）＞＞＞シキ（完全竜化ｖｅｒ）＞シキ（限界突破ｖｅｒ）＞シキ（通常ｖｅｒ）

『備考』

第二章のほとんどはアリアドネーに滞在。
神格事件を通して『シキ』の名（仕事名）が有名になり、依頼が絶え間なく来ることになる。
すでにチートが進化してテラチートとでも呼べる力になっているが、力に貪欲なために、いつも力を欲している。
正直、ここまで来ると狂ってるとしか言いようのないほどに貪欲。

精神の一部に『ミカエル』と『神格王』の魂が存在している。

・ミカエル
旧文明時代の『神格（ミカエル）』。
旧魔法は『口移し』と呼ばれるキスをした者に、旧魔法を与える旧魔法。
また、キスをすればその者の旧魔法を奪うことも出来、神格王から旧魔法を奪った経緯がある。

・神格王
『能力喰い』の旧魔法を持っていた。
全ての『神格』を束ねる王。
神格王は現代人からは旧文明王とも呼ばれ、呼び名は様々ある。
神格王は全ての旧魔法を使用することが出来、『能力喰い』だけが神格王だけに許された旧魔法。しかし、生前にミカエルに奪われたまま滅んだ。
今はカクちゃんと呼ばれている。

『一言』

シキ
「『まずは……その幻想をぶち殺す！！』　……今回は前より幾分マシか」

カクちゃん
「『慢心せずして、なにが王か！！』　ふん、我のためにあるような言葉だな」

ミカエル
「『ビリビリ言うなぁーっ！！』　……誰のセリフでしょうか…

…？」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：ミカエル→ミカ・クロカミ
身長：１２６ｃｍ
体重：―――
一人称：あたし
性格：人懐っこく、天真爛漫。
→教育を間違えたのか、少しばかり歪んでしまっている、良い意味で。

『備考』

鍵（ミカエル）の器であり、人間ではない。
正確には少々違うのだが人造人間（ホムンクルス）と酷似している。
第三章ではシキの養子となり、依頼の管理などをしている。

『一言』

ミカ
「『全力全‘壊’スターライト……ブレイカ――――――――――ッ！！』あははっ♪　へんなのー♪」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：ユーリ・アスタロト
身長：１６３．５ｃｍ→１６５ｃｍ
体重：―――ｋｇ
一人称：僕→僕

容姿：わずかに褐色に染まった肌に赤色の腰ほどまである髪をそのままにしている。
↓特に変化はなし
参考は『真・恋姫†無双』の劉備。
性格：はっきりと物を言えるが、ドジっ子とブラコンである。
年齢：人間でいうならば２２歳。

『能力』

・竜化：Ａ
自らの体を竜に変化させることが出来る。
ただ制限時間が短いためにランクが下がっている。

・シェリル流剣技：Ｓ
シェリル仕込みの我流の剣技。
現在はかなり上位の実力になっているが、さすがに紅き翼のメンバーには勝てない。

・魔力装填・魔刀〇〇化：ＥＸ
ユーリが独自に生み出した剣術。
自らの刀に属性の魔力を流し込むことにより、刀にその属性に見合った力を発揮させる。

筋力：Ｄ↓Ａ
耐久：Ｃ↓Ｃ
俊敏：Ｃ↓Ｂ＋
魔力：Ｂ↓Ａ
氣　：Ｃ↓Ｂ
第二章終了時↓第三章開始時。

『備考』

今回の事件で自らが『神格（ガブリエル）』の血を引いていると判明。
神格（ガブリエル）の力を使えば紅き翼にも勝てるのだが、現在はシキにより抜き取ってもらっているために、そこまでの力はない。
第三章ではヘラス帝国の騎士団に入団する予定。

『一言』

ユーリ
「『来なかったら、死刑だから♪』　前もこの人のセリフだったような……」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：シェリル・アリウス
身長：１７９ｃｍ
体重：――ｋｇ
一人称：私
容姿：腰ほどまである黒髪をポニーテールにまとめている。
第三章が始まっても変化なし。
参考は『とある魔術の禁書目録』の『神裂火織（ねーちん）』。
性格：どんな物事においても真面目である。
几帳面で曲がったことが嫌い。
色恋沙汰には縁がなかったらしく、そう言うのに対しては非常に初な反応をする。

『能力（スキル）』

・我流剣術：Ｓ＋＋
自らに出来る技を極限まで引き上げた状態の剣術。
我流であるために自分のための剣術。
・秘剣・燕返し：ＥＸ
某聖杯戦争に参加していたアサシンと全く同じ技。
剣術の修業中に完成した偶然の産物。
・邪剣・罷返し
自らの魔族としての力を刀身に流し込み、刀身を巨大化させて相手を切りつける技。
威力はおそらくは神格の力を除くならば、確実に最強クラスの威力。

『強さ』
筋力：ＥＸ
耐久：Ａ＋
俊敏：Ｓ
魔力：Ｓ＋
氣　：Ｓ

『備考』
剣術から何から何まで近衛詠春を凌駕している。
シキには追い抜かれてしまったものの、その強さはジャック・ラカンを上回る。
アリアドネー騎士団のお偉いさんで、かなり有名だったりする。
神格事件で体にかなりの重傷を負うが、実力に特に支障はきたしておらず、第三章でもアリアドネー関係での参加になる。
第二章で魔族であったことが判明。
第三章では余り出番なし。
現在『も』恋人募集中である。

『一言』

シェリル
「『問おう……あなたが私のマスターか？』　前よりはずっとマシですね」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：バルド・アスタロト
身長：２０３ｃｍ
体重：８９ｋｇ
一人称：俺
容姿：赤色の髪を短く切りそろえて、肌の色はユーリよりわずかに褐色。
たつみーとかよりは褐色ではない。
性格：大雑把で脳天気。
なんでも気合いで済ませてしまうところがあり、原作の筋肉達磨とかなり似ている。
ただ実力は天と地の差。

『能力』

・完全竜化：ＥＸ
自らの身体を完全に竜の姿に戻し、本来の力を解放する。その力は計り知れない。

・限界突破：ＥＸ　『神格（ガブリエル）』の旧魔法。
説明は上記の通り。

『強さ』

筋力：ＥＸ→（？）
耐久：Ｓ＋＋→（？）
俊敏：ＥＸ（？）
魔力：Ｓ＋（？）
氣　：ＥＸ（？）
（）↑の中は神格（ガブリエル）の力を解放したとき。
測定不可能なほどに強い。
ただ、シキと比べてしまうとどうしても弱くなってしまう。

『備考』

アスタロト一家の大黒柱。
第一章で確かに死んだのだが、実は『神格（ウリエル）』の血を引く者により復活した。
バルドも『神格（ガブリエル）』の血を引く者である。

『一言』

バルド
「『こっから先は一方通行ってなァ！！』　悪ぃが俺はここまで厨二病じゃねえ」

◆　◆　◆　◆　◆

名前：エル・イーグルス
身長：１５６ｃｍ
体重：？？ｋｇ
一人称：エル

容姿：薄黄緑の髪を肩のあたりで揃えている。目は横棒の下に半円を付け足したような目をしている。
目以外は『らき☆すた』の『岩崎みなみ』。
性格：クーデレ
基本的には大人しく、他人に譲りがちな性格ではあるが、一途なところがあり、一途な部分だけは絶対に譲らない。

『能力』

・射撃：B
神格事件以来修業を積み重ねて手に入れた力。
数キロ離れた距離ならば寸分違わず狙い撃つことが可能。

・鷹の目：B
魔力で視力を強化することで、数キロ先の場所を見ることが出来る。

『強さ』

筋力：C
耐久：B
俊敏：A
魔力：S
氣　：C

『備考』

神格事件以降、シキに憧れ狙撃手になり、第三章ではユーリと共にヘラス帝国の銃騎士団に入団する。
エルの場合は予定ではなく、本当にする。

エルはシキとは違いライフル形状の銃だけでなく、多種多様な銃を使いこなすことが出来るが、やはりライフル形状の銃を使っている。
シキに惚れており、ユーリは恋のライバルになっている。
射撃だけに徳化してるために、近距離戦はからっきしダメ。

『一言』

エル
「『……許可を』」

シキ
「『いいぜ、やっちまいな』結局こいつのセリフをやるのか……」

エル
「……気にしない」

シキ
「そうだな……」

『余談』

何気に作者のお気に入りのキャラクター。
もしかしたらエルを主人公とした物語を外伝で出すかもしれない。

◆　◆　◆　◆　◆

名前：ティアレンス・バイシタル
身長：１６６ｃｍ
体重：??ｋｇ

一人称：オレ
容姿：わずかに蒼み掛かった髪を肩のあたりで揃えている。
イメージするならば『空の境界』の『両儀式』でお願いします。
性格：仲間のためならば九を切り捨て、一を助けることを選ぶほどに、仲間を大切にしている。
基本的にはバカっぽいが、シリアスな展開になると、かなり性格が変わり、別人のようになる。

『能力』

・直死の魔眼
神格（ウリエル）の旧魔法『物真似幻想師』でコピーした能力。
『神格（ウリエル）』の力を抜き取られるときに、この能力だけ返してもらった。
『物真似幻想師』でコピーしているために、『両儀式』や『遠野志貴』の魔眼よりも性能が良い。

・刃物の扱い：ＥＸ
刃物の扱いに異常に長けており、どのような刃物でも使いこなすことが可能。
一番使いこなすことが出来るのはナイフである。
まさに直死の魔眼を最初から与えるために設定したような設定である。

『強さ』

筋力：Ｓ
耐久：Ｂ
俊敏：Ａ
魔力：Ａ

氣：S

『備考』

『神格（ウリエル）』の血を引く者。
現在は上記に記したとおり神格（ウリエル）の力を持っていないために、戦闘能力は神格（ウリエル）を持っていたときよりは低下している。
だが、長年の戦闘経験によりある程度は戦える強さ。
多分、うまくやるならば『アルビレオ・イマ』と同等かそれ以下くらい。
神格事件の首謀者であるが、関係者以外はそれを知らない。
第三章ではドコにも属さずに、旅人としての立場になる予定。

『一言』

ティア
「『生きているなら、神様だって殺してみせる』コレってオレのイメージになったキャラのセリフか？」

◆◆◆◆◆

『旧文明』

現代に築かれている文明のずっと昔の文明のコトを指す。

『神格』

遙か昔に築き上げていた文明の上位の人物のことを指す。　神格の中には神すらも凌ぐ実力を持つ者がおり、『神格王』、『ウリエル』、『ガブリエル』などが代表的である。

その身体能力から何から何までが現代の魔法使いなどでは到底太刀打ちできない。

『旧文明人』

旧文明の頃に生きていた人物のことを指す。
旧文明人は現在の魔法使いとは違い、一人一人が旧魔法を所有していた。
戦いの素人だとしても、現代の上位魔法使いに匹敵する身体能力を保有する。

『旧魔法』

旧文明人の一人一人に発現する魔法を指す。魔法と言うよりも固有能力といった方が適切。
旧魔法は一人一人違う者が発現し、似ていたとしても、同じ旧魔法は発現しない。

『備考』

なぜコレだけの力を持つ神格の血を引いている者が、あの程度の実力に収まってるかと言うと、神格には力に見合った肉体が必要であり、現代人の肉体ではそれに耐えきれないために、無意識にスペックが落ちている。

◆◆◆◆◆

『裏話』

この章の元ネタは気づいてる人も居ると思いますが『ファンタシ

ースターポータブル２』です。
作者が第二章開始時にハマってたので、やっちゃおうという思いつきでやりました。

では、感想待ってます！！

第二十撃『第三皇女の誕生会。さすが皇女、盛大だな』（前書き）

今回から原作入ります！！

第二十撃『第三皇女の誕生会。さすが皇女、盛大だな』

side　シキ

神格事件が終結してから早くも五年が経過した。この五年間と言えば、それまでと特に変わったことはなく、それまでと同じように依頼をこなしたりしていた。まあ、依頼量は以前に比べると倍以上になってしまったが、困るなどと言ったことは無いがな。

ただ世の中は変わってしまった。神格事件の影響を受けて、各地で紛争や戦争などが起こってしまっている。それを鎮圧するために、駆り出されたりするが、コレは私にも責任があるために、断るわけにもいかない。

「シキお父様、ヘラス帝国からお手紙が来ていますです」

そんなコトを考えていると、私の背中におぶさっているミカが話しかけてきた。あれから、ミカは正式に私の娘となり『ミカ・クロカミ』となっている。

私の娘なのだから『アスタロト』の姓はバルドやユーリ達のものであるため使ってはおらず、私の姓である『クロカミ』を使っている。ちなみにミカには依頼の管理を担当してもらっている。この頃は依頼が多いからな。

「わざわざヘラス帝国からご苦労なこったな。で、ヘラス帝国からなんだって？」

「『近々第三皇女の誕生会が開かれる。第三皇女の護衛を依頼したい。詳細はこの場所にて』だそうです」

「第三皇女の護衛か……。たんまり入るんじゃねェか？」

私はミカから依頼の詳細を伝えるという場所の指定場所を示している地図を受け取り、歩きながら背中によじ登っているミカに言う。

「シキお父様、そのぐらいであたしもお腹一杯食べれますですか？」

「……ちょっと、分かんねェな。お前、食べ過ぎだから」

「アレでも腹八分目です」

一回の飯で最低十万以上も使いながらも腹八分目だと？　お前は食べ過ぎだと言うのだ。それで良く太らないな、普通それぐらい食べたならば太るものだと思うのだが、正直全く太ったようには見えぬな。つか、自重しろよ大食い娘。

――――ガスッ

「痛ぁっ！？　何だよ、ミカ！！」

そんなコトを考えていると、なぜかミカに思いっきり頭を殴られた。

「お父様、今変なこと考えましたですね？　そうなんですね？」

「ナンノコトヤラ……」

何なのだ……。なぜ私の周りには固有能力（スキル）『地の文読み』を使える者が多いのだ……？　と言うかミカも以前までは天真爛漫で無垢だったと言うのに、何故こうなってしまったのだ……。

「お父様、女性（レディ）には時として相手の心を読むときが重要なときがありますです」

「それ……ユーリかエルに教えてもらったろ？」

「いえ、ティアお姉様です」

……ってまさか一番女の子らしからぬティアが、そのようなことを教えていたのか。ならば少しくらい女の子らしい態度を取ってもらいたいものだな。

――――ガスッ

「痛ぁっ！？　なんだよ、別にミカのことはなんも考えてねェだろ！？」

「ティアお姉様の分です」

誰か、うちの純真無垢なミカを返してくれ……。

◆　◆　◆　◆　◆

「ふむ、了解した」

ヘラス帝国に到着して最初に思ったのはたかが誕生会だと言うの

にも関わらず、どこぞの祭りのような騒ぎだな、と言うことだ。出店なども大量に出ており、パレードのようなものまで開かれている。コレならば、そこらの祭りの規模が小さく見えるほどだな。

で、私はそんな祭りの最中に指定された店に来て護衛の説明を受けていた。ちなみに今日が第三皇女の誕生会ではなく、誕生会は明日らしい。今日は前夜祭ならぬ前日際のようだ。

で、依頼と言うのは第三皇女の護衛。別に宮殿の兵士だけでも事足りるらしいのだが、念には念を入れてと言うことでわざわざ遠くから私を呼びつけたらしい。全く……いくら皇女とはいえ少々過保護のような気もするが、依頼されたならば口を挟む気はない。

「一つ訊ねたいことがありますです」

「な、何でしょうか？」

いきなり現れたミカに驚きながらも依頼主の女性はミカにそう訊き返す。というかミカ、君にはいつも依頼の受託のときは出てくるなとあれだけ言っているだろう。まあ、結局は聞いた試しがないからもう言ってはいないがな。

「皇女様の誕生会では、ご飯がたくさん食べれますですか？」

「えぇ。護衛をしてくださるのですから、それぐらいのご用意はさせていただきます。なんなら、今日一日、宮殿に宿泊なされますか？」

うむ、これで依頼の金額を減らされずに済むな。帝国からの依頼とはいえ、ミカにしてみれば一週間保つかどうかすら危ういからな。

ただ、ミカに誕生会での食事を与えたら、他の者が食せなくなるような気もするが、今は考えなかったことにしておこう。

「宿なら問題ない。目星は――」

「ではお世話になりますです」

……勝手に決めないでもらいたいのだがな、ミカ。なぜ君は毎度毎度私の邪魔をするのかね？　はぁ……誰か私の純真無垢なミカを返してくれ……って先ほども言ったか。

「ふふっ、元気な娘さんですね」

「元気すぎるのも考え物ではあるがね……」

私は溜め息混じりで依頼主の女性に向かって言う。なぜミカが私の娘と知られてるかと言えば、不名誉な二つ名で私が知られているというのもあるからだ。

――子連れ狙撃手

これが私の不名誉な二つ名だ。別に私がこの二つ名を言ったわけではない。まあ、私は二つ名など要らないのだが、依頼を受けて向かったどこだかの村人がそういい、このような二つ名がついてしまったのだ。

「この入城許可の書類を城の門番に見せればいつでも入れます。もし無くしてしまったならば、私の名前を出してもらえると大丈夫です」

「了解した。では、日が暮れる前に行くようにする。それまでは好きに行動してても構わないだろう？」

「構いませんよ？　では私は失礼します」

依頼主の女性はそう言うと店を後にしてしまった。さて、日が暮れるまではまだ半刻ほど時間があるな。久しぶりにゆっくりとするのも良いかもしれんな。

ただ、あまりゆっくりとしているとミカが出店の食品を全て食べ尽くしてしまう恐れがあるからな……。小遣いを持たせて、それ以内で納めるように言えば良いだろうか……？　だが私は娘（ミカ）に対しては異常に甘いからな……。

以前に拳闘大会での私の活躍が見たいと言われたときなど、全ての相手をフルボッコにしてしまったからな……。これでは親バカと言われてもなんとも言えんな……。

「お父様、出店に行きますです。せっかくの祭りなのですから、楽しまねェと損です」

今更ながら教育を間違えたかと思う。たまにしか出ないのだが、ミカはわずかに私の口調を真似するようになってしまった。基本的には『～ますです』なんだが、たまにだが『ねェ』と使うんだよな……。

「分かってるよ。はぐれないように俺の背中によじ登っとけ」

「分かってますです」

ミカはそう言うなり私の背中に器用によじ登ってくる。ミカが重かったならこんなことは言わないのだが、生憎とミカが軽いのでな。手を繋ぐよりこうしていた方がはぐれなくて済む。

「まずはどこに行きますですかね……。あっ、あそこが良い！！」

「ん？　って射的かよ……」

「お父様の得意分野だから良いじゃないですか」

まあ、簡単に表すならば得意分野と表せるんだが、あまりそういった風に表さないでもらえると助かるのだが……。得意分野というと、あまり戦闘と言うよりも、趣味の範囲に入っていそうだから。

「ミカはどれが欲しいんだ？」

「あの竜の人形が欲しいです」

竜の人形……ってなかなかに大きいな。だからといって取れないと言うわけではないのだがな。むしろアレくらいならば簡単な部類に入る方だ。的が大きいだけに、狙いどころがたくさんある。

私は店の者に一回分の射的料を払う。そして射的用の銃に玉を詰めて、狙いを定める。狙いを定めた後はただ、引き金を引くだけ。

――――パンッ！！

実際の銃と比べると幾分か間抜けな銃声が響き、玉が人形に向かって放たれる。真っ直ぐに向かった玉は人形に当たり、人形が傾く。そしてそのまま逆さに落ちていく。商品ゲットだ。

「やった！！　さすがお父様です！！」

「これくらい朝飯前さ。ほらよ、落とすなよ？」

「はいです！！」

私から人形を受け取ったミカは天真爛漫な笑みを私に向けながら、嬉しそうに人形に顔を埋める。自分の娘を可愛いと思ってしまうこの気持ちは親としてのものなのだろうか、それとも異性としてなのだろうか……。まあ、親としてのものだろうな……。

◆　◆　◆　◆　◆

あれからしばらく祭りを堪能していた私とミカ（私は金を出費していただけなのだがな……）は今はベンチに座っていた。ミカは私の膝を枕にして、疲れてしまったのか規則正しい寝息を立てている。

寝ているにも関わらずミカは私がとった竜の人形を、誰にも渡さないとばかりに抱きしめながら眠っている。やれやれ最近は子供らしいところなどめっきり無くなってしまったのかと思ったが、まだまだ背伸びをしているだけのようだな。

《だ、だだダメですよシキさん！！　眠っている幼女に手を出しては！！》

《ミカエル……。お前の中で俺の位置付けはどうなってるんだ？》

《ふぇ？　だ、大丈夫です！　幼女趣味（ロリコン）などとは思ってませんから！！》

いきなり出てきたかと思えば私に幼女趣味（ロリコン）だと？　別に否定はしない。だが、手を出すと言うのは撤回してもらいたいものだな。私は幼女には手を出さぬ。愛でてるまでだ。私は紳士だからな、仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だ。

――――ドンッ

そんなコトを考えながらタバコを吹かしていると、誰かがミカが枕にしていない方の足にぶつかってきた。顔はローブを羽織っているために見えないが、身長からしてミカと対して年齢は変わらなさそうだな。

「はぁ……はぁ……。頼みごとがある……。わ、妾を助けてほしいのじゃ……」

「む？　誰かに追われてる……ようだな」

私が誰かに追われてるのかと訊ねようとした瞬間に、この女の子（声から推定）を捕まえようとしているらしき黒装束の輩がやってきていた。全く……せっかくの祭りだと言うのに、無粋な真似をする輩だ。

「祭りの最中に無粋な真似をする輩だ。偶然に流れ弾に当たって死んでしまっても、構わぬだろう？」

「――――ッ！？　い、いきなり物騒じゃな！？　それはだめじゃ！！」

な、なんと……この娘は自分が追われいる立場にあるにも関わら

ず、敵であるあの黒装束の連中の命を考えるとは……。この娘は、将来は立派な成人になれるだろうな。

私はそのようなコトを考えている間にも、黒装束が迫ってきていることには変わらない。殺さないまでも、捕まってしまっては元も子もないため、私は眠っているミカを背中に背負い、この娘を抱きかかえる。

「さて、撃ち殺してはいけないならば、逃げるしかあるまい。今からはあまり口を開けぬ方が良い。舌を噛むやもしれんからな」

「？　お主は何を言って――――ひゃあっ！？」

私はこの娘が何かを言っている間に、瞬動を……使うまでもなく部屋の屋根から屋根を飛び移って、黒装束から離れていく。ほぉ、いくら私がそれほどまでに速さを出していないとは言え、未だに私の視界に入るとはな。

とりあえず面倒になってきたために私はスピードを上げて、黒装束を撒く。そして黒装束が見えなくなったあたりで私は路地裏に入り、強力な認知阻害魔法を掛ける。

「お、お主！！　いきなり危ないではないか！！」

「ふむ、助けたと言うのに罵倒されるとは思わなんだ」

「うっ……す、すまぬ……」

私にそういわれてシュンとなってしまう娘を微笑ましく思いながら、視線を合わせるようにしゃがみながら言う。

「別に構わんよ。からかってみただけだ」

「むぅ……からかうでない」

「で、君の名前は？」

私がそう訊ねるとなぜか不思議そうな目を向けられたのだが、私は何か間違ったことでもしたのだろうか？　うむ、やはり他人に名前を訊くときは、自分の名前を言った方が良かったのか？

「お主は何故妾が追われていたかは訊かぬのか？」

「何故訊く必要がある？　別に、そのようなことを訊く必要はあるまい。私はシキ、とだけ名乗っておこう」

「妾は、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ」

「……だいたい理解した」

少女――テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアは、確かヘラス帝国の第三皇女。そんな少女が護衛も付けずに街を彷徨いていたら、それは連れ戻したくもなるな。

さっきの黒装束はおそらくはテオドラ姫の護衛の者なのだろうな。やれやれ、最初から言ってくれればこのようなコトをする必要も無かったと言うに……。

「んっ……。ん？　お父様、このチビじゃりは誰ですか？」

「ムカッ……お主も妾と大して変わらぬではないか！！」

そんなコトを考えると、さっきまでの騒ぎの中ぐっすりと眠っていたミカが目覚めた。しかも起きて早々にテオドラ姫にチビじゃりと来たか……。失礼にもほどがあるぞ、ミカ。あっ、なんか胃痛が……。

「残念ですが、あたしの方が、胸はありますです」

「だから大して変わらんじゃろ！！」

……お前等は仲良くなりそうだな。まあ、このように張り合いをしているところをみると、私の想像の中の貴族とかよりは随分と接しやすいのかもしれないな。それに、これならばミカがテオドラ姫が第三皇女だと知っても、態度が変わるなどと言うことはあるまい。

「むむむ……妾は第三皇女じゃぞ！！」

「だから何ですか？　あたしは子連れ狙撃手の娘です」

「子連れ狙撃手？　おぉ！　あの子連れ狙撃手か！？」

貴様か、ミカ……。貴様が私を子連れ狙撃手などという不名誉な二つ名を広げてくれたのか……。まあ、下手に厨二病な二つ名を与えられるよりはマシ、と言うものか。

「お父様、テオと仲良くなりましたです。一緒に祭りを楽しみますです」

「ん？　そうかじゃあ二人で楽しんで来ると良いよ」

「二人では不安です。何故お父様は来ないですか？」

「ちょっと用事があってな。大丈夫、ちゃんとお供は付けるさ」

私はそう言いながら『創造再生』を使って、擬似生命体を作り出す。確か以前にティアが創りだしていた『神騎兵』とかだったか？

それに私の魂の一部を植え付けて、後から記憶を共有出来るようにしておけば大丈夫だな。

「ん？　俺がもう一人？　じゃ、ねェな。なんだよ、俺は偽物の体か？」

「体は偽物とは言え、意識は私と同じ。同一人物と考えて構わない」

「了解。俺は二人の面倒を見てれば良いんだな？」

私は神騎兵の言葉に一回だけ頷く。私との区別が出来るように、十年前の私をモデルに性格を組み上げたのだが、些か元気が良すぎるような気がするな。まあ、無愛想よりも愛想が良い方が良いか。

そして私は神騎兵が二人を連れていくのを見届けると街にでる。しばらく街を散策していると、あの黒装束の者達を見つけることが出来た。私は黒装束に近づき言う。

「貴様等はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア第三皇女の護衛の者か？」

「――ッ！？　貴様は先ほどの！？　テオドラ様をどうし……」

私は黒装束が何かを言い切る前に、依頼主から受け取っておいた契約書を黒装束に見せる。黒装束がそれをみた後に私は黒装束に向かって言う。

「第三皇女は私が護衛する。怪我などさせるつもりは毛頭ない。安心すると良い」

「……」

どうやら見ず知らずの輩に信用しろ、と言われても信用できないような表情だな。だが、実に良い判断だと言える。ドコの誰とも言えぬ馬の骨を、初見で信用しないと言うのは、護衛では重要になるものだ。少し気は進まぬが二つ名を名乗っておくとするか

「子連れ狙撃手、と言ってもらえれば分かるかな？」

「――ッ！？　あの子連れ狙撃手か！？　一人で万の魔物を相手に出来るという、あの！？」

「噂は知らぬが、とりあえずそれだと言っておこう」

一人で万の魔物を相手に出来るという噂の方は知らないが、確実に万以上の魔物を相手にかすり傷なしで勝利する自身はあるがな。なんせ、神すらミンチに出来るというほどの力を持っているのだからな。

「失礼しました。では、我々はどういたしましょう」

「私に訊くな。自分の仕事に就け」

「り、了解しました」

私がそう言うと黒装束の輩はどこかに行ってしまった。さて、私は時間になるまでゆっくりしてるとしよう。

◆◆◆◆◆

「ふむ。で、なぜ神騎兵はそのようにボロボロなのかね？」

あれから日も傾いてきたためにミカとテオドラ姫、ついでに神騎兵を探し出し合流した私は開口一番にそういった。ちなみにテオドラ姫はすでに宮殿に帰ってしまったらしい。

で、なぜ私がそのように言ったかといえば、神騎兵が無駄にボロボロだったのが気になったからだ。ちなみに戦闘でボロボロになったというようなボロボロではなく、連れ回されてボロボロになった、のボロボロだ。

「俺を破棄すれば分かる。言っとくけど、破棄したらお前の魂の一部である俺はお前に戻る。つまり記憶やらその他諸々が蓄積されることになる」

「そのようなコトは分かっている。私がそのように創りだしたのだからな」

「じゃあ後悔すんなよ……」

神騎兵の言葉に適当に分かったと答えて神騎兵を破棄する。それ

と同時に神騎兵（おれ）が体験した記憶やらその他諸々が私に伝わってくる。
そしてそれと一緒になぜ神騎兵（おれ）がボロボロだったかを理解した。

あのお転婆姫にうちの娘……どれだけはっちゃければ気が済むのだ……。街の端から端まで連れ回されて、メチャクチャ大変ではないか……。これは私（オリジナル）でついて行かなくて助かったかもしれんな。

「ミカ、楽しかったか？　などと訊くまでもないか」

「そうですね。楽しかったです」

とミカは私に素晴らしい笑顔を向けながら言ってきた。まあ、楽しかったならばいいんだよ、私としても。実際に連れ回されたのは私と言うわけでは……ん？　結局記憶も疲労も蓄積されているのだから、変わらないのではないか？

まあ、気にしたら負けだと言うことで気にしないでおくとしよう。さわらぬ神に祟りなし。

「じゃあ、そろそろ宮殿に行くか」

「まあテオに会えますですね。楽しみです」

「そうかい」

私は本当に楽しみそうにしているミカを背中に背負いながら、宮殿に向かう。宮殿に到着した私は門番に依頼主からもらった書類を見せると、あっさりと通行が許可された。

そしてやってきた依頼主に護衛対象（テオドラ）の場所まで案内されることに

なったのだが、さすが宮殿だな。今までにあまり見たことがないようなほどの豪華さだ。

「こちらになります」

依頼主の声により、我に返る。どうやら私は自分で思ってた以上に、宮殿を見ることに夢中になってしまっていたらしい。前を向けば他よりも豪華な造りがされている扉。この先に護衛対象(テオドラ)が居るようだ。

扉が開かれてまず目に入ってきたのはさっきの皇女とは思えないようなローブ姿ではなく、さすが皇女と言わんばかりに着飾っているテオドラの姿。だがその表情はどことなく、訂正、思いっきり膨れ面になっている。おそらくは無断で外出したことを叱られでもしたのだろうな。そんなテオドラに向かって私は言う。

「改めまして、あなたを守るよう護衛を承りました、シキ・K(クロカミ)・アスタロトです」

「ん？　シキではないか！！　なんじゃ、では妾を守るように依頼を受けたのはお主じゃったのか？」

「はい。明日の誕生会の間、あなたを我が命に代えてもお守りしましょう」

「そのように堅苦しくならんでも良いぞ。妾とお主の仲ではないか」

どう言った仲になったかは知らないが、さっき一回会ったくらいで随分な信用を勝ち取ったようだな、私も。

「うむ、では今日はシキ達を歓迎するのじゃ！！」

そういったテオドラの笑顔は、心の底から守ってあげたくなるような笑みだったために、思わず私は見とれてしまっていた。

第二十撃『第三皇女の誕生会。さすが皇女、盛大だな』（後書き）

感想待ってます！！

第二十一撃『第三皇女の護衛。予想通りと言うべきか……』（前書き）

昨日はまた地震がありましたね。
私の方は、停電になり、まだ復興しません……。

話は変わりますが、書き方を変えました。

ではどうぞ！！

第二十一撃『第三皇女の護衛。予想通りと言うべきか……』

side　シキ

「ふぅ……さすが皇女。何でもありか」

私は湯船に浸かり、天井を仰ぎながらそう呟いた。
あのあと、私たちの歓迎会（誕生会を明日にしてやるのはどうかと思うが……）のあと、宮殿の風呂に入っていた。
ちなみに、テオドラ姫とミカは一緒に入っているらしい。

無駄に風呂場が広いために私とテオドラ姫、ミカが一緒に入っていると言っても会うことなど無いために、ゆっくりとすることが出来ている。
そう言えば、さすがにミカの食欲には宮殿の料理人らも目を丸くしていたな。
あれは実に滑稽だった。

「シキお父様、お背中お流ししますです」

そのようなコトを考えていると、タオルを体に巻いているミカと……テオドラ姫がやってきた……ん？
ちょっと待て。なぜお前たちがここにいるのだ……？

「なぜわざわざこっちに来てんだよ。二人で入ってれば良いじゃねェか」

「いつもお背中流しはやってるですから、日課みたいなものです」

いや、確かにやってもらったりはしてるが……。
おい、そこで幼女趣味（ロリコン）と言った奴、そこで待っているが良い。
私の神格としての力をフルで使えば、二次元と三次元の壁など壊してみせよう。

と、メタな発言はここまでにおくことにしよう。
あまりメタな発言をすると、偉い人に怒られてしまう恐れがあるものでな。

「やってもらってるけどさ、今日はテオドラ姫も居るだろ？」

「モーマンタイ、問題ありません。テオと意見が一致しての行動です」

「そうじゃ、妾が直々に背中を流してやろう！！」

……ミカだけならまだしも第三とはいえ、皇女に私みたいな庸平の背中を流させるようなことをしても良いのだろうか……というかテオドラ姫も随分とノリノリではないか……。
はて、どうしたものか。

「さすがにテオドラ姫に私のような者の背中を流させるわけにはいきませんよ。それに、ミカもあっちでテオドラ姫と居ろ」

「お父様はあたしの誘いを断りましたですね。意外です。娘にぞっこんなお父様ならあっさり受け入れてくれたはずですのに……」

私はお前の中ではどのような正確になっているのだ……？
私はしっかりとやるべきことと、やらざることとを分けていたは

ずだがな。
それに、ミカの意見を全て聞いていたと言うことはあったような、ないような……。

そんなコトを考えながら、ミカの隣にいるテオドラ姫に視線を向けると、なぜか寂しげな表情をしながら俯いているのが、目に入った。
いきなりそのような表情をしてどうしたというのだろうか……？
などと私が思っていると、テオドラ姫が口を開いた。

「……やはりお主も、妾を皇女と見るんじゃな……」

「む？」

妾を皇女と見るんじゃな、と言われても皇女なのだから仕方がないではないか。
皇女以外であなたをどのように見ればよいのだか……。
うーむ……あぁ、なるほど。そういうことか。

「みんなそうじゃ。妾が皇女だからといって、特別扱いする。街であったときお主らなら、と思ったのじゃが、やっぱりお主もそうなんじゃな……」

「そうか。まあ、俺としちゃあ、皇女だろうが姫様だろうが、どうでも良いんだけどな」

私が親しい者にのみやる口調でテオドラ姫にそう話しかけると、なぜかテオドラ姫は別人を見るかのような目で私を見てきた。
全く……せっかく気にしてるからと言うからわざわざこの口調にしたと言うのに。

「だから、俺としちゃあ皇女だろうが姫様だろうがどうでも良いんだよ。ただ、あんたを護衛する任務を受けてるしな。丁重に扱っちまうのは仕方ねェだろ？」

「で、では受けてないのじゃったら、妾とお主はどういう関係なのじゃ？」

「そりゃあ――――」

「友達に決まってるです」

私が言葉を紡ごうとしていたのだが、なぜかミカに割り込まれてしまった。

まあ、私が言おうと思っていたコトと大した差違はないのだから、そう言うことにしていても、問題は無いだろうな。

皇女と友達か……。よくよく考えればすごい発言かもしれんな。

「友達……。本当か……？」

テオドラ姫は私に確かめるかのような視線を向けながら、そう言ってきた。

実際に言ったのはミカであるから、私の口から本当に友達同士の関係で良いのか、と聞きたいのだろうな。

「あぁ、俺とテオドラ姫……じゃなくて、テオは友達だ」

「あたしも忘れてもらっては困りますです」

私たちがテオに向かってそう言うと、屈託のない純真無垢な笑顔

を私たちに向けて喜んでくれた。
よく見てみれば目の端にキラリと光る水滴――涙がついているのが見えた。
たかが友達になるくらいで、そこまで喜んでもらえるとは、たまにはこういうコトをしてみるのも良いかもしれん。

「なら、友達の印に背中を流してやるのじゃ！！」

「いや、それは勘弁してもらいたい」

「なぜじゃ？　妾とシキは友達なのじゃろ？」

なるほど……。純真無垢で汚れを知らない故の発言だな、コレは。
まあ、こんな幼いときから汚れた大人の世界を知っていられても、私としてはあまり良くないような気がするから問題ないんだが……
いや、あるな。
どうやってコレを断れば良いのだろうか……？

「アレだ……。友達同士でも、男と女はそういうことしちゃいけねぇんだ」

「どうしてじゃ？」

「うっ……。それは、大人になれば分かる。だからミカも俺の背中を流すのは今日で卒業、あっちで二人で流し合いっこでもしてこい」

「うまく誤魔化された感がありますですが、仕方ありません。テオ、あっちで二人で流し合いっこをしますです」

「う、うむ、仕方がないのう」

私がなんとか誤魔化すと、ミカがなんだか分かったような表情をしながらもテオを連れて行ってくれた。
やれやれ……ただの風呂がなぜこのように疲れなければならないのだ……。
私はそんなコトを思いながら、再び湯に浸かるのであった。

◆　◆　◆　◆　◆

「……で、なんで俺の部屋に来るわけ？」

あのあと実に一時間ほど湯に浸かっていた私は、用意してもらった部屋でミカと一緒にゆっくりとしていた。
……していたのだが、寝ようとしたところで、急にテオが私たちの部屋を訪ねてきたのだ。
しかもテオの手には、自分専用らしき豪華な枕まで所持している。

「シキとミカ一緒に寝ようと思ったのじゃ。良いかの？」

両手で持った枕で口元を隠すようにしながら、可愛らしく小首を傾げて私に訊ねてくるテオ。
この部屋にベットが二つあったならば、片方にテオとミカ。もう片方に私が一人で寝るのだが、生憎とこの部屋にベットは一つしかない。

ミカはもう宿やら野宿やらで同じベットで寝ることにはなれているが、他の娘となれば話は別だ。
何かといろいろ気を使わねばならぬし、何より自らの寝相の悪さでテオを蹴り飛ばしてしまわないかが非常に不安だ。
まあ、別にミカを蹴り飛ばしたことはないのだがな。

「俺は別に構わねェけど、侍女（メイド）さん達がテオが居なくて騒ぐかもしれねェだろ？　だから戻った方が良いぞ？」

「妾に抜かりはない！！　ちゃんと人形（みがわり）を置いてきた！！」

「なら安心ですね。テオ、あたしの隣にどうぞ」

「うむ、失礼するぞ」

私が了承しない間にミカが勝手に了承し、テオがベットにゴソゴソと入り込んできた。

しかも私とミカがテオを挟むような形で横になっている。

ベットは広いから三人で寝て狭いなどと言うことはない。三人の内二人は子供だしな。

まあ、それは置いておくが、人形（みがわり）を置いてきたと言うが、明らかにバレバレだと思うのだが……。

子供の発想だから仕方ないのかもしれないが、バレてしまえばすぐに連れ戻されると思うのだがな。

「なんじゃ、シキは妾と一緒に寝るのが嫌なのか……？　安心するのじゃ、寝相は悪くないはずじゃ」

「いや……あー、もう良いや。勝手にしてくれ」

どうせ断っても入ってくるならば無駄な体力は使わずに、さっさと寝てしまった方が良いかもしれん。

正直、神騎兵（おれ）からの疲労があるために、結構な眠気があるのだがね。

しかも寝相は悪くないはず……か。まあ、どうでも良いか。

「明日は早いかもしれないから、早く寝ろよ？」

「分かりましたです」

「分かっておる」

私は二人の返事を聞いた後に、二人が寝たことを確認してから、部屋においてあったソファにて眠りについた。

◆　◆　◆　◆

「では、護衛の説明をさせていただきます」

朝になり、私はテオが誕生会に出るための衣装の準備をしている間に、依頼人から護衛の内容を教えてもらっていた。

ちなみにテオが私たちの部屋で寝ていたことはすでにバレていたらしいが、護衛のために雇われた私がテオに何かするはずがない、と言うことでそのままにされていたらしい。

全く……私が救いようのない輩だったらどうするつもりだったのやら……。

「まずはこの宮殿の周りを警戒してください。周りには銃騎士隊が構えていますが、まだ新人ですので見逃す可能性があります」

銃騎士隊の熟練の者達は祭りに乗じて、何かをやらかすバカが居ると悪いため、街にて警備をしているらしい。

さらには、外からやってくる者も居るため、外部の警備にも当たっているらしい。

そこまで警戒するくらいならば、このように盛大にやらなければ良いものを……。

「あとはテオドラ様の付近の警戒ですね。銃騎士隊が抜けられれば、テオドラ様への危険が高まります。一応、剣騎士隊も構えていますが念のためです」

「了解した。結界などを張ってはダメなのかね？」

「そうするといろいろと大変なので、出来れば控えてもらいたいのですが……」

「なら仕方あるまい」

別に結界など張らずとも、私がテオの側に居れば、仮に銃騎士隊や剣騎士隊が抜かれたとしても、テオに危険が来ることはまずあり得ない。

もしものコトを考えて、一応神格の力を使った結界をテオを纏うように展開しているが、大丈夫であろうな。

ちなみにミカはすでに祭りに神騎兵（おれ）を連れて向かってしまった。

「元気なのも考えものだ……」

「会ったときも同じようなセリフ言ってましたよ？」

「そうだったか？　まあ、言いたくもなるぐらい元気なのだ」

「ふふっ、子供は元気な方が良いですよ？」

依頼人の言葉に私は同感だ、と答えながらテオが来るまで待機す

ることにした。
懐からタバコの箱を取り出し、中から一本取り出す。火をつけてタバコをくわえる。
最近、タバコが様になってきたような気がするのは私だけか？
それにしても、剣騎士隊や銃騎士隊の鎧と言うのは機動性よりも、防御性に優れているのか、随分と重そうな見た目だな。
あれでは素早い敵が来てしまったら、どうするつもりなのやら。
護衛と言うよりも限りなく実戦向きの鎧では、護衛にはあまり向いてないような気がするが、わざわざ私が口を出すようなコトではないな。

「シキー！！　どうじゃ？　似合うかの！！」

そのようなコトを考えながらタバコを吹かしていると、後ろから不意に声をかけられた。
振り向いてみれば、そこには誕生会用の衣装に身を包んでいるテオが居た。
衣装についてはセンスのない私では説明できないために、豪華な衣装とだけ言っておこう。

「あぁ、いつもも可愛いが、今も可愛いぞ」

「そうじゃろそうじゃろ！！」

私が言うとテオは嬉しそうにハシャギ始めていた。
あまりハシャギすぎて転ばないようにしてもらいたいが、まあ、転んだとしても周りの誰かが助けてくれるだろう。
だが、なぜか依頼人にジト目で見られてるのだが、何故だ？

「シキさんって天然誑しなんですね」

「失礼な。いつ私が誑しなどをしたというのだ？」

「だからそこが天然何ですよ」

どこが天然なのかは分からないが、女性を誉めるというのは、普通なのではないのだろうか？

む？　違う？　はて、私はミカにそのように教えてもらったのだが、違ったのか。

ふむ、間違っていたか。これはメモしておかねばならぬな。

「むぅ、シキ！！　始まるまで妾と一緒にいるのじゃ！！」

「お、おい、どうしたんだよ」

「良いから一緒に居るのじゃ！！」

何故か怒り気味のテオに手を引かれながら、私はどこかに連れていかれる。

連れていかれたのは街が見渡せる場所に連れてこられた。

にしても、さすが皇女の祭りだな。外部からもやってくるだけあり、随分な人の量だな。

そんなコトを思いながら、ふと宮殿の警備をしている銃騎士隊に目を向ける。

「む？　あれは……」

「どうしたのじゃ？　シキ」

「いや。そういや、あいつもここに居たんだったな」

私は宮殿の周りにいる銃騎士隊を見下ろしながら、そう呟いた。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

宮殿の周りを囲うように展開している銃騎士隊が、目を光らせて侵入者が来ないかを確認している。

ここにいる銃騎士隊のメンバーのほとんどが入隊したばかりの新人であるために、腕はまだまだと言える。

しかし、相当な実力者が侵入者として入ってきたとしても、外部にいる手練れの銃騎士隊によって手傷を負っているだろうから、新人でも撃退は可能だろう。

もしここを抜かれてしまったとしても、宮殿内には手練れの剣騎士隊が警備に当たっている。

どう足掻いても、テオドラの所にたどり着けはしないだろう。

仮にテオドラのところにたどり着けたとしても、そこでは銃騎士隊、もしくは剣騎士隊に撃退されていた方が良かったと思えるほどの地獄が待っているだろう。

何故ならテオドラの側には、神すらも一瞬でミンチに出来る力を持つシキが、誕生会の間は四六時中張り付いていることになる。

もしたどり着いてしまったならば、例え五体満足でそこを切り抜けられたとしても、精神的に立ち直れないことになっているだろう。

そのことを知らずに侵入してくる侵入者には、ご愁傷様としか言いようがないだろう。

「ふぁ……暇だな……」

「暇の方が良いだろ。暇の方が平和ってコトなんだから」

「そーいうけどよ、たまには実習訓練以外でも戦いたくね？」

銃騎士隊のメンバーが各々の得物を手に携えながら、そんなコトを話し合っている。

警備、などという名目で待機してはいるが、銃騎士隊の新人たちは侵入者などあるわけ無いと完全に油断しきっている。

実習訓練しか詰んでいない新人からしたら、実戦をしてみたいのだろうが、おそらく実際に実戦になってしまったら、冷静では居られないだろう。

「まあ、戦いたくないって言ったら嘘になるけどさ……。エルさんはどう？」

「……別に」

新人の言葉にゆっくりと時間をかけてそう答えたのは、薄黄緑色の髪を型辺りで切りそろえており、横棒の下に半円を付けたような目をしている少女――エル・イーグルスだ。

五年前にアリアドネー魔法学院を卒業したエルは、各地を放浪し、数ヶ月前にヘラス帝国の銃騎士隊に入隊した。

実力は新人の中でおそらくは、ダントツでトップの実力を誇っているだろう。

「……戦いは、危ない」

「ははっ、相変わらずエルさんは戦い嫌いみたいだな」

「じゃあなんで銃騎士隊に入隊したんだ？」

「……内緒」

表情を全く変えず、抑揚のない声で答えるエルではあるが、新人内では以外と慕われている。

困っているときにさりげなく手を貸してくれたり、鍛錬につき合ってくれたりと、銃騎士隊内では男からも女からも人気がある。

ちなみにエルが何故銃騎士隊に入隊したかは、隊の中で知る者は居ないと言う。

噂では隊に好きな男が居て追っかけで入隊したなどの噂があるが、実際はとある狙撃手に憧れ、自分も狙撃手の道に行こうと思って入隊したのだ。

実態と噂とでは似ているが、似ていない入隊した理由だった。

「……来た」

するとエルが持っているライフル型の魔法具を構えながら、そう呟いた。

エルのその言葉に銃騎士隊の新人達に緊張が駆け抜ける。

さっきまでくっちゃべっていた新人達は実戦がしたいと言いながらも、実戦になったらなったで緊張してしまっている。

さらに言えば周りの新人達も、ガチガチに固まってしまっている。

唯一、固まっていなかったのは実際に死戦を目撃したことがあるエルのみ。

ただ、動けるとはいえ数で押し切る計画であるにもかかわらず、一人で戦うと言うのは非常にマズい状況である。

（……敵も一人、大丈夫）

エルたち新人達の前に現れた侵入者の数は、今は一人。

侵入した目的は帝国への恨みを晴らすために、皇女の暗殺やら色々あるが、とにかく侵入者は一人。

ただ、手練れの銃騎士隊を抜けてきたと言うことは、新人一人では荷が重いかもしれない。

（……狙い撃つ）

エルはライフルの引き金に指をかけて、狙いを定める。

侵入者はまだエルが狙っていることには気付いていないのか、周りを警戒している。そして、気づかれる前にとエルは躊躇するコトなく引き金を引いた。

ライフルから放たれた魔力弾は、真っ直ぐに侵入者の足に向かっていく。

何故急所を狙わないかと言えば、殺さないまでも動けなくして、拘束してしまえば良いからだ。

だが、このときエルはまだ油断していたのかもしれない。

よく考えてみれば手練れの銃騎士隊を撒くほどの実力を持った侵入者が、追加の銃騎士隊が待ちかまえていることくらい考慮していないはずがないからだ。

そして次の瞬間、スコープで完全に姿を捉えていたはずの侵入者の姿が、一瞬にしてその場から消え去った。

（……消えた……！？　ドコに……？）

エルはスコープから目を離して、周りを見渡す。

だがさっきまで捉えていたはずの侵入者の姿はドコにも見あたらずに、完全に見失ってしまっていた。
銃騎士隊のメンバーに僅かに動揺が駆け抜けるのを、エルは感じ取ることが出来た。

初めての実戦で、敵が居るのは分かっているにも関わらず、敵の姿が見えないというのは新人とってはかなり精神面に堪える。
まだ侵入者は宮殿内に進入したというコトはないだろう。つまりはまだどこかに隠れていると言うこと。
このままでは侵入者に隊列を乱されてしまい、楽に進入を許してしまうことになるだろう。

（……マズい。……なんとか打開する）

しかしこれといった作戦は思い浮かばない。
いかに実習訓練を行っているとはいえ、基本的に銃騎士が前線に出ることはない。銃騎士とは前線の騎士達の援護をするのが役目であるからだ。
故に隠れた敵への対処法など訓練の内容には含まれていなかったのだ。

「はい、穫った」

「――――ッ！？」

刹那、エルの真上からそのような声が聞こえてきた。
その声に驚きながら顔を上げたエルの視界の先には、体中ボロボロになっている男の姿があった。
服の破れた場所からは、鍛え上げられたらしき筋肉が見え、両手には何かしら能力が付与されてるらしき魔法具が握られている。

今、エルが持っている得物はライフル。近距離で相手を撃ち抜くには、かなり不利な得物だ。
せめてデザートイーグルなどと言った近距離でも比較的立ち回れる武器なら、まだ対処のしようがある。
もう一度言うが、エルの現在の武器はライフル。近距離では戦えない。

ライフルを使い慣れた者であれば、まだ立ち回れたかもしれないが、エルの場合は多種多様の銃を使えるように訓練してきた。
だが、それはどれも一流までは極めずに二流、三流程度の実力でしかない。

（……やられた……ッ！？）

エルは瞬時にそう悟ってしまった。いや、悟らずにはいられなかった。
武器が眼前まで迫り来る。だが、無様に目を瞑るなどと言うことは絶対にしない。
銃騎士隊に入隊したときから、エルはどんなときも騎士として生きようと決めていたから。

覚悟を決める。
刹那、エルの決めた覚悟は良い意味で粉々に砕け散ることとなった。
何故ならば、眼前まで迫ってきていた侵入者の魔法具がエルに当たる前に、侵入者に蒼色の魔力弾が当たり、吹っ飛んでいたからだ。

それをエルの頭が理解するまで、実に数秒を用するほどだった。
ようやく自分が助かったのだと言うことを理解したエルは、蒼色

の魔力弾に貫かれ気絶している侵入者を捕らえるべく、侵入者に駆け寄る。
的確に急所を貫いてはいるが、侵入者には致命的なダメージにはなっておらず、気絶する程度だった。

自分も銃の道を進んだが故に、この射撃を行った者の実力を見ただけで理解することが出来た。
ヘラス帝国の銃騎士隊には、これほどの実力を持つ者は居ない。
そして、エルが知っている中でこんなコトを出来る者は一人しか該当しない。

（……シキさん……？）

シキ・K（クロカミ）・アスタロト。
自分がこの道を進むきっかけとなった人物であり、目標。そして、好意を寄せている人物の名前だ。
だがシキほどの者がここに来ていれば、銃騎士隊の誰かしらが話していてもおかしくないはずだ。

エルは侵入者を捕縛しながらそう考える。
蒼色の魔力弾が放たれてきた方を、エルは侵入者を捕縛したあとに見上げる。
だが、太陽の光が目に入り、そこに誰が居たかを確認することは出来なかった。
見えたのは、憧れの人物と同じ長い艶やかな銀髪だけだった。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　シキ

ふむ……まさか本当に侵入者が来るとは思わなかったが、警戒しておいて正解だったかもしれん。
私は魔力弾を放った銃を腰に戻しながら、そんなことを考える。
もちろんテオや依頼人などにはバレないように狙撃したために、誰も私が狙撃したことには気づいていない。気づかれても面倒なだけだしな。

「このように楽しい誕生会は初めてじゃ」

「ん？　なんだ、なんかいつもと違う出し物でもあるのか？」

私がそう問いかけるのだが、テオはフルフルと首を横に振る。
これだけ豪勢な誕生会と言う名の祭りを開いているのに、祭り以外で何か楽しいことでもあるのか？
あっ、ミカと神騎兵（おれ）が居るではないか。うん、大変そうだな。

「今年の誕生会には、シキが居るからな」

テオはそう言いながら私にはにかんでくる。
私が側にいただけで今までで一番楽しいと言うとはな。全く……嬉しいことを言ってくれるではないか。

「だったら今度からも俺を呼んでくれ。次からはプレゼントも用意するよ」

「ホントじゃな？　絶対じゃぞ？」

「あぁ、約束するよ」

来年からはこの日だけは全部の仕事を空けなければならなくなっ

てしまったな。
まあ、私としてもテオの笑顔を見れるならば安いものと言うことだな。
できれば今年もプレゼントを送りたいところではあるが、生憎と暇がないからな。

「誕生会はまだまだ始まったばっかりだ。楽しもうな、テオ」

「うむ!!　今年は格別に楽しいのじゃ!!」

そう言ったテオの笑顔はやはり可愛かった。
まあ、よくよく考えて思ってしまったのだが、やはり私は幼女趣味(ロリコン)なのではないだろうか……？

第二十一撃『第三皇女の護衛。予想通りと言うべきか……』（後書き）

真名の過去話があったならば、あったかどうかだけ教えてくださ～い（泣）

感想待ってます！

第二十二撃『銃騎士隊の訓練。全く……何故私がこのようなことを……』（前書

第二十二撃です。
ではどうぞ！！

第二十二撃『銃騎士隊の訓練。全く……何故私がこのようなことを……』

ｓｉｄｅ　シキ

「嫌じゃ！！　どうしていってしまうのじゃ！！」

銃騎士隊が手こずっていた、侵入者を私が撃ち抜いてから、しばらく時間が経過した。
それ以来は侵入者が来るなどと言ったことはなく、滞りなく誕生会が進行された。
もちろん来なかったからとはいえ、誕生会の間は護衛を受けているため、テオの側に張り付いていたがな。

いや、今更に思えば、あれは私が張り付いていたと言うよりも、テオが私を引っ張り回していたと言った方が的確かもしれんな。
とにかく、誕生会は序盤こそ侵入者が来たが、無事に終えることが出来た。

私が受けた依頼は誕生会の間、テオを侵入者から守ると言うこと。
依頼を完遂したからには、すでにこのヘラス帝国に止まる理由は、私にはない。
そのことを次の日の朝、依頼人を含めたテオと私、おまけにミカを含めた四人で話していたのだが、話し終えた後で、テオが冒頭のセリフを言ったのだ。

「嫌だって言われても、俺はヘラス帝国専属ってわけじゃないんだ。各地で困ってる人が居るから、俺に依頼が来るんだ。それをないがしろにして、ここに止まるわけにはいかないんだよ」

「そんなもの他の者に任せれば良いではないか！！」

「それが出来ないから俺のところに依頼が来るんだ」

実際、私のところに来る依頼は、ドラゴン狩りですらも複数だし、危険地からの物資の奪還などがある。

どれもこれもが、低く見積もったとしても、ＳＳランク以上の依頼だ。

しかもそんな依頼が複数来ている以上、止まるわけにはいかない。

こんな状況下で護衛の任務は余り受けたくなかったのだが、事情が事情のために仕方なく了承した。

護衛任務と言うのは受けている間は、いつ何時も護衛対象から離れるわけにはいかない。何が起こるか分からないからな。

つまりは重複した任務を行えないと言うことになる。

「各地で困ってる人が居る以上、放ってはおけない。テオなら分かるだろ？」

「そうじゃが……」

私がテオに言うのだが、相も変わらず納得できてないと言う感じに俯く。

別にこれっきり会えないと言うわけではないのだから、なにもそこまで拘ることはないと思うんだがな。

最終手段としては、テオを突き放して依頼に向かうしか方法は無いかも知れないな。

「あたし達はお仕事でここを離れますです。テオを連れていけたら、

一番良いですが、そんなことは出来ません」

すると今まで黙っていたミカが、テオのに近寄り、そっと呟いた。

ミカの言うとおり、テオを連れていけたなら一番良いかもしれない。

だが、第三とはいえ皇女であるテオを、危険地帯に連れて行くわけにはいかない。

「……」

「会えなくなると言うことはありませんです。だから、待っててほしいです」

いつの間にか、ミカも人に論ずるコトが出来るようになっていたのか。

まあ、私に守られているとは言え、危険地帯での戦闘を、伊達にこなしてないと言うことか。

昔と比べると随分と逞しくなったものだな、良い意味で。

「ただ――――」

静まり返った部屋の中、ミカのその呟きは思ったよりも大きく響きわたった。

そしてミカは何故かこちらをチラッと見てから、ニヤリと口元を歪めた。

……嫌な予感がする。ミカがあのように笑ったときは、大抵何かある時の顔だ。

「――――見ての通りお父様は依頼を受ければ、絶対に成し遂げます、です。つまり、離れるのが嫌なのでしたら、お父様に依頼をすれ

ば良いんです」

「……おぉ！！　その手があったの！！」

テオもテオでそれが分かった途端に、笑顔になっているし……可愛いな。

ではなく、ミカは何を余計なことを言っているんだ。

仮に依頼を受けたとしてもここに滞在できるわけではないし、結局はここを離れる羽目になると言うのに……。

「何を依頼しようかの♪」

「あっ、護衛任務はダメです。そうすると終わった後に、ここを離れないといけなくなりますです」

「そうじゃったのか。う～む、これといって依頼することがないのじゃが……」

ないなら無理に依頼する必要は無いと思うのだが……。

まあ、この展開になってしまったならば、無理にでも私に依頼を頼んでくるだろうな。

「でしたらよろしいでしょうか？」

「む？　なんじゃ？」

「シキさんは狙撃手の名手と聞きます。でしたら、銃騎士隊の、もちろん新人も昔からのも含めて訓練してもらうと言うのは」

「おぉ！！　それはよい案じゃ！！」

依頼人、ではないな。すでに任務は終わったからな。確か名前は……シアさんだったか？

とにかくシアさんは私に銃騎士隊を訓練してもらいたいと言うが、そうするとエルと会うことになるな。

そうなると私情を挟んでしまうかもしれないな。なんせ、私は五年前から随分と大切な者が増えてしまった。

だが弱かったときとは違い、今はある程度は皆を守れるようになったからな。

「ではシキ。お主に銃騎士隊を鍛えてもらいたいのじゃが、良いかの？」

「ふむ、ちゃんと報酬は出るのだろうな？」

「またその口調か……。もちろんじゃ！！」

「了解した。じゃあしばらくはここを拠点にするよ」

テオは私が仕事口調になったときに複雑そうな表情をしていたが、さすがに依頼を受けるときは、知り合いであろうと、これでなければならないからな。

まあ、拠点にするとはいえ、今受けている依頼を全て消化するまでは帰れそうにもないな。

「銃騎士隊の訓練はしばらく後になるけど、それぐらいは我慢してくれよ？　さっきも言ったけど、依頼がたまってるんだ」

「それぐらいは仕方ないの。今から行くのか？」

「あぁ。最低でも一週間は帰れそうもないけど、ミカだけは置いてくよ」

私がそういうとミカは無言で私に仕事の資料を渡してきた。
心なしか久しぶりにゆっくり出来る、みたいな表情をしているのは気のせいか？
そんなコトを思いながら私は踵を返して、テオ達に背を向ける。

「一週間だけ待っていろ。なるべく早く終わらせよう」

私はそういうと、宮殿をあとにして、依頼に向かうのだった。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

誕生会と言う名の祭りの余韻を残しつつ、早くも一週間が経過した。
あの日、侵入者が入ってきたことは銃騎士隊しか知らないのだが、誰が侵入者を気絶させたかは誰も知らない。
表向きには新人で一番動けていたエルが気絶させたことになっているが、実際はエルはあのままでは確実にやられていた。

銃騎士隊の騎士が撃つ魔力弾には、それぞれ色がついており、全てが異なると言うわけではないが、だいたいは違う色になる。
エルの魔力弾の色は、自らの髪の色と同じ薄黄緑色。
だが、あのとき侵入者を撃退したのは、蒼色の魔力弾だった。

銃騎士隊の中では蒼色の魔力弾を放つ者は、エルが見た限りでは誰一人として居ない。

そしてエルが知っている中で、蒼色の魔力弾を放ち、なおかつ狙撃手である人物など一人しか思い当たらない。
だがその人物ではない、エルは思っている。

なんせその人物は各地を放浪しているため、ヘラス帝国に来ているわけがないと思っているからだ。
まあ、実際にはヘラス帝国に来ていて、エルを助けていたのだが、会っていないためにその真実をエルが知る由もない。

「……眠い」

「今日は一段と間が長いな、エルさん」

現在、エルを含めた銃騎士隊のメンバーは、特別施設に設置されている食堂に足を運んでいる。
帝国の剣騎士団、銃騎士隊に入隊している者には、特別施設が設けられ、そこで生活することが出来る。
特別施設内には娯楽を楽しむ場所があれば、自らを鍛えるための設備も十分に整っている。

ただ、日頃の訓練が厳しいために、そこに立ち入る人物は滅多にいない。
訓練が休みの日に体がなまらないように、と入る者も居るが、それも極稀だ。
ちなみに新人、熟練の者を全て含めてそこに立ち入る回数が多いのは、エルらしい。

「……疲れた」

「いや、長すぎだろ。コーヒーでも飲んで起きろよ」

「……ありがと」

いつもより間が長いエルは、同じ新人の銃騎士から淹れてもらったコーヒーを受け取り、一口飲む。

ホッ、と息をはいたエルの姿は、猫のような小動物を連想させ、食堂内に癒やしの一時を流す。

この時間帯に食堂に人が多いのは、実はエルが来るからと言う理由が大半を占めている。

実のところエルは、銃騎士隊の女性の中でも上位にランクインするほどにモテている。

理由は様々あるが、大半は『なんか見てると癒されるわぁ～』と言う理由だ。

もちろん、先ほどエルにコーヒーを渡してくれた新人も、エルに好意を抱いているメンバーの一人に当たる。

「そういや、聞いたか？　ほい、サラダ」

「ん……。何を……？」

未だに眠そうに目をこすりながら、サラダを受け取ったエルはそう問いかける。

どうやら相当前日の訓練がキツかったのか、頭がコクンコクンと動き、今にも寝てしまいそうになっている。

それを見て銃騎士隊の皆様が、癒されているのは言うまでもないだろう。

「今日から新しい教官が来るらしいんだよ。なんか、かなり凄腕の狙撃手なんだとよ」

「……名前は？」

「名前？　えっと、何だっけな？　う～ん……忘れた。まあ、会えば分かるんじゃね？」

新人の言葉にエルは一回だけ縦に動かし、食事を進める。

朝であるにも関わらずエルが食べる量は、常人に比べればかなり多い。

ここの食事が無料でなかったならば、確実に破産してしまうほどの食事量だろう。

「良く食うな、お前。体重とか気にしねえのか？」

その言葉にエルの動きがピタリと止まった。口元にまで運んでいた料理をそのまま皿に戻す。

何事かと思ったようだが、この新人はどうやら乙女心が分かってなかったらしい。

エルもよく食べるとは言え女の子。自らの容姿や体重のことを気にしないわけがない。

何気なく発した一言だったのだろうが、その一言は、十分にエルの食事をやめさせるだけの力を秘めていた。

無言で立ち上がったエルは、残っていた料理を全て残飯に捨てる。

そして、全てを凍てつかせるような眼で新人を一別したあと、ただ一言だけ発した。

「……最低」

そういったエルはいつもより早い足取りで、自分の部屋に戻って

いった。
さっきまでほのぼの空間だった食堂は、たった一言により氷河期が来たかのように寒い、と錯覚させるかのようだった。
普段温厚で怒らない人が怒ると、ここまで恐ろしいというコトを、今日食堂にいた騎士達は身をもって体感するのだった。

一方、部屋に戻ったエルは訓練の準備に取りかかっていた。
部屋は二人一組の振り分けになっており、二人で過ごすにしても十分なほどに豪華な造りになっている。
基本的に銃騎士の訓練と言うのは、より正確に的に自らの弾丸を当てられるかを訓練する。
もちろん基礎中の基礎である体力づくりなどは剣騎士、銃騎士関係なく行われる。

「……よし」

エルは訓練を行うための準備を整え、一人呟く。
服装は肩まで袖がない、機動性を重視した服装。それでいて主要箇所の防護は徹底されていた。
武器はデザートイーグルやマシンガンなどをは持ち合わせているが、基本的にはライフルを使用している。
それはやはり憧れの人物が、ライフルを好んで使用していたという点が大きいからだ。

元々、彼女はあまり色濃い沙汰には関わらない主義だった。
女子校に通っていたために、周りに男性もいなかったために、完全に縁がなかった。
だが五年前のあの日、今こそ知ることが出来たが神格獣に襲われ、命の危機に陥ったとき、彼は現れた。

そのとき彼女は初めて異性に興味を持った。いや、もしかしたら図書室でぶつかったときから、興味を持っていたのかもしれない。ならば助けられたときの感情は興味から恋へと変わっていたのだろう。

閉話休第。

全ての準備を整えたエルはライフルを腰に付けたあとに、部屋から出て演習場に向かおうとした。

だが部屋にでるとそこには、すでに準備を整えたらしき先ほどの銃騎士が立っていた。

どうやら自分が思ってた以上に、準備に時間が掛かっていたことに気づいたようだ。

「えっと……さ、さっきは悪かったな。ゴメン」

すると銃騎士はそんなコトを言いながら、エルに頭を下げてきた。実はあのあと、食堂に残っていた他の銃騎士のメンバーに、謝るように『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆』をされたようだ。

頭を下げてきたことに、エルはポカンとするが、すぐに答える。

「……気にしてない」

「本当か……？」

「ん……」

エルはそう答えると、銃騎士の脇を通り抜けて、演習場に向かって歩き出した。

その横顔は食堂で見せたような、凍てつかせるような表情ではなく、いつものポワポワしたエルの表情だった。

それを見た銃騎士は安堵の息を漏らしながら、急いでエルの後を追った。

エル達が演習場に到着すると、熟練者を含めた銃騎士隊が、すでにほとんど集まっていた。

服装は男女によって微妙に差違があるが、武器は皆が皆違うと言うわけではないが、やはり統一はされていない。

恐らくは自らの一番使いやすい銃器を持ってきているのだろう。

そこはいつもと変わらない、ありふれた光景だった。だが、今日は何かが違う。

熟練者の方からピリピリと張りつめたような空気が伝わってくる。

それにより新人達の方も知らず知らずのうちに、恐縮してしまっている。

これが新人と熟練者との違いだろう。

「……？」

しかしエルには何故このようにピリピリするのか理由が分からなかった。

今日はコレといった特別なことがある日ではない。いつもと何ら変わらない訓練の日だ。

では何故、このように張りつめたような空気になっているのだろうか？

「多分、熟練者（あっち）の人達は、雇われた教官に教えられるってのが、気に入らないんだろうな」

「……なんで？」

「そりゃあ、いきなり来てデカい顔されたら、腹立つだろ？」

この銃騎士の言うとおりだった。

教官になるとはいえ、どこぞの馬の骨ともしれない奴にデカい顔をされたら、それは腹が立つだろう。それが熟練者なら尚更のコトである。

新人達にとってはそのようなことは、気にするまでもないのだが、やはり熟練者の空気に恐縮してしまっていた。

そんな空気を打ち破るかのように、一人の人物が銃騎士隊の前に歩いてきた。

顔は男性から見たら美人、女性から見たら美男と、とても中性的な顔立ちをしており、銃騎士隊の何人かが顔を赤らめている。

服装は民族衣装である竜族衣装で身を包み、背丈は１８０ｃｍほど。太陽の光を受けて輝く銀髪は、その者の背丈ほどもあり、それを三つ編みに纏めている。

腰には一般的なライフルと似てはいるが、ところどころ違う構造になっている。恐らく自分で作ったか何かしたのだろう。

一見、ただ歩いているようにしか見えないのだが、その身のこなしには一切の隙がない。

そして何よりもその者が放っている威圧感が凄まじかった。それでいて皆を包み込むような威圧感に、皆が安心している。

ただ、その者の肩には子供が肩車しているために、少々和んでしまっている。

エルはその者を見て、まるで恋する乙女のように顔を赤らめている。

訂正。エルは実際にその者に対して恋愛感情を抱いている。

別に一目惚れというわけではない。何故なら、その人物はエルの

知り合いであり、憧れであったからだ。
皆がその人物に注目してる中、その人物は全く動じることなく、口を開いた。

「今日より銃騎士隊の教官をする事になった黒神織(クロカミシキ)だ。無理に私に従う必要はない。ただ死にたくなければ、自分に出来る限りのことをやれ」

黒神織。またの名をシキ・K(クロカミ)・アスタロト。
彼こそが、エルのあこがれた人物であり、銃騎士隊の教官として呼ばれた、魔法世界でも最強と言っても間違いはない狙撃手である。

◆◆◆◆◆

side シキ

数多の依頼をこなし、達成してきた私はようやくヘラス帝国に帰ってくることが出来た。
まさかドラゴン退治のドラゴンの数が、三十も居るとは思わなかったな。
それに、調達任務で魔族に追いかけられることになるとも思わなかったな。

何にしても、ギリギリ今受けている任務を全て一週間で、終わらせることが出来たな。
だがつくづくミカの依頼を管理する能力の高さに感心するな。あれだけ分かりやすく纏めるのはなかなかに難しいだろうな。
そんなコトを思いながら宮殿内のテオの部屋に向かう。

「あっ、シキさん。任務ご苦労様です」

「む？　シアさんか。ギリギリだったよ。テオは王室で間違いないのかね？」

「はい。多分ミカちゃんと遊ばれてると思います」

私はシアさんと話しながら、テオとミカがいるはずの王室に向かって歩く。

部屋の前まで来ると、テオとミカのはしゃぐ声が聞こえてきた。

まあ、年相応の二人が一緒なのだから、騒ぎすぎるのも仕方がないとは思うが、一応皇女なのだから、もう少し静かにした方が良いと思うがな。

そんなコトを思いながらも、私は王室の扉を開けて二人を視界に入れる。

すると四つの瞳が私のことをロックオンするのが分かった。

しかも一緒に遊んでいた二人は、まるど打ち合わせをしたかのように一斉に走り出すと、私に飛びついてきた。

「お父様、お帰りなさいませです！！」

「シキ、会いたかったのじゃ！！」

「おいおい、一週間だけ会わなかったぐらいで、そこまで喜ぶか？」

私は私に抱きつき、笑みをみせている二人の頭をわしわしと撫でながらそういう。

そういえばよくよく考えてみれば、五年前からミカと一週間以上、別行動していた時など無かったな。

どんな危険地帯にもついてきて、決して私から離れようとはしな

かったからな。

「当たり前ェです。お父様はあたしの唯一の家族ですから」

「……そうか。そうだよな！！」

私はそういいながらミカを抱きかかえて、肩車をさせる。

五年前からミカの家族を捜しているが、行方は分からない。そもそも神格王の復活のために生まれた『鍵』であるミカに、本当の家族がいるかすら分からない。

それに、ミカは五年前からあまり成長したようには見えない。やはり人間ではないのだろう。

「ずるいのじゃ！！　妾もやってほしいのじゃ！！」

「ふっふっふ、残念です、テオ。ここはあたしの特等席なんですよ」

「むむむ……。ずるいのじゃ……」

「ふっふっふ。泣け、喚け、そしてひれ伏しやがれです！！」

ミカ、私はそのような言葉遣いを教えた覚えはないぞ？

全く……それでは学校に行ったときに大変になるぞ。

まあ、通わせるか通わせないかは置いとくとしても、誰にも負けないような気がするがな。

何にしてもミカが楽しいなら、私はそれで構わないんだけどな。

所詮私の本来の命はすでに失われている。ならば、神に力をもらい、神の如しの力を手に入れたなら、私は他人のためにそれを使いたい。

所詮はただのエゴでしかないのだがな。おっと、話がそれてしまったか。

「さて、と。じゃあ、依頼をやるか」

「また行ってしまうのか……？」

「あのな、なんで俺が戻ってきたか忘れたのか？」

「妾に会いに来たのではないのか？」

……この皇女、私が戻ってきた理由をこの一週間で、キレイさっぱり忘れてしまったようだな。

確かにあの依頼は私を止まらせたいがための依頼ではあったが、本音を出し過ぎだ。

まあ、別に構わないのだが、依頼されたからにはこなさなければな。

「ここの銃騎士隊を鍛えるんだろ？　忘れんなよ」

「む？　そうじゃったかの？　……おぉ！！　そうじゃったな！！」

「だろ？　じゃあ、もう少し待っててくれ」

「仕方ないのぅ。待ってるのじゃ」

私はそういったテオの頭を撫でたあと、シアさんの案内に従って、銃騎士隊が集まっている場所とやらに向かった。

なにやら銃騎士隊は、個々の能力が高い者は何人も居るが、統率が全くとれないらしい。

銃騎士隊、と言っているがそこには隊長はおらず、どうしても隊が乱れてしまう。

だから私が銃騎士隊に訓練をつけつつも、その中から隊長になりえる人物を選んでほしいようだ。

新人、熟練者問わずに、統率がとれるならば誰でも良いらしい。

もしも新人から隊長になりえる人物が出てきたら、熟練者を抑えるのが大変になるかもしれないが、まあ、そこは私も幾らか手助けをしてやるか。

私がそんなコトを考えている間に、どうやら銃騎士隊が集まっている場所に到着したのか、シアさんが下がっていった。

見てみればそこには各々の銃器を持っている騎士達がいる。

それにしても……本当に統率がとれてないのか、並んでるにしても、ザワザワし過ぎであろう。

まあ、良い。とりあえずこう言うのは、一番最初が肝心だしな。

とりあえず威圧感を出しつつ、目の前に立ってみるのが一番手っ取り早いかもしれないな。

すると全員が静まり返り、私をまるで品定めをするかのように、見据えているのが分かる。

「今日より銃騎士隊の教官をする事になった黒神織（クロカミシキ）だ。無理に私に従う必要はない。ただ死にたくなければ、自分に出来る限りのことをやれ」

私がそう言うと、皆の視線が私に突き刺さった。

さて、骨のある奴はいるのかどうか……楽しみにさせてもらおうか。

私は不敵に微笑んだ。

◆　◆　◆　◆　◆

「お父様、やりすぎだと重いますです」

「正直この程度でへばるとは思わなかったんだけどな……」

アレから約三時間後、銃騎士隊の訓練が終了したのだが、新人と熟練者のどちらも立っている者が居なかった。

私が行った訓練は実に簡単だ。私が撃った魔力弾を相殺、もしくは回避するという訓練だ。

さすがに私が本気で狙ってしまうと、相殺どころか誰もかわせなくなるために、手加減していたのだが……まさか皆がへばるとはな。

私の狙撃を避ける訓練と、もう一つ訓練を行った。もう一つの訓練というのは、私が創り出した神騎兵を倒すという訓練だ。

狙撃手とはいかに距離を保ちながら狙撃するかが重要になってくるのだが、神騎兵には距離を置かないように、動きを設定している。

まあ、切り裂いてしまわないように、寸止めにするようにしているがな。

「お父様レベルに合わせてたら、誰も立てねェと思いますです」

「あれでもかなり低くしたんだがな……」

あれ以上レベルを下げたとなれば、訓練にならないからな。だからとはいえこのままでは無意味だからな。

さて、どうしたらいいものか……。やはり下げつつも、段々と上げるしかないか。

私がそんなコトを考えていると、誰かに袖を引かれた。

誰だろうか、と私が思いながら振り向いてみれば、そこにはエルの姿があった。
五年前からすると幾分か身長が伸びており、訓練用の服を着ているが、それでも分かるくらいに女の子らしくなっていた。
そういえば私の狙撃を相殺・回避の方の訓練をしていたが、エルはなかなかに狙撃手として優秀だったな。

「久しぶりだな、エル。五年ぶりかな。元気にしてたか？」

「……うん。シキも、元気？」

「あぁ、この通りさ」

エルは可愛らしく小首を傾げながら訊いてきたので、私はとりあえず可愛いなと思いながら質問に答える。
このくらいならば銃騎士隊の中でも人気があるのではないか？
そういうのは私はあまり良く分からないのだがな。

「……いつ、来たの？」

「今さっきさ。……いや、正確には一週間にも一回来たかな」

「……やっぱり」

エルは私の答えを聞くと、何故か納得したとばかりに頷いていた。
エルは私の回答を聞いて、なにを納得したのだろうか？

「……助けてくれた」

そういえばあのとき侵入者が入ってきそうだったのと、エルが危

なそうだったからと、私が撃ったのだったな。
まあ、あのときは感情のままに動いてしまっていたな。

「……ありがと」

「気にするな。俺とエルの仲だろ？」

私はそういいながらエルの頭に手を乗せ、テオやミカにやったように撫でる。
するとエルは顔を赤くして俯いてしまったのだが、どうしたのだ？
それに、頭を撫でると言うのが癖になってきてるような気がするな……。

まあ、とにかく、今日からは銃騎士隊の訓練と隊長選抜をしないといけないな。
私はタバコを取り出しながら、忙しくなるな、と呟いた。

第二十二撃『銃騎士隊の訓練。全く……何故私がこのようなことを……』（後書

学校やら何やらでリアルが忙しいので、更新を三日に一回に切り替えます。

感想待ってます！！

第二十三撃『戦争の始まり。私は参加しな……ん？するのか？』

side シキ

私が銃騎士隊を鍛え始めてから、既に数ヶ月の月日が経過しようとしていた。
その数ヶ月では特に語るような出来事はなく、強いて言えば銃騎士隊がメキメキ力を付けてきた、と言うところか。
最初は訓練が終われば、その場に突っ伏すほどに鍛えられていなかったが、今ではすっかり逞しくなったものだ。

ただ、やはり銃騎士である為に、接近戦は剣騎士には勝てないようだ。
まあ、それでもある程度は戦えるようになっているのだから、良しとするか。
ちなみにエルは実力の伸びが著しく、今では銃騎士隊の上位に食い込むほどになっている。
まだ一、二を争うほどの実力にはなってはおらんがな。

そんなコトを考えながら、私は宮殿のテラスで街を見渡しながらタバコを吹かす。
宮殿から見ても分かるほどに巨大な人型兵器――鬼神兵が、何体も配置されている。
それだけでなく宙には戦艦が何機も浮かんでおり、まるで戦争を思わせるかのような風景になっている。
いや、実際に今は戦争の真っ只中。些細な小競り合いから発展し、今は連合軍と帝国の全面戦争となっている。

私はあまりこの戦争については、詳しくは知らないのだが、なにやら帝国側、つまり現在私が居るこの国が率先して動いているらしい。

この前は確か、アルギュレー・シルチス亜大陸侵攻を実施したようだ。

本来の狙いは他にあるようではあるが、私は既に一つ前の時代の竜人（いや、竜神か？）

今の時代の戦争は、今の時代の者達に任せるのが一番良い。

というか、私としては戦争に参加するのは面倒なだけなのだがな。

正直、金にならない戦いは私はやる主義ではない。ましてや護るための戦いでないならば尚更だ。

そういえば、最近よく聞くようになった名前があるな。

連合の赤毛の悪魔。千の呪文を使う魔法使いとか言うらしいが、正直、原作はとうの昔に忘れてしまったため、直接見ないと分からないな。

名前はナギ・スプリングフィールド。『紅き翼（アラル ブラ）』のもっとも警戒すべき男らしいな。

「シキ。またここに居ったのか？　探したではないか」

「ん？　テオか。ここは俺のお気に入りでな。で、どうしたんだよ」

「ちょっと来てほしいのじゃ。というか、来てほしいと言われたのじゃ」

テオから直接頼むように言われた、と言うことは私を戦争に投入させようとしている、バカ共にお呼びがかかった、とでも言うところか。

この戦争ばかりは、いくら金を積まれても参加しないつもりなのだが、さて、どうするべきか……。

この戦争で私が護るものは一切ない。強いて言うなればテオだが、前線に出るわけではないのだから、危険に陥ることなどはない。

つまり、どちらにせよ私は参加する必要はないことになる。

エルには少しばかり贔屓をしていると思われるかもしれないが、神格の力で創り出した不可視の防壁を展開している。

一応は戦いに出向いているのだから、それくらいしても構わないだろう？

「はぁ……分かった。仕方ないから行くよ」

「あんまり乗り気じゃないみたいじゃな」

私とテオはテラスから、会議を行ってるらしき部屋に移動を始めながら会話をする。

この戦争では既に数え切れないほどの犠牲が出ている。

戦争で犠牲とは付き物ではあるが、やはり見るのは心苦しいものがある。

「まあ、ね。テオも知ってるだろ？　五年前のあの事件」

「むぅ……確か、神格擬きが現れた事件じゃったか？」

「あの事件に俺も参加してたんだが、やっぱり戦争ってのは嫌なもんだ」

あの事件では被害こそ多大ではあったものの、死人などが出ることはなかった。

あれだけの戦いであったにも関わらず、死人は出ず、怪我人だけで済んだのは最早奇跡としか言いようがない。
一番ヒドい怪我をしたシェリルでさえも、傷跡は残りはしたものの、生活・戦闘共に支障はない。

「じゃが、それで手柄を立てれば英雄になれるではないのか？」

「英雄……か。名だけを聞けば名誉ある名前なのかもしれないけど、裏を返せばただの殺人鬼だ」

人を殺すことにより、結果的に何かしら世界に貢献したのならば、それは英雄と謳われる。
だが、英雄になると言うことは、数多の殺人を起こすこととなる。
英雄は殺人鬼と何ら変わらない。英雄とは殺人鬼の別名に過ぎないのだから。

そんなコトを考えながら歩いていると、テオが黙ってしまったことに気づく。
テオの方を見てみれば、テオは悪いことをしたとばかりに俯いてしまっていた。
しまった……。子供相手に汚れた話をし過ぎてしまったか。私も感傷的になっていたのかもしれないな。

「ま、まあ、あれだ。俺は英雄になんかなれる器じゃないし、えっと……気にするなよ」

「うむ……」

なかなか言葉が纏まらなかったため、そういいながらテオの頭をなでる。

我ながらずる賢くなってしまったものだな。こうすればテオが元気になると知っているのだからな。

そして、ようやくお偉いさんが集まっている部屋の前に到着した。扉を開ければ、複数の視線が私に注がれる。

それを鬱陶しく思いながらも、用意されていた私の席に座る。配置はテオの隣に私とシアさんが居り、あとは長テーブルの脇にお偉いさんがズラリと並んでいる。

その中には剣騎士隊の隊長と、銃騎士隊の隊長はまだ決まっていないために、隊長代理の姿も見受けられた。

「狙撃手殿も来てもらったので、会議を始めようではないか」

そう言ったのは集まっているメンバーでめ一際年老いている人物だった。

どうやらこの中でもこの老人は、話し合いを進める役らしく、老人の言葉に皆が頷く。

ただ、ここに居る輩はどうやら私のコトをよく思っている者は少ないようだな。

視線などがなくとも、この場に流れている雰囲気だけで、どういった風に思われているかが分かるな。

そして、老人から話されたのはこれからの戦況を有利に進めるための作戦だった。

連合の喉元である、全長三百キロに渡って屹立する巨大要塞『グレード＝ブリッジ』を陥落させる、と言うのが目的のようだ。

もちろん、ただただ陥落させるために動いていたのでは意味がない。それでは時間がいくらあっても足りないからな。

本題は大規模転移魔法を使って連合軍の不意をつき、一気に陥落させる作戦のようだ。

この一手を持って一気に連合軍を叩き潰してしまおう、と言う作戦らしい。

ただ、奇襲が成功したとしても、早めに『グレード＝ブリッジ』を陥落させなければ、意味がない。連合軍には『紅き翼』が居るからな。

現在『紅き翼』はアルギュレーの辺境に追い詰められ、おそらくは『グレード＝ブリッジ』の戦いの時は参加できないはずだ。

ただ、『紅き翼』の実力があれば陥落させたあとに取り返すために、向かってくると容易に考えられる。

いくら強力な魔法力を誇るヘラス帝国とはいえ、『紅き翼』相手では歯が立たない。

そこで私の出番らしい。私が『紅き翼』の相手をすることで奪還を防げ、とのことだ。

確かに私ならば『紅き翼』如き、赤子の手を捻るよりも、楽な作業になることは間違いない。

要するに私に厄介払いをしろ、と言うことなのだろうな。

「引き受けて貰えますかな？　狙撃手殿」

……どうにも気に食わない。前世ではこんな大きな戦争が起こることはなかった。

それは何故か？　答えは、科学が生み出した科学爆弾やその他もろもろ存在し、それを使った戦争の結末は、全ての滅亡だ。

その気になれば、この魔法世界でも強力な科学爆弾を上回る、魔法は存在する。

おそらく帝国側が連合軍を潰しても、帝国側を連合軍が潰しても、この戦は終わらない。

まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとして、この戦争を仕組んでいるかのようだ。
原作知識が残っていたならば、対策の取りようもあったかもしれないが、生憎と全てを忘れてしまった。

となると、自らこの戦争の裏を調べ上げるしか、方法は無いのかもしれないな。
とにかく、今はこの話に乗じておくのが良いかもしれないな。

「了解した。ただ、私の動きに口を出さないでもらおうか。でなければ、誤射してしまうかもしれないからな」

「分かっていますとも、狙撃手殿。では、作戦は後日決行でよろしいかな？」

老人の言葉に皆が頷き合い、今日の会議は解散となった。
それにしてもあの老人……どうにも怪しいな。神騎兵に見張りをやらせておくか……。

◆◆◆◆◆

日付が変わり、今日が『グレード＝ブリッジ』を陥落させるための転移魔法を使う日になった。
既に転移魔法を使うための魔法陣の展開は完了しているらしく、あとは各々の準備を終えるだけだ。
鬼神兵や戦艦、銃騎士隊や剣騎士隊などといった戦力が揃っている。

ちなみに私は隊などに属してないために、離れた位置にてタバコを吹かしている。

周りには術式を発動させるための魔法使いが、詠唱を始めている。
するとタバコを吹かしている私の元に、テオが駆け寄ってくるのが見えた。

「はぁ……はぁ……。ま、間に合ったみたいじゃな……」

「どうしたんだ？　テオ。そんなに急いで」

私は息を整えているテオと、視線を合わせるように屈みながら、そう話しかける。
皇女である身のテオが、このようなとこに来たら危ないと思うのだが、まあ、一応神格の力で作った防壁を展開しているから大丈夫か。

「い、今から戦いに行くのじゃろ……？」

「あぁ、そうだな。戦いは避けられない」

「き、気をつけるのじゃぞ？」

するとテオが泣きそうな顔をしながら、私にそんなコトを言ってきた。
いや、正確には泣くのを堪えているのか、頬が紅潮しているな。
やれやれ、たかが陥落戦でそこまで、心配されることになるとは思わなかったな。

「大丈夫だよ。俺は絶対に負けないし、怪我すらしない。ちゃんとテオのところに帰ってくる」

私はそういうながらテオの頭をポンポンと撫でる。

するとテオは未だに心配そうな表情をしながら、問いかけてくる。

「本当か……？」

「もちろんだ。約束だ」

「うん、約束じゃ」

私達はそう言い合うと指切りげんまんをやる。

まさかこの歳になってから、こんなことをやることになるとは思わなかったが、気休め程度にはなるだろう。

そして指をはなし、もう一回頭をポンと叩くとテオから離れる。

するとまるでそれを見計らったかのように、術式が完成し、魔法陣が光り始める。

だんだんとその光が強くなっていき、遂には視界を真っ白に染め上げる。

そして、視界に色が戻った瞬間、そこはさっきまで居た場所とは違う、戦場の真っ只中だった。

さて、テオを早めに安心させるためにも、さっさと終わらせるとしよう。

だが老人……。貴様の思うようにコトは進まないと考えた方が良いぞ。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

連合軍の喉元である、全長三百キロにも亘って屹立する巨大要塞

『グレード＝ブリッジ』に突如として現れた大量の帝国の兵士。
鬼神兵も何体も現れ、何の体制も整えていなかった連合軍の兵士は完全に不意をつかれていた。
不意をつかれていなければ、ある程度は戦えていたが、完全に不意をつかれた今、連合軍側の反応が間に合わない。

その間にも帝国側の猛攻は続く。剣騎士隊による特攻。それをサポートするかのような銃騎士隊の動きには一切の無駄な動きがない。
日頃の訓練の成果がここに来て十二分に発揮されており、全くの隙がない。
奇襲が仕掛けられたことにより、連合軍側が反撃をする間もなく、次々に帝国軍が連合軍側を撃破していく。

だが、連合軍も攻撃を受け続けるほど、呑気に構えているわけではない。
奇襲されたということを即座に全体に伝え、やられた分をやり返そうとばかりに魔法を放ち、鬼神兵による攻撃、戦艦からの砲撃を繰り出す。
しかし、その攻撃は蒼色の魔力弾により『殺される』。遙か後方からの狙撃だと言うのに、それには全くの狂いがない。

（連合軍……この程度ではないだろう？）

竜族の独特の衣装に身を包み、爆発により発生した爆風で、身の丈ほどもある艶やかな銀髪がなびく。
ライフルに取り付けられたスコープを介して、その物体に存在する死を視て、狙いをつけて引き金を引くだけ。
特別なことをしているわけではなく、ただ狙いをつけて引き金を引いているだけだ。

ただ、この単純な作業であっても、狙撃する位置が戦いの中心から十数キロ離れた位置からの狙撃だ。

並大抵の狙撃手出はないだろう。スコープから目を離し、戦況を確認する。

戦いはまだ始まったばかりではあるが、奇襲の効果により戦況は有利に進んでいる。

シキ・K（クロカミ）・アスタロトは実際に帝国の戦力を見てわずかに感嘆の息を漏らす。

彼は銃騎士隊の訓練を担当していたが、その成長の早さは目を見張るものがあった。

しかし、銃騎士隊だけでなく、帝国全体がここまで強いとは予想していなかったのだろう。

（この帝国軍が警戒するぐらいだ。『紅き翼』の実力はさらに上を行くのだろう……）

――――『紅き翼』

彼が思っているように帝国軍の強さは、少なくとも連合軍を上回っているだろう。

それでも連合軍と帝国軍の力が拮抗するのは、やはり『紅き翼』の力が大きいのだろう。

だがそれでも、竜神（シキ）の前では赤子同然。万に一つも勝つなどと言うことは有りえないだろう。

（まあ、今回は陥落させるだけ。『紅き翼』とのご対面は、防衛戦の時だろうな）

今回の戦いでは、帝国軍も連合軍も『紅き翼』の介入がないことは既に知れ渡っている。

何故なら、現在『紅き翼』はアルギュレーの辺境に追いやられているからだ。
故に連合軍の指揮がいつもより低いと考えて間違いないだろう。

そんなコトを考えている間にも、シキの狙撃が止まることは全くない。
魔力とで視力を強化することにより、シキは百キロ四方を悠々と見渡すことが出来る。
剣騎士隊や鬼神兵の侵攻の妨げになる連合軍を片っ端から撃ち抜いていく。

撃ち抜くとはいっても彼は、全てのものに存在する『死』を貫いているわけではなく、あくまでも気絶する程度の威力で撃ち抜いている。
つまりは気絶して倒れる者が居ても、命を失うと言う者は居ないのだ。
あくまでも、シキが撃ち抜いている人物だけに限られてくるが……。

一方、シキが最後列で狙撃をしている中、銃騎士隊は改めてシキの狙撃能力に感心するしかなかった。
たった一人であるにも関わらず、全てをサポートしており、尚且つ寸分の狂いもない狙撃。
訓練している中で、銃騎士隊のメンバーは一度たりともシキの狙撃を見たことがなかったのだが、ここでようやくシキが銃騎士隊の教官に呼ばれるだけの、実力者と言うことを理解した。

（……やっぱり、スゴい）

シキの狙撃を見たことがあるエルでさえも、シキの狙撃能力にた

だただ、感心するだけだった。
もちろん、銃騎士隊の狙撃能力も周りから見たらかなり高いものであるといえる。銃騎士隊の狙撃能力が低いのではなく、シキがただ単に規格外なのだ。

銃騎士隊は皆が同じ感想を抱きながらも、少しでもシキに追いつこうと、狙撃に集中する。
今のエルの武器はライフルではなく、二丁拳銃。威力よりも、連続性を重視している。連続性を重視すれば自ずと狙いもズレてくる。しかし、日頃の訓練からエルの狙いが狂うことはない。
的確に急所を貫いていく様は、連合軍からしたら恐怖の対象でしかない。

連合軍は思う。帝国軍で警戒すべきは剣騎士などではなく、銃騎士なのではないかと。
確かに剣騎士の動きは驚異になるが、それは予想の範囲でしかない。
だが銃騎士隊は違う。見える剣騎士とは違いいつ、どこから狙撃が来るか分からない恐怖と戦わなければならない。

（……隙だらけ）

故に新人であるエルを含めた銃騎士隊に、どんどんと撃ち抜かれていく。
撃ち抜かれた連合軍の兵士たちは呻き声をあげることなく、倒れていき動かなくなる。
これがエル達、新人の銃騎士隊の初めての殺人になるが、誰一人として嘔吐する者など居ない。

正確には内心でかなり滅入ってはいるが、シキにこの程度のコト

で気分を害さないようにと、殺人の幻影を見せられている。
もちろんその時は新人の銃騎士隊は耐えきれなかったが、今では並大抵のコトなら耐えきれるようになった。
そもそも、銃騎士隊に入隊したというコトは、遠からず殺人を犯すということを意味している。
それがたった今だった、というだけのコトだった。

（まあ、私が鍛えたのだから、この程度はやってもらわねばな……。それにしても、脆すぎるぞ……連合軍）

シキは空中で連合軍の戦力を見下ろしながら、落胆の息を漏らす。
いくら奇襲をしたからとはいえ、連合軍の対応は遅すぎるし、戦力も弱すぎる。
実際はシキや銃騎士隊が強すぎるだけなのだが、本人たちはそれに気づいていない。

（長々とやっても仕方あるまい。……終わらせよう）

シキが自らのライフルを前に掲げる。すると銃口の先に二重螺旋の魔法陣が展開される。
それと同時に連合軍の主要戦力の周りに、銃口の先に現れたのと同じ二重螺旋の魔法陣が展開される。
それに連合軍が同様をみせたが、その一瞬の同様が無かったとしても、既に摘んでいることに、連合軍は気づいていない。

刹那、全ての二重螺旋の魔法陣から蒼色の魔力弾が放出される。
それはまるで雨のように降り注ぎ、連合軍の戦力を削ぎ落としていく。
蒼色の魔力弾は兵士を殺さない。殺さないが、動けないように足を、腕を、あらゆる箇所を貫いていく。

連合軍のある者は言った。人を殺さないにも関わらず、戦力を殺いでいく弾丸を、恐怖の対象としてこう呼んだ。

――『不殺の弾丸』

この者に撃たれた兵士は確かに死んではいない。だが戦線には復帰できない。

これは戦う者としては死んだことを意味している。

『不殺の弾丸』は命は奪わない。ただ、戦う力のみを奪っていく……。

◆◆◆◆◆

side シキ

私の狙撃からの一気に攻め立て、完全に陥落させた『グレード＝ブリッジ』を見下ろしながら、タバコを吹かす。

攻め立ててから数時間と経過してはいないが、完全に『グレード＝ブリッジ』を制圧し、帝国のものとしている。

私からしてみれば『グレード＝ブリッジ』などどうでも良いのだが、まあ、勝手にやってくれ。

とりあえず今は戦争も重要だが、誰がこの戦争の裏で暗躍しているか、と言うことだ。

まあ、誰が何をしようとしているか分からぬが、私や私の大切な者に手を出すならば、容赦なく引き金を引けば良い。

私に出来ることは、せいぜいライフルの引き金を引くことぐらいだろうからな。

「ん……。ふぅ……」

「は？　エル？」

そんなコトを考えていると、私の元にエルがやってきた。

現在、私が居る場所は『グレード＝ブリッジ』の高い柱の上。そんな場所にエルは箒も使わずに、登ってきていた。

いくら浮遊術や虚空瞬動が使えないとは言え、この高さまで登ってくるとは大したものだ。

「どうしたんだ？　確か今は警備の時間じゃなかったか？」

陥落させたのが早いか、帝国軍は『グレード＝ブリッジ』の警備体制を既に構築しているようだった。

おそらく、『紅き翼』を加えて連合軍は『グレード＝ブリッジ』を奪還しようとするだろう。

それに対しての警備なのだろうが、まあ、帝国軍は完全に気を抜いているな。

「……サボり？」

「いや、俺に訊かれても……」

「……じゃあ、会いたかった」

「そりゃ嬉しい」

私はそう言いながら、エルが落ちていかないように、こちらに引き寄せる。

この柱は一人で座るのが精一杯なほどに狭いために、こうでもしなければ落ちてしまうからな。
まあ、エルからしたら恥ずかしいかもしれないがな。

「……独占」

「ん？　あぁ、ユーリが居ないからな」

確かユーリはアリアドネーでシェリルと一緒に、教員だか何だかをしているのだったな。
少し前までは遊びにも行っていたが、最近は行ってなかったな。
そういえば、バルドやティアはどうしているのだろうな……。

「さて、そろそろ下に行こうか。野郎共の羨ましそうな視線が痛い」

私はそう言いながら柱の下からこちらを見上げている、銃騎士隊を指差す。
チラッチラこちらを見てくるのだが、嫉妬の視線が強すぎる。

「む……ちょっぴり、残念」

「戦争が終わったらいくらでもゆっくり出来るだろ？」

「……じゃあ、デートする」

「了解、お姫様」

私はそう言いながらエルを抱きかかえ、柱を降りる。
妬ましげな視線が強すぎるが、私はそれを何とか無視して、休める場所に向かう。

戦いはまだ始まったばかりである。

第二十四撃『紅き翼と対面。所詮は翼……翼では弾丸には勝てない』（前書き）

※第二次クロカミ無双注意報！！

ではどうぞ！！

第二十四撃『紅き翼と対面。所詮は翼……翼では弾丸には勝てない』

グレード＝ブリッジが帝国軍に陥落させられてから、早くも数日が経過した。

帝国の守りは凄まじく、奪還しようにも奪還出来るだけの戦力を有していな‘かった’連合軍では、手の出しようがなかった。

しかしあくまでもそれは‘かった’と過去の出来事でしかない。

現在の連合軍には最強戦力とも呼べる主要戦力――『紅き翼』が居る。

『紅き翼』が加わった連合軍の戦力は、陥落させられたときの比ではない。

それだけ『紅き翼』のメンバーは各個で強力な力を保有しているのだ。

そして立案されたグレート＝ブリッジ奪還作戦。

この作戦は連合側にとって今後の戦況にも影響するほどの重要なものだった。

この作戦に失敗は許されない。失敗すれば最期、連合軍は一気に瓦解することは必至だろう。

連合軍は今回の作戦に可能な限りの戦力を用意して挑むのだった……。

「作戦開始まであと少しだな……」

そう呟いたのは『紅き翼』のメンバーの一人の青山詠春（あおやまえいしゅん）。

全体的に黒い服で自らを纏め、メガネをかけている。その手には柄の部分に小さく『夕凪』と書かれた野太刀を携えている。

詠春は神鳴流と呼ばれる剣技の使い手で、おそらく魔法世界・旧世界とを探しても、彼に剣技で勝てる者はそうそうには居まい。
彼の雰囲気からはまるで触れただけで斬れそうな雰囲気があるのだが、今はどことなく頼りなく見える。

「おや？　詠春ともあろう者が緊張をしているのですか？」

「してない、と言えば嘘になるかもな。こんな連合の未来を左右する作戦……失敗するかと思うと、な」

詠春に言葉をかけたのは同じ『紅き翼』の一員であるアルビレオ・イマ。
頭から全体をローブで身を包み、詠春とは違い、どことなく爽やかな印象を持たせるような青年だった。
ただ、そんな見た目であろうと『紅き翼』の一員。実力は折り紙付きだ。

「ふふっ……。緊張するなとは言いませんが、いつも通りやれば大丈夫だと思いますよ？」

「あん？　なんだ、詠春。やっぱり緊張してやがったのか？」

アルビレオ・イマの後ろからそんな野太い声をかけてきたのはジャック・ラカン。
彼を表すならばまず筋肉だるま、と言う言葉が似合うほどに、強靭な肉体をしている。
雰囲気的にはバカっぽさがあるが、ジャックは最強の剣闘士として、その実力は知れ渡っている。

「気にするだけ無駄だっての。誰が敵だろうが、俺たちにゃあ勝て

ねえよ」

「そんな楽観的な……。だが、ラカンの言う通りかもしれないな」

ジャックの言葉にわずかに笑みをこぼす詠春。

さっきまでは夕凪を握る手に力が入っていたのだが、今は緊張がほぐれたのか、力が抜けているようだ。

ジャックは、意図して緊張をほぐそうとしていたわけではないだろうが、結果としては良い方向に進んでいる。

ちなみに詠春の近くにはゼクトも来ていた。

身長からすれば小学生にしか見えないのだが、生憎と彼も『紅き翼』の一員。しつこいようだが、実力は折り紙付きだ。

彼も詠春が緊張していると思い、緊張をほぐそうとしていたらしいが、それをやる必要はないようだ。

「ところでナギはどうしたんだ？」

「あのナギ（バカ）ならあっちで意気込んでおるぞ」

詠春の言葉に、ゼクトはそう言いながら、連合軍の主要戦力が集まっている場所にいる一人の少年を指さした。

赤毛が目立つローブを羽織っており、その手には身の丈ほどの杖が握られている。

そんな少年――ナギ・スプリングフィールドの表情には緊張など微塵も感じさせない、むしろ自信に満ちた表情が伺える。

すると、ナギは何かを聞いたのか駆け足で『紅き翼』の四人が集まっている場所に来る。

「お前ら、時間だとよ。行くぜ！！」

ナギがそう言ったかと思えば、まるでそれが合図だったかのように、連合軍の全てが一気に動き出す。

「ハッーハッハッハッ！！　いっちょヤッたるか！！」

「儂らも行くとするか。バカ共ばかりでは心配だからの」

「そうですね。でも、そこがナギのいいところですよ。どんな時にも諦めない。そのバカさがいいのですよ」

「そうだな。俺もナギに続くとしよう！！」

ナギの言葉に賛同するかのように『紅き翼』の面々は言葉を発して一気に飛び出す。

『紅き翼』の五人は連合軍の戦力の全てを一気に追い抜き、最前線に躍り出る。

その中でもさらに前に出ているのがやはり赤毛の鳥頭のナギだ。

それに負けじとジャックも前にでる。

普通なら突出している仲間に注意を飛ばすのだが、『紅き翼』にはそのようなコトはない。

あの二人があのように前に出るのは、今に始まったコトではない。むしろ出ない方が珍しいだろう。

故に他の三人は注意を飛ばしたりなどはしない。さらに言うならば、あの二人の力を信頼しているため、わざわざ注意を飛ばす必要がないのだ。

そして、そんな『紅き翼』の視界の先に、帝国の戦力外見えてくる。

もちろん強力な魔法力を有する帝国の戦力は強大だ。しかしそれに屈する『紅き翼』ではない。

ナギは懐よりあんちょこを取り出し、ジャックは自らのアーティファクト――『千の顔を持つ英雄』を発動する。

「行くぜッ！！　――契約に従い、我に従え、高殿の王！！　来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷雲！！　百重千重となりて、走れよ稲妻！！　『千の雷』！！」

ナギは雷系の魔法でも最強である『千の雷』を、いきなり帝国軍に向かってぶっ放す。

ナギの並外れた魔力で編み込まれた『千の雷』の威力は、そこらにある兵器を軽く上回り、もはや環境破壊の域に達するものだ。

そんな『千の雷』を放たれた側の帝国軍からしたらたまったものじゃないだろう。

しかもたった一撃でそこまでの被害をもたらすのだから、なおのこと質が悪い。

「負けてられるかよッ！！　斬鑑剣ッ！！」

赤毛の魔法使いに負けじと筋肉だるまは、自らのアーティファクトである『千の顔を持つ英雄』で出現させた剣を握る。

自らの持つ氣を剣に流し込む。するとジャックが持っている剣が氣により巨大化していく。

徐々に巨大化していく剣はドラゴン、戦艦、果てには鬼神兵すらも上回る大きさになる。

そしてそんな巨大化な剣を、帝国軍に向かって投げつけた。

先ほどのナギの『千の雷』と言いジャックの『斬鑑剣』と言い、明らかに個人で出せる威力を超越している。

しかしよく考えてほしい。帝国軍が『グレード＝ブリッジ』を陥落させた時の情報は、連合軍に知れ渡っている。

どのような攻撃で、どのような流れで陥落させられたが、『紅き翼』にも伝えられている。

情報によれば、全ての連合軍（こちら）の攻撃が蒼色の魔力弾によって相殺された、とのコトだった。

始まったばかりとは言え、そんな力の持ち主を最初から投入しないわけがない。

「――ッ！？　おいおい、どうなってんだよ、ナギ！！」

「俺に訊くな！！　俺だって知りてえよ……ッ！！」

そう。最初から投入しないわけがないのだ。

ナギが放った『千の雷』もジャックが放った『斬鑑剣』も、何者かが放った魔力弾により相殺された。

二人の攻撃の威力は、お互いに戦い合い、その身に刻みつけている。故に、魔力弾一発で、お互いの技が相殺されたことに驚愕している。

もちろん『紅き翼』の他のメンバーも、その事態に驚愕している。

そしてそんな『紅き翼』の元に、これを行った人物が現れた。

竜族独自の衣装に身を包み、太陽の光を受けて輝く銀髪。右手には銃が携えられており、その表情には僅かに笑みが浮かんでいる。

「ようこそ『紅き翼』の皆さん。あなた方の相手は、私――シキ・K（クロカミ）・アスタロトがさせて頂きましょう」

『紅き翼』の前に最強にして最凶の狙撃手。『不殺の弾丸』の二

つ名を持つ狙撃手が立ちはだかった。

◆　◆　◆　◆　◆

連合軍が進行を開始した頃、『グレード＝ブリッジ』で監視を行っていた兵士から報告を受けた。

もっとも攻め立てるのに有利な左翼には、全体の四割の兵を配置している。右翼は攻めるには向いていないために、二割程度。

正面には太刀打ちが出来るようにと、左翼と同じように四割の兵士を配置している。

ただ左翼や正面とは違い、右翼に配置している兵士は全体的に戦闘力は高くない兵士たち。

それを読んでいたかのように、右翼には敵勢力が固まっており、その中に『紅き翼』の姿もあったことが確認されている。

（やはり来たか『紅き翼』……。まあ、右翼を攻めてくるのは分かっていたよ）

右翼、左翼、正面、全ての戦局を見渡すことが出来る最適な場所に、竜族独自の衣装を纏う狙撃手――シキ・Ｋ（クロカミ）・アスタロトはタバコを加えながら思う。

シキはこの配置については何の指示をしていなく、全て他の者に任せていた。

銃騎士隊ならともかく、他の者はただの雇われた狙撃手程度にしか見ていないシキに、従う者などほとんど居ないだろう。

ただ、シキにとってはそれは逆に好都合だった。

定石どうりに配置を行ってくれる指揮官がいれば、自分もそれに沿って対策をたてることが出来る。

この指揮官は定石に従いすぎているがために、敵に配置を読まれている。それこそがシキの狙い。

（敵の裏の裏を読むのは、戦場では命運を左右するぞ……）

トンッ、と軽い音がした。それと同時に、音の発信源にいたはずのシキの姿は既にない。

この音はシキが移動するために地を蹴ったわずかな音。音の小ささに反比例し、シキの跳躍力は尋常ではない。

シキの視界に映る背景が高速で変化していく。それだけシキの移動速度が早いことを意味する。

視力を強化して狙撃を行うことが出来るのだから、わざわざ接近する必要はない。

しかし、それにもかかわらず、何故シキはわざわざ敵に接近していくのか。

それは楽しげな笑みを浮かべている、シキの感情に答えがある。

（せいぜい私を楽しませる道化となるが良い『紅き翼』。私の掌の中で足掻け……）

シキにとってはこの戦いというのは何の意味もない戦いだ。護るものもなければ、戦う理由すらない。

故に『紅き翼』との戦いは、今の彼にとっては、一番の楽しみとなりえるのだ。

強いと評判の良い『紅き翼』がどの程度の実力かが知りたい。ただの欲望。それだけが、狙撃手（シキ）を戦場に出向かせる。

そしてシキの視界に入ったのは、今にも魔法を放とうとしている鳥頭（ナギ）と、巨大な剣を投げ飛ばそうとしている筋肉（ジャック）。

どちらもが並外れた力を持ってはいるが、それでもその力はシキを楽しませる‘娯楽’程度の力でしかない。
本人たちがそれを知ったらどういう反応をするかが楽しみだが、今はそれを知る術はない。

（とりあえず挨拶と行こうか。道化共……）

シキはライフルに取り付けられている、スコープを覗く。途端に世界が死で埋め尽くされる。
その目に映るのは魔法と剣の綻び、もしくは死そのものだ。
狙いを定めた狙撃手はただ引き金を引く。銃口からは放たれた魔力弾は真っ直ぐに、死に向かっていく。

魔力弾には大した威力はない。しかし、死を貫きさえすれば、例え威力が無かったとしても『殺す』コトが出来る。
それが魔力により構成された魔法であっても、氣で強化されたら剣でさえも例外ではない。
魔法と剣を『殺した』狙撃手は驚愕している『紅き翼』の前に立つ。

「ようこそ『紅き翼』の皆さん。あなた方の相手は、私――シキ・K（クロカミ）・アスタロトがさせて頂きましょう」

シキがそういうと『紅き翼』全員の視線が突き刺さる。
周りでは多大な戦闘音が鳴り響いていると言うのに、まるでそこの空間だけ周りから隔離されたかのように静かに感じる。
狙撃手は挨拶をしただけで、まだ一歩たりとも動いてはいない。

同じように『紅き翼』のメンバーも、シキの動きを見計らっているのか、全く動く素振りを見せない。

だがそれは断じて否だ。動かないのではなく、動けないでいるのだ。

強者であるが故に分かるのだろう。シキには、全くの付け入る隙というものが見当たらない。

（動けねえ……。下手に動いたら――――死ぬ）

ナギ・スプリングフィールドは初めて自分より遙か高みの相手と対峙し、恐怖している。だがそれと同時に歓喜している。

自分よりも遙か高みの相手ではあるが、そんなあいつに自分の実力がドコまで通用するのか、と。

額から汗が流れ、頬を、顎を伝い落ちていく。それが引き金になったかのように、ナギは動いた。

虚空瞬動を使用して、あたかも自分が何人も居るかのように見せる分身の術。

ナギは考えた。狙撃手なのだったら、近距離、それも数で押し切れば勝てるのではないか、と。

それは一般常識の枠に当てはまる狙撃手だったならば、それで良かっただろう。

ナギの十六人にまで増えた分身は、文字通り四方八方からシキを取り囲むように展開する。

あんちょこを取り出した本体であるナギは、魔法の詠唱を開始する。

「――――契約に従い、我に従え、高殿の王！！　来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷雲！！　百重千重となし――――」

しかし、その詠唱が完成することはなかった。

シキを取り囲むように展開していた分身ナギ十六体が、一瞬にして撃ち抜かれ、本人であるナギにも魔力弾が向かってきた。
咄嗟に身を反らしたコトにより直撃は避けるが、僅かに頬にかする。

しかし、それだけで狙撃手の攻撃は終わらない。ギリギリで魔力弾を回避したナギに向かって、複数の魔力弾が向かってくる。
虚空瞬動を使い、その場から離脱して回避するが、その先にすらも魔力弾が既に向かってきている。

（動きが読まれてる!?　ヤベェ、このままじゃ、保たねえぞ!?）

再び虚空瞬動を使ったナギだったが、先ほどと同じように魔力弾が向かってきている。
魔法学校を中退したナギは実際、魔法を五、六個しか知らない。故にあんちょこを見なければ、強力な魔法の詠唱は不可能。
しかし逆に考えれば、五、六個は無詠唱で魔法を使えることを意味する。

「――――魔法の射手・連弾・雷の千一矢!!」

ナギが放った魔法の射手は、シキが放った魔力弾の数十倍の数がある。
狙撃手のように狙いを定められないために、それをカバーするために数で応戦する。
魔法の射手が当たった魔力弾は一瞬にして弾け飛び、消滅する。

（狙いは確かにすげーが、魔力弾自体は大した威力じゃねえ!!）

ナギの思った通り、シキの魔力弾は大した威力があるわけでなく

数・精度が良いだけ。
つまりは避けきれなくなった場合は相殺して近づけば良いのだ。
もちろん威力が低いと思えるのは、ナギ自身が凄まじい力を持つからで、ただの強者からしたら十分に脅威といえる。

（ほぉ、思ったよりも早く気づいたようだな、ナギ・スプリングフィールド。だが、お仲間はいつ動くのかな？）

魔力弾の威力が低いのは、実はシキ自身が低くしていたからだ。
その気になれば、一発でナギの『千の雷』並の威力を出すことが可能だ。
しかしそれをやらないのは、娯楽、をすぐに終わらせたくないからだ。
それに今、シキが見ているのはあくまでも、ナギ個人、の力。本当に見たいのは、紅き翼、の力だ。

シキは考えている間にも、狙撃の手を全く緩めない。
対してナギは虚空瞬動で回避しつつも、避けきれない魔力弾を魔法の射手で相殺しながら、シキに接近していく。
そして、今までで一番接近したときに、右手を振り上げる。距離にしてみれば、二十メートル。

「――――雷の暴風ッ！！」

十分に『雷の暴風』の射程圏内だ。シキに向かってはなった『雷の暴風』は、事前に放たれていた魔力弾を次々と破壊されていく。
威力を全く弱めることなく、進んでいきシキの眼前に迫る。
だがこの程度でダメージを与えることが出来るならば、『紅き翼』があそこまで恐怖しない。

刹那、『雷の暴風』がシキの放った魔力弾に相殺される。
バカな、とナギは思ったが、その思考はすぐに遮断される。相殺した瞬間に発生した煙幕により、ナギに放たれていた魔力弾の存在に、気づくことが出来なかった。
魔力弾は障壁に防がれ直接的なダメージをナギに与えなかったものの、勢いまでは防ぎきれず、そのまま『紅き翼』四人の元に吹き飛ばされる。

なんとかギリギリで体勢を立て直したナギは、追撃があるのではないかと、即座に対応が出来るように構える。
しかし、そんなナギに反して追撃が来る気配は全くない。
罠かと思ったが、僅かな攻防戦で、シキがそのようなコトをする人物でないことを理解していた。

「その程度かね？　『紅き翼』の諸君よ。もしそうであるならば……拍子抜けだ」

そういったシキの眼には言葉通り、明らかに落胆したと言わんばかりの表情が浮かんでいる。
それが挑発である事を理解しているナギならば、突っ込むはずだが、今は突っ込むコトなどはしない。
今回の戦いばかりは、無闇に突っ込んでいくわけにはいかないと、本能で理解しているからだ。

「私に見せてみろ、貴様等の力を」

まるで『紅き翼』の力を試してやると言わんばかりの言葉に、ナギが僅かにムッとする。
もちろん先ほどまで動けていなかった他の『紅き翼』のメンバーも、ナギの戦いと、今の言葉で動けるようになる。

これほどまでにバカにされた発言をされて、黙っている『紅き翼』ではない。

「良いぜ、見せてやるよ!!　ジャック、詠春、アル、お師匠!!　往くぜッ!!」

「おうよ!!　ビビってなんかいられねえよなッ!!」

「そうですね。あそこまで言われたら、やるしかありませんね」

「神鳴流奥義を見せてやる!!」

「バカ共だけには任せてはおけんの」

ナギの言葉でようやく奮い立った『紅き翼』の五人。さっきまでとは違い、シキの威圧感に呑まれないでいる。

今の『紅き翼』は、さっきまでとは比べものにならないほどの、実力を秘めているだろう。

それを理解した上で、シキは僅かに微笑む。ようやく楽しめるとばかりに……。

最前衛を剣士である詠春とジャックが務め、中間を魔法剣士であるナギ。最後衛を魔法使いであるアルとゼクトがやると陣形になる。

仮に最前衛である詠春とジャックが仕留めるコトが出来なかったとしても、中間に位置するナギが敵を撃破する。

最後衛の二人はサポートする形になるものの、この陣形は理想的な形といえる。

最前衛である詠春とジャックが虚空瞬動を使い、シキの左右から各々の得物を振るう。

詠春は野太刀を、ジャックは自らの氣で強化した拳を構える。ジャックは剣を使うよりも、素手の方が強い。

「――――契約に従い、我に従え、高殿の王……」

そしてナギは前衛の二人を信頼し、雷系で最強の呪文の詠唱を開始する。

魔法を詠唱している間というのは、敵にとっては最大のチャンス、自らにしてみれば最大のピンチとも言える。

そんな大きな隙を、みすみすシキが逃すような真似はしない。

左右から向かってくる詠春とジャックには目もくれず、真っ直ぐに、魔法を詠唱しているナギにライフルを向ける。

わざわざスコープを覗く必要はない。この距離ならば、外しようがない。

引き金を引く。銃口から蒼色の魔力弾が放たれ、詠唱しているナギに向かっていく。

「――――来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷雲!!　百重千重となりて、走れよ稲妻――――」

しかし、ナギは魔力弾が向かってくるにもかかわらず、全く焦っている様子はない。

もちろんそれは前衛だけでなく、後衛も信頼している証拠だ。

刹那、ナギに向かっていた蒼色の魔力弾が、アルの魔法による黒い重力魔法の球体に押し潰され、消滅する。

それをみたシキは僅かに笑みをこぼすと、左右の二人に対して反撃するために、自らの左右に二重螺旋の魔法陣を展開する。

引き金を引く。しかし銃口から魔力弾が放たれることはない。

代わりに左右に展開された二重螺旋の魔法陣から、蒼色の魔力弾が複数放たれた。
さっきまでの二人だったならば、動けなかっただろうが、今の二人からしたらそれは何の脅威にもならない。

「はあァッ！！」

「オラァッ！！」

詠春の目にも留まらない剣捌きにより一瞬にして魔力弾が消え去り、ジャックも自らの氣弾をぶつけ、魔力弾を粉砕する。
そのまま二人はシキに突撃する勢いを緩めないまま、さらに接近していく。
しかし、そう易々と接近させてくれるなら、ナギもあそこまで苦戦はしない。

勢いがつき始めた二人の足元と顔面、胸元に目掛けて魔力弾が連続で放たれる。
勢いがつき始めていた二人の、しかも避けづらい場所に魔力弾が放たれたことにより、対応が間に合わない。
詠春は虚空瞬動でその場から回避する事で直撃を避けるが、ジャックは持ち前の気合いで魔力弾を粉砕する。

（理解不可能なものほど、対処に苦しいものはない……か。――――む？）

不意にシキの体が重くなったように感じる。理由は実に簡単だ。
アルが重力魔法を使い、シキの動きを鈍らせようとしているのだ。
思惑通りシキの動きは鈍くなり、そこに付け入らないジャックではない。

「零距離――――」

ジャックの拳がシキの胸に当たる。元々ため込まれていた氣が、さらに収束していく。

右手に集められる氣がドンドンと巨大化していき、それに比例して詠唱を行っているナギの魔力も巨大化していく。

そしてジャックの氣と、ナギの魔力が同時に爆発した。

「――――ラカン・インパクトッ！！」

「――――『千の雷』！！」

刹那、鼓膜が破れてしまうかと思うほどに巨大な爆発音が響き渡る。

二人の最大の技が無防備なシキに直撃し、爆発音と共に爆風・煙幕が巻き上がる。

普通の相手であるならば、この一撃を食らった時点で塵すら見残りはしないだろう。

しかし、何回も言うが、今の『紅き翼』の相手は普通とはかけ離れている。

だからこそ、これだけの猛攻を仕掛けながらも、安心することが出来ない。

故に詠春は、さらに追い討ちをかけんとばかりに、野太刀を振り上げる。

「神鳴流決戦奥義――――真・雷光剣ッ！！」

姿は見えはしないが、今までの戦いの経験により、煙幕が上がっ

ていたとしても、だいたいで相手の居場所が分かる。
雷を帯びた野太刀を、詠春は何の迷いもなく、振り下ろす。
だが、聞こえてきた音は何かを斬った音とは程遠く、金属同士を打ち付けたような音が聞こえてきた。

有り得ないと思った。人体が金属で構成されていたならば、それでも良いかもしれない。
しかし、見た目では金属、もしくはそれに準じたものではなかった。それに、『神鳴流』は斬るものを選ばない。
ならば金属であったとしても斬れているはずだ。だが、野太刀からはそんな感覚は伝わってこない。

「――――踊れ、道化」

不意に聞こえてきたどちらかと言えば、女と取れる声。それを聞いた瞬間に、『紅き翼』のメンバーに全員が恐怖する。
煙が晴れ、その声の主をみる。そこには太陽に煌めく銀髪をなびかせ、ライフルを盾代わりにしているシキの姿がある。
『千の雷』に『零距離・ラカン・インパクト』。この二つを直撃しながらも、彼は全くダメージがあるようには見えない。

それどころか、服の焦げ跡すらもどこにも見当たらない。それもそのはずだ。
シキは直撃などしていないのだ。どちらの攻撃も、当たる直前に『殺した』のだ。
零距離からの砲撃・魔法・氣弾などを『殺す』コトなど、シキにとっては造作もない。

「貴様等は道化だ。私を楽しませるための、な」

その言葉を最後に『紅き翼』のメンバー五人の意識は刈り取られた。いや、正確には四人だ。

四人が気絶させられたのはシキが、四人が気づく前に狙撃したからだ。

一人だけ残したのは、撃ち漏らしなどではなく、意図してシキが残したのだ。

「私に勝ちたいなら、まずはあんちょこを止めるのだな」

「くっ……。俺を気絶させなかったのはわざとかよ……」

「あぁ。そこの貴様の仲間を連れて行ってもらうためだ」

既に戦う力が残っていないナギに対して、シキはまだまだ戦える様子だ。

それ以前に、シキは今出せる力の半分いや、二割も出していない。

『紅き翼』は『不殺の弾丸』により遊ばれていたに過ぎない。

『紅き翼』は完全に『不殺の弾丸』に敗北した。傷一つもつけることが出来ずに。

しかし、『紅き翼』と『不殺の弾丸』の戦いの勝敗の結果が、この戦いの勝敗を左右するわけではない。

不意に、シキの後ろより大きな声が上がる。振り向いてみれば、そこには勝ちを喜ぶ連合軍の姿があった。

（ほぉ、私が遊んでいる間に、連合が帝国を潰したか。まあ、あちらに関しては私には関係ない）

あくまでもシキが依頼されたのは、介入してくると思われる『紅き翼』の足止めのみ。

グレード＝ブリッジが奪還されようがされまいが、シキにとっては何の関係もない。
故に、奪還されたことに何の悔やみも何にもない。

「どうやら貴様等の勝ちのようだな。まあ、次に会うときまで、せいぜいあんちょこを見ないで戦えるようにするが良い、道化」

「テメ、待ちやがれッ！！」

ナギがそういうが既にシキの姿はドコにもない。いつの間にか居なくなったか、ナギには関知できなかった。
たったそれだけで、ナギはシキとの実力の差を思い知らされたことになる。

（畜生……あいつに勝つには、もっと強くならねえといけねえ……。もっと……もっとだ！！）

結果的には連合軍は帝国からグレード＝ブリッジを奪還することができ、勝利することが出来た。。
しかし、『紅き翼』は『不殺の弾丸』一人に敗北の二文字を与えられた。
勝利したにもかかわらず、『紅き翼』には敗北感しか残らなかった。
自らより高みの存在を見つけたナギは、強くなることを決意する。
もう、負けないために……。

一方、文字通り敗北の二文字を与えられた帝国は本国に帰ってきていた。
帰ってきた帝国の兵士は、うつむき、敗北したことを悔しがっていた。

そんな兵士たちに、一緒に帰還していたシキは言う。

「負けが悔しいなら強くなれば良い。下を向くな、前を見ろ。勝利の二文字は、前にしか存在していない」

シキはそれだけを伝えると、その場から立ち去っていった。

彼の言葉に皆が考える。勝利という二文字を。そして立ち上がる。

もう二度と、こんな気持ちを味わうことがないように……。

第二十四撃『紅き翼と対面。所詮は翼……翼では弾丸には勝てない』（後書き）

近々外伝として、エルの章を投稿するかもしれません。

感想待ってます！！

第二十五撃『交渉と護衛。姫様二人のお守りはさすがにキツいな……』

ｓｉｄｅ　シキ

連合軍との戦いに結果的に敗北してしから、まだあまり日が経ってないとある日の朝方。

私は銃騎士隊の面々と訓練を行っていた。正確に言うならば私が訓練してやっているのだが、さしてや違いはあるまい。

それにしても、銃騎士隊の面々は妙に張り切っているな。あの時の敗戦が堪えたのか？

そんなコトを考えている私の耳に魔法具の銃の独特の発砲音が聞こえてくる。

訓練は相も変わらず二つに分けて行っている。

一つは神騎兵による接近戦をも含めた銃撃戦。一つは私の狙撃した魔力弾を相殺しつつも、私に一撃を決める銃撃戦。

どちらもが各個で戦えるようになる訓練なのだが、まあ、集団戦の方は私の他に訓練をつけてくれている者が、なんとかしてくれるだろう。

さらに言うならば新人を鍛える日と、熟練者を鍛える日にも分かれているのだが、今日は新人を鍛える日だ。

銃騎士隊のメンバーを二つに分け、それをさらに二つに分けながらもその数は相当だ。

「動きが甘いぞ。そのようなコトでは、戦場では役には立たん」

私はそう言いながら、既に展開している二重螺旋の魔法陣八つに

加え、さらに五つほど新たに展開する。
十三しか二重螺旋の魔法陣が展開されてないにもかかわらず、コレだけの相手をしているのだから、むしろ少ない方だと言える。
まあ、魔法陣の一つ一つから絶え間なく、しかも一度の狙撃で何発も放たれているのだから、仕方がないと言えば、仕方がないのかもしれない。

「貴様等はまだまだ未熟だ。未熟が故に、まだまだ強くなる。勝ちたければ、血反吐を吐く思いで、私に抗え」

私は次々に放たれる魔力弾を相殺・回避している銃騎士隊の新人達に向かって、言い放つ。
今はまだ未熟ではあるが、中には本当に伸びが良い者も居る。現にその者達は私の狙撃に対して、少しばかり余裕が出てきているみたいだからな。
個人的には付きっきりで鍛えてやりたいのだが、まあ、そこまでやってやる義理はないしな。

すると、今まで（これまでの訓練も含めて）一回も私に魔力弾が飛んでこなかったのだが、私に向かって魔力弾が飛んできた。
その魔力弾にライフルを向けて引き金を引く。私が放った魔力弾により、誰かの魔力弾が呆気なく粉砕する。
そして、誰が私に魔力弾を撃ち込んできたかを確認する。

私の視界に飛び込んできたのは、肩の辺りまで袖のない、機動性を重視した外套を着ている少女――エルの姿が目に入る。
現在、エルが使っている銃は連続性を重視した二丁拳銃。
二丁拳銃の場合は、連続性を向上させる代わりに、正確性が乱れるのだが、良くあの状況下で狙えたものだ。

「面白い……。ならば、ランクアップといこうか……」

私は人知れずニヤリとして呟きながら、一つだけ指を鳴らす。
すると相殺・回避に専念しているエルの周りに二重螺旋の魔法陣を複数展開する。
それを見たエルや周りの新人共が、青ざめたような表情をしているが、強くなるのに楽な道などない。

そしてもう一度指を鳴らす。
刹那、エルの周りに展開させた魔法陣から、連続して魔力弾が放たれる。
今のエルのレベルより若干高めに、だけど避けきれないコトはないように調整しながら、魔力弾を放出させる。

正直、避けるだけで精一杯になっているようだが、あれを避けられるなら大したものだ。
ん？　楽しくなってきていないかだと？　ナンノコトカワカラヌナ……。
とりあえず私はSであったとしても、鬼というわけではない。あと一時間ぐらいしたら止めてやろう。

◆　◆　◆　◆　◆

「今日はここまでにしよう。お疲れ様」

私がそう言うと、今まで訓練していた新人が、一斉にその場に倒れ込んだ。
ゼェゼェと息を乱しており、どうやらかなり疲れているようだった。全く、だらしない。
中でもエルが特に重傷のようだ。うつ伏せに転がっており、微動

だにしない。

まるで雨に打たれたかのようにエルは汗だくになり、体中はボロボロ。服もところどころが切れてしまっている。

エルは特に厳しめにやったから、あぁなってしまうのも仕方あるまい。むしろよく頑張った方だといえる。

そんなエルに私は近寄っていき、隣に腰を下ろす。

「……キツい」

「おっ？　なんだ、起きてたのか。そりゃ訓練なんだから、キツくては当たり前だろ？」

「……なんで、エルだけ厳しいの？」

「そりゃ、お前が強かったからだろ？」

別にエルが知り合いだったから厳しめにしたとかではない。そういう贔屓はしたくないのでね。

私が厳しくしたのは、あくまでもエルだけが次の段階に進むことが出来たから。

だから私はエルのレベルに見合うように、ランクアップしたに過ぎない。

「……エル、強くなった？」

「あぁ。アリアドネー時代から見て、かなり強くなったと思うよ。頑張ったな」

「……ありがと」

私が言いながらエルの頭を撫でると、エルは顔を僅かに赤く染めながら、礼を言ってきた。

何故顔を赤くしたかは不明だが、別に礼を言われるようなコトをした覚えはないがな。

それにしても、この五年で良く成長したものだ。出るとこは出て、引っ込むとこは引っ込んー――。

「……エッチ」

「んぁ？　あっ、わ、悪いな」

私がそんなコトを考えてエルを見てしまっていたのだが、私のそんな視線に気づいたエルが言ってきた。

あまりそっち方面には興味なかったのだが、どうやら腐っても私は男のようだ。

こりゃいかんな。教える立場の私が教わる立場のエルを、そんな風に見てしまうとは最低だ、としか言いようがない。

「……シキだから、嫌じゃない」

「お世辞でも嬉しいよ。さて、ちゃんと着替えとけよ？　そんままだと風邪引くからな」

「ん……分かった」

私はそう言いながら立ち上がり、体をほぐす。

改めて、私の知り合いには魅力的な女性が多いと言うことを、知らされたな。思わず見とれてしまったよ。

まあ、エルにはそれ相応のパートナーが見つかると思うがな。

そんなコトを思いながら、銃騎士隊のメンバーのところを後にして、宮殿内に戻る。

なにやらテオが銃騎士隊の訓練を終えたら、来るように言ってたが、何の用なのだろうか。

まあ、大方今後の方針の会議やら何やらが有るのだろうな。めんどくさい……。

「ミカキ――――――――――ック！！」
「ぐおぉっ！？」

宮殿内を歩いていた私なのだが、突然に後ろより来た痛みに叫びを上げてしまう。
誰だ、などと訊ねる必要はない。なんせ、自分の名前を言いながら蹴りを入れてきたからな。
私は蹴られた腰を押さえながら、後ろを振り返る。
そこには両手を腰に当てて、ふんぞり返る幼女（ミカ）が居た。

「おいミカ……。いきなりそれはねェだろ……」
「何を言ってますですか。一体何話目の登場だと思ってるですか？お父様が出てる間にあたしは何話出なかったと思ってますですか？」
「いや、それは俺に言うなよ……」

もしかしてコレは八つ当たりと言う奴ではないのか……。何故八つ当たりを私にする必要があるのだ……。
まあ、よくよく考えてみればそこまで痛くなかったから良しとするか。
そんなコトを思いながら、よじ登ってきて肩車をするミカを連れてテオの元に向かう。

テオの部屋の扉の前に来た私は、扉を二回ほどノックした後に、返事があったのを確認した私は部屋の中に入る。
部屋の中には老人などは誰一人居らず、居たのはテオとシアさんだけだった。
ふむ、どうやら会議とかではないみたいだが、ならば何を話すのだろうか。

「おっ、やっと来たようじゃな。何話振りかの？」
「いや、そこは何日振りとかにしようぜ？」

ミカにテオは何故にこのようにメタな発言をするのやら……。
まあ、私にとっては大した問題ではないから、どうでも良いんだがな。

「とりあえず今から会談に向かうぞ？」
「会談？　わざわざ出向くのか？」
「そうじゃな。相手が相手じゃから、仕方ないのじゃ」

何やら今から会談に向かうとやらで、場所を移動するから、私に護衛をしてもらいたいらしい。
相手はどこぞのお姫様で確か名前は『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』とかいう名前らしい。
確か戦争を終わらせるための交渉をしに来るらしいのだが、帝国や連合以外の第三勢力が働いているのだから、無駄だとは思うがな。

とりあえず大人数で向かうわけにもいかないために、護衛は私一人。
あとは交渉に向かうテオの二人だけで向かうらしいのだが、まあ、私がいれば何があっても対応は可能か。
こんな会談を行っているのを、第三勢力が見逃すはずがないからな。

「じゃあ、向かうのじゃ！！」
「テンション高いな……。まあ、良いか。行くか、テオ」
「うむ、妾に着いてくるのじゃ！！」

私達はそんな会話をしながら、目的地に向かうための移動手段に

使う乗り物に乗り込む。
そして移動を開始するのであった。

◆　◆　◆　◆　◆

数十分後。私達は交渉の場に到着した。交渉だけに使うにしては妙に豪華な城だった。
誰が用意したかは分からぬが、城の各地に色々な仕掛けを施しているようだな。
コレはもしかしなくとも、第三勢力によって準備された場であり、確実に交渉のコトがバレているのだろうな。

下手に動いて警戒されても面倒だな。警戒されてもされなくても、大した差はないのだが、どうせ対処するならば楽な方が私的には良いのでな。
色々グダグダ言ってきたが、要するに動くのが面倒だからスルーすると言うことだ。
いや、だってどうせ対処しなければならないのなら、簡単にした方が良いだろ？
人間でなくとも、楽の方に進みたいのはもはや本能だからな。

「なかなかに豪華じゃのう。ところでアリカはどこかの？」
「さあな。もう中に居るのかもしれないし、先に入っておこうぜ」
「そうじゃな。先に行こう。しっかり妾を護るのじゃぞ？」
「了解」

妾を護れって……既に何かあると分かっているような言い方ではないか。
まあ、おそらくはこの城に施された仕掛け自体には気づいてないのだろうが、今までの経験則で言っているのかもしれんな。

いくら第三とはいえ皇女。命を狙われるなどということは頻繁にあるのだろう。誕生会ですらも侵入者が来るくらいだからな。

「おー、広いのう。妾の部屋ほどではないがの」
「お前の部屋が大きいんだよ。ちなみに客間もデカすぎる」
「何を言うておる。あの部屋はシキのための特別な部屋じゃ。普通ならあの半分くらいじゃ」

私が泊まっている部屋の半分だとしても、十分に広いと思うのだがな。

というか私の部屋は私とミカの二人で、寝泊まりするには広すぎる。まあ、割と三人の方が多いのだがな。

ちなみにこの部屋も、交渉するだけにしては無駄に大きいし、ところどころに術式が施されているな。

コレは捕縛用の術式のようだな。まあ、護衛をかいくぐり、お姫様二人を捕らえるくらいなら、この程度の隠密度・効力でも十分か。

しかもここから少し離れた位置に、複数の気配が散りばめられている。

ふむ、いざというときは交渉を破棄してテオを連れ出して逃げても問題はあるまい。

「シキ～、暇なのじゃ～」
「飽きるの早いな、おい。俺しかいないからってだらけすぎだぞ」
「む～、シキだけじゃからだらけて居るのじゃ。さすがに誰かが居たら、皇女らしく振る舞うぞ？」

普段の姿見てるから、逆に皇女らしく振る舞っているのを、見てみたいかもしれんな。

しかし、遅いなアリカ姫は。誰かに襲われでもしたか？　自分で

考えておいてアレだが、それは有り得ないか。
どうせ捕まえるなら一辺に捕まえた方が楽だからな。

「まあ、皇女らしくしてれば皇女に見えるからな」
「む、皇女らしいのではなく皇女なのじゃ！！」
「おっと、そうだったな。まあ、皇女のテオよりいつものテオの方が、話しやすくて良いけどな」
「そんなコト言うたら仕事のシキより、今のシキの方が良いぞ？」

そういえば仕事の‘私’とプライベートの‘俺’。皇女であるテオと、お転婆なテオ。
どちらもが偽りの仮面をかぶって接すると言うところがあり、微妙に似ているな。
どちらにせよ、偽りの仮面を被っていない方が話しやすい、というところだろう。

「そういえばシキはどうして猫かぶりをしているのじゃ？　妾のような立場ではないのじゃろ？」
「まあな。今じゃ癖みたいなものだからな。ちょっと昔あったんだよ」
「……余り訊かぬ方が良いかの……？」
「いや、構わねェよ。ただ、今は、あちらさんの方が先だろ？」

私の過去が暗いものだと判断したテオは、表情が暗くなるが、別に話せないという内容ではない。
確かに犠牲はあったものの、家族の犠牲は結果的には誰一人居ない。
そんなコトはまず置いといて、とりあえず今はあちらさんとの交渉が先だ。

私はそんなコトを思いながら、扉の方に視線を向ける。
すると扉が開き一人の女性が中に入ってくる。金髪の長い髪に、凛とした表情をしている。
見た目は明らかに姫様だと思わせるような、豪華ではあるが派手ではない服装。あの女性が交渉相手で間違いは無いだろう。

「済まぬ、遅くなった。アリカ・アナルキア・エンテオフュシアじゃ」
「お主がアリカ姫か。妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ」

アリカ姫が入ってくると、途端に皇女モードに切り替わるテオ。
さすがに交渉相手が来たならば、こうなってもらわねば困るがな。
それにしても、姫様というのは長ったらしい名前だな。
私の名前も割と長い方ではあるが、私の比ではないな。

そんなコトを思いながら、アリカ姫の護衛としてついてきた黒装束と一緒に扉の前まで移動する。
後ろに着いていたいが、こちらに着いていた方が視野が広くて色々助かる。
それに、この黒装束も余り信用は出来ないからな。

そんなコトを考えているうちに交渉が始まっていたらしい。アリカ姫とテオは、用意されたテーブル越しに向かい合いながら、妙に難しい顔をしている。
小難しい話は聞いていても私としてもつまらないので、カットさせてもらう。
まあ、簡単に纏めるならば帝国も武器を引いてくれ、という交渉だ。よくもまあ、わざわざ出向いて来るものだ。

そんなこんなで交渉を行うこと、数十分後、ようやく奴（やっこ）さんも動き出したみたいだ。

急に部屋の壁が魔法によりぶち抜かれ、床からは捕縛用の魔法が発動し、私とテオとアリカ姫の‘三人’に襲いかかってくる。

やはりアリカ姫の護衛についていた黒装束は、第三勢力の回し者だったようだ。

捕縛用の魔法に掛かりそうになっている私に、魔法を放とうとしている。

だけど、まあ、私も嘗められたものだな。この程度で私を捕らえられるとでも、思っているとはな。

「読めていたぞ、道化共」

「――――ッ！？　ぐあぁっ！？」

黒装束はいきなりのコトで驚愕していたようだが、護衛につく者がこの程度の罠を見破れないわけがないだろう。

私は黒装束が魔法を放つ前に、黒装束の腕と脚を魔力弾で貫き、動けないようにする。

さらに、テオとアリカ姫を捕らえようとしている捕縛用の魔法を、魔力弾で撃ち消す。この程度なら、わざわざ『死』を確認して『殺す』必要もない。

「な、なんじゃ！？　やはり襲撃かッ！？」

「ご名答だよ、テオ。逃げるぞ。アリカ姫も逃げるぞ」

「いったい何事なのじゃ？　説明せい」

こんな状況下というのにこっちの姫様は妙に落ち着いているな。

まあ、無駄に騒がれても面倒なだけだから、こちらとしても好都合だな。

とりあえず私達を捕縛しようとする第三勢力を迎え撃ちながら、テオを背負い、アリカ姫を抱きかかえる。

「説明は後だ、今は逃げるのが先であろう。口を閉じておけよ、舌を噛むかもしれないからな」

「む？　何を言って――――ッ！？」

「だから口を閉じておけと言ったろう。まあ、いい。とにかく今は逃げるぞ」

やれやれ、ずいぶん人里離れた場所を指定してきたかと思ったが、コレは万が一にも逃げだそうとしたときに、対処するためか。

こうして隔離しておけば、万が一逃げ出されたとしても、助けを求めるには時間がかかることになる。

そうなれば姫様二人だけじゃどうにも出来ぬな。しかし、相手が悪かった。

道化程度が私をどうにか出来るわけなどなかったのだからな。

そんなコトを考えていると、私が事前に感じていた気配が接近してくるのを感じた。

これは全く魔法使いと思ったのだが、魔法使いとは少しばかり違うようだな。

どちらにせよ、所詮この程度の雑兵。コレでは私を捕らえることなど到底不可能だ。

「し、シキ！！　どうするのじゃ！？　囲まれておるぞ！？」

「これぐらいどうにかして見せよ、不殺の弾丸」

「我が命に代えても」

というか『子連れ狙撃手』の他にも私に二つ名がついていたようだな。

『不殺の弾丸』か……。どういった経緯からこの二つ名がついたかは分からぬが、最初のよりはマシだろう。

そう考えながら、私は二重螺旋の魔法陣を大量に展開する。とりあえず適当に展開してみたが、道化相手には少し多すぎたかもな。

「私を捕らえたいならば、コレの兆倍は持ってこい！！　道化共がッ！！」

刹那、全ての魔法陣から敵に向けて蒼色の魔力弾が連続で放出される。

まさに雨の如く降り注ぐ魔力弾は、敵勢力を確実に減らしていく。数秒後には、アレほどの数を誇っていた敵は誰一人として立っておらず、全てが地にひれ伏していた。

「す、スゴいのぅ、シキ……。初めて見たのじゃがスゴすぎやしないか……？」

「そ、そうだな……。さすがの私も仰天ものじゃ……」

「まあ、アレでも二割程度の力でしかないがな」

「「……え？」」

二割と言っても今の何の強化も使わない状態での話だがな。『限界突破』を使った時点で、私のデコピン一発で、軽く山は吹き飛ぶからな。

ちなみに実証済みか、と訊かれたら実証済みだと答えるしかない。世界の均衡を保つためには、私は余り力を出すわけにはいかないのだよ。私の存在その者が、世界を崩壊させかねないからな。

「とりあえず近くの街に行こう。テオとアリカ姫には一応認知阻害のローブを渡しておくから、羽織っててくれ」

「アリカで良いぞ、不殺の弾丸」

「ん……ではアリカも私を不殺の弾丸などではなくシキかクロカミで良い」
「ならばシキと呼ばせてもらう。時にシキ、何故お主は私と話すときに、口調を変えるのじゃ」
「癖のようなものでね。さて、また移動を開始する。口を閉じておけ」

私はそう言いながら近くの街に向けて移動を開始する。
近くの街と言っても、おそらくは夜通しで動いたとしても、丸一日掛かるやもしれんな。
その苦痛に姫様二人が耐えきれるかが、今の私の心配の元だ。

◆　◆　◆　◆　◆

案の定、次の街に到着するのに一日では足りず、二日も掛かってしまった。
何のやることもない空の旅に、姫様二人が耐えきれるわけもなく、途中途中で止まる羽目になってしまった。
道中で腹が空いたやら何やらを言われて困ったものだ。

食料に関しては『創造再生』で創り出せるために問題はなかった。
夜になったときも野宿は嫌だ、風呂に入りたいなどを言われて非常に困ってしまった。
そんなときは『創造再生』の出番だ。そこらの高級宿に負けないくらいの宿を創り、その中に色々な効能を含めた温泉を創りと……。
戦闘でも役に立ってくれるのだが、まさかこんな時にも役に立つとは思わなかったな。

まあ、一番に困ったのは街に到着してからだな。
何気なく目にした映像で『紅き翼』のメンバーが反逆者として、

連合からも帝国からも追われる身となっていた。
それはどうでも良いのだが、それに連動して私が姫様二人をさらった誘拐犯として、指名手配されてしまったことだな。

最初は何故急に私が襲われるのか分からなかったが、これを見て納得してしまったな。
正直、誘拐犯だとか指名手配だとかどうでも良いが、道化程度が、私を捕らえられると思っていることが、腹立たしい。
あー、イライラする。どっかの魔法軍でもぶっ潰してくるか……。

「シキ、思考がだだ漏れじゃぞ？」
「おっと、そうだったか。まあ、アレだ、指名手配ってなったことねェから、ちょっとウキウキしてんだよ。道化共にはイライラしてるけどな」
「イライラしてても妾達には八つ当たりせんようにな……？」

分かってますともテオさん。
とりあえず今は指名手配になってしまっているから、身を隠しつつ、アリカと面識のある『紅き翼』と接触するのが先決だな。
姫様二人なんか面倒見きれんからな。『紅き翼』に押しつけてやる……。

第二十六撃『紅き翼との対面。姫様二人の面倒はもうこりごりだ……』

ｓｉｄｅ　シキ

「シキ～！！　次はあっちに行くのじゃ～！！」
「シキ、これはいったいなんなのじゃ？」
「テメーら！！　少し落ち着け――――――――――ッ！！！」

テオとアリカを救出してから、既に数日が経過しようとしていた。
結果的には私は指名手配犯となってしまい、現在は指名手配犯として各地を転々としながら、身を隠している。
『創造再生』により創りだした認知阻害のメガネを掛けたことにより、『私が指名手配犯であるシキ』には見えなくなっている。

さらにテオとアリカに渡したローブにも『姫様には見えない』という認知阻害を使っているため、二人が姫様には見えていない。
そもそも誘拐された二人が街中に居たら、騒ぎが起こるし、それ以前に姫様が居たら騒ぎになるだろう。
そうなってもらってしまっては、私としても面倒だから、ローブは極力離さないようにしてもらっている。

ちなみに、とある人物達からは分かるように設定しているため、とある人物達は気づいてくれるだろうな。
と言うよりもとある人物達には気づいてもらわねば、私が困るのだがな。
それにしても、何なのだこの姫様二人のはしゃぎっぷりは……。

そこらに居る、言うことを聞かない悪ガキと同じくらいのはしゃ

ぎっぷりではないか。
まあ、確かに皇女やら王女の身分の二人からしたら、こんなにも街を転々とするのは、未知の体験だろうから、騒ぎたくなるのも分からないではないが、少しは大人しくしてもらいたい。

「お前ら、少し大人しくしててくれよ……疲れるから」
「むぅ、良いではないか！！　こんなにも見張りがなく、遊べる機会はあまりないのじゃから」
「いや、別に遊びに来たわけじゃないから」
「堅いことを申すな、シキ。良いではないか」
「いや、良くはないから」

何なのだこの姫様二人は……。少し呑気に構えすぎではないのか？確かに私が側にいれば、危険なるなどと言うことはないが、それにしたって呑気過ぎだ。
戦争の真っ只中であるにも関わらず、姫様二人は街でのんびりか……。妙な光景だ。

「ところでシキ、これはなんなのじゃ？」
「ん？　そりゃただのアクセサリーだ。お前らがつけるのと違って、あんまり豪華じゃないだろ？」
「うむ、貧相な造りじゃな」

私はテオが指差したアクセサリーを手に取りながら訊いたのだが、そんなはっきりと言わずとも良いような気もするのだがな。
だいたい、テオ達が付けるようなアクセサリーが、このような一般市民のためのアクセサリー屋に、あるわけがなかろう。
私が手にとったアクセサリーは、剣を模したような小さなものだった。

柄の先の部分に紐を通す部分があり、そこに紐を通して、首から下げるタイプのようだ。
魔法具にもこういうタイプのものが、あったような気もするが、これは間違いなく違うだろう。
まあ、コレに術式を組み込めば魔法具としても使用できるが、わざわざそうする者は居まい。

そんなコトを考えていると、テオがこのアクセサリーをじーっと見ているのに気づいた。
左右に動かすと、テオの視線も左右に動いているのが分かる。
全く……欲しいならば欲しいと言えば良いものを。とりあえず私は金を払いこのアクセサリーを購入する。

そしてそのアクセサリーに『創造再生』で絶対防御の能力を付与する。
これでいざという時に、発動してテオを守ってくれるだろう。
今付与した絶対防御は、現代魔法では絶対に破ることは不可能な強度に、なっているからな。

「ほら、欲しかったんだろ？　やるよ」
「あ、ありがとうなのじゃ、シキ」
「気に入ったか？」
「じ、実は気に入っていたのじゃ……」

恥ずかしそうに頬を紅に染めながら、テオは私から受け取ったアクセサリーを首から下げる。
とてもシンプルな造りをしているが、そこはさすがは皇女。何をつけても似合ってしまうのは、もはや才能としか思えぬな。
それにしても、いくら反逆者として指名手配されたとはいえ、来るのが遅いな、あの道化共。

「し、シキ？　そ、その……似合っておるかの……？」

テオの言葉に連動するようにもじもじと手が動き、足がつつつーっと円を描く。俯いてしまい表情は見えないが、先ほどまでと同じならば、顔は紅くなっているはずだな。

まあ、なぜ赤くなっているかは良く分からないのだがな。

私はそんなテオに視線を合わせるように膝を折り、肩に手を押きながら言う。

「あぁ、似合ってる」

「～～～～～～ッッッ！！！？」

私がそう言ってテオの顔をのぞき込むと、元々赤かった顔がさらに赤くなり、沸騰寸前になっていた。

と言うか頭から湯気出てる辺り、沸騰寸前でなく、完全に沸騰してしまったのだろうな。

……沸騰！？

「て、テオ！？　大丈夫か！？」

「だ、大丈夫なのにゅ……」

「大丈夫、そうだな」

急いで喋ったからか、テオは舌を噛んでしまい、うずくまってしまっている。

時折唸っているところを見ると、相当痛かったのだろうな……。

何というか……ご愁傷様。

私は唸りながらうずくまっているテオを見て苦笑いしながら、そんなコトを考える。

「テオも大変そうじゃな……。ああいう輩に好意を持つと大変であろう？」
「う、うむ……。分かってくれるのか……？」
「何となくじゃが分かる。ああいう輩は大変じゃ」
「そうなのじゃ。天然じゃから余計に質が悪い……」

私の後ろで何やら姫様二人がコソコソと話しているようだが、ここまでは聞こえてこない。
やれやれ、何を考えているのやら。まさかとは思うが、この後まだ街を見て回るつもりか？
正直、勘弁してもらいたいのだが、私の意見は、取り入れてもらえなさそうだな。

そんなコトを思いながら、私はこっそりと二人を誘導して、秘密裏に創った家（という名の屋敷）に帰る。
この家にも認知阻害を施しており、とある人物達以外からは、絶対に見ることが出来ない。
もしくは元からそこに家があったように思いこむか、行き止まりにしか見えないはずだ。

そして私が僅かに気を緩めた瞬間、私の首筋にピタリと、冷たい何かが当てられたのに気づいた。
確認してみれば、それはどこにでもあるようなただのナイフであるコトが分かる。
やれやれ、随分と手荒な訪問者のようだな。

「し、シキ！？」
「お主、何者じゃ」

テオは驚愕し、アリカは勇敢にも一歩踏み出しながら、私にナイ

フを突きつけている人物に問いかける。

「オレか？　オレは――」

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

反逆者の汚名を被らされたナギ・スプリングフィールドを筆頭とした『紅き翼』は、各地を転々としながら、色々な情報を収集していた。

第一に『完全なる世界』についてだ。

この『完全なる世界』と言う組織は連合・帝国、さらにはメガロメセンブリアにまで内部に手作がいるようだ。

第二に、交渉中に連れ去られたというアリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女についてだ。

信じがたいコトにアリカ王女は、当初の『紅き翼』のメンバー全員でも傷一つつけることが出来なかった狙撃手――シキ・Ｋ（クロカミ）・アスタロトに連れ去られたと言う情報が入っている。

実際に映像でもシキがアリカ王女とテオドラ皇女をさらったとして、『紅き翼』同様に指名手配されている身だ。

（あいつが、んなことやるはずがねえ……）

しかしナギはそれは有り得ないと思った。

敵として初めて出会ったのだが、不思議とシキからは、そういったことをするようには、感じなかった。

もちろんコレはナギのただの予測にしか過ぎないが、ナギは確信を持っていた。

現在、『紅き翼』は隠れ家に潜伏し、体を休めていると同時に、情報収集班が帰ってくるのを待っている。
いかにチート級の力を持っているとはいえ、魔力や体力は無限にあるわけではない。
集中力が途切れ、僅かな隙をつかれ、致命傷を与えられればアウトだ。

すると『紅き翼』の隠れ家の扉が開け放たれ、そこから一人の男性と一人の少年が入ってきた。
男性は髭を蓄え、メガネを装備し、スーツを着用している加えタバコが似合うダンディーという言葉が、非常に合う――ガトウ・カグラ・ヴァンテンダーク。
もう一人はガトウの弟子であるタカミチ少年だ。

「アリカ王女の居場所が判明した」
「――ッ!?　どこだ!!」

今までのんびりとしながらも、警戒していたナギはすぐに起き上がり、ガトウが広げた地図に食いつく。
地図にはヘラス帝国からメガロメセンブリアなどといった、魔法世界が詳しく描かれていた。
その地図に赤色のマーカーで、一カ所だけ丸がつけられている。

「アリカ王女はこの場所にいる。ヘラスの皇女と……不殺の弾丸も一緒だ」

ガトウが示した場所はやはり赤色のマーカーで囲まれている場所だ。
この隠れ家から、そんなに離れているわけではなく、急げば一時

間も掛からずに到着できるだろう。
そしてナギは僅かに安堵した、という表情を浮かべながらいう。
「……そうか。だったら、大丈夫だな」
「むしろ危ないと思うが、なぜ大丈夫だと言い切れるんだ？」
ガトウはタバコを揺らしながら、大丈夫だと言い切ったナギに問いかける。
周りにいたジャックやアル、詠春と言った『紅き翼』のメンバーも、ガトウと同じ意見のようで頷いている。
「大丈夫だ。あいつは、絶対に姫さんたちをどうにかしようなんて考えねえ」
「ナギがそこまで言い切るなんて、よほど彼に肩入れしているのですね」
「まあ、戦い方を見る限りでは儂も同じ意見じゃがな」
アルとゼクトもやれやれ、といった感じでため息をつきながら、そういう。
とにもかくにも、アリカ王女の場所が分かったならば、シキが敵だろうがそうでなかろうが、やることは一つ。
各々が準備を整え、『紅き翼』の隠れ家から一気に動き出す。
敵に見つからないようにしながら、『紅き翼』は駆け抜ける。
そして敵に出くわすことなどなく、アリカ王女が居ると情報があった街に到着した。
街は見た限りでは別段変わっているなどということもなく、至って普通の街のようだ。
ただ一つの違和感を除いてだが。

見えていないのだろうか、街の人々は明らかに違和感丸出しの屋敷に気づいていない様子だ。
認知阻害が効いているならば、『紅き翼』にも見えないはずだが、『紅き翼』にははっきりと見えている。

罠かもしれないと思ったが、こんな街中で罠にはめるメリットが何もない、と言うことを理解した『紅き翼』は迷わずその家に向かう。
中からは僅かに声が聞こえてくるようで、やはり中には人が居るようだ。

「ここだな？」
「あぁ、間違いはないはずだ。何があるか分からない、みんな構えておけよ」
「はん！！　こちとらとっくに準備万端だ！！」

そんな言葉を聞いたナギも杖を握る手に力を籠める。そして、屋敷の扉を一気に開け放つ。
すると、『紅き翼』のメンバーの目に映ったのは、絶対的な力を誇った狙撃手の姿ではなく、のんびりとしている狙撃手とアリカ王女、テオドラ皇女、謎の女性の姿だった。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シキ

「――――オレは『殺人姫（さつじんき）』だ」
「随分な挨拶だな、ティア。まあ、お前じゃなかったら今ごろは蜂の巣だろうな」
「確かにな。でもオレでも、あんたには勝てないよ」

私にナイフを突きつけてきたのは、最近『殺人姫』の二つ名で知られているティアだ。
実は私がティアを呼び出したのだが、まさかこうも早く来てくれるとは思わなかったな。
それに、来てくれたというコトは、私が頼んだことを達成してきてくれたんだろう。

「どうだった？　上手く先導出来そうか？」
「あぁ、上手いことこっちに向かってるよ。あと一時間もあればここまで来れる」
「そうか。じゃあ、あとは来るのを待つだけだな」

私がティアに頼んだのは、『紅き翼』のメンバーをここまで誘導させる、ということだ。
私が決めた一定の人物以外には、完全に認知阻害が掛かるために、目撃証言などが必然的に無くなってくる。
かといって認知阻害を使わなければ、危険がないとはいえ、姫様二人には不自由な思いをさせてしまう。

だからティアに私たちがここにいることを、『紅き翼』にさりげなく証言してもらいたかったのだ。
どうせアリカを見つけだすために、情報収集を行っているはずだからな。
それにある程度『殺人姫』の名が売れているティアの証言ならば、そこらの証言よりも信用できるはずだからな。

「シキ、こ奴は誰なのじゃ？　妙に親しげじゃが……」

そんなコトを考えていると、なぜか若干怒り気味に、テオがそん

なコトを訊いてきた。
ふむ……なぜテオはこのように怒っているのかは分からぬが、とりあえず説明しておこう。

「こいつはティアレンス・バイシタル。俺の友達だ」
「ティアレンスだ。ティアで構わない」

私の紹介にティアは人懐っこい笑みを浮かべてテオにそういう。
しかしテオは相も変わらず怒り気味なのだが、本当にどうしたのだろうか……。
そんなコトを考えていると、ティアが何かを思いついたのか、うっすらと笑みを浮かべながら、テオを連れて、私達から少し離れていった。
いったい何を思いついたかは分からんが、テオに変なことを、吹き込まないようにしてもらいたいな。

「何じゃお主。妾が誰か知っておるのか？」
「もちろん。ヘラス帝国第三皇女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアだろ？」
「む……」

あっ……何かテオがムッとしたような表情になったではないか。
全く、このあと誰がテオの機嫌をとると思っているのだ。少しは私のことも考えてもらいたい。
というかあのような表情をしたときのティアには、良い思い出がないな。

「オレはちょっとばかし情報通でね。だいたい、アンタはシキさんに捕まってることになってるんだ。分からない方がおかしいさ」
「た、確かに言われてみればそうじゃな……」

「そして、アンタはシキが好き、なんだろ？」
「なっ、ななな、何を言って居るのじゃ！？」

おいおい……今度はテオに向かって、ティアは何を言ったのだ……。

さっきまでムスッとしてたのが、今は顔を真っ赤にしてわたわたと、慌てて居るではないか。

はぁ……このあとテオの機嫌取りに時間が割かれるのは、どうやら決定事項らしい。

「見てると分かるよ。というか、アンタは分かりやすい」
「うぅ……分かりやすいのか……？」
「そりゃあ、もう。あとアドバイスだ。シキさんを狙ってるのはお姫様、アンタだけじゃない。競争率高いぜ？」

ティアはテオに何かを言ったと思ったら、こっちに向かって歩いてきた。

何を言ったのかは分からぬが、お前は何を満足げな顔をしているのだ。何を達成感丸出しの顔をしているのだ。

その表情が無駄にムカつく私は、間違ってなどはいないはずだ。

「おい、テオに何言ったんだよ」
「さあね、大したことじゃないよ。それより、『紅き翼』全員と戦って勝ったって本当か？」
「まあな。手加減してたんだが、全然相手にならなかったな」
「あの程度でアンタと同等だったら、逆にオレたちの立場がないよ」

確かにな。『紅き翼』程度が今の私と同等ならば、神格と命がけで戦った私たちの立場がない。

今の私の体内には、神ですらも瞬殺できる力が、内包されている。

ヒトの身で私に勝てる方がおかしいのだ。否、勝てる可能性などミリ単位もない。

確か今は人数が増えているらしいが、蟻が一匹増えた程度では、何ともないな。

「とにかく、『紅き翼』が来るのを待とうぜ？　来るまでやることないんだからさ」

「そうだな。テオ、アリカ。中に入るぞ」

私はそういいながら、テオとアリカが家の中に入るのを確認した後に、家の中に入る。

さて、これから何をしようか。これと言ってやることもないし、休暇の楽しみ方も忘れてしまったな。

なんせ、私のやるべきコトは四六時中、年中無休で『依頼』、言い換えれば雑用業。

コレが私の仕事であり、やりたいことであるために、休暇など必要なかったからな。

いざ休暇だ、と言われても全くやりたいことが見当たらない。昼寝でもするか？

もしくは神からもらった特性ライフル以外の銃器の点検をするか……。正直特性ライフルしか使わないのだが、趣味程度に集めている。

まあ、趣味程度で集めているとは言え、いつ使うことになるか分からない。

点検の方を怠っていないために、点検など必要ないのだがな。

というか、この暇な数日で点検だけでなく、改造も施したのだがな。

「シキ～……暇なのじゃ～……」
「あー、俺もだ。非常に暇だ。やりたいことが見つからん」
「じゃあオレと殺り合うか？」
「却下だ。下手したらマジでお前には殺される」

神格王の身体能力が私に備わっているために、速度（スピード）・火力（パワー）で劣ることなどまず有り得ない。
だが、ティアは私よりも殺し合いの経験が多く、速度（スピード）・火力（パワー）で劣っていても、性能（スペック）・才能（テクニック）でカバーしてくる。
それにその対象が何であれ『殺す』ことが出来る眼――『直死の魔眼』を備えている。

確実に一人で『紅き翼』よりは強いコトを示している。
殺されても復活できるが、だからとはいえ、暇つぶしで殺されていては、たまったものではない。
その前にティアの動きを封じれば、今までのことはすべて回避できるがな。

「オレとしてもアンタと殺り合うのは御免だけどな」
「じゃあなんで言ってんだよ……」
「少しぐらいは暇を潰せるかと思ってね」

少しぐらいはって……ほんの数分程度しか暇を潰せないではないか。
どうこうしている間にも、既に三十分ほど経過しているが、まだ掛かりそうだな。
と、私が思った刹那、家の扉がいきなり開け放たれた。

視線を向けそこに立っていた人物たちを確認する。
赤毛の鳥頭に筋肉達磨、白髪のチビにイケメソスマイル。ダンデ

ィーに堅物メガネに、その他二名。
コレはもしかしなくとも『紅き翼』のご一行様ではないか。

「ようこそ道化諸君、我が根城へ」
「……姫さんを返してもらうぜ」
「良い。勝手に連れて行け」
「……は？」

何気なく戦闘態勢に入り、かくなる上は力付くでもアリカを連れ戻そうとしていた鳥頭に向かって、私はしれっと言い放つ。
すると全員が間抜け面になっていたのだが、滑稽だな。さすが道化だ。
だいたい、今のこちらの勢力は私とティア。どう足掻こうとそちらに勝ちは有り得ない。

「貴様、何か裏があるんじゃないか……？　こうも簡単に貴様のような奴が人質を返すとは思えん」
「人質？　笑わせるな道化。貴様ら程度相手に人質をとるなど、私の流儀に反する」

未だに刀を構えながら、私にそう言ってくる堅物メガネに、殺気をぶつけながらそう言う。
だいたい、『紅き翼』の中で貴様が一番殺しやすい。隙が多すぎるからな。

「お主らは何を勘違いしておる。シキは妾を助けてくれたのじゃ」

そこで今まで空気状態だったアリカが、ここぞとばかりに言葉を発してきた。
アリカがここまでの経緯を話してくれたことにより、私への疑い

が完全に晴れたようだ。
だからとはいえ簡単には割り切れないようだが、若干二名は気にしていないようだ。鳥頭と筋肉達磨だ。

まあ、それは置いておき、一応アリカを助け出したから私を敵ではないと判断したようで、現在の状況を説明してくれた。
連合や帝国に私や『紅き翼』の味方が居ないとは思っていたが、まさかアリカのとこのオスティアにも敵視されているとはな。
しかもそのオスティアの上層部が一番黒い部分だとはな。全く…
…もはや世界中が敵ではないか。

「世界全てが敵――――良いではないか」

何を自信げに言っているのかは分からないが、アリカが唐突に呟いた。
まあ、この正義感の塊みたいな姫様のコトだ……大方、大層な演説でも始めるのだろう。

「――――ならば我等が世界を救おう」
『――――ッ！？』

アリカの発した、世界を救うという言葉に、『紅き翼』の全員が驚いたような表情をする。
私やティアは関係ないとばかりに、くつろいでいるのだがな。
それに、感動的な場面に出くわしているが、場所はどこぞの街の私の家。どうも緊迫感に欠ける

「我が騎士ナギよ――――我が盾となり、剣となれ」
「……いいぜ、俺の杖と翼。あんたに預けよう」

ナギは前にかざしたアリカの剣の前に片膝をつき、そんなコトを言っていた。
あー……臭い臭い。他人の家で勝手に正義の味方の集まり会を開くではない。
だいたい、アリカは我等が世界を救おうとか言いながら、戦いは鳥頭と筋肉達磨、堅物メガネに任せきりだろう。
まあ、参謀の方はアリカがやるのだから、平等かもしれないが。

「なあ、シキさん。オレたちも、あーいうのやった方が良いのか？」
「やらんで良い、下らない。さて、アリカは貴様等に返した。あとは貴様等で何とかしろ」

私は『紅き翼』とアリカにそういいながら、テオとティアと一緒に家から出ようとする。
アリカの身柄を『紅き翼』に任せたのだ。私とテオは帝国に戻り、誤解を解くだけで私たちの長旅は終わりだ。
世界を救うやら何やらは勝手にやってくれ。私に害が及ばない限り、自ら力を振るうことはない。

「待つのじゃ。シキも、我らに力を貸してはもらえぬか？」
「……良いだろう。必要最低限は貸してやる」

私としても、テオやティア、ユーリやみんなが住む世界が滅んでしまっては困るからな。
いくら創り出せるとはいえ、私が創りだしたものは紛い物でしかない。しかし『紅き翼』などと仲良く戦う気は毛頭ない。
足手まといが一緒では、面倒なだけだからな。

「感謝する、シキ」
「そうか。だが貴様等と共に行動する気はない。私とテオ、ティア

は別行動をさせてもらう」
「構わん。こちらで手に入れた情報はそなたにも送る。じゃから、そちらで手に入れた情報も、こちらに与えてはくれぬか？」
「了承しよう」

私はアリカにそう告げると、テオを背負ったあとに、ティアと共にとある場所に向かう。
向かうはヘラス帝国――帝都ヘラス。

第二十六撃『紅き翼との対面。姫様二人の面倒はもうこりごりだ……』（後書き）

真名編以外にも、夕映編などもやるかもしれません。
真名編しか決まってないので、意見があったらお願いします。
感想待ってます！！

第二十七撃『皇女の願い。キスだけが、契約のやり方ではない』（前書き）

来るべき戦いに備えて帝国にやってきた俺達。
帝国に帰ってきた俺達を迎えたのは、人々の笑顔。
すでに俺は、守るものが増えすぎてしまったようだ。
それが時には重く、苦しく感じてしまうのは俺が未熟だからだ……。

その狙撃手は竜族なり、始まります。

……リリカルなのは風にやってみましたがどうですかね？

第二十七撃『皇女の願い。キスだけが、契約のやり方ではない』

side　シキ

「どうして我が帝都ヘラスに向かっておるのじゃ？　シキは指名手配になっているのじゃから、襲われるかもしれんぞ？」

とある街に創った私の家から、帝都ヘラスに向けて動き出しているときに、テオがそんなコトを言ってきた。

私が家を創っていた場所は比較的、ヘラス帝国に近い場所だったために、そこまで時間はかからない。

既に視界にはヘラス帝国を収めている。まあ、強化しているのだがな。

「今から誤解を解きに行くからさ。誤解されたままじゃ、俺たちもあいつ等も、いろいろ動きにくいだろ？」

「帝国の方はシキさんとテオが居れば大丈夫だと思うぜ？」

「そうじゃな。そうなんじゃが……」

テオはそこまで言うと、なぜか黙り込んでしまった。

はて、どうしたのだろうか？　もう帝国は目前だと言うのに、疲れたとでも言うのか？

まあ、いくら私と何日か旅をしたとはいえ、姫様からしたら、疲労が溜まらないわけがないか。

そんなコトを考えながら、私はプルプルと震えているテオの、次の言葉が出るのを待つ。

「なぜ妾達は囲まれておるのじゃ――――――――――ッ！！！」

するとどこかの誰かさんもビックリするような、大声量で叫んだ。
そう。テオのいうとおり、現在私とテオ、ティアは帝国の近くの森の中にいるのだが、なぜか武装集団に囲まれていた。
誤解を解きに向かうのに、認知阻害を使っていては失礼かと思った私は、認知阻害を付与したメガネを外して行動していた。

その結果がコレだよ。
まさか武装集団に囲まれるとは……思わなくはなかったが、こんなあからさまに怪しい奴らに囲まれる羽目になるとは、思わなかったな。
武装を見る限りでは帝国の兵士ではないようだし、『完全なる世界』の一員か？
どうでも良いが、道化程度が私の行く先を塞がないでもらいたいものだ。

「あんまり騒ぐなよ。つーか耳元で叫ばれると、耳がすげー痛い」
「そういう問題じゃないのじゃ！！　どうするのじゃ、目的地は目の前じゃと言うのに、敵に囲まれておるのじゃぞ！？」
「敵？　こいつらが？　有り得ないね、こんな雑魚、敵にするにもおこがましい」
「面倒だからさっさと終わらせるぞ。こういう輩は、力の差を見せつけないと分からないからさ」

ティアはそういいながら、腰に携えていたナイフをホルダーから抜き放ち、裏手に構える。
目を見れば、『直死の魔眼』を使っているようで、蒼色に変化している。
このような奴ら程度に、魔眼を使う必要はないと思うが、まあ、気にするほどではないか。

「そうだな。教えてやる、力の差を」

私もそういいながら、右腕だけを竜化させる。
竜族にしては、比較的白く、人間と大差なかった腕が銀色の鱗に包まれ、鋭利な爪が生える。
右腕の骨格も変化し、右腕だけは完全に竜となっている。

完全竜化を使えるようになったとき、部分竜化だけを使えるようになったのだが、使うときが余りないからな。
ちょうど良いから使わせてもらおう。
武装集団はザッと見て五十人程度、一分なくとも十分に倒せる数だな。

「やっちまえぇぇえええ――ッ！！！」
「「「「「「オォォオオオオ――――――ッ！！！」」」」」」

武装集団筆頭がそう叫ぶと同時に私たちに向かって魔法やら、銃弾やらが放たれた。
さらにはそれの後方から、近距離戦闘専門らしき輩共が、こちらに迫ってくるのが見える。
どうやらある程度は統率が取れているみたいではあるが、所詮は烏合の衆。
その程度では、私達に傷を付けるどころか、触れることすら出来ん。

「にゃ――――ッ！！？？　し、シキ、どうにかするのじゃ――――ッ！！！」
「分かってるよ。そんなに焦んなくても、大丈夫だから安心しろ、な？」
「――――ッ！？　わ、分かってるのじゃ！！」

私がテオを安心させるために、笑みを向けながらそう言ったのだが、なぜか顔を赤くされてしまった。
しかもそっぽも向かれてしまったし……どうしたものか。
とりあえず考えるのはあとにして、今はこれらをどうにかしよう。

私はそう思いながら竜化させた右腕を横凪に振るう。
すると爆風が吹き荒れ、こちらに放たれてきた魔法やら銃弾が、全て消え去る。
跳ね返したのではなく、消し去ったのだ。重要だから二回言わせてもらった。

「なっ！？　そんなバカ――――」
「――――バカなのはお前だ」
「ぎゃあああっ！？」

私がやったことに驚愕している間に、ティアがその兵士の死の線をなぞり、その部分を『殺す』。
どうやらティアも、私に勝るとも劣らない甘ちゃんのようで、『生命の命』を奪わないまでも『戦いの命』を奪うことしか出来ないようだ。
しかもティアもかなり腕を上げたようで、動きが滑らかになっているな。

「遅いよ、ハエが止まってるみたいだ」
「どうでも良いが、遊ぶのは止めておけ。敵に情けをかけろとは言わないがな」
「分かってるよ。大丈夫、すぐに終わらせる」

ティアがそういった瞬間、先程までの動きとは全く違い、目にも

留まらない早さで死の線をなぞっていく。
やれやれ、コレでは私の出番がまるでないではないか。
そう思っている間に、後ろから襲われるパターンもあるのだが、生憎とティアにそんな斬り漏らしはなく、完全に出番がない。

「す、スゴいの……。あ奴は何なのじゃ……？」

そんなコトを考えていると、私の隣にいるテオが、そんなコトを呟いていた。
確かに戦場を知らない姫様からしたら、ティアの動きは映画の中みたいなモノだからな。
ちなみにこちらの映画は旧世界のものより、数倍凄まじいアクションだ。

「通称『殺人姫』。相手の戦意を、戦う力を『殺す』、戦場を舞う姫、かな？」
「『殺人姫』か……う～む、妾も聞いたことがあるが、本当にあの者なのか？　見たところ妾より少し年上にしか見えぬのじゃが……」
「見た目だけで一応成人してるよ。長命種だからまだ成人してるかどうか微妙だけどな」
「そうじゃったのか……。じゃが胸の大きさは妾と大して変わらんな！！」

戦いの中だと言うのにも関わらず、呑気に胸談義を始めるテオ。
確かにどちらの胸の大きさは大差ないが、ティアより年下のテオはまだまだ成長するからな。
ティアよりは大きくなるだろう。なんだかそんな気がする。

「良いんだよ。貧乳は希少価値だ、ステータスなんだよ。だいたい、そんな脂肪の塊、あっても邪魔だろ？」

「妾にそんなコト言われても困るのじゃ……。いうならアリカにするのじゃ……」
「確かにあっちの姫さんは巨乳だったな。全然悔しくないけど」
そういうティアは本当に悔しくないようで、目の前の敵を片していく。
あいつは生粋の武人なんだろう。そう言ったことには興味がないようだ。
「ん？　アレは……」
そんな会話をしながら、蟻のように湧き出てくる武装集団を倒していくこと数分後、突如として別の武装集団が現れた。
アレは帝国の正規兵の銃騎士隊か？
そして銃騎士隊は駆けつけると同時に、私たちを取り囲んでいた武装集団を倒していき、数分後には完全に制圧しきっていた。
「久しぶりだな。銃騎士隊の諸君。さて、君達の目的は武装集団の捕縛か、それとも私の捕縛かね？」
私はナイフをホルダーに収めるティアを横目で見ながら、銃騎士隊に向かってそう訊ねる。
もしティアが臨戦態勢になったら止めるつもりだったが、どうやら杞憂に終わったようだな。
そして、私の言葉に答えるためか、銃騎士隊の後ろから、ライフルを携えているエルが現れた。
「……違う。迎えに、来た」
「そうか。お前は俺を信用してくれるのか？」
「……（コクン）」

エルは私の問いに一回だけ首を盾に動かして頷く。
他の銃騎士隊のメンバーもエルと同意見のようで、武器を構えるどころか、戦いが終わってすっかりだらけてしまっている。
戦場で気を抜くなとアレだけ言ったというのに……まあ、今回は見逃してやるか。
そんなやりとりを終えると、ティアがエルに話しかけた。

「久しぶり、エル。随分たくましくなっちまって……。元気だったか？」
「……うん。ティアも、元気？」
「あぁ、元気さ。暴れたりないくらいだ」

私は出会った旧友二人の会話を微笑ましく思いながら、宮殿に向かって銃騎士隊と共に歩き出す。
一応は指名手配されている身。銃騎士隊に捕縛されたと見せるために、一緒に歩いていたのだが、無意味だったようだな。
なぜなら戻ってくると同時に、おかえり、などの声をかけられたからな。

どうやら私が思っている以上に、皆が私を信頼してくれていたようだ。
ここまで信頼されているとは……私も嬉しい限りだ。

「久々じゃのぅ。なんだか懐かしい感じじゃな」
「久々、って言っても一ヶ月も経ってないけどな」
「一カ月も帝国（ここ）に居ないなど初めてじゃ。今にして思えば、有意義な旅じゃった」
「結構疲れてたように見えたが？」
「初めてじゃから仕方ないのじゃ！！」

頬を膨らませて、私にそう言ってくるテオに適当に相づちを打ちながら、宮殿に向かって歩く。
確かに宮殿育ちの姫様にとって、私との小旅行は楽しいものだったのかもしれないな。
皇女などという身分を忘れ、年相応に見合った遊びをする。そのときのテオの笑顔は輝いていた。

もし、あの小旅行がテオの思い出になってくれるなら、私としても嬉しい限りだ。
そんなコトを思いながら、歩くこと数分後。ようやく宮殿に到着することが出来た。
久しぶりにみたが、相も変わらず宮殿は大きく、見上げなければその全てを見ることは出来ない。

宮殿に到着すると、銃騎士隊のメンバーは役目を終えたとばかりに、自らの寮に帰って行く。
それを見届けた私とテオ、ティアはとりあえず玉座の間、つまりテオの部屋に向かう。
おそらくその部屋に皇女不在の帝国を纏めてくれていた女性が居るだろう。

そう考えながらテオの部屋に歩いていくが、やはりすれ違う皆がおかえり、と言ってくる。
この様子だと、会ったときに今まで何をしてたんだ、と怒鳴られそうだな。
私がそんなコトを考えているうちに、テオの部屋に着いていたようだ。
扉に手をかけ、一気に開け放つ。するとそこには、事務仕事をしているシアさんの姿があった。

「今まで何してたんですか！！　こちらは大変だったんですよ！？　テオさんが居なくなったやら、シキさんが指名手配になったやらで！！」
「近い！！　近いのじゃシア！？」
予想通りテオに怒鳴りかかったシアさんだったのだが、その近さは予想外に近かった。
よほどご立腹なのか、百戦錬磨となったティアもビックリな威圧感だ。
正直ギャグパートではこの人に勝てる者は居ないと私は思う。
「近いじゃありません！！　全く……。おかえりなさい、テオさん、シキさん」
しかしそんなシアさんも、テオを心配しての一言だ。
そういったあとに、シアさんはテオを抱きしめた。
「帰ってきたばっかりで悪いんだけど、話があるんだ」
「なんでしょうか？　安心してください。帝国にはシキさんが人攫いなどと思っている人は、誰も居ません」
「ありがとう。じゃあ早速本題に入らせてもらう。実は――」
そして私はシアさんに、今まであったことを全て話した。
私がテオとアリカを交渉場からさらったのは、二人を助けるためだったと言うこと。
私と同じように指名手配になった『紅き翼（アラルブラ）』も、実際は指名手配になるようなことはやっていないことを。
本当の敵が『完全なる世界』とかいう組織だと言うことを。

「つまりはこの戦争を裏で操っている『完全なる世界』を倒すために、『紅き翼』が動いている、と言うことですか？」
「あぁ、そのために帝国も『紅き翼』に協力してほしい。出来なくともあいつ等は敵でないことを、帝国内で回してほしいんだ」
「……分かりました。ですが頭の固い老人方の説得は難しいので、協力は余り期待しないでもらえると、ありがたいのですが……」
「あの老人共（クソジジィ）は確かにアレだからな……。分かった。それだけでも十分だ」

あの老人共（クソジジィ）に何を言っても無駄なのは分かってるし、『紅き翼』と敵対しないように説得するだけでも、快挙もんだ。
よし、とりあえず帝国の説得はシアさんに何とかしてもらうとして、あとはアリアドネーだな。
あっちは敵対してないはずだから、協力を仰ぐだけで十分か。

それにアリアドネーの方は上層部に知り合いが二人も居るし、そのうちの一人は最高権力者だ。
そいつさえ私の話に応じてくれれば、アリアドネーは協力体制にあるも同然だ。
応じてくれるかどうかはまだ分からぬが、ポジティブに考えることにしよう。

「さて、と。そろそろ俺は次に向かうとするか。善は急げってな」
「うむ、そうじゃな。早速向かうとしよう」
「いや、お前は帝国（ここ）に居ろよ」
「え……っ？」

なんだ、その『嘘、だろ……っ！？』みたいな表情は。
当たり前であろう。私がここに来た理由は協力を仰ぐと同時に、テオを帝国に帰還させること。

それを達成した今、わざわざ連れて行くはずも無かろう。

「何故じゃ！？　妾も行くぞ！！」

「あのね、俺はテオをここに戻しに来たんだ。だいたい、俺についてきたら危ないぞ？」

「大丈夫じゃ！！　シキが守ってくれるからの！！」

……思いっきり人任せ、もとい竜人任せですか……。

確かに私と居れば危険になる、と言うことはなくなるが、それでも皇女を連れ回すわけにはいかない。

一番の理由がシアさんの眼が怖いからなのだが……そんなことはとてもではないが口に出せん。

「ダメだ。俺は居なくても大丈夫だが、テオはこの国にとって大切な存在だ。ここに居なきゃダメなんだ」

「妾にとってシキはここに居なければダメいけない存在なのじゃ！！」

はぁ……。ダメだ、こういう目をした輩は一度言い出したら、絶対に言葉を曲げん。

こうなれば何かしらして、意見を変えてもらわねばならないのだが、どうすれば良いものか……。

時間がない、と言うわけではないが、いつ何が起こるか分からない以上、モタモタしている暇はない。

すると、テオは何か妙案でも思いついたかのように手を打ち、私に笑顔を向けながら言ってきた。

……この笑顔を見ても、嫌な予感しかしないのだが……。

「なら妾と仮契約（パクティオー）するのじゃ！！」

「ぶっ！？」

「仮契約（パクティオー）ですか……。シキさんなら私も賛成です」
「皇女と仮契約（パクティオー）したら結構良いアーティファクトでるんじゃないか？」

私が驚いているのを余所に、ティアとシアさんは勝手に話を進めている。
ちょっと待ってもらいたい。いくらこの願いばかりは聞けないな。
傭兵崩れの私と皇女であるテオの仮契約（パクティオー）など、いろいろ問題がある。

身分的な問題もあるし、第一に私は接吻（キス）をしたことがないのだ。
その一番最初の相手が皇女となると、さすがの私も緊張せざるを得ない。
その前に皇女とキスなどしたら、責任をとらなければ……そうか。
キスなどやらなければよいのだ。

「じゃあオレたちは外に出てるよ。見られてるとやりづらいだろ？」
「妙な気を使わんで良い」
「ははっ、そうか？」

ティアはイタズラじみた笑みを浮かべながら、テオの部屋からシアさんと共に退室していく。
二人だけとなった部屋にて沈黙だけが続く。
改めて考えてみると仮契約（パクティオー）は神聖なものであり、軽はずみにしては良いものではない。
と言うこともあるのだが、おそらくは恥ずかしいのだろう。私も恥ずかしい。
そんな沈黙を打ち破ったのは、私ではなくテオだった。

「そ、その……妾も初めてじゃから……その……優しく、の……？」

そういったテオの顔は普段は肌が褐色のために、赤くなったかが余り分からないのだが、今は分かる。
真っ赤すぎて分からない方がおかしいと言われるほどだ。
眼を閉じて、私がキスをするのを待つ体勢になっている。

……別に仮契約（パクティオー）はキスだけがやり方ではないのだが、コレはやらねばならないのか……？
ふむ……この状況下で違うやり方をやったら、テオを傷つけてしまうやもしれん……。
こうなれば自棄（ヤケ）だ。どうにでもなるが良い。

私はテオと高さを合わせるようにしゃがみながら、仮契約（パクティオー）の簡易魔法陣を創り出す。
緊張していたのか、肩を震わせているテオの唇に、私の唇を重ねる。

「ん……っ」

女の子特有の甘い匂いが私の鼻に漂い、テオの柔らかい唇の感覚が私の唇に伝わる。
唇を離そうとするのだが、テオが私の頭の後ろに手を回していたために、なかなか離れることが出来ない。
魔法陣が光り出し、一枚のカードが手元に現れる。

「ぷはっ……」

それをみたテオが、ようやく唇を離してくれた。
表情を見るがその表情は満足げな笑みと、恥ずかしさが混ざった表情になっている。

そんな風にされると私も恥ずかしいのだが、まあ、ポーカーフェイスを保つとしよう。

「これでシキは妾の従者じゃな！！　良いか？　妾に無断で怪我することは許さぬぞ？」

「了解した、我が主。我が翼と銃――アナタに預けよう」

「むぅ……この前のアリカとナギのやりとりの真似かの？　やられてみると案外恥ずかしいものじゃな……」

「そうか？　こっちとしては楽しいけどな」

私はそう言いながら仮契約（パクティオー）カードを二分割する。

絵柄は背後に銀の竜が描かれており、その前にデザートイーグルを構えている私が居る。

後ろの銀の竜は背景になっており、少々見づらいが、この竜も私だな。

「まあ、アレだ……。これで俺たちは主従関係だ。離れてても、繋がってる」

「……そうじゃな。シキ、我が儘を言って済まなかったの」

「なに、もう慣れてるさ。じゃあ、言ってくるよ」

私はそう言いながら、黒い外套の内ポケットに仮契約（パクティオー）カードを入れる。

まさかこのようなところで仮契約（パクティオー）などするとは思わなかったな……。

まあ、別に良いか。

第二十七撃『皇女の願い。キスだけが、契約のやり方ではない』（後書き）

コミック派の悲しいところで、真名の拾われたときの描写が全く分からん……。

ということで、大戦編が終わってもコミックが出ない場合は、番外編でお茶を濁したいと思います。

もしくは最近結構良いかもと思えてきた夕映で第四章、通称幼少編を進めるかもしれません。

以前にとったアンケートで、他にも意見があったので、それをやるかもしれません。

何にしても、幼少編で真名√をやるのは少し難しくなってしまいました……。

真名√を期待していた方に謝罪を申し上げます……。

感想待ってます！

この小説と全く関係ないのですが、活動報告にちょっとしたアンケート的なものがあるので、協力していただけると嬉しいッス……。

第二十八撃『アリアドネー到着。久し振りの義妹との対面』（前書き）

改稿いたしました。
内容にほとんど変更はありません。
あとがきにてお知らせがあります。
ではどうぞ！！

第二十八撃『アリアドネー到着。久し振りの義妹との対面』

狙撃手（シキ）と皇女（テオドラ）が仮契約（パクティオー）するため、玉座の間の外に出ていた殺人姫（ティア）は壁に寄りかかっていた。

ティアの服装は背中を大胆に開け、肩辺りまで袖がない。下は動きやすいように、機動性を重視されている。

シキが仮契約（パクティオー）を済ませた場合、次に彼らが向かうのは魔法学術都市アリアドネー。

アリアドネーは戦争には参加はしてないものの、指名手配を逃がすことはおそらくはしないだろう。

つまりはシキがアリアドネーに近づけば、アリアドネーの警備隊に見つかり、交戦する羽目になるかもしれない。

（さすがに一々説明するのは面倒だな……。連絡入れとくか）

ティアとしても『殺し』てはいけない相手と交戦となれば、魔眼を使用することは出来ない。

せいぜい警備隊の魔法を『殺す』ぐらいしか使える場面は限られてくる。

並の者より身体能力が高いとはいえ、彼女は魔法に関しては落ちこぼれだ。

魔法学院時代も攻撃呪文はほとんど使用することが出来なかったし、彼女の魔力量も一般的だ。

故に彼女は必然的に警備隊には歯が立たないことになる。

（よくよく考えてみると神格（ウリエル）も魔眼も無いオレって雑魚……？）

そんな考えに至ったティアは、片手で頭を抑えながら思わず苦笑してしまう。　実際はそれがなければ至って普通の女の子であるため、仕方がないといえば仕方がないのだ。
ただ、そこにガッカリしてしまうのが、ティアという人物だ。
魂の根本から彼女は生粋の武人なのだろう。

（とりあえずそれは置いといて……。確かアレが使えたはずだな……）

ティアがポケットから取り出したのは、一枚のカードのようなもの。
絵柄は旧世界の四聖獣を意識してあるのか、四体の聖獣が描かれている。裏には白虎の模様が描かれている。
コレは神格事件に関わった者にシキが送った神格の力で創られた通信機。
この通信機は世界の裏側、いや、魔法世界と旧世界であっても繋がるだろう。

（通信機（コレ）でシェリルさんにでも言っておくか……）

ティアはそう思いながら通信機を起動させる。
通信機の四聖獣の絵柄が光上がり、ノイズが入る。
ノイズがなくなると同時に、一人の女性の声が聞こえてきた。

――――魔法学術都市アリアドネー
ここは学ぼうとする意志・意欲を持つ者なら、例え死神でも魔王でも受け入れる都市だ。

どのような権力にも屈しない、世界最大の独立学術都市国家だ。
そこの魔法学院のとある部屋の一角に、その女性は居た。

まるで日本人のような艶やかな、背丈ほどもある髪を、黒髪をポニーテールに纏め、凛とした空気を放っている。
黒いロングコートを羽織り、腰には二メートルを越す野太刀を携えている。
その女性の名前をシェリル・アリウス。魔法世界・旧世界でも屈指の剣士だ。
現在は魔法学院の重役として、アリアドネーに滞在している。

（はぁ……。疲れますね、アリアドネーの重役と言うのも……）

そんなシェリルはため息混じりで、部屋の窓からアリアドネー全域を見渡しながら思う。
彼女は部屋で事務仕事などをするインドア派でなく、戦場に出向き刃を振るうアウトドア派。
重役になってしまった身で、そんなことが出来るはずもなく、最近はすこぶるストレスが溜まってきている。

重役なのだから仕方がないのだが、やはり動けないのはストレスが溜まるだろう。
そんな彼女のロングコートのポケットから、何か振動が伝わってきた。
ポケットに手を突っ込み、振動の震源が何かを確かめてみると、それはティアが持っていた通信機と同じ物だ。裏には青龍の模様が描かれている。

（ティアさん？　珍しいですね、彼女の方から私に通信をしてくるなんて……）

四聖獣の白虎の部分が点滅していることから、通信相手がティアだと言うことを判断する。
シェリルはそんなコトを思いながら、通信機を手に取り、通信に応答する。

「ティアさんの方から連絡するなんて珍しいですね。何かあったのですか？」
『あぁ、今からシキさんと一緒にそっちに行くんだが、警備隊にオレたちを攻撃しないように、伝えてもらえるか？』
「分かりました。遊びにでも来るのですか？」
『違うよ……。あんたなら、だいたい把握してるだろ？』

ティアの若干呆れたような声に、シェリルはそうですね、と若干笑いながら言う。
彼らが来る目的はシェリルもだいたいは把握している。
だからこそ、シェリルはティアの要求を簡単に呑む。

「分かりました。では、お待ちしています」
『あぁ。じゃあ、またあとで』

ティアの声はそこで途切れ、先ほどまっ発光していた白虎の部分が消える。
どうやら通信が途切れたようだ。
シェリルは通信機をロングコートのポケットに仕舞うと、ロングコートを翻して、部屋を出た。

すれ違う生徒達がシェリルに頭を下げてくるのに対し、シェリルも同じようにしながら、とある部屋に向かう。
部屋の扉には『ＹＵＲＩ・ＡＳＵＴＡＲＯＴＯ』の文字が刻まれ

た、板が下げられている。
戸を二回叩くと、シェリルは部屋の中に入る。
そこには赤い髪をそのままにし、事務仕事にあたっている竜人が居た。
名前をユーリ・アスタロト。狙撃手(シキ)の義妹であり、シェリルの弟子である剣士だ。
現在はアリアドネーでシェリル同様に重役となっている。
「あっ、シェリルさん？　どうしだの？」
「いえ、大した用事ではないのですが、警備隊にシキ君が来るので、攻撃しないように伝えてもらえますか？」
「えっ！？　シキ兄が来るの！？　今から！？」
「え、えぇ、あとティアさんも来るようですよ」
シェリルがユーリの義理の兄が来ることを言うと、ユーリは一瞬でシェリルに近づき、顔をずいっと近づけながら、そう言ってきた。
その目は無駄にキラキラしており、思わず顔を引きつらせてしまう。
ユーリがシキに対する愛情表現は、もはや兄妹のレベルを越えている。
「ティアちゃんも一緒かぁ～。じゃあ早く連絡しないとね！！」
「そ、そうですね……。頼みましたよ？」
シェリルは無駄にやる気なユーリをみて、若干引き気味になりながらも頼む。
何にしても、義兄(シキ)のためならばどこまでも頑張れる義妹(ユーリ)だった。

連絡を終えたティアは通信機をポケットにしまいながら、再び壁に体重を預ける。
アリアドネーにはティアにとって良い思い出も、悪い思い出もたくさん詰まっている。

（そういえば、ユーリと会うのも五年ぶりか……）

ユーリ、ティア、エルの三人は魔法学院を卒業してから、それぞれの道に進んだために、会っていなかった。
ユーリは魔法学院にて重役を務め、エルは自らを鍛えるために銃騎士隊に入隊した。
唯一ティアだけが何にも縛られてはいないが、その分危険度はグッと跳ね上がる。
どの道、それぞれがそれぞれの道を進んでいる。

（まっ、オレはオレの道を行く。後悔しないために……）

人知れず拳をギュッと握りしめるティア。
その表情には、二度と過ちを繰り返さんとする決意が表れている。
そして仮契約（パクティオー）を行っている玉座の間の扉が開いた。

（とりあえず今はからかうか……）

扉を開けて出てきた人物をみながら、ティアはニヤリとする。
今、彼女は自らの道を進んでいる。

◆　◆　◆　◆　◆

ｓｉｄｅ　シキ

「で、どうだったよ。皇女様のく・ち・び・る・は？」
「……」

私がテオの部屋から出ると、ニヤニヤとしたティアが私にそう訊ねてきた。
こいつ……完全に私をからかう気満々ではないか。
もう待っている間に、どういう風にからかおうか考えて考えて、私がどう切り返しても、からかえるようにしているのだな。

そういえば今では随分と本心で接するようになったが、イタズラ好きな性格は変わらないのだったな。
はてさて、どのように私は切り返せば、逆にティアをからかうことが出来るか……。
分からないからとりあえず受け身でいこう。それしかない、うん。

「どうだった？　美味かったか？」
「あぁ、とても美味かった。で、それがどうかしたか？」
「あ……。何だよ、意外とあっさりしてるな」

ビンゴ。コレがどうやら上手く受け流す、最良の手だてだったようだな。
それにしても、後ろではテオが顔を真っ赤にして手で顔を覆って居るではないか。
全く……私をからかおうとして、テオをからかってどうする気なのだ。

とりあえず私の人生において初の仮契約（キス）を終えたところで、世界の何かが変わるわけではない。
呆けていないで、早くアリアドネーに向かうべきかもしれんな。

ここからアリアドネーに向かうとしても、数日はかかるかもしれないからな。

私一人ならばすぐにでもアリアドネーに着くことも可能だが、今のティアは魔眼持ちとはいえ至って普通の女の子だ。

私の移動速度についてくるのは難しいを通り越して、不可能のレベルに達しているからな。

転移型の旧魔法が使えれば良かったのだが、生憎と所持していないようで、使えなかったからな。

「とりあえずシェリルに連絡入れとかないとな」

「あぁ、それならオレがやっといたよ」

私が黒い外套のポケットから通信機を取りだそうとして、ティアにそう言われた。

何やらティアは私たちがテオの部屋で仮契約（パクティオー）している間に、シェリルに連絡を入れていたようだ。

なるほど、からかうことだけでなく、そう言う気遣いもしてくれていたのか。

全く、たまには良いことをしてくれるではないか。

「シキさん……オレがたまにしか良いことしてくれないとか考えてないよな？」

「そんなコト考えてねェよ」

何回も思うのだが、なぜ女性というのは『地の文読み』が意図も簡単に使えるのだろうか……。

こうも自らの思考が読まれているのを見ると、もはや無意識に話しているのではないかと思ってしまうな。

まあ、今は自分に都合が悪いことだけ聞こえる技、ということに

しよう。
そうとでもしなければ、この技の説明が出来んからな。

「じゃあ、早速向かうとするか。あっちの方も早い方が良いだろうしな」
「そうだな。でさ、思ったんだけど、なんでシキさんは『紅き翼』に協力してるんだ？」
「なんで、って聞かれてもな。仕方ねェからやってんだよ」

私の大切な者に危害が及ばないというならば、こんなコトをする義理はないのだが、生憎と世界を巻き込みかねない事態だ。
さすがに今回ばかりは協力せずにはいられないのだよ。
私一人でも出来ることは限られてくるのでな。

「話は終わりにして、行くぞ、ティア」
「あぁ。オレを置いてくなよ？」
「善処する」

私達はこんなやりとりを行ったあとに、アリアドネーに向かうために、帝国を飛び出したのだった。

◆　◆　◆　◆　◆

二日後、私たちはようやくアリアドネーに到着することが出来た。
今回は以前のように認知阻害を使わないでではなく、しっかりと認知阻害を使ってアリアドネーに来ていた。
前のように武装集団に襲われては適わないのでな。

私は認知阻害を付与したメガネ、ティアは認知阻害を付与した赤いジャケットだ。

なぜ赤いジャケットにしたかと言えば、もちろんティアが『両儀式』に激似だからだ。
どうせならこうした方が良いと思ったんだが、生憎と今のティアの服装は『カナン』と同じ物だった。
まあ、どちらとも顔が似ているから、ちょうど良かったんだがな。

「シキさん、そろそろ認知阻害を取っても大丈夫だろ？」
「そうだな。さすがにここに入ってくるバカは居ないな」

現在、私達が居る場所はアリアドネー魔法学院の門の前。
さすがにここに武装集団が入ってきたら、アリアドネーの警備隊に取り押さえられるだろうからな。
そんなコトを思いながら私は認知阻害のメガネを外し、ティアはジャケットを脱ぐ。

「来たは良いんだが、勝手に入っちまっても良いのか？」
「あー……オレなら卒業生ってことで大丈夫だとは思うが、シキさんは無理かもな」
「だよな？　仕方ねェ、シェリルに連絡して迎えに来てもらうか？」

私はそういいながら、黒い外套から通信機を取りだそうとしたのだが……なんだ、この気配は……。
今まで良く近くで感じていたんだが、最近では余り感じなくなった気配……。
殺気や敵意と言った類ではないのだが、アレだ……妙に危険の香りがプンプンと臭ってくる気配だ。
周りを見渡すが、それらしき姿は見あたらないし、まさか気のせいだとでも言うのか……。

「シキ兄――――――――――――――ッ！！！」

「うぼぉ――――――――――――――――ッ！！？」

そんなコトを考えていると、聞き慣れた声と共に、私の腹部に物凄い衝撃が来た。

さすがにコレだけの衝撃に、完全に気を抜いていたときにやられたために、私は思いっきり吹っ飛ばされた。

しかも転んでしまった衝撃で、頭まで床にぶつけてしまったではないか。

まあ、とりあえずこのアリアドネーで、私にこのようなことをしてくる輩は、一人しか居ない。

だいたいは声で察しがついていたんだが、そこは気にしたら負けだ。

「ユーリ……前にもいきなり来たら危ないって言わなかったか？」

「大丈夫だよ。だって、シキ兄ちゃんと受け止めてくれるでしょ？」

「前も聞いたよ、そのセリフ」

私は私を押し倒す形で乗っかりながら、えへへ、と嬉しげに笑っている義妹のユーリにそう言う。

あの感じたことがあるが、妙な気配と言うのが、ユーリだと言うことには、なんとなく納得できるな。

とりあえず私の上に乗っかっているユーリを退かして、外套についた汚れを払いながら立ち上がる。

「久しぶりだな、ユーリ。五年ぶりくらいか？」

「そうだよ？　シキ兄は全然変わんないね！！」

「そうかな？　自分では分からないけどな」

「変わらないよ。ねえ、僕は変わったでしょ？」

ユーリはそういいながら、その場でクルクルと回る。
変わったでしょ、って聞かれてもドコが変わったかなんてさっぱり分からんな。
ふむ……身長か？　いや、身長が変わったからといって、わざわざ報告するほどもう子供ではないはずだな。
はて、何が変わったのやら全く分からんな。

「うぅ……ティアちゃん、シキ兄は相変わらず鈍感だよ……」
「ま、まあ、あれがシキさんだからさ。仕方ないんじゃないか？」

ティアに泣きついたユーリはなかなかに失礼なことを言っているが、ティアもなかなかに失礼なことを言っているな。
まあ、なんにしても、五年が経った今でも変わってないようで良かったかな。
性格がひん曲がっていたりしたら、どうしようかと思ったな。

そんなコトを考えていると、後ろからカツカツという足音が聞こえてきた。
振り向いてみればそこには、黒いロングコートを羽織り胸以外の場所を出しており、Gパンのようなようなものを穿いている女性、シェリルが居た。
腰には二メートルを越す太刀が携えられている。雰囲気だけにすれば、触れれば斬れてしまいそうな雰囲気を醸し出している。

「お久しぶりです、シキ君。元気そうで何よりです」
「そう言うシェリルも元気そうだな。つーかまた一段と強くなったんじゃねェか？」
「あの事件以来自分の未熟さを知らされましたのでね。少しばかり鍛え直しました」

少しばかりって……。前にあったときの雰囲気と、今の雰囲気じゃ、全くの別物だぞ。
堅物シェリルのことだから、自分の実力に納得がいかなかったんだろうな。
というか、変わったのは強さだけじゃなくて、服装もだな。
前ほどではないが、なかなかに露出度が高いな。しかも格好良くなっているし。
ただでさえシェリルは、長命種で歳を偽っているような物なのに、このような格好をしたら、さらに男共を虜にしてしまうのではないか？
まあ、さらに近寄りがたくなっているために、無意味なのだがな……。

「とりあえずここに来た理由を話すが、良いか？」
「構いませんよ？　だいたいは察しがついていますが」

私は後ろで話に花を咲かせているティアとユーリを、横目で見ながら、帝国でも説明したことを、シェリルに説明した。
すると、どうやらシェリルも独自捜査でそこまでの考えには至っていたらしく、あとは敵の本拠地を探すだけらしい。
動くことが出来ない身分で、良くそこまで捜査することが出来たものだな。

「要するに『紅き翼』に協力すれば良いのですね？」
「あぁ。頼めるか？」
「もちろんです。ところでコレからどうするのですか？」
「コレから？」

そういえば帝国とアリアドネーにこのことを伝えることばかり考

えていて、そのあとのコトをまるで考えていなかったな。
まあ、やることといったら敵の本拠地を見つけだすか、銃騎士隊を鍛えることぐらいしか無いからな。
他には依頼を受けてこなすなどがあるが、『指名手配のシキ』としては依頼が来るが、『無名のシキ』では余り依頼が来ないからな……。

……ってなぜ私はこのように戦闘関係の思考しか出来ないのだ？
もう少し娯楽方面に考えて……全く思いつかん。
前にも思ったが、休日の休み方を忘れるなど、普通は有り得ないのではないか？
いくら日常が戦闘尽くしだったからとはいえ、さすがにコレは無いだろ……。

「無いのでしたら、ここに居ると言うのはどうですか？」
「あのな、女だらけの場所に俺が居たら不自然だろ？」
「五年前もそうだったのですから問題ありません」

いや、五年前とは状況が何もかもが違うだろう……。
五年前は神格事件のために何やかんやで、アリアドネーに滞在する事になったが、今はとどまる理由は何一つ存在していない。
むしろ調査のために、様々な場所に出向いた方が効率が良いはずだがな。

「ちなみにオレはしばらくここに居るぜ？　久しぶりにユーリと話したいからな」
「うん！！　シキ兄もここに居ようよ！！」

楽しげに話していた二人が、不意に私にそのようなことを言ってきた。

ティアは指名手配にも何もなってはいないし、卒業生・ユーリの親友ってコトで居ても問題はあるまい。
とはいえ、『紅き翼』も動いてはいるし、私まで動く必要はないかもしれないな。

「分かった。しばらくはこっちにいるよ」
「やった！！　じゃあシキ兄、僕の部屋に来てよ！！」
「分かった、分かったから引っ張るな」

私の右腕にユーリは抱きつきながら、私を自らの部屋に連れて行くために、歩き出した。
決して右腕に当たる柔らかい二つの何かを、堪能しているわけではないからな。
というかシェリルにティア。そのように微笑ましい顔で私を見ないでもらいたい。

それに、ユーリの部屋に向かう途中で魔法学院の生徒たちと擦れ違うのだが、皆がこちらを振り向いていくな。
コレは私がユーリ一緒に居るからなのか、それともユーリが私に抱きついているからなのか……。
はたまたユーリのギャップがあったからなのか、重役が二人も揃って私たちと一緒に居るからなのか……全ては生徒のみぞ知ることだ。

そんなこんなでようやくユーリの部屋に到着。
扉を開けて中を見てみれば、なかなかに豪華な造りをしており、尚且つ書類仕事を快適に行う造りになっていた。
そんな部屋を見渡していると、なぜかユーリがもじもじしながら、何かを言いたそうにしていた。

「そんなにもじもじして……どうしたんだよ？」
「えっと……あのね？　そのぉ……ちょっと、訊きたいことがあるんだけど……」
「なんだ？　言ってみろよ」

言葉に連動するかのようにユーリの足がつつつーっと円を書く。
手を後ろに組み、わずかに褐色に染まった頬にも、赤みが差しているように見える。
何をそこまでもじもじしているかは分からんが、兄妹であるのだから、そこまで恥ずかしがることではないと思うのだがな。

「その、テオドラ皇女と……仮契約（パクティオー）したってホント！？」
「ぶ――――――――――――――――ッ！！？」

な、何故ユーリが私が仮契約（パクティオー）したことを知っているのだ！？　しかも相手まで明確に！？
待て待て落ちけつ……じゃない、落ち付けだ。仮契約（パクティオー）のことを知ってるのは、私とテオ、シアさんとティア。
……ん？　ティア？　まさかとは思うが、ティアではないだろうな……。

私はそう思いながら、後ろに待機しているティアの方を向く。
するとこちらに親指を立ててサムズアップしている、満足感に満たされた笑みを向けているティアが居た。
き、貴様かァ――――――――――――――――ッッッ！！！

「シキ兄、僕とも仮契約（パクティオー）して」

そんなコトを考えているうちにユーリが私の眼前に迫ってきていた。

身長が足りない分は背伸びをして、何とかしようとしているのが可愛らしく感じてしまう。
……って違う！！　今はそのようなことを考えている場合ではないだろう！！

「いや、ちょっと待て早まるでない。私たちは仮にも兄妹だろう？」
「なんで……？　知り合ったばかりのテオドラ皇女とは出来て、僕とは出来ないの……？」
「うっ……是非ともやらせてもらいます……」

極度の義妹主義者（ユーリ）である私が、泣き顔＋上目遣いのコンボに勝てるわけがない……。
そこ、流れに流されたとか、女に弱いとか言わないで来れ。自分でも理解しているから……。
私がそんなコトを考えている間に、ユーリがサクサクと仮契約（パクティオー）の簡易魔法陣を創っている。

「緊張するね？」
「そうですねー」

半ば強制的な仮契約（パクティオー）に緊張も糞も有るわけがない。
まあ、二回目だということもあるかもしれないが、まさかこんな近い時期に二回も仮契約（パクティオー）する事になろうとは……。
そんなコトを考えているうちに、ユーリが目をつむりキスを待つ体勢になっていた。
自分から言っておいて私に任せるのか……。まあ、良いか。

「ん……っ」

とりあえず私は答えるために、ユーリの唇に自らの唇を重ねる。

妙に甘い声を出しているが私は何も疚しいことはしていないし、甘声出し過ぎのためにカット。

唇を話したあとに、魔法陣が光り、私の手に一枚のカードが現れる。

私が主人でユーリが従者の形だから、コレはユーリのアーティファクトか。

仮契約（パクティオー）カードを二分割したあとに、ユーリにカードを渡す。

「仮契約（パクティオー）成立だ。これで満足したか？」

「うん！！　これからもよろしくね、シキ兄！！」

「あぁ、よろしくな」

私は天真爛漫な笑みを浮かべているユーリの頭をなでながら、そう言う。

後ろでティアがニヤニヤしているが、どうしてくれようか……。

そんな黒い考えを抱きながら、拳を握りしめた。

第二十八撃『アリアドネー到着。久し振りの義妹との対面』（後書き）

４月２９日現在、只今大戦編、紅き翼京都編の執筆を既に終了し、真名編の執筆に取りかかっております。

ただ、今から謝罪をいれておきますが、もしもマガジンで真名の生い立ちが描写されたならば、それを無視してお送りいたします。

これがコミック派の悲しいところ……。

大まかな感じでは紛争地域にマナが倒れてる

↓シキがマナを保護

↓マナ、シキに弟子入り

↓修業して魔改造される恐れあり（予定）

↓麻帆良入りとなります。

少々ネタバレになってしまいましたが、原作とかけ離れていても、生暖かい目で見守ってください。

では、長々と失礼しました。

大戦編が終わったら、番外編も挟もうかと思ってるのですが、この中で良いのありますか……？

1、魔法少女リリカルなのはにトリップ（時期は未だに決定せず）

2、ゼロの使い魔でルイズに召還される。（原作破壊出来るかな？）

3、トリップ&召還なしで、サーヴァントの誰かを召還してコメディー

（誰を召還するかは未だに決定せず。『ｓｔａｙ／ｎｉｇｈｔ』・『Ｅｘｔｒａ』問わず。『ｚｅｒｏ』は分かりません）

4、真・恋姫無双の世界でハーレムウハウハ……にはしませんが（勢力未だに決定せず）

5、番外編？　んなもんやってねーで本編やれよゴラァッ！！

→の五つから意見があればお願いします！！

第二十九撃『決戦前夜。本当に明日は世界の命運をかけた日なのか？』（前書き）

ネギま！のドラマＣＤを参考にしています。
では、どうぞッ！！

第二十九撃『決戦前夜。本当に明日は世界の命運をかけた日なのか？』

ｓｉｄｅ　シキ

二回目の仮契約（パクティオー）を行った日から、既に数ヶ月の月日が経過しようとしていた。
先に謝らせてもらう。毎度のことだが時間が飛んでしまい誠に済まない。
なんせ特別に語ることが存在せず、軽く纏められるような毎日だったものでな。

とにかく数ヶ月の月日が経過し、既に私はアリアドネーには滞在しておらず、各地を転々としていた。
もちろん指名手配であることは忘れていないために、認知阻害を使ったメガネをつけている。
あぁ、『紅き翼』やユーリやティアと言った昔からの知り合いからは、ただメガネを掛けているだけにしか、見えないようにしている。

そしてある日、余りにも暇だったので、とある辺境の村にて以来を受けてそれを達成するために動いていた。
……のだが、指定場所に向かったところで、一人の少年と出会った。
確かこ奴は『紅き翼』のガトウとかいう渋いオッサンの隣にいた、タカミチとかいうガキだったな。

「ようやく見つけました、シキさん！！」
「見つけた？　私を捜していたのか？」

「はい！！　遂に敵の本拠地が判明したので、お伝えに来ました」
ほぉ……遂に『完全なる世界』の本拠地を突き止めることが出来たのか。
それに、認知阻害を使っていて私の発見情報が無いにも関わらず、私を見つけだすとはなかなかだな。
そういえば最近では『紅き翼』も、徐々に仲間を増やしてきたと聞いたな。

「で、場所はドコだ。私も一緒に向かうとする」
「はい、場所は――――」

タカミチに告げられた場所を聞いて、私は思わず納得してしまった。
世界最古の都・王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』が、奴らの本拠地のようだ。
オスティアの上層部が、この戦いで一番黒いと調査で出ているし、本拠地がオスティア関係の場所であっても間違いはないな。

さすがにそこまでは、神騎兵の調査も手が出せなかったな。
敵の本拠地も分かったことだし、あとは潰すだけでこの戦争は終わりだ。
私に本拠地が知られた時点で、『完全なる世界』は既に詰んでいるんだよ。

「タカミチ、今から超特急で『紅き翼』の所に向かう。場所を教えろ」
「分かりました。ってうわわわっ！？」

私はそういいながら、タカミチを背負ったんだが、そこまで驚く

必要はないだろ。
　別におんぶなど恥ずかしがるようなことではないし、この方が早く進むことが出来る。

「なんだ？　あぁ、そうだ。移動最中は私を絶対に離すなよ？　死にたいなら別だがな」
「えっ？　どうしてですうわぁ――――――――――――――ッ！！？
」

　私はタカミチが何かを話そうとしていたが、理由を説明するよりも、実際に体験させた方が良いだろう。
　そう思った私は一気に踏み出して、虚空瞬動で移動を開始する。
　私の虚空瞬動は有り余る氣のおかげで時速五百キロ程になっているからな。

　敵の本拠地がオスティアって分かっているのだから、『紅き翼』もオスティアに居るのか？
　この速さだからタカミチも口を開く余裕など無いだろうし、違ったら違ったでまた移動すれば良いからな。
　そんなコトを考えながら移動していると、私の視線の先にオスティアが見えてきた。

　眼を強化して周りを見渡すと分かりやすい赤毛の鳥頭と筋肉達磨が見えた。
　どうやら場所は間違ってなかったらしく、オスティアが正解だったようだな。
　私はタカミチを背負いながら、『紅き翼』の元に着地する。

「久しぶりだな、『紅き翼』」
「おう、久しぶりだな。ところで、なんでタカミチの奴、気絶して

んだ？」

ナギが私の背中に居るタカミチを指差しながら、そう言ってきた。

なので私はタカミチを掴み、前に持ってきたのだが、ナギのいうとおりタカミチは目を回して気絶していた。

全く……これしきのコトで気絶するとは、まだまだ修業が足りていない証拠だな。

私はガトウにタカミチを預けて、とりあえず気になったことを訊ねる。

「アリカはどうした？　お前らと一緒ではなかったのか？」

「姫さん？　姫さんなら、明日のためにもう寝たよ」

「明日は敵の本拠地に殴り込みだからな」

ナギの話によれば本格的に『墓守り人の宮殿』に乗り込むのは明日らしい。

なにやら連合軍の正規の兵の説得が終わってないらしく、タイムリミットも明日のために、決戦は明日になったらしい。

確かに帝国もアリアドネーにも、私が説得しているから、いつでも戦いに参加できるからな。

で、明日に備えてオスティア名物の温泉に向かうことになったらしいのだが、この様なときに温泉とは……呑気なものだな。

と言うか、魔法世界にも温泉というのはあったのだな。日本だけだと思っていたな。

コレだけを聞くならば、明日に呼んでもらっても良いと思ったのだが、何やらジャックが私にも温泉に入ってもらいたかったらしい。

「じゃあ、行こうぜ！！」

「……」

以前は敵対していたというのに、何故このように友好的なのだ。
あの詠春ですらも私に完全に気を許しているではないか。
もしやとは思うが、私がアリカを助けたから、という理由で気を許したわけではあるまいな？
そうだったならば甘い……甘すぎるぞ、『紅き翼』。そんなコトでは、いつ私に背中を撃ち抜かれるか、分かったものではないな。

……まあ、撃ち抜く気など毛頭無いのだがな。
とりあえず私も元日本人。温泉に入りたいと思うのはもはや本能。
ここはナギの言葉に甘えさせてもらうとするか。そう思った私は、後ろをついていった。

◆◆◆◆◆

こうしてやってきました、オスティア名物のオスティア温泉。
名物となるぐらいだから、どのくらいスゴいのかと思ったのだが、コレはスゴいな。
広さだけでなく、効能・内備施設などが充実しており、一粒で二度おいしいとはこのことだな。

温泉でリラックスしたあとに、内備施設で娯楽を楽しむ。日本の温泉施設と変わらないな。
と言うかナギは熱いのが苦手だったようで熱い熱いと連呼している。
熱いのが苦手なら入らなければ良いものを……。

で、私は温泉に浸かっていたのだが、何故か『紅き翼』一部から凝視されていた。
正直男だらけのこの場所で、男に凝視されることほど、嫌なこと

は無いな。
何故こ奴らは私をこのように凝視してくるのだ、気持ち悪い。

「お、お前、シキ……だよな？　シキで間違いないんだよな？」
「当たり前だ。正真正銘シキ・K（クロカミ）・アスタロトだ。他に誰がいる？」
「だ、だよな？　あは、あははは……」

何をそのように訊ねる必要があるのだ。
このオスティア温泉は、貸し切りのように私たち以外に誰も居ない。
見慣れている『紅き翼』のメンバーを除けば私しか居ないというのに、何を訊ねる必要があるのだ。
私がそんなコトを考えていると、まるで私の心を見透かしたように、ゼクトが言ってきた。

「髪型を変えたお主は女にしか見えないようでな。照れているのじゃろ」
「あー……だいたい理解した」

今まで余り女に間違われることが無かったのは、服装と髪型から男と判断されていたからだ。
私の顔立ちはどうやら中性的な顔立ちらしい（テオにそういわれた）。
故に温泉に入ってるために服は着ておらず、髪もほどいているために女にしか見えないのだな。

まさか今になって、このネタを引き出されることになるとは思わなかったが、顔立ちは変わってなかったからな。
間違われて不快感とかはないのだが、だからといって凝視するのは止めてもらいたい。気持ち悪いから。

「そうだ……。ナギ、あんちょこは止めたのか？」
「熱っちぃ……。ん？　おぉ、止めたぜ？　それにあん時より強くなった。どうだ？　勝負しないか？」
「遠慮しておく。だいたい、体を癒すためにここに来たのに、戦っては意味がないだろ？」
「うっ……そ、そうだった」

魔力や身体能力は私みたいな邪道を抜かせば、最強だというのに、頭は痛い子のようだな。
まあ、私のあの言葉を気にしてあんちょこを止めたならば、持っているバグに頼らず、努力をしたということだな。
さすが負けず嫌いという主人公補正を持つ男だな。私とは全然違うな。
この男を見ると前に行った異世界の男のことを思い出すな……強さは文字通り桁違いだが。

「もうダメだ！！　熱っちぃ！！　俺はもうあがるぜ――――――ッ！！！」

ナギはそう叫びながら、温泉からダッシュで出て行ってしまった。
温泉はこの熱いのが醍醐味の一つだというのに、あ奴はまるで分かっていないようだな。
まだまだガキか……って、実際まだ十五歳やそこらだから、ガキだったな。
そんなコトを思いながら、私は久しぶりの温泉を堪能するのだった。

◆　◆　◆　◆　◆

結局私は皆があがってから、数十分は温泉に入り続け、ロビーらしき場所に出たときは既に誰も居なかった。
何故か浴衣まで用意してあったので、私は濡れた髪を乾かさないまま、浴衣を羽織っている。
ロビーらしき場所に置いてあったソファーに腰を掛け、温泉上がりの余韻に浸りながら、皆が帰るのを待つ。

「あがったのか、クロカミ」
「んぁ？　何だ、詠春か……。何か用か？　というか、皆はドコにいる」
「ナギ達なら材料を調達しに向かったよ」

……材料？
話によれば明日のためにとナギが、鍋を食べたいと言い出したらしい。
だからその材料を各々が調達しに向かっているために、この場には誰もいないようだ。
ちなみにジャックは誘う前にドコカに行ってしまったらしく、除け者にされたようだ。

「クロカミも一緒に鍋はどうかと思ってな」
「鍋か……懐かしいな。よし、ならば私も材料を調達に向かおう」

私はそういいながら、ゆっくりとした動作で、ソファーから立ち上がり、伸びをする。
何故か詠春が先程から気まずそうにしているのだが、まさかまた女っぽいから、そうしているのではあるまいな？

「その、あれだ……。調達に向かうときはあの外套の方が良いと思うぞ？」

「女に間違われるからか？　別に女に間違えられても、私は構わん」

容姿はかなり中性的で、声までが女っぽい声だ。間違えられても仕方あるまい。

わざわざ変装して材料を調達しに向かうのもバカバカしいし、何よりも面倒だ。

それだったら女に間違えられたあとに、女ではないと言えば済む話だ。

「そ、そうか……。集合は夜九時だ。それまでに頼むぞ」

詠春の言葉に私は了解した、と一言告げるとオスティア温泉をあとにして、外に出る。

夜に近づいてきたからか、吹く風は異様に冷たく、私の結んでいない髪を通り抜けていく。正直に言うと非常に寒い。

……詠春の言うとおりいつもの外套を着てきた方が良かったかもしれんな……。

今更に言っても仕方がないし、とりあえずはこのまま食材を調達するとしよう。

おそらく肉の方はナギ辺りが調達してくれるとして、その他の細かな材料は詠春が用意してくれているはず。

ならば鍋に合う好みの材料を持ち合わせたとしても、問題はあるまい。

私はそんなコトを考えながら脚に力をいれ、とりあえずただで材料を調達できそうな場所に向かう。

ただで材料を調達できそうな場所と言えば海か山。しかし魔法世界の魚はとてもじゃないが食えたものではない。

……となれば必然的に山に行くことが決定されるな。

目的地が決定されたならば、あとは行動するのみだ。
空中で虚空瞬動する脚にさらに力を込め、近くの山に向かう。
足場の安定した場所に着地して、とりあえずキノコを探すために周りを見渡す。

すると私の視界に白髪頭のチビの姿が映った。あれは間違いなくゼクトだな。
なるほど、ゼクトも山にて材料を調達していたと言うことか。
私は勝手にそんなコトを思いながらゼクトに近寄り、後ろから声を掛ける。

「ゼクトもここで材料調達か？」
「ん？　なんだお主か。そうじゃな、ここにはたくさんキノコがあるからの」
「キノコねぇ。どのようなキノコが――――ッ！？」

私は神格を体内に封印してから、初めてこの世界の出来事で絶句してしまった。
それは何故か？　ゼクトが手にしていたキノコが、余りにも非常識極まりないものだったからだ。
何なのだそれは……。まさかそれが魔法世界のキノコだとでも言うのか……？　そうだったのならば、とてもじゃないが私の口からはどのような形状をしているかは、伝えることは不可能だ。

「お主もキノコを探しにきたのか？　ならばあっちの方に、良いキノコがたくさんあったぞ？」
「い、いや……キノコは止めることにさせてもらうよ。とてもじゃないが、私には食せそうにはない……」
「そうか。残念じゃのぅ。なかなかに美味いというのに」

本当に残念そうにいうゼクトに私はあり得ないだろ、と心の中で呟きながら材料調達を行い続ける。
すると、ゼクトが何かを呟いているのが、私の耳に届いた。

（フィオナ、シキは良い方向に進んでおるぞ……）

――ッ！？

なぜゼクトがそいつの名前を……。

あまりの驚愕に私は、ゼクトに訊ねたくとも訊ねられなかった。

◆　◆　◆　◆　◆

「うん、みんな中々良い食材を持ち寄ったな」

アレから時間が経過して夜になり、鍋を始めることになった。
私が鍋をする場所に向かったときには既に皆が集まっており、私が最後だったようだ。
ナギが持ち合わせたのは最高級の肉、タカミチは旧世界の餅、アルは有機栽培の野菜、ガトウは同じく旧世界の豆腐。
……私とゼクトはそこらに生えていたキノコを持ち合わせた。
仕方ないではないか！！　もう食材を調達出来そうな場所は無かったし、手ぶらだとアレだと思ったのだから！！

「よし、ここからは旧世界随一の料理人、詠春に任せようぜ！！」
「でもラカンさんとクルトが来ていませんが……？」

ナギが勢いよく言ったのだが、この場にジャックとクルトが居ないことに、タカミチが気づいた。
どうやら私以外の他の皆には、あの二人が来ないことを言っては

いないようだった。

「良いってば、そもそも呼んでねーし。筋肉達磨と澄ましたメガネは放っておいて始めようぜ？」

「ひ、ヒドい言われようだな……ラカンもクルトも」

詠春はなんとも言えないような表情で、ナギの言葉にそういう。

正直私も詠春の考えに賛同だ。

あの筋肉達磨のことだ、鍋パーティーをやっているのがバレたら、ぶーたら言われるのがオチだ。

何が起こるか分からんし、呼んでおいた方が良いと思うのだが……もうナギは我慢が出来ないようだな。

わなわな震えて、肉をつまんでいるではないか。どんだけ肉を食べたいんだ、お前は。

「もう我慢できねーーーーーーーーーーッ！！！」

ナギはそう叫ぶのと同時に、自らが持ってきた肉を鍋の中にぶち込んでいた。

もちろん鍋の食べ方は人それぞれ、どのように食べようと問題はない。

しかし先ほどからうるさく言っていた詠春が、それを見逃すはずもない。

ちなみに詠春の小言は聞きたくないので、全てカットさせてもらった。

「ナギ！？　何先に肉を入れてんだよ！？　アレほど言っただろう！？」

「良いじゃねえか、食いたいもんから入れればよ」

「じゃあ僕も」
「ふむ、なら儂も」

詠春の叫びに対して反論したナギの言葉に賛同するように、タカミチとゼクトも自分たちが持ち合わせた食材を、鍋に投入する。
もちろん鍋奉行な詠春がそれを許すはずもなく、先ほどから何かを言っているようだが、無視無視。
せっかくの久しぶりの鍋が不味くなってしまうではないか。

というか鍋がメチャクチャにされたぐらいで泣くでない、詠春。
全く……本当にこ奴らは無敵の『紅き翼』なのか？　これだけを見たら全く想像できんな。

「ちなみに旧世界の寿司ってのは無いのか？」
「生真面目剣士の詠春ならば、それぐらい用意しているのではないか？」
「もちろんだ。ちゃんと鮮度の高い魚を持ってきている！！」

ドカーン！！　と後ろで爆発が起こりそうなほどに、堂々と私とガトウに言い放つ詠春。
まあ、鍋は何やかんやで変な感じになってしまったが、寿司ならば大丈夫だろう。
それに魔法世界の魚は不味くて、魚を食べる機会などめったに無いから、内心楽しみな私である。

「おっ、これだな？　それっ」
「ナギ！？　寿司を鍋に入れるな！？　今のはな――――」

また詠春の小言が始まってしまったので、私を含めた皆が詠春の小言は聞きたくないので、またもやカットさせてもらう。

ナギが詠春に小言を言われているのを聞きながら、あのキノコを美味そうに食べているゼクトに視線を向ける。
私が入れたキノコも綺麗に食べてくれているみたいだが、腹は壊さないのか……？
見たところだと全く異常は見当たらないのだが、あんなキノコを食べたのだから、何があってもおかしくはない。

「アル、ゼクトの腹は大丈夫なのだろうか……。あのキノコ、普通では食えなそうだぞ？」
「そうですね……。アレは食べられないと言うことはありませんが、余り好んで食べる人は居ませんね」
「と言うことはやはり危ない物だったのか？」
「さあ、どうでしょうね？　それは人それぞれだと思いますよ？」

アルは相変わらずのイケメソスマイルを私に向けながら、そのように言ってくる。
確かに人それぞれではあるが、さすがにあのキノコを食べている姿を見たら、誰であろうと心配してしまうだろう。
そんなコトを考えながら、横目で詠春の方をみる。

どうやらようやく落ち着いたようで、詠春は鍋に箸をつけようとしていた。
刹那、詠春の箸が伸びていった鍋に、巨大な剣が投げ飛ばされてきた。
剣は鍋に直撃することは無かったものの、鍋の前の床にぶつかり、その衝撃で鍋が宙を舞う。

とりあえずこのままでは、最高級な肉が勿体ないことになるために、宙に浮いている肉を箸でゲットする。
私と同じようにナギも肉を取ろうとしていたが、コレは戦場だ。

そう易々と私が肉を渡すわけがなかろう。
結果的にナギは肉をゲット出来ずに、肉を頬張っている私を恨めしそうな目で睨んでいる。
そんな視線を私は無視して、剣が投げ込まれてきたらしき場所を見上げる。

「食事中しつれ～いッ！！」

するとそこにはアーティファクトを使用して、剣を大量に創り出している筋肉達磨(バカ)が仁王立ちしていた。
何なのだあ奴は……。こちらに向かって剣を投げ飛ばしてくるとは、危険極まりないな。
もし私に危害が及ぶことなどがあったら、貴様を『ずっと俺のターン』と書いて『フルボッコ』にしていたところだぞ。

「なんじゃあの筋肉達磨(バカ)は……ってどっかで見たことある状況じゃのぅ？」
「一年前に、我々が鍋をしていたときですよ」
「一年前もこんな風に現れたのか、あの筋肉達磨(バカ)は……。で、一年前もあんな感じだったのか？」

私はそういいながら、詠春の方を指差す。
そこには鍋を頭からかぶり、ずぶ濡れになっている詠春がそこにいた。
というか、さっきまでのあの沸騰した鍋の汁をかぶって、よく平気で居られるものだな。

「フッフフフ……。また貴様か……」
「前と全く同じですね」

どうやら鍋を頭からかぶっているのも、一年前と全く同じのようだ。

はぁ……何故私がこのようなコトに巻き込まれねばならんのだ……。

私は普通に鍋を食したかっただけだというのに……。

「食べ物を粗末にする者は――――」

詠春はそこで言葉を切ったかと思うと、その場から一気にジャックの居る場所に向けて、距離を詰める。

どこから取り出したかは全くの不明だが、夕凪を居合い抜きして、ジャックの持っている剣を切り裂く。

詠春の一閃はジャックの剣を、まるでバターを切るかのようにすっぱりと切り裂く。

「――――斬るッ！！」

……確か聞いた話によれば神鳴流は闇に呑まれやすいようだが、本当に呑まれやすいようだな……。

ただのこれしきで詠春は闇に取り込まれている。やれやれだぜ。

夕凪を振りかぶる詠春に対して、ジャックはかなり余裕げにしているな。

「懲りねえ奴だな。詠春、貴様の弱点はリサーチ済みだぜ！！　情報その一、生真面目剣士はお色気に弱い！！」

ジャックはそういいながら、薬に使うカプセルのような物を取り出し、詠春に向かって投げつける。

するとカプセルから女性の幻影のようなものが現れ、詠春に抱きついていた。

保険用にか、ボイン揃いの中で一人だけ幼児体型な幻影が居る。

「くっ、毎回卑劣な！！　同じ手を二度とブハッ！？」

鼻から大量に鼻血を流しながら、そんなコトを言っても意味ないぞ、詠春。

とりあえず詠春は、幼児体型の幻影に狸の置物を叩きつけられて、その場に気絶していた。

私が幻影達にサムズアップしたところ、あちらも同じようにサムズアップし返してくれた。

どうやら幻影達も二回目ということで、既に手慣れてきているようだ。

まあ、あの生真面目剣士にアレをやったのだったら、さすがにキツすぎるかもしれないな。

む？　私か？　私は意外と平気だ。なんせ私の周りには美人しか居らんからな。耐性でも付いたのだろうな。

「情報その二、アルビレオ・イマは寝言が赤ちゃん言葉ッ！！」

「なっ！？　それをいつの間にでちゅバブバブ！？」

「情報その三、ゼクトはこれまた寝言が赤ちゃん言葉ッ！！」

「むぅ、そうじゃったかの？　自分では覚えてはおらんがの」

……意外な事実発覚。

まさかあのアルの寝言が赤ちゃん言葉であったとはな……。人は外見によらないとはこのことか……。

ゼクトの方は事実かは分からないが、事実だったならばこちらもギャップが有りすぎる……。

「そして情報その四、赤毛の魔法使いも寝言が赤ちゃん言葉……じ

ゃなくて弱点なし！！　特徴は無敵ッ！！」

ジャックは『紅き翼』メンバーを次々に指さしていきながら、説明をしてくれている。

それを横目で見ながら、タバコを吸おうとしたのだが、不意にジャックの指がこちらに向いた。

はて、あの筋肉達磨（バカ）に情報を気取られるような真似を、した覚えはないのだがな。

「裏情報、銀髪の狙撃手も弱点なし！！　特徴は、というかテメーに勝てる奴なんか居ねーよ！！　つーことでナギ、久々にいっちょ戦（や）るか！！」

「今回だけはジャックの情報に賛成だ！！　あと、望むところよッ！！」

私にそんなコトを言ったかと思ったら、ナギとジャックがドンパチやり始めていた。

やれやれ……コレでは鍋をやるまでまだまだ時間が掛かりそうだな。

そう思った私は踵を返して、オスティア温泉の出口に向かう。

後ろで巨大魔法やら何やらが、けたたましく響きわたっているが、無視だ無視。

あんなのを相手にしていたらキリがない。それにあんなノリにはついていけん。

オスティア温泉を出て、私はかすかに吹いている風を涼しく思いながら、タバコを吸う。

するとドコからか聞いたことのある声が聞こえてきた。

ドコで聞いたのだろうか。いや違うな。‘何話前’に聞いた声だ

ったろうか？

「ミカキ――――――――――――――――――――ック！！！」

「ぽぎゃ――――――――――――――――――――ッ！！？」

すると私の鳩尾に、とてつもない衝撃が来た。

戦いの中だったならば大したこと無いのだが、ほのぼのパートだとかなりの痛みだな。

私は鳩尾を抑えて、片手片膝を地面につきながら、私に蹴りを入れてきた人物を見る。

そこに立っていたのは、さっきの技で分かるかもしれないが、私の義理の娘のミカだ。

数話前から全く出番が無かったのだが、まさかこのような時に乱入してくるとは……。

それに心なしか、怒っているように見えるのは、気のせいではないはずだ。

「お父様、いったいあたしを何話放置する気ですか！？　放置プレーは好きじゃねェんですよ！？」

「待て待て、放置プレーなんで誰から聞いたんだ？」

「教えるはずがねェです。ティアお姉様から教えてもらったなんて、口が裂けても言えませんです」

このやりとりはもはや、お約束といっても良いくらいのパターンだな。

そしてティア……貴様は次に会ったときは覚悟すると良い……。

ミカに変なことを教えることが出来ないように、しっかりと調教してやる……。

「で、どうやってここに来たんだよ」
「それは……禁則事項です」

それもティアに教えてもらった情報と言うわけか。
貴様は人の娘を勝手に変な方向に進めたいのか？　ならば、まずはその幻想をぶち殺す！！
……私が言っても何だか余らしっくりと来ないな……。
とりあえず久しぶりに再会したので、私たちはしばらく話し合うのだった。

《後編へ続く》

第三十撃『決戦前夜。どうやら明日は最終決戦のようです』（前書き）

なんか微妙な仕上がりになってしまいました……。
とりあえず、どうぞ！！

第三十撃『決戦前夜。どうやら明日は最終決戦のようです』

ｓｉｄｅ　シキ

「……コレは何の騒ぎなんだ？」
「あたしに訊かないでくださいです。むしろこっちが訊きてェところです」
「俺も知りてェんだけど……」

なぜ私とミカがいきなりこのような会話をしているかと言えば、目の前に広がる異様な光景を見てしまったからだ。
オスティア温泉に帰ってきた私たちは、鍋をしていた場所にナギ達が居なかったために、中を探し回っていた。
ふと耳を澄ませば、温泉の方から『紅き翼』の声が聞こえてきたために、そちらを覗いてみた。

そこで私が見たものは何故か文句を言い合いながら、温泉に浸かっているナギとジャックの姿だった。
周りにはアルや詠春、ゼクトにタカミチといったメンバーが、面白そうにそれを眺めている。

（こいつらは何をしてるんだ……？）

そんな光景を見たならば、こう思わずにはいられないだろう。
オスティア温泉をでる前は鍋パーティーをしていて、そこに乱入してきたジャックとナギが戦っていた。
なのに帰ってきてみたら、このような現状になっていたのだ。不思議がるなと言われても、それは無理だと言うものだ。

そんな光景を不思議半分、呆れ半分見ていると、私が帰ってきたことに気づいたアルが話しかけてきた。

「おや？　その肩車している子供は？」

「私の娘だ。名前をミカ・クロカミという」

「よろしくお願いしますです」

ミカは私がアルに紹介すると、行儀良くアルにそう挨拶をしていた。

基本的には礼儀正しいのだが、何故変なところで礼儀正しくないのだろうか。

やはりミカの教育の仕方を間違ってしまったのか？

「まさかあなたが小作りをしていたとは……。人は見かけによらないと言いますが、まさにその通りですね」

「どういう意味だ、それは……。だいたい、ミカは義理の娘だ」

私はアルの言葉にも呆れながら、そう説明する。

書類上では正式な娘にはなってはいるが、本物の私の娘ではない。

偶然に戦場で、拾った子供だからな。

それに、まだ私は子をなすような行為は、一度たりともやったことはない。

だいたい、そんな行為をやる予定などないし、その前にやれる相手が居ないならば出来るはずがない。

私も男であるために、やりたくないと言えば嘘になる。

……って、いかんいかん。完全に話が脱線してきてしまっているではないか。

「で、コレは何の騒ぎなんだ？　見たところ赤毛鳥頭（バカ）と筋肉達磨（バカ）が

張り合っているようだが」
「別に大した理由ではないですよ。ただナギが素直になれないので、ラカンがなんとかしようとしてるだけです」

どうやら話によると、私が去った後しばらくしてバカ同士の喧嘩は終わり、腹が減ったと言うことで、再び鍋を食べ始めた。
その経過でジャックがナギに対して、アリカをどう思っているかを訊ねたらしい。
しかし別になんとも思って無いと答えたナギだったが、ジャックは照れているだけだと思い、さらに追求したらしい。

そこでナギが照れ隠しか何かは分からなかったが、ジャックをぶっ叩いたらしい。
それにより戦いが発生し、戦いにジャックが勝ったら何故かナギがアリカに告白することにしたようだ。所謂、賭け勝負だ。
しかし武力的に互角の二人では、決着が着くまでに時間が掛かるために、別の勝負にしたらしい。それがまさかの熱湯風呂我慢対決。

（こいつらバカだ……。頭の中は脳筋だな、絶対）

呆れ十割で私は未だに熱湯風呂に入っているダブルバカを見る。
どちらもが尋常でない汗の量で、どちらもが明らかに無理をしているのが分かる。
温度的には明らかに五十度は越えているように見えるが、よくもまあ、我慢できるな。
私なら『創造再生』で触覚を遮断して、熱を感じないようにすることが出来るがな。

「「もう無理――――――――――――ッ！！」」

そしてようやくダブルバカが、熱湯風呂からあがっていた。
しかも全くといって良いほどに、ちょうどのタイミングで熱湯風呂あがっていた。
コレではどちらが勝ったかなど、分かるわけがないではないか。

「同時にあがりましたね？」
「ふむ、ではこの勝負は引き分けじゃの」

どうやらタカミチやゼクトも、私と同じで同時にあがったように見えたようだ。
審判員として待機しているダブルバカ以外の判定は、引き分けと言う結果になっていた。

「へっ……やるじゃねえか、ジャック」
「テメェこそ……。で、次は何で勝負するよ！！」
「そうだな……」

……こいつらは魂の芯の部分から、バカの成分で構成されているようだ。
――体はバカで出来ている。血潮は血の気で、心は闘争心――
……といった所であろうな。エミヤさん、勝手に使って申し訳ない。

「この建物の中にバンジージャンプがあったぞ？　それで勝負するってのはどうだ？」
「「……は？」」

詠春の言葉にナギとジャックが同時に、そんな間抜けな声を出していた。
私も実は心の中で間抜けな声を出していたのだが、まずそれはど

うでも良い。問題は詠春が言ったコトだ。
この建物の中にバンジージャンプがあっただと？　普通はそんなものが設置されているわけ無かろうが。
ダブルバカも私と同じ意見だったようで、詠春に抗議をしていたのだが、どうやらこれがあるのは普通らしい。

「じゃあ、バンジージャンプを先に飛んだ方が勝ちってコトにしましょうよ」
「そうじゃな。その方が面白そうじゃ」
「お前等なぁ、他人事だと思いやがって！！」

タカミチやゼクトの言葉に抗議をあげるナギだったが、正直他人事だからどうでも良い。
というか、どちらもがバグやチートの類なのだから、たかがバンジージャンプなど、大したこと無かろうに。

――――――と私も思っていた時もあった。

建物の中に都合よく設置されていたバンジージャンプだったのだが、その高さが有り得ない高さだった。
視力を強化して目算で計ったのだが、少なくとも五百メートル以上の高さがある、バンジージャンプだった。
ここまで巨大なのだから、気づかぬ方がおかしいと思うのだが、おそらく気にしたら負けだという類のものだろう。

「二人とも上にあがりましたが……大丈夫ですかね？」
「まあ、大丈夫だろう。バグやチートの類は、あの程度では死なん」
「死なんって……まさか生死がかかってる勝負なんですか？」
「まさか、有り得ん」

私は視界を魔力で強化して、上に上がったナギとジャックを見ながら、タカミチの問いに答える。
にしても……。戦場ではアレだけ勇ましい姿を見せると言うのに、あそこにいる二人はただの腑抜けではないか。
私だったら上がった瞬間にそのまま、ダイブするところだぞ。

「アレくらいなら、お父様の背中に乗って移動した方が、ずっと怖エですね」
「そうなのか？　俺は全然分からねェけどな……」
「お父様にとってはあれが普通の域だから、そう思えるだけだと思いますです」

そこまで私は恐ろしい移動の仕方をしているのだろうか……。
依頼で魔法世界の端から端まで移動することなど、珍しいことではないために、マッハの速度で移動しているだけなんだがな。
もちろん風の抵抗や、落下しないようにもしていると言うのに、何が怖いのやら。

そんな会話をしながらも、私はダブルバカの様子をしっかりと見ている。
何故先に飛んだ方が勝ちだと言うのに、あのように押し合っているのやら。アレでは勝ってくれ、と言っているようなものだぞ。
しかも二人して押しつけあっているし……。戦場が恐ろしくなく、こちらが恐ろしいとはどういうコトだ。

「みっともない奴らじゃのぅ」
「それには私も同意せざるを得ないな。あれは情けなすぎる」
「どちらも飛び降りられずに居るのでしょう」

呆れながらもそんな会話をしていると、一波乱あったようで、先

にジャックが飛び降りてきた……と言うより落下してきた。
そんなジャックに巻き沿いを喰らったのか、後からナギも真っ逆様に落ちてくる。
真っ逆様に落ちた二人は空中で、どちらが下に落ちるか戦っていたようだが、結局どちらも顔面からダイブしていた。

「ふむ、アレは痛そうじゃの」
「さすがにアレはな……」
「ダブルバカだったならば、大したことあるまい。見てみろ、元気そうだ」

ゼクトと詠春の言葉に私は答えながら、顔面からプールにダイブしたダブルバカを指差す。そこではダブルバカが、ジタバタもがいていた。

「まあ、この勝負。ラカンが先に飛び降りたから、ラカンの勝ちか？」
「そうだな（ガトウ、居たんだ……）」

この話が始まってから、ほとんど話してなかったガトウに返答しながらも、そんなコトを思ってしまった。
とにもかくにも、この勝負はジャックが先に飛び降りたために、ジャックの勝ちだ。

◆　◆　◆　◆　◆

そんなこんなで勝負の決着が決したために、ナギがアリカに告白するためのリハーサルを行うこととなった。
しかし現在行っているのは再び鍋パーティー。どうやらさっきの勝負でダブルバカが腹減ってしまったようだ。

それにしても良く食う奴らだな。鍋（肉だらけだが）をこれを合わせて三回も食べているのだからな。

「つーかナギ、お前、俺を姫さんだと思って、告白の練習してみろよ」

「って無茶言うんじゃねえ！！」

確かにジャックをアリカだと思って、告白の練習をすると言うのは無理がありすぎる。

アリカは華奢で気品があるにもかかわらず、ジャックはがさつで筋肉達磨。

どう頑張ったとしても、ジャックがアリカに見えるなどという間違いは絶対に起こり得ないだろう。

それを考えると、ナギの気持ちが良く分かると言うものだ。

それに、演技とはいえこのような筋肉達磨に告白するなど、とてもではないが考えられないな。

ジャックに演技でも告白するくらいなら、私だったらアリカ本人に告白するな。

「ナギ、男同士の約束を破るってのか？　そうだな、俺がダメなんだったら、こいつに相手してもらえ」

「んむ？」

私が鍋に入っている肉（まあ、肉しか入ってないのだが……）を食べていると、いきなりジャックがそのようなことを言いながら、指さしてきた。

周りではなるほど、適任がここにいたか、みたいな眼差しを私に向けているのだが、やはり髪をほどいて浴衣を着ていると、私は女にしか見えないのだな。

「まあ、私なら別に構わん。どうせなら演じきった方が良いか？」
「そうだな……。姫さんじゃなくても、女っぽく振る舞ってくれないか？」
「了解した」
私はジャックにそういいながら、手に持っている箸とお椀を床に置く。
声は一般的な成人から比べたら、限りなく女性に近いのだが、普段は低めに声を出しているからな。
少しばかり慣らしておかぬと、演技中に声が出なくなるかもしれんからな。
私はそんなコトを考えながら、喉の調子を整える。
皆の視線が私に突き刺さるのを気味悪く思いながら、私は声を発する。
「このような感じでどうでしょうか？」
『――――ッ！？』
営業スマイルを浮かべながら、私が女性の声を出しながらそういった瞬間に、その場に居た皆の表情が驚きに染められた。
アルやゼクトも驚いてはいるが、ナギやジャックの他にも詠春やガトウ、タカミチまでもが口をパクパクとさせている。
はて、そこまで変な声を出していたのだろうか？　私的には上手くいったと思ったのだが……。
と、私が考えていると驚きを隠せないままに、ジャックが訊ねてきた。
「お、お前、ホントにシキか？　そっくりさんを一瞬で連れてきた

んじゃねえだろうな！？」
「何を言っている、私は私だ。身代わりなど連れてくる必要など無かろうに」
「ほ、ホントにシキさんですね……」
「さすがの儂も、コレには驚かんわけにはいかんの……」

……やってくれと言われたからやったと言うのに、何なのだこの言われようは……。
このように言われるのだったら、やらなければ良かったかもな。
私は肉体面では確かに強くなったが、精神面（メンタル）はそこまで強くないのだよ、ガラスのハートなのだよ。

「と、とにかく、ナギ。シキを姫さんだと思って告白の練習してみろ！！」
「お、おう……」

ジャックに背中を押されたナギが、いつもの威勢の良さを全く失いながら、私の前にやってくる。
こういう体験にあまり慣れていないのか、うーん、と悩んでしまっている。

「（な、なんかナギさんと今のシキさんだと、洒落になりませんね……？）」
「（そうですね。ナギはともかく、彼は絶世の美女にしか見えませんから）」
「（うむ、これはこれで面白そうじゃの）」

タカミチにアルにゼクトが、私達に聞こえないようにコソコソと話しているようだった。
しかしな、そのようにしていても聞こえるものは、聞こえてしま

うものだ。
だいたい、私としてもこのような茶番を早く終わらせて、肉を食べたいのだ。
そしてようやくナギが決心したのか、口を開いた。

「ひ、姫さん、好きだぜ……？」
「……つまらんな。もう少しマシなのは無いのか？　仕方ない、ジャック、手本を見せてやれ」
「へっ、男の器の違いを見せてやるぜ！！」

ナギの余りにもドストレートな、味気ない告白に私はそういいながら、次はジャックを指名する。
どうやらジャックも、ナギに男の器の違いを見せつけたいのか、妙にやる気だ。

んんっ、とジャックは喉の調子を整えると、私の目をジッと見据えながら言ってきた。

「お姫様、俺は一生、あなたを守り続ける騎士になるぜ！！」
「ひゃはははは！！　くっせー！！　くっせーよ、なあ？　ひゃはははは！！」

腹を抱えて笑いながら、皆に同意を求めてくるナギ。
演技とはいえ告白を受けた私としても、あのセリフはクサすぎると思ったのだが、どうやら他の皆の反応は違ったらしい。
何やら感動した、と言わんばかりの表情をしている。

「……くだらん。私は失礼させてもらう」
「おい、シキ、まだナギの告白の練習は終わってねえぜ？」
「大丈夫だ。こういう輩は、大半は本番に強いタイプだ」

私はそういいながら立ち上がり、ミカを肩車しながらその場から立ち去る。
その後も告白の練習が続けられていたようだったが、結局は成功しなかったらしい。
まあ、あんなグダグダな練習じゃあ、意味がないだろうな。

オスティア温泉の旅館の外に出た私は、再び夜の風を浴びながらタバコを吸う。
私の視線の先は、夜の闇に不気味に浮遊する『墓守り人の宮殿』がある。
明日はあそこに殴り込みだと言うのに、あいつ等は本当に呑気なものだな。

まあ、あんな状況の中ではあったが、既に動き出した者も居るし、騒ぎながらも明日への決心は鈍ってないらしい。
そこはさすが『紅き翼』といったところであろうな。
すると肩車しているミカが、唐突にこんなコトを呟いた。

「……明日は決戦なんですね」
「なんだ？　ミカは戦うわけでもねェのに緊張してんのか？」
「そうじゃありません。もし、お父様がそこで死んでしまったらと考えてしまって……」

そういったミカの表情は見るまでもなく、不安でいっぱいになっているのだろう。
おそらく頭では私が負けるなど無いと言うことは、理解しているはずだ。
しかしそれでも殺し合いでは、常に何があるかは分からない。それが分かってるが故の心配なのだろう。

私はフッと笑いながら、肩車しているミカを下ろして、頭をクシャクシャと撫でる。

「大丈夫。俺は絶対に負けないし、ミカの側を離れない。俺たちは家族だからな」

「家族……」

「あぁ。俺の娘なら、父親の言葉を信じろ」

「……はいです！！」

ミカは私の言葉に笑顔でそう答えてくれた。

明日は決戦。

私の弾丸は未来を切り開く弾丸であるコトを、証明して見せよう。

第三十撃『決戦前夜。どうやら明日は最終決戦のようです』（後書き）

アンケートまだまだ実施中です！！
（前話あとがき参照）
このままだとゼロ魔でルイズに召喚されるで決定です。
まあ、番外編は三話程度でまとめるのですが……。
では意見待ってます！！

第三十一撃『私は皇女の影、皇女のあるところに、私が居る』（前書き）

どうしてこうなった……。
今回の話は意見が分かれるのではないかと思います。
ではどうぞッ！！

第三十一撃『私は皇女の影、皇女のあるところに、私が居る』

ｓｉｄｅ　シキ

「帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました！！」

そう言ったのは、アリアドネー騎士団に所属しているセラスだ。
あれから既に時が経過し、決戦当日となっていた。
私達が『墓守り人の宮殿』を見ているときに、彼女がわざわざやってきてそう告げてくれた。

後ろにはセラスがそう告げてくれたように、連合・帝国・アリアドネーの混成部隊が待機している。
帝国の戦艦や銃騎士隊・剣騎士隊。アリアドネーの騎士隊。連合の魔法部隊など、揃い踏みだ。
見た限りでは確かに揃い踏みで、強力な部隊に見えるだろう。

アリアドネーの方は確かに万全で、今出せる最大戦力を出してくれているが、連合・帝国は違う。
帝国は私が勝手に二つの部隊を動かしただけで、正規の部隊は現在もテオが動かすために、腰の思い老人（ジジィ）共と討論中だ。
あの老人（ジジィ）共の中には『完全なる世界』の輩が紛れ込んでいるからな。
わざわざ敵の勢力を拡大させるような真似はしまい。それどころか時間稼ぎをして、全てを終わらせるつもりだろうな。

その老人というのは特定できてはいるが、安易に殺してしまえばテオに迷惑が掛かってしまうからな。

安易な行動をするわけにはいかんな。
連合の方はよく分からないのだが、この時間帯になっても駆けつけないと言うことは、連合も帝国同様に説得が間に合わんのだろう。

「久しぶりに心置きなく殺りあえるな」
「ティアさん。コレはそんな簡単に割り切れる話ではありません。気を引き締めてください」
「分かってるよ、シェリルさん。だけどな、心置きなく殺せるってのは楽しみなんだよ」
「はぁ……性格、変わりましたね？」

私もそう思うよ、シェリル。
と、私は後ろで話しているティアとシェリルの話を聞きながら、そんなコトを思う。
ティアはコレが世界の命運をかけた戦いだろうがなんだろうが、どうやらどうだって良いようだ。

だが、おそらく敵というのは人間などではないだろう。影などを使って生成したただの木偶人形だろう。
そんな相手に殺すことを躊躇ってもらっては困るし、そんな心配は要らないがな。
それにしても、ティアも見事に直死の魔眼の効力に侵されてきてるな。他の使用者のように殺人鬼のようにならないだけマシか。

「シェリル、ティア。俺もこっちに残って雑魚の駆逐をやる」
「珍しいな。シキさんが大物のところにいかないなんて」
「あのなぁ、別に俺は戦いが好きな訳じゃねェんだけど」
「そうなのか？」

意外だな、とティアは呟きながらも腰のホルダーからナイフを取

り出して、逆手にナイフを握りしめる。
同じようにシェリルも黒いロングコートの腰に携えていた、二メートルを越す野太刀を抜きはなっている。
周りを見ればどうやら準備が整ったらしく、全ての者が各々の武器を構えていた。

ちょうど全員が武器を構え終わった頃に、『墓守り人の宮殿』から黒い異形の存在が大量に召還されていた。
まるで人間の形をしたような異形から、鬼神兵を遙かに凌ぐ巨大な異形までもが次々と召還されていく。
数にしてみれば百、千、万、いや、もっと多いかもしれない。目算するとなると多大な時間を有することになる。
まあ、どうせ全てを駆逐するのだから、数など数えても無意味だとしか言いようがないだろう。

「さて、そろそろ私も出るとするか」
「シキさんはあんまり出るなよ？　出られるとオレの出番がなくなる」
「だからティアさん。はぁ……何を言っても無駄なのでしょうか？」
「無駄だ。ティアは殺人に餓えている。なんせ、殺人姫（さつじんき）だからな」

私はシェリルにそう呆れて言いながら、腰から銃を抜き放つ。
後ろを振り向けば、銃騎士隊の面々が何かを期待するかのように、私の方を見ていた。その中にはエルやエルの友達の姿なども見えている。
全く……私に何をそこまで期待しているのかは分からないが、余り私はそういうキャラではないのだがな。
……仕方がない。そこまで期待されているならば、言うしかないかもしれないな。

「死にたくなければ銃を握れ！！
生き残りたくば引き金を引け！！
自らの未来は、自らの弾丸で切り開け！！
往くぞ、銃騎士隊の強者共（ツワモノ）よッ！！」
『オォォオオオオ――――――――――――――ッッッ！！！』

私の掛け声と同時に銃騎士隊だけでなく、全ての勢力が動き出した。

さあ、道化共。せいぜい、私を楽しませるために足掻き苦しむがいい。

◆◆◆◆◆

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

遂に幕を開けた連合・帝国・アリアドネーの混成部隊と『完全なる世界』との決戦。

混成部隊の勢力は見た目こそはかなりのものではあるが、実際の勢力は見た目ほどは強くない。

アリアドネー騎士団以外は正規の勢力ではなく、独断で動かせるだけの決して弱いわけではないが、正規の勢力には劣るものだ。

『紅き翼』のメンバーは『墓守り人の宮殿』に乗り込み、この騒動を起こしている元凶を潰さなくてはいけない。

となると、ここまで強大な勢力を相手にするには、この勢力では心許なさすぎるだろう。

だがそれを補って余るほどに、異形を駆逐する勢力の前線部隊は強力な力を有している。

旧世界、魔法世界を探してもおそらく彼女――――シェリル・アリ

ウスを越える剣士は居ないだろう。
この世界とは違う異世界の魔眼を持ち、それを自由自在に使いこなすティアレンス・バイシタル。
さらにはその二人を援護する形で最後方から狙撃を行っているシキ・K（クロカミ）・アスタロト。
この三人が居ることにより、混成部隊の皆は安心して戦うことが可能となっている。

「こっちに来な。オレが殺してやる」

殺人姫の二つ名で知られているティアは、『紅き翼』が『墓守り人の宮殿』に入るために、最前線に出て異形の真っ只中に飛び込む。
右手にはナイフが逆手に握られており、彼女の瞳は蒼色に輝き、異形の姿を捉えている。
彼女だけに視ることが許された死と言う名の断面図。その死の境界線を破壊することが出来る『直死の魔眼』。

――――グォォオオオオオッ！！

人間の聴覚では理解し得ない叫びが、異形から響き渡る。
異形が一斉にティアに向かって攻撃を仕掛ける。勢力の真っ只中に一人で乗り込んでくれれば、狙い撃ちにされるのも道理と言える。
自分に大量の死が迫ってきていると言うのに、ティアには一行の焦りが見えない。
それもそのはず。死を操ると言うのは、彼女の専売特許であるからだ。

迫ってくる死と言う名の攻撃の死を、ティアの目が捉える。ただ、その死に従って彼女はナイフを振るうのみ。
ナイフが死を捉え、次々と切り裂いていく。死を捉えられた物体

は、有無をいわさずに例外なく殺されていく。
その様はまさに殺人姫。戦場を舞う、殺人を喜ぶ姫のような美しさだ。
殺され、霧状になっていく異形が、彼女の美しさをさらに際だたせる。

ティアの動きはまるで舞のようだった。殺しを行っているにも関わらず、その動きは優雅で美しく、誰しもが見とれる舞い。
それでいて、その強さは上記を逸している。たった一人で、かなりの数を殺している。
右から左へ、上から下へと動き、『紅き翼』への道を切り開く。

「早く行きな。こいつらはオレ達が何とかする。お前等は、やるべきことをやれ」
「おう、そっちはお前等に任せたぜ！！」
「あぁ、任された」

ティアと『紅き翼』のナギ・スプリングフィールドは初対面ではないが、ほとんど初対面と同義だ。
だが、ここまで親しげなのは、やはり共通の敵を前にして共闘しているからだろう。
すれ違い様にお互いにそう言い合いながらも、自らの敵から視線を外さない。

不意にティアの後ろから二本の炎の蛇が、渦を巻くように絡み合いながら、ティアに迫ってくる。
それをティアは目視しているのだが、どうにかしようとはしていない。むしろつまらなそうにそれを眺めているだけ。
迫ってくる絡み合った炎の蛇。それが不意に何かによって切り裂かれる。それが何かなど考えるまでもない。

「ナイス、シェリルさん」
「ナイス、ではありません。避ける気は無かったのですか？」
「ないよ。だってシェリルさんならどうにか出来ただろ？」
「つくづく呆れます。今の私は、アナタを気にかける余裕はありません」

オレもだよ、とティアはシェリルの言葉にそう答える。ティアとシェリルの二人はお互いには助ける余裕がない。
他の者の助けに回らなければならないからだ。強いが故に、守りたいと思う気持ちが大きい。
それは、五年前の事件を通しての共通の思い。もう二度と、苦い思いをしないように。

「背中は……預ける必要はないよな？」
「えぇ。そんな必要はありません」

お互いはお互いを見ることもせずに言い合う。信頼しているからこそ、見ないのだ。
そして一斉に二人は動き出す。宙を蹴り、一番身近に居る異形の存在に切りかかる。
殺人姫のナイフが死の断面図を切り裂き、騎士団長（ナイトリーダー）の野太刀が異形を斬り裂く。

この二人の勢いはまるで人間台風だ。たった二人で幾千の異形を凪払っていく。
確かにこの二人のおかげで異形は減っていっている。しかし、それでも数が減っているようには見えない。
それもそのはずだ。この召還の発信源が残っている限り、この異形が途切れることはない。

やはりこれを止めるには『紅き翼』が、元凶を倒すしか方法がない。

また、狙撃手であるシキも狙撃を続けながら、戦局を見極めていた。

いくら竜神の如き力を持つとはいえ、銃騎士隊を含めた混成部隊全体の援護をするのは容易なコトではない。

しかしそれを容易にやり遂げてしまうのが、シキという男の腕前だ。

（いくら雑魚とはいえ、コレだけの数が居るとなると少々邪魔だな……。だからとはいえ、完全竜化を使うわけにもいかない、か）

二重螺旋の魔法陣が戦場に幾つも展開され、その魔法陣一つ一つから蒼色の魔力弾が放出されている。

シキは事も無さげにこの二重螺旋の魔法陣を使用しているが、実際はこれは使い方が繊細であるために、複数展開・制御するのは難しいのだ。

そして完全竜化。竜族に許された最終奥義。コレを使えば、狙撃を行うよりも早く敵を粉砕することは可能だ。

しかし、神格という神の力を取り込んでいる彼が力を解放すれば、世界の均衡を崩しかねない。

使用すれば、今の戦いが水の泡になってしまうと言うことだ。

（やれやれ、やはり正規の勢力でないと、援護する側も苦労させられる……）

現在、彼は魔力で視力を強化しているために、全ての戦局を細部まで見渡すことが出来る。

そのために援護しなければならない場所が見えてしまい、援護に

回らなければならなくなっている。
この魔法陣が使うことが出来なかったならば、ここまで被害を抑えることは出来なかっただろう。

二重螺旋の魔法陣から放たれる蒼色の魔力弾は、的確に異形の急所を貫いている。もちろんこれは偶々などではなく、シキが狙って狙撃を行っているのだ。
敵が味方に攻撃しようとすればその前に頭を貫かれ、隙を見せてしまえば何かを実行する前に消滅させられる。
動きに無駄がないとはこのことだ。いくら魔法陣を使っているとはいえ、狙撃手がどれほど集まれば彼と同じ芸当が出来るようになるだろう。

シキが引き金を一回引くだけで、敵の数が大幅に減少していく。
撃ち漏らしなどが有るわけもなく、ましてや誤射してしまうなどということもない。
魔力弾の一発一発がうねりを上げる。もはや彼の狙撃の実力は、常識の範囲どころか、反則級の力を持つ者の範囲すらも凌駕している。
さらに、さっきまで減ることのなかった異形も、徐々に数を減らしてきている。

コレは明らかに『墓守り人の宮殿』で戦っているメンバーが、元凶をどうにかしたことを意味しているのだろう。
この‘だろう’と言うのはいくら魔力で視力を強化したとしても、内部まで透視することが出来ないからだ。故にこのように曖昧になってしまう。
ただ、そのようなコトは彼にとってどうでも良いことだ。

（そろそろ戦いも終わりに近づいてきている、ということか）

引き金を引きながら、シキは横目で『墓守り人の宮殿』を見る。
中から感じていた魔力・氣の流れが、少なくなってきているのを感じる。
シキの活躍もあってか、混成部隊の被害はほぼいや、全く被害が無かった。彼は非常に仲間を大切にしている。

彼の原書となった一番最初の事件。コレが彼の仲間の大切意識を増幅させているのだ。
直接に関係の無い相手だったとしても、自分の大切な仲間、その大切な仲間……と繋がっている。
実のところ彼は狂っていた。人一倍冷酷でありながら、人一倍人を殺すことに恐怖している。故に彼は他人を殺すことが出来ないでいる。
ただ一度の殺人。彼の原書となったあの事件での殺人でさえ、彼は無意識に悔やんでいる。
それ故に彼の狙撃は常に人間に対しては、無意識に動けない程度の狙撃にしかなってはいない。

――――『不殺の弾丸』

これほどシキに当てはまる二つ名は、他には存在し得ないだろう。
シキは引き金を引き続ける。有り得ることのない、全ての人々を救うために。

すると『墓守り人の宮殿』から巨大な音が聞こえた。爆撃をしたかのような、爆発音。その爆発音は鼓膜を破らんとするかのように巨大だった。
『墓守り人の宮殿』のちょうど中心あたりから縦一閃に雷が駆け抜ける。

その雷の余波は、まだ残っている異形を吹き飛ばすほどの威力を秘めており、一気に異形を消滅させる。

（終わったようだな……。――――ッ！？）

一番強大に感じていた力の奔流が消えたことにより、僅かに残っていた異形がまるで空気に溶けて、同化するかのように消滅していく。

シキはコレで戦いは終わったと思った。しかし、そのような考えがすぐに間違いだったと知らされることになる。

雷が駆け抜けた『墓守り人の宮殿』の中心部から、光球が突然に現れた。それはまるで渦を巻くかのように力が集まっていき、徐々に巨大化していく。

光球はあっという間に『墓守り人の宮殿』を飲み込み、さらに巨大化していく。

世界の始まりと終わりの魔法。これが魔法世界を覆ったとき、魔法世界が無に帰る。

これがシキの唯一の計算外。この魔法が完成するまでにはまだ時間が掛かると思っていた。いくらシキとはいえ、これぱかりは止めないわけにはいかない。

（くっ……慢心していた……ッ。こうなるのだったら、最初から動くのだった……）

シキは後悔した。自らの力を過信し、慢心したばかりに世界を破滅させる魔法を、殺す瞬間を逃してしまった。

自分の行動にシキは怒りを覚えながらも、ライフルを構えてスコープを介して世界を視る。

世界が死に埋め尽くされて、死の断面や点が視えるようになった。

もちろん今現在も巨大化している光球例外ではない。そう例外ではないのだ。

（ふざけるな……。コレを、どうすれば良いのだ……）

スコープを介して視た光球は死が視えなかったわけではない。むしろ、視えすぎてしまったのだ。

光球は何重にも魔法が重ねられており、光球を殺すには一つ一つの壁を殺していくしかない。

それを実行することは確かに可能だ。しかし、それを行うだけの時間がない。一つを殺したとしてもその間に二つの壁が出来上がってしまう。

神格の力は強大だが、シキの持っている神格の力と言うのは正極（プラス）の力。

生み出したりする事に徳化された力であり、滅ぼすことは出来ない。

これが神格の、それも正極（プラス）の唯一の欠点。つまりは、アレをどうにかして封印する力を生み出すしかない。

（想像を創造する力……。イメージしろ、アレを封印する旧魔法を……。――――ッ！？）

旧魔法『創造再生』を使い、世界の始まりと終わりの魔法を封印する魔法を生みだそうとする。

だが、そんなシキにとある一つの信号が伝わってくる。

それはこの光球を封印する手立てがあるということ、もう一つはその手立てが失われつつあること。

（もう迷わない。私は……俺は――――！！）

◆　◆　◆　◆　◆

時は遡り、まだ世界の始まりと終わりの魔法が発動する前のこと。
帝国にてようやく最終決戦への正規兵の投入が決定され、ヘラス帝国第三皇女・テオドラと、『紅き翼』のタカミチを乗せた戦艦が『墓守り人の宮殿』に向かっていた。
正規兵を動かすとしても、第三皇女とはいえテオドラ独断で動かすわけにはいかない。

銃騎士隊隊長はまだ決まってないために、銃騎士隊教官長や剣騎士隊隊長。それに携わる老人。その他諸々の許可が必要となる。
騎士隊の隊長陣の方は、世界の危機のためにすんなり正規兵導入を許可した。
しかし、老人勢はそれを良しとしなかった。理由は様々ではあったが、どことなく導入させまいとしているようだった。

もちろんそれを感じていたのは大人である隊長陣だけでなく、テオドラやタカミチも感じていたこと。
それを行っていたのはシキが目を付けていた老人。そしてその老人こそが、『完全なる世界』からの帝国の回し者だ。
結局、導入が許可されたのは戦いが終局に差し掛かった頃。既に『墓守り人の宮殿』に到着したときには魔法が発動されていた。
だが、その魔法を封印する手立ては既に構築済みである。混成部隊が協力すれば、あの魔法を封印することは可能だ。

（あれを封印させるわけにはいかんな。しかし、愚かなり。これを指揮しているのは皇女とはいえ、まだまだ子供……）

しかし、そう簡単に『完全なる世界』の回し者である老人が、良

しとするはずがない。
そして老人が考えているとおり、この帝国の正規兵を指揮しているのは子供であるテオドラだ。
補佐としてシアが付いているものの、ここでテオドラという指揮がなくなれば、確実に封印作業は失敗に終わるだろう。
（貴様に恨みはない。だが……消えろ、小娘）
老人は懐から魔力を込めるだけで、発砲することが可能な魔法銃を取り出して、テオドラに向ける。
引き金に指をかけ、ゆっくりと引いていく。まだ、誰もこのことに気づいていない。
「姫様危ないッ！！」
「おわっ！？」
魔力弾が放たれた。ただ魔力弾がテオドラを死に至らしめることは無かった。
老人が引き金を引く直前にタカミチがテオドラが狙われていることに気づき、その場から抱きかかえ転がることで回避したからだ。
事なきを得ることが出来たものの、味方だと思っていた者の、ここに来ての裏切りに動揺が走る。
この場に居る全員が光球を封印作業を行っているため、他の作業を行える余裕などはない。
しかしこのまま老人を野放しにすれば、間違いなくテオドラは殺されてしまうだろう。
タカミチがテオドラを守ることは難しいだろう。如何に『紅き翼』に所属しているとはいえ、まだそこまで強いわけではない。

対して老人は如何にも戦い慣れして、尚且つ遠距離攻撃が可能。シアなど問題外だ。戦うことに関しては全くの無知、今の状況にすらついてこれてはいない。

絶望的な状況であるにも関わらず、光球の巨大化は進んでいく。

「邪魔をするな小童めが」

老人はそう言いながら、指をパチンと一回だけならす。

するとテオドラやタカミチ、シアといった今現在動くことの出来るメンバーが、老人の拘束魔法によって拘束される。

そして、老人は拘束し動くことの出来なくなったテオドラの眉間に狙いを定めながら口を開く。

「残念だったな、小娘。貴様を助けることの出来る騎士（ナイト）は戦場だ。もう二度とあいつに会うことは出来まいよ」

「そんなこと無いのじゃ！！　シキは、絶対に来るのじゃ！！」

「口だけならなんとでも言えるだろう。さて、時間がない。――――さらばだ小娘」

引き金が引かれた。銃口から魔力によって編み込まれた魔力弾が放たれ、テオドラの眉間に真っ直ぐに向かっていく。

軌道から逃げようにも、拘束されているために動くことが出来ない。テオドラは目を瞑ってしまった。

（シキ、助けて……）

テオドラはとある狙撃手の顔を思い浮かべていた。

いつ何時でも自分を守ってくれると約束してくれた狙撃手を。銃と翼を預かった狙撃手の顔を。そして願った。自分を助けてくれと。

魔力弾が放たれてからどれほどの時間が経過しただろうか。少なくとも一分は経過している。

ならば何故自分が死んではいないのだ、とテオドラは思った。

いくら魔力弾の速度が遅かったとしても、この距離で一分以上経過しているのに、自分に当たってないのはおかしかった。

テオドラは恐る恐る目を開ける。しかし、テオドラの視界は黒色の何かにより遮断されていた。

「な、何故貴様が……何故貴様がここにいる!?　黒神、織ッ!!」

老人は完全に動揺した声を上げながら、そう叫んだ。そう。テオドラを守ったのは他の誰でもない、シキだ。

転移魔法やその類の技を使えないシキが、戦場からこの場に来る方法はない。だから事前に仕込みをしていたのだ。

テオドラにプレゼントしたあの首飾り。あの首飾りに、テオドラが危険に陥ったときに、強制的に召還させるという概念を組み込んでいたのだ。

「何故だと？　決まっている、守るためだ。テオだけでない。私の大切な人々の命がかかっているのだ。貴様などに、邪魔はさせん」

「ぐっ……（こ奴さえ居なければ、我々の計画が成功したものを……）」

老人は完全にシキの力を見誤っていた。それもそのはず、まさか一人の竜族が、神の力を体内に内包しているとは夢にも思わないからだ。

そしてシキの登場により、老人の策は失敗に終わった。いくら老人が足掻こうと、命がどれだけあろうとただの人間ではシキには勝てない。

指一本動かそうものならば、腕が魔力弾により貫かれる。それを

知っているが故に、老人は動くことが出来ない。

「テオ。あれの封印作業、任せたぞ。シア、タカミチ。テオの側についてくれ」

シキの言葉にシアとタカミチは一回だけ頷くと、封印作業の指揮をするテオに近寄る。

老人に銃を向けたままのシキは、老人を睨みつけながら口を開く。

「感謝するよ。貴様にではないが教えてもらった。本当に守りたいならば、自分の手でケリをつけろとな」

「貴様等さえ居らなければ、計画は成功していたというのに！！」

「そうかもな。恨みたいなら恨め。私は私の信念に従ったまでだ」

シキの信念。それは自らの大切な者を絶対に守りきるということ。例え、それが神であろうが自分を上回る強者が敵であろうが、覆ることはないだろう。

彼の視界に映る光球の輝きが小さくなっていく。これは戦いが終結していくということを示している。

輝きが完全になくなったとき、戦場に歓喜の雄叫びが響き渡る。

こうして、世界の命運をかけた戦いが、幕を下ろした。

第三十二撃『崩壊。そして災厄の女王の誕生』（前書き）

あと二話程度で大戦も終わります。
ではどうぞッ！！

第三十二撃『崩壊。そして災厄の女王の誕生』

ｓｉｄｅ　シキ

あの戦いから早くも一日以上が経過した。
世界を救ったと喜び、現在、オスティアではお祭り騒ぎが起こっている。色々と細かい作業が残っているようだが、それを考えても、十分に皆が楽しんでいる。
もちろんそれは並外れた力を持つ者も例外ではない。

「次はあっちに行こうよ！！　シキ兄！！」
「……違う、こっち」
「いやいや、あそこだろ。なあ、行こうぜシキさん」

私の知り合いであるユーリ、エル、ティアも例外ではないということだ。
久しぶりにアリアドネー三人トリオが揃ったのだから、三人で遊べば良いのだが、何故か私は連れ回されている。
階級も所属もまるで違うというのに、この三人はアリアドネー時代から成長していないな、良い意味で。

後ろでは保護射的な立場にいるシェリルが、ミカと一緒に歩いてきている。
なにやらミカはシェリルに妙に懐いているようだった。それを見て寂しいと思うのは、やはり親としての心情なのだろう。
そういえば、今は王宮の方で式典が行われているそうだ。世界を救ったのだから、当たり前と言えば当たり前だろう。

私も『皇女の影』として式典に呼ばれたのだが、実際に世界を救ったのは『紅き翼』の面々だ。
それなのに私が行くというのもおかしいだろう。だからテオには悪かったが、行かなかった。
ちなみにテオに手を出そうとした老人は『完全なる世界』に関係する記憶を削除して、現在は帝国の重役として働くことが決まったらしい。
裏切り行為を行ったが、仕事に対する熱心さは本物。そこを買われ、再び就くことになった。

「なんかシキ兄、考え事してるの？　難しい顔してるよ？」
「ん？　いや、別に考え事ってほとでもない。て言うか、なんでここに来てんだ……？」

私は店の看板を見ながら、呆れたようにユーリ達一同に向かっていう。
シェリルも同じような考えだったのか、呆れたような表情をしている。ミカは良く分からなそうだったが、こういう事は知らないのだな。

「せっかく戦いが終わったんだから一杯やろうぜ？」
「……みんなでやるの、初めて」
「そうだよ、せっかく戦いが終わってみんなが揃ったんだからぱぁーっとやろうよ！！」
「はぁ……お前ら、未成年じゃなかったか？」
「むぅ、良いじゃんこう言うときぐらい！！」

ユーリは可愛らしく頬を膨らませながら、私にそう言ってくる。
こう言うときぐらいはって……まあ、私もそこまで未成年だからとはいえ規制はしないが、ほどほどにしてもらいたいものだ。

「まあ、良いか。仕方ない、入るか」
「やったぁ―っ！！　じゃあ突撃――っ！！」
「速ッ！？　チクショウ負けるかッ！！　行くぜエル！！」
「……承知」

一番最初に酒場の中に突撃していったユーリを追いかけるために、ティアとエルも駆けだしていた。
やれやれ、もう子供ではないのだからもう少し周りの迷惑を考えてくれ。
にしても、ユーリもそうだが、ティアもエルもどことなく、いつもより活き活きとしているな。
やはり旧友ど久しぶりに遊べるのだから、嬉しいのだろうな。

「あの三人はいつまで経っても変わりませんね」
「あぁ。だけど、あれはあれで変わらないでもらいたいもんだ」
「そうですね。いつまでも、あのまま仲良くしてもらえると、私としても嬉しい限りです」

だな、とシェリルの言葉に同意した私は酒場の扉を開けて、中へと足を踏み入れる。
すると中では戦いが終わったという嬉しさからか、外同様に異様な盛り上がりを見せていた。酒が宙を舞い、人々が笑顔に溢れている。
話に耳を傾けるがやはり『紅き翼』の話が大半だ。既に英雄扱いだな。実際、彼らは世界を救った英雄なんだがな。

「なにやってるの―ッ？　こっちだよ、シキ兄、シェリルさん！！」

先に店の中に入り、席を確保していたユーリが手をぶんぶん振り

ながら、入り口に立ちふさがっていた私たちに叫んできた。
ユーリ達がとった席は比較的特等席と呼べそうなほどに良い席で、コレだけの人数が居る中で良く席を取れたなと思う。
近くでティアに恐怖の眼差しを向けている客がいたが、気づかなかったことにしよう。
とりあえず立ちふさがっていては他の客に邪魔になるので、私達はその場所に移動し腰を下ろす。

「メニューは……って、この店の酒はバカ高ェな。味は確かなんだろうな」
「それは安心しな。飲んだことあるんだが、ここのは美味いぜ？」
「そうなのか。だけど、飲んだことあんのかよ」
「気にすんなって。スンマセーン、これお願いしまーす」
「あっ、僕はコレで」
「……コレとコレとーーー」

ティアは私の言葉を上手く誤魔化し、店員を呼びつけ注文を始めていた。
この店は酒も上等なのを扱っているが、食も扱っているようだ。
エルが物凄い勢いで注文をしている。
……金足りるかな？　足りなかったらツケとくかシェリルから借りるしかないか。シェリルなら金持ってるだろうし。

「そういえばティア。眼の調子はどうだ？」
「眼？　別になんも問題ないけど。あっ、魔眼の方か？　魔眼もなんも問題ないけど、いきなりどうしたんだ？」
「いや、ちょっと気になったから訊いてみただけだ」

どうやら直死の魔眼をコピーしたからとはいえ、体に副作用などは出ていないようだ。

私自身には魔眼をつけてもらったわけではないし、こちらの世界の技術でコピーしたのだから心配だったのだが、害がなくて何よりだ。

だが死が視えるたからか、少しばかり殺人衝動が出るようになったようだが、問題はあるまい。

そんなこんなでたわいもない話をすること約数分後。ようやく私たちが注文した品物がやってきた。

酒もさながら、食の量が尋常ではないな。この量をエルとミカの二人で食うのだから、とても信じられん。

何回も思うが、それだけの量をその小さな体のどこに入れているのだ。胃にブラックホールでもあるのではないか？

「じゃあ、勝利を祝って……」

『乾杯ッ！！』

グラスに注いだワインがカチンとぶつかり合う。ティアの合図でアリアドネー三人トリオがそう言い合う。

ぶつかったことでワインが周りと同様に宙を舞うが、今の勝利の余韻の前では些細な問題でしかない。

自らに掛かったにも関わらず、アリアドネー三人トリオは特に気にした様子もなく、グラスに口を付けてワインを流し込む。

「私達だけ飲まないというのも何ですし、今日は楽しみましょう」

「そうだな。どうせなら楽しんだ方が特だしな」

そう言い合いながら、私もシェリルのグラスと自分のグラスをカチンとぶつけ合う。

そしてシェリルがグラスに口付け、ワインを喉に流し込んでいるのだが……妙に妖艶に見えるのだが、気のせいだろうか……。

否、気のせいではないだろう。いつもは真面目で堅苦しいイメージのあるシェリルだが、今日は女性らしさを強調した私服を着ている。

それが元々のシェリルの持っている女性らしさをさらに強め、ワインを飲んだことにより僅かに紅潮した頬が、シェリルを妖艶に見せているのだ。

もちろんそれに気づいたのは私だけではない。周りの男性陣だけでなく、女性陣ですらもシェリルを注目している。

かく言う私も男。そのように女性らしさを強調されてしまえば、意識するなという方が難しい。

「どうしたのですか？　シキ君。私の顔に何かついていますか？」

「い、いや、そうじゃねェよ。何でもないから気にすんな」

「ふふっ、おかしなシキ君ですね」

妖艶な笑みを浮かべたシェリルにドキッとした私は、恥ずかしさを隠すためにワインを一気に流し込む。

魔法世界のワインの独特な風味が口の中に広がり、思わず美味いと呟いてしまう。

何やかんやで私はあまり酒の類を口にしたことがなかったのだが、さすが高い酒は格が違うな。

「にゃ～……シキ兄～、シェリルしゃんとイチャイチャしてるのら～……」

「……は？　ゆ、ユーリ、だよな？」

今まで聞いたことがないユーリの声に私は少々驚きながらも、声の発信源であるユーリの方を見る。

するとそこには目がとろんとし、今のシェリルに負けず劣らずエ

ロい、もとい男性陣の目を釘付けにしそうなユーリが居る。
ユーリの周りを見ればあの短時間でかなりの量を飲んでいたらしく、瓶がかなり転がっている。

相当に酔っているらしく、自分では上手く喋れてると思っているようだが、呂律が回らなくなってきている。
ティアやエルも酔っているようではあるが、ユーリほどではなく、ユーリの変貌ぶりに珍しげな表情をしていた。
ちなみにミカは酒は飲めないので、ジュースを片手に料理を黙々と食している。

「そうですぅ……僕はシキ兄が大しゅきな……ゆーり・あしゅたろとですよー」
「そ、そうか……（こいつ酒飲むと絡んでくるタイプかよ……）」

あまりのユーリの変貌ぶりに私は若干引き気味になりながらも、気を悪くしないようにと短くだが答える。
酔っ払いの相手をするときは受動態になるか、そのまま突っぱねるかのどちらに限るのだが、生憎と相手はユーリだ。
無碍に扱うわけにもいくまい。それに、そうしたらしたで後からが面倒そうだからな。

ティアもエルもユーリの相手を私に任せたのか、二人で楽しげにワインを片手に、話し合っている。
どちらもがほんのりと頬が赤くなっているところを見ると、やはり羽目を外しているのだと分かる。
いくら戦いに身を投じているとはいえ、ティアやユーリ、エルは女の子。しかもまだ年頃の女の子だ。羽目を外したくなるのも普通のことだろう。

「むぅ～、お兄ちゃんはこっち～」
「おわっ！？」
「えへへ～、お兄ちゃ～ん♪」

考え事をしながら、私もワインを口にしていると、不意にユーリに引き寄せられた。しかも私の呼び方が昔の呼び方に戻っているし、何よりも頬擦りをしてきている。

女の子特有の良い匂いが私の鼻をくすぐり、ユーリの胸部に装備されている男を惑わす究極兵器（アルティメット・ウェポン）が、私の腕に押しつけられている。

これが偶然なのか故意なのかと問われるならば、私は確信を持って答えることが出来る。後者であると。

「シキ兄、あ～ん♪」
「自分で食えるから良いよ」
「だめだよぉ～、良いから早く～」

ここまで私に甘えてくるユーリを、今までに私は見たことがない。いや、以前も甘えていたといえば甘えていた。

だがこの酒の入ったユーリ（ユーリ）の甘えぶりは、理性を吹きとばしかねないものがある。義妹主義者であるのだから尚更だ。

しかも酒が入り、シェリルに負けず劣らずの妖艶さを醸し出しているために、反応するなという方が難しい。

もしも今のユーリの誘惑に勝てる者が居るならば、是非とも私の前に連れてきてもらいたい。

「あ～ん♪」
「あ、あーん……」

今までは我慢していたのだが、とてもじゃないがこの誘惑には勝

てない。先に折れてしまった私は、ユーリの言葉に従って口を開く。
　すると私の口の中に入ってきたのは、私が予想していたものではなく、ポッキ〇のようなものだった。
　その端同士を私達がくわえている状態になっている。そしてユーリが先を食べ始めていた。

（このままだとキスになるんじゃね……？）

　そんな光景を見た私は思わずこんなことを思ってしまった。
　仮に私が食べ進まなかったとしても、ユーリが食べ進めているのだから、必然的にキスをしてしまうことになる。離してしまえばそれまでだが、それをさせてくれそうにもない。
　私がそんなことを考えている間にも、ユーリの顔は着々と私に接近してきている。
　そしてキスになるあと数センチというところで、ポッキ〇のようなものが折れた。いや、正確には折られたと言った方が適切だ。

「……そんなこと、やらせない」
「むっ……エルちゃん、僕の邪魔するんだね……？」
「……やらせない、絶対に」
「なら、決着……つけようよ」

　ユーリの言葉にエルが無言で一回首を縦に動かす。
　先ほどポッキ〇のようなものを折ったのは、エルが投げたフォークだ。私の脚の数ミリ隣に突き刺さっている。
　何やら一触即発な雰囲気の二人だが、別段仲が悪いというわけではなさそうなので、放っておくことにする。

　何の勝負をしているかは分からないが、何かの勝負をしている二人を横目で見ながら、ワインを流し込む。

シェリルは既に飲むのを止めたらしく、二人を微笑ましげに見つめている。この後仕事があるらしく、そこまで飲むわけにはいかないらしい。

（重役ってのも大変なんだな……）

シェリルはどう見てもデスクワークをやっているよりも、戦場にて刀を振るっている方が似合っている。

それはシェリル本人も思っているところだろう。それでもアリアドネーに居続けるのは、やはりそこが自分に合ってるからなんだろうな。

すると、勝負をしている二人を余所にシェリルが唐突に口を開いた。

「諸悪の根源を倒した翌日に停戦合意、即、記念式典……随分手際が良いと思うのですが、シキ君はどう思いますか？」

「シェリルはこの手際の良さに裏があるんじゃないかって考えてんのか？」

「えぇ。停戦合意自体は予想の範疇です。記念式典が行われる可能性もありました。ただ、それならば何故王都から離れた離島なのでしょうか？」

「言われてみれば確かにそうだな……」

顎に手を添えて自分の考えを提示したシェリルに、私も改めて考え同意した。

記念式典が行われることとなった場所は、王都ではなく離島。それにいくら諸悪の根源を倒したとはいえ、人の集まり方が尋常ではない。

今更にして思うが、誰かが意図してこの場所に人を集めていると思えてくるな。だが、何故この場所に人を集める理由があるかが分

からない。それが分かれば苦労はしないのだが。

「まあ、何かあるんだったらテオが事前に教えてくれるはずだし、それまでは待機しとくか」

「そういえば、シキ君は第三皇女と仮契約（パクティオー）を行ったらしいのですが、本当ですか？」

「あ、あぁ、だけどそれがどうかしたのか？」

「いえ、ただ訊きたかっただけです。特に意味はありませんので、気にしないでください」

気にすんなって言われても、無駄なことをほとんどしないシェリルに、そのようなことを訊かれたとなると裏があると思ってしまうではないか。

まあ、なんでもないと言うならばそう言うことにしておこう。分からないことを考えても意味がないからな。

そしてようやく掴んだ平和を噛みしめながら、私もなにも考えずに平和を満喫していた。だが、その平和と言うのが仮初めのものだということを、私達はすぐに知らされることになる。

ピシリ、と何かが割れるような音が聞こえた。この騒音のため、最初は聞き間違いかとも思った。

しかしその音に集中すればするほどに、聞き間違いだとは思えなくなる。同じように気づいた者が中にいたようで、騒音で溢れかえっていた酒場が静かになる。

まるでそれは事件の前の静けさのようであった。何とも言えない不気味な雰囲気に、僅かな酔いも完全に醒める。

そして次の瞬間、立っているのも困難なほどに巨大な揺れが私達を襲う。今までの雰囲気のこともあり、酒場の中は恐怖の叫びで溢れかえった。

その間にも揺れは大きくなっていき、止まることを知らない。何かが起こっている。それを瞬時に悟った私は、酒場から飛び出した。

私の目に最初に飛び込んできたのは、揺れにより大地が砕け、崩壊の兆しを見せている現象だった。空中に浮かぶ島が砕け、その残骸がこちらに降り注いでくる。

これを見ただけではなんとも言えないが、これだけははっきりと分かる。

（この場所は、すぐに崩壊する……。どういうことだ……）

既に崩壊は始まっており、完全にオスティアが沈むのも時間の問題と言えるだろう。

仮に『完全なる世界』の生き残りが居たとしても、奴らがこのような行為に出るとは到底思えない。

何が起こっているかは分からない。だがこの場所に人々を集めていたのは、この崩壊が起こると知っていた人物の仕業だ。

式典はより早く、崩壊に巻き込まないように救出するための、ただの口実に過ぎない。

知っていて何故すぐに避難の行動に出なかったのかは、おそらくオスティア全ての住民がここに集まっていなかったから。

ここまでを考えてみると、こんなことを行うような人物は一人しか思い当たらない。

アリカだ。あそこまで冷酷な皮を被り、人々を愛しているあいつしか思い当たる人物は居ない。

「ちっ、あの姫様は何を考えている……ッ！！」

舌打ちをしながら、銃を引き抜き、避難民の頭上に落下する浮遊岩を撃ち抜いていく。撃ち零しを出すわけにはいかないため、塵と

なり消滅させることが出来る程度の威力で、浮遊岩を撃ち抜く。
だがこのままでは埒があかない。避難民を避難させるにしても、これでは時間も数も足りない。

「平和気分は一時中断だ。今は救助活動にあたる。シェリルとユーリはアリアドネー、エルは帝国に救助要請を」
「オレはどうすればいいんだ」
「ティアは私と共に浮遊岩の破壊及び救助活動だ」
『了解！！』

皆の返事を聞いた後、ミカを背に乗せてティアと共に避難民の誘導を開始する。
ここから数キロ先に避難のための飛行船が見えた。おそらくアリカなどが用意したのだろう。
私達の仕事はそこまで避難民を誘導しつつ、浮遊岩を破壊することだ。

ティアは虚空瞬動を使い、直死の魔眼で浮遊岩の死をなぞりそれを殺していく。さすがにそれだけでは浮遊岩は捌ききれない。私はなるべく広範囲の浮遊岩を破壊しつつ、ティアのサポートを行う。
しかし浮遊岩の数は一向に減らず、むしろ増えてきたようにも感じる。視力を強化し、避難状況を見るとここら一帯の避難は終わっていたようだ。
問題はここよりさらに奥の貧民島（スラム）だ。あそこの地形は見た限りでは、かなり複雑な構造をしている上に、救助部隊が少なすぎる。

「ティア、ここらの救助活動はお前に任せる。何かあったときのために神格（ウリエル）の力を返しておく」
「……分かった。アンタも気をつけろよ」

あぁ、と私は短く答えた後にティアに神格（ウリエル）の力を返し、貧民島に向かって移動を開始する。

なるべく見える範囲での浮遊岩を破壊しながら、救助活動を行っている部隊の援護を行う。

すると視界の端で、見たことのある金髪の女性の姿が目に入った。確認するまでもない。あれはアリカだ。

王女であるにも関わらずアリカは自らが出向き、救助活動を行っている。王家の魔法は中々に使い勝手がよく、救助活動に役立っているようだ。

「アリカ、これはどういう……。いや、今は詮索はなしだ。私に何か手伝うことはないか？」

「シキか。ならば手伝ってくれ。今から貧民島を不時着させる」

「分かった。ならばアリカは浮遊岩の破壊を。不時着させるのは私に任せろ」

「何を言っておるのじゃ！！　そなた一人では……」

「大丈夫だ。私を、いや、俺を信じろ」

私はアリカが何かを言おうとするのを遮り、真っ直ぐと目を見据えながら言う。

この場で口論している暇はないということを、アリカは理解しているために、任せたぞ、と一言告げると浮遊岩の破壊に取りかかる。それを見届けた私は貧民島から、飛び降り竜族の力を完全に解放した。

全長にしてみれば貧民島を背に乗せながら不時着させるなど、わけない大きさ。金色の鱗に強靭な牙に爪。まさか、このような形で、完全竜化を使うことになるとは思わなかったがな。

完全竜化した私は貧民島を下から支えながら、なるべく危険のないように貧民島を不時着させる。

そして完全竜化を解除して、再び視界を強化して周りを見渡す。
そこには救助に成功したらしき飛行船があるが、その中にいる避難民の表情は明るくない。

（……さすがに、全ての人々を助けることは叶わなかった、ということか……）

全ての命、全ての人々を救うことなど、単なる幻想だということは百も承知だった。だが、それでも私は全てを救いたいと思った。
それが間違いだとは思ってはいないし、私の信念だ。しかし、それが絶対に叶うことなど有家はしない。犠牲なくしては、何かを助けることなど出来はしないからだ。
そして私はアリカの元に近寄る。

「何故、私に言わなかった……」
「話しても無駄であろう。主は確かに強い。じゃが、主一人ではどうにもならん」
「……だが、未然に食い止めることは出来たかもしれん」
「その可能性はないわけではなかった……。案ずるな、妾はいずれ遠からぬうちに地獄に堕ちる」

そう言いきり、アリカは私に背を向けて歩き出した。その背中は、ついてくるなと雄弁に語っていた。
そして私は一生忘れはしないだろう。今のアリカの表情は、まるで死人のようだった。
こうして、千塔の都と称えられた空中王都オスティアは、地図から消えた。

二ヶ月後、アリカが前オスティア王――――父王殺しとして拘束された。

いつしかアリカは、『災厄の女王』として非難の目で見られることとなっていた。

第三十二撃『崩壊。そして災厄の女王の誕生』（後書き）

アンケートの結果はフェイト√に決定ですッ！！
フェイト四人娘の本名が分からないので、知ってる方が居たら教えてください！！

第三十三撃『千の呪文の男と災厄の女王。めでたい日には盛大に騒ぐのが良いだ

少々ブレイク気味、だけど物語に変化なし。
では、どうぞッ！！

第三十三撃『千の呪文の男と災厄の女王。めでたい日には盛大に騒ぐのが良いだ

アリカが幽閉され、『災厄の女王』と呼ばれるようになってから、早くも数ヶ月の月日が経過しようとしていた。

世界に平和が訪れたにもかかわらず、世界を平和に導くために貢献した者達には、それが仇となって返ってきている。

後に聞いた話になるが、あの魔法は世界を滅ぼす黄昏の姫御子の『反魔法場（アンチ・マジックフィールド）』を姫御子ごと封印することで、世界を救ったようだ。

その代償に王都を中心とする直径五十キロ圏内は魔法の使えぬ、不毛の大地へと変貌したらしい。

そのために魔法の力で力を維持している王都の魔法の力が　なくなり、滅びたようだ。しかしそのようなことはどうでも良い。

結果的に被害は最小限にとどめることは出来たが、全てを守りきることは叶わなかった。

元から叶うはずのない願い。そんなことは始めから分かっていた。だが、それでも、私はそれを成し遂げたかった。

「シキ、どうしたのじゃ……？」

不意に後ろから声をかけられた。振り向けばそこには、不安げな表情を浮かべているテオが居た。

向き直ろうとして、ポタリと何かが床に落ちる音がした。下を向けば、そこには血の点がこぼれ落ちていた。

原因を辿ってみれば、それが私が強く握りしめすぎたせいで、爪が手の皮を破って出てきた血のようだった。

どうやら知らず知らずのうちに手に力が入ってしまい、こうなってしまったようだ。

「その、何を、そのように怒っているのじゃ……？」
「……別にテオに怒ってるわけじゃないさ」

そう、私はテオに怒っているわけではない。自分自身の不甲斐なさに怒っているのだ。
もっと早くこの事態の解決に臨んでいれば、この被害をなくすことが出来たかもしれない。
これにより出てしまった被害は、私のせいと言ってしまっても過言ではない。むしろ私のせいといえる。

「妾達はいつでも繋がっておる。離れていても、気持ちは常に同じ場所にある」
「テオ……」
「じゃから、シキはシキのやりたいことをやるのじゃ」

真っ直ぐに私の瞳を捉えながら、テオはそう言ってくる。
余りの真っ直ぐさに、私はふっと笑みをこぼしながら、視線を宮殿の外に向ける。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる」
「うむ、土産を期待しておるぞ？」
「あぁ。ちゃんと持ってくるよ」

私は片手を上げながらテオの言葉に答え、宮殿の策に足をかけ、一気に飛び出す。
向かう先は『紅き翼』が居る場所。既に場所は分かっている。そして目的はただ一つ。
アリカを救出することだ。

◇

元凶が滅び、戦争が終わったからとはいえ、世界から全ての戦いがなくなるというわけではない。

現在でも世界各地で紛争が勃発し、儚い命が散っていっている。

そして、紛争の傷跡は、人々にも傷を残していく。

紛争が終わった地域には死骸だけでなく、怪我により死にゆく命も山ほどある。

現にヴァルガン地域にも紛争により、死にゆく命がたくさんあった。

そんな場所に『紅き翼』であるメンバーのナギ・スプリングフィールドと青山詠春、ジャック・ラカン、そしてアルビレオ・イマの姿があった。

彼らは『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』として各地を巡り、治癒活動を行っていた。それは幽閉されているアリカの願いであり、頼みであったからだ。

今の彼らをアリカを助けにいかない薄情者と見るか、違うと見るかは人それぞれだろう。

しかし、助けにいきたくとも、完全にアリカを助け出すには二年後に決定している処刑の時しかなかったのだ。

だからこそ今は治癒活動を続け、来たるべき時のために我慢しているのだ。歯がゆくとも手が出せない状況に、ナギ達は歯を噛みしめるしかなかった。

（くそ……）

そしてその中でも一番苦しいのはナギであった。

彼はアリカを想い、一刻も早く助け出してやりたいと願う反面、

戦い以外では何もすることが出来ない自分に、怒りすら覚えている。
英雄などと呼ばれ、世界を救うことが出来たとしても、愛する女性の一人すら救えない。

「ナギ、あまり思いつめるものではありません。アリカ王女を助け出すには、処刑の時しかないのですから」
「分かってる……。分かってるけどよ……」

アルの言葉にナギは拳を握りしめる。
そう、分かっているのだ。自分達には二年後にやってくる処刑の時にしか、アリカを完全に救い出す方法はないということを。
だが、それはあくまでも『紅き翼』である彼らには、ということだ。

ふわりと『紅き翼』のメンバーの元に一人の男が現れる。
銀髪に黒い外套。長い銀髪は三つ編みにされており、腰にはライフルが携えられている。見た目は男性にも女性にも見えるほどに整っている。
そしてこの男を『紅き翼』は知っていた。以前は敵対し、現在は仲間のような関係を保っている人物だ。

「シキ、どうしたんだよ。今は帝国で皇女様の側についてるんじゃないのか？」
「あぁ。だが用事があって貴様等に会いに来た」
「用事？　なんだよ、用事って」

シキに話しかけられたナギは、シキに向き直りながらそういう。
普段通りにナギ本人は振る舞っているようだが、あまりプライベートで関わりのないシキですら、それが無理しているのだということが分かる。

「今からアリカを助けに向かう」
『――――ッ！？』

シキの発した言葉に、その場の全員が目を見開き、驚愕する。
今、シキが来る前にもアリカを助けることで話し合いをしていた。
もちろんそれは‘今’助けるということではなく、‘未来’で助け出すということに過ぎない。
しかしシキは何といった？
‘今から’アリカを助けにいくと、そう言いきったのだ。

「あなたも分かっているのでしょう？　アリカ王女を助け出すには処刑が決行される日、それしか上手く助け出す方法はありません」
「確かにそうであったかもしれんな。だが、そうでなくなったからわざわざ来たのだ」

いち早く立ち直ったアルの言葉に、シキは平然と答える。
あくまでも『紅き翼』には処刑が決行される日にしか助け出せないのであり、他の者が皆でそうであるかと訊かれれば、そうでない。
神格の力を取り込み、力を手に入れたシキならではの救出方法がある。そもそも、何故このように簡単なことに、誰しもが気づけなかったのだろうか。

「簡単なことだ。アリカを救出したことがバレぬよう、身代わりを用意すれば良いだけのことだ」
「……確かにそれができたら苦労はしねえが、出来ねえからこうなってんだろうが」
「出来ぬことをわざわざ伝えに来るものか。もう一度だけいう。アリカを助け出す手だては、既に構築済みだ」

シキが嘘を言っているようには見えない。そもそもシキという人物が、嘘をつくような小さい人間ではないことを『紅き翼』は十分に知っている。

そして、シキの言葉に真っ先に反応したのはナギだった。

本来ナギはアリカを一刻も早く助け出してやりたかった。そんなときにやってきたシキ。さらには助け出せるという言葉。

そんな言葉に今のナギが食いつかないはずがない。

「身代わりって、誰を身代わりにするんだよ。まずはそこから問題だぜ？」

「案ずるな、抜かりはない。そもそも私がそのような問題点を残すはずもない」

自信満々にいうシキにいつもなら呆れそうなところだが、今回に限ってはそれが頼もしく見えてくる。

まだまだ先だったアリカ救出作戦。それがこんなにも早く決行できるようになったのは、他ならないシキのおかげだ。

しかし、オスティアを滅ぼしてしまったのはシキが助ける力があったのに動かなかったから。これは、彼のただの罪滅ぼしでしかない。

「今すぐに向かおう。それと、同行者は一人で構わない。大人数だとかえって面倒になる」

シキの言葉を受けた『紅き翼』のメンバーの視線がナギに集まる。

皆がナギに行ってこいと言っているのだ。もちろんナギ自身も自ら行こうとしていたし、譲るつもりも端からなかった。

ナギは一歩踏みだし、シキの隣に立つ。それを見たシキが口を開く。

「行くぞナギ」
「おう」
短いやりとり。しかし、この二人にはこれで十分すぎるほどだった。
二人は同時に地を蹴り出し動き出す。
目的地はアリカが幽閉されている場所――連合最辺境ケルベラス無限監獄。

◇

私とナギは数日掛かりで、アリカの幽閉されているケルベラス無限監獄にやってきていた。
かなりの距離があったにも関わらず、ナギは全く休もうとせずに走り続けたために、ほとんど体力が底をついてしまっている。
少しでも休んだ方が良いと言ったのだが、ナギは私の言葉を全く聞こうとせずに、走り続けた。
私はナギのペースに合わせての移動を行っていたために、体力はほとんど消費していない。

現在は作戦の見直しの名目の元、ナギを少しでも休ませるために、ケルベラス無限監獄の警備兵に見つからないように身を隠している。
監獄と言う名だけあって、警備はかなり厳重で、逃げだそうにもそうそうは逃げ出せまい。それの逆もまた然り。
監獄に不用意に近づけばすぐに感づかれてしまうだろう。それに私たちは、アリカと面識があるということがバレてしまっている。無闇には近づけまい。
……二人ともそれなりに目立つ容姿をしているしな。

「（作戦をいう。よく聞いておけ）」

「（作戦なんてどうでも良い。早く姫さんを助けに向かうぜ）」
「（だから話を聞け）」

無闇に監獄に飛び込もうとするナギの首根っこを掴み、無理やり座らせる。
全く、自らの軽率な行動で全てが台無しになるということを、こ奴は分かっていないようだな。
ここで私達がアリカを救い出しに来たことがバレれば、あとがどうなるか分からない。そうなってしまえば、アリカを救い出す手立ては完全になくなってしまう。

じたばたと暴れるナギを無理やりに座らせながら、私は独自ルートで手に入れた監獄内の地図を広げる。
地図には監獄の細部までが事細かく描かれており、アリカの幽閉されている場所も示してある。
アリカが幽閉されている場所は、監獄内でも最も深く、侵入が難しい場所だ。そこまで物音一つ立てず尚且つ見つからずに向かうのは、困難を極める。
普通であれば絶対にたどり着くことは出来まい。

「（良いか？　軽はずみな行動は慎め。貴様は何ヶ月アリカ救出を待ったのだ？　あと数十分、それだけでアリカを救い出せるのだ）」
「（……分かってる。で、作戦ってのはどんなんだ？）」
「（作戦といっても大それたものではない。ただこれを羽織るだけだ）」

そう言いながら私は、ナギに私が現在も羽織っているのと同じローブを渡す。
これは以前にテオやアリカに渡したローブの改造版で、強力な認知阻害の力が付与されている。

ただ、このローブも全知全能の完璧なる認知阻害を備えているわけではない。

「（これを着ても完全にバレないというわけではない。声・触感・魔力などには反応する。あの場所に入ってもなるべく人を避けることだ）」

「（へっ、今更そんなこと言われるまでもねえよ。ここまで来たんだ。そんな失敗は出来ねえ）」

ナギはそう言いながら、私が手渡したローブを羽織り、立ち上がる。それに連動し、私も同じように立ち上がる。

そしてまず向かったのはアリカの幽閉されている場所へ、最短距離で行くための外壁だ。

「何でこっちから来たんだ？　認知阻害が効いてんなら正面からでも大丈夫なんだろ？」

「それもそうだが、どうせなら近い方が良いだろ？」

腰から銃を抜き放ちながら、ナギを横目で見つつそう言う。

スコープを覗き、外壁の死の点を確認してそれを撃ち抜く。外壁を破壊すれば、瓦礫となり音を立ててしまう。しかし外壁を殺してしまえば、塵となり音を立てることがないからな。

塵となった外壁はあとで『創造再生』で直しておけば問題あるまい。

「ナギ、余り時間は掛けない方がよい。さっさと終わらせるぞ」

「当たり前だ。待ってろよ、姫さん」

ナギを先頭に私達はアリカの居る場所に向かって動き出した。

◇

場所は変わり、ケルベラス無限監獄の一番深層部。そこは警備も厳重になっており、ネズミ一匹逃がさないとばかりの剣幕で、警備兵が見回りをしている。

それだけでなく部屋自体にも魔法が使えないような仕組みを施してあり、魔法を使っての脱出も不可能だ。

そんな場所にアリカは居た。食事をとっていないのか、頬がやつれ、両手両足も繋がれており、ボロボロの状態になっている。

幽閉されていた今まで、アリカは自分から食事に手をつけようとはしなかった。

こちら側からしても、アリカに餓死されては困る。そのために必要最低限は無理矢理にアリカに摂取させていた。

幽閉されているアリカは、一日たりとて想い人である者のことを忘れていなかった。

彼女は多くの憎しみを引き受けて処刑されることで、この世にある不幸を少しでも減らせるならば、本望だと思っている。

そんな考えを自ら抱かせるまでに、アリカは精神的にもボロボロになっていた。

ふと、誰かの声が聞こえたような気がした。もしかしたら間違いかもしれない。

だが、今の彼女がこの声を聞き間違えるなどということはしないだろう。

（まさか……ナギ……？）

聞こえてきたのは想い人であるナギの声。しかしそれは幻聴なのだと振り払う。

ケルベラス無限監獄の警備が厳重ということは、アリカもよく知っている。同じように最深部に幽閉されている者が脱走しようとし、幾度となく失敗していたからだ。

だが次の瞬間、アリカの幽閉されている部屋の外壁が音もなく塵となる。

「よお、助けに来たぜ。姫さん」

そこに立っていたのは『千の呪文の男』と『皇女の影』だった。

◇

「（シキ、まだつかねえのか？）」

「（もう少しだから静かにしていろ。見つかれば全てが無駄になるのだ）」

私達はケルベラス無限監獄の外壁を殺し、中に侵入してからしばらく経過していた。中は地図で見るよりも広く、アリカが居る部屋に到着するまでにかなり時間が掛かっている。

認知阻害のおかげで警備兵にはバレてはいないものの、先ほどからナギがうるさくてたまらん。

アリカのことを想っているのは別に構いはしないが、少しは落ち着いてもらいたいものだ。

警備の厳重さは下の階に向かうにつれて、厳重になっていく。現に今も警備兵やら監視カメラやらが、目を光らせている。

それにしても、最深部に幽閉されているとは、面倒な場所に幽閉されているものだ。

警備兵と監視カメラを警戒しながらも、私達はアリカの幽閉されている部屋の正面ではなく、脇の外壁の場所にまでやって来た。

「なんで正面じゃなくて脇の外壁なんだ？」
「アホか、貴様は。正面から行けばいくら認知阻害をしているとはいえ、バレてしまうであろう」
私がそう言うと、『あっ、そういやそうだな』といいたげな表情をしていた。
それに若干呆れながらも、私は外壁の死の点を魔力弾で貫き、外壁を殺す。外壁が塵となり、道が開く。
中にはかなりやつれてしまっていたアリカが、信じられないものを見るような表情で、こちらを見ていた。
「よお、助けに来たぜ。姫さん」
「ナギ……？　シキ……？　何故、お主等がここに……？」
「決まってんだろ。あんたを助けに来たんだ」
「何故じゃ……。何故危険を犯してまで妾を助けになど……。妾はかの戦争を起こした大罪人『災厄の王女』なのじゃ。妾の救済に、意味などない……」
力なくいうアリカの目には光が宿っていない。ナギに会えて嬉しいことは嬉しいのだろうが、それ以上に罪の意識が強いのだろう。
助けに来たというのに、わざわざこのようなことを言われることになろうとはな。
同じようなことを言われたナギはというと、ため息をつきながら口を開く。
「理由を言わねえと分かんねえのか、あんたは。だったら言ってやるよ。あんたが――好きだからに決まってんだろ？」
「……は？」

ナギの告白に対してアリカは、予想もしていなかったとばかりに間抜けな声を漏らす。顔も赤くなり、まんざらではないようではあるがな。

しかしさすがは主人公（ナギ）、あのときの告白練習の時にも言ったが、やはり本番に強いタイプだったようだ。

本来であれば止めに入るのは嫌なのだが、今回ばかりは止めに入らないわけにもいくまい。

「ラブコメっているところ悪いが、さっさと脱出するぞ」

「ら、ラブコメ？」

「はいはい。さすがは箱入り娘、そんなのも知らないんだな」

ラブコメという言葉に首を傾げるアリカに私は呆れながら、アリカを拘束している拘束具を外す。

そして『創造再生』を使い、アリカとそっくりな人形を創り出す。これが偽物と気付けるのは、おそらくはナギクラスの魔法使いだけだ。

アリカにも認知阻害をかけ、即座にケルベラス無限監獄から脱出する。アリカを助け出した以上、ここに長居する意味は皆無だからな。

殺してきた外壁を『創造再生』で創り出しているため、抜かりはない。

外に出た私達はすぐさまにケルベラス無限監獄から離れ、大分離れた位置にてようやく立ち止まる。

「さて、私の出番はここまでだ。あとは二人でラブコメってろ」

「ラブコメってる言うな。だけど、ありがとな」

「あぁ」

私はナギにそう告げると、その場をあとにする。
もう『紅き翼』の　メンバーと共に行動をする必要もあるまい。
あとは二人で勝手に幸せになってくれ。
私はタバコを取り出し、空を見上げながら思った。

◇

二年後。予定通りアリカは処刑された。
しかし、処刑されたのがアリカによく似た人形だということに気づく者は誰一人として存在していない。
災厄の女王はこの世から完全に姿を消し、アリカは全てから解放された。

こうして千の呪文の男と災厄の女王の物語は幕を閉じ、新たなる物語の歯車が回り始めた。

第三十三撃『千の呪文の男と災厄の女王。めでたい日には盛大に騒ぐのが良いだ

感想待ってますッ！！

第三十四撃『そうだ京都に行こう！！私はどこに行ってもトラブルに巻き込まれる』

無難に京都編を……。

第二章の最後の主人公設定に挿絵を入れましたッ！！

では、どうぞッ！！

第三十四撃『そうだ京都に行こう！！私はどこに行ってもトラブルに巻き込まれる』

偽物のアリカの処刑が決行されてから、早くも数週間の時が過ぎた。私は帝国に戻り、テオやシアさんにミカと共に平穏な時を過ごしている。

あれから紅き翼の面々がどのような生活をしているかは分からないが、おそらく奴らなら上手いことやっているだろう。

アリカには強力な認知阻害のローブを渡してあるし、万が一バレそうになっても誰かが対処するだろうからな。

大きな戦いが終わったために、帝国に仕えている銃騎士隊や剣騎士隊の面々は休暇を与えられ、故郷に里帰りしている。

そのためにエルとティア、あとはアリアドネーのユーリの三人で遊びに行ったらしい。お土産を買ってくるとの伝言があったからな。

ちなみにナギとアリカは婚姻したとの報告があった。結婚式はやってはいないが、魔法世界の婚姻制度が旧世界と同じとは限らん。細かいことはいちいち気にしないでおくとしよう。

……さて、何故私がこの話をしたかと言えば、最近の悩みが関係したりしている。

「シキ！！　妾達も結婚するのじゃ！！」

私の部屋の扉が大きな音を立てながら開け放たれ、そんな声が私の耳に届いてきた。

そう、ナギとアリカが婚姻したことを知ったテオが、私に結婚しろと言い出してきたのだ。

時間が経てば人間が成長するように、長命種とはいえ成長するものだ。何を言いたいかと言えば、テオもかなり美人になったということだ。

まだまだ子供の時にそのようなことを言われたとしても、軽く流せたのだが、今は流石にそのようなことは出来ない。

あれはテオも衝動的に言っているのではなく、よく考えた末にはじき出した結論であり、私を生涯のパートナーとして迎えようとしているのだ。

私もテオのことが嫌いというわけではない。ただ、結婚したいとは思えないのだ。

「開口一番にそれはねェんじゃねェの？　それと、それを朝の挨拶代わりにするな」

「むぅ、相変わらずシキは妾の気持ちに応えてくれぬのじゃな？」

「別にテオのことが嫌いって言ってるわけじゃない。むしろ好きだ。だからちゃんと考えさせてくれ」

「ま、まあ、妾のことをちゃんと考えてくれてるのじゃから、しつこくは言わぬが……」

私が真面目にそう言うと、幼児体型から発達した豊かな胸の前で指をもじもじさせながら、頬を僅かに紅潮させて言う。

……しつこくは言わぬがと言っているが、割と前から言っているような気がするが、気のせいだったろうか。

とにかく結婚するにしてもよく考えねばならんし、何よりも相手は皇族。どこぞの馬の骨とも知れぬ輩と、娘を結婚させるとは思えんからな。

（だいたい、何故テオは私と結婚したいのだ？）

根本的な問題としては、何故テオは私と結婚したいのかということだ。特に何かをやった覚えはないし、どこで私はテオに好かれてしまったのやら……。

その理由を私が唸りながら考えていると、部屋にもう一人誰かが飛び込んできた。
飛び込んできたのは久しぶりに登場したミカだった。なにやら手に手紙らしきものを持っているのだが、いったい誰宛だろうか。

「お父様!!　ナギから手紙がきましたです!!」
「ナギから?」

ミカの言葉に私は思わず聞き返してしまった。
ナギとはアリカを助けにいった以来会ってはいないし、紅き翼のメンバーとはアリカを助けにいくとき別れた以来会ってはいない。
とりあえず私はナギから来たという手紙をミカから受け取りながら、中身を見る。どうやら映像などではなく、筆で書かれたもののようだった。

『シキ、元気か?
俺たちは相変わらず元気だぜ!!
まあ、ごちゃごちゃ書くのは慣れてねーから、用件だけ話すことにする。
今度、旧世界の京都にアリカと姫子ちゃんとみんなで行くんだが、シキも一緒に行かねえか?
地図に書いたゲートボードの場所で待ってるから絶対来いよな!!

紅き翼一同より』

書き慣れてない歪な字を読み終えた私は、手紙と同封されていた地図を見る。
どうやらナギ達が指定したゲートボードは、ここから大した距離もないようで、行くとすれば数時間も掛かるまい。
それはどうでも良いのだが、姫子ちゃんと言うのはいったい誰の

ことなのだろうか……。気にしても埒があかぬし、第一向こうに行けば会えるだろう。

「ナギからはなんと書かれていたのじゃ？」

「なんでも旧世界の京都に行くから一緒に行かねェかって。どうする、ミカ」

「あたしは行ってみたいです。旧世界には興味がありますですから」

「じゃあ決定だな」

そういった私の脇で『妾も仕事がなければ一緒に行けたものを……』と悔しがっていた。最近はなにやらいろいろあるようで、シアさんにしごかれていた。

とにかく、ミカが行きたいと言うならば是非とも同行させてもらうとするか。ちょうど書かれていた日程的には、依頼も入っていなかったしな。

しかしあれだな。旧世界では確か魔法文化が表向きには公表されてはいなかったはずだ。そんな場所にこの外套で向かったら、コスプレをしているか変人ととられても仕方ない。

ふむ。まずはあちらに行くにあたって、着ていく服をどうにかせねばならんようだな。

そう考えた私は、自室に戻り、旧世界に行っても平気そうな服装はどんなものであるかを考えることにした。

◇

あれから二日後。私は指定されたゲートボードにて、ナギ達――紅き翼のメンバーが来るのを、柱の一柱に体重を預けながら待っていた。

時間的には昼にと指定されていたはずだが、少し早めに来てしまったのか、紅き翼のメンバーの姿はない。既にあれこれ三十分程は

待っている。
もう来てもおかしくない時間帯なのだが、一向に来る気配はない。ミカも大分退屈してしまったようで、私に肩車しながらぐったりとしている。

「むはぁ～……。暇すぎますです……。――ってあれはナギ達ではないですか？」
「ん？　おっ、本当だ。やっと来たのかあいつらは」

ミカが指さした先には、なにやら周りをキョロキョロとしている紅き翼の姿が見える。全員が戦いの時に着るような服ではなく、旧世界に行くにあたっての服装をしている。
どうやら紅き翼は私のことを探しているようなのだが、何故分かり易い場所に居るにも関わらず、誰一人として気づく者がいないのだ……。
このままであれば気づかれないのではないかと思った私は、自ら紅き翼のところに向かうことにした。柱から体重を掛けるのをやめ、紅き翼の元に歩き出す。

「お前等はどこを見てるんだ。探せばすぐに分かる場所に居たのによ」
「……え？　お前、まさかとは思うがシキか……？」

私が話しかけると、信じられないと言わんばかりの表情をしながら、ナギがそう問いかけてきた。他のメンバーも同意見だったようで、しきりに頷いていた。

「まさかとはなんだ。一緒に戦った奴の顔も忘れたのか？」
「い、いや、いつもは黒い外套だったし、三つ編みだったから……」

ナギの言葉を受けて私は、何故こ奴らが私の存在に気づけなかったかを納得してしまった。

今の私の服装は旧世界に行っても怪しまれないように、ジーパンにロングティーシャツという簡単な服装をしている。

さらには一応は旅行ということだから、服装だけではなく髪型も変えてきた。いつもは三つ編みだが、今日はポニーテールにしてまとめている。こちらの方が楽にまとめられるしな。

「まあ、今日のお父様なら見間違えても仕方がないと思いますです」

「そうかもな。で、そっちの女の子は？」

「おう。こいつが姫子ちゃん……じゃなくてアスナだ」

私はナギの隣にいた少女――アスナを指差しながら問いかけた。

なるほど、この女の子が手紙に書いてあった姫子ちゃんとやらか。

地面につきそうな程に長い髪を、ツインテールにしてまとめている。その瞳には光が宿ってはおらず、ほとんど感情がないかのように見える。

「（まあ、気にするほどでもないか……）で、京都って言ってもどこに行くんだ？」

「詠春の実家だ。実は詠春の野郎も結婚してよー、近衛家とかに行くみてーなんだ」

「ほぉ、詠春も結婚していたとはな」

驚きだ、と私は付け加えて肩をすくめながらいう。

あの堅物詠春が、紅き翼の中で二番目に結婚するとは……。人生、何が起こるか分からないと言うが、本当に何が起こるか分かったものではないな。

とりあえず、もうミカが待ちきれそうにもなかったために、ゲートボードに乗り、旧世界へと転移した。

◇

ゲートボードから転移し、旧世界にやってきた私達は詠春の故郷である京都にやってきていた。

この京都の文化は魔法世界では見られるようなものではなく、素晴らしいものだということを改めて実感させられた。

転生してから既に十年以上経っているために、前世の京都とは比べられないが、戦いを通したからこそこの素晴らしかが分かるのだろう。

「ここが京都か……」

「屋敷はここを真っ直ぐ行ったところにある。もう少しの辛抱だ」

「詠春の住んでる屋敷か……。どんなのだろうな？」

「楽しみですね、ラカンさん、ガトウさん」

「だな。それに、詠春の嫁さんの顔も見ねえといけねえからな」

私がそのようなことを考えていると、あちらは先に進んでしまっていたらしく、階段を上がっていってしまっていた。

ジャックの言うとおり、あの堅物詠春と結婚した妻と言うのが、どれほどかと言うのは確かに気になるな。詠春が惚れるほどだから、相当の美人ということは間違いないだろうな。

ふと、私はある視線に気づく。ミカは何故かアリカに懐いてしまい、共に居るのだから、この視線はミカのものではないはず。

ならば誰のものだろうか、と私は思いながら視線を傾ける。するとそこには私を見上げているアスナが居た。

「……行かないの？」

「今から行くところさ。アスナちゃんはナギについてかなくて良か

ったのか？」
「……うん。シキと一緒に行くから」
アスナはそう言い無表情ながら、私に手を差し伸べてくる。どうやら手をつなげということらしい。
私はふっ、と微笑みながらアスナちゃんの手を握り、後ろからナギ達のあとを歩くことにした。
感情表現に乏しいアスナちゃんではあるが、手はちゃんと温かく人間味を帯びている。まあ、私より人間なのだから普通か。
「おーい、シキーッ！！　姫子ちゃん！！　早く来いよーッ！！」
アスナちゃんの負担にならないようにゆっくりと歩いていると、先に歩いているナギが手をぶんぶん振りながら、私たちに叫んできた。
全く……世界を救った英雄とはいえまだまだ子供。こういった楽しい場に来れば、英雄などという肩書きは無意味か。
「はぁ……。あいつは騒がしいな……。アスナちゃん、ちょっと失礼するぞ？」
「……？」
私が何をするかよく分かっていない表情をしていたアスナちゃんに、私は若干苦笑しながら、アスナちゃんを持ち上げる。
そしてそのまま肩にアスナちゃんを乗せて肩車をする。アスナちゃんの歩みに任せるよりも、こうした方が早く進めるだろうからな。
「かっ飛ばすぜ？」
「……うん。あと、すごい高い」

アスナちゃんの言葉に私はそうだな、と答えながらナギ達の居る場所に向かって走る。
別に瞬動を使うような距離ではなかったから、こうしたのだが、何気にアスナちゃんが喜んでいたから良かったかな。
……いまさらに思ったのだが、私は実は幼女趣味（ロリコン）なのではないか？
一番最初に出会ったのは幼少時代のユーリ。次にミカで、その次は幼少時代のテオ。そして現在はアスナちゃん……。明らかに幼女趣味（ロリコン）ではないか……。

「んあ？　どうしたんだよ、シキ。いつもの自信満々のテメーらしくねえじゃねえか」
「自信満々かどうかは分からんが、今は以外な事実が発覚して落ち込んでいるところだ」
「あ？　よく分からねーけど、お前ぇも悩むんだな」

失礼だな筋肉達磨（ジャック）。私とて人間、もとい竜神なのだから落ち込むことはある。それが幼女趣味（ロリコン）ということを知ったからとは、口が裂けても言えんが……。
私を慰めるように頭をポンポンと叩くアスナちゃんを可愛らしく思いながら、ようやく近衛家の屋敷の前に到着した。
そして、屋敷の扉を開くと私の視線にまず入って来たのは、たくさんの巫女さんの姿だった。

『いらっしゃいませ。紅き翼の皆様！！』

聴覚に入ってきたのは、その巫女さんの大声量の歓迎の声だった。
さすがにそれだけの人数に一斉に言われると、私でなくとも驚いてしまうだろう。まあ、私はほとんど驚いてはないのだが。
とりあえず紅き翼のメンバーと私とミカはＶＩＰ待遇らしく、今日は歓迎会を行うらしい。

実際は歓迎会と言う名の飲み会なのだが、この際気にしないでおくとしよう。気にしたら負けだと言う奴だ。

そんなコトを考えながら、私は案内されていく紅き翼のメンバーについて行こうとしたのだが、不意に一人の巫女さんに呼び止められてしまった。

「あ、あの……。シキ様のご活躍はお聞きしております。えっと、その……さ、ささささ、サインなど頂けないでしょうか！！」

巫女さんは顔を真っ赤にしながら、私に色紙とペンを差し出してきた。すると周りではずるいやら、抜け駆けしたとやらで、騒ぎ出してしまった。

何故サインなどを求めるかを訊いてみたところ、私の依頼をこなす様が尾鰭をついて、広がってしまったらしい。

なにやら僅かな金額で危険な依頼をこなしたり、無償で錆びれかかっている村を救ったりと……上げればキリがないらしい（巫女さん談）。

それにより旧・新世界問わずにファンクラブが設立されているようで、この中にも私のファンクラブに入っている巫女さんが居るみたいだ。

（……何故無断でファンクラブなど設立しているのだ……？）

別にファンクラブが在ることが嫌なことではない。むしろファンクラブがあって嬉しいくらいだ。

だが、せめて私に一言告げてもらいたかったのだが……まあ、本人に告げていたら意味はないのかもしれんが。

とにかくサインをくれと言われたのだから、やらんわけにもいくまい。私は二つ返事でそれを了承し、サインを書くことにした。

◇

――何事も二つ返事で了承するのは後悔が残るだけだ。
今日はこの教訓を私の胸に刻み込むことにしよう。
何故かって？　そんなことは簡単だ。あのサイン会のおかげで、腕が痛くなってしまったからだ。
思い返してみれば、普段から文字を書くどころか、筆さえ握ってなかったのにも関わらず、あれだけの量を書けば手が痛くなるも致し方ないだろう。

それに、私が来たときには既に歓迎会と言う名の飲み会は始まっており、ナギやジャック、アルにガトウまでもが酔っていた。
さすがに子供であるミカやアスナ、もう子供といって良いかは分からないが、タカミチなどは酔っていなかったが……。
酔いつぶれて寝てしまっているナギ達を見ながら、ふと詠春がこの場に居ないことに気がついた。そういえば飲み会が始まってから、一度も詠春の姿を見ていないな。
しかもなにやら外が騒がしいようだが、何かあったのだろうか。
そのようなことを考えていると、部屋の中に今まで居なかった詠春が飛び込んできた。

「ナギは居るか！？　って酔いつぶれて寝てる！？」
「何騒いでんだ。ナギじゃないとダメなのか？　そうじゃないなら、俺に話してみろ」
「クロカミが協力してくれるなら、そっちの方が心強い。実はな――」

詠春の話によれば、総本山内の湖に封印されていた、大鬼神『リョウメンスクナノカミ』の封印が解けたらしい。
協会の呪術師は再封印に専念しなければならないらしいのだが、

どうもそのままでは封印ができないようだ。
で、まずはスクナを攻撃して、封印させようとしていたらしいのだが、それを頼もうとしていたナギやジャックが酔いつぶれている状況に陥っている。

「なるほどな。分かった、俺が攻撃してスクナの力を弱める」
「本当か！？」
「あぁ。（それに、竜神である私にどこまで食らいついてこれるか、見たいからな）」

本来の目的を詠春に隠しながら、詠春と共にスクナの封印が解けてしまったと言う場所に向かう。
屋敷を出てすぐに、スクナの姿を視界に納めることが出来た。この屋敷からあまり距離が離れてはいないが、それでもかなりの大きさだな。
周りには封印するための作業を行おうとしている呪術師も、大量に配置されている。
とりあえずスクナの封印が解けてしまった場所にたどり着いた私は、いつものように銃を抜き放とうとしたのだが、伸ばした手が宙を掴む。

「あっ……そういえば銃持ってきてなかったな」
「じゃあどうするんだ！？　銃無しでも戦えるのか？」
「……あまりこの俺を見くびるなよ。‘この程度’の奴に銃を使うまでもない」

詠春の言葉に少々ムッとしながら、瞬動を使い、スクナの眼前まで一気に迫る。
銃無しでの戦いはバルドとの修業を思い出すな。この世界に来たばかりのときは、バルドに氣の使い方を教えてもらっていたな。

この世界に転生したばかりの時のことを思い出しながら、右手に氣を集中させる。そしてある程度氣を溜めた右手を、スクナの顔面に向かって振り抜く。

人間のものとも、生物のものとも言えぬ肌を殴りつけ、倒れそうになるスクナの後ろ側に瞬時に回り込み、後頭部を蹴り抜く。

獣のような雄叫びを上げながら、スクナの巨大が前に倒れ込む。

ふん、この程度で神の名を語るなど、片腹痛いわ。せめて今の百倍の力を持ってもらわねば、神の名を語るなど烏滸がましいにもほどがある。

とりあえず攻撃の手を緩める気は毛頭ないために、私は倒れ込んだスクナの後頭部に向かって踵を振り下ろす。

ゴバァッ！！　という音とともに、スクナの頭にあたる部分の地面が陥没する。ついでに二回ほどスクナの頭に踵落としを叩き込む。

そして一旦スクナから距離を置き、スクナが立ち上がるのを待つ。ゆっくりとした動作で立ち上がったスクナは、私に狙いを定めたのか、巨大な拳を振り下ろしてくる。

それに対して私が行う行動は右手を拳に対して掲げるだけ。

刹那、私の右手にスクナの拳が叩きつけられる。しかし私の体が吹き飛ばされることはない。スクナの拳による威力は全て後ろに受け流したからな。

はぁ……神の名を語るからどれほどかと思えば、これほどまでに弱いとはな。正直、落胆したよ。

実力のほどは分かった。これからいくら戦おうと、スクナの位置付けが変わることはあるまい。

そう認識した私はスクナの腕をつかみ、そのまま背負い投げの要領でスクナを背中から地面に叩きつける。

「『神格王が命じる。我に従え、我に逆らうな。いつ何時も我の呼びかけに応じ、力を振るえ』」

私が言葉を発するときだけに、神格王の力を解放しながら、スクナに向かってそういう。するとさっきまで暴れていたスクナが急に大人しくなり、動かなくなる。

なるほど。神と名の付く相手に対してはこの言葉による洗脳が可能と言うことか。試してみただけだったのだが、成功してなによりだ。

スクナの力を弱めるという役目を果たした私は、詠春の脇に着地する。そして、それと同時に呪術師が封印の術式を発動し、スクナを封印した。

「呆気なさすぎだ。これだったら酔ってるナギでも余裕だったろうよ」

「……いや、あそこまで圧倒的かつ短時間でスクナを倒せるのなんて、そうは居ないと思うが……」

「そんなことないだろ。詠春だってやる気になればあの程度、楽に倒せる」

お前はまがりもなにも世界を救った英雄なんだからさ、と付け足しながら私は近衛家の屋敷に向かって歩き出した。

さっきの戦いは良い暇つぶしと、眠気を誘う戦いだったな。今日はゆっくりと眠れそうだな。

◇

次の日。私は近衛家をあとにするため、屋敷の門の前に立っていた。見送りには二日酔い状態の紅き翼にアスナちゃんとアリカが居た。

アリカはあまり飲んではいないのか、二日酔いというわけでは無さそうだった。
ちなみに昨日にスクナと戦ったことをナギとジャックの二人に話したのだが、何故起こさなかったのかとせがまれた。
正直、あのとき起こそうとしても起きなかったと思うが、面倒なので何も言わなかった。

「……シキ」
「ん？　どうしたアスナちゃん」
「もう行っちゃうの……？」
「あぁ。俺の休暇は昨日一日だけだし、それ以上は休めない」

私は乏しい表情の中ではあるが、いくらか寂しげに見えるアスナちゃんの頭を撫でながらそう言う。

「また……会える？」
「もちろんだ。……そうだ。これをアスナちゃんにやるよ」
「ネックレス……？」

私はそういいながら、ジーパンのポケットからネックレスを取り出して、アスナちゃんの手に乗せる。
これは以前にテオにプレゼントしたのと同じで、絶対防御の力が付与されている。
発動することはないとは思うが、もしものことを考えて一応渡しておいた。

「これは俺からアスナちゃんにプレゼントだ。これがあれば、俺たちは会えなくても友達だ」
「……うん。ありがと、シキ。またね」

アスナちゃんの言葉に私もまたね、と答えながら、近衛家の屋敷をミカと共にあとにする。

さて、休暇も終わったことだし、これからまた忙しくなるな。肩車しているミカに話しかける。

「次の依頼はなんだ？」

「次はドラゴン狩りですね。ランクはＳＳＳ（トリプルエス）ランク。肩慣らしには申し分無さそうですね？」

「そうだな。じゃあ、行くか」

私はそういいながら、魔法世界へと戻るのであった。

第三十四撃『そうだ京都に行こう！！私はどこに行ってもトラブルに巻き込まれる』

◇次章予告◇

各地を回り、救援活動を続ける狙撃手。
そこで一人の少女と出会う。

「マナか。良い名前だ」

名をマナ・アルカナといった。
彼女はその眼に魔眼を宿し、万物の死が視えた。

「覚えておけ。それが死の重みだ」

彼は教える。
死の重みを……。
明かされた狙撃手の伽藍の五年間。

「お前の求める『力』は、本当にお前の求める『力』なのか？」

「証明してやる……。俺の『力』が『本物の力』だってことをなッ！！」

そして、新しく明かされた事実。
既にこのときから神格事件は始まっていた。

「いいぜ……来い、来いよ……。俺はここにいるッ！！」

その身に神格を宿す呪文を、狙撃手は叫ぶ。

大切な何かをもう二度と、失わないために……。

「――――真実を知りたいか？」

明かされた悪魔襲来の真実。

その真実は、まさに彼を怒らせるのには十分だった。

……時が、止まる。

「これが貴様の欲した真実だァッ！！」

――過去があったから、今の私がある……。

衝撃の次章……。狙撃手の過去を、あなたは知ることになる……。

◇

ということで予告でした。

この小説のマナは偽造設定の塊ということを予めご了承下さい…。

感想待ってますッ！！

第三十五撃『未来の仕事人。マナ・アルカナの登場』（前書き）

本来ならコラボ編を出すつもりでしたが、予想外に執筆が進まなかったので、本編を更新します。

※注意！！※

この小説のマナは偽造設定の塊です。

それでも良い方はどうぞッ！！

第三十五撃『未来の仕事人。マナ・アルカナの登場』

戦争が終わったからとはいえ、全てが丸く納まるかといえば、そうではない。
魔法世界の各地では紛争などが勃発しており、今現在でも幾つもの命が失われつつある。
私は依頼を受けつつも紛争地域に赴き、紛争にて気づいた人々を治療して回っている。駆けつけたときには既にほとんどの命か奪われている。
それでも懸命に生きようとしている命はたくさんある。全ての命を救えないことは身を持って体感している。だからこそ、救えるだけの命は救いたいんだ。

「お父様、また子供が怪我してますです……。まだ、懸命に生きようとしていますです」
「分かってる。こんなのはただの偽善だけど、やっぱり見捨てられないよな」

ミカの言葉に自嘲気味に笑いながら答え、怪我をしているという子供の元へと向かう。
まだ、ミカと同じくらいの子供だった。それなのにも関わらず、こんな酷い目に遭っている。
私達はどこで間違ってしまったのだろうか。それは私には到底分からないことだった。
それでも、また、一つの命を救うことは出来た。

『未来の仕事人。マナ・アルカナの登場』

紛争地域にて助けた子供の大半はシェリルや、義妹であるユーリの勤めている全寮制であるアリアドネー魔法学院に送っている。
大人の場合は帝国にてテオに頼み、働き口を探してもらい、そこに勤めてもらうようにしている。強制はしていないが、働き口を探している者が大半のために事前にそう推奨している。
紛争にて家族を失ってしまった悲しみは、一度家族を失った私にも容易に想像することが出来る。

「お父様、働き過ぎは良くないと思いますです。旧世界から帰ってきてからずっと動きっぱなし出はないですか」
「ん？　そうだったか？　だけどミカも分かってるだろ。俺の中には神格王とその力が宿っている。この程度、どうってことないさ」

神格王の力を取り込んでからは、既に私の種族的ランクは『竜神』に属すほどのものになっている。
この程度動いたところで疲労などは全く感じぬし、おそらくはこの世界のことで疲労を感じることなどきっと無いのだろう。
だいたい、神すらも殺せるほどの力・身体能力があるにもかかわらず、疲労を感じていたらそちらの方が異常事態だ。
でもミカは違う。以前は神格王の復活の鍵――正極（プラス）の鍵を宿していたとはいえ、今は普通の子供とほとんど変わらない。
違うといえば身体的・精神的に成長する機能が付いていないというところだ。精神的には幾らか成長したように見えるが、実際変わったのは口調のみ。成長は全くしていないのだ。

「ミカも疲れたら俺に言えよ？　お前が俺に合わせるんじゃなくて、俺がミカに合わせないといけないんだからな」

「そうは言ってもあたしはお父様の背中に乗ってるだけですし、そこまで疲れませんです」
「そっか。まあ、俺が言えた義理じゃねえんだけど、無理はするなよ？　義理とはいえミカは俺の娘なんだから」
「お父様と違ってあたしは自分の体調管理はばっちりです。モーマンタイです」

ミカのむふん、という威張ったような声に苦笑いをしながら、私は安心する。
言葉通り無理はしていないようだが、どちらにしても夜になれば、否が応でも休まねばなるまい。それに、依頼もちょうど無くなったところだしな。

「とりあえず今日は野宿するか」
「野宿と言っても、家を創るのですから既に野宿とは言えないと思いますです」
「確かにそうだけど、『野』で『宿』を取るで『野宿』なんだから結局は野宿だろ？」

そんなのただの屁理屈ではないですか……、とミカの呆れたような声を聞きながら、両手を一回だけ叩き合わせる。
叩き合わせた両手を離し、比較的広い場所にてその両手を地面につける。すると一瞬にて、豪華宿が出来上がる。
以前にも思ったがこの『創造再生』は使い勝手が良すぎるな。物体の創造から、命の再生までが思いのままだ。
命の再生については肉体と、その人物の記憶が必要という条件付きだが、傷を治す分には打ってつけの旧魔法だ。

「以前にあたしもこの力を宿してたのが、俄かに信じられませんです。あまりあのときの記憶はありませんですから」

「……まあ、ミカの旧魔法はここまでスゴいものじゃなかったよ。そんなことより早く中に入ろうぜ」
「なんか誤魔化した感がありありなのですが、気のせいではないですよね？」
「いんや気のせいだ。だいたい誤魔化すことなんか無いからな」
本当ですか、と疑いの眼差しを向けてくるミカに本当だと答えながら、創り出した家の中に入る。
神格事件をミカが覚えていないのは、私の中に宿る神格王とは別の魂――ミカエルがその記憶をミカから全て抹消したからだ。
あの事件のことをミカが覚えているのは、あまりにも酷すぎる。あんなもの、覚えている必要はないのだからな。
そんなことを思い返していると、不意にミカが私の髪を引っ張り無理やり止まらせてきた。
「痛ってェな……。ったく、どうしたんだよ、ミカ。なんか見つけたのか？」
「あそこに子供が倒れてますです」
「なんだと？」
ミカが指さした方向を見てみると、確かにそこには誰かが倒れているのが見えた。
あれはまだ子供じゃないか。何故このように紛争地域から離れた場所に倒れているのだ。しかもあの子供からは人間と魔族の魔力を感じる。
なるほど半魔族（ハーフ）か。大方、一族に追われたか人間に追われたかのどちらかだろうな。このまま放置しておくにもおくまい。
私は家のドアから離れて、倒れている子供を抱きかかえて家に入った。

◇

……ここはどこだろう。とても温かい。確か私は……、駄目だ。思い出せない。

体の節々が痛む。そう言えば私は誰かに追われて、傷つけられたのだけは覚えていた。何をしていたかを思い出せないなら、このことも思い出せない方が良かった。

目を開けて、私の今の状況を確認する。ここはどこかの民家なのだろう。木？　鉄？　土？　とにかくよく分からない材質の家だった。

腕や脚に包帯が巻かれており、傷の手当てがされている。しかもご丁寧に私は布団に寝かされていた。

体は痛い。だけどいざとなれば逃げることはいくらでも出来るほどには、体は動いてくれる。

ふと視線をずらすと、壁に銃が立てかけられてあった。ライフルの形状をしている魔法具だろう。普通のライフルなら、魔力は感じない。

すると、ガチャリとドアが開け放たれた。これはほとんど条件反射だった。布団から飛び起き、壁に立てかけてあったライフルの引き金に指をかけ、銃口を入ってきた人物に向けた。

入ってきたのはおそらくは男。顔立ちは正直整いすぎていて、男にも女にも見えるほどだ。銀髪は三つ編みに編み込まれ、床につきそうなほどに長い。

手にはトレイがあり、その上に乗せられている皿からは湯気が立ち上っている。

とにかくこの男が誰か分からない以上、気を抜くわけにはいかない。絶対的優位は私にある。

引き金を引く。たったそれだけで目の前の男は死ぬのだから。

「なんだ、もう起きたのか。安心しろ、手当ては済ませてある」

だが男はそんなこと気にしていないといわんばかりに私に話しかけてくる。こいつは怖くないのか――死ぬと言うことが……。

私は怖い。死ぬということは何もかもを失うということだ。死というのを私は見たことがある。あそこは――怖い。

私は死にたくない。だったら、この男を殺すしか生き残る方法はない。ライフルに取り付けられたスコープを覗き込む。

その行動で私は後悔することとなった。スコープを介して視た世界は黒い線と点で埋め尽くされていた。

『アレ』が何なのかは頭では理解することは出来ない。だけど本能が理解する。アレは――――『死』だ。

カタカタと銃口の先が揺れて、狙いが定まらなくなる。いや、私の手が震えているのだ。

この部屋はとても温かい。だけど、私の背筋には寒気が駆け抜けていた。冷や汗が頬を伝い、床に零れ落ちる。

直後、私の手からはライフルが取り上げられ、『死』の世界から解放される。

そのことに私は純粋に安堵した。視たくないのに、自分ではどうすることも出来なかったから。だけどそれと同時に気づく。

ライフルを取り上げたのはこの部屋には私以外にはもう一人しか居ない。あの銀髪の男だ。

きっと私は殺される。殺そうとしたのだから、殺されても文句はいえない。だけどそんなのは嫌だ。『あんな場所』には二度と戻りたくない。

……『あんな場所』とはどこなんだ？　分からない。だけど、あの場所を示す言葉があるならこれがピッタリだ。

――――死の世界

嫌だ。私はあんな場所には二度と行きたくない。死にたくない。だが私のそんな意志に反して、男の手が私に伸びてくる。恐怖で足がすくみ、動くことが出来ない。

男の表情は見えない。だけど、きっと私を殺そうとしている表情なんだ。伸びてきた手が私の頭に触れる。

もう駄目だと思った。だけど、そんな私の考えとは裏腹に、男の手は私の頭をクシャクシャと撫でるだけだった。

「ダメだろ？　子供が武器なんか触ったら。危ないだろ？　とりあえず体冷えてるだろうから、スープでも飲むか？」

そして男の声はとても優しくて、温かいものだった。顔を上げて、男の顔を見上げる。

男は優しげな眼差しでこちらを見ており、私を包み込むような雰囲気を纏っていた。

きっと、この男にとってさっき私がライフルを突きつけたことなど、命の危機にもなってなかったのだろう。いや、なっていたとしても彼は私を殺さなかった……。

「ん？　どうした？　飲まないのか？」

「いや、えっと……いただきます」

ライフルを再び壁に立てかけながら私にそう言ってきた彼の表情は、なんとも言い難い表情で、思わず条件反射で答えてしまう。

湯気の立ち上るスープの皿を取って、一口スープを口にする。すると言葉では表現できない味が口の中に広がる。もちろん不味いという意味ではない。

「美味しい……」

これもまた条件反射。先ほど彼が現れてから、私は既に三回も条件反射で何かをしてしまっている。

それほどまでに彼の行動は私にとって新鮮すぎたのだ。

ライフルを立てかけ終えた男はスープを飲んでいる私の前に座り、満足げな表情をしながらこちらを見ている。

女性に見えなくもない整った顔立ちを見て、顔に熱が籠もってくるのが分かる。それを隠すように、私はスープを一気に飲み干す。

「……ごちそうさまでした」

「はい、おそまつさまでした。とりあえず自己紹介でもしておくか？　俺はシキ・K（クロカミ）・アスタロトだ」

「私は……マナ・アルカナ」

「マナか……。良い名前だな」

彼――シキさんは私に笑みを見せながら、そんなことを言ってくる。

この名前は私も聞いたことがあった。とても有名だ。確か一人で幾万の敵を無傷で殺すことが出来るほどの狙撃の名手。

殺すといっても、別に命を奪うわけではない。敵の戦う力を殺し、敵の戦意を殺し、敵の命以外を殺す狙撃手。

故についた二つ名が『不殺の弾丸』。とてもこの人が噂に聞くような人には見えなかった。

「マナは銃を握ったことがあるのか？　さっきの感じだと、使ったことがあるみたいだったけど」

「いや、銃は使ったことはない……です。さっきは無我夢中で……」

「無我夢中、ねぇ。だったら銃を使う才能に恵まれたな。才能だけ

だったら俺よりも上だ」

純粋に私は驚くばかりだった。かの大戦でも多大な戦果を持つシキさんに、そんなことを言われて驚かないはずがない。

シキさんに言ったとおり、さっきは無我夢中でライフルを握っただけだったし、殺そうとしたに誉められるとは思わなかった。

ふと、シキさんの雰囲気が変わる。まるで、これから重大なことを話すとばかりの雰囲気に、私は思わず息を飲む。

「そういえば、さっきスコープを覗いたとき、『何』が視えたんだ？」

「……黒い線と点が視えた……。ねえ、シキさん。あれは、『死』なんですか……？」

私がシキさんにそう訊ねると、シキさんは若干驚いたような表情をした。

だけどすぐにさっきまでの表情に戻ると、首を一回だけ縦に動かして私の考えを肯定した。

黒い線と点――『死』は今思い出しただけでも、恐怖で体が硬直する。世界には視えなくても、あれだけの『死』が広がっている。

スコープを介して視た世界はまさしく『死の世界』そのものだった。

「あのスコープを覗いて『死』が視えるのは、『死』を理解している者だけなんだ」

シキさんはこう言った。

――万物には全て綻びがある。人間には言うにおよばず、大気にも意志にも、時間だってだ。

始まりがあるのなら終わりがあるのも当然。あのスコープは、モ

ノの死が視えるんだ。
ちょっとした特別製でさ。だから……生きてるのなら、――神さまだって殺せるんだ、と。

「まあ、大層なことを言ったが、あれが特別製なだけだ。ただ……いや、今はよそう」

シキさんは何かを言いかけて、思いとどまったように見えた。
何を言い掛けたのか、私には分からないけど、シキさんが良いというならばきっと良いのだろう。

「疲れてるだろ？　この家は安全だからゆっくり眠れ」
「う、うん。ありがとう、シキさん」
「どういたしまして」

シキさんは私に笑みを見せながら、そう言ってくる。
……どうして彼の笑顔を見ると、こんなにも安心できるのだろう。
そんなことを頭の片隅で考えながら、意識を手放すことにした。

◇

マナが寝付いてから、私は部屋を出て一息つく。
あの銃に取り付けられたスコープは、私のように『死』を体感するか、理解するかしなければ『死』が視えるようにはならない。
何故マナが『死』が視えたかと言えば、それはとても簡単な話だ。
私がマナを拾ったとき、彼女の息は既になかったのだから。だいたい、死後数時間といったところだろう。

周りには特に変化はなかったが、やはり誰かに襲われ、傷つき、あそこまで必死に逃げてきたのだろう。

とにかく一度死したマナは無意識ながら、死後の世界にて『死』を目の当たりにしたはずだ。

『創造再生』により彼女を蘇らせてしまったが、もしかしたらそれは辛い選択をさせただけなのかもしれない。

彼女からはかすかではあったが、魔眼の力を感じた。眼の色も僅かに蒼色な染まってきていた。

遠からず未来に、マナはきっと――『直死の魔眼』に目覚めるだろう。あそこまで『死』に恐怖するマナが魔眼に目覚めれば、どうなってしまうかは容易に想像がつく。

このまま放っておくにはあまりにも無責任すぎる。彼女だけは、アリアドネーに送るのではなく、私の近くにて魔眼の制御方法を教える必要があるやもしれん。

魔眼に目覚めないに越したことはないが、それは無理だろう。

「さっきの女の子の様子はどうでしたか？」

「至って健康そのものだ。ただ問題が一つあったんだが、何とかするしかない」

リビングにあたる部屋に向かうと、ミルクを飲んでいるミカにそう訊ねられた。

魔眼の制御方法については私よりも彼女に任せた方が上手くできるだろうし、早めに呼んでおいた方が良いかもしれんな。

全く、二人目の『直死の魔眼』の保有者（予定）が現れるなど、夢にも思ってなかったのだがな。

「彼女はまたアリアドネーに送るのですか？」

「いや、マナは送らない。少しばかりやることがあるからな。そうそう、彼女の名前はマナ・アルカナだそうだ」

「マナ・アルカナ……か、カッコイい名前ですね」

確かにカッコいいが『ミカ・クロカミ』って名前も十分にカッコいいではないか。
自分でいうのもアレだが、実は私も自分の名前を気に入っているのでな。

「まあ、いいや。明日の依頼はどうなってる？」
「明日は魔境より薬草の調達にＳＳ（ダブルエス）ランクの犯罪者の確保。あとは、運搬任務が一つずつです」
「割と明日は楽な仕事だな。じゃあ明日は早めに起きて、サクッと済ませるとするか」

やることもあるしな、と付け足しながら既に眠そうに目をこすっているミカに言う。
いろいろあってミカには夜更かしさせちまったし、明日はゆっくり寝かせといてやるか。
そんなことを考えながら、私とミカも眠ることにした。

第三十五撃『未来の仕事人。マナ・アルカナの登場』（後書き）

アンケートというか質問で、マナを原作通り龍宮神社に預けるか、シキの義娘にするか迷っています。
意見をお願いします。
感想待ってますッ！！

第三十六撃『直死の魔眼発動。覚えておくと良い、それが‘死’の重みだ』（前）

※注意！！※
この小説のマナは偽造設定の塊です。
今回はキャラ崩壊がスゴイ……かもしれません。

では、どうぞッ！！

第三十六撃『直死の魔眼発動。覚えておくと良い、それが‘死’の重みだ』

窓から差し込む朝日が目に入り、私は目を覚ました。視界に入ったのは見たことがない天井。

いや、昨日、助けてもらった人物――シキさんの創った家だ。

そうか、確か昨日私はシキさんに助けてもらって、そのまま眠ってしまったんだ。

どこの誰とも分からない私を、シキさんは何の迷いもなく助けてくれた。

私が何故倒れていたかも、何故あんなに傷ついていたかさえも聞かずに、彼はただ私を助けてくれた。

彼の雰囲気はとても温かかったのを覚えている。今まで生きてきて、あんな風に優しくしてもらったことはなかったかもしれない。

「あれ……目が疲れてるのか……？」

ふと視界に黒い何かが‘視えたため’私は疲れでも出ているのではないかと思った。目を擦ってみるが、その黒い何かはなくならない。

むしろだんだんと鮮明に、鮮やかになっていく気さえする。壁、天井、床、万物に『死』と言う名の断面図が現れている。

それは徐々に鮮やかになり、私の視界を埋め尽くした。

嫌だ、私はこれを知っている。

嫌だ、こんな世界に私は居たくない。

嫌だ、『死の世界』なんかに私は行きたくない。

「うわぁぁあああああああ――――――ッッッ！！！？」

第三十六撃

『直死の魔眼発動。覚えておくと良い、それが〝死〟の重みだ』

空は晴天。本日も殺人日和……なんて物騒な考えを抱くあたり、オレ――ティアレンス・バイシタルはとっくの昔に、壊れてしまっているのだろう。

とは言え、オレはまだ意味のない殺人を行ったことはない。殺るつもりはないが、もしかしたら殺っちまうかもしれないな。

オレの眼――『直死の魔眼』は万物に宿る死を、点や線捉えることが出来る。その点や線を穿つ、またはなぞることで、その対象の死を確定させることが可能。

神格を失ったオレが殺人を行うには、まさに打ってつけの眼ってわけだ。

「やあ――ッ！！」

「甘い甘い。それじゃあオレには勝てないぜ？」

オレはそう言いながら、木の棒を振り下ろしてくる子供を避ける。

現在、オレは紛争により親を失ってしまった子供を保護し、そいつ等に戦いの仕方を教えている。

オレは基本的に教えるのは苦手だし、第一にオレの戦い方は一撃必殺を意識してるから、意味ないんだけどな。

それに、まさかオレのことをこんな子供たちが知ってるなんて思わなかったな。噂ってのは本当に怖いな。

まさかオレが『正義の殺人姫』なんて言われてるなんて思いもし

なかったな。正義に程遠いオレが正義なんて呼ばれるなんてな。
そんなことははっきり言ってどうでもいいことなんだけどな。

「ちぇーっ、先生ってば強すぎだよ」
「だから先生って言うなよ。オレは先生なんてガラじゃねえんだ」
「先生は先生だって。でも先生ってペチャパイだよなー」
「うるせえ。あんな脂肪の塊、こっちから願い下げだっての」

オレは子供の頭を小突きながら、いう。実際胸なんかあったって戦いの時には邪魔になるだけじゃねえか。
シェリルさんやユーリを見てると分かる。激しく動くと胸と言う名の脂肪の塊が上下して、バランスが取りづらくなる。しかも肩が凝るって話だ。
それに、スタイルだけで人の好き嫌いを判断するくらいだったら、そんな気持ちを抱く必要はないしな。

すると、オレのポケットからピピピッ、という音が聞こえてきた。手を突っ込み、音の発信源が何かを確かめた。
それは通信機だった。シキさんとユーリ、エルとシェリルさんの間だけで使える特別製の通信機だ。
ちなみに通信相手は、今まで一回も通信してくることがなかったシキさんからだった。

「シキさんが連絡して来るなんて珍しいこともあるんだな？」
『珍しいって言うなよ。まあ、俺も連絡しないから仕方ないけどな』
「で、なんか用事があるんだろ？　あんたが連絡する事なんて、それぐらいしか思いつかない」
『ご名答。実は折り入って頼みがあるんだ。これはティアにしか頼めないことだ』

……シキさんに折り入って頼み事されると、こっちの調子が狂っちまうな。

今更に思ったけど、シキさんからこうも真っ直ぐに頼み事なんかされたのは初めてだな。

だけどオレにしか頼めない事ってなんなんだ。任務ならシキさんがこなせないのは有るはずがないし……。予想が全く出来ないな。

『「直死の魔眼」関係のことって言えば分かるか？』

「あー……そりゃオレにしか頼めないな……」

オレはちょっとガッカリ気味にシキさんに言う。

確かに『直死の魔眼』関係だったんならシキさんがどうこうするよりも、オレがした方が効率よく進められるだろうな。

まあ、『直死の魔眼』関係のこととはいえ、何をするかなんか分からねえから、安請け合いは出来ないんだけどな。

『実は昨日拾った子供が「直死の魔眼」に目覚めそうなんだ。しかもかなり面倒な感じだ』

「……シキさんも知ってるだろ？　オレは面倒なのは嫌いなんだ」

『それはみんな同じだ。面倒事が好きな奴なんて変わり者か変質者ぐらいだ』

「それ、どっちも同じ意味じゃないか？」

そうかもな、とシキさんは適当に相づちを打ちながら、オレに頼みたいことと言うのを話し始めた。

昨日、シキさんは命を失って間もない子供を拾った。その子供を『創造再生』を使って蘇らせたのだが、その子供は『死の世界』を視てしまったらしい。

『直死の魔眼』の発動条件は一つ。『死の世界』で『死』に触れて尚、現実世界に還ってくること。ちょうどシキさんが助けた子供

ってのは、条件を満たしている。

別にここまでだったら面倒なことは何もない。魔眼の使い方を教えるだけだからな。面倒なのはここからだ。

どうにもその子供は極端に『死』に対して恐怖を抱いているらしい。

この魔眼は万物の『死』を司る魔眼。そんな奴が魔眼を開眼した暁には、とんでもないことになるだろうな。

で、その子供に魔眼の使い方を教えろって事だ。……面倒すぎる、死に恐怖している奴に死の扱い方を教えろなんて、面倒極まりない。

『これは魔眼を長いこと使い続けたティアにしか頼めないんだが、引き受けてくれるか？』

「別にオレが魔眼の使い方を教えなくても、シキさんが魔眼の力を食らえばいいんじゃないのか？」

『あー……それは駄目だ。この魔眼は自然的なものに分類されるんだ』

「は？　自然的なもの？　どういう意味だ？」

自然的なものってのはどうやらオレの眼や、シキさんのスコープのような人工的なものとは違うらしい。

この『直死の魔眼』は魔眼にこそ分類されてはいるが、脳と眼球がセットで使えるものらしい。

人工的な魔眼ならば力で食らうことが出来るが、自然的な魔眼だと脳にまで影響を及ぼしかねないらしい。だから扱い方をオレに教えてもらいたいようだ。

『頼めたり……するか？　正直ティアにしか頼めないんだ』

「……はぁ。分かったよ。どうせオレが引き受けるまで引く気はないんだろ？」

『まあ、ティアにしか頼めねえからな……』
「了解だ了解。今からそっちに行けば良いんだろ？　場所は？」
『エンティル地域の森の中だ。一軒家があるからすぐに分かるはずだ』

エンティル地域って言えば森が深すぎて、迷い込み、飢え死にしたりする奴が多いって有名な場所じゃねえか。
でも紛争地域を回ってるシキさんがそこにいるのも頷ける。あの場所の周辺には、紛争地域が見事に固まってるからな。
シキさんは場所だけをオレに告げると、通信を切ってしまった。
やれやれ、今から面倒になりそうだな。

「誰から？　先生の恋人か？」
「子供（ガキ）がませたこと聞くもんじゃねえ。だけど、まあ――憧れの人、かな？」

オレはそう言いながら脚を伸ばして、集まっている子供達に解散を告げる。
そしてシキさんが居ると言った、エンティル地域に向かって移動を開始した。

◇

「ふぅ……」

ティアとの通信を切った私は天井を仰ぎ、手をダランとさせながら一息つく。
ティアにも言ったが『直死の魔眼』のことだったら、私よりももう何年も使っているティアの方が詳しいはずだ。
この魔眼は何かと扱いが難しいからな。特に、マナのように死に

恐怖する者が使うとなると、相当訓練の必要を要するだろう。
本来ならば『能力喰い』で魔眼の力を奪えばよいが、そうすると脳に異常をきたす可能性がある。
これぱかりはマナに克服してもらうしか方法はない。

「ティアお姉様とお話は終わりましたですか？」
「あぁ。めんどくがってたけど、来てくれるそうだ。で、マナの様子はどうだ？」
「今はぐっすり眠ってますです。昨日の今日でまだ疲れが抜けきってないのだと思いますです」

確かにミカの言う通り、昨日の今日で疲れてるんだろう。
昨日は見ず知らずの男の家に連れ込まれ、それに対して警戒心を抱いていたのだからな。
……あのような小さな子供が警戒心を抱くほどのことを、彼女は受けてきたのだろう。
そう考えていると無意識に拳を握りしめしまっていたのだろう。
掌の皮が破れ、血が出てきていた。

「でも、お父様が他人に頼み事をするとは、珍しいこともあるんですね？」
「あのね。確かに神格王の力を取り込んだからって、出来ないことがないってわけじゃないんだ。」

珍しいことってのは否定しないけどな、と私は加えながら言う。
ミカの言いたいことは分かる。神格王の力はとても絶大で、正直出来ないことを数えた方が良いくらい何でも出来る。
ただこのような例外もあると言うことを、覚えてもらいたいだけだ。

「そう言えばテオから手紙が来ていましたですが、読みますか？　というかいい加減に読まないと大変なことになりますですよ？」
「……ちょっと待ってもらいたい。もう一回言ってくれないか？　聞き間違えがあったかもしれん」
「だから、テオから手紙が来ていましたです」
ミカはそういいながら質素な封筒に包まれている手紙を私に渡してきた。
日付を確認してみたところ、この手紙が来たのは一週間ほども前だ。
それをなぜに今さらになってから私に渡してくるのだ。もっと早く渡してくれなければ意味がなかろうに。
「ミカ、なんで今まで言わなかったんだ？」
「ちゃんと言いましたです。お父様が後から読むから後で渡せと言ったです」
……言われてみればそんなことを言ったような気がするような、しないような……。
とりあえず過ぎたことをいつまでも言っていても仕方がない。
今はどのような了見でテオが私に手紙を寄越してか、と言うことが非常に重要になってくる。
息をのみながら私は封筒の口を開き、中から手紙を取り出す。すると中から手紙の他にももう一枚、紙がハラリと落ちてきた。
それを拾い上げたあとに、テオからの手紙を読む。
『シキ！！　お主はいったい何をやっておるのじゃ！！　妾に顔も見せずにのらりくらりとしおって！！
……言いたいことは山ほどあるのじゃが、手紙では用件だけを話す。

今から一週間後ほどに妾の誕生会があるのを……忘れておるじゃろ？　それにこの手紙を読んでおるのも、届いてから数日経ってからじゃろ？

とにかく、妾の誕生会には絶対に来るのじゃぞ！！』

……テオの奴、ピンポイントで内容を書いてきやがるな……。

ふむ、そういえばテオの誕生会があるのだったな。大戦やらなんやらで誕生会を出来ていなかったから、実質的にはこれが本格的な誕生会ってことになるのか。

マナの問題に引き続き、テオの誕生会か……。後者はどうとでもなるが、前者の目処がつかねば後者にも影響をきたしてしまうな……。

私がそんなことを考えながら唸っていると、家のドアが開け放たれた。

「来たぜ……って、どうしたんだ？　そんなに変顔して」

「変顔言うな。せめて悩んでるとかにしてくれ。変顔はマジへコむ」

「……女顔負けの美人面してるシキさんに言われるとなんかムカつくんだけど？」

「知るか。この顔は生まれてからのデフォルトなんだよ」

別に転生させてもらう際に顔を美形にしてもらったわけじゃないし、転生後も前も同じ顔だったからな。

それに私が女顔だと言うことは理解しているが、そこまで美人なのか？

余りこちらに来てからは女に間違えられることもなくなったから、よく分からないのだがな。

というかティアもかなりの美人だと私は思うのだがな。落ち込む必要はないと思うが、女心と秋の空と言うしな。

「で、魔眼保持者ってのはどいつだ？」
「今は寝ているよ。起きたら会わせて、魔眼の使い方を教えてやってくれ」
「魔眼の使い方の前に、死の恐怖に打ち勝つ方が先だと思うけどな」
「それは俺とティアでどうにかしないといけないよな」
そうでもしなければ死の恐怖の余りに、そのまま死に至ってしまう可能性もなきにしもあらずだ。
『うわぁぁあああああああ――――――――ッッッ！！！？』
『――ッ！？』
そのようなことを考えていると、二回の方からそのような叫び声が聞こえてきた。
この家には私とミカ、ティアを合わせても四人しか居ない。さらにこの場には三人、そして二階には一人。
つまりこの声の主は、この場に居ない最後の一人と言うことになる。
「チッ、遂に開眼しやがったか……ッ！！」
「この声の奴が魔眼保持者か？　この叫びを聞く限り、マジでヤバイみたいだな……！！」
私とティアはそんなことを言い合いながら、階段を駆け上がり、部屋の前に立つ。ドアを蹴破るかのような勢いで、一気に開け放つ。
そしてそこに居たのは、両眼が蒼色に染まり、ガタガタと震えているマナの姿があった。
その眼――『直死の魔眼』を介して視える世界は、死を具現化した世界。
死に対して恐怖を抱いているマナが耐えきれるような世界ではな

い。

「あ……あぁ……い、嫌だ……嫌だぁぁぁあああああ――――――ッッ！！！！」

「待て！！　早まるな！！」

死の恐怖に耐えきれなくなったマナは、自らの両眼を潰そうとする。だがその前に私はマナに接近し、両手を掴んでそれをやめさせる。

だがマナはそれで止まろうとはしない。私の腕を振りほどこうと暴れ、眼を潰そうとしている。

この魔眼は眼を潰したくらいでは、死の世界から逃げ出すことはできない。

眼球はあくまでもレンズのようなものであり、レンズを壊したところで、完全に視えなくなるわけじゃない。

「は、離してくれ！！　嫌だ、私はこんな世界に……――ッ！！？」

私の顔を視たマナが、そのような短い悲鳴を上げる。

おそらくは私の死を視てしまったからだろう。万物に死がある、つまりは私に死があるのも道理なのだ。

だが今のマナ程度の魔眼に対してであれば、私の死を視れないようにすることは可能かもしれん。

イメージしろ、私には死の概念がないということを。私は不老不死だということを。

「あ……れ……？　シキさんには、死が視えない……？」

「そうだ。俺には視えないだろ？　だけど、それは一時的でしかない」

「一時的……？　じゃあまた視えるように……？　嫌だ、あんなの

視たくない……！！」

「マナ。悪いがこればかりは避けては通れないんだ。死を克服しろ、大丈夫。俺は、ここにいる」

私はそういいながらマナを抱きしめる。抱き締めたマナの体は震えており、かなりの恐怖を抱いていることが分かる。

これればかりは私にはどうしようもない。マナ自身が死の恐怖に打ち勝つしか、これを切り抜ける方法はないんだ。

「お前が地獄に落ちるってんなら、俺が手を伸ばして、地獄のそこから引き上げてやる。

お前が死の世界が怖いってんなら、俺が一緒に死の世界に立ってやる。

お前が死ぬってなら一緒に――死んでやる。

だから、俺を信じてくれ」

「シキさんが……一緒に……？」

「あぁ。お前がその力を克服出来れば、きっとその力はマナの役に立つ」

万物を殺すことに特化したその眼は、使いようによっては人を助けることに特化した力になりえる。

万物を殺せると言うことは、未だに原因が分からない不死の病を殺したりすることも出来るというとだ。

だから、その眼はきっとマナの未来を導いてくれると、私は思っている。

使い方さえ間違ったりしなければ、その未来はきっと輝かしいものになるはずだ。

「マナ。俺と一緒に、生きてみないか？　俺は、お前と一緒に生きてみたい」

「一緒に……？　私も、シキさんと一緒に生きてみたい」

マナの震えが止まった。未だに恐怖に怯えるような眼をしているが、先程のような果ての見えない恐怖というわけではない。

目指すべき場所が見え、そこまでの道のりに恐怖している眼だ。

だけどその恐怖は支えきれないものではない。今度は支えきれる恐怖だ。

その恐怖は私や仲間が一緒に居ることで、その恐怖を打ち消してやる。

「なら決まりだな。じゃあ早速だが魔眼の使い方、オレが教えてやるぜ？」

「あ、貴女は……？」

「ティアレンス・バイシタル、ティアで構わない。オレもお前と同じ魔眼の持ち主だ」

「同じ魔眼の持ち主……。じゃあ、貴女にも死(これ)が視えるの……？」

あぁ、ばっちりだ、などとまるで世間話をするような軽さっ言うティアに、マナは少しばかり驚いたような表情をしていた。

それもそのはず。死の世界を視ながらも、何故そのように平然としていられるんだ、とでも思っているからだろう。

「オレがその眼の使い方、みっちり教え込んでやる」

「えっと……お手柔らかに、お願いします……」

ティアの言葉にマナは若干引き気味で答えているが、これぱかりは助け船を出すわけにはいかぬな。

魔眼の使い方を教えられるのはティアだけ、それを阻害するのは教えるなと言っているのと同じことだ。

しかも心なしかティアの蒼色の瞳が輝いているような気がするが、

気のせいではないだろうな……。

「じゃあ行こうぜ？　今からみっちり教え込んでやるからよ」

「えっ、あの……た、助けてシキさん！！」

「厳しいもしれないけど、まあ……頑張れ」

ズルズルと引きづられていくマナを見ながら、私は一人そう呟くのだった。

第三十六撃『直死の魔眼発動。覚えておくと良い、それが‘死’の重みだ』（後

マナのこれからについてですが、原作通りが多かったので、義娘案はボツにします。
次回、も（？）お楽しみにッ！！

……ところで、シェリルの姐さんを攻略しないのですか？
という意見が多数あるのですが、シェリルの姐さん、どうしましょうかね……？

第三十七撃『二つの修行とマナの選択。さあ、好きな方を選ぶが良い』

私が死の世界を視ることが出来るようになってから、既に数日が過ぎようとしていた。

死の世界が視えるようになった当日にやって来た人物――ティアさんのおかげで、私の眼――直死の魔眼の使い方も、だんだんとではあるが分かってきた。

とりあえず、魔眼のオンオフは自在に切り替えられるようになった。

使い方を教えてもらったのだが、当初はかなりキツかった。

死に対して恐怖を抱いている私が死の世界に耐えきれるはずもなく、何度も挫けそうになった。だけど、それ以上にティアさんは恐ろしかった。

死の世界に居ても実際に死に至るわけではない。でもティアさんは違う。この魔眼の使い方を覚えなければ、確実に死に至っていた。

私とティアさんの魔眼は同じもの。つまりはティアさんが狙う場所は私にも視えているわけで、それを避けるためにより一層死を視る必要があった。

訪れることのない『死(む)の恐怖』よりも、目の前にある『死(ティアさん)の恐怖』に対抗するために、私はいつしか『死(む)の恐怖』を感じなくなっていた。

「止まるなッ！！　死にたいのかッ！！」

「く……っ！？」

次々に繰り出されるナイフによる一閃。それは的確に私の死と言う名の断面図を捉えており、一瞬でも気を抜いてしまえばソクザに意識が刈り取られる。

ティアさんは元から優しく教える気などなかった。元々、こんな危険な力を使いこなすのに優しい訓練などあるはずがなかった。

私は人間と魔族との半魔族（ハーフ）だから、私くらいの人間よりは動くことが出きる。だからとはいえ、ティアさんのような殺人に特化した戦い方をする人に、逃げ切れるはずがない。

転がり、避け、後ろに身を引き、必死にティアさんのナイフを避ける。

戦いの経験がない私が、ティアさんの一閃を完璧に避けきれるはずもなく、身体中に傷がたくさん出来上がっている。

正直痛い。どうして私ばかりがこんな目に遭わなければならないんだと思う。でも、生き残るためにはこうするしかないのだ。

「そうだマナ。お前が生きるにはオレから逃げるために、魔眼の力を制御するしか方法はねえんだ！！

だけどそれは教わるものじゃない。本能で感じ、力を制御するしか方法はねえッ！！」

……なんて大雑把な……。だけどこれで魔眼の使い方が上手くなってきているのだから質が悪い。

実際、使い方が頭では理解できているわけではない。ティアさんの言ってるみたいに、本能で感じ取っているのかもしれない。

こうすればこうなる、といった感じに直感的にしか分からない。

ティアさんのナイフが、左肩の死の線目掛けて振るわれてくる。

こちらの得物はティアさんと同じナイフ。

ナイフを睨み付ける。ズキッ、と頭に鈍い痛みが走るが、それと同時にティアさんのナイフの綻びが視えた。

「――――ッ！！」

「おっ？」

ナイフに視えた綻びをなぞるように、私は自らのナイフを振るう。
するとティアさんのナイフは、まるでバターを切るかのようにあっさりと両断される。
この数日、ティアさんはこの魔眼の具体的な使い方は教えてくれなかった。だけど、この綻びを切ったり貫いたりすれば、死が訪れるということは理解した。

「へぇ、戦闘才能（バトルセンス）は中々だな。じゃあ、ランクアップするか？」

ニヤリとしながら、ティアさんは懐からもう一本ナイフを取り出してくる。
というかランクアップって……私、今日死ぬかも……。

第三十七撃

『二つの修行とマナの選択。さあ、好きな方を選ぶが良い』

……外からマナの悲痛な叫び声とティアの楽しげな声が聞こえてくるんだが、一体なにをしているのだ？
今の時間帯は、魔眼の使い方と身体能力向上の訓練をしているはずだが、今日は妙に騒がしいな。　剣戟の他にも樹木が凪ぎ倒れされるような音や、他の音が聞こえてくる。

「後で様子を見に行けばいいか……」

私はそう呟きながらコーヒーを口にする。
手元には一枚の書類。書類と言うほどではないのだが、マナの訓練表だ。
子供のうちから過激な訓練を行えば、将来的な成長に関わってく

る。戦いのない時代になったときにそんなのでは、マナも嫌な気持ちを味わうやもしれんからな。
まあ、魔眼保持者に半魔族（ハーフ）である以上、それを隠さねば普通の生活は望めまい。

「お父様、そう言えばテオの誕生会は明後日ですが、マナはどうしますですか？」
「ん？　そうだな……訓練漬けってのもつまらないだろうし、連れてくよ」

ティアも帝国の銃騎士隊に所属している、エルに会いたいだろうしな。
そうなると必然的に魔眼の訓練を見てくれる奴は居なくなるわけで、マナだけを置いていくわけにもいかないから、結局は行くことになるんだがな。
それに、マナも帝国の誕生会という名の祭を見てみたいだろうしな。
今では魔眼を開眼したばかりの時とは違い、かなり外の世界に興味を持っているしな。

「あとティアお姉様に自重するように言ってくださいです。あれは確実に環境破壊に貢献していますです」
「……無理だと思うけどな。あいつ、魔眼使うと周りが全然見えなくなるし……」

そう、殺戮戦とかでならばティアの動きはまさに一騎当千。かなりの戦力となる。しかしそれ以外で防衛戦などとなると、逆にこちらの戦力まで削ぎ落としてくれる。
別に味方を殺してしまうとかいうことではない。敵を殺すときにこちらの戦力まで巻き込み、余計な被害を出してくれるのだ。

それもあり、ティアと共に行動したり依頼を受けたりする際は、なるべく魔族討伐やドラゴン退治といった依頼しか受けないようにしている。

……まさかとは思うが、勢い余ってマナを殺してしまったりしていないだろうな……？

あながち有り得ないとも言い切れない。つい先程から静かになったし、もしかして殺ってしまったか……？

いや、ティアに限ってそんなことは……ないとは言い切れんな。無性に心配になってきたぞ……。

「ちょっと様子を見に行こう。まさかの事態が起こってるかもしれねェ……」

「ティアお姉様なら大丈夫だと思いますですが？　……環境破壊以外の問題になりますですが……」

「心配を煽るようなことを言うな。て言うか、ティアだから心配なんだよ。あいつ、前に模擬戦したとき本気（マジ）で殺しに来たんだぞ？」

「……確かにそんなこともありましたですね……。なんだかあたしまで心配になってきました」

前に模擬戦やったときになるが、ティアは『直死の魔眼』を最大（フル）に活用し、私を殺そうとしてきたことがあった。

さすがに殺されるわけにもいかぬから、細かい技を使いティアに勝利したのだ。

ティア曰く『シキさんなら殺しても死なないだろ？　この眼は神様でも殺せるのによ……』とのことだった。

別に死なない、というわけではない。死んだ後に『創造再生』により、生命を再生しているだけなのだからな。

実質的には今までで、私を転生させた神に一回、ティアに一回の合計二回も殺されているしな……って話が脱線したな。

とりあえずマナの生死が気になった私とミカは椅子から立ち上が

り、家を出てティアとマナが訓練している場所に向かう。

「ん？　シキさんにミカか。なんだ、何か用でもあるのか？」

「いや、魔眼の訓練はどうなったかなと思ってな。……って、マナ？」

ティアと話していると、その後ろでぐったりと倒れ込んでいるマナの姿が眼に入った。

最初は殺っちまったのかと思って焦ったのだが、胸の辺りが上下しているのを見ると、生きてはいるようだ。

倒れ込んでいるマナの周りには、刀身が切られているナイフが何本も転がっている。マナの手に握られているナイフも、刀身の半ばほどから切り落とされている。

対してティアのナイフには傷一つついてはおらず、圧倒的な力の差を見せつけたようだ。

「お前……なにやったんだ？　半魔族（ハーフ）であるマナがあんなになるなんて、普通じゃないぞ？」

「慣れない内に魔眼を長時間使用、もしくは集中して使うとああなるもんだぜ？」

オレはならなかったけどな、とティアは付け足しながら自慢気な表情を浮かべる。

なるほど……。私自身は魔眼を宿していないから分からなかったが、訓練の場合はあのようになるのだな。

まあ、ティアの魔眼はコピーをしたものだから訓練も必要なかったし、自然に馴染むからああいう風にはならなかったのだな。

「本当はハードメニューにしただけなんだけど……」

「おい……マナはまだ体が成長途中なんだから、無茶な動きは止め

ろって言ったろ？」

「確かにそうなんだけどさ。魔眼自体の成長具合は順調だぜ？　だけどマナの戦闘才能（バトルセンス）は尋常じゃない早さで成長してる。あのくらいしないと逆に戦闘才能（バトルセンス）の成長を妨げることになるぜ？」

「そうなのか？　いや……でもアレはやりすぎじゃないか？」

ちょっとな、とばつが悪そうに頬を掻きながらいいティアに対して呆れながらも、大の字になって倒れ込んでいるマナを見る。

魔眼の成長具合は聞いた話を参考にするならば予想通りだ。しかし、戦闘才能（バトルセンス）の方はどうだ。

私が予想した成長速度を遥かに上回り、ティアに才能があるとさえ言わせている。

……これは早めに訓練表をつけなければならないかもしれんな……。

「し、シキさん……。ティアさんは鬼か、悪魔……です……」

「悪いけどティアは鬼でもなければ悪魔でもない。殺人姫（さつじんき）だ」

「ど、どおりで私の死ばかりを、狙ってくるはずだ……。何だか納得出来ま、した……」

「そうはいってもまだまだ手加減してる方だぜ？」

ぜえぜえと息を切らしながら、マナは私たちに話しかけてくる。

……というか手加減してもらわねば、それこそ訓練にならないだろうに……。

ティアが少しでも力を出そうものなら、今のマナ程度じゃ同じ魔眼を持っているとはいえ五秒と持たないだろう。

それだけティアとマナには力の差がある。まあ、当たり前といえば当たり前なのだがな。

「シキさん。マナに戦い方を見せるってのはどうだ？　一回くらい

本当の戦いを見せた方が良いとオレは思うぜ？」
「あのな、それってティアが暴れたいだけなんじゃねェのか？」
「……まあ、そうなんだけどさ……。い、いいじゃんか！！　エルやユーリのお願いばっかり聞いて、オレのは聞けないのかよッ！！」

頬を膨らませて目に涙を溜めながら言ってくるティアは、いつも勝ち気な性格とのギャップがありかなり可愛く見える。
その様子に勝ち気なティアしか知らないマナはポカンと口を開け、間抜けな面をしている。
確かにティアの言う通りユーリやエルの願いばかりを聞いているだろう。しかし、それはティアがいけないのだ。
ティアの願いというのは、私との模擬戦という名の殺し合いだ。それでなく、私の出来る範囲内であればティアの願いも聞いただろう。
だがさすがに殺される可能性を秘めているティアと、殺し合いをしたいとはとてもじゃないが思えん。
しかし、だ。ティアには無理してマナの面倒を見てもらってるわけだし、ここで断るわけにもいかない。

「はぁ……分かったよ。ただし、条件付きだ。制限時間は五分、どちらかがギブアップもしくは必殺の一撃を決めそうになるまでだ」
「その一撃って決めても良いのか？」
「ダメに決まってるだろ。模擬戦なんだからあくまでも寸止めだ」
「ちぇ、まあ、でもやっていいんだったらオレに勝ち目はないから良いけどさ」

手に持っているナイフを振り回して、ティアは楽しげに私に言ってくる。
……これだから戦闘狂（バトルマニア）な殺人姫は困るのだ。模擬戦の最中で模擬戦ってことを忘れて、本当に殺しに来るからな……。

殺されないように気を付けねばならんな。ティアの場合、ありとあらゆる手段を用い、懐に潜り込み必殺の一撃を放つのが主流だ。
ならば近づかせなければ良いだけ、と思うのだが生憎と彼女は自らの体の小ささと小回りを最大限に発揮し、さらに遠距離攻撃は魔眼で殺してくる。
しかも今回は模擬戦、さらにマナに戦い方を見せねばならんから、かなり手加減をせねばならない。厄介極まりない相手、とだけ言っておこう。

「今回はオレも試したい武器があるから、十分後にまたここに来てくれ」
「ナイフ以外にも使うようになったのか。分かった。だったら俺も今回は他の武器でやらせてもらう」

私はそういいながら、その場から身を翻して一旦家に向かう。
前までは『問答無用で殺せるんなら、武器なんか何でも同じだろ？』と言って、ナイフしか使ってなかったのだが、ティアも成長したものだ。
そんなティアの成長に喜びを覚え、頬を綻ばせながら武器を取りに家に戻るのだった。

◇

武器を変えるために家に戻ったシキさんの後ろ姿を見送った私は、額から流れてくる汗を拭いながら立ち上がる。
周りには予備にとティアさんから貰って、殺されたナイフの残骸が転がっている。
この中で私が殺せたナイフの数は、一番最初に殺したナイフの一本のみ。やっぱり私とティアさんの実力の差は天と地ほども有るみたいだ。

それはともかく、今からティアさんとシキさんは魔眼を使った模擬戦を、私に見せてくれるそうだ。

「シキさんは魔眼を持ってないって聞いたんですが、大丈夫なんですか？」

「ん？　大丈夫大丈夫。魔眼を持ってないって言っても、一時的には使える能力持ってるから」

つかあの能力は反則過ぎだろ、とティアさんは木に立て掛けていた袋を開けながら呟く。

袋を開け、出てきたのは一対の双剣だった。だけど、その形はかなり歪なものだった。

色は蒼色で至って普通。しかし、刀身はとても歪だった。四角形の刀身で、中身が空洞になっている。

そんな歪な双剣をティアさんは逆手に構えながら、軽く素振りをしている。

刀身が振られる度に空気を切る音が聞こえ、太陽の光を受けて輝く刀身は触れるだけで何でも斬ってしまいそうな雰囲気を醸し出している。

「良し……。さすが魔法世界随一の武器職人ってとこだな。初めてで手にしっくり馴染むし、間合いもオレの理想通りだ」

「その双剣って特注だったんですね。でも、どうしてそんな歪な刀身に？」

「歪って……はっきり言うな、お前。……否定はしないけど。なんでこんな形にしたかって言えば、この形がオレの理想的な武器だったからだ」

刀身が四角のようになっていて、肉を抉る力が大きくなっている。これは魔眼を使わずとも自分の力だけで勝てるようにと、武器職

人に特注してもらったみたいだ。

「名前を付けるとしたら、『四』つの『爪』の『痕』――『四爪痕（フォースエッジ）』ってところか？」

「四爪痕（フォースエッジ）……。何となく、ティアさんらしさが出てると思います」

「そうか？　まあ、マナがそう言うならこの名前で行くか」

……まさか適当に名前を決めていた……？

有り得ない……とは言い切れない。今のティアさんの反応を見る限り、適当に名前を決めたような反応だった。

まあ、ティアさんがそれで良いなら、私は別に何も言わないんだけど……。

「武器の準備は終わったか？　ティア。……ってなんだ？　その武器？」

「四爪痕（フォースエッジ）。オレの特注の武器だ」

武器を取りに戻っていたはずのシキさんは、ティアさんの武器を見ながらそういった。

やっぱり四爪痕（フォースエッジ）は普通の武器ではないみたいだ。普段武器を見慣れたシキさんでさえもが、珍しそうにティアさんの四爪痕（フォースエッジ）を見ている。

……それに、どことなくシキさんは寂しげで、悲しそうな表情をしていた。

そんな珍しい武器を使うティアさんに対して、シキさんが使う武器は至って普通そうな二丁拳銃。いつも手入れをしている魔法具の一つだと言うことを覚えている。

「じゃあ殺り合おうぜ、シキさん。魔眼は『物真似幻想師』でコピーしてきたんだろ？」

「まあ、魔眼を使った戦い方を見せるんだから魔眼を使わないと意味ないしな」

二人はそういいながらお互いに眼を合わせる。

そんな二人の眼は蒼色に発光し、万物の綻びを視る眼――直死の魔眼が発動していると言うことが分かる。

二人が魔眼を開眼したのを見た私も、二人と同じように直死の魔眼を解放する。途端に世界が点と線の死で埋め尽くされる。

この眼が使えるようになった当時は、視るだけで発狂しそうだったのに、今ではティアさんの訓練のおかげでそんなことは起きない。

「さあ、始めるとするか。口調が変わってしまうが、戦いの最中だけは勘弁してもらいたい」

「別に構わないよ。オレに対してシキさんが戦う相手として認めてくれた証みたいなもんだからな」

会話は至って普通の世間話のように聞こえる。

しかし、既にその場の雰囲気は殺気に満ちていた。私が戦うわけでもないのに、殺気に当てられて恐怖している。

今までのティアさんは手加減も良いところだったんだ。私の訓練に付き合ってくれたティアさんは、力の一割、いや、それすらも出してるか分からない。

だけど、そんなティアさんよりも今はシキさんの方が恐い。全てを包み込むような優しい雰囲気だったシキさんは、今は動けば殺さんとばかりの鋭さを出している。

『不殺の弾丸』と『殺人姫』。耳にした噂ではこの二人はかなりの実力者で有名人らしいけど、今ようやくそれを信じることが出来た。

会話が終わると二人が対峙している場には、静かな時間が流れる。

まるでその場だけ外界から空間が遮断されてしまったのように、一切の音が聞こえない。

風を受けて葉が舞う。ヒラヒラと葉が落ち、地についたとき動きがあった。先に動いたのは二丁拳銃を構えているシキさんだった。

ティアさんの死の点に狙いを定め、連続で魔力弾を放つ。蒼色の魔力弾が、眼にも留まらない速さでティアさんに向かっていく。

しかし、四爪痕（フォースエッジ）を逆手に構えていたティアさんが、同じように眼にも留まらない速さで魔力弾を殺していく。

あれだけの速さの魔力弾の死を、ティアさんは寸分の狂いもなく捉え、漏らすことなく魔力弾を殺していく。

「――――――！！」

双剣である四爪痕（フォースエッジ）を逆手に構え、ティアさんは体勢を低くし、一気にシキさんとの距離を詰めるために走り出す。

最大限にしならせた弓から矢が放たれるように、ティアさんの勢いは凄まじいものだった。迫り来る魔力弾の雨をいとも簡単に殺しながら、シキさんとの距離を縮める。

十メートル。ほんの数秒あれば完全に埋めることが出来るほどに短い距離。既に四爪痕（フォースエッジ）の射程圏内にシキさんの姿を捉えている。

敵意を剥き出しにしたティアさんの腕から、四爪痕（フォースエッジ）による斬撃が飛び出る。四角（よんかく）の刀身が、シキさんの死という名の断面図を捉える。

しかし、その一撃は当たらない。四角（よんかく）の刀身は虚しく空を斬り、標的を失った得物は空回りし体勢を崩す。

そんなティアさんの上から、無数の魔力弾の雨が降り注ぐ。見切っていたかのようにその場から飛び退くが、それをさらに見切っていたかのように、魔力弾の雨がティアさんに牙を向く。

「――――――ッ！！」

一瞬だけ力を溜めたかと思えば、ティアさんは魔力弾の雨に向かって飛び込む。

四爪痕（フォースエッジ）を改めて握り直し、ティアさんは魔力弾を殺していく。その動きはまさに神速。ティアさん自身の動きは捉えきれないけど、魔力弾を殺したと言うことは分かる。

今回は自らの向かってくる魔力弾を殺し、かする程度のものは必要最低限の動きでかわすだけで、殺そうとはしない。

ティアさんが向かう先には、二丁拳銃の銃口をティアさんに向けているシキさん。空中に居るために私はシキさんは動けないと思った。

だけど、シキさんは空中で何かを蹴り飛ばすかのように、一気にティアさんから距離をとる。でもその速さよりもティアさんの方が速い。

徐々に距離を縮め、ティアさんはシキさんの懐に入る。そしてシキさんを下にして、そのまま蹴り落とす。勢い付きながらも落下するシキさんに、ティアさんは二本の四爪痕（フォースエッジ）を突き刺すかのように振りおろす。

ティアさんの四爪痕（フォースエッジ）が振り下ろされるのと、シキさんが落下したのはほぼ同時。落下した衝撃で砂埃が舞い、視界が悪くなる。普通だったらこれでティアさんの勝ちだろう。

「――私の勝ちだな、ティア」

でも聞こえてきたのはシキさんの勝利宣言。

砂埃が晴れ、見えたのは片方の四爪痕（フォースエッジ）を弾かれ、片方の四爪痕（フォースエッジ）に銃を突きつけられ、同じように眉間に銃を突きつけられているティアさんの姿だった。

あの落下し始めてから落下するまであの一瞬の攻防。あの中で何があったのかは分からないが、それでもあの状況からティアさん相手に逆転できるシキさんは、やはりスゴイ。

「……ちっ、オレの負けかよ……。今回は勝てたと思ったんだけどなぁ……」
「甘い甘い。確かに強くなったけど、俺に勝つにはまだ足りねェよ」
お互いに武器を引き言葉を交わす姿は、いつもの優しい二人のものだった。
とりあえず、シキさんに気になったことを訊くために、二人に近づいていく。
「あの一瞬の攻防で、どうやってティアさんに勝ったんですか？」
「ん？　そりゃ地面に落ちる前にティアの四爪痕（フォースエッジ）だっけ？　を弾いて、体勢を立て直しながら反撃できないようにと、勝ちを決めれるようにしただけだが？」
……言ってることがムチャクチャだ。あんな一瞬のうちに、それだけの動作を出来るはずがない。
だけど、現にシキさんはやってのけてるわけで、つまりはシキさんがでたらめってことか……。正直、でたらめもいいところだと思う。
でも……銃を使うシキさんの姿はとてもカッコよかった。確かにティアさんの双剣も良かったけど、私は銃の方が好きだ。
だから言おう――。
「シキさん。私に銃の使い方を教えてほしい」
「銃の使い方を？　なんで急に」
「シキさんの銃を使う姿が、とでもカッコよかった。私もあんな風に銃を使って――私と同じような境遇に遭ってる人を助けたいから」
私の言葉を聞いたシキさんとティアさんが驚いたような表情をし

ていた。
私は紛争や部族ないにてヒドイ仕打ちを受けてきた。私と同じような境遇にある者を、純粋に助けたいと思った。
偶然に授かったこの眼――直死の魔眼とシキさんのような狙撃手になって……。
シキさんは少しだけ考え、すぐにフッと笑みをこぼしながら私に言ってきた。

「分かった。だけど俺の訓練はティアのより厳しいぞ？」
「大丈夫。耐えきってみせるよ」

私がそういうとシキさんは嬉しそうな表情をしながら、私の頭を撫でてきた。
こうして私は、狙撃手としての道を進むことを決めた。

第三十七撃『二つの修行とマナの選択。さあ、好きな方を選ぶが良い』（後書き）

次回、何かが起きますッ！！
感想待ってますッ！！

第三十八撃『第三皇女の望み。良いぜ、一生アンタの側に居るよ』（前書き）

今回はまさかの急展開ッ！！
長々というのはやめにして、どうぞッ！！

第三十八撃『第三皇女の望み。良いぜ、一生アンタの側に居るよ』

「魔眼に頼る戦いはするな。私のようになるぞ」

シキさんの言葉を聞きながら、シキさんの造り出した人造無生物――神騎兵の剣による攻撃を避ける。

神騎兵の動きは単調ではあるが、パターンが多いために見切るのがとても難しい。

私の手に握られているのは、シキさんが創り出した二丁拳銃の魔法具。これは私が無理いって創ってもらった武器だ。弾丸に使用されるのは、自身に内包されている魔力。

私の魔力は大したことはないけど、シキさんの創った二丁拳銃は私の魔力でも何万発と撃てるように、調整されている。

引き金を引けば魔力弾が放たれる。魔眼を使えば、神騎兵を簡単に倒すことが出来る。だけど、シキさんはそれを許さない。

彼は魔眼に頼る戦いはさせたくないと言う。それは強くなることに遠回りの道だからしい。だから、今は魔眼を使っていない。

「良いか、敵が複数居る場合はまずは一番手近な奴に二発、弾丸をぶち込め。それが銃で近距離戦を行う鉄則だ」

「はいッ！！」

シキさんの言葉に返事を返しながら、私は一番手近に居た神騎兵の胸と太ももの部分に狙いを定め、魔力弾を放つ。

しかし、銃の扱いにまだ慣れていない私では、シキさんのように正確に狙いはつけられず、太ももに放った魔力弾は外れる。

でも胸に放った魔力弾は狙いよりもずれてしまったが、それでも何とか神騎兵を倒すことが出来た。

だが一体の神騎兵を倒した程度では、戦いは終わらない。神騎兵は複数居る。既に他の神騎兵が、私に向かって剣を振りおろしてきている。

それを後ろに身を引くことにより避け、そのまま二丁拳銃の銃口を神騎兵の頭と胸にピタリとつけ、引き金を引く。

刹那、神騎兵の頭と胸には二つの穴が開き、神騎兵はその場に倒れ込む。

「気を抜くなッ！！　敵はまだ居るのだぞッ！！」

「――ッ！？」

シキさんの言葉を受けてハッとしながら、後ろを振り向く。

するとそこには既に剣を振りおろしてきている、神騎兵の姿があった……。

第三十八撃

『第三皇女の望み。良いぜ、一生アンタの側に居るよ』

「ったく、だからいきなりやり過ぎるなって言ったろ？」

「す、スミマセン……。でも強くなるには少しでも強い敵と戦った方が良いと思って……」

「それで怪我したら元も子もないだろ。今回はこの程度で済んでよかったよ」

私は怪我をしてしまったマナの手当てをしながら、マナに説教を垂れる。

神騎兵の反応に遅れたマナは、身を投げ出すように飛び退いたのだが、着地のことまで考えてなかったらしく、着地点に落ちていた

石に頭をぶつけ、頭を切ってしまった。
出血は多かったが怪我の度合いは大したことはなく、すぐに止血をすることが出来た。
だがどちらにしろ今日の訓練いや、当分は安静にしていなければ、傷口が開いてしまうだろう。

「怪我の手当ても終わりましたし、早速訓練の続きを――」
「アホかお前は――――――ッッッ！！！」

私は自分の体調の管理もしようとせずに、訓練を行おうとするマナを、珍しく大声を出して怒鳴り付ける。
近くだったためにかなり五月蝿かったのか、マナは顔をしかめながら私の方を驚いたような表情をしている。
……というかしかめるか驚くならば、どちらかにしてもらいたいのだが……。

「お前は自分の体調の管理もしねェで訓練やるとかバカなのか！？あァッ！？　そんなんで強くなれるか――――ッッッ！！！」
「で、でもティアさんはそうやって強くなったって……」
「上級者と初心者とを一緒にするなッ！！　同じ力を持ってるからって鷹とヒヨコじゃ話にならねェだろうがッ！！」

というかティアも、初心者のマナに変なことを吹き込むのは止めてもらいたいのだがな……。
初心者ながらに強くなりたいと我武者羅に努力する奴は、とにかく危なっかしい。
その向上心は認めるのだが、そうやって無茶して怪我などしてもらっては、私が困るのだよ。
――実際、私もそうやって怪我したうちの一人だから、マナには私と同じようにはなってもらいたくない……。

「シキさん……？　どうかしたんですか？」
「ん、いや……何でもない。とにかく、訓練はしばらく禁止だ。異論は認めない」
「……分かりました」
マナはしぶしぶといった感じではあったが、なんとか納得してくれたようだ。
まあ、どうせ裏ではティアに訓練してもらおうとするかもしろないが、そこはティアに釘を刺しておけば大丈夫だろう。
とにかく、しばらくはマナは安静にしてもらうとして、あとは依頼をこなす程度しかやることはないか。
……いや、まだ他にも重要なやるべきことがあったな。
「誕生会……明日じゃねェか」
ポケットからテオから貰った手紙を取り出しながら呟く。
そう、何を隠そう明日はテオの誕生会のある日なのだ。色々なことがあったために、忘れてしまうところだった。
これで誕生会に行かなかったとなれば、帝国の総力を上げて追われる身となるやもしれん……結構マジで。
ここから帝国まで行くとしたら、一日までは掛からないだろうが、早めに出た方が良いかもしれんな。
「よし、帝国に行こう」
「何を『よし、京都に行こう』みたいなのりで言ってるんですか」
「いや、思ったことを口にしただけだが……」
まさかミカがそんな言葉を知っているとは思わなかったな。
確かにミカと一緒に京都に行ったが、いったいドコでそのような

言葉を習ったのだか……。
マナは何が何だか分からないと言ったような表情をしているし、伊達に見かけの三倍以上は生きていない、とでも言うところだろう。
それにしても、ティアはどこに行ったのだ？
朝の訓練から見かけていないのだがな……。

「ティアさんなら帝国に行ったと言ってました」
「あいつ……いつの間に……」

手紙が開けてもいないのに、開けられていたからもしやとは思ったが、勝手に手紙を開けていたとはな。
全く……手癖の悪い殺人姫だ。
とにかく、行ってしまった奴のことを言っていても意味はない。
私たちは、帝国に向けて動き出したのだった。

◇

「ここが……帝国……」

一日に近い時間をかけて、私たちは帝国にやって来ていた。
やはりどの年でも皇女の誕生日はかなり盛大に賑わっており、まさにお祭り騒ぎと言えるだろう。
そんな中、帝国に初めて来たマナは、この騒ぎの重圧に若干充てられながらも、楽しげに回りを見渡している。
よほどこの政が珍しく見えるのか、目をキラキラとさせている。
いくら普段は私の銃の訓練や、ティアの魔眼やナイフ・体術の訓練を受けているとはいえ、実年齢からすればまだまだ子供。
こういったことには心が踊るのだろう。

「ん～……。これから俺はテオのとこ行くけど、お前らはどうする

？」

「私は……その……」

「しばらく遊んでることにしますです」

何やら言いづらそうにしているマナに代わり、ミカが代わりに答えてくれる。

何をそのように言いづらそうにしているのだか……。

遊びたいならば遊びたいと言えば良いだろうに。

子供の仕事は遊んで寝ることだ。遊ぶことは遠慮をすることではない。

それに、私の魂の一部を与えた神騎兵を付かせていれば、どのような事態にも対応出来るはずだ。

尤も、並大抵の実力者では神騎兵は愚か、マナにすら勝てないだろうがな。

「よし、なら一応俺の財布預けとくけどくれぐれも全部は使うなよ？」

「分かってますです。全部使ってやろうなんては思ってませんです」

「それ、全部使うって言ってるのと同じじゃあ……」

……マナの言う通りだな。このままミカに財布を預けたのでは、確実に中身が空になってしまう……。

それを瞬時に悟った私は、無言でマナに自らの財布を預ける。

マナはマナで私の心情を理解してくれたのか、無言で頷きながら財布を受け取ってくれた。

隣でミカがぶーたら言っているようだが、異論は認めない。

とりあえず、神騎兵を創り出して、二人を見送ったあとにテオの居る宮殿に向けて歩きだした。

しばらく歩いていると、ようやく宮殿が見えてきた。

以前、というか私が最初にこの地に足を踏み入れることになった切欠。

テオの誕生会の警備を行ったときに、侵入者の侵入を許してしまってから、宮殿の警備は強固なものとなった。

アリ一匹入らせないとばかりに張り詰める門前に、若干引き気味になりながらも、私は門を潜り、宮殿に入る。

少し離れていただけだと言うのに、この場所がとても懐かしいような感じがする。

やはり今までの生活の密度が濃すぎて、短い時でも長く感じてしまうのが原因なのだろうか……。

それに、何だかんだいって私はもうかなりの歳だな。四十くらいか？

長命種であるために、容姿からはそうは思われないだろうがな。

そんなことを一人考えがら、テオの部屋まで真っ直ぐに向かっていく。

時折通り過ぎる侍女が私に熱い視線を向けてくるのだが、いったい何事だ……。

とりあえず、テオの部屋の前に到着したので、私はノックを二回してから部屋の中に入る。

「シキ。ようやく来たのじゃな。待ちくたびれたぞ？」

「お、おう、悪いな。遅くなって」

私は部屋の中に居たテオから思わず視線を逸らしてしまいながら、そう言う。

部屋に居たテオは誕生会用に仕立てたのか、ドレスのような衣装に身を包んでいる。

さらにこの数年でチビから、大人の色気を出すようになったために、逸らざるを得なかったのだ。

……なんなのだろうか、この胸の高まりは……。戦いの緊張感と

も違う、感じたこともないような鼓動の高まり……。

「どうしたのじゃ？　何かあったのか？」

「い、いや、何でもねェよ。それより、今まで元気にしてたか？」

「うむ、もちろんじゃ。毎日シアが五月蝿くての……」

そういったテオは本当にげんなりしているようで、どこかお疲れに見えた。

あれだけ几帳面で、仕事の出来るシアさんにしごかれているのだから、疲れが溜まるのも致し方ないだろう。

「ところでシキ。その……に、似合っているかの……？」

「――ッ！？　う、うん、スゴく似合ってるよ」

「本当かの？　口調がおかしい気がするのじゃが……」

「き、気のせいだ……」

私はそっぽを向きながらテオにそう答える。

……仕方ないだろう。テオがわずかに恥ずかしげに頬を染めながら、上目遣いで私にそう言ってきたのだから。

そのようなことをされては、私まで恥ずかしくなってしまうではないか。

……ん？　何故私はそのようなことをされて、恥ずかしがっているのだ。

以前ならそのようなことは無かったはずなのに。

さらにはこの鼓動の高まり……。いったい何がどうなっているのだ。

そのような疑問を抱きながら、私はテオと今までのたわいのない話を繰り返していた。

京都に行ったときに、リョウメンスクナノカミと戦ったこと。

半魔族（ハーフ）であるマナを拾い、弟子擬きにして鍛えていること。

他にも数えきれないほど、何のこともない話をした。
その話の中で私の目に入るのは、テオの屈託のない笑顔。
……あぁ、そうか。私はきっとテオのことを――愛しているんだ。

「テオ……」
「ど、どうしたのじゃ……？」

私のいきなりの雰囲気の変化に、テオは驚き、緊張気味になりながらも聞き返してくる。
こちらとてこのようなことを言ったり、やったりするのは初めてなのだ。
いくら『力』を得て、強くなったとしても初めてなことに関しては緊張するものだ。

「えっと……その……あれだ……。……あぁ！！　くそッ！！　言い言葉見つからねェ！！　それに俺はまどろっこしいのは嫌いだッ！！」

想いを告白するのに適切な言葉を探していたのだが、全くといっていいほど思い浮かばない。
思わず叫んでしまったではないか。
くそ、ナギも告白の練習するときもこのような心情だったのか……。
あのときは馬鹿にしてしまったが、今ならナギの気持ちは嫌なほど分かるぞ。
だがここまで来て後には引けない。ただ伝えれば良い。私の気持ちを。

「好きだ。け、結婚してくれ」
「――ッ！？　け、けけけ結婚！？」

私の言葉にテオは顔を真っ赤にしながら復唱してくる。
あぁ……遂に言ってしまったんだな。
彼女にしてみれば私のいきなりの告白に迷惑しているかもしれない。
だけど、今ここで想いを伝えなかったならば、私は後悔する。
「こ、こちらこそ、よ、よろしくお願いします……」
もう沸騰していながらも、さらに沸騰しかねないほどに顔を真っ赤にさせながら、テオは私にそういってくる。
――ついに、俺にも春が来たようです……。

◇

この日、第三皇女の父親に当たる王様の王宮に、一人の侵入者が現れた。
選抜され、鍛え上げられた衛兵たちを、まるで息をするかのように薙ぎ倒していく一人の人物。
長い銀髪を三つ編みにしており、漆黒の外套を着用している竜人。
手には鎌が握られており、腰には銃が携えられている。
一見すればただの侵入者か、王様殺しにしか見えない。
だがしかし、この場に居るものはとてもじゃないが、この竜人が王様殺しに来たとは思えない。
ドアが尋常でないほどの音を立てて、開け放たれる。
入ってきた竜人は中を一瞥したあとに、王様に向かって問いかける。
「今日は貴方に言いたいことがあって参上した」
「なんじゃ、申してみよ」

「テオを私の嫁にくれないだろうかッ！！」
「よし、くれてやろうッ！！」
「……は？」

と、間抜けな声を発したのは何を隠そう竜人――シキだ。
先ほどまでは一触即発の雰囲気を放っていたにも関わらず、今ではそのような雰囲気は一切ない。
それにシキが間抜けな声を出してしまったのも仕方の無いことだろう。
いくら第三皇女とはいえ王族は王族。二つ返事で了承するなど、考えもしていなかったからだ。
これにはさすがのシキでも、あっけらかんとせざるを得ない。

「……そんな適当で良いのかよ……」
「うむ、構わん。お主の話は娘から聞いておったからの。それに、一昔前は魔法使いが恐れた『死の恐怖』、今は皇女を守る『皇女の影』。娘を守るには申し分ないくらいじゃ」
「『死の恐怖』って呼ばないでもらえるか？　もうあの二つ名は捨てたんだ。今は『皇女の影』だけで十分だ」
「そうじゃったか。じゃがあのお転婆娘にはちょうどいい相手じゃ。あの神格事件を解決した、英雄なのじゃからな」

王様の言葉にシキは驚きながら知ってたのか、と呟いてしまっていた。
神格事件は、かなり魔法世界を巻き込んだ事件なのだが、その詳細はほとんどが闇の中だ。
あの場に居たものでさえもが、ほとんど分かっていないと言うのに、帝国の王である王様が知っているはずがない。
ましてや、その解決に導いた英雄がシキだと知っているのは、シキを含めた八人しか知らないはずだ。

「何故知っている、と言う顔をしているが、娘から聞いたのじゃぞ？」
「あー……そういうこと」
王様の言葉にシキはようやく何故知っていたかを理解した。
八人のうち、事件に関わることなくこのことを知っているのはテオのみ。
そのテオの父親ならば知っていてもおかしくはないだろう。
「それでは、娘をよろしくの」
「あぁ。絶対に、幸せにしてみせる」
「がっはっはっ！！　たくましいなッ！！」
この日、王宮にて王様の愉快な笑い声が響き渡った。
そして後に、シキがこの王宮に侵入してきたというのは、新たな武勇伝になるのは、まだ先の話である。

◇

私がテオの父親の王宮に殴り込みに行ってから、早くも数日が経過した。
今、王都では今までに無いくらいの賑わいを見せている。
理由は至って簡単だ。第三皇女が今日、結婚するからだ……私と。
私は皇女のような皇族のみが使える礼拝堂にて、タキシードを纏い緊張している真っ最中だ。
今まで、私は普通では有り得ないほどの人生を送ってきた。
神に殺され転生し、拾われた義父の親が悪魔に襲われたり、神格とかいう神の力を手に入れたり……このように波乱万丈な人生を送ってきた。

きっと、これからもこのようなことが起こるのかもしれない。
だけど私が今抱いている気持ちは、もう一生味わえない。これは断言できる。

そして私たちは、祭壇の前に居る。
隣には私の一生のパートナーとなりえる女性――テオが居る。
今のテオの姿は純白のウェディングドレスに身を包んでいる。
正直恥ずかしすぎて直視出来ない。ここまで顔が熱くなるなど、もう二度と味わいたいとは思わない。

神父が声をかける。
ヴェール越しの彼女の表情は、緊張や恥じらいが見える。
だけど彼女が私と同じ気持ちを抱いているならば、緊張や恥じらいなどではなく、喜びで頬を紅に染めているはずだ。
テオは本当に美人になった。
初めて出会ったときはただのじゃじゃ馬娘、もしくは妹のように思えた。
だけど、共に行動するにつれて彼女の存在は大きくなっていき、いつの間にか惚れていた……極最近気づいたんだけどな。
きっと、私は一生彼女のために力を振るうだろう。
いつなんどきも彼女の味方をし、外敵から守り、全世界が私たちの敵になったとしても――絶対に守り通す。
もう二度と、大切な人を失う気持ちを味わいたくないから。
神父が言葉を良い終える。互いに指輪を交換し、見つめ合う。

「シキ、一生妾の側に居てくれるか？」
「あぁ。俺は一生、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアを守り、側に居ることを誓う」

言葉を言い終えると、互いに顔を近づける。

今までの大切な思い出は大切にする。
でも、これからの生活はきっともっと大切な思い出になる。
――そして、俺たちは唇を重ねた。

◇

「遂におめぇも結婚、しかもヘラスの嬢ちゃんか。玉の輿か？」
「うぜェ……。久しぶりに会って開口一番それか？」
「おめでとうございます。……くっ、シキ君に先を越されるとは……」
「いや、お前も結婚したいなら選べよ……。あんたなら選り取りだろ？」

あれから時刻は一気に経過し、夜のパーティーに移行した。
パーティーには私が呼んだバルドやシェリル、アリアドネー三人トリオにチビ二人……などなどが来ている。
アリアドネーのシェリルやユーリは、元から招待されていたらしい。
結局、招待しなければ来れなかったのはバルドとティアの二人だけになるな。
ちなみに紅き翼の皆も呼んだのだが、来れたのはジャックにタカミチ、クルトくらいだ。
ナギとアリカは何かあるのだろうが、ガトウや詠春はどうしたのだろうな。

「おめでとうございますです、お父様。まさかテオがお母様になるとは、思いもしませんでした」
「別にお母様なんて呼ばなくて良いだろ。テオのままでいいさ」
「シキさん、似合ってるよ。とてもカッコイイです」
「ありがとよ、マナ」

同じように正装に身を包んでいる義娘のミカに、最近義娘にするかどうか迷っているマナがそう言ってきた。
この正装は最近全く依頼を受けていないために、減ってきた自腹で買ったものだ。
懐は温まっていたから、どうと言うことはなかったがな。
そんなことを考えていると、ドンッ!!　ドンッ!!　と祝福の花火が上がるのが見えた。
旧世界とはまた一味違う、魔法世界独自の花火に思わず感嘆の声をあげる。
……と言うか、結婚式の夜のパーティーに花火なんてあるものなのか……？

「綺麗じゃな、シキ」
「おっ、テオか。どした？　あっちで話してたんじゃねェのか？」
「あのような堅苦しい連中と話してはおれぬわ……。せっかくの祝い事じゃと言うのに……」
「ま、まあ、皇族が結婚したんだから仕方ないんじゃないか……？」

げんなりとしているテオに、苦笑いをしながらもそう言う。
確かにあんな堅苦しい輩共と話しているのは肩が凝る。
無駄に礼儀正しいから、私のような者が話すのは異常に疲れる。
元々、私は礼儀正しいという言葉から程遠い性格をしているからな。
するとテオが夜空に輝く花火を見上げながら、私に寄りかかってきた。

「シキ？」
「んー。どうしたら、テオ」
「ふふっ、呼んでみただけじゃ」

楽しげにそう言うテオに対して、なんだそれ、と私は笑いながらいう。
私は今、きっと幸せなんだと思う。
この幸せを崩さないためにも、俺は色々な人から学んだ『力』について理解し、彼女を一生守る。
それが、俺が俺にかける最初で最後の魔法――。

「テオ、愛してるぞ？」
「なんじゃ、藪から棒に。妾も愛しておるぞ？」

そして、私たちはまた唇を重ねあった。

第三十八撃『第三皇女の望み。良いぜ、一生アンタの側に居るよ』（後書き）

今回の話は賛否両論なのではないかと思います。
早く過去編をやって、原作に入りたいので……。
次回からは過去編に入ります。
過去編には、シキ以外は今までに出たオリキャラは出ません。
新しいオリキャラが二人ほど出ますが、おそらく過去編にしか出ません。
過去編以外に出たとしても、かなり先になると思いますので、ご了承ください。
では、感想待ってますッ！！

第三十九撃『過去の狙撃手。強く……強くなりてェんだ……』（前書き）

今回より過去編入りますッ！！
過去編中は三人称になりますので、ご了承ください。

では、どうぞッ！！

第三十九撃『過去の狙撃手。強く……強くなりてぇんだ……』

テオと結婚して、私が正式に王族に認定されてから、早くも数日が経過しようとしていた。

さすがに結婚してからは余り依頼を受ける、などといったことはしなくなった。

依頼を受ける理由がないからだ。今までは依頼を受けることこそ、私の目的だった。

しかし、今は違う。今の私の目的は妻であるテオや、私の大切な者を守ることだ。

他の皆は何気に魔法世界屈指の力の持ち主、ならば守るのは何の力も持たないテオだ。

……まあ、絶対防御の力を込めたアクセサリーを渡してあるから、私が居なくても良いのだがな。

そうそう、あれからマナの稽古もしっかりとつけている。

魔眼の方は、正直ティアクラスにまで使えるようになっている。

万物の死が視える上に、運用の面でも巧みに使いこなすことが出来ている。　ただ、体術と射撃に関してはやはり、時間を掛けてやらねばならないようだ。

それでも中位の魔法使い程度になら、勝てるようにはなっているのだがな。

……まあ、実際はその様なことはどうでも良かったりする。

実は王家の生活が始まってから、今まで私は非常に困っていることがある。

「シキ様、お着替えの用意が出来ました」

そう、困っていることというのは、この侍女（メイド）達のことだ。

テオにも侍女がついているように、その夫になった私にも侍女がついたようだ。

私としては、今まで通りテオの客として扱ってもらって構わないのだが、それを侍女長（メイド）が許さなかった。

仮にも（というか本家の）王族なのだから、王族らしい生活をしろとのことらしい。

仕方がないので、侍女達に身の回りの世話をやらせることにしたのだが、この侍女は何から何まで私の世話をやろうとする。

朝の着替えから夜の入浴まで付きっきりで、正直心が落ち着くときが皆無だ。

唯一落ち着けると言えばマナと訓練しているときや寝ているとき、あとはテオと抱き合っているときくらいか。

……ん？　今重大なことを言わなかったかだと？

全く……夫婦になったのだから、夜の営みがあってもおかしくはないだろう？

羨ましいか？　羨ましいだろう。だが絶対にテオは譲らん。触れようものなら、全力を持って排除する。

……おっと、話が脱線したな。

「はぁ……前にも言ったが、自分のことは自分でする。君達も私に構わず、自分の持ち場に戻ったらどうだ？」

「私達の持ち場はシキ様の身の回りのお世話をする場所です。シキ様はお気になさらず私達にお願い下さい」

……と、このように何回も言っているのだが、決して譲ろうとしないのだ。

忠誠心が高いのだか何なのかはわからないが、私は別に王家の育ちではないのだから自分のことは自分で出来るのだが……。

とにかく、私の生活は朝から疲れるものとなってしまったと言っておこう……。

第三十九撃

『狙撃手の過去。強く……強くなりてェんだ……』

その日の朝。

毎朝恒例となった、侍女（メイド）騒ぎに慣れてきたときの朝食の時に、テオがさらっととんでもないことを私に訊ねてきた。

「シキは『死の恐怖』と呼ばれていたのは本当なのか？」

「ぶっ！？」

テオの言葉に私は思わず口に含んでいたコーヒーを吐き出してしまう。

な、何故にテオが私が『死の恐怖』だったということを知っているのだ……。

このことを知っているのは、ほんの一部の人間しか居ないはず。

ユーリやシェリルまでもが知らないのに何故……。

「父上から訊いたのじゃ。それで、どうしてシキは『死の恐怖』と呼ばれていたのじゃ？」

……やはりか。

あの能天気な親父め、勝手に人の過去を暴露してくれるとは……

良い度胸をしてるではないか……。

「……言わなきゃダメ？」

「あたしも聞きたいです」

「じゃあ、私も」

「――と言うことじゃ」

同じように朝食をとっていたミカとマナもそう言ってくる。

私は溜め息を一つつき、しぶしぶ話すことにした。

やれやれ、私のその五年間は人生において最も荒れていた時期で、最も繋がりを作ることを恐れることになった時期なんだがな……。

そう、あのときの私は皆からこう呼ばれていた――『死の恐怖』と……。

◇

ガキィンッ!!　ととある遺跡の中より、連続的に剣戟の音が鳴り響くのが聞こえる。

その場所に居るのは、遺跡を守るために配置された警備兵（といっても無生物だが）。そして一人の男の姿だった。

男は長い銀髪を三つ編みにまとめ、荒々しいデザインの黒い外套に身を包んでいる。

手には黒い外套と同じように荒々しいデザインをした鎌を構え、濁った瞳には警備兵の姿を映し出している。

彼の名はシキ・K（クロカミ）・アスタロト。自らの村を悪魔によって失い、力を求めてさまよう男だ。

「――――ッ!!」

獣のような雄叫びわあげながら、シキは漆黒の鎌を警備兵に向かって振るう。

横凪ぎに振るわれた鎌は、警備兵の頭部の部分に向かっていく。

しかし、警備兵はそれを手に持っていた大剣で防ぐ。

チッ、と舌打ちをしながらもシキはそのまま地を蹴り、警備兵の頭の上を飛び後ろに回る。

背中を合わせるように対峙していた二人のうち、シキは直ぐ様に動き出し、遠心力を乗せた一撃を、警備兵の胴体に叩き込む。
鈍く光る刀身から放たれた一撃は、まるでバターを切るかのような滑らかさで、石造りの胴体を切り裂く。
これで漸く数体居る警備兵のうちの一人。この警備兵各個の力をランク付けするならば、間違いなくＡＡ（ダブルエー）ランクは下らないだろう。
今のシキの実力は高く見積もっても、だいたいＡＡＡ（トリプルエー）ランクに達するかどうかの実力だ。そんな彼が複数居る警備兵に真っ向勝負を挑むなど、自殺行為にしかならないだろう。

「ぐ、あ……っ！？」

案の定、一体の警備兵を倒した後に出来た隙をつかれ、シキは他の警備兵によって弾き飛ばされる。
大剣による直接的な殺傷攻撃は鎌の柄の部分で防いだものの、警備兵の腕力はとてもじゃないがシキが受け止めきれる力ではなかった。
力を受け流すこともできず、その場に踏ん張りきることも出来なかったシキは弾き飛ばされ、遺跡の石造りの外壁に背中を強かに打ち付ける。
強制的に肺から空気が押し出され、脱力状態に陥ってしまう。さらには頭をぶつけてしまったのか、脳が揺れ、視界がぶれて見える。
本来であれば休みが必要であるが、今のこの状況で休んでいる暇などあるはずがない。
壁に背中を叩きつけ、倒れているシキに向かって警備兵が大剣を振り下ろしてくる。シキは無理矢理体を捻りその場から離脱し、体勢を立て直して警備兵を睨み付ける。
だがその直後に他の警備兵が大剣を真横に凪ぎ払う。若干反応に遅れてしまい、頬に大剣の刃がかするが、体勢を低くして回避したために致命傷には至らない。

「――――ッ！！！」

遠心力も加え、警備兵の股から頭に掛けて鎌を一気に振り上げ、警備兵を真っ二つに切り裂く。これで残りは三体。

しかし、この段階で既にシキの体力は底をつきかけている。今のシキは、神格王を取り込んでいるシキとはわけが違う。

実力も彼を凌ぐ者など山ほど居るし、今のシキの実力は常識のランク付けに該当するほどに、微弱な力だ。

だからといって今のシキが諦めるはずがなかった。自分が逆境に陥れば陥るほどに彼は歓喜する。これに生き残れば、力を手に入れられると……。

自分の命が危険にさらされるなど頭の中にはなかった。恐ろしいまでの『力』への執着。それがシキの余計な感情を全て破壊する。

「――オォォオオオオオオオオオッッッ！！！」

犬歯を剥き出しにしながら叫び、残りの警備兵に向かって体勢を低くし、鎌を水平に構えながら走り出す。その姿はまるで彼の心を表す獣そのものだ。

警備兵が動く。真っ向から飛び込んでくるシキの動きに合わせて、大剣を振り下ろすぐらいの知能は警備兵にも備わっている。

大剣はシキに向かって振り下ろされたが、それがシキを捉えることはなかった。既にシキはその場から飛躍し、警備兵の背後に回り込んでいる。

しかし、体力のつきかけているシキの攻撃するタイミングが、ワンテンポ遅れた。使いなれているはずの鎌や外套が、やけに重く感じる。それが攻撃するタイミングを遅れさせた理由。

いくら知能がないに等しいとはいえ、敵を排除するために配置された警備兵だ。そのような隙を、みすみす見逃すようなことがある

わけがない。
それに気づいたシキは、その場から離脱しようとするが、既に遅かった。
彼は三体の警備兵の中心になるように立ってしまっている。それは逃げ場を自ら消してしまっていた。振り下ろされる三つの大剣。一つでも耐えきれないのに、三つも来たとあれば確実にお陀仏だ。

（ふざけるな……。俺は『力』を手に入れねェといけないんだッ！！！）

歪んだ願いは時として思いもよらない力を発揮する。
シキの脳裏に浮かんだのは『避けきれないのであれば避けなければ良い』という答えだ。しかし、それでは命がなくなってしまう。
鎌の束を強く握りしめる。力を溜めている暇などない。脚を軸にして、鎌を水平に保ったままシキは回転する。
石造りの胴体を易々と切り裂く漆黒の鎌は、大剣を振り下ろしてくる警備兵三体の胴体を一瞬にして切り裂く。
ガラガラ、と音を立てて石造りの警備兵が文字通り崩れ去る。

「はぁ……はぁ……。強く……強くなるんだ……」

自己暗示をするかのようにシキは呟く。敵を倒したことにシキは何も感じない。まるでそれが当たり前のことであるかのように、崩れ去った警備兵に目もくれずに遺跡の奥に進んでいく。
実際、彼にとって既に動かない敵などただの人形でしかないのだ。もちろん自分の力を上げる贄とならない存在も同じ。シキにとっては力の糧とならない存在は無意味なのだ。
肩で息をしながらも、シキは歩みを止めない。死神のような出で立ちをしているシキは、敵を求めてさ迷う。
この遺跡に来た理由も別にこの先にある宝が目的ではない。戦う

ためにたまたま立ち寄ったに過ぎないのだ。
……もうどれぐらい歩いただろう。鎌を引きづりながら歩くこと数十分、敵に出会うことなくシキは遺跡を進んでいる。
もう敵は居ないのだろうか、と思わせるほどに敵が現れない。罠でも有ればまだ良かったのかもしれないが、生憎とこの遺跡は警備兵に絶対の自信を持っていたのか、罠が一切ない。
その事に苛立ちを覚えていたシキの視界の先に、何かが輝くような光が見えた。それに釣られるように歩いていった先には、とんでもない量の金銀財宝があった。
もしそんなものを見つけたのであれば、大抵の者は狂喜乱舞するだろう。だがシキは苛立ちを覚えただけだった。
遺跡をすすんだ先に待っていたのはただの宝でした。冗談じゃない、ふざけるなとシキは怒りを覚えた。

「はい、ごくろーさん。アンタの役目はここでおしまいだよ」
「……」

不意に後ろからそんな声が聞こえた。煩わしげに首だけを動かして、声の発信源に片目を向ける。
視界に入ったのは四人の男女。装備や格好を見る限り、その男女はトレジャーハンターのようだった。
しかし、その四人はとてもＡＡ（ダブルエー）ランクの警備兵を倒せるような実力者には、とてもじゃないが見えない。
さらには先ほどの発言。その二つからシキの中にある仮説が浮かび上がる。
――こいつらは俺の後をつけてきた……。

「あんたずいぶん強いんだねぇ。おかげでこっちは楽させてもらったよ」

やはりな、と彼は思う。宝など興味のなかったシキにとってその行為には全く怒りを感じない。むしろ理由できるものを有効活用した頭の良い奴等だ、とさえ感じるほどだ。

さらに自分より弱者であることが分かっている四人に対し、シキが敵対するはずもなく、ただ後を去るだけのはずだった。

しかし、トレジャーハンターの四人は失態を犯す。長剣を携えている男がシキに刃を向けたのだ。

「……何のつもりだ」

「残念だけど、アンタには消えてもらう。宝はアタシたちのもんだ」

「……そうか」

シキは一言そう答えて、上半身の力を抜き、鎌を持つ手をだらんと下げる。それをリーダーらしき女は降伏の印と受け取ったようだが、それは違う。

刹那、長剣を構えていた男の腕が宙を舞った。いきなりのことで、何が起こったか分からなかった四人の思考が固まる。

それはシキの前でやるには、自殺行為としか呼べない行動であった。シキが動く。さっきまで体力が尽きかけていたとは思えないほどの速さで、四人に迫る。

否、シキが速いのではない。この四人が体力の尽きかけている彼の動きにさえついてこれていないが故に、このように見えてしまうだけだ。

ヒュン、と何かが空気を切る鋭い音が聞こえた。それと同時に遺跡の最深部に大量の鮮血が舞う。そこまでして、ようやく四人は何が起こったかを理解した。

「――――――～～～ッッッ！！？」

その場に伏せたのは二人。最初に腕を切り落とされた男に、リー

ダーらしき女だ。女も男と同じように腕を切り落とされていた。
叫びにならない叫び。声を出すことも出来ずに、今まで感じたこともないような痛みに苦しむ。
カラン、と男の腕と一緒に飛ばされて長剣が石造りの床に落ちる。これまでの時間に換算すればおよそ十秒。いつもの彼であればその半分以下だったろうが、そのようなことは関係ない。
シキの口が歪む。裂けんばかりに口元を歪ませ、彼は残りの二人のトレジャーハンターに向かって言い放つ。

「そいつらを連れてとっとと失せろ。死にてェってンなら……話は別だがな」

鎌の刃の部分についた血をシキは舐める。その仕草は今の状況の中において、最も残りの二人に恐怖を抱かせる行為だった。
二人は床にうずくまっている二人を強引に起こして、その場から脱兎の如く逃げだした。そんな後ろ姿を見ながら、シキはふん、と鼻をならす。
ヒュン、と鎌についた血を振り払うように一度だけ鎌を振るう。そしてそのまま鎌を仕舞おうとしたのだが、ゾワッ、と背中に奇妙な気配を感じた。
反射的に彼は振り返る。そこにいたのは神に近いと言われるほどの竜――

「古龍……龍樹……ッ！？」

何故このような場所に、そこまでの力を持つ生物が居るかは分からない。そもそもシキにとって理由など意味がない。
強敵と戦い『力』を得ることが出来る。ただそのことに歓喜し、彼を動かす燃料となる。
口元を歪ませる。それは先ほどのものとは違い、喜びに満ちた歪

んだ笑み。狂気に満ちた紅い瞳が古龍龍樹の姿を捉える。
仕舞いかけていた鎌を改めて構え直す。脚を肩幅程度に開き、床を踏みしめる。
対して古龍龍樹はようやくシキを敵と認めたのか、翼を羽ばたかせながら咆哮する。
ビリビリと空気が震えるのを肌で感じとりながらも、シキは動き出す。
床を力の限り蹴り飛ばし、古龍龍樹に向かって接近する。鎌を後ろに振り上げ、体のバネも使い力を溜める。
力を最大限にまで溜め、未だ動き出さない古龍龍樹に向かって鎌を降り下ろした。
刹那、ガキッ、という音が遺跡の最深部に響き渡る。シキは一瞬何が起こったかを理解できなかった。
刀身の半ばほどから砕け散る鎌。残った刀身にも皹が入り、ボロボロと崩れていく。
ゴバァッ!! とシキが吹き飛ばされる。まるで放談のような勢いのまま、壁に叩きつけられる。

「ご、あ……っ……!?」

シキが叩きつけられた場所は、彼の体に沿った形で陥没する。
胃の奥から鉄の味のする何かが込み上げてきて、思わず吐き出してしまう。
血だ。内臓がやられてしまったのだろう。血が口から溢れてくる。
体に動かそうとするが、全くといって良いほどに力が入らない。
壁から抜け、シキは地面に叩きつけられる。

(ふざ……けるな……。俺はまだ……『力』を手に入れて……ねェんだ……)

霞む視界の中、シキは必死に体を動かそうとしながら、古龍龍樹を睨み付ける。
しかし、そんなシキとは裏腹に意識は段々と暗くなっていく。
そして、シキに向かって攻撃しようとしてくる古龍龍樹の姿を最後に、彼の意識は闇に沈んだ。

◇

ふと、目が覚めた。まず視界に入ってきたのは石造りの遺跡などではなく、夜空に煌めく星々。
パチパチという音が聞こえ、視線を傾けてみれば焚き火をしているのが見えた。
どうやら今、自分がいる場所は遺跡の内部ではなく、外の銛の近くのようであることを理解した。
近くには意識を失う前から所持していたライフルに双剣、砕け散った鎌に生活に必要最低限な品々だった。
とりあえず、危険はないようであるから、まずは自分の容態を確認する。

(包帯が巻かれてる……。かなりやられてるが、動けないほどじゃねェ……)

起き上がり、軽く肩を回すと鈍い痛みが駆け抜けるが、我慢しきれないというほどではない。
この程度の怪我は今まで何度もしてきた。それに、戦うのには支障ない。
確認を終えたシキは荷物をまとめて、刀身の砕け散った鎌を手にとる。
しかし、柄の部分だけでは使えないと判断したシキは、それを捨てる。

「ふむ、もう動けるようになったか。さすがに竜人は回復が早いな」
「――ッ！？　誰だッ！？」

不意に聞こえてきた声にシキは咄嗟に反応する。
腰に携えた双剣を逆手に持ちながら抜き放ち、声のした方に構える。
そこに立っていたのは一人の女性だった。
身長百六十五センチのシキよりも、頭半分ほども身長が高い。タンクトップを着用し、その上からロングコートのようなものを羽織っている。
澄みきったような空色の髪をポニーテールにまとめ、手には食材らしきものが握られている。
だが今はそのようなことはどうでも良かった。

（こいつ、いつの間に俺の後ろに……？）

そう、問題なのはシキに気づかれずに、彼の後ろに立っていたことだ。
いくら怪我をしているとはいえ、今までの戦いで培ってきた鋭利な感覚までは鈍ることはない。ましてや休息をとった後なのだから尚更だ。
それなのにも関わらず、シキはこの女性が後ろに立ったことに気がつけなかったのだ。

「警戒するな、と言っても無理そうだな」
「……」

女性は双剣を構えているシキを一瞥しながら言い、何事もないように焚き火の側に腰を下ろす。

手に持っていた食材を調理し始める。手慣れているようで、あっという間に調理が進んでいく。
そんな間にもシキは警戒を緩めない。一定の距離を保ちながら、女性の力量を図る。

（――隙がねェ……）

しかし、シキが力を図ったところ女性には全くの隙がなかった。
一見隙だらけに見えなくもないがそれは違う。調理をしながらもシキを間合いに入れさせず、隙も見せない。
もしここで女性に斬りかかろうものなら、即座に命を失ってしまうだろう。
そんな女性を前にシキは額から汗を流す。
状況は最悪だった。怪我をして力を最大限に発揮できず、相手の力量は体調が万端の時の自分よりも高い。
普通であればまず戦いなど挑まない。しかしシキは違う。

（『力』だ……。『力』を手に入れるにはこいつと戦う必要がある……ッ！！）

『力』を手に入れるためであればどんな状況だろうが、どんな体調だろうが戦う。
それが『力』を手に入れるための近道だと疑わないからだ。
双剣を握る手に力を籠める。隙などない。だからといって刃を納める理由にはならない。
だが、彼は刃を振るうことはなかった。

「先ずは落ち着け戯け。貴様がいくら私と戦おうと強くはなれん」
「……ちっ」

女性の言葉に舌打ちをしながら、シキは刃を納める。
刃を納めた理由は簡単だ。女性が放った弾丸がシキの頬を掠めたからだ。
この距離から外したのであれば力量はないと分かる。しかしこれは、わざとはずされたようにしか見えなかった。
女性は座れ、と一言だけ発し、シキはそれに従って焚き火の近くに腰を下ろす。

「私の名はフィオナ・エリシオン。しがない狙撃手と言っておこう」
「……フィオナ・エリシオン……。――『台風の目』か」
「君みたいな者も知ってるとは……。全く、恥ずかしい限りだよ」

旧世界には台風というものがある。その台風の中心、すなわち目の部分は無風で静かであるが、その周りは強風・豪雨が凄まじい。
フィオナは銃器使いなのだが、その戦いはまさに台風。
彼女を中心に周りはまるで台風のように爆風が巻き起こり、弾丸が入り乱れるまさに人間台風。
そういったフィオナの戦う様子から、それを見た者が、この二つ名をつけたのだ。

「まさか私以外にあの遺跡に入っていると思わなかったが、まあ、助けさせてもらったよ」
「……頼んだ覚えはねェ。勝手なことするな」
「ほぉ、ならば君はあのまま死にたかったのか？　シキ・K（クロカミ）・アスタロト」
「テメェ……なんで名前知ってんだ。名乗った覚えはねェぞ……ッ！！」

フィオナの言葉にシキは警戒心をさらに高めながら叫ぶ。
シキはフィオナに自分の名を名乗って居なかった。さらには持ち

物からは、自分がシキだと断定させるようなものはない。
ならば何故分かったのだ、とシキはフィオナを睨み付ける。
対してフィオナはそんな彼の態度に溜め息をつきながら、口を開く。

「名前は知らなくても、その形（なり）は君が『死の恐怖』と言っているようなものだ。『死の恐怖』はシキ・K・アスタロト。ほら、もう繋がった」

バレたくなかったらその派手な形を変えろ、とフィオナは言いながら調理し終えた料理を口に運ぶ。
シキもそのようなことで自分が誰かを断定されるとは思わなかったが、それ以上に自分についた二つ名を知っていた方が驚いた。
――『死の恐怖』。これは彼が力を求めて様々な敵を倒し、恐怖を与えると言うことから来た二つ名だ。
この二つ名は極少数の者しか知らないはずだが、女性――フィオナはそれを知っていた。

「……なんで俺を助けた」
「む？　理由などないさ。貴様が倒れて死にかけてた、ただそれだけだ」
「……礼は言わねェぞ」

シキは苦々しげに呟きながら、その場から立ち上がる。それを見たフィオナがいう。

「今日はここにいた方が良い。今のシキは良い的だ」
「関係ねェだろ。誰がテメェの指図を聞くかよ」

フィオナの言葉に対してシキは突き放すように言い放つ。

荷物をさっさとまとめてシキは、フィオナの居る場所をあとにした。

そんな彼の背中を見送りながら、フィオナは呟く。

「貴様の求める強さとはなんだ。シキ・K・アスタロト」

彼女の呟きは彼には届かない。

シキの姿は夜の闇に吸い込まれていく。

まるで、彼の未来を示すかのように……。

第三十九撃『過去の狙撃手。強く……強くなりてぇんだ……』（後書き）

過去編では幾らか今後のフラグを立てておきます、物語的な意味で……。

あと、新たに始めた『その竜族は守護銃士なり』も見てください。

シキがリリカルなのはの世界に飛ばされます。

では、感想待ってますッ！！

第四十撃『過去の狙撃手。「力」がねェから、俺は守れねェんだ』（前書き）

更新が一日遅れました……。
リアルで用事があったのですが、はい、言い訳ですね。
では、どうぞッ！！

第四十撃『過去の狙撃手。「力」がねェから、俺は守れねェんだ』

「これを直せ」
「……いきなりだね」

フィオナ・エリシオンと別れてから既に一日が経過し、日が高く昇っていた。
命令口調で口を開いた男――シキは現在、以前に一度だけ訪れたことのある店に足を運んでいた。
この店は拳闘大会に参加する者がよく立ち寄る、拳闘服を扱っている店だ。
拳闘服だけでなく、武器の修理や販売も行っている。
その店の店主は名前こそ知られていないが、武器作りの名工として極少数に知られている。

「原型が分からんじゃないか。えーっと？　こりゃ鎌だね。何やりゃこんな風になるんだい？」
「関係ねェだろ。余計な詮索はするな。で、直せんのか、直せねェのか」
「バカ言っちゃいけねえ。これぐれぇ余裕よ」

シキの憎まれ口にも店主は慣れているとばかりに返答をする。
刃の部分が完全に砕け散り、新たに入手した方が良いのではないかというほどに破損した武器を、店主は余裕で直すと言い切った。
それだけでも彼が名工だということを十分に証明しているだろう。
しかも直すのに料金は要らないときた。

「どのくらい掛かる」

「そうだね……これぐれぇだったら二週間ってとこか」
「……分かった」

二週間という単語にシキの表情が僅かに影が出る。
二週間ということはその間は、最近メインに使っている武器が使えないと言うことだ。
一刻も早く『力』を手に入れたいシキにとって、それだけの時間を無駄にするなどと言うことは、とてもではないが考えられなかった。
しかし、それでも早く使いたいがために急がせて、いざというときに再び壊れてしまっても困る。
こればかりは時間を掛けて待つしか、方法は無かった。

「……どうしちまっんだ？　昔来たときはあんなに楽しそうだったのによ」
「あんたには関係ない。余計な詮索はするなって言ったろ」

苛立ちを隠そうともせずに、シキは店主を真っ直ぐに睨み付ける。
いかに武器作りの名工とはいえ、戦いに関しては素人同然だ。
シキの幾つもの死地を乗り越えてきた濃い殺気に充てられ、店主は冷や汗を流しながら一歩後ずさる。
その瞳はそれ以上の質問を許さなかった。
もし質問をしようならその双剣で、その銃で間違いなく意識が刈り取られる。
『死の恐怖』に怯える店主を見たシキは殺気を抑え、店をあとにした。

オスティアはいつ来ても賑やかだ。
騒がしいほどまでの会話が行き交う。そのほとんどが笑顔に溢れ、幸せそうにしている。

しかし、シキにはその様なことは関係ない。
今は一刻も早く『力』をつけることが、彼にとっての最優先事項であるから。
そんな彼の目に、ふと一枚の貼り紙が目に入る。

（拳闘大会？　今はそんな時期か……）

初めて参加した拳闘大会のことを思い出しながら、彼は思う。
あのときの決勝では義妹が人質にとられ、最悪の試合になってしまったが、結果的には勝つことが出来た。
だが、もしもあのとか勝たなければ、自分の故郷とも呼べる場所を失わなかったのか。
『死の恐怖（こんな風）』にならなかったのではないか。彼の中でそんな考えが駆け巡る。

（考えても無駄か……。どうせこの二週間は身動きがとれないんだ。……エントリーしてくるか）

過ぎたことをぐちぐち考えるのをやめ、シキはこの拳闘大会にエントリーするために、会場に向かって歩き出した。

◇

――――ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアア――ッッッ！！！

五月蝿いほどまでの歓声が拳闘場に響き渡る。
ここ――オスティアにて開かれる拳闘大会は拳闘マニアにとって、かなり知れ渡っているほどに有名だ。
理由は様々あるのだが、強いてあげるのであれば、かなりハイレ

ベルな戦いが観れるから、というものだ。
実際、今回の大会にもかなりの猛者が揃っている。
歓声の中、拳闘場に入るための入り口から二人の人影が現れる。
一人は明らかに肉体派で、拳を主として戦うような男だった。しかし、見た目とは裏腹に相当な実力が伺える。
もう一人は荒々しい黒い外套に身を包み、双剣を携えている竜人。

『さあさあ始まりましたッ！！　今回のカードは賞金稼ぎとして有名な「紅蓮の猟犬」のリーダーとして名高いガルド・ハイドライドッ！！
片や以前の大会では奇跡の大逆転を見せた狙撃手ッ！！　しかし今回は何故か双剣士のシキ・Ｋ・アスタロトッ！！』

入場した二人の名前が呼ばれると、会場はさらに盛り上がりを見せる。
竜人――シキはここ最近は拳闘大会には出場していなかったが、出ていた当時は莫大な人気を誇っていた。
今回の賭け金もガルドよりも、シキが圧倒的に多い。
それは、以前にゲイル・ラインハルトを破ったから、というのもあるのだが。

「知ってるぜ？　お前、『死の恐怖』なんて呼ばれてんだろ？」
「……」
「大層な二つ名だが、俺には勝てねえ。せいぜい俺の名を売る糧になってくれや」
「……ェよ……」

シキが何かをボソッと呟いた。
何を言ったか分からなかったガルドは、すっかり勝った気になりながら、シキに聞き返す。

すると今まで俯いていた彼が顔を上げ、ガルドの目を真っ直ぐに睨み付けながら言った。

「ごちゃごちゃうるせェよ。御託は良いからさっさとかかってこい、三下」

「なっ！？　この俺が……三下だと……――」

ガルドは自分を睨み付けながら、そう言ってきたシキの言葉に驚愕する。

『紅蓮の猟犬』といえばかなりの実力を誇る集団だ。そのリーダーを努めるガルドの実力は、間違いなくずば抜けているはず。

そんな彼を三下呼ばわりしたシキは、ガルドのプライドを傷つけた。

開始の合図が司会よりならされる。

それと同時にガルドは、シキの顔面にその巨大な拳を振り抜いた。

完全に隙を突き、シキを倒したとガルドは思った。

だが、それは大きな間違いだったことを、すぐに知らされることになる。

彼はあの一瞬で腰に携えていた双剣を逆手に抜き放ち、その剣の腹でガルドの拳を受け止めていた。

「――嘗めるなァァアアアアアアアッッッ！！！」

自らの自慢の一撃を止められたガルドは激昂し、連続で拳を振り抜いていく。

彼の一撃一撃は、まさに一撃粉砕の威力が秘められている。しかし、その威力は巧みに受け流され、いなされてしまえば意味はない。

「……お前じゃ俺の『力』の糧にはならねェ……」

シキはつまらなそうに呟くと、半身になりガルドの拳を避ける。
今まで全ての攻撃を受け止められていたが故に、避けられるとは思ってなかったのだろう。
いきなり避けられ、ガルドはバランスを崩してしまう。
そこにシキは足をかけ、ガルドをさらによろめかせる。完全に体勢を崩してしまったガルドを押し倒し、そのまま双剣を降り下ろす。
たったそれだけ。たったそれだけで勝敗が決した。

『き、決まった――ッ！！　あれだけの猛攻を繰り返していたガルド選手を下し、シキ選手が大逆転勝利だ――ッッッ！！！』

司会のアナウンスがかけられると同時に、会場はさらに盛り上がりを見せる。
確かに観客や戦いの低級者から見れば、今の戦いはシキの逆転勝利したように見えるだろう。
だが実際は違う。最初から最後まで、今の戦いはシキが全てを支配していた。
相手の動きから攻撃のやらせる場所までを自在に、しかも無意識に動かさせることで、相手に恐怖を与えた。
もしもこのままやらなければ、こちらが殺られるという『死の恐怖』を……。
分かる者が見れば、今の戦いは別段驚くほどの勝利ではないのだ。
シキは歓声を浴びながら、ガルドをつまらなそうに一瞥したあと、選手出入口に向かっていく。
すると、彼の視界の先に一人の女性が立っていることに気付いた。
だが自分に関係ないことには興味を示さないシキは、そのまま通りすぎようとする。

「圧倒的だったようだな、クロカミ。さすが『死の恐怖』と言った

ところか」

しかし、女性――フィオナ・エリシオンは通りすぎた彼の背中に声を掛けた。

どこか悲しげで、哀れみを込めた声色で。

それに気づかないようなシキではない。立ち止まり、煩わしげに彼女の背中を見つめた。

「クロカミ。貴様は何を求める」

「……『力』だ。全てをねじ伏せる、絶対的な『力』」

「クロカミ。それを何処に求める」

「我が身の内に、その『力』を」

「最後だ。クロカミ。お前の欲する『力』とは、本当に貴様の欲する『力』なのか？」

フィオナの言葉にシキは顔をしかめる。

今、俺が欲している『力』とは本当に自分が欲している『力』なのか。

当たり前だ。俺は全てをねじ伏せる絶対的な『力』を手に入れ、大切な者を傷つける奴等を殺す。

もう二度とあんな気持ちは味わいたくないから。

だが何故こいつは俺の心（なか）を見透かしたようなことを言いやがる……気に入らねェ……。

そんな考えが彼の中でどす黒く渦巻く。

知らず知らずのうちにやっていたのだろう。彼の両手がいつの間にか双剣の柄を、強く握りしめている。

「私の闘いを観ておけ。お前に、『本物の力』というのを魅せてやる」

「『本物の力』……だと？」

『本物の力』という単語に反応したシキに、彼女は楽しげに口元を緩めながらあぁ、と一言だけ答える。
そして、シキに一度も振り返ることなくそのまま拳闘場に入っていく。
シキはフィオナの闘いを観るために、その場から駆け出し、観客を掻き分け、彼女の闘いを見逃すことのない場所にやって来る。
既にフィオナと彼女の相手が向かい合っている。

『片や「台風の目」として名高い狙撃手、フィオナ・エリシオンッ!!
片やまたもや「紅蓮の猟犬」のイザル・ウォートだ――ッ!!』

司会よりアナウンスがなり、先程よりも大きな歓声が沸き上がる。
それもそのはず。フィオナ・エリシオンといえば、拳闘大会にて過去最高の勝利記録を作っている。
三百十六戦三百十六勝。つまり今までの拳闘大会で一回も負けていない、全戦全勝ということになる。
まだこの記録に到達した者は愚か、掠りすらしていない。
対戦者のイザルでさえもが、尊敬の眼差しを向けている。

「貴女と闘えるなんて光栄ですよ、フィオナさん」
「さんは要らぬ。悔いの残らぬよう、全力で来るが良い」

イザルにそう言ってきた彼女は、腰につけていたデザートイーグルを抜き放つ。引き金に指をかけ、狙いを定める。
イザルも同じような二丁拳銃を抜き放ち、同じように構える。
数秒の沈黙。まるでその空間だけが外界から遮断されてしまったかのように、会場に無音が続く。
そして、戦いの火蓋は切って落とされた。両者の銃から銃声が響

き渡る。
両者の銃器から放たれた魔力弾がお互いに弾を打ち消し合い、直撃を回避する。
二人から放たれるのは魔力弾という名の雨。両者一歩も引かない、観客の目を惹く一進一退の派手な攻め合い。
自分に当たらない魔力弾は、例えかすることがあっても気にも止めない。
かする程度など致命傷にならなければ、どうってことはないからだ。
一見すれば同等な闘いに見えるかもしれないが、よく考えてみればそれは違うと言うことが分かる。
フィオナはデザートイーグル一本で、イザルは二丁拳銃だ。明らかにイザルの方が有利である。
しかし、実際はどうだろう。二人の攻防は同等だ。
だがそれはフィオナが手加減をしているからだ。
涼しい顔をしながら攻防を繰り返すフィオナに対し、イザルは苦痛そのものだ。
一刻も早く決着を決めなければ、自分が負けてしまう、という気持ちがヒシヒシと伝わってくる。

「……るな」

闘いが動いた。
今までは引き金を引くだけの銃撃戦だったが、突如としてフィオナがデザートイーグルを腰にしまい、イザルに向かって駆け出す。
一瞬だけイザルは面食らったような表情になるが、すぐに気を引き締め引き金に掛ける指に力を込める。
銃というのはとてもシンプルだ。引き金を引くだけで、弾丸が放たれる。
銃の調整などを抜きにして、狙撃手同士の闘いにおいて勝敗を左

右するのは狙撃手自信の力量。
狙撃手には、それさえあれば良いのだ。
才能も努力を積み重ねなければ、宝の持ち腐れというものだ。
そして、フィオナからは才能も努力も感じられる。

「……け……るな……ッ」

自分に向かってくる魔力弾を、フィオナは巧みに体を動かして避ける。
イザルの狙撃手としての腕は、間違いなく中級者の部類に入る。
だが、フィオナには一発も被弾しない。近くに来れば来るほど当たりやすくなるはずなのに、一発も被弾しない。
イザルは焦る。このまま懐に潜り込まれれば、間違いなく自分は敗北の二文字を叩きつけられる。
だがそこには恐怖はない。ただ、自分より強い狙撃手に勝ちたいという願いだけが、形となる。
不意にフィオナの頬に魔力弾がかする。それを境に直撃はしないものの、かする程度にはなる。
だが、フィオナに辿り着くには、一歩足りなかった。
懐に潜り込まれ、イザルは押し倒される。そしてそのまま眉間にデザートイーグルの銃口が突きつけられた。

『決まった――ッッッ！！！　観客を魅了する銃撃戦を制したのは「台風の目」、フィオナ・エリシオンだ――ッ！！』

司会のアナウンスがなると、イザルに馬乗りになっていたフィオナは彼女から退き、彼女に手を差しのべる。
イザルはフッと笑みをこぼすと、フィオナが差しのべた手をつかみ立ち上がる。
勝敗はフィオナの勝利に終わった。でもイザルには悔いの残らな

い戦いだったことは確かだ。
自分の力を出し尽くし、自分より格上の相手に食らいつけた。それだけで、彼女は満足だった。

「ふざけんじゃねェッッッ！！！」

良い雰囲気の中、観客席から不意にそのような怒声が聞こえた。
拳闘場にいるフィオナやイザルだけでなく、観客全員の視線がその男に注がれる。
男とはもちろんシキのことだ。

「何が『本物の力』だッ！？　結局テメェのやってることは俺と変わんねェんだよッ！！　敵を力ずくで捩じ伏せるッ！！　それのどこが『本物の力』なんだよォッッッ！！！」

シキにとって闘いの仮定など、ないのと同じことなのだ。
結果的にはシキもフィオナも、自ら保有している圧倒的な『力』で相手を踏みにじり、捩じ伏せてきたのだから。気に入らなかった。
『本物の力』と言いながらも彼女がやったことは、シキがやったことと同じ。
少なくともシキにはそう見えた。故にシキは思う。
――あいつは、俺の『力』を認めたくねェだけだ、と。

「証明してやる……。テメェを倒して、俺の『力』が『本物の力』だってことをなッッッ！！！」

彼はそこまで叫ぶと、踵を返し、会場をあとにする。
フィオナは、そんな彼の背中をただただ見つめるだけだった。

◇

あれから一週間が経過した。
予選では何百人と居た選手達も本選に上がれたのは、ほんの十六人。
さらに今日は準決勝がある日。選手は四人に絞られている。いや、正確には三人だ。
既に先に準決勝を行ったフィオナが、決勝進出を決定している。
シキがフィオナと戦うには、あとは彼が準決勝の相手に勝つだけとなった。
今までの闘いはシキにとっては何の意味もない闘いだった。
彼の今の目的は自らの『力』をフィオナに証明すること。他の試合など構ってはいられなかった。
もちろんガルド以降の相手にもシキは同じように闘い、その二つ名の通り『死の恐怖』を与えてきた。
中には武器を手にとることにさえ、恐怖を感じる者まで現れたほどだ。

「……テメェ、いつまで俺の後ろに居るつもりだ」
「なんだ、バレてたのか」

不意にシキは誰も居ないはずの空間に話しかけた。
返ってきたのは少女の声。
現在、シキが居るのは拳闘大会に出場する者のみが入ることが出来る選手専用控室。
この控室は北側と南側に別れており、付添人が居ない限り一人で居るはずだ。
もちろんシキが付き添いなどをつけるはずもなく、一人で控室に入った――はずだった。
しかし、実際は違う。彼もついさっき気づいたのだが、あとをつけられていたのだ。

シキは振り返り、返答をしてきた人物を睨み付ける。

「アタシは夜光（よこう）。アンタの対戦者だよ」

少女――夜光はシキを見つめながら、僅かに微笑む。

彼女は真っ赤な燃えるような髪を肩辺りで切り揃え、髪の一部が限りなく白に近い赤でメッシュにされている。

七分のズボンに法被のようなモノを羽織り、胸の辺りを包帯で隠している。

その眼光は太陽のような黄色をしており、シキの目を真っ直ぐに見据えている。

「その夜光さんが、敵である俺の控室に何の用だ？　勝てねェってんで八百長でもやろうってのか？」

「意外と饒舌なんだね、アンタって。悪いけど、アンタじゃアタシには勝てない。先生――フィオナさんと戦うのはアタシだ」

「俺が勝てないだと？　テメェにか？　ハッ、笑わせんじゃねェよ。テメェごときに負けるわけねェだろ」

「口で言って分かるような奴じゃないと思ったけど、これは重症」

夜光はやれやれ、と言いたげに手を広げる。

彼女はシキを頭から足の指先まで、品定めするように見つめる。

そして、夜光は今まで楽しげに綻ばせていた口元を締め、真面目な表情になりながらシキに言った。

「言っとくけどアンタみたいに、闘いを嘗めてる奴にアタシは負けない。先生と戦うのはアンタじゃない。このアタシだ。覚えとけッ！！」

夜光は言いたいことだけを告げると、そのままシキの控室を出て

いく。
去り際に見えた、彼女の腰に携えられた双剣。
どうやら次の闘いはシキにとって接近戦の、しかも同系統同士の闘いは初めての経験になる。
それに夜光の実力は口だけのものではない。対峙して、目を見てシキはそう感じ取った。
そして、夜光の言葉には聞き捨てならない言葉があった。

（闘いを嘗めてる？　――冗談じゃねェ……）

シキは闘いを嘗めているとはなんと質の悪い冗談だ。
彼が『死の恐怖』と呼ばれるまでに敵に恐怖を与えたのは、もう二度と自分に立ち向かう気力を起こさせないため。
それほどまでに彼は闘いに執着し、闘いに恐怖している。
シキは立ち上がる。自らの『力』を証明するため。そして、『本物の力』が何かを確かめるために。

第四十撃『過去の狙撃手。「力」がねェから、俺は守れねェんだ』（後書き）

ようやく過去編の主要キャラが揃いました……。
過去編でオリキャラはたくさん出てしまいましたが、主要キャラ以外は今後の展開には関わりません。
感想待ってますッ！！

第四十一撃『歪んだ願いの「力」。これが……俺の「力」だッ！！』

『やって来ました準決勝第二回戦ッ！！　片やこの大会にて広まった「死の恐怖」の二つ名を持つシキ・K（クロカミ）・アスタロトッ！！
片や「赤髪の夜光」こと夜光ッ！！』

司会の言葉を受けて、選手出入口から二人の影が現れる。
もちろん二人の影とはシキと夜光のことだ。
いつもであればこのように高ランクの二人が出てくれば、会場はとんでもない程に盛り上がるはずだ。
だが、今の会場は完全に静けさを保っている。誰一人として言葉を発する者は居ない。
いや、正確には誰も声を出せずにいるのだ。
ぶつかり合う両者の濃厚な殺気が会場に広がり、空気を震わせている。
これを見ただけでどちらもが今まで力を制限していたことなど、手にとるように理解することができた。
両者も言葉を発することなく、一定の距離まで来ると歩みを止める。
司会はそんな二人の異質な雰囲気に恐怖しながら、開始の合図を鳴らす。
それでも両者は動かない。腰に携えている双剣を抜き放ち、逆手に構えるだけ。
二人の構えは非常に酷似していた。足を肩幅程度に開き、片手を前に、もう片方の手を後ろに構えている。
同じ武器、同じ構えであるが故に、その弱点を理解している。だからこそ、踏み出せないでいる。
馬鹿正直にその弱点を突こうとしたところで、逆に攻め込まれて

しまうのがオチだ。
　同じ武器同士で勝敗を左右するのは、その者自信の力量に全てが掛かっている。
　迂闊な行動をして負けてしまえば、それが実力的に劣っていると証明してしまうようなものだ。

「逃げなかったんだ、アンタ。どうせアタシにやられるんだから、痛い目遭う前に逃げた方が良かったんじゃない？」
「ベラベラうるせェよ。さっさとかかってこい。それとも、ビビって動けねェか？」
「売り言葉に買い言葉。そういうの、やめた方が良いよ？」
「テメェには関係ねェ。来ねェんなら――――こっちから行くぞッ！！」

　シキは叫ぶ。逆手に握りしめていた双剣の柄をさらに強く握りしめ、体勢を低くする。
　足の裏に氣を溜め、限界点までくるとそれを一気に爆発させ、まるで獣のような体勢で夜光に向かって瞬動する。
　銀色の髪が光を受け、まるで一筋の光を表したかのように夜光に鋭く迫る。
　それを見たとしても夜光は全く動じない。
　彼が迫ってくるのを双剣を構えたまま、ただただ見つめるだけ。
　シキの速さについてこれずに反応が出来ないが故の行動か、それとも反応出来ている上でこのような行動なのか――。
　それはすぐに思い知らされることとなる。

　ギィイイイイイインッ！！　という金属同士ともまた違う、魔法世界独自の素材同士を打ち合わせたような音が、完全に静まり返っている会場に響き渡る。
　――答えは後者だ。

シキの左側から放たれた一撃を、夜光は右側に構えた双剣の片方で受け止めている。

ギチギチと拮抗する二つの刃。刀身からは火花が散り、かなりの力で打ち合っているのが見てとれる。

さっきまでの穏やか、とは言えないが少なくとも世間話程度には聞こえた会話とは違い、お互いに犬歯を剥き出しにし、敵意も剥き出しにしている。

もちろん、敵意など戦う前からあった。それがさっきの一撃で完璧に鎖が千切れ、剥き出しとなったのだ。

剣をぶつけ合う二人を中心に、殺気と言う名の風が、渦を巻くように吹き荒れる。

その中心にいるのは二体の獣だ。本能のままに、動きの本能のままに武器を振るい、敵を殲滅する。

喰らわなければ、こちらが喰らわれる。そんな感情を、たった一撃でやりあっただけで二人は感じ取る。

「――――ッ！！」

防がれてしまった剣を即座に後ろに引き、まだ完全には死んではいない瞬動の勢いを右腕の刃に乗せ、夜光に向かって振るう。

空気を切り裂き、シキの剣は夜光の首に真っ直ぐ向かう。

その刃には全く迷いというものが感じられない。殺すことなど関係ない、そんな感情が乗せられた死の剣。

しかし、夜光は体勢を低くし、しゃがむことにより死の剣を紙一重で回避する。

その際に数本の赤い髪――夜光の髪が宙を舞い、彼女の目の前を落ちる。

髪は女の命、という考えを抱く者も居るかもしれないが、少なくとも夜光という人間はそれを全く気に止めた様子はない。

むしろ視界に邪魔なものが入り、鬱陶しく思うくらいだ。夜光が

髪を短くする理由。それは戦いの邪魔になる、という理由だ。
シキの刃を回避した夜光は、体勢を低く保ったままシキの懐に潜り込む。
そして、シキの懐に潜り込んだ夜光は彼の腹部に向かって剣を突き出す。
シキ同様に、彼女の刃からも全くの迷いが感じられない。
いや、もしもそんなものが感じ取れるのであれば、両者にとっては侮辱以外の何者でもない。
そして、再び響き渡る剣を打ち合わせた独自の音。シキの腹部と夜光の剣の間には、彼の剣が入れられている。
彼は咄嗟に引いていた左側の剣を間に捩じ込むことにより、それを防いでいた。

「そう簡単に殺らせるとでも思ってんのか？」
「思ってるわけない。アンタにはこれぐらい通用しないことぐらい、分かってるつもりさ」

夜光の言葉を聞いたシキは、夜光を力づくで弾き飛ばす。
しかし、夜光は体勢を崩すこともなく、危なげなく着地する。当然だ。彼女はシキに弾き飛ばされる寸前に自ら後ろに飛び、その威力を軽減させていたのだから。
着地した夜光は、体勢を建て直したあとにシキを見据える。同じようにシキも夜光を見据える。
この攻防をもしも時間に換算するならば僅かに三秒。
たったそれだけの時間であれだけ複雑、かつ激しい攻防をして尚も二人は息を全く乱していない。
三秒前と変わったのは二人の立ち位置と会場の状態だけ。
二人の刃同士のぶつかり合いで発生した衝撃波が地面を削り、切り裂いている。それだけ二人の力が強大だと言うことを示しているのだろう。

「結構やるじゃん。でもアンタには負けない――否、負けられないッ！！」

よくしならせた弓から矢が放たれるような、凄まじい勢いで夜光がシキに迫る。

蹴り出した地面が僅かに陥没し、今の勢いの強大さを示す。

剣と腕とを一直線上に構え、つけた勢いを逃がさないようにする。

真っ直ぐに構えられた剣が、まるで弾丸のような速さで迫ってくる。

光を受けて鈍く光る刀身が、シキの命を奪わんとするかのように見える。

そして、シキは夜光の一閃を自らの剣の刀身を滑らせるようにして、受け流す。

剣と剣が擦れ合う音を耳にしながら、シキは思う。

（この勢いをすぐに止められるはずがねェ……。ここで一気に――ッ！？）

だが、シキの思考は途中で遮られることとなる。

彼は勢いを止められず、自分に背を向けるはずだった夜光に一気に連撃を叩き込み、闘いを一気に終わらせようとしていたのだ。

しかし実際はどうだろう。彼女はあそこまでの勢いがあったにも関わらず、シキの背後に回るようにして踏み止まっている。

それだけではない。計画を狂わされたシキには隙が生じ、その隙を夜光が見逃さんとばかりに双剣を振り上げている。

双剣はリーチが短い代わりに、手数の多さという利点がある。

完全に隙を突かれたシキが、双剣の使い慣れた夜光の連撃を全て防ぐことは到底不可能だ。

夜光の連撃をシキはギリギリ追い付けるといった感じに弾いてい

る。

しかし、徐々に動きについていけなくなっているように見える。

そして、夜光の剣がシキの頬を切り裂く。切り裂くといっても完璧に捉えきれたわけではなかった。

血が流れ出しているものの、深く切り裂かれたわけではなく、大したダメージになるものではなかった。

――が、今の一手は両者にとっては重要な意味合いを持つこととなる。いや、今の一手が勝敗を左右すると言っても過言ではない。

同じ実力者同士が闘う場合、最初に相手に一撃を決めればそれだけ精神面（メンタル）に影響する。

今の一手で、今まで同等だった形勢が、一気に夜光に傾いた。

「ほらほらほらッ！！　動きが鈍くなってきてんじゃないかッ！？」

「ぐ……ッ！？」

シキは夜光に反論できない。いや、する暇がないのだ。

完全に攻勢に躍り出た夜光は、ここで一気に終わらせんとばかりに連撃を繰り返してくる。

上へ下へ、右へ左へと規則性の全くない動きでシキを攻める。

一見軽い攻撃に見えるが、それは大きな間違いだ。

あの華奢な体から放たれる一撃一撃が強大な威力を秘めており、それを受け止める側のシキからしたら、体力が削られっぱなしの状態と言うことだ。

なんとか形勢を変えようとするが、反撃の糸口が掴めない。掴ませてくれないのだ。

ピシリ、と手に持っていた双剣から嫌な音が聞こえた。

視線を変えてみれば、シキの双剣が夜光の猛攻に耐えることが出来ず、皹が入っていた。

（マズイ……ッ！？）

シキは思う。今この場で武器を失うようなことがあれば、完全にシキが逆転する可能性は０になる。
それだけはなんとか回避しなければならない。
シキは地を蹴りだし、思いっきり後ろに飛躍する。
もちろん、さっきの音を夜光が聞き逃しているわけがない。
自分から離れていこうとするシキを、彼女は追いかける。
前向きに進むのと、後ろ向きに進むのとではどちらが速いかなど、火を見るよりも明らかだ。
必死になって広げた夜光との距離は、彼女によって一瞬にして縮められてしまう。
そして、夜光の双剣が振るわれる。今、これを受けるのは得策ではないと即座に判断する。
空中で氣で足場を形成し、瞬動を使い夜光との距離を再び空けようとする。
だが既にこの闘いのペースは完全に夜光のペースになっている。
彼女はシキが逃げた方向に先回りし、双剣を振りかざす。
シキの反応は間に合わない。夜光の双剣が、音を立ててシキの双剣を砕け散らせる。
双剣が砕けた瞬間、まるでシキのプライドまでもが砕かれたかのように大きな隙が生じた。
それを見逃すような夜光ではない。無防備に構えているシキの腹部を、夜光の蹴りが貫く。
呻き声を上げることもなく、シキは空中から投げ出され、地面に叩きつけられる。
肺から強制的に空気が押し出され、シキはその場に大の字に倒れる。
そして、倒れこんだシキの側に夜光が降りてくる。空中から落ちた衝撃を吸収した彼女は、音も立てずに着地する。

「だから言ったでしょ？　闘いを嘗めてるアンタじゃ、アタシには勝てないって。でも思ったよりももったじゃん」

夜光はシキを見下しながら、楽しげにそう言う。

倒れこんだシキに対して、夜光はまだまだ余裕があるといった表情をしている。

それもそうだろう。彼女はまだ、本気など出してはいなかったのだから。

もちろん侮ったりはしていない。少しの侮りが、敗北に繋がりかねないからだ。

今程度の実力でも、シキを倒せると判断したが故の行動だろう。

夜光が涼しげな表情を浮かべている今も、シキの敗北へのカウントダウンが迫ってきている。

彼自身にはほとんどダメージはない。だが、自らの『力』が通用しなかったことにより、シキの意識が闘うことを拒絶している。

『――「力」が欲しいか？』

意識が暗闇に落ちる直前、不意にシキの頭の中に直接声が響いてきた。

その声によりシキの意識が完全に覚醒を遂げる。

『もう一度訊こう。「力」が欲しいか？』

（……あぁ。『力』が、欲しい……。全てを捩じ伏せることが出来る、圧倒的な『力』がッ！！）

『なら、その強欲、叶えてやろう。貴様が払う代償はただ一つ。――貴様の時間（いのち）だ』

カウントが十八まで進んだところで、シキの目が見開かれた。

仰向けに倒れている状態から、手を使うこともなく、そのままの

姿勢で起き上がる。
　こればかりは夜光も驚かざるを得ない。完全に勝ったと思っていたにも関わらず、彼は立ち上がったのだ。
　さらに、夜光は今のシキから、さっきまでは感じなかった異質な『力』を感じ取っていた。
　禍々しくも神々しいという、全く矛盾している『力』を。思わず一歩、夜光は後ずさる。
　今まで感じたこともないような、あまりにも非常識な『力』に、恐怖を抱かないはずがない。

――ドクン……

　息が乱れているときの鼓動とは違う、別の鼓動がシキの中で高鳴る。

「……いいぜ」

――ドクン……

　まるで何かを呼ぶような、誰かを待っているような鼓動の高鳴り方。

「来い……」

――ドクン……

　その鼓動は、シキの声が大きくなるに比例してより早く、強く鼓動していく。

「来いよ……ッ！！」

――ドクンッ！！　そしてその鼓動は、今までで一番大きく高鳴り、彼に強大な『力』を感じさせる。

「俺は……ッ！！」

――ドクンッッッ！！！

立ち上がったシキは、夜光を睨み付けながら、彼女にではなく、誰かを求めるかのように叫ぶ。

「世界（ここ）にいるッ！！」

すると矛盾している『力』がより一層強まり、それは空間を歪ませるほどとなった。

その歪みはシキの周りだけで、夜光の周りや夜光自身には特に変わった様子はない。

何か、種族特有の技を使ったのか、自作の魔法を使ったのかもしれない、と警戒した夜光は改めて双剣を握り直す。

かちゃん、という音が鳴る。緩く握っていた柄を、強く握った証拠だ。

そんな彼女に対してシキが取った行動は、手を振り上げて、降り下ろすだけ。

すると、シキの周りの歪んだ空間から、無数の刀剣類が夜光に向かって放たれた。

何もないはずの空間から突如として現れた刀剣類に、夜光は驚愕しながらも危なげなくそれを回避していく。

だが、回避した先にも先回りしたかのように刀剣類が迫ってきていることに、夜光は気づく。

――今からでは避けきれない。

そう判断した彼女は逆手に構えた双剣で、それらを弾いていく。

一つ一つの威力は大したことはない。むしろ軽いくらいだ。それでも数が尋常でない。

このままでは体力が底をつき、刀剣類にて串刺しにされてしまうのは目に見えているだろう。

それだけは、何としてでも回避しなければならなかった。

だが、そんな夜光の思考とは裏腹に、シキはそこまで待つ気はさらさらなかった。

既に‘格下’に成り下がった相手に、そこまで長々と時間をかける気はないからだ。

そしてシキは、歪んだ空間に手を突っ込む。観客席から見れば、それは突然に手が消えてしまったように見えても仕方がないだろう。

彼の手は何かを握りしめていた。空間から腕が出てくるにつれて、それが何か露になっていく。

それは長い柄だった。その先には人の首を刈り取るかのよう鋭利な刃が取り付けられている。

――鎌だ。シキが取り出したのは、禍々しいオーラを纏う漆黒の鎌だった。

「『旧式武装（ロストウェポン）』……。まさかクロカミ、お前――――」

客席にてシキと夜光の闘いを見ていた女性――フィオナ・エリシオンが、信じられないと言わんばかりに目を見開き、そう呟いた。

『旧式武装（ロストウェポン）』とは遥か昔、旧文明と呼ばれていた文明が栄えていた時代に創られたという、今は失われた技術で創られた武器の総称だ。

この武器は、本来『神格』が使用する目的として創られ、それ以外の者が使用した場合、何かしらの副作用を受けることとなる。

だが、副作用を受けるのは使用者だけではない。むしろ、旧式武装（ロストウェポン）で傷を受けた者の方が、深刻な副作用を受ける。

怪我が大したことがなくとも、下手をすれば死に至るほどの副作用だ。

だからこそ、旧式武装を使用うしているシキと、傷を受けようとしている夜光に危険を感じているのだ。
何故旧式武装がこの場にあるかなどは関係ない。
今は一刻も早く、二人、を助ける必要があった。

フィオナ・エリシオンは持ち合わせていたライフルを抜き放つ。
スコープを覗き、照準を合わせたフィオナは二人に向かって魔力弾を一発ずつ放つ。
だが、それが二人を助けるのに間に合うかどうかは、はっきり言って五分五分、賭けの領域だ。
夜光に迫るシキの速さは尋常ではない。魔力弾よりは遅いものの、それでも常軌を逸しているほどに速い。

（ちっ、外れたか……！？）

フィオナの予想通り、尋常でない速さのシキには魔力弾が当たらなかった。いや、避けられたとも言える。
シキは客席にいるフィオナの位置を完全に捉え、一瞥したあとに夜光に視線を戻す。

そして、未だに無数の刀剣類を弾くことに専念している夜光に迫る。
夜光はかなり焦っていた。このままでは負ける、いや、、殺されてしまう、と。
それだけシキの目は本気だった。
そして、シキの漆黒の鎌が夜光の首目掛けて振るわれる。
もちろん夜光にはそれを防ぐ術などない。もしも鎌を防げば、今も降り注ぐ刀剣類の雨に串刺しにされる。
だからといってこのままでも確実に殺されてしまう。
夜光はどうにかしてこの状況を打破できないか、頭をフルに回転

させて考える。
だが、何も思い付かない。死というなの鎌が彼女に迫る。
もうダメだ、と夜光は思った。しかし、次の瞬間に受けた衝撃は鎌に切り裂かれた衝撃ではなく、何かに腹部を殴打された感覚だった。
シキの鎌が夜光を切り裂く直前に、フィオナの魔力弾が夜光の腹部に当たり、彼女は弾き飛ばされた。
よってシキの鎌は虚しく空を切っただけだった。
夜光の命は助かったが、結果的にこの闘いの勝者はシキに確定した。

『し、勝者、シキ選手……』

司会が力なく、誰一人として聞いていない中でそう呟いた。
こんな状況下でありながら、自らの役割を全うする辺り、司会としての機能は働いているようだ。
もちろん歓声は上がらない。
この異質な空間の中で、声が未だに出せないでいる。
いつの間にか、夜光に向かって降り注いでいた刀剣類の雨も止み、シキの手に握られていた鎌もなくなっていた。
夜光は動かない。豊かな胸が上下している辺り、死んだと言うわけではないようだった。
シキとの闘いでの披露、さらにフィオナの魔力弾による一撃で気絶したのだ。

「クククク……クハハハハハハハハッ！！　そういうことか、フィオナ・エリシオンッ！！　手に入れたぞ……。テメェの言う『本物の力』って奴をなァッ！！」

顔に手をあて、天を仰ぎながら、まるで狂ったように笑いながらシキは叫んだ。
その口は裂けんばかりに歪んでおり、彼の狂度を表しているかのようだった。
そしてシキは『本物の力』と思い込んだ『ナニカ』を手に、会場をあとにした。

◇

「うっ……ここ、は……？」

場所は代わり選手専用の救護室にて、赤髪の少女――夜光は目を覚ました。
彼女の体には、シキが放った刀剣類の雨により受けた傷を治療したらしく包帯が巻かれている。
しかもかなりの重症だったのか、大量の包帯が巻かれている。
起き上がろうと体に力を入れるのだが、その瞬間に頭の天辺から足の指先にかけて駆け抜けた激痛により、起き上がることが出来なかった。

「無理をして起きない方が良い。君の体は見た目以上に深刻な怪我をしている。」
「――先生……」

夜光が寝ているベッドを囲うように展開されたカーテンを開け、夜光が先生と呼んだ女性――フィオナ・エリシオンは言った。
そう、フィオナの言った通り夜光の怪我は深刻だ。
命に別状はないものの、今の状態で無理に動こうとすれば、ようやく塞がった傷が開き、今度こそ命に関わるかもしれない。
さらにはこの傷は『旧式武装（ロストウエポン）』で受けた傷だ。

直撃していないとはいえ、何かしらの副作用が出たとしても何らおかしくはない。
そして、夜光はフィオナから視線を逸らしながら小さく呟く。

「ゴメン、先生……。アタシ、アイツに勝てなかった……」
「気にするな。君は良くやった方だ」

フィオナの言葉を耳にしながら彼女は拳を強く握りしめる。
その手にはまだ、双剣を握っていた感覚が残っている。
その耳には、剣と剣を打ち合わせた剣戟の音が残っている。
そして、その目には『死の恐怖』の姿がはっきりと、鮮明に残っている。
あの狂気に満ちた笑み。殺すことを楽しむかのような目。死と言うものを具現化したような鎌。
その全てが、夜光を『死の恐怖』へと陥れる。

（アイツが『死の恐怖』なんて呼ばれてる理由、分かった気がする……）

夜光は今まで何故シキが『死の恐怖』などと呼ばれてるいるか、全然分からなかった。
闘いを見ても死を抱くような闘いはしていない――よう見えた。
しかし、闘ってみて理解することが出来た。
シキから感じる『死の恐怖』は、実際に対峙してみなければ分からないものだった。
もしもフィオナがあそこで助けてくれなかったら……などと考えると、今でもゾッとする。

「人は敗北を経て、一回りも二回りも大きくなる。だから――泣くな、夜光」

夜光の頭を優しく撫でながら、フィオナは告げる。
彼女は、ただただ頷くしかなかった。
そうでもなければ、目から流れ出る熱いものを、堪えることが出来なくなってしまうから。
フィオナはそんな彼女を見た後に救護室をあとにする。

救護室を出たフィオナの表情には、先程までに慈愛に満ちた表情は全くない。哀れみに満ちた表情だ。
彼女が哀れんでいる理由など、簡単に想像がつくだろう。
人を傷つけるだけの『力』を『本物の力』と勘違いし、夜光を傷つけた。
本来欲している『力』を忘れ、他人を傷つけることに快楽を得る『力』を得た。
その結果が自らの『力』を見せつけることだ。哀れまないはずがない。

「シキ・K（クロカミ）・アスタロト……。貴様は、本当に忘れてしまったのか？　自らの求める『本物の力』を……」

フィオナは、ここにはいないシキに対して、そう呟いた。

◇

現在、シキとフィオナは拳闘場にて対峙している。
シキと夜光の準決勝から既に一週間。この大会の一番の目玉である決勝となっていた。
前回同様、いや、それ以上に濃厚な殺気がぶつかり合い、会場に静けさをもたらす。

「この時を待っていた。テメェに俺の『力』を証明するこの時を……」

「……下らぬ。来い、貴様の『力』の全て――私が全力で否定してやる」

二人の会話はたったそれだけ。それでも二人には十分すぎるほどだった。

どちらが動いた、と言うわけではない。

二人が全くの同時に、動き出した。

『来い……来いよ……ッ！！』

――俺は――

――私は――

『ここにいるッ！！』

二人は同じ言葉を同時に叫ぶ。

こうしてシキとフィオナの闘いが始まる。

しかし、この結果が何をもたらすのか、二人はまだ知らない。

第四十一撃『歪んだ願いの「力」。これが……俺の「力」だッ！！』（後書き）

明日からテスト勉強に入りますので、来週の木曜までは更新を停止します。

余裕があったら投稿するかも……。

感想、待ってますッ！！

第四十二撃『敗北から学ぶこと。俺はどこで道を違えた……』（前書き）

合間を縫ってなんとか完成……。
いつにも増してクオリティが低いですが、多めに見てください…
…。
では、どうぞッ！！

第四十二撃『敗北から学ぶこと。俺はどこで道を違えた……』

――エンティル地域。
それは、森が余りにも深く中に入ったが最後、生きて出ることは困難とされる森だ。
さらにはこの森にいる魔獣も強力で、森を抜けれたとしても、魔獣によって無に還る。
故に、生還率が一割にも満ちていない。
別名、『屍の森』とも呼ばれ、その名の通り森の中には数えきれないほどの屍がある。
そして、そんなエンティル地域の森の中にたくさんの人影があった。
銀髪を三つ編みにし、鎌を携えている男――シキ・K（クロカミ）・アスタロトを取り囲むように、何十人もの武装者が立っている。
シキを取り囲んでいるのは『紅蓮の猟犬』という名の賞金稼ぎ達だ。
その中には大会で闘ったガルドやイザルの姿も伺える。

「よォ……さすがのテメェもこの数相手じゃ勝てねえよな？」
「……雑魚が。数にものを言わせねェと勝てねェから、待ち伏せってか？」
「はん、お前の大口も今じゃあ虚勢にしか見えねえぜ？」
「そうかよ。だったら後悔すんなよ。俺は今、機嫌が心底悪ぃんだよッ！！」

シキの叫びが合図となったかのように、一対多数の戦いが始まる。
そして、何故シキがここに居るかと言えば、数時間前に遡らなければならない。

第四十二撃

『敗北から学ぶこと。俺はどこで道を違えた……』

「クソ……」

今日のオスティアはいつにもまして活気が溢れていた。

普段もかなりの賑わいを見せているが、今日は特別だった。

強豪達が集まっていた数年周期で行われる拳闘大会の優勝者が、数時間前に決定したからだ。

決勝戦にて闘った二人――シキ・K（クロカミ）・アスタロトとフィオナ・エリシオン――の勝者が決定したのだ。

勝ったのは今ここにいる男――シキではなく、その対戦者であるフィオナ・エリシオンだ。

決勝戦の闘いは、今までの闘いは何だったのだと思うほどに圧倒的だった。

シキの『力』の全てが、フィオナの言った通り否定された。

鎌での接近戦は、双銃を使っている彼女だったにも関わらず、全く通用していなかった。

全てが良いようにあしらわれ、遊ばれていたと錯覚させるほどだった。

双銃より放たれる魔力弾は、一つも外れることなく被弾した。

どれだけ速く動いても、どれだけ距離を変えようとも避けることは出来なかった。

それは、狙撃手としての力量の差を思い知らされると同時に、シキ自身の何もかもが通用しなかった。

彼が『本物の力』の力と思い込んだ『ナニカ』も同じだった。

『――ッ!?　クソッ!!　何でだ、何で通用しねェんだッ!!』
『何故通用しないだと？　簡単なことだ。それは貴様が弱いからだ』

歪んだ空間から放たれる刀剣類の雨。
その数は準決勝にて対戦者――夜光に使った数の比ではなかった。
夜光に対して、百の刀剣類を使ったのだとしたら、決勝戦では少なくともその十倍以上の数を使用した。
歪んだ空間の座標をフィオナの回りに設定し、あとは空間から刀剣類を放つだけ。
完全に回りを取り囲み、逃げ場を無くしたはずだった。
それなのにも関わらず、フィオナには当たらなかった、いや、かすることすらも出来なかった。
それだけはない。敵が一人しか居ないのだから、全ての神経は敵一人に集中することが出来る。
神経を研ぎ澄ませた状態の中、シキはフィオナを後ろに立たせてしまっていた。
気配がまるで感じられなかった。相手が動けば、気配の動きが分かるはずなのに、分からなかった。

『どうした？　貴様の「力」を私に証明してくれるのではなかったのか？』
『クソが……。あぁ、証明してやるよォッ!!』

取り出したのは禍々しい『力』を宿している『旧式武装（ロストウェポン）』。
余りの禍々しさ故に、扱うのは困難を極めるが『ナニカ』のおかげでその鎌を自由自在に操る。
まるで体の一部になったかのような手応えに、シキは狂気に満ちた笑みを浮かべ、フィオナに迫る。
その動きは出鱈目だった。統一性の全くない、獣のような動き。

そんな動きをフィオナは簡単に見切り、必要最低限の動きで回避する。
鎌が振るわれる度に空気が震え、大地が裂ける。
それでもフィオナはどこぞに吹く風のように、涼しげな表情をしている。
シキは苛立つ。なぜフィオナには自分の『力』が通用しないのか、と。
そして、フィオナは鎌を振り上げるシキの顎に体ごと掌を押し付け、そのまま地面に押し倒す。

『嘗めるなよ、小僧。たかだか二十年やそこらしか生きてない甘ちゃんが、私に勝てると思うな』

そういったフィオナの表情は、どこか疲れきったような、それでいて何かを期待しているような表情だ。
シキはその表情を見て眉を潜める。
そして、次の瞬間には彼の意識は完全に闇へと沈んでいった。

彼が決勝戦の出来事で、覚えているのはここまでだ。
次に意識を覚ましたときは、選手専用の救護室のベッドに寝かされていた。
傷はどれもこれもが大したことはなかった。
決勝戦から数時間しか経っていない今でも、竜族の種族的による回復能力の高さで、傷は完全に癒えている。
疲れは抜けきっていないとはいえ、今から全力で戦うにしても差し支えはないだろう。
彼が今、苛ついている理由もそこにある。
たった数時間で傷が癒えた、と言うことは先程までの闘いは全て手加減されていたことになる。

「アンタ、こんなところで何ボケッとしてんだ」
「……何の用だ。今の俺は機嫌が悪ぃんだ。下らねェ用事なら帰れ」
「アタシだってアンタの顔なんか見たくない。だけど、準優勝が居ないと表彰式も始まらないんだ」

シキはオスティアの風景を一望できる場所の柵に体重を預けながら、自分に話しかけてきた少女――夜光に振り替えることなく言う。
今回の拳闘大会は、かなりの大規模だったために、普通は行われない表彰式が行われる。
もちろんその表彰式には準優勝者であるシキや、三位である夜光も呼ばれている。
今はもう表彰式が始まる時間帯だ。
しかし、シキはそういった場所には行く気にはなれなかった。
そもそも彼はそのように人がたくさん集まる、騒がしい場所はあまり好きではない。
故に、シキは表彰式には行かずにオスティアを眺めていた。
さしずめ夜光が待ちきれなくなって呼びに来た、とでも言うところだろう。

「チッ、んなもん俺が居なくても出来るだろ、下らねェ……」
「アンタってやっぱり協調性なし？　一応アンタはアタシに勝った男なんだからさ、出てもらわないと困るんだよ」
「知るか。テメェの事情なんか知ったこっちゃねェ」

シキは夜光にそう告げたあとに、夜光の脇を通り抜けて歩き出す。
背中に鎌を携え、彼女を見ることもなく、どこかへ向けて。

「ちょっ、アンタ！！　どこに行くのさ！！」
「テメェには関係ェねェだろ」

夜光の言葉にシキは振り替えることもなく、煩わしげに答える。
彼の背中は語っていた。もう、俺に関わるな、と。
それはどこか寂しげで、何かに怯えるようにも見えた。
夜光はそんなシキに話しかけることが出来なかった。
シキが向かうのは『屍の森』と呼ばれる森があるエンティル地域。
そこで、さらなる『力』を手に入れるために。
そして、物語は加速する。

「どうしたんだ!?　『死の恐怖』!!　動きが鈍ってんじゃねえかッ!?」
「黙れッ!!」

深い森の中に響く剣撃。
振るわれる度に空気が震え、木々を薙ぎ倒していく死という名前の大鎌。
そこでシキは賞金稼ぎ――『紅蓮の猟犬』を相手に戦っている。
『紅蓮の猟犬』はこういった戦い方に慣れているのか、一人であるシキを取り囲むように配置されている。
その外側には魔法使いや銃撃手といった遠距離系の者がおり、抜け目のない布陣となっていた。
そんな中でシキは一人、たったひとつの武器である鎌で奮闘していた。
鎌は攻撃範囲が広く、一人で戦うには打ってつけの武器だが、今は状況が状況なだけに苦しいものがある。

ガルドの拳がシキの顔面に向かって、躊躇なく振り抜かれる。
シキは顔だけを動かしてガルドの拳を避ける。その際に避けが浅かったのか、頬に擦り、血が流れ出る。
血が出たことを気にした様子もなく、シキは鎌をガルドに向かっ

て振るうが、その鎌は最後まで振り抜かれることはなかった。
地を強く蹴りだし、僅かに後ろに飛び退く。
それと同時にシキが居た場所に、魔法の矢やら魔力弾が降り注いでくる。
舌打ちをしながら、体勢を立て直しガルドに向かおうとするが、着地した場所に刀が振るわれていることに気付いた。
片足を軸に、刀を振るってきた男の顔面に回し蹴りを喰らわせ、吹き飛ばす。
その際に数人が巻き込み、追撃されるのを防ぐ。

「――――ッ！！」

足の裏で氣を爆発的に放出させながら、小刻みにステップをしているガルドに迫る。
やはり魔法の矢や魔力弾がシキに迫るが、それを鎌を一振りした衝撃波で消滅させる。
彼は『旧式武装（ロストウェポン）』を使っているわけではない。
ただ単純に、自らの『力』だけでそれを成し得ている。
さらにはその衝撃波の余波により、回りに居た『紅蓮の猟犬』をも巻き込む。
シキの勢いは緩まない。
達人が弓をよくしならせ、矢を放ったように軌道は直線。
ただ真っ直ぐに、鎌を水平に構えたシキがガルドに迫る。
シキは鎌を振るう。だが、シキの鎌はガルドが体勢を低くしたために、空振りに終わる。
ガルドはニヤリとした。
魔法により強化した拳を握りしめ、アッパーのように拳を振り上げる。
今のシキは完全に無防備だ。彼のアッパーを防ぐ術はない。

「――――ッ！？」

胃の内側から込み上げてくる嘔吐感と、鉄の味のするナニかを感じる。

無防備なところに一撃を受けたことにより、彼の体から一瞬だけ力が抜ける。

その一瞬でシキは手に持っていた鎌を手放してしまい、さらには大きな隙を見せてしまった。

立て続けに繰り出される連撃。ジャブ、ストレートからのボディブロー。

込み上げてきた嘔吐感とナニかを我慢しきることが出来ずに、そのまま吐き出す。

幸いかどうかは分からないが、ここ数時間は食事をとっていない。

嘔吐はせず、吐血だけで済んだ。

しかし、それでも今の状況はマズかった。

膝をつき、吐血するシキの顔をガルドは蹴り上げ、仰け反った体に回し蹴りを放つ。

自らの保有する『力』の大きさに反して、シキの体重は軽い。

魔力により強化されたガルドの蹴りをまともに受けて、その場に踏み止まれるはずもない。

シキの体は弾丸のような勢いで吹き飛ばされ、『屍の森』の大木に叩きつけられる。

「――が、は……っ……」

肺から強制的に空気が押し出され、一時的に過呼吸状態になる。

大木に叩きつけられたシキは、そのまま滑り落ち尻餅をつく。

脳震盪気味になったのか視界がぶれ、少しでも気を抜いてしまえば、意識が無くなりそうになる。

彼は良くやった方だろう。何十人も居た『紅蓮の猟犬』のメンバ

ーを、たった一人で八割も倒したのだ。
だけど、それではシキは納得しない。
俺は、もう二度と負けたくない。『力』を手に入れて、全てを捩じ伏せる。
もう二度と大切なナニかを失いたくないから。
――ドクン……
鼓動が高まる。
まるで意思を持ったナニカが、自分を呼べと言っているかのように。

「……来い」

――ドクンドクン……
この感じは前にも感じたことのあるものだった。
そう、つい最近、拳闘場で使った『力』に酷似している。
……いや、違う。これはそれと全く同じだ。

「……来いよ」

――ドクンドクンドクンドクン！！
この『力』を使っても、俺はフィオナ・エリシオンには勝つことは出来なかった。
『本物の力』の『力』を手に入れたはずなのに、あいつには勝てなかった。
……でもこの『力』は、本当に俺が求めた『力』なのか？

「俺は……」

――ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン！！！！
あいつは言っていた。

この『力』は、俺が求めた『力』じゃないって……。
そんなことは分かってたさ。本当は分かっていた。
敵を捩じ伏せ、叩き潰すだけの『力』なんか、俺の求めるものじゃないってことくらい。
だけど、仕方ないじゃないか。
もう、目の前で大切なモノを失いたくないんだ。
だから、どんな『力』だったとしても、俺はそれを受け入れてやる。

「ここに――」

――ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン！！！！
それが例え間違った『力』だとしても全て受け入れて、ものにしてやる。
――俺は世界（ここ）にいるから。

「――――いや、受け入れてもらっては困るよ、シキ・K（クロカミ）・アスタロト」

不意に聞こえてきた声で、シキはナニカを引き出す言葉を中断した。
すると、目の前に居たガルドが何かに弾かれたように、後ろへ大きく吹き飛ばされた。
意識の失いかかっていた彼の頭では、最初なぜ、ガルドが吹き飛ばされたかを理解することが出来なかった。

数秒かけて理解することが出来たのは、とある二人が目の前に居た、と言うことだけだった。
一人は赤髪で双剣を構えている少女――夜光。
もう一人は蒼色の髪に双銃を構えている女性――フィオナ・エリシオンだ。

「多勢に無勢。噂には聞いてたけど、実際に見てみると虫酸が走る」
「必要な戦いには必要な行為だが、私利私欲な戦いには必要ないであろう？」

双剣と双銃を構えた二人は、その場から動いたわけではない。
しかし、二人の威圧感が動けなくさせているのだ。
さすがは自らの『力』だけであの猛者揃いの大会を戦い抜き、実質的に優勝と準優勝を果たした二人だろう。
『紅蓮の猟犬』は『台風の目』と『赤髪の夜光』を前にして次々と逃げ出していく。
シキだけになら勝てると思っていたが、この二人が来たのでは無理だと判断したのだろう。
これはとても賢明な判断だ。

『紅蓮の猟犬』の姿がなくなり、あれだけ騒がしかった『屍の森』が静寂に包まれる。
聞こえるのは遠くで咆哮を上げる魔獣の声や、風で木々が揺れる音だけ。
冷たい風がシキの銀髪を揺らし、彼は口を開いた。

「……なんで、俺を助けた」
「そりゃ、アンタが困ってたからに決まってるじゃん。さっきも言ったけど、アンタはアタシに勝った男なんだ。あんな雑魚に負けたら承知しないよ？」

それは違う、と彼は夜光に言いたかったが、言葉には出来なかった。

あのときシキが夜光に勝つことが出来たのは、『ナニカ』が『力』を貸してくれたからだ。

『ナニカの力』はとても異質で、一般常識には当てはまらない、凶悪な『力』だ。

単純にシキ自身の『力』だけでは、夜光に勝つことなど到底不可能だっただろう。

だからこそ、自分を鍛えるために『屍の森』へとやって来たのだ。

「礼は言わねェぞ」

「アンタにそんなの端から期待してないっての。ほら、立てる？」

夜光はそういいながら、未だに立てずに、大木にもたれ掛かるように座るシキに手を差しのべる。

そんな彼女の行動にシキは思わず面食らってしまった。

シキは夜光を捩じ伏せ、叩きのめした。

シキは知らないが、夜光は彼に対して『死の恐怖』を抱いている。

それにも関わらず、夜光はシキに手を差しのべる。

まるで、未だに夜光の脳内を縛り付ける『死の恐怖』を振り払うかのように。

「……」

「……」

シキは無言で夜光の手を握り、彼女も彼の手を無言で握り返した。

夜光の双剣士とは思えないほどに小さく、女性らしさのある柔らかい手に、シキはドキッとしてしう。

そんな心情を察されないようにか、シキは夜光から視線を逸らす。

夜光も夜光で、彼の手の感触にドキッとしていた。
とても男とは思えないようなスラッとした指に、綺麗な肌。
そして、思っていた以上に温かかったシキの手に。
夜光も自分の感情を悟られまいとするかのように、シキから視線を逸らす。
グイっと手を握る手に力を込めて、シキを立たせる。
さすがにあれだけやられた後で、足に力が入らないのか、大木に体重を預けるように立つ。
そして、フィオナに視線を向けた。

「クロカミ、お前の求める『力』がなんだったか……思い出したか？」
「あぁ。思い出したさ。いや、最初から分かってたさ」

腕を組み、目を瞑ったままフィオナはシキに訊ねる。
彼女の問いにシキは短く答える。
そう、最初から答えなんか分かっていた。ずっと答えは心（ここ）にあったのだ。
そんな彼の言葉にフッと笑みを溢すと、フィオナは目を見開きシキの目をジッと見据える。

「クロカミ。貴様は何を求める」

以前と全く同じ問いかけ。
あのときはただ敵を捩じ伏せるだけの、絶対的な『力』をと答えた。
ただ『力』を得ることだけに躍起になり、本来の目的を忘れていた彼だったならば、同じように答えるだろう。
だが、今は違う。自分の本当に必要で、求める『力』を理解したからだ。

「『力』だ。大切な仲間を護れる『力』を」
「クロカミ。それを何処に求める」
「我が心とその武器に」
「最後だ。クロカミ。お前の欲する『力』とは、本当に貴様の欲する『力』なのか？」
「――当たり前だ。これが俺（シキ）が世界（ここ）にいる理由」

シキの答えにフィオナは満足げに頷く。
もう彼は『力』の使い方を間違えたりはしないだろう。
例え間違ったとしても、彼女達がきっと道を示してくれるから。
シキは決める。この二人と一緒に旅をして、『本物の力』を見つけてみせると――――。

第四十二撃『敗北から学ぶこと。俺はどこで道を違えた……』（後書き）

とりあえず、次回の更新は遅くても木曜日にはしたいと思います。
火、水、木とテストなので、出来るか分かりませんが……。
では、感想待ってますッ！！

第四十三撃『久々の平穏。これはデートと呼べるのか？』（前書き）

久々の投稿です。
今までバトルが多い……というかほとんどバトルだったので、今回はバトルはお休みです。
まあ、過去編の間はバトルが多すぎになりますが……。
では、どうぞッ！！

第四十三撃『久々の平穏。これはデートと呼べるのか？』

ガヤガヤと人の声が飛び交う飲食店。
ここはオスティアのような大都市の飲食店ではなく、中規模の都市の飲食店だ。
大都市のように派手で豪華な見た目ではないものの、味は大都市にも勝るとも劣らない味だ。
価格が安い分、こちらで食事を済ませた方が良いのかもしれない。
料理に使われるのは主に肉や野菜などで、あまり魚は使われていない。
魔法世界の魚は旧世界のように食べれるというものが少なく、食べれたとしても味がいまいちのために好んで料理に使う者は少ない。
また、周りの風景に馴染めず、独自の雰囲気を放つ三人も、魚料理は注文していなかった。
一人は男。女顔負けの美貌を持ち、切れ長い目をしている。近くに立て掛けられた武器を見る限り、彼は近・中・遠距離と腕の立つ者なのだろう。
一人は少女。燃えるような赤い髪を肩で揃え、まるでこれから祭りに向かうかのような格好をしている。腰には双剣があり、双剣士だということが分かる。
一人は女。澄みきった空色の髪を小さめのポニーテールに纏め、難しい顔をし、頬杖をつきながら書類らしき紙を、眺めている。
男のフォークが少女の皿にのび、皿の上に乗せられいた肉を捉える。
そのままフォークを引き、それを自分の口に運ぼうとするが、引く前に少女のフォークが男のフォークを捉える。
「甘いよ、シキ。アタシの肉を盗ろうなんて百万年早いよ？」

「百万年？　テメェはそんなに生きる気か？　夜光。つーか、俺の方が働いたんだから寄越しやがれ」
「それとこれとは別問題だろ？　だいたい、アタシがアンタのサポートしてたから、動けてたんだ。アタシがもらいたいくらいだね」
男――シキと少女――夜光の二人は、火花を散らせんばかりの勢いで睨み合う。
そんな様子を女――フィオナは、またかと言いたげに溜め息をつきながら眺める。
シキがこの二人と旅をするようになってから、既に三ヶ月。
彼は、前のような刺々しさはなくなっていた。

第四十三撃
『久々の平穏。これはデートと呼べるのか？』

「それにしても『死の恐怖』なんて呼ばれてたアンタが、こんなに丸くなるなんてねぇ～」
「……ンだよ。文句あっか」
「ぜ～んぜん。むしろこっちの方がいいしな！」
ジト目を向けながら言うシキに対して、夜光は屈託のない笑みを向けながら答える。
彼女の言った通り、シキはこの三ヶ月で変わった。
『死の恐怖』などと呼ばれ、畏怖の対象と見られていた刺々しいシキの姿はどこにもなく、どこにでも居るような柔らかい物腰となっていた。
旅を始めた当初こそ刺々しさは残っていたものの、今では全くそれはない。

彼女達との旅の中で、仲間と共に何かをする喜びを思い出したからだ。

「……ンだよ。まだなんかあンのか」

「いやぁ、アンタって見れば見るほど……女の子みたいな顔してるなぁ～……って」

「それは私も同意見だ。これで男と言うのだから質が悪い」

「ンなもん知るかよ。俺の顔はデフォルトでこれだ」

シキは溜め息をつきながら、イスの背凭れに体重を預ける。そして、もう一度溜め息。

彼が溜め息を漏らす理由は、彼に集められている視線のせいだ。

夜光やフィオナが言うように、シキの顔立ちは女顔負けなほどに整っている。

そんな容姿がこの店の男の視線を集めてしまっているのだ。

転生したとはいえ、シキの顔立ちそのものは変わってはいない。

変わった点と言えば、竜族独自の角が生え、髪が銀髪で長くなったくらいだ。

「つーかそれ言うならアンタら二人も同じだろうが……」

シキは事前に注文を済ませ、受け取っていたコーヒーのカップを手にしながら言う。

ちなみに余談になるが、見た目こそ違っているものの、魔法世界と旧世界のコーヒーの味はほとんど変わらないらしい。

それを一口口に含んだあと、よく分からないといった顔をしている二人を見て、再び溜め息をつきながら口を開く。

「もしかしなくても分かってねェみてェだから言ってやるけどよ、この視線の半分以上はお前らが美人だからってことだよ」

「な……っ！？　び、びびび美人！？」
「ほぅ、ずいぶんとませたコトを言うじゃないか、クロカミ」
シキの言葉を受けて年相応な反応をして顔を真っ赤にする夜光に対して、フィオナは意味深な笑みを浮かべている。
そう、彼の言うとおりこの視線を集めている理由は、彼の容姿からというのもあるが、それだけではない。
彼と同席している夜光とフィオナという二人のせいでもある。
まだ少女のあどけなさを残す夜光ではあるが、人を惹き付けるような笑みと整った顔立ち。
一方、フィオナはというと、大人の色気を本人がその気がなくとも振り撒いており、それが男の視線を集めている。
余所から見れば絶世の美女が三人もいる、という状況で注目するな、という方が無理な注文かもしれない。
「仕方ねェだろ。本当のことなんだからよ。少しは自分の容姿を自覚しろ」
「君だけには言われたくないがな。それにしても……ふむ、お前は将来女泣かせになるぞ？」
「……どういう意味だ、それ」
口元を引きつかせながら、楽しげにククク……、と笑っているフィオナにシキはいう。
何回も訊ねるのだが、フィオナは何でもないと言うばかりで、どうにも答えようとはしない。
どうやらフィオナはシキをからかっているようだが、シキはシキでその事実に気づけていない。
このようになるとフィオナは答えないと言うことを、この三ヶ月で知ったようで、シキは溜め息をつきながら話題を変える。

「まあいい。ところで、こんなに食っちまったけど、代金は大丈夫なのか？」
「ん？　大丈夫だが？」

改めて自分の席を見渡したシキはそのような心配に駆られる。
それもそうだろう。彼らが座っているテーブルの上には、皿が何枚も重ねられて出来た山が、いくつも出来上がっている。
おそらく、この食べた量というのも、注目される原因となったのだろう。
とにかく、彼ら三人が平らげた食事の量は尋常な量ではなく、その量に比例して代金も上がるだろう。
それなのにも関わらず、フィオナは大丈夫だと言い切った。

「先程の依頼で思いの外金が舞い込んできたからな。この程度であれば問題あるまい」
「さっきの依頼でそんなに入ったのか？」
「あぁ。魔獣討伐、主に竜種が相手だと大金が転がり込んでくる」
「俺は共食いみたいであんまりいい気分じゃねェけどな」

彼らは、この都市に足を踏み入れる前に、一つの依頼を消化してきた。それが竜種討伐の依頼だ。
依頼というものは、フィオナが引き受けている仕事のことで、運搬・護衛・討伐などを総称したものだ。
いわば『何でも屋』のような仕事で、フィオナは各地を転々としながら依頼を引き受けている。
ほんの二ヶ月ほど前までは『死の恐怖』ことシキ・K（クロカミ）・アスタロトが、フィオナ達と一緒に行動していると言うことで、依頼の量がめっきり減ったらしい。
今ではそんなことはない。むしろ前よりも増えたとさえ思える。
やはり二人から三人に増えたことにより、より早く依頼をこなせ

るようになった。
それだけでなく、この三人の強さは三ヶ月前の拳闘大会で知れ渡っているための結果だろう。

「今回の依頼主はなかなかの金持ちでな。少し言ったら元の金額の倍もくれたぞ」
「アンタ、以外にセコいな……」

シキの言葉にフィオナは失敬な、要領がいいと言えなどと文句を言っていた。
何を言ったかなど彼の知る由もないが、もしも苦労をした、などと言っていたのであれば嘘もいいところだ。
今回の竜種討伐はとてもじゃないが、苦労したなどと言えるほどじゃない。
近距離が得意な双剣の夜光。中距離からの攻撃が可能な鎌のシキ。そして、遠距離からの狙撃が可能な狙撃手であるフィオナ。
このバランスのとれた三人を相手に、たかが竜種一体では相手にすらならないだろう。
今回の依頼でも夜光とシキの二人だけで竜種を圧倒し、フィオナは全くと言っていいほどに働いてはいなかった。

「とにかく、今日は金も入ったし、休みにしよう。休みなしでは体調が崩れかねん」
「休み、か……。まあ、いいか」
「なんだ？　まさか休みが嫌などと言うつもりではあるまいな？」
「そうじゃねェよ。嫌っつうか、なんつーか……。休みなんて今までないと同じだったからさ、休みもらっても何したらいいか分からねェんだ」

そんなシキの言葉に、さすがのフィオナでも呆気にとられたよう

な表情になる。
だが、それは仕方のないことだろう。
しばらくその物事に対して何もやっていないと、やり方を忘れたりするものだが、まさか休日の過ごし方を忘れたなどというとは思わなかったのだから。
そもそもシキは、『力』を得ることに躍起になり、それ以外のことには目も暮れていなかった。
戦闘時以外は武器の手入れか、睡眠を取るだけ。
戦いの事を忘れた休日の過ごし方など、魂の芯から武人であるシキには思い付かないようになっていた。

「休日の過ごし方を忘れるような輩がいるとは……。よし、そうであれば今日一日は、夜光と共に行動するが良い」
「えっ！？」
「なんで夜光と……？」

フィオナの言葉に今までシキに美人だと言われ、固まっていた夜光が顔を真っ赤にして反応していた。
そんな夜光に対して、シキは不思議そうに首を傾げるばかりだった。
彼が不思議そうにしている理由は、何故夜光と一緒かと言うことと、彼女が何故顔を真っ赤にしているかと言うことだ。

「夜光でなくとも休日の過ごし方は知ってるとは思うが、今は夜光に休日の過ごし方を教えてもらえ」
「いや、別にそんなん教えてもらわなくても、修業してるから構わねェんだが……」
「休むのも修業の内だ。いざというときに全力を発揮できねば意味がなかろう」

フィオナの適切な指摘にシキはうっ、と言葉をつまらせてしまった。

確かに彼女の言う通り休日まで修業を行い、疲れを残してしまえば、いざというときに全力を出せなければ、修業を行なった意味がないだろう。

そういう点を考慮すれば、休むのも修業の内だというのも納得がいく。

そのことに納得は出来るのだが、それをすんなりとは受け入れがたい。

求める『力』は変わったものの、一刻も早く『力』をつけたいという思いは、今も変わらない。

もう二度と、大切な人を無くす悲しみを味わいたくないから。

「急ぎたい気持ちも分かる。だが、今は休んだ方がいい。お前は疲れをためすぎだ」

「……分かったよ」

シキはしぶしぶと言った感じで、それを承諾した。

これほどまでに休みたくない者も珍しいが、それは彼の本来の目的がそうさせているのだから、仕方がないことなのだろう。

とりあえず、食事の代金を払った三人は、店の外に出ることにした。

店の外にでても、オスティアのように人で溢れ返っているなどということはない。

ガラガラに空いている、ということではないが、それでも十分に歩きやすいといえる。

「さて、私は用事があるのでな。日が落ちる前にあの時計塔で待ち合わせだ」

「なんだ、フィオナも一緒に来るんじゃねェのか？」

「まあな。せっかく若い男女が二人も居るのだ。邪魔するわけにもいくまい。それに、あの時計塔には少しばかり面白いジンクスがあるのでな」

なんだよそれ、とシキは言いたかったのだが、そんな言葉を投げ掛ける前に、フィオナはさっさと歩き出してしまっていた。

片手をあげて心なしか頑張れ、と言っているようにも見える行動に、何を頑張るのだろうと首をかしげるのだった。

ちなみに実際にフィオナが手をあげたのは、シキに対してではなく夜光に対してだったりする。

（が、ががが頑張れってあそこは……。だ、ダメダメ、無理！！ていうかなんで先生が知ってんの！？）

チラッと未だにフィオナの背中を見続け、溜め息をついているシキに視線を向ける。

するとボンッ、という効果音が似合いそうな勢いで、自分の顔に熱があがってくるのが手にとるように分かった。

夜光自身は何故このように顔が熱くなるかなど、既に気づいていた。それは、彼に好意を寄せているからだ。

しかし、なぜ自分がシキに好意を寄せるようになったか、それが夜光自身にも分からないでいる。

別段仲が悪いと言うわけではなかったが、口喧嘩をする数は少ないとはいえない。

実力も『ナニカの力』を使わなければ、自分よりも弱いと言うことも知っている。

それなのに自分は、いったい彼のどこに惚れたのだろうと疑問に思った。

「おい夜光、聞いてんのか？」

「えっ？　な、なんだよ」

不意に聞こえてきた声に、夜光はハッとして顔をあげる。
どうやら考え事に夢中になりすぎていたために、シキの話は全く聞いていなかったようだ。
やれやれ、とシキは若干呆れながらも口を開く。

「今からどっかいくけど、お前はどうする？　俺は適当にぶらつくつもりだが、夜光は行くとこでもあんのか？」
「えっ？　えって……じゃあ、アクセサリー屋にでも行こう、かな？」
「それってついていかない方がいいか？」
「いや、えっと……だ、だめ！！　ついてきて！！」

別行動しようと夜光から離れていくシキに、夜光はとっさに叫んでしまっていた。
行きなり叫ばれたことにより、シキは驚いたような表情をしてしまった。
そんな彼の表情を見て、もう一度夜光はハッとしてしまう。
無意識にだったとはいえ、叫んでしまったことに夜光は恥じるが、シキ本人は驚いただけで、全く気にしている様子はなかった。

「そっか。じゃあ一緒に行くか」
「ちょっ、待ちなよ、シキ！！」

一人でさっさと歩きだしてしまったシキの後ろを、追いかけるように夜光は慌てて走り出した。

◇

あれから都市を歩くこと数分後。
色々な店を巡りながら、ようやく目的地であるアクセサリー屋にたどり着いていた。
最初こそ地形を把握しきれておらず迷ってしまったものの、適当に歩いているうちに、目的地にたどり着くことが出来たのだから、結果オーライと言える。
アクセサリー屋に入った二人の目に入ったのは、当たり前ではあるが色々な種類のアクセサリーだった。
首から下げる首飾りタイプのものもあれば、イヤリングタイプのものもある。
他にも指輪タイプやブレスレットタイプなどのアクセサリーもあった。

「へー、結構色んな奴があるんだな」
「別に珍しくないと思うけど……。アンタもなんか買うの？」
「なんか買うのかって聞かれても、こういった店に来んのは初めてだからな……」

本当に今日は驚かされてばかりだと思う、と夜光は内心考えていた。
だが考えられなかったことではない。
休日の過ごし方を忘れたシキであれば、アクセサリー屋などに入ったことがないことも頷ける。
シキは相当珍しいのか、店内に並べられているアクセサリーに見入っている。
そんなシキを見て、夜光は思わず微笑んでしまっていた。

「ンだよ、なに笑ってんだ？」
「いーや、べっつにー？　なんでもないよ」
「本当か？　嘘くせェ言い方しやがって……」

なにやらシキがぶつぶつと言い始めていたようだが、夜光はそれを無視して自分もアクセサリーを見ることにした。
もとはと言えば夜光自身がここに来たいと言い出し、シキには付き合ってもらった形になったのだから、普通なら感謝すべきところなのだろう。
ふと、一つのアクセサリーが夜光の目に入った。
それは花の形をした首飾りタイプのアクセサリーで、特に派手なものではなかった。
それでも夜光はそれに何か惹かれるものがあった。
花の形をした首飾りタイプのアクセサリーを手に取り、それを眺める。

（アタシに花って言ったら、シキに笑われるかな……。普段は大雑把だしなぁ……）

自分で思っているとおり、夜光はお世辞でも几帳面と言えるような性格ではない。
むしろシキの方が女らしく、几帳面という場合がある。
故に、そんな自分が花柄のアクセサリーなど似合わないと思ってしまうのだろう。
もちろんそんなことを差し引いても似合うほどに彼女の容姿は整っているのだが、彼女はそんなことは一切気づいていない。
それはシキやこの場にはいないフィオナも同様なのだから、仕方がないといえば仕方がないのだろう。

「なんだ？　それが欲しいのか？」
「うわっ！？　い、いきなり話しかけるなッ！！」
「いきなりで悪かったな。で、夜光はそれが欲しいのか？」

シキは夜光が手に持っている首飾りを指差しながら、そう言う。
夜光が持っている首飾りを見て、彼は一瞬だけ面食らったような表情をしているが、夜光は全く気づいていた。
当たり前だ。思い人であるシキの顔が、すぐ目の前にあり、緊張しているのだから。
既に彼女の頭はパニックに陥っている。
よもやいきなり変な行動を行ったとしても、おかしくはないだろう。

「べ、別に欲しいわけじゃないからな。た、ただ見てただけで……。そ、そうアタシにはこんなの似合わないしさ」

夜光はそういいながら、シキから一歩遠ざかり、首飾りを元あった場所に戻した。
そんな彼女には笑みが浮かんでいたが、そんなものは作り物の笑みであることなど、シキが気づかないはずがない。

「もう行こっか。欲しいものもなかったし、あとは適当にぶらつこう？」
「……あぁ。そうするか」

夜光の言葉にシキは賛同し、店をあとにすることにした。

◇

フィオナ・エリシオンはこの都市を見渡すことが出来る時計搭の天辺にて、一人の人物と一緒にいた。
白い髪に、子供のような容姿をしている男だ。
そんな容姿とは裏腹に、その男からは並々ならぬ力を感じとることが出来る。

「こうして会うのは実に百年ぶりくらいかの、フィオナ」
「そうだな。相も変わらず貴様は変わらないな、ゼクト」

男――ゼクトとフィオナはまるで昔からの知り合いだとばかりに、親しげに会話をする。

いや、昔からの知り合いなのだろう。

百年ぶりの再会を心なしか、二人は喜んでいるようにも見える。

そもそも百年ぶりの再会、というだけで既に規格外なのだが、この二人は別段気にした様子はない。

「何やら吹っ切れたような表情をしておるな。……もしや、見つけたのか？　‘自分を殺してくれる人物’を」
「あぁ。ようやく見つけ出せた。私を……私の中にこれから封じ込める『力』を殺してくれる人物を。これで私の数千年に及ぶ旅も終わる、というものだ」
「……そうか。で、そやつの名前はなんと言うのじゃ。教えてくれても構わんじゃろ？」
「シキ・Kアスタロト。あ奴なら、『神格の力』を使いこなし、殺してくれよう」

まあ、今は雑魚だがな、とフィオナは肩をすくめながら、まるで世間話をするような軽さで言葉を紡ぐ。

一見すれば世間話にしか見えないのだが、話の内容は常軌を逸している。

神格という世界に破滅をもたらす力に、自らを殺してくれる人物の名前。

何もかもが規格外の話であった。

「じゃが本当に『神格の力』を使いこなせば、『神格自身』である

お主を殺せるのか？」
「無論だ。私は『アレ』の動きを封じ、殺してもらうだけだからな」
「それにしても未だに信じられぬな。まさかお主が神格――オーディンだったとは……」

オーディンとは、『時空掌握』という旧魔法を兼ね備えている神格の名前だ。
その旧魔法の名前のとおり、『時空掌握』は時間・空間のいのままに操ることが出来るものだ。
ただ、『時空掌握』を使って時間・空間を制御したモノには干渉は出来ない。
そして、驚きなのは神格が神格（オーディン）だったと言うことだ。
彼女は『時空掌握』を使用し、自らの周りの空間をこの世界から切り離し、切り離した空間内の時間を止めることで、消滅を逃れたのだ。

「ゼクト、貴様に頼みたいことがある」
「なんじゃ？」
「……シキは今回だけでは私を殺しきれない。そう遠くない未来、きっと私はシキと戦うことになるだろう」

それが何年後になるかわからないがな、と自嘲じみた笑みを浮かべながらゼクトにいう。
もちろんそんな日は来ないのかもしれない。
だけど、もしものことを考えた上でフィオナ（エリシオン）はゼクトにいう。

「――シキを頼む、ゼクト。別に干渉をせずとも良い。ただ成長を見守ってもらいたい」
「……分かった。出来るだけやってみるとするかの」

フィオナはゼクトの言葉に、安心したと言わんばかりの表情をする。

そして、彼女の視界には、時計搭に近づいてくる二人組の姿が映っていた。

◇

日が落ちる少し前あたりに、シキと夜光はフィオナと約束した時計搭にやって来ていた。

中は時計搭というよりも、むしろ教会といった方があっているような造りをしていた。

壁に取り付けられたステンドグラスが夕日を受けて、幻想的に輝いていた。

「フィオナはまだ……来てないみてェだな」

「そ、そうだな……」

時計搭の中を見渡しながら、人影がないことを確認したシキがそう呟く。

中には一人ぐらいいても不思議ではないだろうが、今は不自然なほどにシキと夜光の二人しかこの場にはいない。

とりあえず二人はフィオナが来るまで、時計搭に設置されている長椅子に座って待つことにした。

時計搭内には長椅子が何列にも並べられ、本格的な教会のような造りをしている。

そして、この教会にはこんなジンクスがあった。

ステンドグラスで照らされた位置にて、好きな人に告白をすると、その恋が実るというものだ。

どうやらフィオナは、夜光がシキに好意を寄せていたことを知っていたらしく、わざとこの場所を選んだようだ。

（ど、どうしよう……。もし告白して断られたら……）

大雑把な夜光であっても、告白するとなれば話は別だ。

彼女は告白されることはあっても、告白を自らしたことはないのだ。

もちろん夜光も花も恥じらう乙女だ。

好意を寄せている人物に対して告白をするとなれば、緊張をせざるを得ない。

鼓動が高鳴り、シキの顔も見ていないのに顔が真っ赤になるのが自分でもわかる。

「どうしたんだ、夜光？　顔が赤いぞ」

「な、何でもない……」

「あ？　変な奴だな。さっきまであんだけ元気だったのによ」

シキは急にフィオナがしおらしくなったことに対して気味悪がりながら、そんなことを呟く。

さっきまでの彼女は実に元気そのものだった。

可愛いものがあればキャーキャー騒ぎ、良い服があればどれが似合うかなどシキに訊いてきたりもした。

もちろんシキにはそんなことは分からないために、適当に答えていたが……。

「――そうだ。お前、これ欲しかったんだろ？」

シキはそういいながら、掌にすっぽり収まりきるほどに小さい紙包みを、夜光に投げる。

夜光はそれをキャッチしたあとにシキの方を見ると、シキは開けてみろという。

言葉通りに夜光はその紙包みを開けると、中にはあのアクセサリー屋で見ていた花柄の首飾りが入っていた。

「これ……」

「それ、欲しかったんだろ？」

「でも、高かったんじゃ……」

「大したことねェよ、別に」

この花柄の首飾りは、他のアクセサリーのように派手なものではないものの、値段は周りのよりも高かった。

しかし、シキの貯金はあってもないようなものだ。

食料は現地調達だし、使うとしてもせいぜい安いものだけだ。

そうだったなら、今使っても問題ないだろうというシキの考えだ。

そして、花柄の首飾りを見た夜光はクスッ、と笑いながらシキに訊ねる。

「この花さ忍冬（すいかずら）って言うんだけどさ、花言葉、知ってる？」

「花言葉？　いや、知らねェな。つーかその花って忍冬（すいかずら）っていうのか」

「うん。それで花言葉は――愛の絆」

「なぁっ！？」

今度はシキが赤面する番だった。

彼は特に花言葉なども考えずにその首飾りを購入し、いわばプレゼントしたわけなのだが、それがまさか『愛の絆』などと言うものとは知らなかった。

いきなりそのようなことを言われれば、いくらシキといえど焦らずにはいられない。

下手をすればこれは告白をしたようなものと同義であるからだ。

「は、花言葉なんて知らなかったんだ。そ、その、あれだ……いつも助けてもらってる例を兼ねて、だな……その、悪いな」
「ううん、別に構わないよ。それに、アンタが花言葉を知らないのなんて、百も承知だよ」

あまりのシキの慌てように夜光はあはは、と笑い声をあげながらそう言う。
口ではそんなことを言ってはいるが、本当は知っている上でプレゼントしてもらいたかったのが本音だ。
だけど、プレゼントしてもらったことはそれはそれで嬉しい。
それはシキが夜光を大切な仲間として認めてくれる証でもあるから。
夜光は罰が悪そうな頭の後ろを掻くシキを見ながら、忍冬（すいかずら）の首飾りを首にかける。

「ありがと。これ、大切にするよ」
「あ、あぁ。喜んでもらえて、俺も嬉しい限りだ。まあ、変な感じになっちまったけど、いつもありがとな、夜光」
「こっちこそ、ありがと」

シキと夜光の二人は自然に笑みを見せあっていた。
――今はまだ、この楽しい関係を続けよう。願わくば、この時間が崩れないことを……。
夜光はステンドグラスが夕日を受けて幻想的に輝いく光を見ながら、そう思った。
ちなみに、余談になるがこのあと合流したフィオナに、からかわれたのはいうまでもない。

第四十三撃『久々の平穏。これはデートと呼べるのか？』（後書き）

次回からは原作キャラに絡めていきたいと思います。
今話でも関わっていますね。
最終決戦前夜の前編だったか後編に、一応繋ぎとなる部分を入れましたので、暇があれば見てください。
まあ、見なくても大丈夫ですけどね。
次話からは三日に一回更新に戻します。
そして……ストックで過去編があと一話で終わろうとしてるのですが、ここで問題が発生しました……。
コミック派に合わせるか、マガジン派に合わせるかです。
私は三つほど前のマガジンから買い始めたのですが、見事に次章に絡めれるんですよね……。
ここでどっち派かに別れると、話の内容が大分変わってきます。
意見が無ければマガジン派に合わせますが、それが嫌だという方は意見を下さい。
何人か集まった場合はコミック派に合わせて、次章を短くしてさっさと麻帆良に行かせます。
えー……なんだか長くなりましたが、感想待ってますッ！！

第四十四撃『真祖の吸血鬼との出会い。男には譲れねェもんがあるんだよ』（前）

原作キャラ登場ッ！！

前置きはここまでにして、どうぞッ！！

第四十四撃『真祖の吸血鬼との出会い。男には譲れねェもんがあるんだよ』

――季節は冬。

魔法世界にも旧世界同様に季節の変化はあるし、その季節によって起こる事象もある。

空より降り注ぐ白い雪が、地面を埋め尽くして白銀の世界を作り上げる。

それは一種の幻想空間のようにも思える。

そんな季節の中、とある人物たちは、白銀の世界の森の中で動き回っていた。

「はぁ……はぁ……ちょっとアレは、規格外なんじゃない？」

人間二人分を隠すには十分すぎるほどに大きな大木に身を隠し、双剣を構えた少女――夜光はそう呟いた。

冬の季節には不釣り合いな格好をして、首からは忍冬（すいかずら）の首飾りがぶら下げられている。

ただでさえ寒そうな夜光の格好だが、服のところどころが裂けており、さらに寒そうに見える。

バレないように大木から顔をだし、夜光は見る。

彼女の視線の先には、冬などお構いなしに暴れる二対のドラゴンの姿が見える。

「ふぅ……。そう言うな。標的（ターゲット）が強ェのなんか百も承知だろ」

そして、夜光の言葉に対して同じように大木に身を隠す竜人――シキが言った。

手にはライフルが握られており、背中にはまるで死神が持ってい

るような、禍々しい鎌が携えられている。
彼は今まで背中に携えている鎌を使っていたのだが、最近になって前に使っていたライフルを使うようになっていた。
しばらく使っていなかったためにリハビリを兼ねて、今回の依頼に励んでいる。
鎌はもしものときのための保険のようなものだ。

「ったく、発情期のドラゴンってのはどうしてこんなに強ェんだろうな」
「アンタも一応アレと親戚みたいなもんだろ……？」
「知らねェよ。あんなん親戚でも何でもねェ。――――行くぞ」
「了解。タイミング、外すんじゃないよ？」
「そっちこそな」

シキと夜光は同じタイミングで大木の左右から飛び出し、各々の武器を振るう。
双剣士と狙撃手、二人の武器が火を噴いた。

第四十四撃
『真祖の吸血鬼との出会い。男には譲れねェもんがあるんだよ』

ズゥン、と二つの何かが倒れ伏す鈍い音が、白銀の世界に響き渡った。
倒れたのは二体のドラゴンだ。倒したのはもちろんシキと夜光。
双剣を逆手に構えた夜光は息を整えながら、他に敵がいないかを確かめる。
同じようにライフルを構えたシキも、夜光よりも少し離れた位置にて警戒する。

標的（ターゲット）を撃破し、気を抜いたところに不意打ちを掛けられてしまえば、体力を消耗している今では太刀打ちするにしても不利になるからだ。

敵が潜んでいないことを確認した二人は、各々の武器の構えを解く。

「お疲れ様、シキ。ナイスアシストだったよ」

「あぁ。腕が錆び付いてなくて何よりだ。まあ、体に染み付いた動きはそうそうに抜けねェってことだな」

そうだね、と夜光は適当に相づちを打つと、逆手に構えていた双剣を腰にはしまう。

最近はシキ達とフィオナは別行動をとることが多くなっていた。

理由は教えてはくれないのだが、何やら個人的な問題があるらしいとかで、別行動をしているようだ。

フィオナと別行動をしているとはいえ、依頼を受けないことには生活もままならない。

なので二人で依頼を受けているのため、最近では二人のコンビネーションが良くなってきている。

「とりあえず依頼は達成したし、近くの村で何か食べない？」

「そうだな……。依頼の成功の申請はあとでやれば良いからな。とりあえず腹ごしらえだ」

二人はそういうと、近くの村へと歩きだした。

雪道を踏みしめ、村があるらしき場所へと向かう。

会話をすることもなく歩いていたのだが、夜光が何やら寒そうにしていることにシキは気づく。

さっきのように動いていたならまだしも、動いていない状態でかなり薄着をしていれば、寒いのも当たり前だろう。

「ほらよ。寒いんだろ？」
「ぁ……」

シキはそういいながら、自らが着ている外套の上を夜光に羽織らせる。
これではシキが寒いかもしれないが、彼は氣をうまく循環させて、体温の低下を防いでいる。
よって彼はどれだけ薄着だろうが関係ないのだ。
だが夜光は違う。氣を扱えるシキと違って、夜光は氣も魔力も循環させるのがあまり上手くない。
だからこそ、着させるのだろう。

「……」
「……」

しかし何やら空気が重い、というよりも気まずいと言った方が良いのだろうか。
フィオナが居ないことによりお互いがお互いを意識してし過ぎてしまい、顔を会わせることすらも出来ない。
忍冬事件のあとから、二人は妙にお互いを意識しすぎている。
まあ、『愛の絆』の花言葉を送ってしまったのだから、仕方がないといえば仕方がない。
特に夜光の意識の仕方は尋常じゃなかった。
元から好意を寄せていた人物に『愛の絆』なんかを送られたりしたならば、意識をせざるを得ない。
二人の耳には雪を踏みしめる音だけが聴こえる。
――そして、その空気を打ち砕いたのは、一つの爆音だった。
その爆音が引き金になったかのように、ただただ静かだった二人の耳に立て続けに爆音が聞こえてくる。

爆音がする方に視線を向けてみると、魔法軍の大軍が何かと戦っているのが見えた。

「シキ、行くよッ！！」
「あぁ！！」

緩めていた気を改めて引き締め、シキと夜光の二人は爆音が聞こえた方へと走り出す。
二人が走っている間にも爆音が絶え間なく聞こえ、魔法を使っているのも見える。
敵は氷系統の魔法使いなのか、強力な氷魔法が使用されている。
しばらく走っていると、二人の視界にとある村が見えてきた。
建物は破壊され地面は抉られ、煙が立ち上っている。
死んではいないようなのだが、血だらけになって倒れている人が何人も居る。

「ひでェ有り様だな……。誰がこんなことを……」
「分からな――ッ！？　シキ、上ッ！！」
「――ッ！？　チッ！！」

村に着いて早々に何者かに襲われた二人は、とっさに左右に飛ぶことにより、降り注いできた何かを回避する。
降り注いできたのは氷の矢――魔法の射手だった。
魔法の射手が降り注いだということは、明らかに敵対意識を見せている証拠だ。
シキはライフル、夜光は双剣を逆手に構えながら、魔法の射手が降ってきた方向を見上げる。
そこに居たのは一人の女性だった。
長い金髪をなびかせ、漆黒の衣装に身を包む妖艶な女性。
どうやら人形使い（ドールマスター）のようで、近くには使い魔

らしき人形が浮いている。

「――――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、闇の福音……か」

「ほぉ、貴様のような小僧までもが知っているとはな」

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

真祖の吸血鬼にして、自らが悪の魔法使いと称する魔法使いの名前だ。

彼女は闇の福音と呼ばれ恐れられ、指名手配されている魔法使いだ。

「テメェがこれをやったのか？」

「さてな。邪魔だ、小僧。今すぐこの場から消えろ。さもなければ――――」

「さもなければ、どうするってんだ？」

エヴァンジェリンの言葉に対して、シキはライフルを構えながら言い返す。

言い返したが、どのような答えが返ってくるかなど、既に分かりきっていた。

エヴァンジェリンは口元を不適に歪めながら、手を振り上げる。

「――――消えるがいいッ！！」

刹那、二人がいる場所に向かって広域魔法――『こおるだいち』が放たれた。

エヴァンジェリンが放つ氷系統の魔法は、今までに見てきた魔法使いの比ではなかった。

魔力の循環のさせ方から魔力の練り、挙げていけばキリがないほ

どに魔法使いとして有能な力を持っていることを、たったの一撃で理解することが出来た。
その場から全力で駆け出し、『こおるだいち』の範囲外まで何とか逃げ切り、体勢を整える。

「闇の福音っていったら六百万$の指名手配……ケンカ売ったはいいけど、大丈夫なの？」
「正直なところ、格が違いすぎる。全然大丈夫じゃねェ……」
「……え？」

空気が固まったような気がした。
‘あの’エヴァンジェリンにケンカを売ったのだから、何か勝算があるのかと思いきや、まさかの無計画宣言。
六百万$の指名手配の名は伊達ではないことは、既に分かっている。
格が違うというのも、分かりきっていたことだ。
だからこそ、シキの無計画宣言に固まってしまったのだ。
いくらコンビネーションが良くなった二人とはいえ、闇の福音には勝つことは難しいだろう。

「過ぎたことを言っても仕方ねェだろ。それにあいつは、無差別に人を傷つけた。絶対ェに――――許すわけにはいかねェんだ」
「シキ……。そうだね、こうなったらやるしかないッ！！」

シキの目に宿る怒りの炎を見て、夜光も覚悟を決める。
双剣を改めて握り直し、エヴァンジェリンに向き直る。
そんな二人を見てエヴァンジェリンは舌打ちをする。
実際にこれをやったのはエヴァンジェリンではない。
彼女を捕らえようとして無差別攻撃を行った魔法軍のせいだ。
そして、シキと夜光が動き出そうとしたその瞬間、エヴァンジェ

リンの上から無数の魔力弾が放たれた。
もちろんその魔力弾を放ったのは、ライフルの引き金に指を掛けてすらいないシキではない。
ならば誰がエヴァンジェリンにケンカを売るような真似をしたのか、答えは簡単だ。

「闇の福音に戦いを挑むとは、少し見ない間にずいぶんとたくましくなったな、クロカミ、夜光」

夜光の戦いの先生であり、シキの本来の目的を思い出させてくれた人物――フィオナ・エリシオンだ。
魔力で足場を形成し、エヴァンジェリンを見下ろすようにフィオナは双銃を構えている。
確かにフィオナであれば、エヴァンジェリンに勝つことも可能であろう。
エヴァンジェリンは新たに現れたフィオナを見て、忌々しげな表情をする。

「邪魔をするなッ！！　リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。契約に従え――――――」

エヴァンジェリンはシキと夜光、フィオナに片手ずつを構えながら、魔法の詠唱を始める。
彼女ほどの魔法使いの詠唱魔法が使ったならば、威力はかなりのものとなるだろう。
いくらフィオナといえど、無傷で切り抜けるのは、神格の力を使わなければ、ほぼ不可能と言えよう。
しかし逆にいえば、魔法を使わせなければ良いだけのことだ。
フィオナは詠唱の発動と同時に瞬動を使い、エヴァンジェリンに接近する。

「――――やらせると思うか？　闇の福音」

エヴァンジェリンの後ろに回り込んだフィオナは、構えていた双銃を突き付け、何の迷いもなく引き金を引く。

しかしエヴァンジェリンはそれに即座に反応し、まるで仕返しをするかのようにフィオナの後ろに回り込む。

魔法の詠唱をしている暇はないと判断したのか、無詠唱で、しかも零距離で『闇の吹雪』を放つ。

掌から放たれた『闇の吹雪』はフィオナを包み込み、爆発する。

「ふん、たわいもない」

エヴァンジェリンは詰まらなそうに双呟きながら、シキと夜光の方に向き直る。

だが、既に彼女が二人を居たと認識していた場所には、二人の姿は見えない。

当たり前だ。彼女の視界は元から二人を居た場所を捉えてはいない。空を見上げていたのだ。

そう、エヴァンジェリンは空を見上げるような体勢で、地上に落下しているのだ。

その事に気づくまでに、実に数秒を要していた。

その数秒というのは完全に無防備な状態であり、‘彼女’を前にそうするのは正に自殺行為と言えよう。

フィオナの双銃を握る女性らしさのある手が、エヴァンジェリンの顔面を掴む。

「自分よりも強い相手と戦うのは――――――――初めてではないだろう？」

口元を楽しげに歪めたフィオナは、エヴァンジェリンの顔面を掴みながら地面に急降下していく。
そして、そのままエヴァンジェリンを頭から地面に叩き付けた――と思われたが、そこはさすが闇の福音と呼ばれる魔法使いだ。
地面とぶつかる直前にフィオナの腕から抜けて、体勢を整えていた。

「くっ、貴様は台風の目か……。どうりで格が違うわけだ。文字通り私と生きている時間が違う」
「まさか知っているとはな。まあ、何百年も生きていれば名前ぐらいは聞いたことがあろうな」
「あぁ。貴様の伝説は嫌というほど聞かされた。何でも遥か昔、現代魔法が構築される前から存在し、旧式魔法の王の側近にいたらしいな」

エヴァンジェリンの言葉に、フィオナはますます面白いと言わんばかりの表情をする。
彼女――エヴァンジェリンは真祖の吸血鬼になる前は、極々普通のお姫様だった。
お姫様という時点で普通ではないような気がするが、今の着眼点はそこではない。
彼女がまだ真祖の吸血鬼になる前、彼女が暮らしていた城では色々な伝説話を聞かされていた。
その中に『フィオナ・エリシオン』という名前があったのを、エヴァンジェリンはよく覚えていた。
フィオナの伝説は他の英雄の伝説とはケタが違う。
一人で幾万の兵士を無傷で倒したやら、神を相手にして生き残ったという伝説までもがある。
そのほとんどは根も葉もない伝説なのだが、火のないところには煙は立たないという。

そして、神を相手にしたというのは間違いではないのだ。
正確には、神をも超越した力を持つ『神格』なのだが……。

「貴女に、私程度が敵うはずがない。煮るなり焼くなり好きにしてくれ」
「ふむ、私は別にお前を煮るつもりも焼くつもりもないのだがな。強いて言うならば……特にはないな？」

すっかり悪の魔法使いの威厳をなくしたエヴァンジェリンに、フィオナは肩をすくめながらそう言う。
実際、フィオナがこの場所に来たのは、たまたま以外には他ならない。
そこでシキと夜光がやられそうになっていたから、助けたに過ぎない。

「クロカミ、夜光。ケンカを売るのは構わないが、相手を見てケンカを売れ」
「うっ……す、すまん」
「ごめんなさい……」

フィオナに怒られたシキと夜光は、シュンとしながら謝る。
こうして、シキと夜光とエヴァンジェリンの騒動は終わるのだった。

◇

「……は？　今なんて言った……ましたか？」
「私が貴様に直々に稽古をつけてやる、と言ったのだ。ありがたく思え」

あれから一時間ほど経過し、フィオナとエヴァンジェリンを交えた一行は日も落ちそうだったために、森の中で野宿をしていた。
この一時間でエヴァンジェリンがあの村を襲ったわけではないことを知り、謝ったのは言うまでもない。
そして、なぜシキがわざわざ言い直したかと言えば、この一時間で散々歳上は敬えと叩き込まれたからだ。
正直なところ、礼儀を知らない彼がこのような態度をとるとは逆に珍しいとさえ言える。

「俺とエヴァさんじゃ戦い方が根本的に違う。魔法使いと狙撃手じゃあ部類が違いすぎるんじゃねェ……ですか？」
「確かにそうだな。だが、少なくとも貴様に戦い方を教えるのは不可能じゃない。それに、フィオナ殿の頼みだからな」

シキとエヴァンジェリンでは確かに戦い方が根本的から違っている。
シキはライフルという得物を使い、エヴァンジェリンは魔法もしくは人形を使っての戦い方だ。
そんなエヴァンジェリンが彼に戦い方を教えるのは、一見無理そうに見えるだろう。
だが、何百年と生きたエヴァンジェリンからすれば、かじったら程度にしか銃器を使えないシキに教えるのは容易いことだろう。

「あとそっちの赤毛もだ。だいたい、なぜ貴様は魔法を使えるのに使わない」
「え？　いやぁ、魔法って魔力の循環のさせ方分かんないし、第一にアタシには魔法は合わないと思う……ます」
「……そうだな。お前は特にそうだが、保有している魔力量が少ない。あまり魔法に頼らない方がいいだろう」

エヴァンジェリンが来てから学ぶことが多いな、とシキと夜光は感心してしまっていた。

今まで二人はフィオナという師を持っていたが、彼女は口で教えるようなことはしなかった。見て学べという奴だろう。

その点を見れば、フィオナよりもエヴァンジェリンを師として仰いだ方が良いのかもしれない。

「とりあえず肉体強化の魔法は教えてやる。それくらいは使えるようになれ」

エヴァンジェリンの言葉に夜光は一回だけ頷く。

それ以降、特に彼女からの指摘はなかった。明日から戦い方を二人に教えるらしいが、今日は休むのだろう。

ちなみに今この場には三人しか居ない。

フィオナはまた用事があると言い、再びどこかへ行ってしまったのだ。

何しに来たんだろう、とシキと夜光の二人が思ったのは言うまでもない。

「で、さ……どっちが本当の姿なん……ですか？」

「あっ、それアタシも気になってた」

「お前らはそんなことを気にしていたのか？　全く、下らない奴らだ」

エヴァンジェリンはそう言うのだが、二人がそう思うのは仕方がない。

今の彼女の姿は、最初に出会ったときの妖艶さは全くない。それはばかりか、姿が全く異なっていた。

身長も見た目も、何から何までが十歳児並に退化していたのだ。

いや、真祖の吸血鬼は不老不死であるために、肉体の成長は有り

得ない。
つまりはどちらかが幻術を使って見せている姿、と言うことになる。

「こんな形(なり)でも私は貴様らよりも歳上だ。それを忘れるな」
「でも、確か不老不死って肉体年齢に精神も引っ張られれるんじゃなかったか……ですか？」

シキの思いがけない反撃に、エヴァンジェリンは思わずうっ、と言葉につまらせてしまった。
確かに彼女は真祖の吸血鬼、つまり不老不死でシキの何倍もの年月を生きてはいるが、十歳の時にエヴァンジェリンは真祖の吸血鬼になった。
つまり歳は何百歳といえど、精神は肉体年齢である十歳に引っ張られてしまうのだ。
そう考えてみると歳上でもあり歳下でもある彼女には、妙な感覚を覚えてしまう。

「まあ、俺よりずっと強いし、鍛えてくれるってんなら礼儀だろうが何だろうが、歳上だろうが歳下だろうが関係ェねェ」

彼はエヴァンジェリンが自分を鍛えてくれると言ったとき、内心ではかなり歓喜していた。
一人で魔法軍と戦う『力』を持ち合わせ、それを自在に扱える彼女が鍛えてくれるのだから。
もう誰も失いたくないから。新たに得た仲間を、今までの仲間も全部失いたくない。

「エヴァさん。明日から、よろしくお願いします」

「む……いきなり礼儀正しくなったな……。よかろう、だが、死ぬ覚悟をしておくことだ」

エヴァンジェリンはニヤリ、と笑みを浮かべながらシキに向かって言い放つ。

心なしか、殺気が向けられているような気さえもする。

しかし、シキは全く動じない。それどころか、同じように殺気を向けているようにさえ見える。

――死ぬ覚悟なんざとっくの昔に出来てるっつうの。

シキはエヴァンジェリンの瞳を真っ直ぐに捉えながら、一回だけ頷いた。

第四十四撃『真祖の吸血鬼との出会い。男には譲れねェもんがあるんだよ』（後

とりあえずフェイト√になったので、エヴァンジェリンとの接点を作るために登場させました。

では、感想待ってますッ！！

第四十五撃『悪魔襲来再び。テメェらの好きにはさせねェッ！！』（前書き）

今回は少し長めです。
では、どうぞッ！！

第四十五撃『悪魔襲来再び。テメェらの好きにはさせねェッ！！』

白銀の世界にて、大規模な魔法が発動される。
ただでさえ気温が低いのにも関わらず、放たれる氷結魔法は森の木々を凍結させる。
雪の水分を吸収して、自らの魔法の糧とする。その規模はおよそ半径五十メートルにも及ぶだろう。
その氷結魔法は一つの芸術品（アート）を創りだしていた。
円を描いたような天井に、それを中心に花弁を表したかのようなものだった。
一見すれば美しいかもしれないが、もしも近くに人里があったりするならば、間違いなく被害を受けるだろう。
しかし生憎と氷結魔法が放たれた場所には二人の人物しかいない。
氷の芸術品（アート）の天井を砕き、一人の人物が氷結魔法を放った張本人――エヴァンジェリンに迫る。
その人物――夜光の勢いは凄まじかった。空中で虚空瞬動を繰り返し、エヴァンジェリンとの距離をみるみるうちに縮めていく。
短く切り揃えられた赤髪が移動する際に受ける風で、まるで後ろから引っ張られるかのようになびく。
それだけ夜光の移動する速さが凄まじいのだろう。

「はっ、馬鹿正直に正面から向かってくるとはな！！　いいだろう、叩き潰してやる！！
――――リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、『魔法の射手・連弾・氷の百一矢』！！」

発動キーを詠唱した魔法の威力は、無詠唱時に比べると格段に上がる。

ましてやエヴァンジェリンの魔法ならば、いくら初級呪文とはいえただでは済まないだろう。
しかし、夜光は移動する速さを全く緩めない。いや、むしろ早くなっているかのようにさえ思える。
これの行動は別に自棄になったから、というわけではない。
この魔法の射手を無視して突っ込んだとしても、助けてくれる仲間がいるからこその動きだ。
刹那、氷の芸術品（アート）の砕け散った部分より、大量の魔力弾が放たれた。
その大量の魔力弾は一瞬のうちに夜光を追い抜き、まだ着弾しない魔法の射手に次々に着弾していく。
彼女を助けたのは狙撃手――シキ・Kアスタロト（クロカミ）だ。
彼の寸分の狂いもない狙撃を信頼しているからこそ、集中するだけ無駄な魔法の射手を無視して、本命であるエヴァンジェリンだけに集中できたのだ。
信頼しあっているからとはいえ、魔法の射手が迫ってくれば畏縮してしまうのも仕方がない。
だが、夜光は全く畏縮していない。本当に、心の底から信頼しあっているからこそ、成せることなのだろう。

「――――ッ！！」

エヴァンジェリンの魔法の射手の雨を潜り抜けた夜光は、逆手に構えていた双剣を振るう。
刃が空気を切り裂き、エヴァンジェリンの首もとに迫る。
しかし、相手は闇の福音と呼ばれるほどの強者だ。
いかに魔法の射手を回避し、接近したとはいえ、そう易々と一撃を決めさせてくれるわけがない。
体を後ろに引き、エヴァンジェリンは夜光の一閃を回避する。
渾身の一振りを回避されてしまった夜光は、エヴァンジェリンに

対して無防備な姿を晒すこととなった。
そんな隙をエヴァンジェリン程の実力者が見逃すはずがない。
エヴァンジェリンの細い指が夜光の顔面を掴み、そのまま地上に向けて急速に下降を始める。
おそらくは顔面を掴んだまま、地面に叩きつける気なのだろう。

「その程度では、真の強者には勝てないぞ、夜光？」
「――――甘いよ、エヴァさん。アタシは一人じゃない」

夜光は口元をニヤリ、とさせながら余裕たっぷりにエヴァンジェリンに向かって言い放つ。
エヴァンジェリンは夜光の言葉に、眉をしかめる。
そして、その言葉の意味を彼女はすぐに思い知らされることとなる。
不意に背後に一つの気配を感じた。
直接顔を見ずとも、魔力や氣の流れで誰だかを簡単に判別することが出来る。

（クロカミ！？　マズイ、奴は不死殺しの魔弾だ……ッ！？）

背後に居たのは遠距離から狙撃を行っていたはずのシキだ。
そう、夜光はただの囮だったのだ。本命は不死殺しの魔弾を持つシキだ。
別にここでエヴァンジェリンを殺すわけではないが、背後を取ることには成功した。
苦い顔をするエヴァンジェリンなどお構いなしに、シキはライフルの引き金を引いた。

第四十五撃

『悪魔襲来再び。テメェらの好きにはさせねェッ！！』

「エヴァさん……やり過ぎ……」
「うるさい。貴様こそ、私を殺す気で来ただろう？」
「いや、それはエヴァさんが本気で来いって……」
「ほぉ、私に口答えをするとはな……まだ地獄が見足りないか？」

エヴァンジェリンの狂気に満ちた笑みを見たシキは、盛大にため息をつきながら空を見上げる。
今日の天気は快晴。シキと夜光、エヴァンジェリンが修業を行っている間に既に日は高く昇っていた。
あまり傷がない夜光に対して、シキは着ている外套から見えている肌までがボロボロだ。
理由は簡単だ。不老不死を殺せる力を持つシキに対して、エヴァンジェリンが‘本気’を出したに過ぎない。
あのときの彼女は、保有している力の四分の一すらも出していない。
さすがに命の危機に陥れば本気を出さないわけにはいかない、ということなのだろう。

「それより、私が直々に戦いについて講義をしてやっているのだ。――――等価交換、それそうの代価は払ってもらうぞ？」
「代価って……またですか？　別に俺は構わねェんですが……」
「まあ、お前に断る権利などは最初からないのだがな。では、早速いただくぞ。――――貴様の血を」

そう、エヴァンジェリンが求めるのは竜族であるシキの血液だ。
興味本意で口にしてみたところ、その血は思いの外美味だったらしい。

竜族であるシキにはその味は分からないのだが、何百年と生きているエヴァンジェリンがそう言うのだからそうなのだろう。
くはぁ、とエヴァンジェリンは口を開き、鋭利に伸びた犬歯をシキの首に差し込んだ。

「っ……」

一瞬ではあるがチクリとした痛みが駆け抜け、顔をしかめてしまう。
この行為自体は別に何回もやられているために、既に慣れてしまっている。
しかし、今回ばかりは事情が違った。
いつもは幼女の姿、つまり本来の姿で吸血を行うのだが、今回に限っては何故か幻術を使った妖艶な姿のまま、吸血を行っている。
シキ自身はその事について何か思っているわけではない。
だが夜光は違う。想い人があたかも寝取られているようで、嫌な心地しかしない。

（なんだよ、シキの奴。あんなにべったりしやがって……）

面白くない、と言わんばかりに胡座をかいて頬杖をしながら、そんなことを思う。
そんな夜光の思考を知ってかは分からないが、エヴァンジェリンはより激しい動きでシキから吸血を行う。
彼の首に回した手を動かし、エヴァンジェリンは時折甘声を漏らす。
……これは明らかに夜光の思考を知って尚、やっているのだろう。
何故ならば、エヴァンジェリンの視線は夜光の方を向いている。
とりあえずエヴァンジェリンは夜光をからかいたいだけなのだろう。もちろんのことその効力は絶大だ。

夜光のイライラメーターが急激に溜まっていき、限界点に達しようとしたとき、エヴァンジェリンはシキの首から口を離した。

「相変わらず美味だな、貴様の血は。全く飽きが来ないな」

「訓練する度に吸われてたんじゃこっちの身がもちませんよ……。ん？　どうした、夜光」

ふと、こちらを夜光が睨んでいることに気付いたシキは、彼女にそう訊ねる。

しかし、夜光は何でもないとそっぽを向きながら答えていた。

どう見ても何でもないようには見えないのだが、鈍感であるシキはその事には気づいていない。

血を吸われ過ぎたのか、若干貧血気味になりフラフラしながらシキは立ち上がる。

手当てをするために事前に脱いでいた外套の上着を着て、とりあえず腹ごしらえをするために近くの村に行くことにした。

◇

シキ達一行がやって来たのは、名も知られてはいないだろう小さな村だった。

錆びれている、というわけではなかったが、特に栄えているわけでもなく、極々普通の村のようであった。

そんな村も、今日は幾らか飾り気があり、活気に満ちているように見えるのは決して気のせいではないだろう。

「そう言えば、今日ってクリスマスの日だっけ？」

「あぁ、そんなこともあったな。まあ、クリスマスなど下らんイベントだがな」

「何百年も生きてたら、そりゃ下らなくもなるけどさぁ……」

そんな二人の会話を聞きながら、シキはこの世界に来てから初めてのクリスマスに見入っていた。
転生してから一年と数ヵ月が経過したものの、色々なことがありクリスマスなどというイベントなど、頭からすっかり消え去っていた。
どうやら魔法世界のクリスマスも、旧世界のものと大差ないようであった。
クリスマスツリーに様々な装飾を取り付け、子供達はどんなプレゼントを貰うかなどを和気あいあいと話している。
そんな光景を見たシキは、思わず頬を綻びさせてしまう。
今までは『力』をつけることに躍起になり、回りを見る余裕がなかった。
改めて見渡してみると、確かに感慨深いものが彼の中に存在していた。

「なにぼーっとしてるのさ、シキ？」
「ん？　いや、懐かしいなって思ってさ」
「懐かしい？」

夜光が首をかしげながら復唱してくるが、シキは何でもないと一言だけ答える。
彼の懐かしいとは、前世でのクリスマスのことだ。
決して裕福とはいえない家庭であったが、それでもクリスマスはあった。
クリスマスイブにはサンタにどのようなプレゼントを貰えるか、そんなワクワクを抱えたまま起きてて、いつの間にか寝てしまう。
そして次の朝、起きたときには枕元にプレゼントがある。嬉しいことこの上ないだろう。

「きゃ――――っ！！」
『――ッ！？』

不意に聞こえてきた悲鳴にシキと夜光、それにエヴァンジェリンまでもの緩んだ気が引き締まった。
たった一つの悲鳴でこれまで切り替えが出来るのは、相当に訓練を積んだ証だろう。
さっきまでの穏やかな雰囲気から一転して、研ぎ澄まされた刃のような空気を纏っている。
振り返った三人の視界に入ったのは、子供を襲っている悪魔の姿だった。
団体で来たのかは分からないが、今視界に入っているのは、下級クラスの悪魔が三体だ。

「子供を襲ってるのか！？　やらせないよ、シ――――」

夜光が腰に携えた双剣を逆手に抜き放ち、動き出そうとしたとき、一筋の風が彼女の脇を通り抜けた。
その風は乱れることもなく、ただ真っ直ぐに悪魔の元へ向かっていく。
距離が少し離れたところで、夜光はようやくその風の正体を捉えることが出来た。
――シキだ。彼は夜光が動き出すよりもずっと早く鎌を抜き放ち、悪魔に向かって動き出していたのだ。
その目には復讐の炎が宿っている。それもそのはず。
彼の村――アイギスは大量の悪魔によって破壊され、何人もの大切な仲間を奪っていった。
許せるはずがない。とても優しく、温かかった大切な仲間を殺し、それを反省もせずに人を襲っているのだから。
シキは獣を連想させるような唸り声を上げながら、血走った目を

悪魔に向けながら鎌を振るう。
鎌の一振りを受けた悪魔は叫び声を上げるよりも早く消滅する。

「き、貴様、魔法使い――いや、あの竜族の村の生き残りか！？」
「――ッ！？　うおぁあああああッッッ！！！」

あの竜族の村の生き残り、という言葉を聞いた一瞬だけシキは隙を見せたが、あくまでも一瞬だ。
下級クラスの悪魔程度がシキの隙を突けるはずもなく、呆気なく両断され、消滅する。
あとは一体。今の彼の思考は沸き出てきた復讐の炎に支配され、周りを警戒するという初歩的なことすらも忘れている。
それが命取りだというのは彼とて承知のはずだ。
だが、それすらも考えることが出来ないほどに復讐の炎が燃え上がっている。
柄を握る手に力を込め、左斜め下から右斜め上へと鎌を一気に振り上げる。躊躇は――――ない。
悪魔は一瞬にして消え去る――が、後ろからもう二体、悪魔が迫っていた。シキは気づいていない。

「死ねぇッ！！　竜族の村の亡――――ぎゃあああああっ！？」
「貴様は闇の福音……ッ！？　ぐわぁあああッ！？」

だがその二体の悪魔がシキに怪我をさせることはなかった。
赤毛の双剣士と金髪の魔法使いがその二体の悪魔を蹴散らしたからだ。
そう、彼は一人ではないのだ。
夜光とエヴァンジェリンという、強く、信頼できる仲間がいる。
もっとも、今のシキがそのことを考えていたかといえば、彼を知る者がいたならば全員が『ノー』と答えるだろう。

今のシキの豹変ぶりは、さすがの二人でも驚かざるを得ない。
ようやく後ろにも悪魔がいたことに気付いたシキは、助けてくれた二人を見て冷静さを取り戻す。

「落ち着きなよ、シキ。どうしたんだい？　アンタらしくないよ」
「その……悪ぃな、助かった」
「別に構わないよ。助けるのなんか当たり前だろ？」

特に気にした様子もなくいう夜光に対して、シキはというと浮かない顔をしていた。
復讐は、あのとき悪魔を使役した張本人――ゲイル・ラインハルトを殺した時点で遂げたはずだった。もう、復讐は終わったと思っていた。
だが蓋を開けてみればこの様だ。空に閉じ込めていたはずの復讐の炎が燃え上がり、自分の理性すらも制御出来なくなった。
もしも自分が一人でここに立ち寄り、今と同じことをやっていたならば最低でも重傷、下手すれば死んでいたかもしれない。そんな考えがシキの頭を巡る。
とにかく、悪魔の驚異はなくなったから、シキは悪魔に襲われていた子供に声をかける。

「もう大丈夫だ。悪魔はいない」
「……」

シキはなるべく怖がらせないように笑みを見せていったのだが、子供の表情には以前に恐怖がこびりついている。
そして、子供はシキがさしのべた手を振り払うかのようにして、一目散に親の方に走り去った。
まるで、悪魔同様に畏怖する対象から逃げるかのように……。
それだけはない。先程までは活気に満ちた村だったにも関わらず、

今では完全に静まり返り、皆が家の中に隠れてしまった。
ヒソヒソと聞こえる村人の声に、エヴァンジェリンだけでなく、夜光も顔をしかめる。
善意、とまではいかなかったが、襲われていた子供を助けて、このように敵意を向けられるとは思わなかったからだ。
別に見返りを望んでいるわけではない。それでもこの反応には納得いかないものがある。

「……行こう。これ以上、ここにいるわけにはいかない」
「シキ……。だけどさ、アンタは別に何かしようってわけじゃないだろ!?　こんな仕打ち、あんまりだとは思わないのか!?」
「興味ないね。それに、俺達もこの村の人にとっては悪魔と同じ存在なんだろ」

シキのどこか寂しげな表情に、夜光はこれ以上何も言えなくなる。
助けた本人がこう言っている以上、シキを助けただけの夜光は何も言えない。
エヴァンジェリンに対しては元から反論をするつもりはなかったようで、既に歩きだしてしまっている。
二人はそんなエヴァンジェリンを追いかけるように歩きだした。

◇

夜、シキ達一行は、あの立ち寄った村が見渡すことが出来るほどに近い洞穴にて、野宿を行っていた。
あの村は他のどの村からも遠い位置にあり、今からここから行くとすればかなり時間がかかるために、今日は野宿をすることにしたのだ。
既に夕食を終え、寒くなってきたために交代で焚き火番をすることにした――――のだが、エヴァンジェリンは焚き火にはあたらず、

二人から離れた位置にて眠っていた。
どうやらあの場では何も言ってはいなかったが、怒りを覚えていたらしい。
今の焚き火番はシキだ。薄着である夜光に外套の上着を着せ、シキは事前にかっておいたローブを羽織っている。
あくまでも見映えを良くするためなので、あまり温かくないのだ。

「エヴァさん、そっちじゃ寒いですよ。焚き火にあたったらどうですか？」
「ふん、構わん。……なあ、シキ。人間は勝手だとは思わないか？」
「そうですね。だけど、それを含めて人間ってもんですから」
「……そうか」

それっきり二人の間には会話はなかった。
エヴァンジェリンはあくまでも焚き火に当たらないつもりなのか、くしゃみをしてまで離れている。
ただでさえ気温が低いのにも関わらず、雪まで降っているのだから、いくら真祖の吸血鬼とはいえ寒いものは寒いだろう。
その証拠に先程からくしゃみを立て続けにしている。
その度にシキはこちらに来るように言うのだが、エヴァンジェリンは一向に聞き入れようとしない。
見かねたシキは一回だけため息をつきながら、今羽織っているローブをエヴァンジェリンの上にかけた。

「……何をしている」
「寒いんでしょう？　なら着ていてください。俺なら大丈夫ですから」
「ふざけるな、恩を与えたつもりか？」
「そんなことは考えてませんよ。それに、子供は大切にしませんと

ね」
「私は貴様よりも何百年と歳上だぞッ！？　子供扱いするなッ！！」
「なら年寄りじゃないですか。年寄りは労りませんと」
「き、貴様……屁理屈を……」

エヴァンジェリンは額に青筋を浮かべながら、微笑するシキを睨み付ける。
確かにエヴァンジェリンは年齢からいえばかなり歳上だが、精神年齢は肉体に影響される。
つまりは十歳であるから、シキから見ればエヴァンジェリンは子供でもあり、年寄りでもあるのだ。
言っても聞かないエヴァンジェリンをローブを着せたまま寝かせ、シキは焚き火番に戻る。

（……温かい）

エヴァンジェリンは薄れゆく意識の中、シキの優しさに触れ、そう思ったのを最後に眠りについた。

◇

「……キ……ぉ……ょ……ッ！……シキって……起きろッ！！」
「ンだよ……」

次の日の朝、シキは夜光の怒鳴り声を目覚ましに、目を覚ました。
滅多なことではシキよりも早く起きない夜光が自分よりも早く起きたために、何事だろうかなどと思いながら上半身を起こす。
まだ意識が覚醒しきっていない頭を振ったあとに、異様に慌てている夜光を見る。

「どうしたんだよ、朝っぱらから」
「落ち着いてる場合じゃないよ！！　村が、あの村が火事なんだッ！！」
「……まさか、昨日の悪魔の仕業かッ！？」

目覚めきっていなかったシキの思考は、夜光の言葉により完全に覚醒する。
夜光から受け取った外套の上着を着ながら、急いで崖の端に駆け寄り、村の様子を見下ろす。
そこには夜光の言った通り、炎が揺らめく火の海と化した村になっている。また、そこからは多数の悪魔の気配が感じられる。
それだけだったのであれば、まだ良かったのだ。シキも怒りを堪えることが出来た。

（この気配……あんときの悪魔共か……ッ！！）

だが、今シキが感じている悪魔の気配は、自分の故郷とも呼べる村――アイギスを滅ぼした悪魔の気配だった。
あのときも悪魔の数はかなりのものだったが、爵位級の悪魔は五本指で数えて余るほどしか居なかった。
それでも、あのときのシキ一人ではどうにも出来なかっただろう。
今思い出すだけでも怒りが込み上がってくる。
怒りで我を忘れそうになるが、不意に握りしめていた拳に手が重ねられた。

「落ち着きなよシキ。怒りに身を任せたってどうしようもないよ。冷静に、みんなを救うんじゃないのかい？」
「……。あぁ、そうだ、そうだったな」

夜光の言葉で頭に昇っていた血が降りてきて、冷静になることが

出来た。
そうだ、昨日のように我を忘れてしまえば、いつ殺されても文句は言えない。
シキは自分に冷静になるように暗示をかけ、呼吸を整える。
冷静になるために閉じていた目をスッと見開き、武器を携える。
そして、飛び出そうとした瞬間に、さっきまで眠っていたはずのエヴァンジェリンに声をかけられた。

「貴様はなぜ、あのような仕打ちを受けて尚、人間なんかの味方をする……。私には理解できん」
「なんででしょうね。俺にも分かりません――――が、人を救える『力』があるのに、救わないなんて俺には出来ません。行くぜ、夜光」

エヴァンジェリンの言葉にそう答えたシキは、夜光と共に村へと移動を開始した。
昔の、『死の恐怖』だったころの彼を知っていれば皆が口を揃えて変わった、とでも言うだろう。
しかし、『死の恐怖』になる前から彼を知っている人が見たならば、元に戻ったと言うだろう。
そう、彼は元に戻ったのだ。
ただ単に『力』を求めるのではなく、自分にできることをやろうという彼に……。
そして、エヴァンジェリンは理解できなかった。
自分勝手で愚かな人間なんかを、なぜシキ達は助けようとするのか、と。

村に到着したシキと夜光は村の惨状を見た。
遠目から見てもかなりの被害だったにも関わらず、いざ村に入ってみると被害はさらに酷かった。

村人は石化により石にされていたり、悪魔に襲われたりと、シキにしてみればあのときの惨状の再現だった。
怒りで我を忘れそうになる。だが、そうならないように意識しながら、ライフルを抜き放つ。

「行くぜ、夜光。もうこれ以上、あいつらの好きにはさせねェ」
「当ったり前だろ。アンタがいれば、負ける気はしないよ。だから思いっきりやろう！！」

夜光の言葉にシキは一回だけ頷き、ライフルの引き金に指をかける。
それと同時に夜光は双剣を逆手に引き抜きながら、地が抉れるほどに強く蹴りだし、未だこちらの存在に気づいていない悪魔に接近する。
蒼色の魔力弾が、体勢を低くし、腕を後ろに投げ出すようにして走っている夜光を追い抜き、悪魔に被弾する。

「――ッ！？　来たの、ぐあぁっ！？」

そこでようやく悪魔は二人の存在に気づいたようだが、既に遅い。悪魔を双剣の間合いに入れた夜光が、一瞬にして数体の悪魔を切り裂き、消滅させる。
さらに言えば夜光が悪魔を切り裂いている間にも、シキの魔力弾が他の悪魔を貫き、着々と数を減らしていっている。
この村に来た悪魔の数はアイギスに比べると、その半分ほどもいない。
おそらくはこの襲撃は、誰かしらが悪魔を使役したわけではなく、悪魔自身の意思でここに来たのだろう。
なんにしても、今戦えるのはあのときと違って二人しかいない。
数が少ないことに越したことはないだろう。

（それに、ここにはあいつも来ているはずだ……）

シキが思い浮かべたのは、彼が戦った爵位級の悪魔のことだ。

あのときは使役されていたことにより、召喚主の力量に比例して弱体化していたが、今は違う。

自らの意思で出向いてきた以上、あの悪魔の実力はあのときの比ではないだろう。

そんなことを考えていると、シキに向けて複数の鋭利な槍が彼に向かって降り注いできた。

来たか、と思いながらシキは後ろに飛躍し、それを回避する。

「シキ！！　――ッ！？　くっ、こっちもか……ッ！！」

今までの攻撃の比ではない攻撃が来たために、夜光はシキの心配をするが、他人の心配をしている場合でないことを瞬時に悟る。

不意に上から威圧感を感じ、夜光はバック転の要領でその場から移動し、そのままシキの隣まで来る。

体勢を立て直し、前方に感じる威圧感に目を向ける。

そこには明らかに爵位級の悪魔と思われる者が二体、楽しげに佇んでいる。

「よぉ、また会えたな……。今回こそ、テメェをズタボロの雑巾にしてやるよ、クソが」

「おやおや、今度は他の女性ですか？　まあ、こちらの女性もなかなかに楽しめそうですね」

二体の爵位級の悪魔は、シキと夜光を見ながらそのような言葉を漏らす。

シキと夜光はその言葉に答えようとはしない。

お互いの力は同等か、自分を上回っていると思われる。そんな相手のペースにむざむざ乗るなど、愚の骨頂だ。

ライフルと双剣を握る手に力を込め、いつでも万全の動きをとれるように構える。

それを見た二体の爵位級の悪魔はつまらない、と言わんばかりにため息をつきながら口を開く。

「つまんねぇ……つまんねぇな、テメェ。そんなんじゃ殺しがいがねぇ……。まっ、逃がす気もねぇし――――爵位級、鋼槍（こうそう）のアギト、行くぜェッ！！」

「あの方ではないのは残念極まりないですが、あなたで我慢することにしましょう――――爵位級、刀剣のナハト、参ります」

二人の爵位級の悪魔――アギトとナハトはそう名乗ると、まるで消えたかのようにその場からいなくなる。

いきなりのことで二人は動揺するが、すぐに冷静さを取り戻し、感覚を研ぎ澄ませる。

そして、夜光は一対の双剣を重ねるようにして構える。

刹那、双剣を構えた場所にて金属同士を打ち付けた独自の音が鳴り響き、夜光の腕に多大な負荷がかかる。

別方向のベクトル同士が拮抗し、刃から火花を散らす。

「おや？　今のを防ぐとは以外ですね。ふふ……貴女とでも殺（あい）しあえそうですね」

「悪いね、アタシにはもう想い人がいるんだよッ！！」

夜光はナハトの剣を無理矢理弾き返し、そのまま連撃に持ち込む。

ナハトの持つ剣は形こそ歪ではあるが、普通の西洋刀よりも長い長剣だ。

長さは短いものの、小業がきき、連続的な攻撃が可能な双剣なら

ば、ナハトの長剣とは相性がいいだろう。

「シキ、こいつの相手はアタシに任せな！！　アンタはそっちを頼むよ！！」

夜光はそれだけを告げると、シキの返答も待たずにナハトを連れて、その場から離れていく。

同じ場所にいれば連携をとられる可能性もあるし、各個撃破した方が効率が良いと考えての行動だろう。

一緒にいればこちらも連携をとれるが、二人の爵位級の悪魔の連携性は未知数だ。

ならば、実力が分かる各個撃破の方が勝率があがる。

そしてシキは、その場から一気に飛び上がり、未だに姿の見えないアギトの姿を探す。

攻撃こしてこないものの、動きがないのは何か裏があるのではないかと思ってしまう。

以前に受けた右肩の傷が痛む。前の戦いではアギトに右肩を貫かれた。

傷は完治しているが、あのときの痛みが感覚として残っているのだろう。

（どこだ……。以前のあいつなら隠れるような真似なんてするはずがねェ……）

そう、シキの思っている通りアギトは残虐ではあるが、真っ向からの戦いを望んでいた。

敵を完膚なきまでに叩き潰し、逃げたところを後ろからぶっすりと突き刺し、絶望する姿を楽しむ、という性格だったはずだ。

だからこそ、隠れていることに裏を感じられずにはいられないのだ。

雲で太陽が隠れて、辺りが暗くなる。未だにアギトの姿は見えない。

だが、突然にシキの右肩が何かに貫かれた。

「テメェは全然成長してねぇな……。まあ、いい。とりあえず、邪魔だからとっとと死んでくれや」

「上等だ……。殺れるもんなら、殺ってみろッ！！」

今ここに、シキ・Kアスタロト（クロカミ）の再戦劇が始まる。

第四十五撃『悪魔襲来再び。テメェらの好きにはさせねぇッ！！』（後書き）

私の６月２０日の活動報告にアンケートと報告がありますので、見れる方は見ておいてください。
次回で悪魔の話を終らして、過去編の大詰めに入ります。
では感想待ってますッ！！

第四十六撃『狙撃手の成長。もう、お前には負けない』（前書き）

今回にて悪魔編終了です。
では、どうぞッ！！

第四十六撃『狙撃手の成長。もう、お前には負けない』

悪魔――ナハトの長剣が右上から左下に向けて、大きく振り抜かれる。
長剣が振るわれるにつれて空気を切る音がし、その一撃の強さを物語っている。
だが、ただ単に振るわれた一撃に、歴戦の戦士である彼女――夜光には当たらない。
体を半身に構えることでその一閃を回避し、地にスレスレで止まった長剣の刃引きのされている方を、穿いている下駄で踏みつける。
長剣の刀身は踏みつけられた衝撃で地面にめり込む。
それに対して、ナハトは面白いと言わんばかりの表情になる。

「――――ッ！！」

夜光はそんなナハトの態度にムッ、としながら逆手に構えた双剣の片方を、首元目掛けて一気に振り抜く。
しかし、ナハトも爵位の階級を与えられた悪魔だ。それしきの攻撃を避けられないはずかない。
掴んでいた柄を離して、大きく後ろへと飛躍して夜光との距離を開ける。
もちろんのこと体勢を整わせる気はさらさらないために、夜光はナハトが開けた距離を縮めるべく、足の裏に溜めた氣を爆発的に解放する。
夜光は魔力や氣を循環させるのは苦手だが、瞬動だけは使える。
見る見るうちに縮まっていく二人の距離。
武器を持っている夜光に対して、ナハトは武器を失ってしまっている。状況は圧倒的に夜光が有利だ。

だが、ナハトの表情には全くの焦りがない。浮かんでいるのは、まるで好きな人を見るかのような眼差しだけだ。

そんなナハトを気味悪く思いながら、ナハトを射程距離内に入れた夜光が双剣を振り抜こうとする。

しかし、彼女が双剣を振り抜こうとする直前、ナハトの右腕が何かを引き寄せるように動かされた。

（何かの合図か？　周りには他の魔族はいない……。はったり……？　――ッ！？　違う、これは……ッ！！）

夜光はこれを何かの合図かと思ったようだが、その考えを即座に切り捨てる。

いや、切り捨てざるを得なかった。

何故ならば、後ろから物凄い勢いで先程地面にめり込ませたはずの西洋剣が、自分に向かって迫ってきていたからだ。

このままナハトを切り裂けば、夜光の勝ちは確定するだろう。

だが、それと同時に夜光の胸は西洋剣に切り裂かれ、死に至る可能性がある。

（相討ちなんて御免だよッ！！　チャンスはまだある。だから今は――――）

夜光は瞬動の勢いを弱め、そのままバック宙の要領でその場から一気に飛び上がり、距離をとる。

それと同時に夜光の頭すれすれ、動かなければ胸があった場所を西洋剣が通り過ぎる。

それを見届け、夜光は体勢を建て直そうとした――――だが、既にナハトは着地点に接近してきている。

手に握られた西洋剣が、真上から振り下ろされる。

体勢はまだ整えきれてはいない。回避の行動を起こすには、あと

数秒は要するはずだ。
今の夜光にそのような余裕はない。よって夜光は片膝をつき、双剣を重ね、西洋剣の一撃を受け止める。

（ぐ……っ！？　お、重い……っ！？　こいつ、見かけによらず一撃の重さが尋常じゃないね……っ）

受け止めた衝撃で地面が歪み、腕に多大な負荷がかかる。
ナハトの見かけは魔族には見えない、とても人間に似たような体型をしている。
いや、人間にしてもここまでスレンダーで華奢な者はそうそうにはいない。
それにも関わらず、ナハトの一撃はまるで巨大な鉄球で上から殴り付けられたような強さがある。
一瞬でも気を抜いてしまえば、その瞬間に腕にかかっている負荷が体全体に降りかかり、とてもではないが耐えきれはしない。
双剣の刃から火花が散り、ガリガリと刃が削れるような音が耳に入る。
彼女は苦痛に満ちた表情をし、ほとんど動いていないにも関わらず、額からは汗が流れ落ちる。
腕からは細く鍛え上げられた夜光の筋肉が浮き出て、相当に歯を食い縛っている。
このままこの体勢が続いてしまえば、夜光が潰されてしまうのは目に見えている。

（悪いけど、アタシは負ける気はないよ……。まだ、アイツに勝ってないんだッ！！）

彼女が思い浮かべるのは一人の男の後ろ姿だ。
まだ自分はアイツに勝ってない。だから、こんな奴に負けるわけ

にはいかない。
そう思えば思うほどに夜光の内側から力が沸き出てきて、ナハトの西洋剣を押し返す。
ナハトの重圧を押し返し、夜光は立ち上がり、西洋剣を完全に弾き返す。

（こっからは、アタシの番だッ！！）

今の攻防のやり取りで、夜光はナハトの戦い方を大方理解することが出来た。
ナハトのスタイルは持ち前の腕力で敵を捻り潰し、平伏させる見た目には合わないほどのパワースタイルだ。
ならば一撃一撃の威力は大きいが、それを見切りさえすれば、スピードスタイルの夜光に分がある。
威力こそ低いものの、小さなダメージも一点を集中して狙えば大きなダメージになる。それを狙うしかない。
目的が決まってしまえば、あとは行動するのみ。
未だに西洋剣を構えきれないでいるナハトの懐に一瞬で潜り込み、連続して双剣を振るう。
相手に休む暇など与えない、攻撃する暇すらも与えないとばかりの連撃は、目にも留まらない早さで繰り返される。
だが、俄然とナハトの表情には焦りと言うものがない。
今の夜光の連撃は、かなりの上級者でも捌ききるのは難しいだろう。
現にナハトも全てを捌ききれているわけではなく、既に何撃もその身に刻まれている。

（なんで、こいつはこんな愉しそうなんだ……ッ！？）

なのにナハトの表情には焦りというものがないのだ。代わりにあ

るのは愉しいという表情。
　刃を交わさずとも、顔を見るだけでナハトが楽しんでいるのが手にとるように分かる。
　これは気味悪いを通り越して、何かあるのではないかと警戒してしまう。
　その警戒が僅かな隙を与えてしまったのだろう。
　整いきれていなかったナハトの体勢が完全に整い、夜光に反撃を繰り出す。
　思いがけない一撃ではなかったものの、何回も受け止められるような一撃ではない。
　ナハトの攻撃に対する行動の選択肢に『受け止める』、なんていう選択肢はない。『避ける』か、『出させない』しかないのだ。
　既に反撃をさせてしまった以上、彼女には避けるの選択肢しか残ってはいない。
　連撃をやめ、夜光は後ろに大きく飛躍する。息を整え、ナハトを見据える。

「ふふふっ……愉しい、愉しいですね、貴女と殺(あい)しあうのは……。前に戦ったあの女性とは違うタイプではありますが……。あぁ、貴女は美しい……」
「アンタ、気味が悪いね。戦闘狂(バトルマニア)かい？　残念だけど、アタシはアンタに構ってるほど暇じゃないよ――――こっからは、本気で行くよ」

　かしゃん、と浅く握りしめていた双剣の柄を、強く握りしめる音が響く。
　それとほぼ同時に夜光から放たれていた威圧感が、小さな少女のものとは思えないほどに膨れ上がる。
　大きな、そう、断崖絶壁を目の当たりにしたかのような大きな威圧感に、さすがのナハトも後ずさる。

ナハトは勘違いしていたのだ。さっきまでの夜光が本気だと思っていた。
実際は違う。さっきまでの夜光の実力はほんの少しの力でしかない。
かくいう夜光も、今の自分の実力がここまで大きくなっているとは思わなかった。
エヴァンジェリンや他の皆との戦いや修業が、夜光を知らず知らずのうちに強くしていたのだ。

「良い……良いですね！！　愛を……感じますッ！！」

ナハトは夜光に勝てないと悟ったのか、武器を地面に突き刺し、彼女を受け入れるように両手を広げながら待つ。
それを気に食わないと思いながら、ナハトに迫っていく。
だが、夜光は疑問に思っていた。この強さは、本当に修業したから手に入れられたものなのか、と。
そんな考えを振り払い、双剣を振り上げる。

「さっきも言ったけど、アンタなんか――――眼中にはないよッ！！」

刹那、夜光の双剣がナハトの胸を貫く。
バターを切るよりも容易く、元からそこには穴があったかのように、すんなりと突き刺さる。
本来ならば痛みがあるはずだ。だが、ナハトは痛みよりも快感があるといったような表情をしている。
相も変わらず気味悪さが抜けないながらも、既に倒した相手になど興味はない。
双剣を引き抜き、腰に収めたあとその場をあとにした。

「いつも私は……女性に縁がない……」

ナハトは自嘲気味にそう呟き、姿を消した。

◇

鋼槍の爵位・アギトと戦っている狙撃手――シキは困惑せずにはいられなかった。

別にアギトが摩訶不思議な技を使ったわけでもなく、悪魔特有の何かを使ったわけでもない。

ならば、いったい何に困惑しているというのだろうか？

答えは簡単だ。アギトの力量と自らの力量についてだ。

一番最初の一手こそ先手をとられ、肩に一撃を喰らってしまったものの、それからの戦いはまさに圧倒的だった。

そう、彼も知らず知らずのうちに強くなっていたのだ。

（なんだ……？　手加減してんのか？　いや、あいつは手加減するような奴じゃねェ……）

だが、シキはそのことに全く気づいていない。

いくらか強くなった、という自負はある。それでも、自分が思っている以上に強くなっていることに気づいてはいない。

もちろんアイギスを襲来して実際に戦い、初手も決めたアギトもその事に最初は気づいていなかった。

しかし、今は違う。シキの実力を勝手に決めつけ、慢心していたとアギトは後悔していた。

（ちっ、認めるのは癪だが、あいつは俺よりも強ェ……。クソが、嘗めやがっ――――チィッ！！）

建物の物陰に隠れていたアギトは思考を途中で中断し、建物に挟まれている壁を連続で蹴りだし、その場から離脱する。
そうしなければ、アギトがいた場所に迫ってきていた蒼色の魔力弾に貫かれていたからだ。
今のシキの実力は完全に自分を上回っている。
アギトはその事実を認めながらも、認められないという矛盾に囚われながら、屋上に出る。
しかし、アギトが出てきた場所には拳を握りしめ、犬歯を剥き出しにしているシキがいた。
回避は間に合わない。だからといって防御も間に合わない。すなわち……、

「これは、テメェが殺した村のみんなの分、だッ！！」
「――――ご……が、ぁ……っ！？」

シキの氣を十分に溜め込んだ拳が、アギトの顔面に突き刺さる。
狙撃手である彼がわざわざ拳で反撃してきたのは、あえての行動だろう。
確かに遠距離からの狙撃は自分の手を汚さずに、敵をどうにかすることが出来る。
でも、それではダメなのだ。狙撃に頼るのではなく、自分の手で決着をつけたかった。
シキの拳を受けたアギトはまるでよくしならせた弓から矢が放たれるように、物凄い勢いで空中から地面に向かって叩き落とされる。
人間と悪魔の体の構造が同じなのかは分からないが、顔面に拳を受けたアギトの脳は揺れ、意識を狂わせる。
受け身もとれないまま、アギトは地面に叩きつけられる。
既に揺さぶられていたアギトの意識が、叩き付けられたことにより改めて覚醒する。

（クソ、クソクソクソクソクソクソクソォッッッ！！！　この俺がなんであのクソに平伏されてんだッッッ！！！）

意識が覚醒したアギトは一番最初にそう思う。

自分よりも格下の相手に地に平伏されることほど、アギトにとって悔しいことはない。

なんにしてもアギトは自分の実力に誇りを持っていたが、今こうしてズタボロにされてしまった。

その事が、アギトのプライドを捨てさせる。

不意にアギトの視界に一人の子供の姿が入る。アギトはニヤリとした。

一方、アギトに圧倒的な実力の差を見せつけているシキは、屋上に着地したあとに息をはく。

乱れた息を整わせながら、残っている魔力の量とライフルの調子を確かめる。

いくらアギトよりも実力が上回っているとはいえ、慢心して勝てるほどに甘い相手ではない。

なので短期決戦を挑むためにハイペースで動いていたのだが、それをわずかに後悔していた。

（魔力の消費が早い……、さすがに飛ばしすぎたか……。動きは大雑把だし、このままじゃダメだな）

魔力弾を撃てばその分だけ魔力は消費されるし、ハイペースで動いてる分動きは大雑把になる。

その点は反省しなければならない点である。

だからとはいえ、ここまで来てこのペースを崩すわけにもいかないと判断したシキは、アギトが落ちたらしき地点にに接近する。

だが、そこでシキは動きを止めてしまう、否、止まらざるを得な

かったのだ。

「動くな。それ以上手を出したら……分かってんだろうなァ？」

「テメェ……」

何故ならば、アギトが近くにいた子供を人質にとっていたからだ。

このまま動いたりしたならば、本当にアギトは子供を殺してしまうだろう。

そうした場合は人質がいなくなり、一気にアギトを倒すことは可能になるが、勝ったとしても後悔が残ってしまうばかりだろう。

シキは歯軋りをしながら、子供を人質にとっているアギトを睨み付ける。

「武器を捨てろ。分かってんだろ？　捨てねぇとどうなるか……」

「……」

ニヤリと笑いながらいうアギトを殺気混じりで睨み付けながら、手に持っているライフルをその場に捨てる。

それだけじゃない。背中に携えている大鎌も、捨て、隠し持っていた双剣すらも捨てる。

それを見たアギトは手招きをして、周りを徘徊していた悪魔を呼び寄せる。

「ずいぶんと武器を隠し持ってたな――――――殺れ」

次の瞬間、武器もなにも持っていないシキの鳩尾に悪魔の巨大な右ストレートが叩き込まれる。

完全に無防備だったシキはモロにそれを受けて、肺から空気が強制的に押し出される。

それだけではない。たったそれだけで、胃の奥から鉄の味がする

ナニかが込み上げてくる。
防御をしていない一撃で、ここまでのダメージを受けるのだから、これを立て続けに受けてしまえばとてもじゃないが体が保たないだろう。
くの字に折れ曲がり、苦痛の声を漏らすシキの背中に、他の悪魔の拳が突き刺さる。
別方向のベクトルの拳を受けたシキの体が悲鳴をあげる。
一撃目はなんとか耐えきれたものの、それはギリギリでの話だ。
完全に許容量を超えたダメージは、耐えるという枠組みを破壊する。

「――――ご……あ、ぁ……っ……！？」

体重を支えきれなくなった脚は折れ曲がり、口からは赤い鮮血が飛び散る。
倒れ込むも息を整える時間すらも、今の彼には与えられない。
地にうつ伏せにひれ伏したシキの腹を思いっきり蹴りあげ、宙に浮かばせる。
さらに蹴りあげ、膝と肘でシキを挟むように振り上げる。
もはやうめき声をあげることすら出来ない。なんとか意識を保っているものの、まともに意識を保っているとはいえない。

「シキッ！？　アンタら、シキになにやってるんだいッ！！」

そう叫んだのはナハトとの戦いで勝利をおさめた夜光だ。
双剣を既に構えており、表情は怒りにより歪んでしまっている。
犬歯をむき出しに、せっかくの整っている顔が台無しになっているが、本人には気にした様子はない。

「アァ？　はん、ナハトの野郎は負けたのか……。下らねぇな、女を恋しがってっから負けんだよ。

それから、武器は捨てろ。ガキを殺されたくなかったからな」
「卑怯な……」
アギトは何とでもいえ、と言いながら夜光に武器を捨てるように促す。
夜光は苦しげな表情を浮かべながら、手に持っている双剣を手放す。カラン、と双剣を落とした音が響き渡る。
既にシキは夜光がこの場に来ていることすらも判別できないほどに、意識はなくなってしまっている。
そんなシキを見て夜光は悔しい思いを押し込める。
そして、アギトの『殺れ』という無情な声が嫌によく響いた。
悪魔の拳が夜光に迫る。だが、決して目を瞑るような真似はしない。
例えどれだけ傷付いても、心さえ折れなければ負けることはないのだから。

そして、何かを殴るような音が夜光の耳に入る。だが、その音に対して痛みが来ることはなかった。
当たり前だ。先程までに瀕死状態だったシキが、夜光を庇うように悪魔の拳を受け止めていたのだから。
もはやシキの意識はないに等しい。だからこれは、無意識にやったことなのだろう。
仲間を傷付けさせない、殺させないというシキの存在意義が働き、体を動かさせたのだ。
これにはさすがのアギトや他の悪魔も驚かざるを得ない。

「――――手は出させねェ」

ボロボロになりながらも、意識を改めて覚醒させる。
悪魔は一切の手加減をしていないだろう。それでもシキは、悪魔

の拳を軽々と受け止めている。
シキの眼孔は真っ直ぐにアギトを捉える。まるで獣のような眼孔にアギトは思わず後ずさる。

「俺の仲間には手を出させねェェエエエエエエッ！！」

そう叫んだシキの動きは常軌を逸していた。
一瞬にして拳を受け止めている悪魔を消滅させ、夜光が落とした双剣を拾い上げる。
そこからはまさに独壇場だ。周りに群がる悪魔の群れを有無を言わせる前に切り裂き、消滅させる。
完全に気を抜いていたアギト達には何が起こったかなど、分かるわけがなかった。
シキの動きは留まらない。一人、また一人と悪魔を消滅させていき、残るはアギト一人となった。

「テメェ……死にてぇの――――」

アギトは叫ぼうとしたのだが、その言葉は唐突に切れる。
シキの双剣は、まだアギトを切り裂いたわけではない。かくいうシキも、驚きのあまりに立ち止まってしまっている。
もちろん武器を持たない夜光がアギトを黙らせるの不可能だ。
ならばいったい誰がアギトを黙らせたのか。答えは簡単だ。
アギトの胸を貫いている光の刃――『断罪の剣』の魔法を使える人物に他ならない。

「死ぬのは貴様だ、魔族風情が意気がるな」
「闇の……福音、か……」

闇の福音――エヴァンジェリンが、『断罪の剣』を使用してアギ

トを貫いたのだ。
　完全なる不意打ちだったが、シキに手こずるようではエヴァンジェリンに勝つ確率は皆無だ。
　まるで糸の切れた人形のようにアギトはその場に倒れ込み、空気に溶けるように消滅していく。
　そして、数秒後にはアギトの姿はどこにもなくなっていた。

「エヴァ、さん。助かりまし、た……」
「――ッ！？　シキ！？」

　全ての悪魔が消滅して、気が抜けてしまったのか、シキも同じように糸の切れた人形のように倒れ込む。
　夜光の悲痛な叫びを最後に、シキの意識は闇に沈んだ。

◇

「……ぁん？　夜光？　何やってんだよ、人の手ェ握りしめやがって」

　シキが目を覚まして一番最初に目にしたのは、自分の手を握りしめている夜光の姿だった。
　周りを見渡してみれば、自分が寝かされていたのは、完全には焼け落ちなかった民家のベッドだった。
　何があったかは分からないが、夜光の目元が赤くなっている。
　それ以外には少ししか怪我はしていなかったようで、大した治療はされていない。

「おわっ！？　し、ししししシキ！？　いつから起きてたんだよ！！」
「たった今だよ、今。痛てて……、ヒデェ怪我だな」

痛む体に鞭を打ちながら上半身だけを起こし、改めて自分の体の状態を見たシキが呟いた。
彼の体にはかなりの包帯が巻かれ、傷の手当てがなされていた。
点滴もされており、どうやらかなりの怪我だったようだ。　そして、壁に体重を預けていたエヴァンジェリンがシキに声をかけてきた。

「クロカミ。なぜ貴様はそんなになるまでに戦い、人間なんかを助けるんだ。人間なんか助ける価値もないだろう」
「……それは、どうでしょうね」
「なに？」

シキの言葉に眉をしかめる。
すると、今シキが寝ている部屋の扉から、ガチャリ、という音が聞こえた。
全員の視線がそちらに向き、そこに立っていた一人の子供が若干ビクッ、としながらこちらに歩み寄ってくる。
驚いてしまうのも仕方がないだろう。
この場にいるのはシキや夜光はともかく、闇の福音として恐れられるエヴァンジェリンだ。
その子供は、シキのところにまで歩み寄ってくると、後ろに組んでいた手を前に出してくる。

「僕たちを助けてくれてありがとうございます。あの、――――メリー……クリスマス」
「あぁ、メリークリスマス」

子供の言葉にシキは笑みを見せながら、そう答える。
するとぞろぞろと部屋の中にシキ達に助けられた村人達が集まっ

てくる。
ついさっきまではあんなに魔法使いを嫌っていたというのに、ここまで変わるとはな、などとエヴァンジェリンは呟く。
「――――だが、想いは伝わる、と言うことか」
エヴァンジェリンは楽しそうにしているシキや夜光を見ながら呟く。
悪の魔法使いなどと称しているが、実際は優しい少女なのだと、シキは改めて知ることとなった。

◇

とある遺跡のもっとも深い場所にて、一人の人物が頭を抑えながら呻いていた。
まるで何かに耐えるかのように体を震えさせ、息を荒くしている。
周りには結界が何重にも張られており、自らにも何かの術式を刻み込んでいる。
体に刻み込まれた術式は、心臓が鼓動するにつれて点滅する。
「もう時間がないんだ……。早く強くなれ、クロカミ」
その人物は一人の少年の名を呟く。
彼が自分を助けてくれる人物だと信じて、その者は耐える。
そして、その者はもう一度呟く――もう、時間がないんだ、と……。

第四十六撃『狙撃手の成長。もう、お前には負けない』（後書き）

次回からこの章の最後の話に入ります。
ここでフィオナと夜光の秘密が明らかに。
そして、シキの物語の始まり……。
では、感想待ってますッ！！

第四十七撃『フィオナの秘密。そうだ、遺跡にいこう！！』（前書き）

過去編もあと三話ッ！！
では、どうぞッ！！

第四十七撃『フィオナの秘密。そうだ、遺跡にいこう！！』

「あつい……、あついあついあついぞ、クロカミ……。どうにかしろ」
「俺にどうしろってんですか、エヴァさん……」
「涼しくしろ、太陽を壊してこい、今すぐに……」
「完全にグロッキーだね。まあ、暑いのは確かだしね」

夜光の言葉にシキはそうだな、と答えるしかない。
あれから数週間が過ぎ、シキ達は各地を放浪して回っていた。
もちろんただ放浪するわけではなく、自らを鍛え上げるための旅だ。
現在シキ達がいる場所は、魔法世界でも屈指の暑さの名所で、季節的には冬なのにも関わらず、温度は軽く三十度を越えている。
年中薄着の夜光に対して、シキは保温性バッチリの、しかも日光を集めやすい黒色の外套。
エヴァンジェリンは夜光と衣服の薄さは変わらないが、暑さが格別に苦手なのか、シキに背負われる形でぐったりとしている。

「くっついてて暑くないんですか？」
「ん……暑いに決まっている。だが、歩きたくもない」
「そうですか……。もう少しでこの地域は抜けますし、そしたら嫌でも寒くなりますからね？」
「それはそれで嫌だな……」

なんて我が儘なんだろうか、などとシキは考えながら額から流れ出る汗を拭う。
エヴァンジェリン程ではないとはいえ、シキもなかなかにグロッ

キーな状態にあるのは確かだ。現に足もふらついている。
ざっ、ざっ、と砂を踏みしめる二つの足音だけが、この三人のBGMだ。
汗水滴ながら歩くこと数分、シキと夜光はため息をつきながら立ち止まることとなる。

「なんだかなぁ……。こうもタイミングよく現れると悪意しか感じねェんだけど……」
「うん、同感……。こいつら、無駄だってことを学習してないんじゃない？」
「なるほどねぇ……。だからこうもぞろぞろ出てくるわけね……――自称・立派な魔法使いさんは」

シキは鼻で笑いながら、自分達の目の前に立ちふさがる魔法使いを見ながらいう。
エヴァンジェリンと旅をするようになってからというもの、『立派な魔法使い』や『賞金稼ぎ』といった類いに襲われることが多くなった。
それはエヴァンジェリンが六百万$の賞金首だからだろうが、気が滅入っているときに来られるのは精神的に堪える。
さらにいえばシキは魔法使い、特に自らの正義を掲げる魔法使いが大嫌いだった。

「夜光、エヴァさんを頼む。五分で終わらせる」
「了～解。ヘマするんじゃないよ？」
「俺がンなことするわけねェだろ。魔法使いごときによ」

腰に携えたライフルを抜き放ち、肩に軽く乗せながら魔法使いに向き直る。
言葉は交わさない。既に、魔法使いは詰みの段階に追いやってい

るから。

第四十七撃

『フィオナの秘密。そうだ、遺跡にいこう！！』

バタ、バタ、と魔法使いは糸の切れた人形のように力なく倒れ込んだ。

あれから五分。シキは何人もいた魔法使いを、その場から動くことなく蹴散らしていた。

魔法だけに頼る魔法使いなど、万物を殺せるシキの前ではなんの意味もなさない。むしろ五分は保った方だとさえ言える。

「お疲れさま、どうだった？　立派な魔法使いさん達の実力は？」

「ダメダメだな、全然なってねェ。これならまだ賞金稼ぎの方が戦りごたえがある」

夜光の『立派な』を強調した言葉に、シキも鼻で笑いながら答える。

倒れ込んだ魔法使いは死んではいない。ただ、動けない程度には痛め付けてある。

もちろん倒れ込んだからといって意識がなくなるわけじゃないから、この二人の会話もしっかり聞こえていることになる。

激昂したいところではあるが、実力的に差がありすぎるし、第一に四肢を魔力弾で貫かれているために動けない。

動けたとしてもシキに夜光、それにエヴァンジェリンまでもがいるのだから、結果は悪い方にしか進まないだろう。

「あー……暑い。クロカミ、さっさと歩けー……」

「へいへい、少しは労いの言葉が欲しいもんだ」

「よくやったな……、これでいいか？」

「投げやりな労いの言葉をありがとうございます、エヴァさん」

口元をひくつかせながら、改めて背負い直したエヴァンジェリンに言う。

実際はこの程度のことで誉めてもらえるとは思ってはいないが、暑さゆえに言ってしまったに過ぎない。

それに、ようやく視界の先にこの砂漠を抜けた近くの街を納めることが出来た。

歩いたとしてもあと一時間もかからないだろう。なんにしても、あと一時間程度の辛抱だ。

「ところでシキ、夜光。お前らはどこでフィオナ殿と会ったんだ？」

「あン？　俺は遺跡で死にそうになったときに助けてもらった。そういやまだ礼言ってなかったな……」

エヴァンジェリンの言葉に、シキはフィオナと初めて出会ったときのことを思い出していた。

あのときは遺跡の奥にいた古龍龍木と戦い、死にそうになったときに助けてもらった。

実際のところは意識がなくなり、次に目を覚ましたときにフィオナと出会ったから、助けられたのはフィオナから聞いただけに過ぎない。

だからといって、フィオナが嘘をついているとは思えない。それは、短い期間だが一緒に旅したシキが言えることだ。

「アタシはいつの間にか先生と一緒にいたよ。ホントいつの間にかって感じでさ」

「へー、でもさフィオナって謎が多いと思わねェか？」

「うんうん！！　先生って銃器使いって以外はアタシも知らないんだ。なんか秘密のある女ってカッコいいよね？」

「いや、別に……。まあ、フィオナにはいろいろと教わったしな」

和気あいあいとフィオナのことをシキと夜光は話すが、結局は二人ともフィオナのことを何一つ知らないと同じなのだ。

かくいうエヴァンジェリンもフィオナのことは伝承で聞いただけで、実際のことは何一つ知らない。

むしろ実在していたことに驚くべきなのかもしれない。

（しかし……あれほどの実力を持ちながら、何故最近になって現れた……？）

そう、六百年近く生きているエヴァンジェリンでさえも、フィオナの噂を聞くようになったのは十七年前ほどだ。

フィオナが伝承通り何千年も生き、あの実力を持っているならば、今まで知られていなかったことの方がおかしい。

考えても埒が明かないが、あれほどの時を生きている彼女が目的もなしに出てくるとは考えづらい。

……となると、フィオナの目的は夜光かシキということになる。

現段階では夜光がフィオナの行動の鍵を握っている可能性が一番高い。

（まっ、私が気にすることではないか。今更フィオナ殿がなにかをするとは考えにくいしな……）

暑い中、考えるのが面倒になったエヴァンジェリンは適当に結論付け、考えることを放棄する。

今の彼女の心中は早く涼しい場所に行きたい、の一言に限るだろう。

エヴァンジェリンは朦朧とする意識の中で、和気あいあいと話し込んでいるシキと夜光に早く歩くように催促した。

◇

「フィオナのこと、ですか？　なんでいきなり……」
「いや、お前らも知っておいて損はないと思ってな」

あの灼熱砂漠を抜けたエヴァンジェリン一行は、冬の寒さと砂漠の暑さを足して二で割ったようなちょうどよい気候の喫茶店にて、フィオナのことについて話していた。
特に話す意味はなかったのだが、何故かエヴァンジェリンは話そうと思ってしまった。
まるで誰かに意識を洗脳されてしまったかのように突然だ……ただ、エヴァンジェリンに限ってそんなことはないが。

「私が知っているのはフィオナ殿の伝承だ。遥か昔、三千年以上も前の伝承だがな」
「……三千年！？　ちょ、先生って何歳！？」
「三千年前から生きてんだったら、軽く三千歳は越えてるな計算になるな……」

ババァじゃねェか……、というシキのツッコミをスルーしてしまうほどに、夜光は驚いていた。
普通に考えても三千年も生きている人間など、存在しえるはずがない。
真祖の吸血鬼で六百年近くも生きているエヴァンジェリンが、可愛く見えてしまいそうな年月だ。
そもそもそれだけの月日を生きているならば、もはや人間の枠組みには入りきらない、否、入れないだろう。

「歳の話はひとまずどうでもいい。次は伝承だな。

私が知っているのは、遥か昔の今の魔法を現代魔法とするならば、旧式魔法とやらがあった時代のことだ。
確か神を相手に生き延びたとか、幾万の兵士を軽くあしらったとか、数を挙げればキリがない」

事前に頼んでいた紅茶を口にしながら、エヴァンジェリンは昔の伝承を思い出しながら二人に話す。
冷静さを保っているエヴァンジェリンに対して、シキや夜光はもはやどう反応したら良いかわからず、口をポカンと開けてしまっている。
今でこそ冷静でいられるが、本物の生ける伝説を目の前にしたときの冷静さを失う感覚というのは、は嫌というほど分かる。

「とにかく、だ。貴様らはそのような人物と旅をしたり、師事したりしてるのだ。少しは有り難みを感じた方が良いぞ？」

エヴァンジェリンの言葉に、いち早く冷静さを取り戻した夜光は頷くしかなかった。
いつの間にかだったとはいえ、そのような人物に対して堂々と弟子宣言をしていた自分が恥ずかしく思えてくるほどだ。
チラッ、と夜光は隣に座っているシキに視線を向ける。
自分と同じように恥ずかしく思っているのを期待していたのだが、その期待は簡単に裏切られた。
どうやら冷静さを取り戻したのはシキの方が早かったらしいのだが、何やら難しい顔をして考え込んでいた。

（……そんなスゲェ人の伝承をエヴァさんは知っていた。つまりは六百年前にはその伝承を記した書物があった、ということか……。
じゃあどうして、今はそれがないんだ……？）

シキは見掛けによらず、戦いや修業の参考にするために様々な書物に手をつけている。
見知らぬ街や村に来たとしても、必ず書物が並べられている場所には立ち寄っている。
エヴァンジェリンの話によれば、フィオナの活躍は伝説、つまりは戦記なのだからシキが見逃すはずかない。
ましてやそれだけの伝説を残していたのだ。真っ先に目にしない方がおかしい。
だが実際のところは、そのような書物は一度たりとも目にしたことはない。
ましてや三千年前の戦記など、フィオナ関係以外でも見たことがなかった。

「シキ？　どうしたの、難しい顔しちゃって」
「いや、何でもねェ……って顔近ッ！？」
「気付かなすぎだよ、シキ。そんなんで何でもないって言ってもさ、説得力ないよ？」

夜光はシキに近づけていた顔を引きながら、呆れたような口振りでシキにいう。
今までの彼であったならば、ぼーっとしてたとしても夜光の接近に気付けたはずだ。
しかし今は全く気づくことが出来ず、しかも気づいたときには変な声を出してしまっている。
普段の彼を知る者が見たならば、間違いなく何かあったのだと思ってしまうのも、仕方がないといえる。
それでもシキは夜光に何でもないと答える。

「ふーん……。まっ、アンタが大丈夫っていうなら良いんだけどさ。でも、さ、アタシはアンタの、その……そう！！　仲間なんだから

さ！！　ち、ちゃんと相談しなよ……？」
「お、おう、分かった。なんかあったら相談するよ。な、仲間……だからな」

お互いに何かが恥ずかしいのか、頬を僅かに紅潮させ、目を逸らしながら言い合う。
今になってから夜光はあんなに顔を近づけたことに、シキは夜光から仲間という言葉を聞いて、いつも恥ずかしげもなく大切な仲間だ、とか言っていることが恥ずかしくなったのだ。
本当に今さらか、と言いたくなるようなことだが、忍冬（すいかずら）の一件があってから二人は過剰にお互いを意識するようになってしまった。
今も夜光の胸元で輝く忍冬（すいかずら）の首飾り。
これが二人の絆を分かりやすく表している。
ただ、端から見ればそれはイチャイチャしているようにしか見えないわけで、それを見ているエヴァンジェリンもたまったものではない。

「貴様ら……こうも公共の場でいちゃつくとは、相当に見せつけたいと見えるが？」
「イ、イチャイチャ！？　べ、別にアタシはシキのことなんか……」
「うん？　誰もクロカミ単体では話してはない……なるほど、そういうことか夜光。お前、クロカミのことが……」
「わーっ！！　わーっ！！　し、シキ、ちょっとあっち行ってなよ！！」

エヴァンジェリンはニヤリとしながら夜光にいうが、それを夜光は大声だして遮る。
このままではマズイと思った夜光は、シキにこの場から去るようにいう。
断りたいところではあったが、いかんせん夜光の目は是が非でも

ここから出ていかせたい、と訴えている。
この状況下であるのにも関わらず、なんのことを話しているかさっぱり分からないシキは席から立ち上がり、店を後にすることにした。

「はぁ……」

ため息を店内に残してだったが……。

◇

冬の寒さと近くの砂漠の暑さによりちょうどよい気温を保つ街――『ルクロス』にある建物の屋上にて、シキはタバコを吹かしていた。
最近ではめっきり吸わなくなってしまったのだが、外套に入っていたタバコの存在を思い出し、無意識に口にくわえていた。
魔法世界のタバコは体には害はなく、未成年でも吸っている者もいる。かくいうシキも未成年だ。

「よぉ、アンタってスゲェ人だったんだな、フィオナ」
「なんだ、気付いていたのか。驚かせようと思ったのだがな」
「気配も消してねェくせによく言うぜ」

柵に体重を預けていたシキは体重を足に乗せたあとに、後ろを振り向きそこにいる人物――フィオナ・エリシオンと向き合う。
久しぶりにあったというのに、シキの中ではつい最近まで一緒にいたかのような感覚が訪れている。
きっとそれだけ、フィオナは彼の中で大きな存在となりつつあるのだろう。
だからこそ、彼は気づいてはないと思うが、嬉しそうな表情をし

ているのだろう。

「強くなったようだな、クロカミ。『死の恐怖』だったころよりもずっと。いい目をしているよ」

「ぁ……。なんだよ、真っ正面から言われると……その、照れるじゃねェか……」

「照れることはなかろう。事実だからな。私の耳にも君の活躍は届いている」

照れ隠しのために頬をポリポリと掻いているシキに、フィオナは嬉しそうな表情を浮かべながら言う。

彼女の表情は本当に嬉しそうだった。まるで、これで目的を達せられると言いたげな表情だ

そんなフィオナの表情に若干の疑心を抱くが、すぐにそれを忘却の彼方に追いやる。

そして、フィオナは着ているロングコートのポケットから一枚の地図を取りだし、シキに渡した。

「地図？　どっかの遺跡の地図みてェだが、どこの地図だ？」

「『痛みの石室』と呼ばれる、まあ、名前自体には大した意味はない。ここには強力な魔獣や仕掛けがある。強くなりたいと望むなら、皆でここに行ってみると良い」

「『痛みの石室』、か……。分かった。ありがとな……ってあれ？　フィオナ？」

一旦地図に視線を落としたシキが顔をあげると、さっきまで目の前にいたフィオナの姿はどこにもなかった。

もはや自分に気取られずに移動するなど、別段驚くようなことじゃない。

今の彼の認識ではフィオナならそれくらいやっても当たり前、ということになっているから。

「とりあえず、戻るとするか」

シキはそう呟いたあとに口にくわえていたタバコを足で潰し、地図を外套のポケットにしまう。

そして、ゆっくりとした動作で夜光達のところに戻るのだった。

◇

「あっ、シキ！！　ごめんな、さっきは」

「別に構わねェよ。人には聞かれたくねェもんの一つや二つあるもんだ」

喫茶店に戻ってきたシキは、夜光の謝罪に対して気にしていないという風に答える。

実際に彼は気にしてはおらず、むしろ夜光に出ててくれと言われたのを感謝しているくらいだ。

そうしなければフィオナと出会うことも出来なかったから。

……とはいえ、シキには見過ごせないものがある。

「お前ら……どんだけ食ってんだ……」

「気にすんなよ、男の子だろ？」

「いや、だからってこれは……」

シキはテーブルの上に並べられていたデザートの空き皿を見ながら、ため息混じりにいう。

彼がこの店を出ていくときには、こんな皿は一切並べられてはいなかった。しかし今は大量の皿が並べられ、代金は大変なことになっているだろう。

代金を払うのはシキと夜光で交代して行っており、今日はシキが

代金を払う番だったのだ。
だから夜光もこんなに食べたのだろう。

「はぁ……。まあ、いいや。今日の行き先は……ここだ」

そういいながらシキは先ほどフィオナから貰った地図を取りだし、テーブルの上に広げた。
それを夜光とエヴァンジェリンは覗き込むように見る。

「地図？　シキ、こんなのいつの間に手に入れたんだい？」
「ちょっと、な」

シキは夜光の問いに対して言葉を濁らせながら、適当に手に入れたことにする。
夜光にフィオナから貰ったことを言えば、間違いなくなにか言われることは目に見えているため、あえて言わなかったのだ。
めっきり会えなくなった師匠にシキだけが会った、などと知れば何をしでかすか分かったものではない。
そして、地図を目にしたエヴァンジェリンはニヤリとしながら、シキに言う。

「クロカミ、本当にここに行く気か？」
「どういう意味ですか？」
「ここはな『痛みの石室』と呼ばれる『屍の森』と同列の遺跡だ。私なら大丈夫だが、お前らはどうだろうな？」

『屍の森』とはシキも行ったことがあった。
確かにあそこと同列の遺跡なのであれば、かなりの実力がなければ攻略など到底不可能だ。
しかし、曲がりも何もシキと夜光はエヴァンジェリンを師事して

いるのだ。ここくらい突破出来なければ、その名が廃るというものだろう。
それを踏まえた上でシキは言い放つ。
「大丈夫ですよ。俺と夜光がいればこんなところ、余裕です。そうでなければエヴァさんに鍛えてもらってる意味がない」
「そうだね。アタシもシキも会った頃より大分強くなった。これくらいわけないよな！！」
「むっ……生意気な……」
二人の発言にエヴァンジェリンは僅かに頬を染めながら、照れ臭そうに呟く。
いくらエヴァンジェリンでも真正面から誉められれば照れてしまうのだろう。
精神は六百歳とはいえ、肉体は十歳のままのエヴァンジェリンに対して、シキが可愛いと思ってしまうのは仕方がないだろう。
自分では気づいていないが、彼は年下が好みなのだ。
「良し、じゃあ行くか。……金払ってから」
シキは財布の中身を確認しながら、自嘲気味に呟く。
今回の食事だけで彼の財布の中身がなくなったことなど、言わなくても分かるだろう……。

第四十七撃『フィオナの秘密。そうだ、遺跡にいこう！！』（後書き）

感想待ってますッ！！

第四十八撃『竜の咆哮。真実を教えてやろう』（前書き）

急展開なのらぱっつぁんクオリティ……。
では、どうぞッ！！

第四十八撃『竜の咆哮。真実を教えてやろう』

「ここが『痛みの石室』か……。なるほど、こりゃ確かに強ェな」
「だから言っただろ。引き返すなら今のうちだぞ？」
「そんな気はないですよ。アタシたちならこんなところ、楽勝楽勝」
「楽天家だな、貴様は」

シキ達一行は地図を参考にしながら、『痛みの遺跡』の前にまでやって来ていた。
遺跡の外見こそどこにでもありそうな見かけをしているが、中から感じる多数の強力な気配はそうそうに感じられるものではない。
気配はとても濃厚でありながら周りに馴染みすぎており、実力がない者にこの気配は感じ取れないだろう。
その気配を感じ取れているだけで、シキ達は『痛みの遺跡』に挑戦する権利を得ている。
エヴァンジェリンは夜光の能天気さに呆れるが、楽勝とまではいかないがここを突破できるのは確実だろう。
それが分かっているからこそ、エヴァンジェリンも軽口を叩けるのだ。

「行くぞ。気を抜かぬようにし――――」

エヴァンジェリンはそう言いながら遺跡に一歩踏み出した。
が、次の瞬間エヴァンジェリンの足元でかちり、というまるでスイッチを押したかのような音が鳴る。
そのために最後まで言葉を紡ぐことが出来なかったのだ。
不意にシキ達三人にやってくる浮游感。次にやって来たのは下に落ちているという落下感だ。

「……エヴァさん？　なんつーベタなトラップに引っ掛かってるンスか？」
「……うるさい」
「それよりさ、着地のこと考えた方が良くない？　結構距離あるけど？」

そう、シキ達はエヴァンジェリンが踏んでしまった罠を作動させるスイッチにより床に穴が開き、そこから落下するというベタな罠に掛かってしまったのだ。
高難度の遺跡だっただけにそのような罠はないと踏んでいたのだが、まさかの一番の実力の持ち主であるエヴァンジェリンが引っ掛かったことに、もはや本人ですら呆れ果てるしかない。
夜光に至ってはもはや呆れ果てて、この状況をどうするかの質問でさえもが、棒読みになってしまっている。
対抗策も練らないまま、三人の視界には落下地点が見えてきている。
数十メートルも落ちてきたが、外壁からはそこまで大きいとは見れなかったために、おそらくは地下室なのだろう。
とにかく、このままであれば確実に肉壊（ミンチ）になってしまうだろう。

「悪かったな、夜光……。仕方ない、風の魔法はあまり得意ではないのだがな……。『風よ、我らを』」

床に着地する直前、エヴァンジェリンの使った風の魔法により勢いが殺され、怪我することなくふわりと着地する。
着地してから気づいたのだが、地下というだけのことはあり、肌寒いし薄気味悪い場所だった。
視界は暗闇であるために見づらく、広さがどの程度あるかすらも分からない状態だった。

「なあ、エヴァさん」
「ねえ、エヴァさん」
「……なんだ貴様ら。自分達で魔法を……って使えぬのだったな。全く、なぜ私がこのような初歩の魔法を……。『火よ、灯れ』」

エヴァンジェリンが掌を広げながら魔法を唱えると、掌サイズの炎が現れ、地下室と思われる場所を照らす。
そして、露になったのは予想していたよりも不気味な場所だった。
そこはまるで城の牢獄のように骨子が続いており、その牢獄の中には腐敗して、白骨化したような死体が無数散りばめられていた。
それが人間の白骨ならばまだ良かったのだが、その白骨は人間に似ているだけで、とてもではないが人間とは思えない。
竜族のような種族もいるが、その骨格は人間と酷似しておら、白骨化したならば見分けはつかないだろう。
しかし、この白骨は人間や亜人ではないということを断定することが出来る。

「ふん、たかが白骨に気をとられている場合か、貴様ら。さっさと上に行くぞ。これでは抜け出せるかも分からん」

誰のせいでこうなったんだよ、と思ったのは言うまでもないだろう。
しかし、なぜ口に出さなかったのかと問われれば、意味がないなどの理由というわけでは断じてない。
三人の目には既に戦闘体制バッチリと言わんばかりに鋭さが現れ、エヴァンジェリンの炎が灯す先を見据えている。
そこには無数のゾンビにも似た兵士がいた。
言語を理解し得る生命体とは思えないような呻き声を上げ、引きづるような動作で近づいてくる。

「地下室まにで罠って……手の込んだことするねぇ、ここの設計者も」
「まあ、ごちゃごちゃ言ってても仕方ねェだろ。とりあえず、奴(やっこ)さんは殺る気みてェだし……」
「こっちも、殺らせてもらうよッ！！」

いち早く駆け出したのは夜光だ。
腰に携えた一対の双剣を一瞬にして抜き放ち、開いていた距離を瞬く間に縮めていく。
体勢を低く構え、一番身近にいたゾンビ兵の、左から右斜め上へと片方の剣を振り上げる。
修業し、強くなった夜光であったならば、その一撃でゾンビ兵の動きを止められると思っていた。
だが実際は、刃が最後まで通りきらず、途中で刃が動かなくなってしまった。

（嘘だろ！？　くっ……、アタシを嘗めんじゃないよッ！！）

夜光はもう片方の双剣を振り抜き、なんとかその場から離脱する。
今の一撃だけで分かったのは、あのゾンビ兵相手には接近戦に使うような刀剣類は得策ではないということだ。
もちろんそれはシキやエヴァンジェリンも見ていたために、伝えずとも分かりきっている。
後ろまで夜光が退避してきたことを確認したシキはライフルを構え、エヴァンジェリンは魔法の詠唱を開始する。

「リク・ラク・ラ・ラック。来れ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常闇の氷雪――――『闇の吹雪』」

魔力弾を放ち、牽制しているシキを他所に、エヴァンジェリンはなんの迷いもなく、この狭い場所にて『闇の吹雪』の魔法を放つ。
彼女は氷雪系魔法を得意とする魔法使い。故に使う氷雪系の魔法は強力になるのだが、エヴァンジェリンは後先考えていないのだろう。
ぶっ放したあとにて、危険な行為をしてしまったことに気づく。
結果的にはゾンビ兵を倒すことも、地下室が崩壊するなどということはなかったが、下手すれば崩壊し、生き埋めになっていたというのはいうまでもない。

「あの、エヴァさん？　気を付けてもらえますか……？」
「細かいことを一々気にするな。モテないぞ」
「……余計なお世話だ、幼女が」
「幼女いうな――――――ッ！！」

ボソッと呟いたシキの言葉に、エヴァンジェリンは怒鳴り付ける。
どうやら幼女という言葉はエヴァンジェリンにとっては禁句らしい。
下らない言い合いをしながら進み二人の後ろを、夜光はほとほと呆れたとばかりに着いていくのだった。

（それにしても……なんだろ、この感じ……）

そして、夜光は違和感を抱いていた。
この『痛みの石室』に入ってから、彼女の体には何かの異変が起こっているのだが、シキやエヴァンジェリンは愚か、本人すらも気づいてはいない。

◇

あれから三人は立て続けに現れる様々な敵と交戦した。
先ほどのゾンビ兵のように刃が効かない敵もいれば、魔力を吸収してしまうために魔力弾が効かない兵士、さらには音速の速さで動く兵士までもがいた。
人型でそのような動きをされるとさすがに手こずってしまい、元の階に戻るまでかなりの時間を有してしまったが、なんとか戻ってくることが出来た。

「はぁ……。これだけ休み無しだとさすがに疲れるな……」
「うんうん、あんなに来られたらたまったもんじゃないよね」

夜光の言葉に全くだ、と答えたシキは、周りに敵がいないことを確認したあと、瓦礫がちょうどよく椅子のようになっている場所に座る。
さすがに魔力を消費しすぎたのか、いつもは見ない辛そうな表情が見てとれた。
対して、エヴァンジェリンは余裕の表情だ。やはり普段から魔力を使っている魔法使いは、違うのだろう。
とりあえずこのまま無理をすれば、取り返しのつかないことになると判断したエヴァンジェリンは、ここで一旦休憩をとることにした。

「悪ぃな。少しだけでいいから」
「はっ、ヒヨッコが無理をしたところで死ぬのがオチだ。疲れが取れるまで休んどけ」
「……誰のせいでこんなんなったと思ってるンスか？」

シキの問いにエヴァンジェリンは、視線を逸らすだけで答えようとはしない。分かっているからこそ、答えられないのだ。
そんなエヴァンジェリンにジト目を向けたあと、ため息をつき、

寝転がる。
必要最低限の警戒はしているが、張り詰める必要はない。疲れが溜まっているシキに、すぐに眠気がやって来る。
目を閉じると、意識は闇の中に眠った。

シキが眠りについたことは、隣に座っていた夜光はすぐに気づくことが出来た。
外套に身を包んだ胸が上下し、その表情には普段は見られないような穏やかさが表れている。
きっと本人は意図していないのだろうが、眉間に皺を寄せ、切れ目の長い目で物事を見渡している。
時折見せる冷酷な雰囲気は、今のシキからは全く感じられない。

「可愛い寝顔だなぁ、シキ……」
「そうだな。普段は見れない表情だ」
「のわっ!?　え、エヴァさん!?　ビックリするじゃんか」

夜光の誰に言ったわけでもない言葉に対してのエヴァンジェリンの返答に、夜光は思わず飛び退いてしまう。
それだけエヴァンジェリンの返答に驚いたのだろうが、頭が冷えてくると同時に、今の呟きが聞かれていたことに頬を赤く染める。
もちろんシキの寝顔を見て思わず呟いてしまったのだが、聞かれたとなると恥ずかしい言葉だったと思ってしまう。

「何を恥じる必要がある？　好きな奴のことが気になるのは当然だろう？」
「な、ななな何言ってんのさ!?　あ、アタシは別にシキのことなんか……」
「嫌いではないのだろ？　お前の態度を見てるとすぐに分かる」

なぜクロカミが分からないくらいにな、とエヴァンジェリンは腕を組ながら楽しげに口を歪め、そう言う。
そんなエヴァンジェリンの言葉に、夜光は口をパクパクとさせ、先程よりもより一層顔を真っ赤にさせている。
それは、その事を夜光が一番理解しているからこそ、改めて指摘されると恥ずかしさが込み上げてくる。
エヴァンジェリンに指摘されるまでもない。そんなことは夜光自身が一番分かっている。

「安心しろ。今は伝わらずとも、いつか思いは届く」
「え……？　どうしてそんなことが……」
「教えてもらったからだ。そこに眠りこけている男にさ」

エヴァンジェリンは安らかな表情をしながら、眠っているシキを顎で指しながらそう言う。
彼は教えたつもりなどなかったのだろうが、エヴァンジェリンには伝わっていたのだ。
――――届かない想いなんて、きっとないということを。　そして、シキが眠り始めてから数分が経過した頃、シキが身動ぎ、声をあげた。

「ン……眠っちまってたのか……」

目を覚ましたシキは、自分が眠ってしまっていたことに気づき、上半身だけをあげながら周りを見渡す。
周りには特に変わった変化はない。寝る前と同じままだ。
ふと視線を傾けてみれば、何故か頬を赤く染めてこちらをチラチラと見ている夜光がとなりに座っていることに気付いた。

「……ンだよ。俺の顔になんかついてんのか？」

「あっ、いや、えっと……べ、べっつにぃ～。シキも起きたことだし、張り切っていこうぜ？」
「なんだ？　夜光の奴」
妙にやる気な夜光に対して、シキは思わず首を傾げてしまう。
もっとも、その原因が自分であるなどということは、夢にも思っていないだろう。
エヴァンジェリンに視線で何があったかを訊ねてみるが、返ってくるのはただ面白かったと言わんばかりの笑みだけだった。
（一体なんなんだ？　俺が寝てる間に何があったんだ？）
何やらシキの視界の先でニヤニヤとしながら話しかけるエヴァンジェリンと、顔を真っ赤にさせて怒鳴る夜光を見ながら思う。
きっと、そのことを彼が知るときは、訪れないのだろう。

◇

「――――っぉあッ！！」
シキの振り上げた大鎌が、石兵（ゴーレム）の胴体を切り裂き、上半身と下半身を切断する。
再び動き出してからかれこれ数階は登っているのだが、上の階に行くにつれて警備レベルが強くなっていった。
中には地下で出会ったような魔力を分散させるタイプや、魔眼のような類いの力を受け付けない敵がおり、今の石兵（ゴーレム）も魔眼が効かないタイプだった。
故に狙撃手であるシキも鎌を使っていたのだ。
とはいえ、もうこの『痛みの石室』で鎌を使うということもないだろう。

三人の視界の先には既に『痛みの石室』の最終階層の一番奥の部屋が見えている。

「結構キツかったね。やっぱ条件下の戦いは鍛えられるよ」

「確かにな。俺もこれが使えないときの戦い方の勉強になった」

シキはライフルに取り付けられているスコープをトントン、と叩きながら夜光にいう。

彼のライフルには『直死の魔眼』の力が備わっており、それを覗けば万物を殺すことができるようになる。

しかも狙撃手であるだけに物体の死を示す『死の点』を貫くのは、接近してやるよりも容易い。

いかに今までそのスコープや、相方である夜光を頼ってきたかが露になり、勉強になる戦いだったといえる。

ただ、エヴァンジェリンは遠距離魔法が通用しなくとも、『断罪の剣』のような近接ようの魔法があるため、シキや夜光のように苦しかったわけではない。

「エヴァさんが罠に掛かってなかったらもっと早くに来れたんだけどな……」

「貴様、まだそれを言うか……。だいたい、罠がなんだと言うのだ。誰のおかげで強くなってると思うんだ？」

「……自分のおかげ？」

「捻るぞ、クロカミ。なるほど、貴様には優劣の上下を体に教え込んだ方が良いようだな」

へいへいすみませんねエヴァさん、などとふざけた謝り方をしながら、シキは一番最後の部屋へと足を踏み入れる。

エヴァンジェリンはまだ納得していないようだったが、シキが自らの『力』を理解していることを知っているので、あえて何も言わ

ないでおく。
踏み入れた部屋は今までのような牢獄のような部屋と一転して、そこは神々しいという表現が似合っていた。
別段何か特別な何かがある、というわけではない。ただ部屋が牢獄のようではなく、広い部屋というだけだ。
言うなれば雰囲気そのものが神々しく思えるような、不思議な空気を放っている。
それを感じられない三人ではないが、気にしている様子もない。

「今までと違って広い部屋だな……。何かあんのか？」
「あそこ……双剣が飾ってある。宝物かな？」

夜光が指差した先には、彼女のいうとおり一対の双剣が、壁に飾られてあった。
ただ、その双剣の形は今までに見たことがないような歪な形をしていた。
一本の曲がりくねっている刀身から、まるで木に枝が生えるように、両端から同じように刀身が一本ずつ生えている。
人目見たときの感想は、おそらく三又の双剣だな、というのが妥当なところだろう。

「分からねェけど、もらってもいいんじゃねェか？　こんなところにあるくらいだから、相当の業物じゃねェのか？」

しかし、いかに歪でもこのような場所にあるのだから、相当な業物だろうことは簡単に想像できる。
シキの言葉に夜光は一回だけ頷くと、駆け足で三又の双剣のあるところに駆けていく。
他に罠があるかもしれないと言うことで、シキとエヴァンジェリンは入り口で警戒している。

すると、二人の背後から懐かしい気配が来たことに気づき、二人は振り向いた。

「フィオナ、来てたのか。あんときはいきなり消えたから心配してたぞ？」

背後から来た人物――フィオナ・エリシオンにシキはそう言う。

実際は心配の『し』の字ほどもしていなかったのだが、本人を目の前にして心配していなかったなど、とてもではないが言えない。

とりあえず、後ろから来たのが敵ではなく、味方だったことに気を緩める。

だが、今のフィオナは何かがおかしかった。

せっかく合流したというのに言葉を交わそうとしないはおろか、感情が読めないような表情をしている。

そして、フィオナは唐突に言葉を紡ぎ始めた。

「よく、ここまで来ることが出来たな、クロカミ」

「あ、あぁ。なんとかな」

フィオナのいつもと違う、冷たい雰囲気に圧倒されながらもシキは何とか答える。

隣では同じようにエヴァンジェリンも圧倒されているようだが、それに気づけるほどの余裕がない。

「あのときから比べると、お前は本当に強くなった……。魔族に村を襲われ、『力』を手に入れるのに躍起になっていたときよりも、ずっと……」

「なんで、アンタが、それを……」

シキはフィオナが自らの故郷とも呼べる村が、魔族によって襲わ

れたということを知っていることに驚愕してしまった。
あの事件のことは竜族の村の生き残りであるシキや、極々一部の者しか知らないし、知り得ないことだったからだ。
もちろん、フィオナが駆けつけてくれた魔法軍の一人だったとしたら知っていてもおかしくないが、彼はそのとき駆けつけた魔法軍の名前と顔を全て覚えている。
少なくとも『フィオナ・エリシオン』などという名前はなかったし、あったとしたらシキが忘れるわけがない。
だったら、なぜフィオナが教えてもいないのにその事を知っているんだ、と彼は疑問に思ってしまう。
そんな彼の心情を他所に、フィオナは黙々と言葉を紡いでいく。

「どうやら今は事件は終わったと思っているらしいが、まさか、本当にあいつが主犯だとでも思っているのか？」
「どういう、ことだよ……」

息が詰まる、胸が苦しい。まるで激しい運動を行った後のように息が乱れ、さっきまでは掻いていなかった汗が額から頬、顎を伝って床へと落ちる。
彼女があいつ、と呼んだ人物は間違いなくシキが初めて殺人を犯してしまった人物――ゲイル・ラインハルトのことを言っているのだろう。
そして、フィオナの言葉の言い回しは明らかにおかしかった。
それはまるで、ゲイル・ラインハルトが主犯だと思っていたのにも関わらず、他に主犯がいると言われているようだった。

「復讐に目が眩み、周りが見えなくなっていたあ奴が、魔族を使役することなど到底不可能だ。なぜ、それに気づかなかった」

言われてみれば確かにそうだった。

事件が解決した今でこそ、もう思い返すまいとしていたが、よくよく考えてみるとおかしな点がいくつもある。
最初に挙げられるのは、フィオナが指摘した一点だ。
仮に魔族を使役できたとしても、ゲイル・ラインハルトの実力は明らかに召喚された魔族よりも弱かった。
それなのにも関わらず、魔族がゲイル・ラインハルトになど従うだろうか。そこが二つ目の疑問だ。
そう考えてしまうと、どんなに違う方向から考え直そうとしても、同じ結論に辿り着いてしまう。

「まさか、主犯はゲイルじゃなく、他にいる……？」
「その通りだ。クロカミ、真実が知りたいか？」

ドクン、と心臓が力強く鼓動した。
真実、その言葉にシキの鼓動が異様なまでに高まる。
ゲイルが主犯でなかったとしたら、いったい誰がなんの目的のために自分の村を、仲間を殺したというのだろうかと。
主犯の名前を聞いたりしてしまえば、シキの心には再び復讐の炎が燃え上がってしまう可能性がある。
だとしても、これればかりは聞かないわけにはいかない。
これればかりは自分の手でけじめをつけなければならない。

「考えてもみろ。あの事件、知っているのはほんの一部の者だけだろう？　それなのにも関わらず、なぜ私が知っていると思う？」
「え……？」

フィオナの言葉にシキが固まる。
そのことは、一番最初に彼も疑問に思ったことだった。
知ることが出来ないはずのことを、なぜ関係者ではないフィオナが知っているのかと。

考えてみれば答えは一つしかない。だからこそ、そんな答えを否定したかった、認めたくなかった。

だが、現実は常に残酷な答えを彼に突きつけてくる。

「ゲイル・ラインハルトの復讐心を利用し、あの村を、村の住人を殺させたのは――――この私だよ、クロカミ」

シキの中で、何かが弾けるような音がした。

竜族である彼の怒りの咆哮は『痛みの石室』全体に響き渡り、空気を振動させる。

外壁があまりの衝撃に耐えきれずに、亀裂が入り、砕け散りそうになっている。

蒼色の瞳は怒りの紅に染まり上がり、見た者全てに恐怖を与えるような威圧感を放っている。

隣にいるエヴァンジェリンでさえもが息をのみ、後ずさる。

だが、そんな彼の脇を、一筋の風が通り抜ける。それと同時に鳴り響く剣戟。

その発信源は、他ならぬフィオナと、もう一人の人物が双銃と双剣を打ち合わせた音だ。

「もうお目覚めか、『執行者』」

フィオナが『執行者』と呼んだのは、三又の双剣を携え、赤色の髪を持つ少女――夜光だった。

だが、その少女を『夜光』と呼ぶには、あまりにも変化しすぎていた。

別に姿形が変わったなどと言うわけではない。ただ、纏っている雰囲気が人間味を全く感じさせず、ただ冷酷な機械のように感じると言うことだ。

あれだけ感情豊富だった彼女の表情から、ありとあらゆる感情が

欠落してしまったかのように、何も感じることが出来ない。
双銃を巧みに動かし、彼女は『執行者』を弾き飛ばす。
『執行者』は空中で体勢を立て直し、着地したあとに感情の籠っていない瞳でフィオナを見つめる。

「もう一つ、真実を教えてやろう。クロカミ、なぜ奴が私と一緒に旅を始めた頃の記憶がないか知りたいか？」
「……」

さっきの『執行者』、いや、夜光の動きのおかげで完全に頭が冷えたシキは、フィオナの言葉には答えない。
ただ距離をおき、フィオナを睨み付けながら無言を突き通す。
そんなシキの態度に、さっきまでは仲間だったのに随分な変わりようだな、などと世間話をするような軽さで呟く。
彼がどう答えようと話すつもりだったようで、フィオナは勝手に話し始めた。

「私が今の魔法が構築される前、つまり旧式魔法がある時代から生きていたのは知っているな？
その頃から私は神と呼ばれる存在でな。かなりの地位を持っていたよ。
神の王の側近にて、神の王に歯向かう反乱分子を悉く捻り潰してきた。
圧倒的な、相手を叩き潰し、捩じ伏せる『力』を持ってな」

フィオナはまるで皮肉を言うかのように、敵を捩じ伏せる『力』という部分を強調しながら、シキに言ってくる。
そんなフィオナの言葉にシキは一切顔色を変えることなく、静かにライフルを握り、引き金に指をかける。
そんなシキを他所に、フィオナは言葉を紡いでいく。

「その反乱分子も、負け続ければ学習したのだろう。私たちに対抗するために、ある人造兵器を造り上げた。
私たちという種族に対して絶大な『力』を誇り、敵を殲滅するという殺戮兵器。
その殺戮兵器の『力』は凄まじかったよ。神の王に仕える七人の神のうち、三人も其奴によって滅ぼされた。
私たちのような『力』を持たない彼らにしては、これは多大な成果と言えよう。
故に私たちはその殺戮兵器にこう名前をつけた。神殺しを執行する者――――『執行者』、と」

そこまでいって理解できないようなシキではない。
こんなに丁寧に、要らないことを交えても分かりやすく説明してくれたのだから、嫌でも理解することができる。
視線をわずかに後ろに傾ける。そこには『執行者』と成り果てた『夜光』の姿がある。
『執行者』の目にはシキやエヴァンジェリンの姿など映っていない。視界の先にあるのはフィオナだけだ。

「『執行者』に三人も滅ぼされようやく『執行者』の実力を理解した私たちは、神の王と最優の神を除く残りの三人で『執行者』を迎え撃つ体制に出た。
執行者と私たち三人の戦いは正に戦争。一人の神の犠牲を払い、私たちは『執行者』を封印することに成功した。
だが、『執行者』の与えた損害は彼らにとっては正に好奇と言えよう。
その頃、最優の神は神の王に反乱の意思を見せていてな。反乱分子を率いて、もはや壊滅寸前の私たちに反乱を仕掛けてきた。
あとは歴史通り私たちの文明は滅んだよ」

フィオナはまるで思出話を語るかのように、懐かしげに話す。いや、実際に彼女のとっては思出話なのだろう。

だが、そんな思出話を聞くために、シキとフィオナは対峙しているわけではない。

もちろんフィオナの話はそこで終わりではなかった。

「旧式魔法の時代は滅んだが、私は自らの力を行使し、生き延びたよ。私は時間という概念に囚われないからな。

そして、宛もなく旅をしているとき、私は封印の解けた『執行者』と出会った。

さすがの私もマズイと思ったよ。神が三人掛かりで封印までしか出来なかった相手に、私一人でどう勝てようか。

しかし、運命は私に味方した。『執行者』は全ての力を失い、記憶までも失っていた。

記憶も力もない『執行者』など、とるに足らない存在だ。だが、私は『執行者』と共に旅をすることにした。　ある目的を果たすためにな。それがクロカミ、お前だ」

どういう意味だ、シキはフィオナを睨み付けながら、敵意を剥き出しにしながらフィオナに向かってそう言う。

今までの話からしたら、シキは全く関係してきていない。時間から考えてもフィオナと夜光が出会ったのは、千年以上も前の話。

どうあってもシキが関係してくるとは思えない。

「歴史通り私たちの文明は滅んだが、その力は私がある場所に封印した。その封印は今の私でも、全盛期の私でも解けるものではない。

だからこそ、クロカミの力が必要だった。正確にはそのライフルに宿る力、だがな。

しかしその力があるだけではダメだった。ここにいるためには、

力をつけてもらう必要があったのだ。
そして、私の願いはようやく叶う」

ようやくシキはフィオナが何を言いたいのかを理解した。理解したからこそ、怒りを堪えられずにいた。
シキのライフルに取り付けられているスコープには、万物を殺すことができる力が宿っている。
今のフィオナが封印を解けない以上、今や全世界にその封印を解ける者はいない。
そこでシキに白羽の矢が立ったと言うことだ。
だが、彼が弱いままでは、その力が封印されている場所に辿り着けはしない。故に、彼は強くならされた。

「……テメェの下らねェ目的のために、村の皆は……死んだってのかよッ！！」
「あぁ、その通りだ。ついでにいえば『執行者』……夜光をお前に近づけたのもその仮定の一部だ。強くなったな、クロカミ」
「……ふざけんなよ。……ふざけんじゃねェよ、テメェッ！！」

もう、我慢の限界だった。
今まで、自分はフィオナの目的のために、彼女の掌で踊らされていたに過ぎなかったということだ。
それだけだったならば、構わないというわけではないが、まだ良かった。
そんな下らない目的のために、自分の大切な人々が死なされたと言うことに、シキは我慢できなかった。
限界まで溜められた魔力弾が、フィオナに向かって放たれる。だが、その魔力弾はフィオナを通り抜け被弾しなかった。

「今ここで殺り合う気はない。着いてくるがいい、クロカミ。全て

を終わらせたくばな」

フィオナはそう言いながら、その場からまるで溶けるように消えていく。

どこに行ったのか分からないにも関わらず、『執行者』はどこに行ったか分かるかのように、その場から動き出し、すぐに姿がなくなる。

シキはなにが何だか分からなかった。フィオナが自分を強くするために皆を殺し、夜光が『執行者』などと呼ばれていたりと、理解の許容量を完全に越えていた。

だけど、今の彼にはやらなければならないことがある。

「フィオナを追いかけましょう、エヴァさん……。あいつを許すわけにはいかねェ」

「本当に貴様はそれでいいのか？　それで、貴様の闇は消えるとでもいうのか？」

「関係ねェ。今は、あいつを追いかける。全てはそこからだ」

今のシキの目には、今までのような光は宿っていない。

ただ闇に囚われ、仲間を護ると言うことを忘れた、前の彼のようになっている。

そんなシキにエヴァンジェリンは不安を覚えてしまう。

シキは、フィオナを追いかけるために『痛みの石室』をあとにした。

第四十八撃『竜の咆哮。真実を教えてやろう』（後書き）

感想待ってますッ！！

第四十九撃『過去と未来と決別と――前編――』（前書き）

今回を含めあと二話ですッ！！
では、どうぞッ！！

第四十九撃『過去と未来と決別と――前編――』

『痛みの石室』から離脱したフィオナは、自らが保有する『時空掌握』という固有スキルを使い、時間の概念に囚われないで移動をしていた。

時間の概念に囚われない、ということはその時間軸に存在していないのと同じで、一般の者の視点から見たら瞬間移動したようにも見えるだろう。

現に『痛みの石室』から数十キロ離れた位置に来るのにも、一秒とかかってはいない。

かちり、とスイッチを切り替えるような音が聞こえる。途端にフィオナの時間は周りと同化し、同じように時間が動き始める。

手を閉じたり開いたりを繰り返し、自分の体に悪影響が出ていないかを確かめる。

「もう少し……もう少しで、私の目的は達せられる。――――ぐっ！？」

今まで平然としていた彼女であったが、不意に体に激痛が駆け抜ける。

体全体の骨が磨り潰され、肉が切り裂かれ、神経を無理矢理千切られるような痛みに、思わずフィオナは膝をついてしまう。

額からは汗が吹き出し、頬を伝い地面に点々と痕を刻む。

痛みは一瞬しか来なかったものの、その後遺症がすぐに抜けるわけではない。

額から流れ落ちる汗をロングコートの袖の部分で拭いながら、苦しげな表情を浮かべて立ち上がる。

「慌てるな……。もうすぐで、全てを終わらせてやる。だから、大人しくしていろ……」

誰に言うわけでもなく、ただ虚空を見つめながらフィオナは呟く。いや、この言葉は確かに意思を持ち、他ならぬ誰かに投げ掛けられていた。ただ、見ることが出来ないというだけのことだ。

汗を拭ったフィオナは握りしめていた右拳を静かに開く。

すると、パリン、というまるでガラスを割ったかのような音が荒れ果てた荒野に響き渡る。

刹那、荒れ果て何もなかった荒野に、天を穿つような一柱の柱が現れる。柱というにはおかしいが、端から見れば柱という表現が似合っている。

もしも今の光景を見たものがいたならば、腰を抜かして仰天していたことだろう。

何もない場所にいきなりこんなものが現れて、驚かないという方がどうかしている。

この柱もフィオナの『時空掌握』により今の時系列から外れ、力が解除されたことによりこの場に現れたのだ。

「全てを終わらせる。もう、私には……時間は残されてはいない」

ふらつく足取りで、フィオナは柱の内部に入り込む。

柱の内部には螺旋階段が取り付けられていた。天まで届くような螺旋階段は、一番天辺が見えずに、霞んでしまうほとだ。

とはいえフィオナからすれば大した高さではないことは、既に分かりきっている。

トン、という小さな音がした。その音とは裏腹に、フィオナが上の階に向かって進む速さは桁違いだ。空気抵抗を寄せ付けずに、徐々に加速していく。

そして、あっという間に最上階、とまではいかなかったが、中間

地点には辿り着いた。
今までの螺旋階段とは打って代わり、そこは広々とした殺風景な部屋だった。椅子が一つあるだけで、あとはただただ白い壁に覆われた部屋。
そこにいるだけで、異質さがひしひしと伝わってくる。

「長かった……。これで、ようやく物語は終焉を迎える……。――――ぐっ、またか……!?　感覚が、徐々に短くなってくる……！！」

落ち着けたと思ったのもつかの間。
膝をつくように倒れ込んだフィオナの体には不思議な紋様が浮かび上がり、心臓が鼓動するのに合わせてその紋様も鼓動する。
ドクン、ドクン、といつもなら集中しなければ分からないほど小さな音が、今は嫌にうるさく感じる。
激痛が駆け抜ける。ありとあらゆる穴から血が噴き出すかのような錯覚に襲われ、思わず顔をしかめる。
痛みを堪えるために食い縛っている歯は犬歯が剥き出しになり、整った顔立ちを歪める。
実のところ、今のフィオナには余裕がなかった。今にでも生を放棄し、楽になりたいと思うほどに。
だが、フィオナは目的を果たすまでは生を放棄するわけにはいかなかった。
その目的とは、これからの彼女の生や、世界の道を決めかねないほどに重要なことだった。
世界が滅ぶか否か、それが大袈裟でないほどの目的だ。

ふわり、と優しい風がフィオナの空色の小さなポニーテールを撫でる。
ここは完全な密封空間になっており、人工的に起こした風でなけ

れば風が吹くはずがない。
　ではこの風が錯覚なのかと訊ねられれば、自信を持って錯覚でないと答えることが出来る。
　この部屋にはフィオナしかいない。しかし彼女は動いていないために、風など起こすことが出来るはずもない。
　ならば一体誰が風を起こしたというのだろうか。答えは、実に簡単だ。

「ずいぶんと遅かったな。昔の貴様であれば、私が『時空掌握』を使ったとしても楽に着いてくることが出来ただろう、『執行者』？」

　体から紋様が消えたフィオナは立ち上がりながら、ここに来た人物――『執行者』に話し掛ける。
　振り向き、『執行者』を見たフィオナは懐かしさと共に、虚しさが込み上げてくる。
　『執行者』と成り果てた夜光には感情は残っておらず、フィオナを殺すためだけの殺戮兵器と成り果てている。
　三又の双剣を逆手に構え、まるで獣のように低く唸りながら、精気の欠けた瞳で『執行者』はフィオナを見据える。

「もはや言葉を交わすのは無意味だ。ちょうどいい、クロカミが来るまで相手になってやろう」
「――――……ァァァァァアアアアアアアッッッ！！！！」

　キン、と一度だけ三又の双剣を打ち合わせたあと、『執行者』は獣のような唸り声をあげながら、一瞬にして数十メートルの距離を埋める。
　比喩表現などではない。文字通り一瞬にしてフィオナに接近して、三又の双剣を振るう。
　振るわれた三又の双剣は音という風を纏うかのように振動しなが

ら、フィオナの首に迫る。

次の瞬間、フィオナと『執行者』を中心に衝撃の波動が円を描くように放たれる。

これは、秒速数十キロで振るわれた三又の双剣を、フィオナが双銃で受け止めたただの余波に過ぎない。

あまりの衝撃に柱自体は破壊されなかったものの、威力に耐えきれずに柱が震える。

核爆弾が直撃しようとピクリとも動かないはずのこの柱が、ただの余波だけで揺れたのだから、まともに二人が打ち合ったときの衝撃は計り知れない。

第二撃が振るわれる。受け止められた片方の刃とは逆の手に持っている刃を、何の躊躇もなく振り抜く。

フィオナも同じようにそれを受け止めるだけ。結果は一度目と同じ。

お互いにぶつけ合っている二つの武器から火花が散り、ギチギチと力が拮抗する。

しかし、『執行者』は動じない。『執行者』にはありとあらゆる感情が抜け落ちているために、いくら自らの攻撃を防がれようとも何も感じない。感じることが出来ない。

故に『執行者』の刃は最初から最後まで弱まることがない。

それでも、昔の『執行者』を知っているフィオナからしたら、今の『執行者』の動きは明らかに衰えている。

「どうした、『執行者』？　貴様の刃はその程度ではないだろう？」

いつの間にか開かれていた差に、『執行者』は驚くこともしない。

だが、『執行者』がフィオナに近づいてくるまでには、一瞬の時間、がある。その時間さえあれば、どれだけの弾丸を撃ち込むこと

が出来るか。
不意に『執行者』の動きが止まり、フィオナの動きも双銃を『執行者』に向けたまま動かない。
聞こえるのは時折何かを掻き消すような剣戟のみ。

動いていないように見えるのは、二人の実力が常軌を逸脱し過ぎているせいなのだろう。
実際はフィオナが魔力弾を放ち、『執行者』がそれを三又の双剣で掻き消すという行為を行っている。
そんな単純な動きでも、視界で捉えきれないような速度でやられていれば気付けるはずもない。
秒速数十キロの魔力弾が、一秒の間に数万発の勢いで放たれている。
ただでさえ無茶苦茶な速さや量なのにも関わらず、それに対応し、動いている『執行者』も有り得ないといえる。
肉体を強化していなければ、魔力による補強も行っていない。単純な肉体能力のみにて行われているとは思えない動きだ。

「――――ァァァァァァァッッ！！！」

痺れを切らしたかどうかは分からないが、このままだとじり貧だと本能的に感じ取った『執行者』が動いた。
獣のような咆哮をあげながら、迫り来る数万発の魔力弾を弾きながら、フィオナに迫る。
もちろんのこと『執行者』の動きは出鱈目だ。縦横無尽、壁や天井を足場にし、フィオナに捉えられないように動く。
このような二人だけ時間の流れが異常な戦いに、捉えるも捉われるも関係ないような気がするが、二人にとってはそれが必要な行為だ。
魔力弾の数に比例して、フィオナの魔力も徐々に減少していく。

いくらフィオナが並々ならぬ魔力を保有しているとはいえ、その魔力は無限にあるわけではない。有限である魔力（もの）を使っているのだから、いつかは底をついてしまう。

だからといって負けるわけではないが、この戦いは彼女にとっては前哨戦でしかない。

ここで魔力が底をついてしまうのは得策ではない。

（さすがに本調子でなく、『アレ』を抑え込んでいる状態では分が悪いか……。仕方ない――――『時間停止（タイムスリープ）』）

魔力弾を撃つのをやめ、フィオナは固有能力である『時空掌握』を利用した疑似時間停止を使用する。

その瞬間、空中にて三又の双剣を振り抜こうとする体勢のまま停止する。

これはフィオナが固定した空間の時間を、強制的に停止させる能力だ。

これで停止した時間内にあるモノに干渉できるならば強力な力になるが、生憎と干渉することはできない。

しかし、逆にいえば時間が動き出す前は罠を仕掛け放題だし、他にも何をし放題だ。

魔力弾を大量に『執行者』の周りに形成し、同じように疑似時間停止をかける。

魔力弾の数はもはや数えきれない。文字通り部屋を埋め尽くす魔力弾は、もはや一つの壁となっている。

『執行者』を囲うように展開された魔力弾は、既に一つの箱となっている。

そして、双銃に今溜めることが出来るだけの魔力を溜め込む。

「終演だよ、『執行者』。案ずるな。もう二度と、貴様（しっこうしゃ）は起きることはない。夜光として、安らかに暮らせ。――――『時間加速（タイムアウト）』」

再び、時間が動き出す。

昔の、フィオナがいう全盛期の『執行者』であったならば、きっとこれを回避することは可能だっただろう。

しかし、とても長い期間の間『夜光』として暮らしたために、『執行者』としての戦い方を忘れた。

さらにいえば、今の『執行者の肉体』にその全盛期の動きを再現するのは不可能だ。

今までであれだけの動きを出来ていただけでも、良い方だと言える。

故にこれを避けきることも不可能だ。

「……ぁ？」

『執行者』の時間が動き出し、魔力弾にて形成された壁が自分に迫って来ていると気づいたときには、既に手遅れだった。

ほぼ零距離で秒速数十キロの速さを誇る魔力弾を、今の『執行者』が避けられるはずがない。

刹那、鼓膜を破りかねない爆音が柱の内部に響き渡る。無数に近い魔力弾が、『執行者』に降り注ぐ。

余りの轟音と煙幕で『執行者』の生死を確認することは出来なかったが、少なくとも瀕死には持ち込めるはずだ――と、フィオナは思っていた。

だが、『執行者』の動きはフィオナの予想を上回っていた。

「ハァァァァァァァァッ！！」

「――――ッ！？」

煙の中から飛び出してきた赤色の髪――『執行者』が完全に気を抜いていたフィオナに迫る。

さすがのフィオナも予想外の動きに反応できなかったらしく、棒

立ちになってしまっている。
今のフィオナの状態は明らかに今までにない、最高の好機だった。
だが、『執行者』の三又の双剣がフィオナの体を切り裂く、などということはなかった。
どさり、と『執行者』が床に倒れ込む。
あれだけの魔力弾を、ほとんど零距離だったにも関わらず、『執行者』はほとんどの直撃を避けた。
全ては避けきれなかったようで、体のあちこちから血が流れ出てくる。

「今のは危なかった……。さすがだな、『執行者』。最期の最期に私の勝ちだ」

もう出会うこともあるまい、と笑みを浮かべながらフィオナは歩き出す。
体には不思議な紋様が再び浮かび上がっている。
心臓の鼓動に合わせて紋様も鼓動し、フィオナを苦しめる。

「もう、時間がないんだ、クロカミ。早く――――私を殺せ」

フィオナの呟きは誰にも届かない。
そして、彼女は上の階へと足を進める。

◇

「おいクロカミ、少し落ち着けと言っているだろう」
「落ち着けるわけ、ないじゃないッスか……。本物の犯人を見つけて、それが仲間で……もう、何がなんだか分かんねェんだよッ！！」

『痛みの石室』から出たシキとエヴァンジェリンは、フィオナが

どこに向かったかは分からなかったが、追いかけようとしていた。
宛もなく探すのは得策ではないと思っているが、宛がないのでは仕方がないと判断したシキは、とにかくフィオナを探そうとした。
だが、突如として現れた天を穿つような一柱を見つけ、そこにフィオナがいると判断した二人はそこへ向けて動き出していた。
しかし、だ。何十キロもある距離を全力で移動しているシキは、必要以上に焦っている。
いや、混乱しているといった方が適切なのかもしれない。
自分を導き、助けてくれた仲間が、実は目的を見失う原因を作った人物だったのだから。

「だから落ち着けと言っているのだ、馬鹿者。貴様はなんのために『力』をつけたんだ？　自分で言っていただろう。『俺は仲間を護るために「力」を手に入れた、もう道を踏み外さねェ』とな」
「……。そんなこと、分かってる。分かってるけどよ……」

そう、彼は分かっているのだ。
復讐をしたところで誰も喜びはしない、単なる自己満足に過ぎないってことくらい。
それでも頭が、心が納得しない。復讐を遂げろと心の闇が話しかけ、復讐心が込み上げてくる。
復讐をしなければ、自分のために死んでしまった仲間になんと言えば良いか分からない。
もはや思考が混乱しすぎてしまっているために、状況を判断する力が圧倒的に欠落している。

「もう、立ち止まれない。俺は……戦う」
「……そうか。貴様は、本当にそれでいいんだな？」
「あぁ。もう、決めたんだ」

エヴァンジェリンの言葉に、シキは力強く頷く。
もう戻れない。フィオナが本当の犯人だと知った今、例え和解したとしても、受け入れることは絶対に出来ない。
だからこそ戦うのだ。フィオナの本当の目的を知るために。本当は、何のために自分を強くしたのかを知るために。

しばらく移動しているが、シキとエヴァンジェリンには会話はない。
さっきあんなことを言ってしまった手前、シキからは話しかけづらいのだろう。
エヴァンジェリンはエヴァンジェリンで、何やらムスッとした表情を浮かべたまま、並行して移動している。
すると、二人が目指している柱にて、大規模な爆発音が聞こえてきた。大魔法同士をぶつけ合ったような轟音に、思わず眉をしかめてしまう。
何があったのだろうか、と疑問に思ったが、すぐに答えに辿り着く。

（夜光……。頼むから、死なないでくれ……。もう、俺は仲間を失いたくないんだ……）

あのとき、夜光はフィオナを追いかけるために『痛みの石室』から姿を消した。
フィオナのいう通り夜光が『執行者』となり得ているならば、今頃フィオナと戦っていてもなんら不思議はない。
彼はもう仲間を失いたくはなかった。今度仲間を失ってしまうようなことがあれば、きっと彼は壊れてしまう。
それほどまでに、彼の心は弱く、脆いのだ。

そして、ようやく柱にたどり着いた二人は、柱の大きさに目もくれず中に入る。
螺旋階段の先にある一つの部屋。そこに向けて二人は動き出す。
虚空瞬動を繰り返し、上に昇っていく。周りの景色は延々と同じものが続くだけだった。
そんなものにも目もくれず、ただただ一点を目指す。
光が徐々に大きくなってくる。もうすぐ、螺旋階段の先にある部屋に辿り着く。
そこで、シキは思わず目を疑ってしまった。夢だと、幻だと信じたかった。だけどこれは、紛れもない現実だ。
部屋は限りなく白で統一され、椅子が一つあるだけで何もない。
ただ一点、そこだけは赤色に染まり上がっていた。その赤に倒れ込む一人の少女の姿。
それは、今の仲間に裏切られたと精神不安定になるシキの精神を、さらに揺さぶるのには十分すぎるものだった。

「よ、こう……？」

声がでない。喉が渇く。体が震えて、力が出ない。
だけど彼は一歩一歩、確実に床を踏みしめそこに倒れている少女――夜光の元へと歩み寄る。
近くまで近寄った彼は、そこで力なくどさりと膝をついた。
大量の血を流し、明らかに即死のダメージを食らっている少女。
それでもまだ、息はあった。
シキは夜光を抱き起こす。

「夜光、死ぬな！！　死ぬんじゃ、ねェよ……！！　エヴァさん、回復魔法を！！」
「……すまない。私は治癒系の魔法は使えないんだ」
「ッ……。クソォッ！！」

シキは夜光を抱き起こしている腕とは反対の腕で、床を思いっきり殴り付けた。
今ほど魔法を習わなかったことを悔やんだことはない。今更後悔しても遅いが、それでも後悔せずにはいられない。
傷ついている仲間を目の前にして、何も出来ない自分に腹がたつ。
噛み締めた唇からは血が出て、顎を伝い床に落ちる。
ポタリ、という音が聞こえる。この部屋で今の音は嫌というほどに響いた。
それはただ単にシキの耳が集中して取り込んだのか、はたまた部屋のせいかと言われれば間違いなく前者だ。
ふと、頬に何かが当てられるのを感じた。
閉じていた目をゆっくりと開き、自分の頬に何が当てられているのかを確認したシキは目を見開く。

「泣くんじゃ、ないよ……。アンタは……男の子、だろ……？」

息は切れ切れではあったが、しっかりと聞こえてきた夜光の声。
弱々しく呼吸をする彼女からは、いつもの勝ち気な表情を見ることは出来ない。
それでも、そうだったとしても、シキにとっては夜光が生きているということが何よりも嬉しかった。

「アンタに……頼みたいことが……」
「喋るな、すぐに回復魔法を使える奴を――――」
「――――いいから、話を……聞いて……」

シキの言葉を遮るように、小さく、それでいて確かな意思を持った言葉が発せられる。
荒い呼吸を整えながら、なんとか言葉を発するために口を動かす。

今の夜光にとっては、話すだけでも相当な痛みを伴う行為だ。
それなのにも関わらず、夜光は傷を治すことよりも、伝えるべきことを優先した。

「先生を、助けてあげて……。先生は……苦しんで、るから……」
「フィオナが？　だけどあいつは……」

俺の仲間を殺した、と言葉を続けようとしたが、言葉は続かなかった。
こんなに苦しそうにしているのに、自分が助かることよりも自分の師であり、敵であった人物を助けてくれと頼んでいるのだ。
ここで私情を挟み、夜光の願いを無下にするわけにもいかなかった。理屈では分かっているが、それを承諾しきれないのもまた事実。
シキは夜光の言葉に対して頷くことは出来なかった。
しかし、夜光はそれを肯定と受け取ってしまったのだろう。
一回だけ笑みを見せたあと、目を閉じ、今度は本当に動かなくなった。それでも死んだわけではない。

「夜光……。ゴメン、約束……守れないかもしれない」

気を失った夜光に持っていたローブをかけたあと、夜光を床に寝かせたシキは呟く。
もう我慢の限界だった。村の仲間を殺されただけでなく、夜光までもがこんなヒドイ目に遭わされたのだ。
誰よりも仲間を大切に思っているシキが、我慢しきれるはずがない。
目指す場所はこの柱の最上部。
シキは、再び歩き出す。

◇

「……来たか。待っていたぞ、クロカミ」

柱の最上部にて、フィオナは入り口を見ながら呟いた。

この部屋も中間地点に設置されていた部屋と同じで、白で統一された何もない部屋だ。

ただ違うのは、この部屋から感じることが出来る異様な気配。その気配はフィオナから発せられている。

しかし、シキにエヴァンジェリンはそれを気にした様子はない。

腰に携えたライフルを引き抜き、ただただフィオナを睨み付けるのみ。

「待ちわびたぞ、このときが来るのを。さあ、貴様の全てを私にぶつけてみろ」

まるで弟子の成長を楽しみにするかのような気軽さで、フィオナは言う。

シキは答えない。ライフルを抜き放ったまま、目を閉じ、自らに宿る力を呼び覚まさせる。

フィオナと本当に仲間になったときから、聞こえてこなくなった『あの声』。

あのときは使い方を間違えていたのかもしれない。今も間違っているのかもしれないが、それでも構わなかった。

自分の『力』は自分だけのもの。それをどう使おうと、知ったことではない。

（来い……来いよ）

全ての神経を、集中させる。

もはや精神世界と呼べるような空間に立っていると錯覚している

シキの周りは、闇よりも暗かった。
表面はまるで波立っていない水面のように滑らかだ。
――ドクンッ！！
滑らかな水面に水滴が落ちたかのように、シキを中心に波紋状に波が広がる。
心臓がより強く鼓動し、気が高まる。
赤色の紋様が体に浮かび上がり、身のうちから力が沸き上がってくるような感覚がくる。

（俺は、ここにいる！！）

開いていた拳を握りしめ、力を内包する。あくまでも『力』を宿すのは身のうちに。
体外に漏らすなどということはしない。『力』の全てを閉じ込める。
赤色の紋様が、シキの鼓動に合わせて力強く点滅する。
そして、シキは高らかに叫ぶ。自らの中に内包されている『力』の名前を。

「ラファエエエエエエエエエエルッ！！」

シキの叫びにフィオナ、いや、『オーディン』はニヤリとする。
かつては仲間だった二つの力が、時間を越えて衝突する。
信念と信念。この二つが激突するとき、物語は始まりを告げる。

第四十九撃『過去と未来と決別と――前編――』（後書き）

次回で過去編最後ですッ！！
感想待ってますッ！！

第五十撃『過去と未来と決別と――後編――』（前書き）

七夕に投稿ッ！！
……特に意味はありませんが……。
今回で過去編は終わりますッ！！
では、どうぞッ！！

第五十撃『過去と未来と決別と――後編――』

シキの周りの空間が歪み出し、歪んでいた空間に縦の亀裂が入る。
亀裂の入った空間は徐々に開かれていき、完全に開かれたときには、無限の剣を背景にシキは立っていた。
この力――『武装還元』を知っているフィオナからしたらそれは懐かしい産物でしかないが、これを初めて見たエヴァンジェリンからしたら驚き以外の何物でもない。
空間に現れた無限の剣の山の一本一本が明らかに厳選された逸品で、異様なまでの雰囲気を纏っている。
以前に使ったときはまだ『ラファエル』を完全に制御できていなかったために、武器はただの鉄の屑だったが、今は違う。
シキは背中に手を回し、そこから二本の大剣を取り出す、
どちらもが名前は分からないが、歴史に名を残すような宝剣だ。

「――――ッ！！」

二本の大剣を取り出したシキは犬歯と敵意、そして殺気を剥き出しにしながらフィオナに真っ直ぐに走り出す。
速さはフィオナや『執行者』ほどというわけではない。
だが、それでも二人と同じ力を使っている以上、普通の者から比べれば格段に鋭い速さだ。
大剣に取り付けられた電動鋸のような刃が振動し、部屋に嫌な音を響かせる。
刃が地面をガリガリと削り、火花を散らせる。
動きは一直線。さすがのフィオナもこればかりには落胆せずにはいられない。

（強くなろうと精神は所詮は子供。怒りに身を任せたか……）

フィオナは一直線にこちらに向かってくるシキに露骨に落胆した表情を見せながら、秒速数十キロの魔力弾を放つ。

今までのシキなら避けるどころか、見ることすらかなわなかっただろう。

しかし、今の彼は『ラファエル』を使っているために、避けきれないまでも見切ることは出来る。

空間に収納されていた無限の剣が動き出す。繋がり、絡み合い一つの砲撃のような、いわば剣砲撃がフィオナの放った魔力弾とぶつかり合う。

ぶつかったのは一つだけではない。シキの四方にできた空間から、剣砲撃がぶつかった。

ぶつかり合った量と質の二つの攻撃。

拮抗して少しでも気を抜いてしまえば押し返されてしまう状況に、シキは全く気劣りもせずに果敢に踏み込む。

魔力弾は剣砲撃により防がれている。

フィオナの攻撃の手段は魔力弾を撃つことだが、シキの剣砲撃を防ぐには撃ち続けなければならない。

それに対してシキは剣砲撃をやめずとも、フィオナに攻撃をすることが出来る。

状況は僅かにシキが有利に見える。

「――――うらぁあああああッ！！」

フィオナの背後に回り込んだシキは、フィオナの頭に向かって全くの躊躇いもなく、片方の大剣を降り下ろす。

本調子でないにも関わらず、『執行者』との戦いで『時空掌握』を使いすぎたフィオナは今は『時空掌握』は使いたくない。

舌打ちをしながらフィオナは魔力弾を撃つのを中断し、空中に身

を投げ出す。もちろん後のことを考えての行動だ。
フィオナを捉えることが出来なかった大剣は轟音を立てて床にぶつかり、床を粉砕させていた。
だがそんなことを気にしている暇はない。
床に叩きつけた大剣を即座に離し、空中で回転し、遠心力を乗せた一撃を回避したフィオナの真上から振り下ろす。

「甘いぞ、クロカミ。そんなことでは私を殺すことはおろか、虫も殺せない」

だが遠心力をも乗せ、普段の数倍の威力となった一撃も、当たらなければやっていないと同義だ。
シキが大剣を振り下ろす直前に、彼女はシキの大剣を持つ腕を魔力弾で貫き、大剣を離させている。
大剣による二連撃が回避されるなど、彼にとっては想定内だ。本命はフィオナの後ろから迫る四つの剣砲撃だ。
しかし、その攻撃もフィオナにとっては想定内の出来事でしかない。
虚空瞬動を使い、剣砲撃が狙いをつけていた位置から離脱し、再び体勢を整える。
そして、シキや剣砲撃がこちらに向く前に魔力弾を連射する。
体勢を整えたフィオナに対して、シキはまだ整えきれていない。

「くっ……っ！！」

苦痛の声を漏らしながらも剣砲撃に使っていた刀剣類を壁状に敷き詰め、フィオナの魔力弾を防ぐ。
もはや一つの音で聞こえてくる魔力弾が刀剣類を弾く音を耳にしながら、シキは腰に手を回して『武装還元』により双剣を取り出す。
かしゃん、と双剣を握りしめたシキは回り込むようにフィオナに

向かって走り出す。
刀剣類の盾から抜け出したシキを、フィオナが見逃すはずはない。
狙いをすぐさまシキに定めて、引き金を引く。
秒速数十キロの魔力弾がシキに迫るが、それがシキに当たるなどということはない。
なぜならば、自分が移動するのに合わせて、刀剣類の盾も動かしているからだ。
こうすることにより自分への被弾を回避、かつ接近戦に持ち込めるようにしているのだ。

（なるほど、考えたな。だが、やはり詰めが甘い。そのような盾、無意味に等しい）

不意にフィオナが放つ魔力弾が発生させる剣戟のテンポが遅くなった。
そのことにシキは疑問を覚えるが、攻撃が遅くなったのはチャンスだと思い、さらに速く動く。
だが、それが間違いだったことを、すぐに思い知らされることとなる。
今までフィオナの魔力弾を防いでいた刀剣類の盾の一部が貫かれ、シキの頬にかする。
いきなりのことで不意をつかれ、動揺したシキに畳み掛けるように刀剣類の盾が、魔力弾によって次々と貫かれる。
確かに魔力弾の速さは遅くなった。だが、魔力弾の威力が先程とはけた違いだった。
一発でも被弾してしまえば重症、下手をすればそれだけで瀕死になるえるほどだ。

（くそっ、マズイ……っ！！）

そう思ったが既に時遅し。刀剣類の盾を貫いた魔力弾がシキの腹部を貫通する。

たったの一撃。たったの一撃でシキの体勢が崩れ、血が喉を通り、刀剣類が制御を失い床に大量に突き刺さる。

膝をついたシキは床に盛大に血をぶちまけた。

魔力弾に何か作用があるのではないかと思わせるほどに、シキの吐血した量は尋常でなかった。

息を荒くし、たったのこれだけで膝をついてしまう自分に嫌気がさしながらも、フィオナを睨み付ける。

重症を喰らった自分に対して、フィオナは未だに健在だ。

『執行者』と戦ったことなど微塵も感じさせない動きに、思わず疑ってしまう。

――――こいつの本気は、底がないのではないかと。

実際はそんなことはない。だが、そう錯覚させてしまうほどに二人の実力の差は圧倒的だった。

「どうした？　その程度ではあるまい。それとも、貴様の決意はその程度のものということか？」

「う、る……せェェェェェェェェェェッ！！」

近くに寄ってきたフィオナに、『武装還元』で取り出した双剣を振るう。

右の刃をフィオナの首元めがけて振るうが、それは小さな動きで回避される。左の刃も同じように回避された。

少し動くだけでも激痛が伴うために、どうしても動きが単調になってしまい、簡単に避けられてしまう。

あまりにも動きが単調なために、飽きてきたフィオナはシキの腹部を蹴り、シキを弾き飛ばす。

「そのようなことでは、私は殺せないぞ」

壁に背中を強かに打ち付けてしまい、肺から強制的に空気が押し出されてしまう。
そこに追い討ちとばかりにフィオナの魔力弾が迫ってくる。
こういう場面に限って、魔力弾の動きが妙に遅く見えた。動けるならばまだしも、動けない状態のこれではただの恐怖でしかない。
『死の恐怖』と呼ばれていた彼からしたら、これが死の恐怖だと理解する機会となった。
ここで目を瞑れば逃げたこととなる。逃げることだけはしたくなかった。
魔力弾が迫ってくる。だが、その魔力弾は魔法によってかき消された。

「クロカミ。私を忘れてもらっては困るな」
「エヴァ、さん……？」

シキは驚愕の表情を浮かべながら、魔力弾を掻き消した人物の名前を呟いた。
エヴァンジェリンこそ、フィオナの魔力弾を『闇の吹雪』により掻き消した張本人だ。
ふわりと長い金髪を靡かせ、ゆっくりとシキの前に降り立つ。
実のところ、シキはエヴァンジェリンの行動が信じられずにいた。
この戦いはいわば神の力を継ぐもの同士の戦いであり、一般人であるエヴァンジェリンが介入するなど、信じられなかった。

「エヴァンジェリン、か。邪魔しないでもらおうか。貴様の出る幕などない」
「だろうな。私とお前の実力には差がありすぎる」

ではなぜだ、という言葉を飲み込み、エヴァンジェリンの言葉を

待つ。
エヴァンジェリンは分かっているのだ。フィオナと自分との実力の差がありすぎているなどということは。
だがそれでもエヴァンジェリンは身の安全ではなく、戦うことを選択した。
それ相応の意思があっての行動としか思えない。

「こいつの敗北は私の名誉を傷付けることになる。理由など、それだけで十分だろう？」
「ふん、まあいいだろう。叩き潰すまでだ」

フィオナはそういうが早いか、エヴァンジェリンに向かって魔力弾を放つ。
秒速数十キロの魔力弾はエヴァンジェリン程の強者となれば、空気の流れで感じとることが出来る。
しかし、エヴァンジェリンは動かない。動く必要がなかったからだ。
今の魔力弾は威力を重視するよりも、速さを重視したものだった。
故にフィオナの魔力弾は、剣砲撃による盾で防ぐことが可能になる。
現にエヴァンジェリンの前には剣砲撃の盾が展開されており、魔力弾を防いでいる。
シキは乱れた息を整えながら、戦いに介入したエヴァンジェリンに向き直る。

「エヴァさん……。ここは危険ですから、俺に任せてください」
「ふざけるな。誰が貴様の指図など受けるか。それにな、クロカミ。お前は夜光になんと頼まれたのだ」
「え……？」
「あいつを助けてくれ、そう頼まれただろう。貴様は私に教えてく

れただろう――――思いは伝わる、ということを」

エヴァンジェリンの言葉にシキはハッとする。

今までは夜光から頼まれたことなど考えてはおらず、ただただ憎しみをぶつけていたに過ぎなかった。

そしてシキは逆に教えてもらった。思いは伝わる、ということを。

あのときは、意図してエヴァンジェリンにそのことを教えたわけではなかった。

ただ、エヴァンジェリンにそのことを知ってもらいたく思っていただけだ。

忘れていたそのことを、エヴァンジェリンはシキに教えてくれた。

そして、シキの思いとは――――。

「戦おう。俺は――――フィオナを助けたい」

「よく言った、それでこそ貴様だ。ならば行くぞ、まずは奴を止める」

「あぁ！！」

エヴァンジェリンの言葉を受けたシキは、剣砲撃の盾を展開しながらフィオナに向かって走り出す。

言わずとも既に分かっている。エヴァンジェリンが後衛をやり、シキが前衛をやる。それが今のベストの陣形だ。

フィオナを殺（たお）すのではなく、助けると決めた以上、万物を殺すことに特化した銃を使うわけにはいかない。

となると今のシキが後衛をやるよりも、エヴァンジェリンがやった方が数倍よい。

シキは歪んだ空間に手を突っ込み、ある一つの武器の束を握り締める。

取り出したのは『旧式武装（ロストウェポン）』である鎌だ。

「私を助ける……か。そんな子供染みた感情で、私を殺(たお)せるとでも？」

「これが、俺の想い。夜光に託された想い。俺はもう……『死の恐怖』には、ならない！！」

『旧式武装(ロストウェポン)』の鎌を振り上げ、フィオナに向かって振り下ろす。

魔力弾を撃つのをやめ、フィオナは『旧式武装(ロストウェポン)』による一撃を回避する。

今の一撃は間違いなく今までにおいて、最高の一撃だった。何を隠そうフィオナがそれを身近に感じている。

エヴァンジェリンを狙うのをやめたフィオナは、シキへと狙いを変える。

引き金を引き、大量の魔力弾を放つ。

相も変わらず数は計り知れない。だが、『旧式武装(ロストウェポン)』による一閃は、それを全て凪ぎ払った。

これは『旧式武装(ロストウェポン)』を使っているからというのもあるが、決してそれだけというわけではない。

彼の想いが、刃が彼の想いを受けて力を引き出している。

フィオナを救いたいという純粋な想い。それは時として想いもしない力を発揮する。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック――――契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。全ての命ある者に等しき死を、箕は安らぎ也。『おわるせかい』！！」

そして、エヴァンジェリンからシキに狙いを変えたということは、エヴァンジェリンに攻撃の隙を与えることとなる。

百五十フィートに渡り凍結された世界は、まさに氷の芸術品(アート)という名前こそがふさわしい。

その氷の芸術品(アート)の中には、フィオナが閉じ込められている。

これでようやく戦いは終わりかと思ったが、そうではない。
フィオナを閉じ込めていた氷の芸術品（アート）が、まるで時間が逆行したかのように消滅し、フィオナが地に降り立つ。

「これで終わりか？　これで私を殺（たお）すなど、笑わせてくれる」
「言ったはずだ。俺は、アンタを助けるって！！　もう二度と、仲間を、全てを失いたくないから！！」

力の限りにシキは叫ぶ。
彼の叫びに呼応するかのように体に浮かび上がった紋様が鼓動し、点滅する。
想いが『旧式武装（ロストウェポン）』に込められる。
この想いの全てはフィオナに向けられたモノであり、フィオナを知る者全ての者の願いだ。
不意に世界が揺れた。空間が歪み、まるでガラスを割るかのように世界という壁が崩壊した。
急に襲いかかる無重力空間に一瞬だけ体勢を崩しながらも、すぐに体勢を整える。

「クロカミ……。こい、お前の全力……私が受け止めてやる」

不謹慎ながらもシキは、今のフィオナの言葉を嬉しく思ってしまった。
以前に戦ったときは自分の全力を否定され、認められなかった。
今は自分の力を認めてくれて尚、全力で相手にしてくれると言った。
フィオナは確かに村の皆を殺し、夜光を傷つけた張本人で復讐するべき相手だ。
それでも今は、師としてのフィオナの言葉が嬉しかった。
だからこそ全力で、自分の持てる力を全てをフィオナにぶつける。

「行くぜフィオナ……。これが今の俺の――――」

そこまで言ったシキの姿が忽然と消えた。

エヴァンジェリンはもちろんのこと、フィオナですらも、シキがすぐにどこに行ったか分からなかった。

まさに消えたという表現が似合うほどに、気付かない間にいなくなっていたのだ。

気づけなかったが、それも一瞬のこと。後ろに気配を感じたフィオナは双銃を盾代わりにして、初めて防御の体勢をとった。

「――――全力だァッ！！」

そう初めてなのだ。今までは避けるか魔力弾で相殺させる。あとは近づかせないだけだ。

それが今は接近を許してしまうだけでなく、防御の体勢をとらせた。

これぱかりはフィオナも驚かざるを得ない。

戦う前のシキは足元にも及ばず、さっきまでは手加減してちょうどくらいだった。

だが今はどうだ。『執行者』との戦いで疲労し、本調子ではないものの今出せる本気に、シキは食らい付いてきている。

（まさか、恐るべき早さで成長している……!?　クロカミ、やはり貴様は私の理想通りの人物だっようだなッ！！）

フィオナの思っている通りシキは極限の殺し合いの中で、急速に成長してきている。

極限の命の掛け合いの中に何かを感じ、彼の中の生存本能が成長することを求めている。

この拮抗している打ち合いの中でさえも、シキは成長している。
双銃でシキの鎌を弾き返し、腹部に銃口を向け引き金を引く。だが引き金を引くときには、シキの姿はそこにはない。
またも気配が消えたのだ。シキがどこに行ったのかを、彼一人に意識を集中させる。
だからこそ、フィオナは忘れていた。

「どこを見ている、フィオナ・エリシオン。貴様の相手はクロカミだけではない」
「くっ……エヴァンジェリン……！！」

シキに意識を向けすぎたフィオナは、エヴァンジェリンを接近することを許してしまった。
二人の距離は僅かに数十センチ。
エヴァンジェリンの右腕には光の粒子が集まり、刃のような形に固定されている『断罪の剣』があり、既に振るわれている。
フィオナの射撃範囲ははっきりいって死角はない。だが、これば かりは避けきれない。
故にフィオナはシキの気配を探しつつ、エヴァンジェリンの『断罪の剣』を片方の銃で受け止める。
そこでエヴァンジェリンは、計算通りとばかりにニヤリとする。

「フィオナ・エリシオン、自分の後ろは見るな。しっかりと私の後ろを見ろッ！！」

刹那、エヴァンジェリンの後ろよりシキが飛び出るように現れた。
フィオナがシキの気配を感じ取れなかった理由。それは、エヴァンジェリンという大きな気配に、自分の小さな気配を隠していたからだ。
大きな気配の中に隠された小さな気配。意識の切り替えを無理矢

理にやらされていたために、分からなかったのだ。
シキの鎌がフィオナに向かって振るわれる。首元に目掛け、ただ真っ直ぐに。
今のフィオナは完全に虚を突かれ、無防備な状態となっている。つまりは隙だらけということだ。
狙うなら今しかない。そう思った次の瞬間、シキの顔面に魔力弾が放たれる。
百戦錬磨であるが故の反射的な行動。それがフィオナを生かした。
完全に体勢が崩れたシキの鎌の動きは鈍くなり、フィオナは鎌による一閃を回避する。

「まだ、終わるわけには……いかないんだッ！！」

フィオナによって距離を置かれるが、それを一瞬にして埋める。
鎌による斬撃と、双銃による弾撃。二つの撃がぶつかり合い、余波を周りに散らす。
『旧式武装（ロストウェポン）』は、対神を目的とされた武装だといえる。
神の力を得ているフィオナに対してこの武器は唯一の弱点であり、危険性だといえる。

「私にばかり集中していてもいいのか？　貴様は失いたくないのだろう？　仲間を」
「……？　――ッ！？　エヴァさん！！　回避してくださいッ！！」

最初、シキは何を当たり前なことを言っているのだろうと思ったが、フィオナが無駄なことを言わない性格だったことを思い出した。
仲間が大切、ということは仲間が傷付くのが許せないというのと同義だ。
つまり、フィオナはエヴァンジェリンを攻撃することにより、シキに隙を作らせようというのだ。

それに気づいたシキだったが既に遅い。エヴァンジェリンには大量の魔力弾が放たれている。

剣砲撃を盾にしようともこちらに集中しているために、エヴァンジェリンに割く余裕はない。

だからとはいえエヴァンジェリンを見殺しには出来ないシキは、思わず叫んでいた。

しかし、彼女はそのようなことはどこぞの吹く風のように涼しい顔をしている。

「『闇の福音』を嘗めるな。闇の吹雪、術式固定（スタグネット）――――掌握（コンプレクション）ッ！！」

本来放出されるはずの魔力の塊を掌大の球体のように圧縮し、それを握りつぶすように体内に取り込む。

するとエヴァンジェリンの白目がすぅーっと黒色に変化し、より狂暴性が増したように見える。

『闇の（エレベア・）魔法』。これこそがエヴァンジェリンが産み出した独自の魔法だ。

そして、エヴァンジェリンに当たるはずだった魔力弾が、数メートル直前で、氷の塊となった。

これが『闇の吹雪』を体内に取り込み、発生した効果だ。

数メートル圏内に入った魔力を、氷の塊にすることが出来るのだ。

「クロカミ、私を気にしている暇があるならば、目の前の相手に集中しろ！！」

「エヴァさん……。スミマセン、頼みます！！」

エヴァンジェリンの言葉を受けたシキは、改めてフィオナへと狙いを定める。

いつもならば怒りで我を失うような場面だが、今はエヴァンジェ

リンを信用している。
きっと彼女ならば、怒りを覚えているような暇があるならば少しでも敵に集中しろ、というだろう。
だからこそフィオナに対して集中し、戦うのだ。
鎌を改めて両手で握り直し、フィオナへと狙いを定める。

「フィオナ！！　俺は、アンタを助ける！！　俺の想いを全て伝える！！　だから――――」

シキは叫びながら遠心力を刃に乗せつつ、体の捻りも利用して横凪ぎに鎌を振るう。
刃が唸りをあげ、フィオナが放つ魔力弾を悉く弾き返していく。
想いの全てを刃に乗せて、想いを伝えるために彼は鎌を振るう。

「――――アンタの想いも、俺にぶつけろォッ！！」

その言葉を聞いたフィオナはニヤリとしながら、まるで全てを受け入れるかのように双銃を離し、両手を広げる。
その行動を信じることが出来なかった。先程までは極限の命の掛け合いをしていた。
なのにここに来て、負けを受け入れるかのような行動。
シキは思い出す。フィオナは常々彼に告げていた、ヒントはもうとっくに提示されていたのだ。
フィオナが彼を強くし戦った理由。それは自分を殺してもらうこと。
それを気づいたからとはいえ、勢いづいた刃を止めるなどということは出来ない。
漆黒の刃がフィオナの胸を貫通し、そこでようやく刃が止まった。

「なんで……なんでだよ！！　なんで、だよ……！！」

「これで、いいんだ……ようやく、全てが終わる……」

震える声でフィオナに話し掛けたシキ。

それに対してフィオナは実に穏やかで、先程まで戦っていたとは思えないほどに清々しい表情をしている。

胸を貫き、出血をしているにも関わらず、まるで痛みを感じないかのような表情に、シキだけでなく、エヴァンジェリンですらもが驚愕の色を示している。

「真実を、教えてやろう、クロカミ……。お前を鍛えた、本当の意味を……」

「本当の、意味……？　なんなんだよ！！　意味ってなんなんだよ！！」

「騒ぐな……。もう、私には時間がないんだ……」

いつの間にか出血が止まっていた。

別に止血をしたと言うわけではない。ただ、『時空掌握』で自らの時間の流れを止めながらに動かしているだけだ。

矛盾しているが、この力を使えるからこそ、彼女は神の名を与えられたのだ。

「私の『器』には、世界を破壊する『魂』を封じ込めてある……。それが復活すれば、世界は消える。

昔の私なら、それでも良いと思っていた。だが、私はこの世界で生きすぎた。故に、この世界をいとおしく思ってしまった。

確かに世界には憎しみや悲しみが溢れている。しかし、それこそが……世界というものだろう……？

私は護りたくなったのだ。だから私は、『アレ』を体内に封じ込めたまま、私もろごと破壊してしまおうと考えたのだ……」

フィオナの言っていることが理解できなかった。いや、理解したくなかった。

話を要約するならば、世界を破滅に導くという『魂』を『器』、つまり自分の『肉体』に封じ込め、自分を犠牲にすることで世界を救おうというのだ。

「だからクロカミ……。お前のライフル、それと、『ラファエル』が必要だったのだ。

『ラファエル』自体は予想外だったが、結果的には役に立ってくれた……。

『旧式武装（ロストウェポン）・虚刀（コトウ）』、それがこの鎌の名前……。

全ての因果を破壊し、孤立した空間に永遠に閉じ込めることで、魂ごと消し去る鎌だ。

そして、私の願いはようやく叶う」

フィオナがそういった瞬間、『旧式武装（ロストウェポン）・虚刀（コトウ）』から不可思議な光が発生し、フィオナを包み込んだ。

あまりに突然だったためにシキは鎌を手放してしまい、フィオナかは離れてしまう。

いつの間にか周りの空間は元に戻っている。

だが、今はそんなことを気にしている暇はない。今は一刻も早くフィオナを助けなければならない。

「ふざけんな！！　アンタはそれでも良いかもしれない！！　でもな、残されたみんなはどうなるんだよ！！

アンタに助けられたみんなは、アンタを助けられなかったっていう後悔に曝されるんだぞ！！」

「気に病む必要はない……。これは私のただの偽善（エゴ）に過ぎない……。

それに、私はお前の村の仲間を殺した。罪滅ぼしとでも思え……」

そうは言われても、納得できないことがあるのも確かだ。
シキは夜光にフィオナを助けてくれと言われた。さらには自分も彼女を助けたいと願った。
それなのに、フィオナはシキに殺してもらうことを選び、止めを指してもらった。
フィオナの想い、それは――――。

「――――世界を救いたい。笑われるかもしれない。それでも、私は救いたかったのだ……」
「世界を救いたい？　俺は、アンタを救いたかった！！　なのにアンタは……」
「泣くな、クロカミ。男だろ？」

フィオナはそう言いながら、悔しげに拳を握りしめ、涙を流しているシキの頭を撫でる。
その手はとても暖かかった。時間が止まっているとは思えないほどに、暖かかった。
想いは伝わる。それは、自分自身が伝えたかったこと。フィオナの手からは、彼女の想いが伝わってくる。
――――ありがとう、と。

「男だって……泣きてェときがあんだよ……」
「……そうか。なあ、クロカミ。お前は、どこにいるんだ？」
「俺は……ここにいる」
「私もいつでも、お前の心（ここ）にいる」

フィオナはシキの胸を指差しながら、嬉しそうな表情を浮かべながらいう。
もう彼女には時間がないというのは明白だ。既にフィオナの体はほとんど消えてしまっている。

口を動かして何かを言っているようだが、もう声すらも聞こえない。

そして、フィオナが完全に消える直前、シキの脇を赤色の閃光が駆け抜けた。

目を疑うのも無理はない。駆け抜けた赤色の閃光というのは、さっきまで重症を負っていた夜光だった。

夜光は消えかける寸前の光の中に飛び込み、フィオナを追いかける。途中で夜光は振り返り、シキに告げる。

「ありがと、シキ。アンタのおかげで、先生は救われた。だけど、アタシの戦いは終わってない」

「何……言ってんだよ。帰ってこいよ、行くなよ、夜光！！」

「ゴメン……。シキは頑張ってくれた。今度は、アタシが頑張る番なんだ。大丈夫だよ、アタシは絶対に先生を連れて帰ってくる。またね、シキ」

そういって夜光は光の中に入っていった。それと同時に光は消え去り、フィオナと夜光の姿が消えてしまった。

まるで最初からそこに何もなかったかのように、ただただ空白の空間がそこにあるだけだ。

さっきまでの戦いなど、初めからなかったようにそこには静けさが戻り、無音が続く。

どさり、という膝をつくような音が聞こえた。その音の根源はシキだった。

膝をつき頭(こうべ)を垂らして、シキは力なくそこにひれ伏している。

今のシキは絶望に捕らわれている。助けたかった人物たちを助けることが出来なかった挙句、世界から消滅させてしまった。

もう二度と大切な人を失いたくないと思い力をつけたのに、結局は何も出来なかった。

「クロカミ……」

エヴァンジェリンですらもが声をかけることが出来なかった。
いつものシキだったならば、落ち込んでいようとも彼女ならば罵倒していただろう。
だが、今ばかりはそれは出来なかった。涙を流し、悔しげに唇を噛み締めている。

「俺は……こんな、こんな結末、望んじゃいねェッ!!」

真っ白な空間に響き渡る、咆哮にも似た悲痛の叫び。
心の底からの叫びだった。彼が望んだのは、みんなを助けることが出来る結末。
結局のところ、彼は何も出来なかったのだ。力がないばかりに失い、後悔する。
あのときと同じだった。あのときは村の仲間と義父を失い、今回は大切な師と友人を失った。

「俺は……また助けられなかった……。こんな気持ちを味わうくらいなら、もう仲間なんていらねェ……。俺は……私は、もう仲間など必要はない」

この瞬間、シキの全ては仲間を得るということを拒絶した。
もう悲しみを味わいたくないという願いから、彼は逃げる道を選んだのだ。
もっとも傷つかず、もっとも厳しい棘の道を……。

「クロカミ、あれで良かったのだ。あれが奴の望みだろう?」
「……ならば、貴様は大切な仲間に殺してくれと頼まれれば、殺すのか?

……さようなら、エヴァさん。もう二度と会うこともあるまい」

こうしてシキは壊れ、世界を恨むようになった。
仲間を失いたくないがために逃げ、戦うことを選んだ。
もう後戻りは出来ない。それが、彼の決めた道だから。

◇

「……これが、俺の全てだ」
『……』

そういって私は皆を見るが、やはり皆の表情は暗いものだった。
言わずとも分かる。私の過去は、とてもではないが綺麗と呼べる代物ではないからな。
今話したのは私が『死の恐怖』となった理由ではなく、『死の恐怖』ではなくなった理由だ。
それにこれは、『神格事件』の前触れだと言ったとしても、過言ではないはずだ。
フィオナの『オーディン』や私が使用していた『ラファエル』。
このどちらもが間違いなく神格のものだ。
そして、『執行者』というのは『神格』を殺す者のことだ。夜光も、神格と関係していたのはつい最近になってから知ったこと……。

「はぁ……俺の過去は確かに暗いけど、今、俺はここにいる。みんなを護る。だから気にすんなって」
「そう、じゃな。そうじゃ、今のシキはここにおる。それで良いのじゃ」
「そうですね。過去がどうでも、シキさんはここにいます。それでいいじゃないですか」
「そうです、昔は昔。今はそんなことはない関係ねェです」

テオとマナ、ミカの言葉にあぁ、と一言だけ答える。
なあ、フィオナ。今の俺のことを見てくれてるか？
アンタのおかげで、俺は居場所を得ることが出来たし、護りたい仲間を護れるようにもなった。
だからさ、今度は俺がアンタの想いを継ぐ。
俺が、アンタに代わって世界を護ってやるからさ。
見ててくれよ、俺はアンタの想いを護ってみせるから――――。

第五十撃『過去と未来と決別と――後編――』（後書き）

過去編が終わったので、前々から約束していたＲａｉＮ様とのコラボとなります。

そのあとはごちゃごちゃになってきた設定や、キャラ設定を出します。

感想待ってますッ！！

主人公設定＋α【3】

名前：夜光（よこう）
身長：１６５ｃｍ
体重：―――ｋｇ
一人称：アタシ
容姿：赤色の髪を肩の辺りで揃えており、髪の一部を白のメッシュにしている
服装は胸の辺りを包帯で隠し、下駄を掃き、ハッピのようなものを羽織っている。

＞ｉ２６８１１―２２９６＜

→イメージはこれです。
またもやＲａｉＮ様より描いていただきました！！
年齢：不明

『能力』

・『執行者』
神格を殺すことのみに特化した状態。
この状態を発動した場合は自我は消滅し、ただただ敵を殺すことのみ遂行する。
発動条件は三ツ又の双剣『三爪痕（トライエッジ）』を装備しているとき。

『強さ』

筋力：Ｓ→？

耐久：Ａ＋→？
俊敏：Ｓ＋→？
魔力：Ｄ→？
氣　：Ｂ→？
※通常時→『執行者』発動時。

『備考』

三千年前以上に神格に対抗するために創られた、簡単な言葉に表すならば『人造人間（ホムンクルス）』
八人の神格のうち、五人の神格を殺した。
神格が滅びる切っ掛けとなった事件時に、三対一で戦い、二人を殺したが封印されてしまう。
ある時に封印が解け、偶然その場に居合わせた神格の生き残りと共に旅を行う。
復活当時から最近までの記憶が曖昧で、しっかりと覚えているのは十二年前から。

『一言』

夜光
「『アタシは一途で、しつこいぞ？』……えっと、これがアタシのモデルになった奴のセリフ……？」

◇

名前：フィオナ・エリシオン
身長：１７０ｃｍ
体重：―――ｋｇ
一人称：私

容姿：空色の髪を小さめなポニーテールでまとめている。
黒色のロングコートを羽織っており、腰には双銃が装備されている。
性格：現実的で、相手の隙を見る。
あまり情けはかけずに、一撃必殺で敵を殺すような性格。
年齢：不明

『能力』
・時空掌握
空間と時間を自らの支配下に置き、自分の思いのままにすることが出来る能力。
通常の時間から切り離した空間の時間を止めることなどが可能。
ただし、止めた時間に干渉することはフィオナであろうと不可能である。

『強さ』
筋力：ＥＸ→？
耐久：Ｓ＋→？
俊敏：ＥＸ→？
魔力：ＥＸ→？
氣　：Ｓ＋→？
通常時→能力解放時

『備考』
本来ならば滅びたはずの八人の神格のうちの一人。
神の名を授かっており、時間と空間を司っている。
（オーディン）

『一言』

フィオナ
「『一つ、怪物は言葉を喋ってはならない。二つ、怪物は正体不明でなければいけない。三つ――――怪物は、不死身でなければ意味がない』　ふむ、確かにその通りだ」

◇神格の歴史◇

遥か昔、三千年以上前、今の魔法が現代魔法とするならば、現代魔法が構築される以前の時代に、神格は存在していた。
神格は旧文明人の中でも飛び抜けた力を保有し、神の名前を与えられた八人だ。

第一層『神格王』
第二層『???』
第三層『ラファエル』
第四層『ウリエル』
第五層『ガブリエル』
第六層『???』
第七層『オーディン』
第八層『ミカエル』

の八人で構成されていた。
？の部分になっているのは、名前すら本編に出ていないため。
この神格達は強力であったが故に独占欲が強く、日々いがみ合っていた。
唯一争わなかったのが、第八層『ミカエル』と第七層『オーディン』だけだ。
そして、神格というのはその時代の人間を、圧倒的な力により屈服させ、従わせていた。

ただ、それに納得出来なかった反乱分子が、神格に対抗するために一つの殺戮兵器を創り上げた。
これが後に『執行者』と呼ばれることとなる少女のことだ。
最初は反乱分子ごときが創り上げた人形だと侮っていたのだろう。
『執行者』の強さに第四層『ウリエル』と第五層『ガブリエル』、そして、第三層『ラファエル』が撃破される。
そこでようやく『執行者』の強さに気づいた残りの五人は、神格でも最優を誇る第二層『???』を第一層『神格王』の側に残し、三人で『執行者』の破壊を開始した。
今回は油断はなかったものの、『執行者』の実力は凄まじく、第八層『ミカエル』と第六層『???』の犠牲を糧に、第七層『オーディン』が『執行者』を封印する。

ここまでで『執行者』の戦歴は、今まで誰一人として神格を傷つけられなかったにも関わらず、五人もの神格を撃破。
実質的には第七層『オーディン』も戦える状態ではなかったために、六人を撃破したことになる。
無敵を誇っていた八層も、ここに来て第一層『神格王』と第二層『???』を残すのみとなった。
ただ、この頃第二層『???』は不穏な動きを見せていた。
そして、第七層『オーディン』が回復する前に、第二層『???』は反乱分子を率いて第一層『神格王』へと反乱を仕掛けた。
第一層『神格王』と第二層『???』の実力は第一層『神格王』の方が上。
しかし、第二層『???』の旧魔法を用いて、反乱分子を合わせて同等の力で死闘を開始した。
第一層『神格王』と第二層『???』の戦いは世界どころか、銀河を破壊する勢いだった。
第七層『オーディン』は二層の戦いから、世界を時間軸から切り離し、被害を無にした。

結果的には第一層『神格王』と第二層『???』は相討ちに終わり、その魂を世界に封印した。
第一層『神格王』の魂は、滅んだはずの第八層『ミカエル』の魂に封印した。
いずれ復活することを見越した二層はそのまま眠りにつき、第七層『オーディン』を残し、旧文明時代は終わりを告げた。

残された世界の表面に、魔法世界が構築された。
その世界で生き続けていた第七層『オーディン』は、封印されていた『執行者』と出くわした。
ただし、『執行者』は全ての力を失っていたために、第七層『オーディン』は共に旅をすることにした。
共に旅をし、世界の愛しさを学び、世界を護ることを決意する。
自らの体に封印されている、世界を破滅に向かわせる力を破壊するために、第七層『オーディン』は第三層『ラファエル』の力を引く者を求めて動き出す。
そして、この世界に第三層『ラファエル』の力を引く、『黒神織』が現れた。
こうして……第七層『オーディン』の旅の終点は、着実に向かってくることとなる。

◇

……と、まあ、このような感じですね。
実はまだまだ神格には設定があるのですが、ネタバレ防止のためにあえて載せてはいません。
さらにはシキにも秘密があるのですが、それは本編で明かしていきます。
神格の設定で分からない箇所があれば、遠慮なく質問してください。

では、感想待ってますッ！！

主人公設定＋α【3】（後書き）

◇次章予告◇

時は飛んで大戦から十年。
狙撃手は、様々な体験を繰り返した。
出会いを、戦いを――――別れを。
だか、それでも彼は歩みを止めない。

「私は、みんなに守ってばっかりだった……。でも、私もみんなを守れるように強くなりたい」

護られてたばかりだった少女が、強くなることを決意する。

「お前、クロカミ……か……？」

麻帆良学園にて再会した、二人目の師。
だがそこにいた師は、彼の記憶の中の師よりも、ずいぶん弱々しくなっていた。
故に引き金を引き、弱々しくした原因を殺す。

「応用型秘技――――血塗られた道　（プラスチック・ヴァレンタイン）」

その技は、まるで彼の道を示すようだった。

「君が弟さんを忘れない限り、弟さんはずっと『君の心　（ここ）』にいる」

悲しみに暮れる少女に、彼は告げる。
身近な者の死は、彼にとっても悲しいことだ。
だからこそ、放っては置けなかった。　そして、物語は加速し、
狙撃手は再び出会う。

「前にも言ったはずだ。お前は、俺の仲間だって。だから――――」

向かい合うは銃と双剣。
長い時間をかけて再会した二人は、再び戦う。
一人は助けるために。一人は殺すために。

第五章
『その竜族と少女達』

「――――今度こそ、お前を助ける」

力を手にした狙撃手は、人形となった双剣士を助ける。
双剣士の胸には、忍冬（すいかずら）の首飾りがあった……。

こんな感じです。
あまりにも短いので、今日中にもう一話投稿するかもしれません。
感想待ってますッ！！

第五十一撃『黄昏の姫御子との再会。強くなりたいと思うのはいいことだ』（前

すみません！！
リアルでサッカーの試合があり更新が遅れました！！
今回から新章突入ですッ！！
いったい私は……どこに向かっているのだろうか……。
では、どうぞッ！！

第五十一撃『黄昏の姫御子との再会。強くなりたいと思うのはいいことだ』

私がテオ達に私の過去について話してから、数年の月日が流れた。
表向きには平穏な日々が続いていたのだろうが、色々あったのだ。
今は特に語る必要があるわけではないから、そこの辺りは省かせてもらう。
遠からず未来にて、このことを話さねばならなくなるときがきっと来るだろうからな。
……と、暗い話はそこまでにして。現在、私とマナは旧世界に向かうためのゲートボードに向かっている。
理由はマナを『麻帆良学園』に編入させるためだ。
いくら強くなろうとも、勉学を身に付けなくとも良いということはない。そのためにマナを編入させる。
もちろん理由はそれだけではない。この理由も後程に話すことにする。この数年で起こった出来事に関係しているからな。

「シキさん。なんで麻帆良学園なんかに……。別に魔法世界(ここ)でもいいじゃないですか」
「ん？　いや、あっちには俺の友人もいる。それにあっちでも一緒なんだからいいじゃねェか」
「そ、それは、そうですけど……」

私の背中にしがみつきながら、マナは恥ずかしげな声色で私に言ってくる。
ちなみに、この数年間で起こったことは話してはいない。
別に話さずともよい内容だし、ここまでに大きな問題にマナを関わらせるわけにはいかないからな。
そんなことを考えながら進むこと約数分、近くで巨大な爆発音が

聞こえてきたために、私はそちらに視線を傾ける。
そこは何やら森の中のようで、誰かが戦っているように見える。

「シキさん。あれって……」
「まあ、見ちまったもんは仕方ねェし、行くとするか。それに――――」

――――あそこからは、僅かに『神格』の力を感じる。
大戦が始まる前、私は『神格王』の魂を自らの体内に封印することで、事件そのものを解決することは出来た。
だが、この世界に現界し、漏れ出した『神格』の力を全て封印・排除することが出来たわけではない。
世界各地に散らばったその力は、時に憑依した物体に理不尽な力を与え、扱いきれなければ暴走するという欠陥があると言うことが分かっている。
この何年間で幾つか力を発見し、排除してきたのだが、力がどの程度散らばっているかが分からない以上、私が動くしか方法はない。
とりあえず、『神格』の力に憑依されたとはいえ、神格の適合者などに比べれば数段劣る。
排除することなど、息をするのに等しい。

「さて、ゴミ掃除に向かうとするか」
「私もやるよ。シキさんが居れば私は負けない」

それはこの世界で私を倒せる者など、今はいないからな。
私と一緒に戦えば負けるはずがないであろう。
とりあえず私は、誰かが戦っていると思われる場所に向かった。

◇

（こいつがクロカミの言ってた『神格』って奴か……。ちっ、こいつはヤバイな……）

深い森の中、『紅き翼（アラルブラ）』のメンバーと別れて各地を旅していたガトウ、タカミチ、アスナは未確認生命体（アンノウン）に襲撃されていた。

ガトウはタカミチとアスナを守るように前に立ち、スーツのポケットに手を入れ、未確認生命体（アンノウン）の隙を伺っている。

この未確認生命体（アンノウン）の姿は人間をベースにし、他の生物の機能を適当に取り付けたように異常で、それでいて強力な力を有していた。

『紅き翼（アラルブラ）』のメンバーであるガトウでさえもが未確認生命体（アンノウン）に手も足も出ず、後ろの二人を守るのでいっぱいいっぱいだった。

未確認生命体（アンノウン）が動く。

地を這いずるような、奇妙な動きに合わせて、ガトウは『無音拳』を使うも、まるで手応えがない。

先程からこれの繰り返しだった。攻撃を繰り出すが、当たった感覚がまるでない。

こちらは体力が消耗していくのが分かるというのに、未確認生命体（アンノウン）の消費度が全く分からない。

いくら歴戦のガトウとはいえ、堪えるものがある。

舌打ちをしつつ、ガトウは後ろにいる二人に叫ぶ。

「タカミチ、アスナを連れて逃げろッ！！」

「は、はい！！」

助太刀したいタカミチではあるが、今の自分の実力ではガトウの足手まといになるのは目に見えている。

タカミチは返事をしたあと、アスナを連れてその場から逃げ出そうと後ろに向かって走り出す。

だが、少し走り出した先でタカミチ達の行く先を遮るように、も

う一体の未確認生命体（アンノウン）が現れた。
　あまりにもいきなりだったために、タカミチは咄嗟にアスナを背中に隠し、戦闘体勢をとる。
　ガトウでさえ手こずるのに、タカミチでは勝つことなど無理を通り越し、不可能だと言える。
　それでもタカミチはアスナを守るために、ガトウ直伝の『居合い拳』を使用する。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■―――――
―！！」

　だがそれも未確認生命体（アンノウン）の、人間の聴力では理解不能な咆哮により、呆気なく消し飛ばされる。
　空気を伝ってビリビリと感じる未確認生命体（アンノウン）の威圧感に、タカミチは思わず一歩後ろに後退してしまう。
　明らかに格上の相手、何を考えているか分からない思考。
　――――一つ、怪物は言葉を喋ってはならない。二つ、怪物は正体不明でなければいけない。三つ、怪物は不死身でなければ意味がない。
　これを怪物の定義とするならば二つは当てはまっている。
　『神格』と分かっているとはいえ、敵の正体が分かっているわけではないからだ。
　タカミチが一歩退いたのを未確認生命体（アンノウン）が見逃すはずもなく、両腕を蟷螂のような鎌状に変化（トランス）させ、タカミチに迫る。

「ちっ、タカミチ！！　下がれ！！」
「ガトウさ――――」

　ガトウの声が聞こえたと思った同時に、タカミチは後ろに引かれるような感覚に襲われる。

何が起こったかなど明白だ。ガトウがタカミチを助けるために、タカミチを後ろに引き、自分が前に出たのだ。
そして次の瞬間、タカミチの頬を生暖かい何かが濡らした。
最初は何が起こったのか全く分からなかった。
頬を濡らした生暖かいモノを触れて、ようやくその正体が何であるかを理解することが出来た。

「ガトウさん！！」

タカミチよりも早く思考が回復したアスナは、腹を貫かれているガトウに駆け寄る。
ガトウの怪我は明らかに重症だった。
白いスーツを真っ赤に染め、苦しげに表情を歪め、膝をついている。
だが、いつまでもそのように膝をついているわけにはいかない。
守るべき人たちが二人いるのに対し、未確認生命体（アンノウン）も同じように二人。
しかも未確認生命体（アンノウン）の力は未知数だ。
負傷した状態で二人を守りきれるとは到底思えない。
しかし、体が言うことを聞かない。余りの激痛に意識を保つことすら困難だ。

「[redacted]！！」

前後から三人を挟むように、未確認生命体（アンノウン）が動き出す。
動けないガトウに代わり、タカミチが何とか応戦しているが全く歯が立たず、動きを止めることすら出来てはいない。
ガトウも動こうとするも出血も酷く、動けるような状態ではない。
ギュッ、とアスナが首から下げられている首飾りを握り締める。

（助けて……）

アスナは首飾りを握り締めながら、この首飾りをくれた人物を思い浮かべる。

そんなことをしている間にも、未確認生命体（アンノウン）の鎌がタカミチ、ガトウ、アスナに迫ってくる。

（助けて――――シキ……！！）

刹那、アスナが握り締めていた首飾りから、巨大な光が放たれた。

それは自分すらも目を閉じてしまうほどに目映く、思わず目を閉じてしまう。

そして聞こえてきた未確認生命体（アンノウン）の叫び声と、何かを弾くような音。

今この場で未確認生命体（アンノウン）の刃を防ぐことが出来る人物はいない。

ではいったい誰が未確認生命体（アンノウン）の刃を防いだのか。答えは簡単だ。

恐る恐るアスナが目を開けると、首飾りを中心とした球体が三人を包み、未確認生命体（アンノウン）の攻撃を防いでいた。

「え……？」

アスナは何が何だか分からなかった。

確かに自分はシキに助けてもらいたいと願った。

シキではなかったものの、確かに自分が助けられたことにアスナは不思議でならなかった。

さらに、未確認生命体（アンノウン）に向かって大量の魔力弾が放たれてきた。

それにいち早く反応した未確認生命体（アンノウン）は本能的に後ろに下がる。

そして、未確認生命体（アンノウン）がいた場所に一人の男が現れた。

銀色の髪に漆黒の外套。かの大戦では『紅き翼（アラルブラ）』を唯一圧倒した

狙撃手。
二つ名は『帝国の影』、本名を――――。
「相変わらず良いところで現れるな、クロカミ」
――――シキ・K（クロカミ）・アスタロトといった。

◇

誰かが襲われてると思ってきてみれば、まさかガトウやタカミチ、アスナが襲われているとはな。
ガトウが致命傷を負っていることには少々驚かされたが、近くにアスナがいたという時点で、この三人はある程度は安全が保証されている。
アスナにプレゼントした首飾りには、以前にテオにプレゼントした首飾り同様に、『絶対防御』の力が付与されてある。
……とはいえ、アスナ自身にしか適用せず、さらにアスナの助けてほしいという意思がある場合のみにしか強制的に引き出せない。
ガトウが致命傷を負ってしまったのは、意識下で出来るようにし、それを教えなかった私のミスとしか言いようがない。
「済まないな、来るのが遅かった。すぐに終わらせる」
「お前が謝る必要がどこにある。こっちこそ済まねえな。任せたぜ」
「あぁ。――――行くぞ、マナ」
「――――はい」
マナは短く返事をしながら、私が創った魔法具の双銃を、腰のホルスターから抜き放つ。
眼がすぅーっと蒼色に染まり上がり、『直死の魔眼』を発動したのが分かる。

かくいう私は腰に携えたライフルを抜き放ち、特に構えもせずに神格の力を得た異形――仮に未確認生命体（アンノウン）と名付ける――を睨み付ける。

私の中の神格の王――『神格王』の力を感じ取ったのか、未確認生命体（アンノウン）は一切近付いてこようとしない。

ふん、知能が無いに等しいとはいえ、本能で私が危険だと悟ったか。だがな――――。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■――――――!!」

「私と対峙した時点で、貴様らに選択の余地はない」

とりあえず、ガトウ達の後ろに立っている未確認生命体（アンノウン）の周りに二重螺旋の魔方陣を大量に展開する。

未確認生命体（アンノウン）は魔方陣を破壊しようとしているようだが、生憎とそれは破壊できん。

その魔方陣には破壊されないという概念が付与されているからな。

さらにいえば『直死の魔眼』対策として存在していないという概念もある。

どちらにしろ、未確認生命体（アンノウン）のような低級の相手ではどうにもならん。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■――――――――!!」

「五月蝿い、目障りだ。今すぐ消えろ」

言語は理解できるか分からんが、私は未確認生命体（アンノウン）に向かってそう呟きながら引き金を引く。

二重螺旋の魔方陣が光だし、そこから未確認生命体（アンノウン）に向かって大量の魔力弾が放たれ、あまりの量に未確認生命体（アンノウン）の姿が見えなくなる。

魔力弾の雨が晴れたとき、そこには塵すらも残ってはいなかった。
まあ、あれで生き残れたら本格的に手加減の域にまで力を上げねばならなかったがな。
ん？　今のはなんだったのかだと？
決まっているだろう、ただの遊びだ。

「さて、マナの方はどうなったかな」

私はそう呟きながらマナが戦っている方に視線を向ける。
するとそこには中々に奮闘しているマナの姿があった。
どうやら未確認生命体（アンノウン）は外殻の強度はかなり高いみたいだが、マナの眼の前では薄っぺらの紙同然だ。
外殻の硬さなど、あるようでないものだ。
だからとはいえ、圧倒的な身体能力の高さをカバー出来るわけではなく、魔力弾を被弾できずにいた。
被弾したとしても死の点は捉えられず、硬い外殻に弾かれている。
私ならば外殻の硬さを考慮しても楽に貫通させられるのだが、やはりまだ魔力の練りが甘いようだな。
とはいえ、動きは悪いわけではない。
未発達……もとい小柄な体を活かして小刻みに動き回り、未確認生命体（アンノウン）の攻撃を紙一重で避けている。
そこから連撃、という風に繋がらないのだが、まあ仮にも『神格』の力を得た未確認生命体（アンノウン）に対してそこまで動けているのだから、かなり強くなったと言えよう。
さて、私のように遊ぶほどまだ余裕があるわけでないし、さっさと終わらせてしまうとするか。

「マナ、頭を下げろ」
「了解！！」

私の言葉にいち早く反応したマナは直ぐ様頭を下げる。
それと同時に私はライフルの引き金を引いて、未確認生命体（アンノウン）の胸の中心に渦巻いている死の点を貫く。
すると未確認生命体（アンノウン）は、足元から霧のようになり、消滅していく。
いつもであったならば、ここで試合終了の合図が鳴らされるだろう。
なんせ、『直死の魔眼』に殺されたのだからな。
だが今回は何かが違う。
霧のようになっていく未確認生命体（アンノウン）と、先程消滅させたはずの未確認生命体（アンノウン）が混ざり合い、巨大な不死鳥のような姿になった。
さしずめ、『未確認生命体（アンノウン）・フェニックス』とでも言うところだろうか。
……面倒だからこ奴も未確認生命体（アンノウン）で良いか。どうせ同じ輩なのだからな。

「シキ……」
「ん？　なんだよアスナ、そんな心配そうな顔しやがって。心配すんなよ、あんな雑魚には負けねェからよ」

私は着ている外套の裾を引っ張りながら、心配そうな顔をしながら言ってくるアスナの頭をくしゃくしゃと撫でる。
そして、アスナの頭から手を離すと、ライフルを腰にしまう。
死の点を貫いても殺せないということは、この力で喰らうしかなさそうだな。
やれやれ……この力を使うのは久しぶりなのだがな……。
内心ため息をつきながら、私は『神格王』の旧魔法である『能力喰い』を発動する。
右肘の辺りから噴射するように黒い霧のようなモノが現れ、腕に憑依する。
指先が獣の爪のように鋭利になり、狂暴さを露にする。
久しぶりに使ったためにちゃんと使えるかどうか不安だったが、

どうやらしっかりと使えるようだ。
憑依させた部分には全く違和感がない。

「じゃあ、行ってくるとしますか」

買い物に行くような軽さで私は言いながら、未確認生命体に向かって一気に突撃する。
なにか突撃する私に攻撃を仕掛けていたようだが、全て無視して真っ直ぐに未確認生命体の元へ向かう。
無視しようとしなかろうと、私へのダメージはないのだから、防ぐ意味がないだろう？
とにかく、未確認生命体の無意味なダメージを受けながら、鳥のようになった未確認生命体の眼前まで迫る。
右腕を振り上げ、握りしめていた拳を開く。

「――――消えろ」

そう呟き、私は未確認生命体の頭に『能力喰い』で造り出した腕を突き刺す。
すると未確認生命体に憑依していた神格の力が右腕に喰らわれ、私の体内に吸収されていくのが分かる。
未確認生命体の姿は十秒もする前に消え去り、完全に私の体内に取り込まれる。
ふむ、やはり『神格王』を体内に内包しているだけのことはあり、取り込んでも今までと何ら変わりないな。

とりあえず未確認生命体の駆除は終わったから、『能力喰い』を解除して地に降り立つ。
するとマナとアスナのロリコンビが私に駆け寄ってきた。
……やはり私の周りには小さな女の子しか居ないような気が……。

「シキ、ガトウさんが……！！」
「シキさん、あの人が！！」

駆け寄ってきたかと思えば、二人は揃って同じことを口走っていた。
アスナは泣きそうな表情、マナは切羽詰まったような表情ではあったが、ガトウを心配していることには変わりない。
というか、お前らは初めて会ったばかりだというのに、何故そのように気が合うのやら。
場違いながらもそんなことを考えながら、腹に重症を負っているガトウの元に寄る。

「情けない様だな、ガトウ。腕が鈍ったのではないか？」
「はっ……そうかもしれねえな……」
「ふむ、そのように無駄口を叩けるのであれば問題はあるまい」

私はそう言いながらガトウの腹の傷に右手を添える。
そして、『創造再生』を使ってガトウの傷を治し、皮膚やら神経やらを再生させる。
血液を失ったままでは傷が治っても辛いだろうから、そこらも再生しておくか。
ついでに真っ赤に染まり、穴が空いていたスーツも再生させておく。
別に私自身に負荷が掛かるわけではないし、これぐらいはお安い御用だ。

「ガトウさん……ガトウさん！！」
「泣くなよ、アスナ。もう大丈夫だからよ」

アスナは泣きながらガトウに抱きつき、ガトウはアスナの頭を撫でていた。
マナもマナで何故か安堵していたが、死にそうだったのを回避できたならば安心は普通か。
やれやれ、これで一件落着ということだ。

「シキさん、ありがとうございます。おかげで助かりました」
「気にすんな。仲間だろ？」

タカミチにそう言った私は改めてアスナとガトウに視線を向ける。
何故この三人が未確認生命体（アンノウン）に襲われたかは分からぬが、他にもこのような輩が現れぬとも限らん。
全く……魔法世界でも旧世界でも問題が山積みではないか……。
これではこのままここに滞在するか、旧世界に行くか悩みどころだな。
そんなことを私が悩んでいると、立ち上がったガトウが私の方を向き、真面目な表情をしながら私に言ってきた。

「クロカミ。お前にアスナを任せても構わねえか？」
「あン？　何でだよ。別にアンタが面倒見ればいいだろ」
「そうしたいのは山々だが、見ての通り俺はもう力が衰えてきてる。これから先、アスナを守れないかもしれねえ」
「……」

ガトウは分かっているようだな。
もう自分の力は『紅き翼（アラルブラ）』に所属し、大戦を戦い抜いた力は残っていないということを。
これればかりは仕方がない。私のように異常（アブノーマル）な力を持っているなら別だが、ガトウはあくまでも人間だ。
寿命は私達に比べれば短いし、老いも来る。これより先、ガトウ

の力は衰えることはあっても強くなりはしないだろう。
それを見越した上で、それを悔やんだ上で私に頼み込んでいる。
これを断るわけにはいかない。仲間として――――友として。

「分かった。アスナは俺に任せてくれ。だけど、ガトウにはやってもらいたいことがある」
「何だ、俺に出来ることなら協力するぜ？」
「やることは至極簡単だ」

私がガトウに頼んだのは、魔法世界にとどまり、今回現れたような未確認生命体（アンノウン）が現れたときに私に連絡してほしいということだ。
『直死の魔眼』の通用しない以上、ティアには対処は不可能だ。
同様にシェリルやバルドに頼むのも不可能だろう。つまりは私が対処するしかない。
私が不在のときに未確認生命体（アンノウン）に出てもらっては困る。
だからガトウには未確認生命体（アンノウン）が出たという情報をいち早く掴んでもらい、私に連絡してもらうのが目的だ。

「……頼めるか？」
「言ったはずだぜ。俺に出来ることなら協力するってな」

ガトウの言葉に私は安堵しながら、息を吐く。
とりあえず私は時空移動のように点と点との移動が出来るわけではない。
私が来るまでの間は、ティアやシェリルに対処してもらうように手回しをしてもらわねばな。

「俺は旧世界に行く。何かあったら連絡寄越せ。なくても話くらいなら付き合うからよ」
「あぁ。アスナのこと、頼んだぜ？」

ガトウの言葉に私は一言だけ答えると、旧世界に向かうためのゲートボードに向かった。
もちろん私が移動する際はマナとアスナを背中に乗せて移動している。
タカミチは遅れているようだがまあ、あ奴は一人でも大丈夫だろう。
正直いうとほとんど空気と同じ扱いだったが。
マナはもうこの移動方に慣れてしまったようだが、アスナは一回乗っただけ。
しかも短い距離での移動しかしていないために、私の外套をギュッ、と握り締めている。
それに対してマナが何やら眉をしかめていたようだが、アスナは気づいた様子はない。

しばらく移動していると、旧世界に行くためのゲートボードが見えてくる。
別に予約などがあるわけではないが、規定人数の確かめがあるために、アスナとタカミチの分を追加しておく。
ゲートボードが動き出すまではまだまだ時間がかかる。
立っているのも面倒だし、座っておくか。
『創造再生』でイスを三つ分造り出し、腰を掛ける。
だがアスナだけはイスに座らず、私の目をジッと見据えてきた。

「どうしたんだ？　座ってなくても良いのか？」
「大丈夫……。シキ、どうやったら強くなれる……？」
「どうやったらって……アスナは強くなりたいのか？」
「うん……。私は、みんなに守ってばっかりだった……。でも、私もみんなを守れるように強くなりたい」

そう言いきったアスナの瞳には、確かな決意の意志が込められていた。
前に見たような伽藍の瞳などではなく、光が灯り、確かな意志を示している。
いい目をするようになったな、アスナ。お前なら、きっと大丈夫だ。

「なら、厳しい修業になるかもしれないが、やってみるか？」
「うん。みんなを、守りたいから」

アスナの解答に満足した私は、アスナの頭を撫でる。
そして、私達は旧世界に向かった。
さて、これから何をしようか――――。

第五十一撃『黄昏の姫御子との再会。強くなりたいと思うのはいいことだ』（後

一応この作品では何人かを魔改造したいと思います。
候補としては……。

・アスナ
・マナ
・クーフェイ
・ネギ

の四人を魔改造したいと思います。
ネギは本来ならば主人公なのですから、今後活躍してもらいたいからです。
クーフェイは完全に趣味に走りました。
最近、『刀語』というアニメを見まして、クーフェイに『虚刀流』を使わせてみようかと……。
やめた方がいいという意見が三つ以上ありましたらやるかどうか考えますが、基本的にはやる方向で。
マナもアスナもシキと一緒にいるのですから、魔改造は逃れられません（笑）
この他にも魔改造してほしい、というキャラがいたら言ってください。
見事に魔改造してみせます（笑）
感想待ってますッ！！

第五十二撃『武器の選択。双剣、大剣、大鎌、体術、銃器……選び放題だな』

私達が旧世界にやって来てから、既に一週間が経過した。
今までは住居の確保、必要最低限の物資の収穫などがあり、正直アスナの修業を行っている暇はなかったな。
ただ、一週間やそこら修業が出来なかったからとはいえ、アスナはまだまだ若い。
今から修業を繰り返せば、少なくとも魔法世界でも上位二百内には入れるだろう。
まあ、そこまで強くするつもりもないし、負けない程度になってもらうくらいにするつもりだ。
さて、そのようなことはさておき、今は私が買い取った物件のとある部屋に私とマナ、アスナの三人がいる。
目の前には私が創り出した球体――ダイオラマ球がある。
このダイオラマ球は外の時間経過と内の時間経過に差があるわけではなく、ただ単に修業場として設けたに過ぎない。
つまりはダイオラマ球の中に居ようとも、時間経過は同じなのだ。
さらにいえばこの中で神格の力をある程度使ったとしても壊れないだろう。

「シキさん、これってダイオラマ球ですよね？　創ったんですか？」
「あぁ。さすがに旧世界(こっち)でドンパチやるわけにもいかねぇし、ここなら思いっきりやれるしな」
「確かにこっちは平和そのものですからね」

こちらに来てからマナとアスナは物珍しそうに、世界を眺めている。
魔法世界は夢物語のような世界だが、旧世界は科学に溢れている

世界だ。
宙も浮かない、魔法も使えない環境に来たことがないマナなど、驚きを隠せずにいた。
アスナは以前に一度だけ来たが、やはりそれでも珍しいものは珍しいらしい。
私は前世が普通の世界だったために、さしてや珍しくは思わない。

「さってと……修業するか。マナも大分強くなったし、今日はアスナと一緒で構わねェだろ？」
「私は別に構いません」
「……大丈夫、問題ない」

……アスナは素で言ったのだろうが、ネタに走ったと思われるから止めた方が良いぞ。
ちなみに、マナとアスナは割りと仲が良かったりする。
何を話しているかは分からぬが、親しげに話しているのをよく見かけたりする。
女の子同士の会話に私のような男が入る余地などないだろう。

「じゃあ行くぜ。場所はどうする？」

私が創ったダイオラマ球は五つの場所を選ぶことが出来る。
平地、氷原、火山、廃都、最後は私やティアのように神格の力を操ることが出来るレベルまでに行かなければ、入ることはままならない。
自分でも何故このような部屋を創ったかは分からぬが、いずれ使うときが訪れることだろう。

「平地で構わないと思います。氷原や火山はまだ私達はきついですから」

「……普通で大丈夫」
「了解。場所は『平地』で、レベルは『初級』。障害物は『なし』で」

私がそう言うとダイオラマ球が光だし、私達の体はその中に吸い込まれていく。
このダイオラマ球は場所の選択も可能だし、その場所での難易度も決めることも可能だ。
そうすることにより、実力を高めることに有効なのだが、生憎と創った私ですら全ては試していない。
なんせ、試す暇がなかったのは愚か、入ろうとすら思わなかったからな。
とりあえずダイオラマ球の中に入った私は、周りを見渡す。
すると中は見事に平地だった。ただ延々と地平線が続いており、正々堂々の一騎討ちにはもってこいの場所だ。
さすがに何もない場所には関心がないのか、マナとアスナも早々と飽きてしまっている。
まあ、これが普通の反応だろうな。

「じゃあ早速修業を始めたいと思う――――が、その前にやることがある」
「……やること？」
「あぁ。修業するって言ってもただ適当に修業するんじゃダメだ。人には得意不得意がある。マナで言ったら銃器が得意で、殴り合いが苦手みたいにな」

別に最初は基礎能力の向上を行っても良いのだが、やはり最初から得意な部類の能力を上げた方が良いだろう。
マナで例えるならば、銃器系統の武器が得意、つまり遠距離戦が得意だというのに、肉弾戦の拳での戦いを教えても意味があるまい。

結果的には意味がない、ということはないが、肉弾戦の修業に費やした時間で銃器系統の武器を使った修業を行った方が、遥かに強くなる。
故に不得意な部類の修業は切り捨て、ただひたすらに得意な部類の修業を行う。それが私流だ。

「見た感じじゃ何が得意かは分からないから、とりあえず今から武器を創ってみるから、それを使ってみて決めよう」
「……うん。分かった、シキの任せる」

うむ……。なんというか、適当というか人任せというか……。
確かに前よりかは感情が芽生えてきているように見えるが、やはり一般の者から比べれば乏しすぎる。
だからというわけではないだろうが、他人任せにすることが多い。
現にこの一週間でアスナの態度には自己の主張がなかった。
簡単な例を上げると、食事の際に何が食べたいかなどを訊いても、私に任せるというばかり。
難癖をつけてくるわけではないから構わないが、もう少し自己の主張をしてもらいたい。
ふと、視線をアスナに傾ける。
マナと話しているアスナは確かに楽しげに見える。最近一緒にいる私やマナはそれが分かる。
しかし、学校に行かせ、友達を作るとなったらどうだろう。
あの態度では少々……いや、かなり心配だ。

「俺が心配しても意味ねェか……」

私はボソッと呟きながら、両手を一回だけ合わせて武器を創造していく。
大剣に双剣、大鎌に槍に長刀にハンマー、銃剣（ガンブレード）。保険として銃器

を造り出しておいたが、アスナが使うことはあるまい。
そういえば私も槍や銃剣（ガンブレード）といったものは使ったことがなかったな。
使う気は毛頭ないから別に構わないのだがな。

「今はこんなもんだな。好きな武器、持ってみな」
「……どれでもいい」
「どれでもいいじゃなくて、アスナが使ってみたいのを選ぶんだ」
「ん……」

とりあえずアスナが人任せにするのをやめさせるために選ばせてみたんだが、これでしっかりと選んでくれるのだろうか。
……選んではくれないのだろうな……。
なんせ、一番端に置いておいた槍に手を伸ばしているのだからな。
案の定、アスナは適当に槍を選び、手にしていたんだが……背丈との関係もあり、余り似合わないな……。

「どうだ？」
「……使いにくい」
「とか言いつつ、俺に向かって槍を突き付けるのは止めてもらえないか？」
「ん……」

アスナは首を一回だけ縦に動かすと、槍をカランと床に落とす。
相当にアスナにとっては重かったのか、一回持っただけでも辛そうにしている。
ちなみに、私が創ったのは赤で統一された伝説上の槍――刺し穿つ死棘（ゲイボルグ）の槍だったのだが、気付かないのだろうな。
……後で宝具の威力でも試してみるとするか。
腕を組ながらうんうんと勝手に考えていると、アスナが次の武器に手をつけついた。

次にアスナが手に取った武器は、双剣だった。アスナからしたら双剣の長さですらもが長く感じるくらいだな。

「……使いにくい」
「それもか……。うーん……ってこっち向けんなっつうの」
「……だめ？」
「ダメだっつうの」

可愛らしく小首を傾げられても困るのだがな。
というか、何故に先程から私に武器を突き付けてくる。私に何の恨みがあるというのだ。
アスナは特に感情の籠っていない目を武器に変えて、次は大鎌を手に――――取らなかった。……何故？

「なんで大鎌は取らないんだ？」
「……なんか、怖い」
「怖い、ねぇ。分からないってこともないけどな」

大鎌のことで怖いというアスナの気持ちは分からない、ということはない。
私が『死の恐怖』として戦っていたときは、大鎌をよく好んで使っていた。
それは大鎌を使った出で立ちや、それ自体が恐怖を煽る対象であり、相手に恐怖を与えるには持ってこいの武器だったからな。
だからこそ、アスナが大鎌に恐怖することに対しては何も言えない。

「次は大剣か。見るからに無理そうだけどな」
「む……持てるもん」

何が気に触ってしまったのかは分からないのだが、ぷくーっと頬を膨らませて、大剣の柄を握る。
そして、それを持ち上げようとするのだが、予想通り大剣はピクリとも動かない。
重量にしたらそれほどは重くないのだが、アスナやマナからしたら重すぎるくらいだろう。
……ん？　アスナが柄を離して右手に氣、左手に魔力を合成して咸卦法を使用していた。
――――……咸卦法！？

「アスナ、お前、咸卦法なんか使えたのか？」
「……うん。今はいっぱいあるけど、使い方は分かる」

いっぱいあるって、一体何がいっぱいあるというのだ……。アスナの発言にはたまに分からないところがある。
成長している証ととっても良いのか、なんなのかは分からぬが、とりあえず無かったものが今はあるということだろう。
考えるのを放棄していないかだと？　ハハハ、キノセイダヨ。
咸卦法を使用したアスナは、改めて大剣の柄を握り直し、大剣を持ち上げる。
そして――――

「うおぅッ！？」

――――私目掛けて大剣を思いっきり、本当に思いっきり振りおろしてきた。
今まで培ってきた反射神経のおかげで、反射的に回避することが出来た。
回避したのは良かったのだが、私が避けた地点に振り下ろされた大剣は、床を陥没させるほどの威力を秘めていた……。

アスナめ、まさか本気で私を殺りに来たのではあるまいな……。
いや待て、私はアスナに何かされるようなことをしたか？　いや、していない。
やらこのまま何もしなくても大丈夫か？
大丈夫じゃない、問題ありだ。
「待て待てアスナ！！　なんでお前は俺に斬りかか――うおぇい！？」
言葉を言っている最中に斬りかかってくるとは……なんという奴だ。
私はバック宙をやって見掛けは派手に回避しながら、再びアスナを見る。
……こ、怖い。何を考えているか分からない無機質な瞳に、何の感情も籠っていない表情、最後になんか後ろにスタンドが視えるような……。
や、やるしかないのか？　ラファエルを使ってでも、アスナを止めるしかないというのかぁっ！？
「……修業は？」
「もしかして、今のは修業のつもりか？」
「……うん。武器選んだから、シキに強くしてもらいたかった。どうして、避けるの？」
「いや、えっと……。ほ、ほら、あれだ。修業には手順があってだな？　いきなり武器振り回してもダメなんだよ」
「……分かった」
アスナはそういいながら、手に持っていた大剣を床に落として、咸卦法を解除する。
口から出任せで適当に言ってみたのだが、なんとか的外れなこと

を言わずに済んだようだな。
修業には手順があり、いきなり武器をブンブン振り回したとしても怪我をするのがオチだ。
さらにいえば今は咸卦法により強化されていたから、あれだけ小柄なアスナが、身の丈よりも巨大な大剣を振り回すことが出来たのだ。
現に、咸卦法を解除したアスナには疲労が一気に襲いかかってきており、異様に眠そうにしている。
……これでは今から修業をするのは無理、だな。

「修業は明日からにするか？」
「……うん。眠い」
「寝ても構わないぞ。ベッドに運んどくから」

私がそう言うとアスナは重たげにしていた瞼を閉じ、すぐに眠りという名の闇に落ちる。
すぅすぅと寝息をたて、普段は見れないような安らかな表情をしている。
このまま別け隔てなく接していれば、いつか感情が芽生えてくれるのだろうか……。
私が腕を組ながらそんなことを考えてると、不意にマナが私の外套の裾を引っ張ってきた。

「その……いつまでも膝枕をしている必要は、ないんじゃないでしょうか？」
「ん？　別に構わないだろ？　やってダメってことはないし、修業も明日からだからこれから暇だしな」
「それは、そうですが……」

何が言いづらいのかは分からないが、マナは手を後ろに組ながら、

足でつつつーっと円を描くような仕草をしている。
マナの視線は、私が膝枕をしているアスナに向いているわけではなく、アスナが膝枕をしていない方に向いていた。
顔を見てみれば褐色の肌にわずかに赤みが差しており、熱でもあるのではないかと心配になってしまう。
……というか、なんなのだその可愛らしい仕草は。私を萌え殺す気なのか？
その前に、この仕草と言動を考えてみると、マナも膝枕をしたいということになるのだろうが、果たしてマナは本当にその様なことを考えているのだろうか……？
間違っていたら、ただの変な奴のレッテルを貼られてしまうことになる。まあ、気にしないが。

「マナも膝枕、するか？」
「あっ……はい！！」

私がそう言いながら空いている膝をポンポンと叩くと、マナの表情がぱぁーっと明るくなる。
よほど膝枕をやりたかったのだが、マナは直ぐ様私の膝に頭を預けてくる。
マナもアスナも子供と言うこともあり、全くといって重さを感じない。
そして、しばらくして静かだと感じ、マナの方に視線を向けてみたところ、マナもいつの間にか眠ってしまっていた。

「可愛い寝顔だな。……っと、いかんいかん。このままでは風邪を引いてしまうな」

ただでさえマナは先ほど顔が赤かったのだし、風邪を引く予兆なのかもしれん。

とりあえず二人が起きないように抱えながら、ダイオラマ球の外に出るのであった。

◇

私が二人をベッドに寝かせてから数時間が経過し、二人が起きる前に再びダイオラマ球の中にやって来ていた。

ちなみに場所はさっきの平地ではなく、神格の力を操ることが出来る者のみ、もしくはそのレベルに至った者のみが来ることが出来る『神殿』エリアを選択している。

そして、目の前には顔も何もない、ただの人形を二つほど用意している。

理由は簡単だ。別に霊体を降霊させるわけでもなければ、儀式を行うわけでもない。

ただ、この中に私の体内に内包されている『神格王』と『ミカエル』の魂をこの中に入れるためだ。

さすがにいつまでも一つの体に、三つの魂を入れておくわけにもいかないからな。

「呪文？　ンなもんあったら唱えてみてェよ……」

なんとなく呪文的なモンあるんじゃねェの？　的な電波が来たために答えてみたんだが、呪文などないからな？

前置きをしたところで、私は二つの人形の頭に手を添え、不完全に同化している『神格王』と『ミカエル』の魂を切り離し、人形に入れる。

すると人形の姿が変わっていくのだが……見ているこちらとしたら気持ち悪いの一言でしか言い表せないのだが、勘弁してくれ。

一人は長い金色の髪をそのままに垂らし、一言で表すならば清楚という言葉が似合いそうな女性。

もう一人は深紅の瞳を持ち、同じように金色の髪を持ち、後ろの襟足の部分で髪を結っている女性だった。

つまり、現れたのは二人の女性だった――――――――ん？　二人……？

「お前、誰だ……？」

「貴様、よもや我を忘れたとは言わせぬぞ。我こそが神格の王にして孤高の存在、『神格王』なるぞッ！！」

「私はミカエルですのでお忘れなく。また肉体を手に入れちゃいましたか……」

ミカエルの方は簡単に分かった。初めて会ったときの姿のままだったからな。

だが神格王は別だ。なんせ、今まで男だと思っていた輩が女だったというのだからな。しかもミカエル並の美人と来た……。

おかしい……おかしすぎるぞ。魂レベルにまで――不完全ではあるが――同化していたにも関わらず、神格王が女性だと分からなかったのだからな。

などと考えながら神格王をマジマジと見ていると、神格王は何故か頬を赤らめながら私に言ってくる。

「ええい雑種！！　何故貴様は先程から我を見つめておるのだ！？　我は見世物ではないのだぞ！！」

「いや、お前、女だったんだなぁ……って」

「なんだ？　今までそれを知らずに接していたというのか？　ふん、雑種にあるまじき行為だ」

「いや……雑種というか、竜神ッス……。今は神格王よりも強いッス」

「ぐぬ……貴様が我の力を奪ったからだろうッ！！」

いや、奪ったからだろうと言われても、貴様が世界を支配する、などという馬鹿げたことをやろうとしたからいけないのだろう。
そうしなければ私は竜神の位に上がることはなかったのだし、貴様が女などと知ることはなかったのだ。
だいたい、なぜ私の周りには女性しか居らんのだ。しかも例外なく美人ばかりだ。
はぁ……なぜ神格王が女なのだ……。男の設定にしてくれよ、女で強い者など既に何人もいるだろうに……。

「何なのだその府抜けた顔は。我に勝ったのだから、もう少しまともな態度をとれ」
「別にお前に勝った負けたなんて正直どうでもいい」
「まあ、我も気にしてはいない。本来の力でぶつかったならば我の勝利は確実だ。雑種の入る余地などない」
「へいへい……。そんなんが出来るもんならやってみろっての」

私はそう言いながらこっそりため息をつき、改めて二人を見据える。
二人にはある程度は神格の力を分け与えている。
最も、この前のように未確認生命体（アンノウン）に取り付いた神格の力の余りカスのような力だが……。
一応はミカエルよりも神格王の力の方を強く設定している。

「とりあえず、お前らをわざわざ切り離した理由、分かってるだろ？」
「――――未確認生命体（アンノウン）、のことですね？」
「ふん、気にくわんな。あのようなゴミが我々の力を使うのがな」

神格王は豊満な胸の前で腕を組みながら、本当に気にくわないと言わんばかりの表情で、まるで汚物を見るかのような目でそういう。

神格の力を束ねていた王として、あのような力を見過ごすことなどは出来ないのだろう。
最も、わざわざ二人を魂から切り離した理由はそこにあるのだからな。

「お前らには直接戦ってもらうわけじゃないが、ここで頭脳担当をやってもらいたい。神格の力、俺よりもお前らの方が感じ取れるだろ」
「貴様……それればかりは譲れぬな。王である我が、なぜ直に手を下すのを止めねばならん」
「今のお前には戦う力はないだろ。俺が奪っておいてなんだがな」
「ならば返せ。今すぐに全ての力を滅してやる」
「それがダメだから言ってんだろ。大丈夫、俺が何とかしてやる」
「……仕方がない。今のところは、勝者である貴様に従ってやる」

神格王はそっぽを向きながら、私にそういってくる。
それ以降、神格王が話しかけてくるということはなく、部屋の隅で眠っているようだった。
やれやれ……面倒なのを増やしてしまっただろうか……。
私はそんなことを思いながら、『神殿』の天を見上げた。

第五十二撃『武器の選択。双剣、大剣、大鎌、体術、銃器……選び放題だな』

質問なんですが、３―Ａメンバーが二十九人になるんですが、穴埋めで新キャラ入れた方がいいですかね？

入れた方がいいならば、キャラを募集しますので、送ってくださいッ！！

ちなみにクーフェイに虚刀流は『有』で魔改造候補に刹那と千鶴が上がりました。

他にも有りましたら、ぜひとも感想にッ！！

では、失礼します……。

第五十三撃『プレゼントと学園入学。……家に誰もいないとなると、ずいぶん暇』

第五十三撃『プレゼントと学園入学。……家に誰もいないとなると、ずいぶん暇

場所は平地で、障害物はありの設定。
見渡す限りには石で積み上げられた山があり、他には特になにもない。
そこには私――シキ・K（クロカミ）・アスタロトを含め、三人しかいない。
残りの二人というのはもちろんのことアスナとマナだ。
今この場では、アスナとマナの二人にて実戦訓練を行わせている。
私がアスナに武器選びをやらせてから既に数週間の月日が流れ、今まで修業を行ってきたアスナは恐るべき早さで実力が向上していった。
さすがにマナよりも強くなった、などということはないものの、マナに近い実力を手に入れたというのは確かだ。
……まあ、それは咸卦法を使っている場合であって、通常時では魔族の血を半分引いているマナの足元にも及ばないのだがな。

「――――ッ！！」

突如として放たれてきた魔力弾に対して即座に反応し、手に持っている大剣でそれを掻き消す。
今回の修業はマナは岩山の上、アスナはその下にてマナの魔力弾による攻撃を弾く。
マナはアスナに気付かれずに被弾させる、という修業だ。
魔力弾を撃ち込んだら危ないと思う者もいるかもしれないが、アスナには『反魔法場（アンチマジックフィールド）』という稀少能力（レアスキル）がある。
これのおかげでありとあらゆる魔力を持った物体の攻撃は効かず、そのまま消滅する。
つまりは魔力弾が被弾したように見えようとも、アスナには傷一

つつかない。
今度はそれでは被弾したか分からなくなる可能性もあるが、私が『鷹の眼』を使っているために見逃すことはない。

（東南の方向……数は――――二十、といったところか……）

アスナの東南の方向より、魔力弾が放たれてくる。
ふむ、感じ取るまでもなくなってきたか。行動がパターン化してきている。マナの悪い癖だ。
自分では意識していないのだろうが、戦いが長くなれば長くなるほどに行動がパターン化してくる傾向がある。
直せというのは簡単だが、それでは自分のためにはならない。自らで自らの弱点に気付き、克服せねば強くはなれん。
……とはいえ、私の強さは自らで得た力ではなく、如何様（イカサマ）をして手に入れたような力だ。
大口を叩くような真似は出来ん。

「――――……ッ！！」

アスナもようやくマナのパターン化した動きに気付いたのか、魔力弾が放たれてきた方向に即座に反応を示し、大剣を振るって魔力弾を掻き消す。
この数週間でアスナに氣の使い方の基本は教えた。
もちろん、咸卦法を使えた時点で魔力も氣も循環のさせ方は慣れているようで、すぐに瞬動を扱えるようになった。
アスナは魔力弾が放たれてきた方向に向かって瞬動を使い、数メートル離れた地点にて狙撃を行っているマナに接近する。
これだけを見ればアスナが圧倒的優位に見えるが――――私がマナに近接戦闘法を教えていないとでも思うか？

（いい動きだ……。修業の成果が表れているな）

キンッ、と金属同士を打ち合わせたような独自の音が響き渡る。
刹那、アスナのてにあったはずの大剣が弧を描くように回転しながら、そのまま床に突き刺さった。
アスナの手には何も握られてはいないが、マナの手には銃剣（ガンブレード）が握られている。
そう。マナは自ら銃剣（ガンブレード）を選び、修業していたのだ。
双銃やライフルといった遠距離銃器の修業も欠かさず、近距離銃器の修業もやるというのは辛い。
だが、これがマナの選んだ道なのだ。

◇

「今日は私の勝ちだ、アスナ」
「む……前は私が勝った」
「前は前だ。今の私の方が、前よりも強いのでな」

修業が終わり、今はダイオラマ球から出て部屋のリビングにて、昼食を取りながらそんな会話をしている二人。
最近の修業は二人の一対一（ワンオンワン）ばかりだったが、戦歴はやはりマナの勝ち星の方が多い。
ちなみにアスナも何回か勝ち星を得ているようだが、いかんせんマナはアスナよりもずっと早く修業を始めている。
勝てる方がおかしいのだ。
それにしても……ずいぶんと仲が良くなったものだ。
今までも悪いというわけではなかったが、このように打ち解けているわけではなかった。
時間が経過したために打ち解けあったのだろう。
うむ、実に良いことだ。

私は楽しげに話している二人を見たあと、手元の書類に目を向ける。

――――『麻帆良学園入学届け』

（そろそろ二人も入学させるべきか……。友達も欲しいだろうしな）

いくらアスナとマナがいるとはいえ、他にも友達が欲しい年頃だろう。

ただ、その場合は銃や大剣、魔力や氣を使わないように気を付けてもらわねばならぬのだが、その辺りは大丈夫だろう。

あちらにはタカミチがいるはずだ。その辺りの手回しはタカミチに任せよう。

麻帆良学園で寮制になるらしいが、確か中等部からだったはずだ。さすがに小学生から寮住まいをやらせるわけにもいくまい。

「……シキ？」

「シキさん？」

「ん？　なんだ、どうしたんだ？」

不意にかけられた二人の言葉に、私の意識が現実に戻る。

二人の前の皿には既に料理は乗せられてはおらず、どうやら自分が思っている以上に考え込んでいたらしい。

もちろん二人には麻帆良学園に入学してもらうことは話している。嫌がってはいないものの、自ら好んで行きたいようには見えない。アスナは元から興味を示さなかったのだが、今回は見向きすらしていない。おそらく、覚えてすらいまい。

「……ぼーっとしてた」

「何か考えてたみたいですが、どうかしたんですか？」

「いや、別に大したことじゃねェよ」

私の言葉に心配げな表情をする二人だが、考え事をするのがそこまで珍しいことなのだろうか？

ふむ……私は割りと考え事を多くやる方であるから、さしてや珍しくはないと思うのだがな……。

まあ、心配してくれること自体は嬉しい限りだし、悪い気はしない。

第一に、考えていたことはアスナとマナについてだし、別に危険が迫っているやら、戦いがあるだとかいう話ではない。

（心配かけちまったみてェだし、息抜きにでもどっか行くか……）

二人の表情を交互に見つめながら、そんなことを考えてる。

今にして思えば二人には修業をやらせてばかりで、外出をさせていなかったような気がする。

訓練は長い時間をかけて密度の濃いものをやっているために、修業が終われば二人はぐっすりと眠ってしまう。

休みがあったとしても二人はその大半を、本当に休みに使ってしまうので外出をしない。

必然的に外出する暇がなくなってしまうのだ。

……うん、やり過ぎたか……。今にして思えば二人には無理な修業をやらせ過ぎたかもしれんな……。

「よし。今日の修業は休みだ。どっか出掛けるぞ」

「休み？　まさか何か裏があるんじゃ……」

「……怪しい」

「おいコラ、人の行為を変な方向に深読みしてんじゃねェ」

誰だ、そのように深読みするように教えたのは。出てこい、今すぐにぶん殴ってやる。あっ……私か。

……と、このようにつまらない独り漫才はさておき、とりあえず二人も外出することに異論はないらしい。
行動にこそ表しはしないが、その表情は大いに楽しみにしているのが分かる。
誰がなんと言おうとも二人はまだまだ子供だ。外出するとなれば楽しみになるような、な。

「買いたいモンとかねェのか？　服とかアクセサリーとか。今日は好きなモン買ってやるよ」
「し、シキさんが買ってくれる……！？　アスナ、私にはこれに裏があるとしか思えないのだが……」
「うん……。裏がある、絶対」
「お前らな……そんなに修業をキツくして欲しいんなら、いくらでも――――」
『――――ごめんなさい』

私の言葉に、アスナとマナはようやく裏がないことを認め、そして今まで疑っていたことに謝ってくる。
実際は修業をキツくしてもらいたくないからなんだろうが、そこは気付かないと言うことにしておこう。
さて、買い物に出掛けることに決まったし、最初はどこに向かおうか。
アクセサリー屋は……夜光を思い出してしまうな。あぁ！！　くそ！！　暗くなっていてどうする！！
忘れたいなどとは思わない。だが、あいつらの死を思いだし、暗くなるのはダメだと言っているのだ。

「買い物と言っても、何をすればいい……？」
「……分からない」
「そういうパターンで来るのかよ」

まさか以前の私のように、休日の過ごし方が分からないときたか……。

今でこそそのようなことはありはしないものの、二人の年齢から考えたら異常な事態だ。

子供といえば休日の過ごし方など、本能で分かりそうなものだ。

しかし、分からないと言うのだから、それだけ精神が成長しているということだ。

嬉しいやら嬉しくないやら、私としては非常に複雑な気分だ。

「まあ、いい。俺が何とかしてやる」

「シキさんに任せます。多分シキさんの行くところなら楽しいところだと思いますから」

「……右に同じく。シキに任せる」

「了解、お姫様方。わたくしめにお任せください」

私はそういいながら、執事のように頭を下げる。

そして、私達は家を出て街に向かって歩きだした。

◇

ふふふ……もうこのような視線の数には私は慣れている。

街を歩く私を、街の輩は物珍しげな目で見つめている。

未だになぜ私がこのように見つめられているかは分からないのだが、見られているということは理解できる。

いつもこうだ。初めて行った村や街、都市で私が歩くと必ずこのように見られる。

これは旧世界・魔法世界を行き来して体験した私だから言えることだ……自慢ではないがな。

「……シキの近くにいると、見られて不快になる」
「言いたくはないが、それは同感だ」
「悪かったな。俺もなんで見られるか分かんねェんだよ」
『はぁ……』

何故そのように二人してため息をつくのだ。分からぬものは仕方あるまい。
まず角のせいで注目を浴びていることはあるまい。
『創造再生』を使用して創った認知阻害の首飾りを使っているため、私はただの人間にしか見えん。
つまりは角のせいではないのだが、それでは注目を浴びる意味が分からん。
ただ、気にしなければどうということはないが。
などということを考えていると、不意に右手が引かれる感じがした。
ちなみに私は二人と手を繋いでおり、右はマナ、左はアスナだ。
つまりは今はマナが私の手を引っ張ってきたことになる。

「なるほど、服が欲しいのか」
「い、いや、別に服など……！？」
「恥ずかしがることはない。それが普通の反応だからな」

私がいうと何故か顔を赤く染めたマナは、服屋に入ることを否定するが、明らかに服をみたいオーラを醸し出している。
そんな態度で入りたくないなどと言われても、説得力は皆無だ。
とりあえず二人の持っている服は修業用の服と、ボロ臭い服だけだ。
例えマナが入りたくなかろうと、私が勝手に服を買いに向かうのだがな。
アスナも入りたそうだったために、私達は服屋に入ることにした。

店の中に入ると、そこはちょうどよく女性向けの服や、子供向けの服が多く並べられている店だった。

「結構品揃えも多いな。好きなの買ってやるから選んできていいぞ」

『……』

私がそう言うと、何故か両端の二人が急に無言になり、私の服を引っ張ってきた。

私の今の服装はさすがに黒い外套を身に纏っているわけではない。以前に旧世界に訪れたときと同じ格好をしている。髪型は三つ編みのままにしてあるが。

「シキさんに選んでほしい」

「……シキが選んで」

二人はそう言うが早いか、お互いに睨み合っている。

私の目は遂に幻覚までも見えるようになってしまったのか、二人のぶつかり合う視線同士の先に火花が散っているように見える。

しかも無言で、これだけは譲れないと言わんばかりの雰囲気を醸し出している。

……マズイな。私は相も変わらず女性のこういった雰囲気は苦手でたまらん。

女性に対して顔が上がらないのはこの性格のせいなのかもしれん。

「と、とりあえず、一緒に選ぶか。時間はたっぷりあるんだからさ」

「シキさんがそういうなら……」

「……仕方ない」

こういうときに限って息が合うというのはお決まりのパターンといえよう。

とにかく、このままでは喧嘩になりかねないために一緒に服を選ぶことにするか……。
どうせ私にはファッションセンスは無いに等しい。選んだ奴に相づちを打っておけば大丈夫だろう。
……ということで、私はアスナとマナの服選びを始めるのであった。
さすが年頃の女の子ということで、服選びは楽しいらしい。
先程までは睨みあっていたと言うのに、今はすっかり仲良くなっている。

（今さらだが、この二人って小学生の部類に入るのか……？）

ふとした疑問が頭をよぎる。
見た目こそ小学生となんら変わりはないのだが、この二人、少なくとも普通の小学生よりも年齢は上だ。
アスナには色々な事情があるため加算しないとしても、マナは魔族であるために成長速度が遅いに過ぎない。
中学生になる頃にはロリータ中学生にやるか、中学生離れした美人になるかのどちらかだろう。
まあ、今ごちゃごちゃと考えても仕方がないが、考えてしまったものは仕方がない。

「し、シキさん、これなんてどうですか？」
「ん？　おっ、ワンピースってやつか。似合うんじゃねェの？」

マナが選んだのはワンピースだった。褐色の肌とは対照的にワンピースの色は純白。
一見すればあまり良い選択には見えないかもしれないが、実際に合わせてみるとかなり似合っている。
さらにいえば恥ずかしげに頬を染め、上目遣いをし、挙げ句の果

てにはもじもじしているのが萌え度を上げている。
ふむ、私を萌え殺す気か？

「な、なら私はこれに……って、アスナ？」
「あれ？　さっきまでは一緒にいたんだがな……。どこ行ったんだ？」

マナの隣で服選びをしていたはずのアスナの姿はどこにもなく、周りを見渡しても見当たらない。
幸いというべきか、この店は大した広さはない。
手分けして探さずとも、数分とかからないうちに見付け出すことが出来るはずだ。
だいたい、アスナが行くような場所がここにあったか？
この店には服を売っているだけではなく、アクセサリーや化粧品も取り扱っている。
あの年で化粧品などに興味は示すことないだろうから、おそらくはアクセサリーを売っている場所だろう。

「アクセサリーのところだな」
「分かるんですか？」
「いや、ただの推測だ。いなかったら他を探せばいい」

なんて適当な……などとマナが言っていたが、これは断じて適当などではない。
私の計算され尽くした考えだと言ってもらいたいものだ。
マナの手を引きながらその様なことを考え、アクセサリーのところまで行くと、案の定アスナがそこにいた。
服を買いに来たと言うのに、何故アスナはアクセサリーに興味を示すのだろうか。
……いや、アスナが興味を示したということの方が驚くべきか。

今まで興味を示していないのと同じだったからな。
アスナが手に持っていたのは鈴がついている紙留めだった。

「それが欲しいのか、アスナ？」
「あっ……シキ……。うん、これがいい」
「そうか。じゃあそれはアスナにプレゼントだ。今日は俺とアスナが出会った記念日だからな」
「……記念日」
「そう。記念日だ」

私もつい先程までは忘れていたのだが、今日は私とアスナが初めて出会った日だ。
初めて出会ったのは、『紅き翼（アラルブラ）』の皆と京都の詠春の嫁の近衛家に行った時だ。
なんの因果か今日はその日と同じだったのだ。
これを記念日と言わずに何と言うのだろう。

「さて、じゃあ会計に行くとしますか」

私は二人に手を差しのべながら、そういう。
二人が私の手を握った温もりを感じながら、会計に向かった。

◇

あれから数日。
正式にアスナとマナを麻帆良学園に通わせることが決定した。
もちろん二人に通うか通わないかの賛否を訊き、二人の意思で通いたいと聞いたからだ。
これで私が言ったから通う、などという感情を少しでも抱いていたならば通わせはしなかった。

私が無理矢理通わせたような形になるからな。
だが、二人は自分の意思で通うと言い切った。故に入学させるのだ。
本来ならば書類を直接提出せずとも良いのだが、事情のために麻帆良学園の学園長に直接書類を渡さねばならない。
だからこうして、学園長のところまでに案内してくれる者を待っているのだが……遅い。

「お待たせしました、シキさん」
「案内役ってのはお前か、タカミチ。つーか、目に見えて老けてるんだが？」
「……分かりますかね？」
「あぁ。分からない方がおかしいっつうの」

案内役として現れたタカミチは、一番最後に出会ったときから老けて見える。
人間なのだから、時が経てば老けるのは当たり前ではあるが、タカミチの老け具合は些か奇妙だ。
明らかに経過した時間よりも多く老けている。

「ある人に稽古をつけてもらってるんですが、ダイオラマ球を使っているので……」
「なるほど、そういうことか。今は気になるほどじゃないが、長く続けてると実年齢より相当老けて見えるからな」
「あはは……仕方ないですよ。強くなるためですから」
「……そうか」

私達はタカミチと並行して歩きながら、そのような会話をする。
ダイオラマ球を使って修業をしているのは分かったが、一体誰に修業をつけてもらっているのやら。

ガトウは魔法世界で『未確認生命体（アンノウン）』の確認情報を探してもらっているし、今のタカミチよりも強い者が麻帆良（ここ）にいるのか？
私もここの関係者になるのだし、いずれその者とも会えるだろう。
たわいもない話を続けているうちに、いつの間にか学園長室に到着していた。

「学園長、入ります」

タカミチがドアを二階ノックし、ドアを開け、中に入っていく。
それに続いて私達も中に入っていったのだが、あれが学園長なのか？　どこからどう見てもぬらりひょんにしか見えん。
何がどう突然変異すれば、あのような後頭部になるというのだろう。

まあ、さほど気になることではない。言わぬが仏という言葉もあるのでな。

「お主が『帝国の影』もしくは『死の恐怖』のシキ・K（クロカミ）・アスタロト殿かの？」
「悪いが『死の恐怖』とは呼ばないでもらおうか。私はもう、『死の恐怖』にはならない」
「そうじゃったか。ではシキ殿、本題に入らせてもらってもよいかの」
「構わん。むしろ早く入ってもらいたい」

この学園長……見掛けはただの間抜けな爺さんではあるが、なかなかの実力を誇っているな……。
歳をとって衰えているとはいえこの圧力、全盛期の実力を是非とも見せてもらいたいものだ。
『神格』の力を持つ者に比べれば見劣りしてしまうが、全盛期の実力は詠春をも凌ぐだろう。

なるほど……この実力があるからこそ、この麻帆良学園はまとめられているのだな。

「本題に入らせてもらうと、この二人を学園に通わせてもらいたい。書類はこれだ」

「ふむ、『神楽坂明日菜』君と『龍宮真名』君とな？」

「あぁ。後見人は私だ。名前を偽造しているが、訳ありだ。理由は訊かないでもらいたい」

「別にそれは構わんがの。この学園に害がなければじゃがな」

「無論だ。私が家族にも等しい二人をここに通わせるのに、害など与えるはずがあるまい」

威圧感を与えてくる学園長に対して、私も威圧感を与えながらいう。

この学園長には好感がもてる。実力が自分より上の相手であろうと、守りたいものの為に力を振るう。

簡単なように見えるが、実際に対峙してそれを行うのは熟練の手練れといえど難しい。

ちなみに『神楽坂』の姓はガトウから貰い、『龍宮』の姓は龍宮神社から許可を得て使わせてもらった。

あそこには幾らか貸しがあるのでな。これで全てを無しにした。

なぜ『黒神』の姓を使わなかったといえば、私に恨みを持っている輩は山ほどいる。

二人を危険に晒すような真似はできん。

「あともう一つ。麻帆良学園内の敷地を私に貸してもらいたい」

「敷地を？　それを何に使うのじゃ？」

「なに、ただ喫茶店を開くだけだ。案ずるな、敷地を貸してもらうだけで構わん。店は私が創る」

「本当にそれでよいのかの？　なんなら、手配をするが……」

「構わん。私が創った方が早い。さて、あとは私は失礼させてもらう」

私はそういいながら、学園長室をあとにする。
アスナとマナが正式に学園に通い始めるのは明後日から。手続きが済んだのだから、あの場にいる必要はあるまい。
一応は二人が中学生になり、寮制になった際の布石は打っておいたが、何事も起こらねば良いのだがな……。
そのようなことを考えながら歩き、麻帆良学園中等部の外に出ると、不意に後ろから声をかけられた。

「お前、クロカミ……か……？」

後ろを振り向き、誰が声をかけてきたかを確認する。
小学生のような背丈に、まるで人形のように整った顔立ち。綺麗な金髪は地に付きそうな程に長かった。
この人物を私は知っている。いや、忘れることなど出来はしない。
私の二人の師匠のうちの一人。名前を――――

「お久しぶりです、エヴァさん」

――――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルといった。

第五十三撃『プレゼントと学園入学。……家に誰もいないとなると、ずいぶん暇』

アンケートがあります。
もうすぐで百五十万ＰＶを突破するので、その記念に番外編をやりますので、どれがいいか選んでください。

一、シキと誰かのＩＦカップリング。
この場合は誰がいいか選んでください。
二、オリキャラＶＳオリキャラ（ＴＳ版）
異世界からシキなどのＴＳ版を呼び、なんやかんやで戦います。
三、コラボ
この場合は『仕方ねえな、コラボしてやるよ』、という方がいたらお願いします。
四、その他
こんな話がいいです、というのが有りましたらお願いします。

の四択から選んでください。
ちなみに三と四はいつでも募集中です！！
なるべく多くの方が投票してくださると助かります。
期限は7月いっぱいです。
では、感想待ってます！！

第五十四撃『真祖の師匠と再会。師匠超えは弟子の務めだ』

「お久しぶりです、エヴァさん」

私は目の前にいる二人目の師匠（マスター）――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――に向かってそういう。

本当に懐かしいな。エヴァさんと別れたのは大戦、いや、神格事件すらも起こる前だから、十年以上も前のことになるな。

真祖の吸血鬼（ハイデイライト・ウォーカー）は本当に歳をとらないらしく、会ったときと全く容姿の変化はない。

ただ違うのは、あのときは時代に見合った服装だったのだが、今は何故か麻帆良学園の制服に身を包んでいた。

「なぜお前がここにいるんだ？」

「それはこっちのセリフでもあるんですがね。しかも制服って……コスプレッスか？」

「貴様……私がそのようなことをするように見えるのか？」

見えないこともない、といったらきっとエヴァさんは怒るのだろうな。

私とエヴァさんは少なからず旅を共にしてきた。

何をいえばどのような反応をしてくるかなど、大抵は分かる。

まあ、実際はコスプレでもなんでもないのだろう。

エヴァさんほどの人物が、そのようなことをするとは考えられないからな。

「千の呪文の男（サウザンドマスター）に呪いを掛けられて以来、私はずっとここに閉じ込められているのだ！！」

「はぁ……あのナギ（バカ）はいつまでも面倒を残してくれるな、畜生」

エヴァさんの言っていることは本当のようで、エヴァさんからは『登校地獄』の魔法を感じ取ることが出来る。

どれだけ適当に魔力を編んだのか、ムチャクチャな魔法の形成の仕方をされている。

あの野郎……呪いをかけて、その後先は考えてはいなかったようだな……。

いくら千の呪文の男（サウザンドマスター）とはいえ、これを解くのは難しいぞ。

通りでエヴァさんの力が異様に小さくなっているはずだ。

今のエヴァさんは、最初に出会ったときのエヴァさんと比較にならないほどに弱い。

おそらくは今のエヴァさんと戦ったならば、マナであれば苦しくも勝つことが可能だろうな。

「お前は……強くなったな。あの頃よりも、ずっと良い目をしている」

「っ……。まあ、な。俺も、護るモンがあるからな」

エヴァさんの言葉が、フィオナの言葉と被り、思わず一瞬だけ言葉を詰まらせてしまう。

きっと彼女は意識して言ったわけではなく、思ったことをそのまま口に出しただけなのだろう。

だが……その言葉は今はここにはいないフィオナの姿と重なる。

とりあえずそれを悟られないようにするために、エヴァさんから目を逸らし、頬を掻く。

「まあ、エヴァさんは弱くなりましたね？　今のエヴァさんなら片手で捻れますよ」

「ぐっ……。事実なだけに言い返せない……。クロカミ！！　この

呪いを解け！！」
「別にそのままでもいいんじゃないッスか？　似合ってますよ、その制服姿」
「……貴様は本当に師に対しての敬いがないのか？」
「冗談ですよ、冗談」

制服姿が似合っているというのは本当だが、エヴァさんのロリボディだからこそ似合っているのだろう。
ふむ、なかなか様になっているようだな。人形の着せ替えみたいだな……。
などと考えていると、エヴァさんが私の溝に正拳突きを喰らわせてきた。
な、なるほど……女性のみが持ち合わせている固有能力（スキル）、『地の文読み』は誰にでも使えるようだな……。

「エヴァさん、登校地獄呪いを解除したいですか？」
「当たり前だ。いつまでも子供（ガキ）共に混じって勉強するのは屈辱だ」
「ん……別に違和感はないと――――いえ、何でもないッス」

エヴァさんの鋭い視線に、私は思わず言葉を中断させてしまう。
いかに私より弱くなってしまったエヴァさんとはいえ、やはり師匠（マスター）には逆らえないのも事実だ。
はぁ……私をこのように屈伏させられるのは、旧世界・魔法世界を探してもエヴァさん一人だろうな……。
そして、腕を組み、何やらぶつぶつと呟いているエヴァさんの動きが不意に停止した。
はて、いったい何事だろうか？

「クロカミ……まさかお前、登校地獄（これ）を呪解できるのか……！？」
「出来ますよ、それくらい。簡単じゃないですか？」

「簡単……そうか、そうだったな。貴様には万物を殺すことが出来る銃があったな」

何回も言うが、私が所持しているライフルに取り付けられているスコープには、『直死の魔眼』の力が宿っている。

『直死の魔眼』には殺す対象を選び、それ以外を傷付けずに殺す対象だけを殺すことが可能だ。

本来の所持者である両儀式も、自分の中に入り込んだ霊体だけを自分を刺して殺している。

故に『登校地獄』に狙いを定めれば、エヴァさんを傷付けずに殺すことが可能だ。

「では今すぐに取り掛かるぞ。これでにっくき呪いともお別れだ」

「別に構いませんが、呪解したらどこかに行くんですか？」

「行く宛などない。そうだ、お前の世話になる。別に構わないだろう？」

「別に構いやしませんが……。最初に言っときますけど、俺、ここで喫茶店開きますから」

「喫茶店だと？」

まあ、喫茶店を開くのは今から数日後の話だし、それまではこっちで借りた家を使えばいいだろう。

……にしても、エヴァさんが私の世話になるというのは些か奇妙な話だ。

などと考えていると、不意にエヴァさんが笑い始めた。

「あ―っはっはっは！！　貴様が喫茶店？　似合わなすぎるぞ、クロカミ！！」

「そうッスか？　そうですよね、エヴァさんの学生姿に比べれば似合いませんかもしれませんね」

「まだそれを言うか……。ふん、まあ、私には関係ないがな」

関係ないがな……って、何を言ってるんだこの人は。

私の世話になるのだから、喫茶店の手伝いをしてもらうに決まっているだろうに。

例えこのことを言おうとも反論されるのは目に見えているから、あえて何も言わないでおこう。

というか、言ったとしても手伝ってはくれまい。

さすが唯我独尊のエヴァさんだ……。

「じゃあ始めますか。エヴァさん、ジッとしててくださいね？」

「待て待て！？　貴様は公衆の面前で私を狙撃する気か！？」

「何か問題でも？」

「大有りだ馬鹿者！！　あくまでもここでの私はいち生徒だ。『闇の福音』の私ならいざ知らず、今の私を撃つのは周りが騒ぐぞ？もう少し常識を学べ」

「なん……だと……！？」

まさかエヴァさんに常識を諭されるだと……！？

バカな、あのエヴァさんに一般論を述べることなど出来るはずがない！！

いったい私とエヴァさんが会わなかったこの年月に、なにがあったというのだろうか。

確かに一般的に考えれば、私が見掛けは子供であるエヴァさんをライフルで撃つなど、犯罪以外の何者でもない。

だから認知阻害の空間を創り出したというのに、これでは意味がないではないか。

ただ、エヴァさんが嫌だというならば仕方がないだろうがな。

「私の家に来い。そこならば他人に見られる恐れもない」

「分かりました。じゃあ、行きましょうか」
「ならばついてこい」
機嫌が良くなり、歩きだしたエヴァさんの後ろを、私は歩きだした。

◇

「……」
「どうした？　早く入れ」
早く入れと言われても、なんというか……私のような男にはそぐわない部屋だというべきか……。
エヴァさんに案内された家の中に入ったは良いのだが、扉を開けてまず目に入ってきたのはファンシーな人形共だった。
彼女は『闇の福音』という二つ名の他に、『人形使い（ドールマスター）』という二つ名があると、何かの書物で読んだ気がする。
とにかく、このファンシーな人形共はエヴァさんの能力を使う上での触媒か何かなのだろう。
……というか、いい歳こいてファンシーな人形共をここまで集めるというのは……いや、人の趣味にいちいち口を出すのはやめよう。
私も修業が趣味というおかしな趣味をしているからな。
「クロカミ、お前はさっきから何を頷いているのだ？」
「いえ。エヴァさんが予想外に少女趣味だったもので。あと入る覚悟を決めていま――――ゴフゥッ！？」
「少女趣味いうな。こっちだ、さっさとついてこい」
「り、了解、師匠（マスター）……」
鳩尾に不意打ちを喰らった私は、腹を擦りながらエヴァさんの言

葉に頷く。
もちろん実際は避けることは容易いのだが、何故か避けてはならないという電波を受けたために避けなかった。
くっ……妙に痛いのがムカつく……。今のエヴァさんは最弱状態なのではないのか？
などといった疑問を抱く私はおかしくはない。とにかく、今はエヴァさんの呪いを解くのが先決だ。
ここは黙って彼女の後ろをついていった方がいいだろう。
エヴァさんの家の中はファンシーな人形の他にも、和風な設備も整っている。
和風好きなのか……？

「こっちだ。ついてこい」
「地下室……。どこまで行くんですか？　別に大きな作業やるわけじゃないですし、ここでもいいと思いますが……」
「いいから黙ってついてこい。あそこで狙撃をするつもりか？」
「嫌なら別にどこでもいいですけど……」

エヴァさんの言葉にそう返事しながら、地下室に行くための階段を降りる。
階段は至って普通だったのだが、階段を降りた先には上にあったファンシーな人形共とは違い、戦闘向けな人形が揃っていた。
あぁ、上にあったファンシーな人形共とは違いと言ったが、ファンシーさが控えめになったに過ぎない。
ふと、一つの人形が目に入った。それを見た私はおもわず目を疑い、立ち止まってしまう。
エヴァさんが何を思い立って作ったかは分からない。
だが、この人形は余りにも似すぎている、否、同じだったのだ――夜光と。

「エヴァ……さん、これは……」
「ふん、弟子がへこたれているのは私としても不本意だからな。か、勘違いするな、別に貴様のためを思って作ったわけではない」
「……ありがとう、ございます。だけど、俺……」
「分かっている。貴様にはもう必要はあるまい」

私の前を歩くエヴァさんは、それ以上は語ろうとはしなかった。
割りきっているわけではない。だけど、過去を振り向いたまま、護るべき者を見誤うわけにはいかないからだ。
私は、今度こそ護りとおさなければならない。
それが私が私である意味であり、ここにいる理由だからだ。
あの人形に背を向け歩き出すこと数秒後、視界が開けた。そこはまさに地下室と呼ぶに相応しく、模型のような球体があるだけで他には何もない。
なるほど、この球体――ダイオラマ球――の中で呪解をやろうということか。

「入るぞ。そこに立つだけで構わん」
「分かりま――――」

私が言葉を言い終える前に景色がガラリと変わり、先ほどのダイオラマ球と同じ景色に変わった。
一言で表すならば快適空間で、海までもが本物のような完成度を誇っている。
……なぜここまで来なければならなかったのだろうか、という疑問はあるが、おそらくは封印されていた魔力が溢れ出すことを考えての行動だろう。
今のエヴァさんは魔力はほぼ無いに等しいが、本来の魔力は最強クラスだからな。
いきなり現れたらここの輩が驚くだろう。

「早速始めるか。――――と言っても、貴様が撃って終わりなのだがな」
「なんか、スゴイ罪悪感が……」

ただでさえ呪いの類いを消すには魔力弾を撃ち込まねばならぬのだが、それが身内ともなるとどうもやりづらい。
しかもエヴァさんの容姿のこともあり、なかなか引き金を引くことは出来ないのだがな……。
まあ、割りきらねばならんか。エヴァさんには恩もあるし、撃たねば始まらぬしな。
そこまで考えた私は思考をシャットアウトし、銃口をエヴァさんに向け、スコープを覗いて死の点に狙いを定める。
スコープを介した世界のエヴァさんには、複数の死の点があった。
胸のやや左、腹部のやや上、最後に眉間の辺りだ。
まず一つはエヴァさんの『生』の死の点。二つはエヴァさんの魔力を溜めている、いわばタンクのようなモノの死の点。
最後に『登校地獄』の呪いの死の点だ。
狙うのは腹部のやや上の辺りにある死の点だ。

（う～む……堂々としてる分、妙に撃ちにくいんだが……）

狙いを定め、引き金に指を掛けたのはいい。
いいのだが、腰に手を当てて、堂々とされていると、こう……アレだ、撃ちにくい。
というか、撃っていいと言われても、そのように言われて撃ったことなどないから、変な感覚だな。

「おい、早くやれ、何をやっている」
「あ、えっと……じゃあ行きますよー。１＋１は？」

「写真ではないのだぞ！？」
「はいドーン」
「な……っ！？」

私がボケ、エヴァさんがツッコミを入れたところで引き金を引いたのだが、どうにも魔力弾の速さが予想外だったのか、エヴァさんは共学の声を上げて吹っ飛んでしまった。
しかもエヴァさんはメチャクチャ軽いために、私が撃った魔力弾でかなりの距離を飛行している。
……あ、海に落ちた。
まあ、呪いが解けて本来の力に戻ったのならば、海に落ちても大丈夫だろう。
第一に、これはエヴァさんが望んだことなのだ。
うん、私は悪くない。

「クロカミィ――――――――――――――――ッッッ！！！！！！！」
「え～っと……なんでしょうか？」
「加減を知らぬのか加減をォ――――――――――――――――ッッッ！！！！！！」

海の中から突如として現れたエヴァさんは、無駄に魔力を放出しながら私に叫んでくる。
何故に私が怒られねばならぬのだろうか……。
このように理不尽な理由で怒られるなどと誰が思うだろうか。
しかも心なしか、エヴァさんが魔法の詠唱を始めているような気がするのだが……。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！　――――契約に従い、我に従え、氷の女王！！　来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが！！　全ての命ある者に等しき死を！！　其は安らぎ也！！

――――喰らうがいいッ！！　『おわるせかい』ッッッ！！！！！！」

「えぇい！！　呪いを解けと言ったから解いたと言うのに、そんな理不尽な理由で反撃されてたまるかよォッ！！　喰らいやがれェ――――――――――――――――――――ッッッ！！！！！！！」

私はエヴァさんがこちらに放ってきた『おわるせかい』に狙いを定め、魔力を溜める。

魔力を最大限にまで溜めたあと、私はなんの迷いもなく引き金を引く。

とりあえず魔力を適当に込めたのだが、込めすぎて魔力弾ではなく、魔力砲になってしまっていた。

うん、ついカッとなってやってしまった。反省も、後悔もしていない。

ぶつかり合った私の魔力砲とエヴァさんの『おわるせかい』により、空気が振動する。

魔力を込めすぎてエヴァさんを巻き込まないかと心配したのだが、杞憂だったようだな。

「ふはははははははははははは！！　『闇の福音』、完全復活だ！！　あーはっはっはっはっは！！」

「良かったですね。魔法の威力も前と遜色なさそうですし」

「そうだな。今日は気分がいい、盛大に騒ぐぞ」

「いや、えっと……。俺はまだやることが……」

「なんだ？　師匠命令を断る気か？」

「はぁ……分かりましたよ。騒ぎましょう！！」

エヴァさんの言葉に私は半ばやけくそ気味に叫ぶ。

あー……これから詠春に会いに行くやら、喫茶店の準備をするやらがあったのだが、それは他の日でもどうにかなるだろう。

さて。今日はエヴァさん完全復活記念日だ。
盛大に騒ぐことにしようか。

第五十四撃『真祖の師匠と再会。師匠超えは弟子の務めだ』（後書き）

アンケート実施中です！！
（詳しくは前話のあとがきで）
感想待ってますッ！！

第五十五撃『喫茶店の開店。神格王の真の名前』

私の師であり真祖の吸血鬼（ハイディライト・ウォーカー）のエヴァさんが完全復活を遂げてから早数日。

私は麻帆良学園の近くに買い取った家にて、マナとアスナとのんびりと暮らしている。

いや、正確にはマナもアスナも学校に通い始めているために、一人でといった方が適切かもしれん。

なんせ、二人が学校に行っている間は私は家に一人。一人でのんびりしているからな。

のんびりしているとはいえ、やるべきことを怠っているわけではない。

旧世界（こちら）でも魔法（うら）と繋がっている者もいるわけだから、依頼が舞い込んでくる。

その大抵が下らない依頼なのだが、断る気はないので空いた時間に済ませている。

そして、今はアスナとマナは学校に行く日の朝だ。

私は現在朝食の支度をしているわけなのだが――――。

「……シキ、まだ？」

「シキさん」

「クロカミ、早くしろ」

――――三人に早く朝飯を作れと催促されているのだ。

二人ではなく三人に、だ。

三人のうち二人は言うまでもなく、もはや私の義娘のようになっているアスナとマナだ。

あと一人。私が言わずとも、もうお分かりになっている方は少な

くはないはずだ。
私のことを『クロカミ』と呼ぶのは私が知っている限りでは二人しかいない。
一人はフィオナ・エリシオン。私の一番最初の師であり、私の村を破壊した張本人。
だが彼女は今はこの世界にはいない。
つまりは必然的にもう一人の人物、ということになってくる。

「なんで家にいるンスか……エヴァさん……」

私の二人目の師であり、最強を自負するエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。

第五十五撃
『喫茶店の開店。神格王の真の名前』

エヴァさんが私の家に居候するようになったのは、完全復活を遂げてから数日も経たないくらいだったと記憶している。
大宴会という名の酒飲みに付き合わされたあと、私はエヴァさんと一緒に麻帆良学園の外を探索させられた。
何年か振りに学園の外に出られたのと、アルコールが入ったためにエヴァさんのテンションはおかしくなっていたが、そのときは私もアルコールが入っていたために同じようにテンションが上がっていたに違いない。
とにかく、探索を続けていたときにエヴァさんに何処に住んでいるかを聞かれ、軽々しく教えてしまったのが運の尽きだ。
それ以降は何かと理由をつけてやってきては私の料理を食べ、挙げ句の果てには泊まり込みをするようになっていた。

今さら子供の一人や二人増えようと構わなかったのだが、唯我独尊ぶりはどうにかしてもらいたい。

「……行ってきます」

「行ってきます、シキさん」

「おう、気を付けてな。帰りは道草食わないで喫茶店に来るように」

「……分かった」

アスナが返事をし、マナも同じように頷くと家のドアを開けて学校に向かっていった。

二人を見送ったあと、私はため息を一つつきながらリビングへと戻る。

そこには朝食を食べて、ソファに横になっているエヴァさんの姿がある。

幼女な見掛けに似合わない、服装をしており、妙にいやらしく見える。

私にはそのような趣味はないからどうでもいいが、教育に悪いからあの二人の前ではまともな服装をしてもらいたい。

「おい……クロカミ、何かないのか……？」

「何かってなんですか……。アバウトすぎますよ。あと俺は今から麻帆良に……って、エヴァさんは行かないンスか？」

「なぜ行かねばならんのだ……。私にはもう行く理由も、あそこにいる理由もない」

エヴァさんが麻帆良学園に通っていたのは、あくまでも『登校地獄』の呪いがかかっていたからだ。

その呪いがなくなった以上、学園に縛られることもなくなったエヴァさんの言い分は最もだ。

ただ、学園側もエヴァさんの呪いが解けたことも、私が呪いを解

いたことも知っている。
何も言ってこないのは、言わないのではなく言えないからだ。
まあ、こうツンツンしていれば学校でも話す相手は少ないだろうから、居ても居なくても同じなのだろう。

「そうは言っても俺は学園に行くんですけど……。ここにいるなら鍵渡しておきますけどどうしますか？」
「暇だからついていく。見つかろうと見つからなかろうと関係ないからな」
「そうですか……。着いてきても暇だと思いますけど、いいんですか？」
「なにもしないよりはマシだ」

私が麻帆良に行く理由は喫茶店を開店するからなのだが、どうせエヴァさんはぐーたらしているだけだろう。
家に居てもらっても心配なだけだし、着いてくるっていうなら着いてきてもらおう。
あわよくばエヴァさんに喫茶店の手伝いをしてもらったり――――無理だな、考えるだけ無駄だ。
というか、エヴァさんが喫茶店なんかで働いているのを想像するだけで……あんまり笑えないな。

「じゃあ行きましょうか」
「あぁ」

気だるそうに返事をするのを聞き、私達は家を出る。
ガチャ、という鍵を閉める音を聞いたあと、麻帆良に向かって歩きだした。
……どうせならアスナとマナと一緒に行った方が良かったかもしれんな。

◇

「さて、と……。とりあえず着替えよう」
「着替えるって何にだ」
「決まってます。俺が執事服で、エヴァさん達がメイド服」
「何故私まで着替えねばならんのだ!?　それにこいつらは誰だ!?」
「貴様こそ誰だ。王である我に対してその態度、万死に値する」

麻帆良学園の敷地を借り、喫茶店の店を創った私達は喫茶『銀竜の旅団』の中にてそんな会話をしていた。
ちなみに、ここにいるのはエヴァさんだけではない。
エヴァさんの他にもう一人、神格王をこの場に連れてきている。
本当だったら接客が上手そうなミカエルに頼みたかったのだが、生憎とミカエルは手が離せる状況ではなかったために、仕方なく神格王を連れてきた。
……連れてきたはいいが、はっきり言って働いてくれるとは、とてもではないが思えない。
唯我独尊の二人が揃った以上、問題が起こらない方が不自然だ。
このあとに何かあるのではないかと思ってしまう。

「王だか何だか知らないが、あまり私を嘗めるなよ、乳魔神め」
「ふん、貴様こそ我にそのように態度をとって良いと思っているのか、貧乳?」
「「なんだと貴様ッ!!」」

……どれだけこ奴等は仲が良いのだ……。
お互いが言い終えたあとに、同じ言葉で切れるとはな。
同じ唯我独尊なのだから、せめてここにいる間は大人しくしても

らうか、仲良くしてもらいたい。
もしくはうるさくとも良いから、私の仕事の邪魔だけはしないでもらいたい。
確かに神格王は乳魔神とも呼べるような乳だ。シェリルの次くらいに巨乳だからな。
エヴァさんの貧乳度は今までに類を見ないほどではあるがな。

「「ふんッ！！」」
「がはっ！？」

なんてことを考えていると、腹部をエヴァさんに、頭部を神格王に殴られた。
しかも目線で、何を考えていたかはするっとまるっとお見通しだ、とひしひしと私に伝えてくる。
あぁそうだったな。『地の文読み』の能力（スキル）は、女性であれば例外なく発動することが出来る。
それが例え旧文明の王であろうと、真祖（ハイディライト・ウォーカー）の吸血鬼であろうとお構い無しだ。
全く……これのせいで迂闊なことを考えられないではないか、忌々しい。

「はぁ……エヴァさん、こいつは神格王。で、神格王、この人がエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんだ。分かったか？」
「神格王はただの総称だ。真名（しんめい）は、イヴ・サンライトだ。よく覚えておけ」
「イヴ・サンライト……。なるほどな、まさか本当に王だとはな」

神格王――イヴ・サンライト――がそういうと、エヴァさんが若干口元をひきつらせながらそう言った。
どうやらイヴが本当に王だとは思っていなかったらしく、真実を

知って驚愕しているのだろう。
とはいえ、今のイヴの強さはエヴァさんよりも弱い。戦ったら相手にもならんだろう。
本来の力を出せたならば、いくら不老不死のエヴァさんであろうとも、存在そのものがなかったことにされるだろう。
うん、力は絶対に返さないようにしよう、そうしよう。

「名前も分かったところで、お前らにはこれに着替えてもらう」

私はそういいながら、二人の前に二着のメイド服を出す。
一着は黒をベースとした、ゴスロリメイド服。サイズ的にもこれはエヴァさんのだ。
もう一着は至極普通のメイド服……と思いきやミニスカメイド服だ。
神格王……ではなく、イヴなら似合うのではないかと思って創らせてもらった。
エヴァさんは、普段着でゴスロリ系の服があるから何も思わないだろうが、イヴの方はどうだろうか。
チラッとイヴの方を向いてみると……下らなさそうに見ていた。
やっぱり旧文明には、このような文化はなかったのだろうか。

「断る。なぜわざわざここまで来てそのようなものを着なければならんのだ」
「我も断らせてもらう。そのように戦闘に向かない服を着る気は毛頭ない」

見事に玉砕した。
エヴァさんはともかく、イヴにまで否定されるとは思わなかった……。
しかもイヴに至っては戦闘脳（バトル）であるために、戦いを重視した服装

を意識しているのだな……。
イヴは少しくらいこういった服に興味を持ってもらいたいものだ。大人しくしていれば、凛とした美しい女性なのだからな。
本人は意識していないから分からないだろうが、ここに来るまでの男共の視線が凄かったな。気味が悪いくらいに。
女性の中でもイヴの凛とした雰囲気に格好いいと呟いていたくらいだからな。

「ただ、な……」

不意にイヴが言葉を発した。
私はメイド服を着ないと言われてからとりあえず二人に干渉するのを中断し、『銀竜の旅団』の開店に向けて作業をしていたので、二人には視線を向けていない。
なにか話があるのだろうと判断した私は、背を向けているのも失礼だと思い、イヴに向き直る。
そこで思わずドキッとしてしまった私はおかしくはない。
堂々としながらも頬を赤らめ、豊満な胸の前で腕を組み、私からわずかに視線を逸らすイヴ。
な、なんだ……？　いったいイヴに何が起こったというのだ……!?

今までにこのような態度をとられたことがないために、どのような反応をすればよいか分からない。

「その、貴様がどうしても着てほしいというならば……着てやらんこともない、のだがな……」
「え、えっと……」

何なのだこのイヴの可愛らしさは……!?
今までにこのようなタイプがいなかっただけに、耐性がほとんど

ついていないぞ……。
待て待て、冷静になるのだ。私にはテオという何よりも美しく可愛らしい妻がいるのだ。
今まで男だと思っていたイヴにドキッとするなど言語道断。許されざる行為だ。
そういえばイヴはツンデレだったな……。私に憑依して一番最初の会話でもツンデレってたしな。

「なんだイヴ？　お前はクロカミに惚れているのか？」
「ば、バカをいうな！！　なぜ我が雑種になど惚れなければならんのだ！！」
「ほほぅ、その割りには顔が赤いぞ？」
「ぐぬっ……。き、気のせいだ！！」

エヴァさんの言葉に、珍しくイヴが言葉に詰まっていた。
というか、エヴァさんも面白いことをいうな。イヴが私に惚れている？
どこに惚れるような要素があったと言うのだ。
私はイヴの目的を邪魔し、力の全てを奪い、このように無力化して拘束に近い状態にしているのだからな。
とはいえ、イヴの顔が赤くなっているのもまた事実だ。熱でも出たのか？

「でさ、神格お――イヴ、着てくれる……のか？」
「貴様がそういうなら着てやらんこともない。ふん、有り難く思え、我がそのような格好をするなど有り得ぬからな。か、勘違いするな、貴様のためではないからな！！」
（じゃあ誰のためだよ……）

イヴの発言にため息をつきながら、思わずそんなことを考えてし

まう。
　さっきはあれだけドキッとしたというのに、今ではため息しか出てこないな……。
　まあ、イヴがメイド服を着て手伝ってくれるというならば助かるが――――しっかりやってくれるかどうかが心配だ。
　唯我独尊であり、王であったが為に、他人の注文など聞かないかも、ではなく聞かないだろう。

「少し待っているが良い」
「あぁ」

　イヴの言葉に短く一言だけ答えると、イヴは喫茶店の奥にある着衣室に入っていった。
　一応はそういうことも出来るんだな、驚きだ。

「エヴァさんは着てくれないんですか？」
「別に着てもよいが、大方店の手伝いをやらせる気なのだろう？」
「まあ、そうなりますね。どうせ見つかっても構わないんでしょう？」
「確かにそうだ。だが、私を手伝わせたいならば等価交換、それなりの代価が必要だ」

　飯作ってやってんだろ、という言葉が出てきたのだが、エヴァさんには鍛えてもらった恩がある。
　私の飯とエヴァさんの修業で既に等価交換は成立している。故に新たな代価が必要だ。
　登校地獄の呪いを解いたという代価もあるが、これをこんなところで使ってしまうのは実に惜しい。
　ならば――――

「じゃあエヴァさんはゆっくりしててください」

――――ゆっくりさせておくのが良いだろう。

下手に貸し借りを作るよりも、こうした今の関係を維持していた方が面倒でなくて助かる。

それに、こんな一回の手伝いでこの大きな代価を使ってしまうのは、勿体ないとしか言いようがないからな。

エヴァさんとそんな会話をしていると、ガチャリと着衣室のドアが開く音が聞こえた。

「おい、これの胸が異様にキツいのだが……。あと丈が短いぞ、これは貴様の趣味か？」

振り向けばそこには、ミニスカメイド服を着用したイヴの姿があった。

しかも本当に胸がキツいのか、胸の辺りを非常に気にしている。

さらにいえばスカートの丈はもう少し長くしたはずなのだが、イヴが着てみれば丈は短く、あれだ……妖艶に見える。

元の容姿のよさとミニスカメイド服がマッチし、正直いうとそこらのモデル顔負けな気がする。

私がイヴのメイド服姿に見とれていると、イヴはゴホンと咳払いを一つ入れたあとに私に訊いてくる。

「に、似合っているか？　いや、似合っていると言え。例え似合っていなくともな」

「世辞抜きでスゲー似合ってると思うぞ？　正直いうと可愛い」

「か、可愛……！？　だ、ダメだ……そのようなことを言われると、我は……」

何かを呟いたかと思えば、イヴの頭からは湯気が出るような幻覚

が見えたような気がした。
うむ、今日は実に発見が多い日だ。
今までのイヴはただの唯我独尊、自己中心的な思考の持ち主かと思ったが、以外にも女の子のような部分があるな。
なるほどなるほど……イヴは誉められるのになれていないと見える。
現に少し誉めただけで完全に意識がトリップしてしまっている。
今度からイヴを大人しくさせるときは誉めることにしよう。

「さすが天然フラグ建築士だ。いったい何人にフラグを立てるつもりだ？」
「フラグって……何を言ってるんですか、エヴァさんは。フラグなんか立ててないでしょう？」
「そうだったな。お前は天然だけでなく、唐変木でもあったな。気づけるはずもないか」

なんか非常に失礼なことを言われているのだが、分からないものは仕方がないだろう。
とにかく、準備の段階である午前はエヴァさんとイヴとたわいもない話をするだけで終えるのだった。
ちなみに、イヴはまだトリップしたままであることを記しておこう。

◇

「早く注文をいえ。我が貴様らのような雑種を相手にしているだけマシだと思え」

結論から述べさせてもらおう。イヴの接客能力（スキル）は最底辺だが、男共には妙に客受けが良かった。

イヴの性格はともかく、見た目は天下一品だ。そんな容姿の彼女に相手にしてもらえるだけで嬉しいのだろう。
それにイヴは口で言っているほど、行動は悪くない。
イヴはツンデレなのだ。今の言葉を言いながらも、頬をわずかに赤く染めて恥じらっているのが分かる。
ちなみに、今日が初めての開店だというのに、結構客が入っていたりする。

「お待たせ致しました、お嬢様方」

私はそう言いながら、テーブルに座って待っていた女生徒に注文の品を渡す。
何やらこちらを見て頬を染めていたが、何故だろうか。熱でもあるのだろうか。
あと、周りの視線がこちらに向いているのが分かる。やはり銀髪は珍しいのだろう。
女生徒に一礼した私は、一旦奥に戻る。
客入れは多いが、そろそろ居なくなる時間帯だろう。放課後だし、来る量は疎らだ。昼は多かったがな。
などと考えていると、ガチャリと、身内のみが入ることが出来るドアが開く音が聞こえた。

「おかえり、アスナ……って、そっちは友達か？」
「うん。学校の友達」
「近衛木乃香っていいます。よろしゅうお願いします」
「あぁ、こちらこそよろしく」

帰ってきたのはアスナだけだったのだが、友達を連れてきていた。
近衛という名字ということは、木乃香は詠春の娘なのだろう。
あの魔力がほとんどない詠春の娘が、なぜこれほどまでの魔力を

持っているかは分からぬが、この際気にしないでおこう。

「マナは一緒じゃないのか？」

「ん……マナはもう少ししたら帰ってくる」

「了解。遊ぶんだったら家に行ってもいいけど、あんまり遅くなるなよ」

「分かった。遅くならないようにする」

アスナは私にそういうと、詠春の娘と一緒に遊びに出掛けてしまった。

アスナは割と無愛想にとられてもおかしくない性格をしているのだが、友達ができて何よりだ。

それに、最近では無愛想ではなく、人並みに近い感情を表情に表すようにもなってきた。

これが成長の証なのだろう。このまま無愛想だったらどうしようかと思ったこともあるが、杞憂だったようだな。

「クロカミ、注文が来てるぞ。早くしなくていいのか？」

「エヴァさん、起きたんですか？　というか、手伝ってくれるんですか？」

「バカをいうな。ただ暇だったからに決まっている」

そう言いながらもイヴから貰った注文書をたっぷり受け取っているではないか。

『銀竜の旅団（ここ）』の正規の店員は、店主である私しかいない。

イヴは正規の店員ではなく、アルバイトのようなものであるために、いつでも接客を出来るわけではない。

そんな中でエヴァさんが手伝ってくれるというのは、非常に心強い。

「とりあえず、さっさとやりますか」

私はそう呟きながら、開店初日の喫茶店の仕事に取り掛かった。

◇

開店初日の営業は、かなり盛況した。

私達三人ではかなり大変だったが、それでもなんとか出来た。

私達は今は、閉店した喫茶店の中のイスに腰をかけている。

「ご苦労さま、イヴ。助かったよ」

「ふん。我の有り難みが分かったか？　今後は敬意を持って接するがよい」

「はいはい、ありがとな、イヴ」

「ぬ……そのように真正面から言われると、て、照れるではないか……。ええい！！　雑種のくせに生意気だぞ！！」

いったい何が生意気だというのかは分からぬが、どうやら私の発言はイヴの気に障ってしまったらしい。

それに、イヴの照れる姿など、かなり稀少（レア）な姿だ。可愛いと思うのは仕方のないことだ。

それにしても……なぜイヴは私の名を呼んではくれないのだろうか。

私を呼ぶときは必ず『雑種』と呼んでくる。種族的には私は雑種ではなく、竜神なのだがな……。

「なあ。なんでイヴは俺のことを名前で呼ばないんだ？」

「なに？　そ、そのようなことはどうでも良かろう。我の自由だ、貴様にとやかく言われる謂れはない」

確かにそう言われてしまえば返す言葉がない。
イヴが私のことをどのように呼ぼうがイヴの勝手だし、それをとやかく言われる筋合いはないだろう。
だが呼ばれる私からしたら『貴様』や『雑種』などではなく、普通に名前を呼んでもらいたい。

「俺とイヴはもう家族みたいな関係なんだからさ、名前で呼んでもバチは当たんねェと思うけどな」
「か、家族……。そ、そうだな、家族ならば仕方がない。んんっ……。――――し、シキ……？」
「ぐはぁっ！？」

さっきから何回も言っているような気がするが、何なのだこのイヴの可愛らしさは！？
戦ったときはあれだけ憎たらしかったというのに、今は可愛いと思ってしまうだと！？
おのれ、姿が分かり、仲良くなるとイヴはこれだけ可愛らしかったのか！？
くそっ……エヴァさんは何故かニヤニヤしながらこちらを見ているし、照れるのがバレるのは得策ではない。

「そ、それでいい。これからもよろしく……な」
「う、うむ。よろしく頼むぞ」

ダメだ、照れるのは隠しきれはしないようだ。
このあとにエヴァさんにからかわれたことなど……言うまでもないだろう？

第五十五撃『喫茶店の開店。神格王の真の名前』（後書き）

ストックもかなりあるのですが、なかなか原作に入れない……。
まだ二年生の麻帆良祭にも入ってない……。
麻帆良祭もやりたいことがありますからね。
鬼ごっこやら格闘大会やら、他にも刹那との接点にマナとアスナと古菲の修業風景にと……原作に入るまでかなり時間がかかるかもしれません。
逆に原作に入っても京都編に麻帆良祭編といった主要な場所以外は、結構飛ばしたりするかもしれません。
というか、魔法世界編に入ったらかなりオリ展開になるかも……。
魔改造するキャラはマナとアスナ、古菲と刹那、あとは地味にフェイトガールズもする予定です。
フェイト&フェイトガールズは、既にシキがフェイト√を通ったことになってるので仲が良いし、魔改造されております。
フェイト√に関してはそのうちに過去編として出します。
……なんか過去編多いなぁ……。
とりあえず感想待ってますッ！！

第五十六撃『ジュース好きが登場。……ほ、本当に飲むのか……？』（前書き）

あとがきにアンケート（？）というかお知らせがあります。
では、どうぞッ！！

第五十六撃『ジュース好きが登場。……ほ、本当に飲むのか……？』

喫茶店を開店（オープン）してから早くも数ヶ月が経過した。
時間の経過が早すぎるかもしれないが、そこは気にしないでくれ。
特筆することが無かっただけでなく、本当に喫茶店の仕事をこなしていただけなのだから。
強いて言うならばイヴが正式な店員になったというところ、あとはアスナの友達が家に何回か来たということくらいだ。
何やかんやあって今日。今はまだ朝の八時で、喫茶店の開店は昼からだ。
つまりはあと四時間ほどまどろみ時間（タイム）があると言うことだ。
いつどの時代であっても日本人であれば、布団の温もりを離すことなど到底出来まい。
それは元日本人である私にも十分当てはまる。
故に私はあと二時間ほどは眠らせてもらうとしよう。
――――むにゅ
……ん？　なんだ、このすべすべで柔らかい物体は？
妙に匂いはいいし、温かい。私は抱き枕は使わない主義のために、このようなものが布団の中にあること自体あり得ない。
……考えてみたはよいが、わざわざこの至福の時を削ってまで考える必要はあるまい。
私は考えることを中断し、再び睡魔に身を委ねることにした。

「んっ……」

――のだが、聞こえてきた声により、再び意識は現実（リアル）に戻される。
今の声は間違いなく私の声ではない。女性特有の声だ。私の声がこのようなものであれば寧ろ気味が悪い。

私の声でないことは明白だが、そうなるといったい誰の声かということが問題だ。

そこまで考えて、ようやく頭が冴えてくるのが分かる。

まどろみ時間（タイム）など、もうどうでもいい。今は私の布団の中に侵入してきている誰かを確認する必要がある。

もしも敵だったならば――――問答無用で排除する。

私は意識を覚醒させ、羽織っていた掛け布団を一気に剥ぐ。

そこで目を疑ってしまった私はおかしくない。寧ろ理性を保っているだけ誉めてもらいたい。

「ん……。もう朝か……？　朝から騒々しいぞ、もっと静かには出来んのか……？」

私の布団の中に眠っていたのは、何を隠そう神格王であるイヴだった。

ただ、問題はそこではない……男の布団の中で女性が眠っているのはどうかと思うが。

問題なのは今のイヴの服装だ。

裸にYシャツを着込んでいるだけなのだ。下着などつけてはいない。

見えそうで見えない感じにそそられる……というのは本音だが、理性が勝っている間は目のやり場に困る状態だ。

知ってか知らずかは分からぬが、イヴは恥ずかしげもなくそこに座っている。

眠そうに目を擦り、普段は後ろで一つに結っている髪をほどいている。

「い、イヴ？　なんでお前は俺の布団で寝てんだ……？」

「む？　家族とはこのようにするものなのではないか？」

「違うわ！！　誰だ、そんな間違った知識を教えた奴は！！」

「決まっている。あの、てれび、とかいう箱で学んだのだ」
「どこの番組だよ畜生！！」
「騒ぐな。朝からそれでは我に迷惑だ」

近所じゃねェのかよ、というツッコミが真っ先に出た私はおかしくない。
くそぅ……イヴにテレビの使い方を教えた私が間違いだったか。
なまじ使い方を覚えると、使いたくなってしまうのは分からなくもない。
だがな、その知識はどこの番組枠から学んだのかを教えてもらいたい。

「五月蝿い奴だ。良いではないか、貴様とて嫌ではないのだろう？」
「うっ……。べ、別に嫌ではねェけどよ……。だけど、男女が同じ布団ってのは色々マズイだろ？」
「何がマズイのだ？　家族の間でマズイことなどあるまい？」

私たちの家族の認識の仕方に、どうしてここまでの違いがあるのだろうか……。
だいたい、イヴは家族の定義すらも理解しているかすらも分からない。
はぁ……イヴに家族だと伝えたのは間違いだっただろうか……？
どうせ言わずとも、既に私達は家族だったのだから。

第五十六撃

『ジュース好きが登場。……ほ、本当に飲むのか……？』

朝のイヴ騒動（私命名）から三十分後、私達はリビングにてコー

ヒーを飲んでいた。
ちなみに、エヴァさんは本格的に私の家に住むことを決めてしまったのか、当たり前のように私の家を出入りしている。
別に私は構わないのだが、学校に行っていないのが気になるところだ。

「クロカミは朝から盛んだったようだな」
「ぶ――――っ!?　い、いきなり何言ってンスかエヴァさん!?」
「吐くな、汚い。だが、事実だろう？」

エヴァさんはニヤニヤとしながらイヴの方を見るが、イヴは何がなんだか分からないといったような表情をしている。
イヴにしては珍しい表情に、さすがのエヴァさんでも毒気が抜かれたのだろう。
つまらなさそうにコーヒーをすすっている。
私はもう慣れたので、吐いてしまったコーヒーを拭きながら言葉に耳を傾ける。

「そう言えばクロカミ、このような手紙があったぞ？」
「手紙？　もしかして依頼の手紙か？」

手書きなんて珍しいなどと私は呟きながら、エヴァさんから受け取った手紙を開ける。
魔法世界では魔法世界独自の方法で手紙が届き、さらには映像で送られてくることも少なくはない。
手紙で、しかも手書きということは旧世界（こちら）からの依頼ということだろう。
最近は依頼が来なくなったから暇を持て余していたのだが、どんな依頼内容だろうな。
内心で楽しみにしながら依頼内容を読んだのだが、至って普通の

依頼だった。
つまらないなどということはないが、さしてや面白いという内容でもない。
内容は魔法世界の魔境にある各種の材料の入手。入手後はそれを使ってジュースを作ってくれということらしい。

「魔法世界の魔境？　随分と珍しい場所を指定してきたな。魔法世界に詳しい輩かもしれないな」
「まあ、この魔境は大して有名じゃないですからね」
「ふむ……。よし、私も連れていけ。暇潰しにちょうどいい」

まさかエヴァさんが魔法世界に行きたがるとは思わなかった。
確かに『登校地獄』の呪いで学園に縛られていたのだから、魔法世界に行きたくなる気持ちはよく分かる。
まあ、エヴァさんが言っている通り暇潰しなのだろうが、居ても居なくても変わらないために了承することにした。
依頼主の名前は綾瀬というのか……。依頼後に会う場所は……『銀竜の旅団』で良いようだな。

「面倒だからさっさと終わらせるか。イヴ、旅団の方は任せたぜ？」
「仕方がない、請け負ってやろう。別に貴様のためではないからな」
「へいへい。じゃあ、行きますか」

私は旧世界と魔法世界を繋ぐための扉を創り出し、魔境と座標を固定させる。
あとは潜ればすぐに魔法世界に直行……というわけだ。
これを使う度に思うのだが、何故旧世界と魔法世界といった風な座標を固定させることが出来るのに、旧世界のみの座標固定だと出来ないのだろうか？
実に不思議だ。などと思いながら、扉を潜った。

◇

扉を潜り、魔境に到着した私とエヴァさん。
さすが魔境というだけはあり、周りの風景は『魔』そのものだった。
だが今は、その『魔』すらもがショボくれて見える。
何故かって？　そのようなことは決まっているだろう。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■―――――――――――ッッッ！！！！！！」

……未確認生命体（アンノウン）が魔境にて暴れまわっていたからだ。
タイミングが良いのか良くないのかは分からないのだが、魔法世界についた直後にシェリルとティアから未確認生命体（アンノウン）が出たという知らせを聞いた。
今まで活動をしていなかったのに、今活動を始めなくともよいと思う。
シェリルやティアならばともかく、私やエヴァさんがいる時点で敗北は確定しているのだからな。
まあ、エヴァさんでは未確認生命体（アンノウン）の活動を完全に停止させることは叶わないがな。
犬のような体に頭が二つ……ケルベロスか？
大きさは普通の犬と比べ物にならないが……。だって普通に竜の大きさを越えているからな。

「これが神格か？　フィオナ・エリシオンから感じた力に比べれば大したことないな」
「フィオナと比べる方がおかしいッスよ」

フィオナは少なくとも銀河破壊の部類に入る力の持ち主だし、今の塵屑と比べることすら烏滸がましい。
だいたい、残りカス程度の力を得た雑魚を神格などと勘違いしてもらっても困る。
面倒だから敢えていっていなかったが、正式に分類するならばあれは『神格』ではなく、『憑格』というところだろう。
『神格』の力が憑依した成れの果てが『憑格』だ。
ともかく、憑格相手に時間をかける暇など、私にはない。

「クロカミ、こいつは私が殺る。完全復活を遂げたとはいえ、未だ全力では殺りあったことはない。こいつ相手ならちょうどいいだろう？」
「まあ、別にエヴァさんが殺っても構いやしませんけど、多分倒しきれないですよ？」
「なに？　それは私がフィオナ・エリシオンの足元にも及ばない塵屑に負けると言いたいのか？」
「違いますよ。そんなに凄まないで下さい」

私の言葉にエヴァさんが不快感を露にしながら、こちらを殺気混じりの視線で睨み付けてくる。
正直いうと全く恐くないのだが、言ったら言ったで面倒だから敢えて言わないことにする。
ほら、年齢的に私よりも年上であろうと、肉体年齢に引っ張られた精神じゃ何を言い出すか分からないだろう？
言うなれば、エヴァさんはまだまだ子供なのだよ。

「あれは全世界を探したとしても、俺しか倒すことは出来ませんよ」
「……やはり、神格の関係か？」
「そうなりますね。あれを倒すには、一旦自らに封印して、乗っとる必要があります。そうなると神格王と同等の力を持った俺にしか、

アレは倒せないんです」

別にエヴァさんが弱いなどと言うことはない。むしろ最強の部類にすら入ることが可能だろう。

だがしかし、そこはやはり旧文明と今の文明の違いだ。

例え造物主（ライフメーカー）であろうとも、造物主（ライフメーカー）が生まれる前から存在していた神格には相手にすらならない。

神格の力を持たずに、憑格と戦える方が異常な事態なのだ。

「とりあえず見ててくださいよ。俺の新技、見せてあげますから」

「お前にしか出来ないというならば……仕方がないか。見せてみろ、お前の新技とやらをな」

「了解。エヴァさんはゆっくりしててください」

私はエヴァさんに片手を挙げてそういいながら、ケルベロス型未確認生命体（アンノウン）に向かって歩いていく。

ケルベロスは私たちの会話が終わるのを律儀に待っていてくれたのか、私が近づいてくると威嚇の咆哮を上げる。

……本当は話の邪魔をされないように殺気を飛ばしていただけなのだが、感じ取れるだけの知性があって助かった。

いや、それとも本能で感じ取ったのか？

なんにしても――――。

「待っていた礼だ。せめて、塵も残らないように消してやろう」

自分でも分かるくらいの残虐な笑みを浮かべながら、私は『能力喰い』を発動させる。

ただ『能力喰い』の範囲を私の右腕ではなく、範囲をケルベロスの周りに指定する。

途端にケルベロスの周りに黒い霧のような物体が浮遊し始め、だ

んだんと濃さを増していく。
そして、濃さを増した黒い霧が無数の腕へと変貌を遂げる。
その腕はまるで、地獄へと誘うかのようにケルベロスにまとわりつき、地にできた闇に引き込もうとする。

「応用型秘技――――血塗られた道（プラスチック・ヴァレンタイン）」

『能力喰い』を応用した技である『血塗られた道（プラスチックヴァレンタイン）』は見た目こそ違うものの、能力の本質は変わらない。
能力を奪うという点は変わらないが、こちらの方が残虐である。
手足を千切り、肉体的に絶望的なダメージを与える技だ。
欠点があるとすれば、まだタイムラグがあるということくらいだろう。
それ自体は能力を使っていき、慣れていけば問題はないだろう。

（ちっ……いくら神格王の力を手に入れたとはいえ、それを応用するのは厳しいか……？）

体に感じる妙な違和感に内心で舌打ちをしながら、右手を『血塗られた道（プラスチックヴァレンタイン）』に捕らわれているケルベロスに向ける。
あのケルベロスは生きている生物ではなく、異常な力（イリーガル）によって生まれた存在だ。
それを排除したとて、世界にはなんら影響はない。
私はゆっくりと開いていた右手を閉じていき、完全に手を閉じたとき、ケルベロスは『血塗られた道（プラスチックヴァレンタイン）』の腕に飲み込まれ、完全に消滅した。
それを見届けた私は息を吐き、『血塗られた道（プラスチックヴァレンタイン）』を解除する。

「……随分と強くなったな、お前……」
「ん？　色々ありましたからね。今はフィオナと同等の力を持って

ますよ」

後ろから話しかけてきたエヴァさんに私はいう。

『神格』の本来の力を引き出すには、使うための肉体が必要となる。

私にはそれはないが、使える能力が強大であるが故に、使うための肉体を持っているフィオナとは同等だと言える。

「そうか。私もつくづく異常な弟子を持ったものだな」

「でも異常な力を手に入れても、エヴァさんの修業がなかったら手に入れられなかったかもしれない。エヴァさんには感謝してます」

「当たり前だ。私が直々に鍛えたのだ。感謝してもらわねば困る」

エヴァさんの言葉に苦笑しながら、私は本来の目的を達成するために動き出す。

この力を手に入れられたのは、エヴァさんが私を鍛えてくれたことが大きいと私は思っている。

エヴァさんとの修業があったから、私は神格王と戦うことができた。

そして、フィオナの想いを継ぐことや、自らの信念を貫くことが出来た。

感謝してもしきれはしない。

まあ、口が裂けても本人にはそのようなことは言えないのだがな。

私は内心でそんなことを考えながら、材料調達を開始した。

◇

旧世界、もしくは地球と呼ばれる世界のとある街。

そこは魔法や氣などといった概念にとらわれず、人間が普通に生活している場所だ。

一見すればこのように見えるが、中には魔法（うら）に内通している者や、その概念を知っている者もいる。

だがそれはここでは普通ではなく、異常なことであるが故に、皆は知っていることを隠して生活している。

そして、街を歩いていると、普通では有り得ないような人物が歩いていた。

長い銀髪に漆黒の外套、腰にはライフルが携えられている。

こんな異常な人物が普通の中を歩いていれば、気付けない方がおかしい。

しかし、ここの皆は誰一人として異常な事態に気づけてはいない。

それは、彼が異常であるという認識を阻害しているからだ。

「随分と活気なご老人だな？　初見でいきなりそれとは、礼儀がなっていないように見えるのだがな」

立ち止まった青年が、不意に口を開く。やはり誰一人として彼の言葉に耳を傾ける者はいない。

さっきまでは認識を阻害していたが、今は存在そのものを阻害している。

つまりはそこにいるが、認識できないと言うことだ。

認識が出来ないならば、彼の言葉も認識できない――――。

「そういうものではない。それにしても、老人相手にも加減はないのかの？」

――――ただ一人を除いて。

青年――シキ・K（クロカミ）・アスタロト――の背中に、拳銃を突きつけている老人のみが、シキに干渉できている。

この認知阻害はそのように構築されているからだ。

そして、拳銃を突きつけている老人に対し、シキは二重螺旋の魔

方陣を老人の急所に展開している。
どちらが優位と問われれば、百人中百人がシキだと答えるだろう。

「悪いが、敵意を見せた相手に手加減をする気はない――――と言いたいところだが、依頼主を撃つわけにもいくまい」
「なんじゃ。気付いておったのか？」
「私の存在に気づけるのは依頼主である綾瀬老人、貴方だけだからな。この認知阻害はそのように構築している」
「これは一本取られたわい！！」

楽しげに高笑いをあげながら、綾瀬と呼ばれた老人は拳銃をしまう。
この男は実はシキに依頼した人物であり、このやりとりは単なる出来心でしかないのだ。
それが分かっているからこそ、シキも撃っていないのだ。

「依頼の品は持ってきた。あとは飲み物を作るだけだが、貴方に渡せば良いのか？」
「いいや、孫に飲ませてもらいたい」
「孫？　……私がいうのもおかしい気がするが、子供が飲むような代物ではないぞ？」
「分かっておるわい。うちの孫は普通じゃないのだ。強いて言うなれば……変人、じゃな」
（自分の孫を変人ってどうよ……）

シキは内心でツッコミを入れながらも、綾瀬老人から今後の依頼内容を聞く。
依頼内容を話し終えた綾瀬老人は頼んだぞい、と一言だけ発してその場から去っていく。
それを見届けたシキは、認知阻害を解除する。

認知阻害がなくなったとき、既にそこにはシキの姿はなかった。

◇

あれから数日が経過し、私はいつ依頼を達成できるのかと考えていた。

もしかすれば、今までの依頼で一番時間が掛かってしまったのは、テオの護衛を除けば最長かもしれん。

これぱかりは依頼主や私の事情でなく、依頼主が求めた人物の事情なのだ。

「はぁ……」

溜め息もいったいどれだけついただろうか。

こうも依頼が達成できないのが気持ち悪いとは……。昔の私はよくもまあ、我慢できたものだな。誉めてやりたい。

「ただいま」

「お邪魔しま～す」

「おかえりー……。んぁ？　そっちの子は？」

店に帰ってきたアスナと、またもや遊びに来た木乃香に視線を向けると、そこには今まで見たことがない子が立っていた。

長い髪を先の方で二つに結んでおり、サイドも鈴のついた髪ゴムで結っており、何やら眠たそうな表情をしている。

手には珍妙なパッケージのジュースがあり、それを飲んでいた。

見たことがないジュースなんだが……大丈夫なのだろうか？

「紹介するな。この子はうちらのクラスメートの綾瀬夕映や」

「遊びに来てもらった」

二人の紹介を受けて私は鳥肌が立つのを感じた。
ようやく……ようやく依頼を達成できるときが来たのか、とな。
『綾瀬』という名字は依頼主の名前であり、どことなく雰囲気も似ている。
間違いない……。この子に魔境にて採集した材料でジュースを作り、飲ませることで依頼完了だ。

「あの、祖父に言われて来てみたのですが……」
「あぁ。話は聞いているよ。アスナ達と一緒に座って待っててくれ」
私を見て何やら怯えているような態度を示したために、膝を折り、同じ目線の高さになるようにしながら言う。ついでに営業スマイル全開。
女性に間違えられることはあっても、怯えられるなどとは思いもしなかったな。
この旅団で、営業スマイルのやり方を学んでおいて助かったかもしれん。
三人を席に座らせた私は、魔境から採集した材料でジュース作りを開始する。
う〜む……このような材料でジュースなど作ったことなどなかったから、どのようにすれば良いか分からんな……。
とりあえず適当にやってみて――――。

「完成、かな。つーか飲めんのか、これ……？」

――――完成したのは良かったのだが、明らかに異常な色となっていた。
間違いなく飲める代物ではないのだが、綾瀬老人がここの材料で作ってくれと言ったのだから、害はない……はず。

飲んでみないことには安否の確認はとれないが、生憎と私はそんな勇気を持ち合わせてはいない。
完成したジュースをトレーに乗せ、夕映達が座っている席に向かう。

「シキ、それ何……？」
「じ、ジュースだ……多分」
「説得力ないなぁ……。ホントに飲めるんか……？」

不安げなアスナと木乃香の表情は分からなくもない。
このようなジュースを持ってこられれば、不安になるのが普通の反応である。
だが例外がすぐ近くにいる。
綾瀬夕映だ。私がトレーに乗せているジュースを見て、心なしか目が輝いているようにも見える。
どうぞ、と一言だけ言い、私はジュースを夕映の前に置く。
普通ならばここで飲むのを躊躇するだろうが、先程も言ったように彼女は普通ではない。

「いただきます」

なんの躊躇もなく、極悪ジュース（私命名）を口に含む。
グラスに口をつけた夕映は、息をつくこともなく半分ほどまで一気に飲み干す。
その間、私達は夕映の姿を見て唖然とし、言葉を発することなど出来なかった。
そして、グラスから口を離した夕映が口を開く。

「なかなかいけますね」

有り得ねェ……と思わず素に戻ってしまうようなセリフを吐きやがった。
あんな見掛けから何から全てアウトのジュースを飲んだ挙げ句に、なかなかいけますね……だと？
有り得ねェ……。重要なことだから二回言わせてもらった。
あのような既にジュースとも呼べないような代物を美味いと言えるなど、全世界を探したとしても夕映だけだろうな。

「ぐぬぁー……。何をサボっているのだ雑種め……我が働いているというのに……。喉が乾いたぞ……。それ、飲ませてもらうが文句はあるまい」
「お、おい、イヴ！？」

旅団の仕事をしていたイヴが帰ってきたと思ったら、いきなり極悪ジュースを飲むなどと言い出しやがった。
疲れすぎているのか、自分が飲もうとしている物体の判別すら儘ならない状態だ。
さすがの私もこれには焦り、注意を飛ばしたのだが既に時遅し。
注意などまるで聞いていないイヴがグラスを手に取り、極悪ジュースを一気に飲み下す。
そして、次の瞬間――――。

「○△■☆％＃＆▼◇＄￥――――ッ！？」

イヴが理解不能な言語を吐き捨てながら、旅団の奥に消えていった。
余りの出来事に、再び夕映を除く私達三人は絶句してしまう。
滅多なことでは弱みを見せない、プライドの塊であるイヴが、あのような叫び声を上げて走り去る……。
の、飲まなくて命拾いしたかもしれん……。

というか、やはり極悪ジュースは飲めるような代物ではなかったらしい。
それを飲む夕映はもはや言葉には表せない。

「もう一杯もらえるですか？」

そして、本日何度目かとなる機能停止（フリーズ）状態へと陥ることとなる。
もちろん私だけでなく、アスナと木乃香もだ。
綾瀬老人……貴方は凄まじい孫を持ったものだな……。
私は苦笑いを浮かべながら、そんなことを思ったのだった。

第五十六撃『ジュース好きが登場。……ほ、本当に飲むのか……？』（後書き）

オリキャラをたくさん思い付くのですが、オリキャラ満載のこの小説にはもう登場させられない……。

そこで思い付きましたッ！！

『その竜族は狙撃手なり』のＩＦ伝としてオリキャラを登場させようとッ！！

このときのこんなオリキャラが居たら、という設定でＩＦ伝を出そうと思いますッ！！

いつになるかは分かりませんが、投稿したいと思います。

そこで、オリキャラを募集したいと思います。

名前、性別、能力、口調、一人称、絡めるキャラ、時期を送ってもらえると嬉しいです。

時期というのは……。

一期『転生後～バルド死』

二期『死の恐怖～ラファエル覚醒』

三期『ミカエルとの出会い～神格事件集結』

四期『ヘラス入国～大戦集結』

五期『ＩＮ麻帆良』

……となります。

では、オリキャラの募集待ってますッ！！

第五十七撃『アスナと委員長。人は死んだら、神の奇跡でもない限り、生き返らない』

夕映の極悪ジュース事件（私命名）が終わってから、早くも数ヶ月が経過した。

いや……何回もいうが、何もないのだから仕方がないだろう。それともつまらない小ネタでも挟んだ方が良いのか？

その場合はあまり長くは語れないのだが……まあ、その様なことはどうでも良いのだ。

今はアスナのことが問題である。

最近は学校から帰ってくると、何故か傷だらけになって帰ってくる。

理由は聞いていないから分からないが、傷だらけになって帰ってくるようになってから、アスナは生き生きしているように見える。

「ということでマナ君、何か知らないのかね？　ネタは上がっているのだよ？」

「何ですか、その喋り方……。それにネタって何ですか……？」

「いや、適当に言ってみただけだ」

呆れたような目を向けてくるマナに、私は素直に白状する。

今は放課後。アスナは木乃香や夕映たちと遊んでいるらしく、まだ帰ってきていなかったが、今日はマナが帰ってきていた。

ちょうどいい機会だったために訊ねてみた、というわけだ。

ちなみに、アスナと木乃香や夕映、さらにはマナも同じクラスだったのは、もはや都合が良いとしかいえない。

「それで、なんでアスナは怪我して帰ってくるんだ？」

「あぁ。それはいいんちょ……雪広あやかのせいですよ。……いや、

正確にはどちらのせいでもあるんですが……」
「あン？　どういうことだ？」
「実は……」

マナの話を聞いた私は、今まで心配していたことに呆れてしまう。
ようするに、だ。アスナが怪我をして帰ってくるのは、いいんちょ――雪広あやか――と些細なことで喧嘩をしてくるからららしい。
一番最初に絡んだのはあやからしいが、その言葉に対して喧嘩を吹っ掛けたのはアスナ。
その前にアスナの無愛想な態度が気に入らなかったらしいが、はっきり言ってしまえば、どっちもどっちとしか言えん。
まあ、危険なことを首を突っ込んでいなかっただけマシだろうが、一つだけ疑問が残った。

「アスナと喧嘩して怪我させれるって……そのあやかって子、何者？」
「そ、そういえば……。私達って俗にいうチートなんですよね？」
「あぁ。間違いなくチートだ。アスナなんか魔法が効かねェし、マナは万物の死が視えるし……」

よく考えたらこの二人、天然チートではないか……。
私が鍛えたからそれを十二分に発揮出来るということもあるが、それ以前から二人は天然チートだ。
うむ……日常生活では使わないことを前提に通わせたのだが、よくよく考えてみると日常にも危険があるな……。
以後気を付けてもらわねばならぬかもしれんな。
……って、今の論点はそこではない。

「結局、あやかっていう子供は何者なんだろうか……？」
「多分アスナも手加減してるんだろうけど、それでもスゴいですよ

ね……」
「うん、普通にスゲーわ。つーかアスナが手加減してくれてなかったら大変だけどな」
「そうですね……。あっ、私もか」
マナの言葉にそうだぞー、などと適当に相づちを打つ。
さて、放課後なのだから今日も旅団には人が来るはずだ。
今日も張り切って仕事に勤しむとしよう。

◇

あれからまたもや数日後。
いつも通り旅団で仕事をし、アスナが怪我して帰ってくる日々が続き、マナから報告を受ける日々が続いていた。
結果から言おう。……アスナといいんちょは仲が良すぎるということだ。
全く……心配していた私がバカみたいではないか。
……などと考えていると、家のドアが開く音が聞こえた。
振り向いてみれば、今日は珍しくマナよりも早く帰ってきたアスナの姿があった。
いわずとも分かるとは思うが、傷だらけである。仲が良すぎるというのも困りものだな。
「おかえり、アスナ。今日も喧嘩してきたみたいだな」
「いいんちょのバカが勝手に絡んでくるだけ」
「そうかそうか。で、今日は何が原因だったんだ？」
「別に大したことじゃない」
いつも大したことないことで喧嘩をしているようだが、いったい何が大したことがないんだろう。

まあ、友達同士の喧嘩だから心配には及ばないし、友達との付き合いも良好のようで何よりだ。
私が苦笑いをしていると、アスナが席についてぐったりとする。

「シキ。タバコ吸ってよ……落ち着く」
「いきなりだな。別に構わないけどさ」

アスナにそういった私は執事服のポケットからタバコを取り出し、ライターで火をつける。
魔法が使えればライターなど使う必要はないのだが、生憎と私は魔法を知っていても魔法の詠唱を知らないのだ。
簡単なものはすぐに覚えられるのだが、生憎と長いものを覚える気はさらさらない。
今更ながら思ったのだが、よく激しい戦闘の中で魔法の詠唱など出来るなと思う。しかも早口で。
正直やれと言われてもやれるとは思わん。

「シキのタバコ、やっぱり落ち着く……」
「一応、精神安定剤代わりにもなってるからな」
「精神安定剤……？　どうして……？」
「ん？　いや、今は意味ないんだけどな。昔にちょっとあってさ」

今は精神安定剤代わりにしているこのタバコも、無意味となっている。
昔に、といっても魔法使いが憎かったときの話だ。
魔法使いを見る度に殺人衝動が起こってしまえば、間違いなく私は殺戮者となっていた。
それを回避するために私はコレを使っていた。
故に副流煙にも精神安定剤が含まれている。殺人衝動を押さえ込むと言っても、それだけに対応しているわけではないのでな。

「もうすぐ、いいんちょに弟が出来るんだって」
「へぇ、良かったじゃん。なんだかんだいってやっぱし、いいんちょって子と仲良いみてェじゃん」
「仲良い？　そんなわけない。だっていいんちょってば――――」

何が仲良いわけない、だよ。そのような話を私にしている時点で十分に仲が良いではないか。

普通、嫌いな奴のことだったらそのように頻繁に話してくるはずがないし、あやかも仲が悪いのならば、アスナに弟が出来るなどと話すはずがない。

それに……なんだかんだ言いながら、あやかのことを話しているアスナの顔は綻んでいる。

このあやかという子には感謝せねばならぬようだな。

ほとんど感情がなかったアスナに、友達同士の付き合いの楽しさを教えてくれた。

今のアスナは間違いなく伽藍堂だった頃のアスナではなく、感情を知り得たアスナになっている。

これほどまでに喜ばしいことはない。これほどまでに、学園に通わせて良かったと思うことはない。

「――――シキ、ちゃんと聞いてる？」
「ん？　聞いてるよ。いいんちょと仲が良いって話だろ？」
「むぅ、やっぱり聞いてない」
「悪い悪い。今度はちゃんと聞いとくよ」

私はあはは、と笑いながらアスナにいう。

頬を膨らませながら抗議をしてくるアスナが思いの外可愛らしかったために、私はアスナの頭に手を乗せて撫でてしまう。

……うむ。反射的にこのような行動が出てしまうということは、

私ももう歳なのかもしれんな。
年齢的にはもう四十過ぎ……五十になるくらいか。肉体に精神が引っ張られるというのは、どうやらエヴァさんだけではないらしい。
私の肉体年齢はだいたい二十やそこらだからな。

「くすぐったいよ……。それに、恥ずかしい……」
「別に恥ずかしがることないだろ？」

膨らませていた頬に僅かに赤見が差しており、年相応の子供に見える。
このようなところをエヴァさんなどに見られたら、どのようなことを言われるか分かったものではないな。
駄菓子……ではなく、だがしかし。今この店にはエヴァさんどころかマナもイヴもいない。
あれ？　これは色々とイケナイ雰囲気になっているような気が……。
いや待て。私はこんな子供に手を出そうというのか？
ただでさえ幼女趣味（ロリコン）と呼ばれているのにも関わらず、本当に手を出してしまうのか？
答えは否（ノー）だ。私は幼女趣味（ロリコン）ではない。幼女趣味（ロリコン）などでは断じてないのだ！！
……と私は信じていたい。

「どうしたの、シキ？」
「……何でもない。ってお前はいつの間にパソコンを開いてんだよ……」

私が考え事をしている間に、アスナはノートパソコンを開いていた。
アスナが開いているのはもう一つの世界とも呼べなくもない『L

ＩＮＫ』というオンラインのものだ。
そこでは初期に設定した『アバター』と呼ばれる、いわば自分の分身を使い、楽しむものだ。
『ＬＩＮＫ』は世界各種のショッピングモールや支店、スポーツ、チャットなどを楽しむことが出来る。
中でも最も人気なのが、格闘技だったりする。
ちなみにアスナが使っているアバターは、ネコミミを付けた少女のアバターだ。
どことなくアスナに似てないこともない。名前はそのままアスナとしていた。

「『ＬＩＮＫ』なんか開いて何してんだ？」
「……い、いいんちょにお祝いのプレゼントでも買おうかな、って。わ、笑わないでよ」
「笑ってねェよ。いいじゃん、友達にプレゼント」
「別に……。そういうつもりじゃないもん」

……あれ？　もしかしてこれがツンデレって奴なのだろうか？
若干私と言い方が被ったような気がするが、気がしたと言うことだけにしておこう。そうしよう。
そんなことを思いながら、アスナを見守ることにした。

◇

二度あることは三度ある。またもや時間を飛ばさせてもらった。
ただ今回は二週間しか経ってはおらぬから安心してもらいたい。
いったい何に安心するかは私もさっぱり分からぬから、あまり気にしない方がよいと思う。
さて、今日は今までと違い雨の多い休日だった。
学校が休みだとはいえ、旅団が休みなわけではない。

今は店番をしているわけなのだが、雨の日ということもあり、一足がほとんどない。
さすがに誰も来ないのに店番をしているのはバカらしく思えた私は、今日は休みにしようと思った。

「シキ……」

ふと、聞きなれた声が店の外から聞こえた。
外はすごい雨。この声が私の知っている人物ならば、こんな雨の中放り出しておくにはいかない。
私は洗い物を放り出し、急いで店の外に向かう。
そして、店の外にやってきた私の視界に入ってきたのはずぶ濡れのアスナだった。

「何やってんだ、風邪引くぞ。早く入れ」
「……うん」

私はアスナの手を引いて急いで店の中に入る。握ったアスナの手はとても冷たく、長い時間雨に打たれていたことが分かる。
濡れた髪をタオルで拭きながら、アスナを見る。
今日はあやかの家に遊びに行ってたはずなんだが、なんでわざわざこんな雨の時に帰ってきたのだろうか……。
雨が止んでから帰ってくれば良いものを。
さらに言えば今のアスナは落ち込んでいるようにも見える。喧嘩でもしたのだろうか？
とにかく、遊びに行ったときのアスナの明るさは全く感じない。

「……ねえ、シキ。シキは、なんでも出来るんだよね……？」
「なんでも？　やろうと思えば大抵のことは出来るよ。だけど、それがどうかしたのか？」

「じゃあ……死んだ人を、生き返らせることも……？」

アスナの言葉に、私は動かす手を止めてしまった。

当たり前だ。なんでも出来るのかと問われて、人を生き返らせることも可能なのかと、このような小さな子供に訊かれたのだから。

答えとしては可能（イエス）だ。私の持つ『創造再生』であれば、生命の再生も難なく可能である。

実際に私自信の命や、マナの命を救った経歴がある。

だが、いったい何があればこのようなことを訊かれなければならないというのだ。

「何があったんだ？　怒ったりしない。だから、正直に話してくれ」

「……今日、いいんちょの弟が生まれる日だった……」

それは知っている。それを祝うためにわざわざアスナがあやかの家に行ったのだからな。

だが、それが落ち込んでいる原因と何が関係あるのだろう。

今のアスナの状況を見る限りでは、ただ事ではないように思える。

「だけど……死んじゃったの……」

「そういう、ことか……」

アスナが落ち込んでいた理由は、あやかの弟が死んでしまったからということか。

人を生き返らせることが出来るか訊いたのは、私にあやかの弟を生き返らせてもらうため。

なるほどな、友達想いのいい子に育ってくれた。だけど――――。

「シキ、いいんちょの弟を生き返らせてよ……！！」

「悪いけど、それは出来ない」

「どうして！！　シキは何でも出来るんじゃないの！？」
「あぁ。もちろん出来る。でも、それは出来ない」
「どうして……どうして！？　いいんちょ、泣いてた……」
「理解しろとは言わない。だけど、いつか分かる日が来るから」

私はそう言いながら、泣きそうになっているアスナを抱き締める。
そう。私の持っている能力は『希望』と『絶望』、紙一重で繋がっているに過ぎないのだ。
私的な理由で能力を使うわけにはいかないのだ。それだけこの能力達は……世界にとって有益であり無益でもある。

「あやかのところに行こう。きっと、あやかもお前と同じことを思ってる」
「……学園の近くの病院」
「ありがとう。すぐに行こう」

私はアスナにそう言い、急いであやかがいるという病院に向かった。

◇

私にはシキの言っていることが、とてもじゃないけど信じられなかった……。
どうして、誰かを助けることが出来る、神様みたいな力を持ってるのに、いいんちょの弟を助けてくれないのか。
シキはいつも私を助けてくれた。シキはいつでも私のために戦ってくれた。
ううん、私のためだけじゃない。みんなのために、シキは戦ってくれてたんだと思う。
だからこそ、今回のシキの言葉は信じたくなかった。

自分の身内でなかったら助けてはくれないのか、他人だったら助けなくてもいいのか――――。

いつもは優しく見えるシキの表情は、今は残酷で冷酷にしか見えない……。

「君が雪広あやかさん……かな？」

「貴方は……？」

「俺はアスナの保護者みたいなもんで、黒神織って言うんだ」

場所は病院。いいんちょの家族が泣いているところに、シキはやってきた。

私がいたと言うことで怪しまれなかったけど、とてもじゃないけど今は話し掛けられる雰囲気じゃない。

いいんちょも初見だったら少しは怖いシキを見ても、なんとも思ってないみたい。

シキは私の手を話して、いいんちょと同じくらいの目線の高さになりながら、口を開く。

「もしも、弟さんが生き返るとしたら、君はどうする？」

「生き返らせてくれるとでも、いいますの……？」

「いや。俺にはそんなことは出来ない」

嘘だ、私はそう叫びたくなるのを我慢した。

シキは嘘をついている。いいんちょの弟を生き返らせれるのに、いいんちょを目の前にして嘘をついた。

シキは柔らかい、慈愛に満ちた表情をしながら、いいんちょに言う。

「確かに君の弟はもう帰っては来ない。神様の奇跡でもない限り」

「……」

そんなことはない。
シキがちょっと能力を使えば、今すぐにでもいいんちょの弟は生き返る。
どうして、シキは、こんな意地悪をするんだろう……。
「だけどさ、君の弟さんがここにいたってことは、変えようのない事実なんじゃないかな」
「わたくしの弟が……ここに……？」
「そう。ここにいたんだ。そして今は――――」
シキはそこで言葉を一旦遮ると、床につけていた手をいいんちょの前まで持ってくる。
開いていた拳を閉じて、いいんちょの胸の前に持ってきながら、言葉を紡ぐ。
「『君の心（ここ）』にいる」
「ここ、に……？」
「そうだ。君が弟さんを忘れない限り、弟さんはずっと『君の心（ここ）』にいる」
「……」
「なんか在り来たりだけど、君の弟さんは、君が泣くことは望んでないと思う」
実際は分からないけどね、とシキは柔らかい笑みを見せながら言う。
するといいんちょは流していた涙を拭き、ジッとシキの目を見据えた。
それはさっきまでの悲しみに満ちた表情ではなく、吹っ切れたかのような表情。

「そう、ですわね……。わたくしの弟は、わたくしが泣くことは望んでないと思いますわ」
「あぁ。そして、君は受け継がないといけない」
「受け継がないと……？」
「君の弟さんの生きる分を。といっても何も気負う必要はないよ。ただ、君の弟さんがここにいたということを君が生きることで証明すればいい」

そうすれば、君の弟さんがいなくなることは絶対にないから……シキはいいんちょの頭を撫でながらそういった。
そうか……。確かに能力を使って生き返らせることは簡単に出来る。
だけど、そうしたんじゃ命の価値が下がってしまう。
自分は世界（ここ）にいる。そう証明するためにも、私たちは限りある命を精一杯生きていかないといけない。
シキが言いたかったのは、きっとそう言うことなんじゃないかと思う。
何てことはない。生きるということは、自分が『ここにいる』ということを証明すればいいんだ。

「分かりましたわ。わたくしは弟がここにいるということを、絶対に……絶対に忘れません」
「その意気だ。あと、ごめんな。いきなり来て偉そうなことべらべら言って」
「そんなことはありませんわ。シキさんのおかげで、わたくしは大切なことに気付けましたから」

いいんちょの言葉にただ一言、シキはありがとうと返す。
シキが言った今までの言葉はきっと全部、今まで関わってきた人

達から学んできたことなんだと思う。
想いや意思を伝えるためには、言葉に表すしかない。
それは、シキ自身が体験してきたことだからこそ、私やいいんちょに教えてくれた。
やっぱり……シキはみんなために、戦ってくれてたんだ……。

◇

あやかに私が伝えられることを全て伝えた私達は、雪広一家の元をあとにし、病院の廊下を歩いていた。
偉そうに語ってしまったはよいが、結局は今までの受け売りにすぎないのだがな。
まあ、それっあやかが吹っ切れたのだから、よしとしよう。
そんなことを考えると、隣を歩いているアスナが話しかけてきた。

「シキ……。ありがと」
「ンだよ藪から棒に。俺は大したことはやってねェよ」
「ううん、シキは大切なことを教えてくれた。だから、ありがと」
「……なんか、正面から言われると気恥ずかしいな……。悪い気はしねェけどな」

私はアスナの言葉に頬を掻きながら、そう答える。
病院の廊下を歩いて出口を通り抜け、空を見上げる。
そこには、さっきまでの悲しみに満ちた雨空ではなく、晴れ晴れとした快晴が広がっていた。

第五十七撃『アスナと委員長。人は死んだら、神の奇跡でもない限り、生き返らない』

明日から一週間、合宿があるためこちらの更新が出来ないかもしれません……。

なので、以前に新しく投稿した『ＩＦその竜族は狙撃手なり』を見てもらえると助かります。

こちらなら多分更新できると思います。

『その竜族は狙撃手なり』の有り得たかもしれない物語が展開されます。

短いですが見て下さいッ！！

感想待ってますッ！！

第五十八撃『第一回、女誑し主人公を別視点から見てみよう。基本的に主人公は

ようやく合宿から帰ってきたッ！！
だけど足が……。
とりあえず今日はストックを投稿します。
では、どうぞッ！！

第五十八撃『第一回、女誑し主人公を別視点から見てみよう。基本的に主人公は

ここは、旧世界の麻帆良学園の近くに建てられている極普通の一軒家。

端から見れば極普通の一軒家なのだが、実際に極普通の一軒家なのだからこう表記するしかない。

この一軒家は世界最強、もとい最凶もしくは最狂の狙撃手――シキ・K（クロカミ）・アスタロト――が買い取った一軒家である。

まあ、こいつが買い取った時点で普通とは呼べないような気がしないでもないが、気にしたら負けである。

現在、この家には家主であるシキはいない。だがしかし、中には複数の気配がある。

「皆さん、集まっていますね？」

「あぁ。欠席はいねえよ」

「……大丈夫」

「ちゃんと数えたから大丈夫だよ」

「なぜ我までこのようなことをせねばならんのだ、雑種共」

「落ち着いてください。気持ちは分かりますけど……」

「怒ると、皺が増える」

集まっているのは合計七人だ。

新・旧世界を合わせても彼女が最強の剣士だろう――シェリル・アリウス。

一度は最凶の狙撃手を殺したことがある、戦闘狂（バトルマニア）――ティアレンス・バイシタル。

基本無口だが狙撃手への気持ちは誰にも負けない――エル・イーグルス。

最凶の狙撃手の義理の妹、剣の腕前は折上つき――ユーリ・アスタロト。
旧文明で神格王の名前を与えられた最強の神格――イヴ・サンライト。
一度は死を体験し、根源に触れて『直死の魔眼』が開眼――マナ・アルカナ。
『反魔法場（アンチマジックフィールド）』をその身に宿している黄昏の御子――神楽坂アスナ。
この七人が、狙撃手不在の家に集まっていたのだ。
この七人、集まっているということはあり、狙撃手に少なからず好意を抱いている。
マナとアスナは義理の父のような感覚。ユーリとエルは本気の恋心。シェリルとティアは武人としての強さに。
イヴは自分に勝つことが出来たから、という理由だ。

「集まってもらった理由は他でもねぇ。――――今夜のおかずはどうするかってことだ」
「違いますから！！　というか今夜のおかず！？　自分の好きにしたらいいではないですか！！」
「何をいう。おかずは重要だ。何で気持ち良く――――」
「言わせませんよ！？　何気に言おうとしないでください！！」

最初のティアのボケに全力でツッコミ、イヴの全年齢向けの話に合わない話題にツッコミを入れるシェリル。
おそらくこの場にいる大人勢で唯一まともなのは、シェリル一人だろう。
一人でツッコミをやりきれるかどうかが問題だろう。

「そんな下らないことで集まったわけではありません」
「そうだよ！！　本当はどうやったらシキ兄を独占できるかを僕にアイデアをくれるためだよ！！」

「そうそう。どうやればシキ君を……ってそれも違います！！」

再び投下されたボケに、シェリルがノリツッコミという大技を繰り出す。

才色兼備で料理も出来てツッコミが出来る。正に男の憧れと言っても間違いはないだろう。

ただし、長命種のためにそこまで歳をとっていないように見えるが、実際は既に残念な域に達していたりする。

自分でもそこは気にしているため、言うのはやめよう。でないと、きっと斬られてしまうから。

「とか言ってシェリルさんもシキさんのこと、狙ってんじゃないのか？」

「……狙ってても、不思議じゃない」

「ね、狙ってなどいません。彼は確かに武人としては尊敬していますが、恋愛対象に入るかどうかと言われたら、その……」

ティアとエルの言葉にさっきまでツッコミを入れていたシェリルの勢いはなくなり、しおらしくなってしまっていた。

心なしか、頬をわずかに紅潮させており、豊満な胸の前で両手の指先同士をツンツンとさせている。

そんなシェリルの様子を、ティア達がニヤニヤと見つめていた。

「って何を言わせるんですか！！」

ようやく自分が見られていることと、心の内を暴露してしまっていることに気づき、急いでそう言う。

だが既に時遅し。皆にはシェリルがシキにどのような感情を抱いているか伝わってしまっただろう。

ツッコミに強制的に回された挙げ句に、このような残念な役が回

ってくると考えると、本当に残念としか言いようがない。
んんっ、と場を誤魔化すように咳払いを入れたシェリルは、改めて皆を召集した理由を述べる。
実際はシェリルだけでなく、全員の意見の一致から集まったのだが、統率を取れるのがシェリルだったためにこうして仕切っているに過ぎない。

「集まってもらった理由。それは――――どうしてシキ君はあのようにフラグ体質か、ということです」
『そ　れ　だ　！　！』
「忘れてたんですか！？」
「すみません。脱線しすぎて忘れてました」

またもや炸裂したシェリルのツッコミに、マナが真面目に答える。
大人よりも子供の方がまともという状況に、普通ならば呆れるしかない。
というよりも、何故大人勢にはまともな奴が一人しかいないのだろうか？

「普通ならあり得ないよな。あの人、フラグ立てすぎだぜ？」
「しかも気付かないっていうのが難点だよねぇ～」
「……それは分かる。アピールしても、気づいてくれない」

ティア、ユーリ、エルのアリアドネー卒業生トリオの言葉に、この場にいる全員が頷く。
シキは戦闘に関しては爆発的な勘の鋭さ、もはや予知に近い勘の鋭さを発揮するというのに、他人の気持ちに関しては鈍感すぎる。
わざと無視しているのではないかと思われても仕方がないほどに、シキは気付いていないのだ。

「それに関しては納得です。私達ですらも気づけるというのに……」
「我もその気持ちは分かるぞ。いったい何年奴と共に過ごしたと思っている」
「それはそれで羨ましいよぅ……」

イヴの言葉にユーリが指を加えて、本当に嬉しそうにいう。
イヴはシキと魂レベルで融合していながらも、意識は別という奇妙な体験をしていた。
つまりは今までシキにアピールしてきた人の、シキへの好意に嫌でも気付いてしまうということだ。
羨ましいなどというが、見る側からしたらもどかしいとしか言いようがない。

「つーか、あの人なら見境なくフラグを乱立してそうだな」
「しかも無意識に。質が悪いね」

アスナの同意の言葉にティアもだな、と一言だけ答える。
そう。今ここに集まっている皆は恋愛フラグではないものの、確かにフラグが確立されている。
こうも攻略が難しそうなシェリル達を易々と攻略しているところを見ると、日常ではどれだけフラグを乱立しているか分かったものではない。

「ということで、今日はシキ君の一日を探ってみようと思います」
「どこでどんな風にフラグを立ててんのか……見ものだな」
「どこにいてもあの雑種はフラグを立てていそうな気がするが……まあ、暇潰し程度にはなろう」
「シキ兄がこっちでどういう生活してるか楽しみだなぁ」
「……見る」

そう言いながら準備を開始する大人勢。
それを後ろから見守るように立っているマナとアスナの子供勢。
大事なことのためにもう一度言わせてもらうが、大人よりも子供の方がまともというのは、どういうことだろうか。

「「はぁ……」」

シキの私生活を覗くと言うことであったが、見る前から億劫になってくる二人であった。
これで、もしもシキが私生活でフラグを立てようものなら、いったいどうなることだろう。
今の彼の状態を表すならば『ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっているだろうけどな』とでもいうところだ。
この事を知らないシキに明日は来るのだろうか。
こればかりは、神のみぞが知ることとなるだろう。
そして、ヤル気満々な大人勢の後ろを、ヤル気零な子供勢がついていくのだった。

◇

「よくよく考えてみると、シキさんって普段何やってんだ？」
「そうですね……。マナさん、アスナさん、イヴさん、何か知りませんか？」

街に出てきたのは良かったのだが、シキの私生活を調べるという目的を意識しすぎてしまっていたために、どういったところに行くのかを知らなかった。
正確にはどこに行くのかなども私生活に含まれるのだろうが、細かいことを気にしないのが大人クオリティ。
とりあえずこちらでの付き合いが長い三人に、シェリルとティア

は訊ねる。

「私達は学校がありますから、この時間帯は何をしているかは分からない」

「うん。旅団にいるか修行してるだけだから」

「我も知らぬな。そもそも、なぜ我が雑種の行動を把握せねばならない」

「……貴女に訊いたのが間違いでした。となると、彼の性格から行きそうな場所を検討するしかありませんね」

シェリルの言葉に、この場にいる全員が頭を捻り始める。

ちなみに、ここは麻帆良学園の外の普通の歩道だ。

そんな場所にこれだけの美人・美少女が居れば浮かないはずがない。

かなり周りから注目されているのだが、誰一人としてそのことに気づけていない。

それは考え事に夢中になり気づいていないのか、はたまた気づいているが慣れているだけなのかは、本人達しか分からない。

ふと、ユーリが視線を傾けたとき、考えていたのがバカらしくなるものを見つけた。

「あーっ！！　シキ兄――むぐっ！？」

「（……大声ダメ。静かにする）」

「むぐむぐ……」

見つけてしまった条件反射に大声を出してしまったのだろう。

だが、見つかるわけにはいかなかったために、続けて大声を出そうとするユーリの口をエルが押さえる。

エルの行動でようやく自分の失態に気づいたユーリは、エルの言葉に二回頷く。

「（ふむ……あ奴はあのような場所で何をやっているのだ？）」
「（花屋……？）」
「（花屋なんかに立ち寄って何してんだよ、あの人）」
上からイヴ、アスナ、ティアの順番で小さめに言葉を発する。
ユーリが見つけたのは、執事服で花屋に入っていくシキの姿だった。
おそらくは旅団の仕事を抜け出したために、仕事服である執事服のままなのだろう。
花屋などに来なさそうなシキが花屋に立ち寄ったために、七人は何をしているのか興味が沸いた。
七人は路地の角から顔だけをだし、シキの様子を伺う。
「あっ、い、いらっしゃいませ、黒神さん」
「そうかしこまらなくてもいいと思うんだけどな……」
「いえ、お気遣いなく。き、今日はどういった花をお求めでしょうか？」
「今日はな――――」
花屋に入ったシキは、そこの店員と親しげに会話を始めた。
話の内容から分かるとおり、どうやらシキは何回かこの花屋に立ち寄ったことがあるようだ。
しかも店員の女性の頬が紅潮し、乙女な表情になっている。
ご丁寧にフラグまで立てている辺り、フラグ体質は健在なようだ。
もちろんそんな光景を見た七人が、いい顔をするはずがない。
「（なんだよ、シキ兄、あんなにニヤニヤしちゃって……。だらしないよ）」
「（……同意。鼻の下が伸びてる）」

「（いや、そんなことはないと思いますけど……）」
「（マナ。この人達に常識は通用しない）」
「（……そうか）」

恋はどうやら女性を盲目にする効力があるらしい。
実際にはシキはニヤニヤしていたり、鼻の下が伸びていたりはしないのだが、恋する二人にはそう見えてしまうようだ。
いわずとも分かるだろうが、ユーリとエルの二人だ。
そんな二人を見たマナとアスナは既に諦め気味に会話をする。

「……」
「あの、どうかしましたか……？」
「あぁ、いや。何でもないよ。また後で来るから、よろしく頼むよ」
「はい！！」

シキの笑顔の一言に店員がポッ、と顔を赤らめながら元気よく答える。
もちろんシキの笑顔は営業スマイルだが、フラグ体質の彼はそれだけでフラグを立てることが出来る。
おそろしや。どこからかリア充滅べという電波が流れてくる。
……そんなことはさておき。花屋をあとにしたシキは、また別のところに向けて歩き出した。
ようやく見つけた手掛かりを、ここで逃がすわけにはいかない。

「早く彼のあとを追いましょう。見失わないように」
「そうだね。早く行こう！！」
「……逃がさない」

率先して動くシェリルにユーリとエルも続いていく。
もしかしたらこの中で一番乗り気なのは、シェリルなのかもしれ

ないとティアは内心思いながら、三人のあとを追う。
実はこのティア、恋心やら尊敬どうのこうのは関係なく、ただ単に好奇心でついてきただけに過ぎない。
最近は忘れがちだが、ティアは武人である前に悪戯好きの少女なのだ。
口許には楽しいと言わんばかりの笑みが浮かんでおり、それに内心子供勢はホッとする。
いざとなればティアに止めてもらえばいいからだ。

「そんな心配すんなって。オレも変態入りはゴメンだからな。止めるとこではちゃんと止めてやるよ」
「て、ティアさん……。今までで一番感動しました……」
「ありがと。ティアのおかげで、溜め息も減る気がする」
「大袈裟だな……。まあ、頼っとけ」

ティアの言葉にマナとアスナは感動の涙を流す。
それほどまでに嬉しかったのだろうが、嬉しがりすぎな二人の態度にティアは苦笑する。
そんなことをしているうちにシキが次の店に立ち寄ったのか、先に行ったはずの四人が再び路地の角から顔だけをだしている。

「（今度はどこだ？）」
「（アクセサリーの店みたいだよ、ティアちゃん。も、もしかして誰かにプレゼント！？）」
「（どうせテオドラ皇女にじゃねーの？　あの人、既婚者じゃん）」
「（うっ……そ、そんなの知らないもん！！　しかもテオドラ皇女は知り合いだからノーカンだもん！！）」

ユーリはシキが既に結婚していたことを忘れていたらしく、ティアに指摘されてようやく思い出していた。

しかも話し方から思考までもが幼児化している。
相当にシキが結婚しているという事実を認めたくないらしい。
この中で最も付き合いが長く、シキを思い続けついたというのに、一番短い付き合いのテオドラが結婚したというのは、他の者からしても認めるのは癪だろう。
ただ彼が選んだ相手であるために、文句などは言えない。

「（そーいえばこの中でシキさんからプレゼントもらった奴、いなくねーか？）」
「（いや、アスナがもらってたよ。アクセサリーじゃないなら私も）」
『（羨ましい！！）』

子供勢のまさかの言葉に、ユーリとエルの二人がそう叫ぶ。
今まで戦いが多く、自由な時間が少なかったとはいえ、短い付き合いの二人がプレゼントをもらったことが悔しいのだ。

「（ふむ……今思ったのだが、あ奴がプレゼントをしているのは、子供相手だけではないのか？）」
『（……）』

イヴの発言に、その場にいた全員が固まる。
今思い返してみると、確かにイヴの言った通りかもしれない。
プレゼントをした当時のテオドラはまだ子供であったし、マナもアスナもまだまだ大人というには相応しくない。
やはりシキがプレゼントした相手は全てが子供なのだ。

「（……幼女趣味（ロリコン））」
「（し、シキ兄――――――！！　ダメだよ、幼女趣味（ロリコン）はダメだよ――――ッッッ！！！！！！）」

「（落ち着けよユーリ。幼女趣味疑惑は今始まったことじゃねえだろ？）」
「（初耳だよそんなこと！？）」

そうだったか、とティアはユーリの言葉に対していう。
この中でシキの幼女趣味疑惑を知らなかったのはユーリだけなのだが、そのようなことはどうでもいい。
本当に今さらの話題だからだ。特に気にする必要もない情報、そう位置付けされている。
そして、錯乱しているユーリを止めている間にシキはアクセサリー屋をあとにするのが見えた。

「（何軒寄る気なんでしょうか……？）」
「（分からぬならば着いていけばよい）」

こうして、七人のシキ追跡はまだまだ続いていくこととなる。

◇

あれからシキをずっと追跡していた七人は、様々な場所に立ち寄ることとなった。
花屋からアクセサリー屋、服屋に食品店に、多種多様なジャンルの店に寄り、その度に女性と仲良くしている光景を見せつけられた。
しかも全員が全員美人であり、尚且つ好意を抱いているが、案の定シキは気づいていない。
いい加減追跡するのを止めようと思っていた中、シキは不意に魔法世界に向かうのが見えた。
今まで旧世界でばかり行動を起こしていたために、ここで何かあるのではないかと思い、着いてきていた。

「ここは……」
「ふむ。随分と懐かしいものがあるな」
「これは何なんだ、イヴ？」

やって来た場所は、何もない荒野に天を穿つように聳え立つ一つの柱だった。
よく分からない柱を懐かしいと言ったイヴはこれのことを知っているのだと思い、ティアは質問をした。

「これは、我らの技術を使って創った……言うなれば城のようなものだ。最も、これを好き好んで使っていたのはオーディンであるがな」
「オーディン、ねえ。そいつには会ったことねえな」

ティアは第四層『ウリエル』の神格者だ。
ユーリは第五層『ガブリエル』でシキは第三層『ラファエル』の神格者。
イヴなど第一層『神格王』そのものだが、未だに第七層『オーディン』の神格者に会ったことはない。
まあ、第七層『オーディン』も本人であるために会えるわけないのだが、今はどうでもいい話題だ。

「案内はイヴさんに任せます。シキ君は最上部に向かったはずですから」
「我に命令するな。……が、今は致し方ない。着いてくるが良い」

柱の中に入ったイヴは、トン、と軽い音を立てて上に登り始める。
本来の力があればこのような動作をする必要はないのだが、今は力がないためにこうするしかない。
シェリルはアスナとマナを抱えて、イヴのあとを追いかける。

ユーリやエルもこの十数年で修行を行ったために、この程度は造作もない。
ぐんぐんと天に上っていき、数分としないうちに七人は最上部に到達していた。
最上部の部屋を覗くと、真っ白な空間の中に、シキが一人佇んでいた。

「（何をしているのでしょうか？）」
「（……石碑に話しかけてる？）」
「（意味の分かんねーことしてるな）」

シキが謎の石碑に話しかけてる様子を、七人は不思議に首をかしげる。
ただ言わせてもらうならば今のシキの表情は、少しばかり悲しみが差している。
それに気づけない七人ではない。伊達に何年も一緒にいるわけではない。

「よぉ。また来たのかとか言うなよ？　こっただって色々と忙しいんだぜ？」

まるで目の前に話し相手がいるかのように、シキは平然と虚空に話しかける。
今の言葉を聞く限り、ここに来たのは一回やそこらではない。
少なくとも複数回来ているということが分かる。

「この前はどこまで話したかな……。まあ、いいや。今日は俺の仲間を紹介するよ。アンタのおかげで出来た仲間だ――――なあ、そこに隠れてる七人」
『――――！？』

不意にシキが隠れてる七人の方を向き、そういってきた。
もうバレてしまったなら仕方がないと腹を括り、七人はシキの前に立つ。
別段シキに驚いた様子がないところを見ると、随分と前から気付かれていたようだ。

「いつから気づいてたのですか？」
「いつからって……最初っからだよ。お前ら、尾行下手すぎなんだよ」

シキの言葉に全員が肩を落とす。
どうやら彼女たちは、シキの手のひらの上で踊らされていたに過ぎないようだった。
それを思い知らされると何やら悔しいような、なんとも言えない気持ちになる。
シキは七人を見渡したあとに再び石碑に向き直り、口を開いた。

「こいつらが俺の仲間だ。アンタのおかげだよ。俺がこいつらを護れるようになったのは」
「雑……シキ、貴様は誰に話しかけている」
「オーディンと、執行者……かな」
「……そうか」

二人の会話に首をかしげる六人。
この会話はこの二人にしか理解することが出来ない。出来るはずがないのだ。
彼女たちは、神格について知らないと同義なのだから。

「今日は俺が『私』になった日。そして、仲間を再び失った日なん

だ」

そう、この日こそ、彼が『私』となった日であり、仲間を失った日なのだ。

既にあのときから十数年が経過したが、この場所は相も変わらず何もない。

ただ一つ。彼が創った石碑を除いて。

「あいつらが居たから、今の俺がここにいる。だから、みんなを一回紹介しときたかったんだ。まさか、ずっと着いてくるとは思わなかったけどな」

ニヤニヤとするシキに、七人は苦笑するしかない。

手のひらの上で踊らされていたことに気づいたものの、そこまで計算通りだとは思わなかったらしい。

とにかく、この七人がシキを追跡した結果は『仲間想い』ということで、変化はなかった。

当初の理由からはかなりかけ離れてしまったものの、シキのことを知れただけ良いと言うことだろう。

「ねえ、シキ兄。もっとシキ兄のこと教えてよ」

「……知りたい」

「オレも知りたいかな。色々と知らないことがたくさんあるからな」

「私もです。何をやって神格の力をてに入れる前は強くなったか……是非とも教えてください」

「はぁ……分かった分かった。だいたいは予想できてたけどな。……じゃあ、帰ろうぜ？」

和気あいあいと騒ぐ七人を見ながら、シキは思う。

彼女が居たから、自分は強くなれた。彼女が居たから、繋がりの

大切さを理解できた。
だからこそ、彼女には帰ってきてもらいたかった。

（アンタの居場所、俺がちゃんと残しとくからよ。あいつと一緒に帰ってこいよな）

彼が思い浮かべるのは一人の銃使いの女性と、双剣使いの少女。
彼女たちがいつ帰ってくるか分からないが、少なくとも、居場所は確保されているようだった。

◇

シキ達が去ったあとの柱の最上階。
今までは平坦な静けさを保っていたが、不意に光の球体がその場に現れた。
どこからともなく、なんの前触れもなく突然に現れたのだ。
直径三メートルほどの光の球体は、徐々に光を失っていき、光が完全に消滅したとき、そこには一人の人物がいた。

「ハァァァ……――――」

赤色の髪をなびかせ、胸の辺りを包帯で隠している。
カランと鳴り響くのは足に穿いている下駄のせいだ。
羽織っているはっぴには袖を通しておらず、襟の部分は口元を隠すように閉じられている。
三白眼で真っ白な空間を見渡す。

「ハァァァ……――――」

もう一度小さく唸る。

ぴくっ、と小さな肩が揺れた。
ギョロリと目玉を動かし、北の方角を見つめた。
両手に逆手で握られた三又の双剣を握り直し、少女はその場から動き出す。
胸には、忍冬（すいかずら）の首飾りが光っていた。

第五十八撃『第一回、女誑し主人公を別視点から見てみよう。基本的に主人公に

さて、ようやくこの章も少し動き出しましたね。
これから物語がどのように変化していくのか……ぜひともご覧あれ！！
……もう一つの小説のオリキャラも募集してますよ（チラッ）
では、感想待ってますッ！！

第五十九撃『現れたる三爪痕。テメェは、あいつなのか……？』

時は流れ、あれから一年。

この麻帆良学園に足を踏み入れてから実に二年近くの時間が経過した。

時が流れるのは実に早いもので、この間マナとアスナが入学したかと思えば、もう二年生になっているではないか。

一年通い続けた二人は自宅通いではなくなり、寮暮らしとなっていた。

寮暮らしでうまく出来ているか心配だったが、どうやら上手くやれているらしい。

それに、旅団の仕事をしていればすぐに会える。ただ、家では会えなくなる、

つまり何が言いたいのかと言うと――。

「非常に暇だ……。やることがねェ……」

ということだ。休日は旅団もほとんど開店していないのと同じだし、家にいてもやることがない。

アスナとマナがいたときならば修業をやるために暇を潰せたが、今この家にいるのはエヴァさんとイヴ、それにミカエルだ。

修業を行う必要がないために、せっかく創ったダイオラマ球もお蔵入りになっている。

一人で中にいても暇だしな。

ちなみに、エヴァさんは既に卒業したことになっている。学園長が手回しをしてくれたようだ。

確かに呪いがかかっていないのならば、エヴァさんが学園に通う必要はないからな。至極真っ当な判断だろう。

（本当に暇だ……。最近は『憑格』も出なくなっちまったしな……。どうなってんだ？）

ゴロゴロと寝転がりながら、私はそのようなことを考える。

一年前のあるときから、不意に『憑格』の現れる比率が激減した。

簡単に例えるならば、三日に一回現れていた『憑格』が、最近では一ヶ月に一回やそこらしか現れなくなった。

漏れ出した『神格』の力の排除が終わってきているからかもしれないとも考えたが、このようにいきなり激減するとは考えにくい。

やることが減ったのは私としては嬉しい限りだが、こうもいきなりだと何か引っ掛かるものがある。

ただ、『憑格』を倒せるのは私しかいないのだから、そう考えるのが正しい考えだ。

「だけどなぁー……」

だけど、何度考えてもその考えには至らなかった。

他に何か『憑格』を倒す方法があるのかと問われれば、今はないとしか答えようがない。

そう。今は、だ。今でなかったならば『憑格』を倒す手段は他にもある。

とにかく、色々考えた結果、『憑格』が激減しているのは何らかの理由があってのことだと私は判断する。

その何かというのは分からないが、そう判断するのが私にとってはしっくりくる。

今までだって予想の斜め上を行くことなど、大して珍しいことではなかった。

今回も、きっとその類のものに違いない。

「何であろうと……敵なら、叩き潰すまでだ」

私は上半身だけを起こし、拳を握りしめながら呟く。

そうだ。何であろうとも私の仲間に害を成すようであれば、誰であろうと叩き潰す。

だが私はふと思った。

これは仲間を護るという理由を盾に、殺戮を楽しんでいるだけなのではないかと。

（……例えそうでも、俺はやらなきゃならねェんだ）

……一人だとどうもこのような考えに至ってしまうな。

悪い癖だ。いつも自分を悪と見立ててしまい、いらぬ覚悟をしてしまう。

今のような覚悟など、私にとっては必要のない覚悟だったというのに……。

一人でこのまま家に居続ければ、きっとこのような考えの無限ループとなってしまうだろう。

もうアスナもマナも寮暮らしで、この家に帰ってくることはないのだ。何日か家を空けていても問題はあるまい。

そう考えた私は立ち上がり、旧世界と魔法世界を繋ぐ扉を創造する。

（最近はずっと会っていなかったからな。久しぶりに会いに行くとするか）

私が思い浮かべるのは、私にとって最もいとおしい人物達の顔だ。

正直、今の私の頬は緩んでいるだろうが、久しぶりなのだから仕方がないだろう。

内心で楽しみにしながら、私は扉を潜った。

◇

遂にやって来た私の第二の……いや、第三？　まあ、その辺りはどうでもよいが、故郷――ヘラス帝国――に私は帰ってきていた。

何年も昔からここを知っているが相変わらずの賑わいで、変わったことを感じさせない。

ただ、私がヘラス帝国だけではないが、魔法世界を歩くと頭を皆が頭を下げてくるのがあまりいい気持ちではない。

確かに私はヘラス帝国第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアの夫だ。

つまりは私も王族ということとなる。

普段は自覚はないが、魔法世界に来るとその事を改めて思い出させられる。

全く……王族だから仕方がないとはいえ、やたらと頭を下げられるのはかなわないな。

「そういや、お前さんはヘラスの嬢ちゃんと結婚してたんだったな」

「そうだ。つーか、今さら思い出したってのか？」

「当たり前ぇだろ。普段はそんな素振りはねえんだからよ」

それもそうだな、と私は隣にいる人物――ガトウ――に答える。

せっかく魔法世界に来たのだから、あまり会うことが出来ないガトウと会っておこうと思い、誘ったのだ。

ジャック？　あのような筋肉達磨に会いたいとは思えんな。

だいたい、あ奴がどこにいるかなど検討もつかんからな。

大方、どこかでひっそりと隠居生活でも送っていることだろう。

「ガトウ、アンタは老けたな」

「お前さんみたいな長命種と一緒にするなよ。俺はれっきとした人

間だ。まだ若い連中には負けねえけどな」
「負けてもらっちゃ困るっての。『紅き翼（アラルブラ）』の一員のアンタがそこらの雑魚に負けたら話にならねェ」

確かにガトウはこちらに残って『憑格』の散策を始めてもらったときよりも、結構吹けてみえる。
あのときから力の向上は望めぬし、あとは低下していくだけ。現に今のガトウの力はあのときよりも弱々しく感じる。
……とはいえ、それは私達のようなチートから見た話だ。
一般人から見た今のガトウでも十分に強い。

「……ようやく着いたか。長かったな」
「お前さんが歩くなんて言うからだろ」

ガトウとたわいもない話をしていると、ようやく帝国の王宮の前に到着した。
せっかく帰ってきたのだから色々と見て回りたかったし、こんなときまで走る必要はあるまい。
そのせいで時間がかかってしまったというのは否めないが……。

「ヘラスの嬢ちゃんには帰ってくること、伝えてんのか？」
「あン？　あー、一応伝えといたけど、いつ帰るかまでは言ってねェな。だいたいの時間しか言ってねェ」
「まあ、クロカミは王族だから問題はねえかもしれねえけど、あっちには準備ってもんがあるんじゃねえのか？」
「はっ、準備？　俺と会うのになんの準備がいるってンだよ。さっさと入ろうぜ？」

ガトウの言葉に私は鼻で笑いながら、王宮の門を潜る。ちなみに顔パスだ。

やれやれ、ガトウも何を心配しているのかは分からぬが、私と会うのになんの準備がいるというのだ。
あるというならば逆に教えてもらいたいものだ。
……などと考えながら長い廊下を歩いているのだが、何やらガトウがため息を漏らしている。
いったいなんだと言うのだ……？

「昔から思ってたんだがよ、クロカミ。お前さんはかなり鈍感だな」
「俺が鈍感？　有り得ねェよ。俺が鈍感なんだったら今ここにいやしねェよ」
「戦闘方面の鈍感じゃねえ。はぁ……何を言っても無駄かもしれねえな」

私はそこまでため息をつかれるようなことをやったのだろうか。
考えても検討が全くつかないのだが、何かしたか？
思いのままを言葉にしただけだったのだが、そこにガトウにため息をさせる要因があったのか？
まあ、考えても分からぬことを長々と考えるほど私は暇ではない。
今こうして考えている間に、テオの部屋の前に着いてしまったのだからな。

（なんか久しぶりだから、いざとなると妙に緊張するな……）

部屋の前まで来たのは良かったのだが、ここに来てまさかの緊張するという事態に陥ってしまった。
おかしいな……。前までであれば緊張するなどということはなかったのだがな……。
んんっ、と声の調子を確かめる。外套に変なところがないかを確かめる。髪型に変なところがないかを確かめる。

「何やってるんだ……。まさか緊張したってのか？」
「……う、うるせェな。俺だって人並みの恥じらいはあンだよ」
「……じゃあなんで分からねえんだよ」

いや、準備をするというのと緊張するのとは全然違うような気がするのだが……。
とにかく、身だしなみも整えたことだし、さっさと中に入ってしまおう。
妙にうるさく感じられる鼓動の高まりを感じながら、私は右手で拳を握る。
ドアをコンコン、と二回ノックして、私は声をかける。

「テオ、俺だ、シキだ。入るぞ？」
『し、シキ！？　待て、少し待つのじ――――』

中でテオが何かを言っていたようだったが、私はそれを最後まで聞く前にドアを開けてしまった。
しかし、それがいけなかった。
ドアを開けた先には確かにテオがいた。ただし、下着しか身に付けていない状態で。
そんなテオと目があってしまった私の顔の体温が急上昇していくのが分かる。
同じようにテオも顔を真っ赤にさせて、硬直してしまっている。
反省はしている、後悔はしていないとはまさにこの事だろう。
とりあえず私は光速でドアを閉めて、ドアに背を向ける。

「ど、どうしたんだ、クロカミ？」
「いや……なんでもねェ」
「そんな風にされると、何でもなくねえようにしか見えねえんだけどな……」

うるせェ、などいう声すらも出てこない。
久しぶりの再会がこのようになってしまうなどと、いったい誰が想像しただろうか。
少なくとも、私は創造はしていなかった。
……まさかとは思うがガトウが言っていた準備というのは、この事なのではないだろうか。
仮にそうだったのだとしたら、事前にいつ行くか連絡をしておくべきだった……。
別にテオの下着姿を見れて嫌だったということはないが、久しぶりの再会はまともなものにしたかった。

『は、入っても、良いぞ……？』
「お、おう」

扉越しに聞こえてきたテオの声に、自分の答える声が裏返りそうになったが、なんとかそれを堪える。
たった今あのようなことが起こったために、すぐに顔を合わせるというのは……その、あれだ……気まずい。
久しぶりの再会でもあるし、あのようなことも起こってしまったし、いったいどのような表情で会えばよいのだ……？
なんてことを考えながらドアを開くとそこには、恥ずかしそうな表情をしているテオがいた。
さっきは意識していなかったが、会っていない間にテオも成長したものだ。
出るとこは出て絞まるところは絞まってる……って私は親父か！？

「ひ、久しぶりじゃな、シキ」
「お、おう、久しぶり」
「……」

「……」

（か、会話が続かねェ――――――ッ！？）

たった一言言葉を交わしただけで、私達は会話が途切れてしまう。

やっぱり、さっきの下着姿を見るというのがいけなかったのだろう。

お互いに目を合わせることすらも出来ん。目が合ったとしてもすぐに逸らしてしまう。

本当ならばガトウに話の間をとってもらいたいのだが、何故かガトウはいなくなっている。

つまりはこのだだっ広い部屋の中には私とテオだけであり、沈黙という空間がただただ広がっている。

「えっと……」

言葉が出てこない。我ながらこの状況は情けないと思う。

というか、結婚までもしたというのに何なのだ、この恋人成り立てのような空気は。

気まずすぎるし、空気が重すぎるではないか。

……ふと、何かが近づいてくるような音が聞こえた。

最初は空耳ではないかと思ったが、テオも反応しているところを見ると、どうやら空耳ではないらしい。

その音は徐々に大きくなっていき、そして――――。

「ダイナミックエントリ――――ッッッ！！！！！！」

「ぐほぉ――――――――――ッッッ！？！？！？」

誰かが私の腹に飛び蹴りを喰らわせてきた。

ま、間違いない……私に向かってこのようなことをやる人物は、この王宮内では一人しかいない。

そもそも、私にこのようなことをする人物は、私の知り合いの中では一人しかいない。

「久しぶりだってのにずいぶんな挨拶だな、ミカ」

「今までほったらかしにしてた罰です」

私の義娘であり、第八層『ミカエル』の魂をその身に宿していた少女――ミカ――だ。

まさか飛び蹴りを喰らわせるまでに成長しているとは思わなかったが、やはり肉体的には成長はしていないらしい。

これぱかりは仕方がない。人間にすることも可能だが、あまり肉体を弄るような真似はしたくない。

「というか何ですか、この空気は。久しぶりの親子水入らず、夫婦水入らずなのですから、恥ずかしがってないで会話をするです」

「うるせェ。余計なお世話だ……と言いてェんだが、ミカのいう通りだ。……ただいま」

「おかえり、シキ」

ミカの助けを得て、私はようやく普段と同じように接することが出来た。

そして、テオの笑顔を見ることが出来た。

◇

あれからテオと夕食を供にし、今まで会っていなかったときの話をした。

まあ、話といっても魔法世界から旧世界に行って何をしたか程度しか話してはいないがな。

私も久しぶりにテオやミカに会ったと言うことで、気分が高揚し

ていたのだろう。
いつもよりも大分饒舌になっていたような気がする。
饒舌になっていたとしても別になんの問題はないのだから構わないが、私のキャラではなかったかもしれんな……。
で、現在。私は王宮の最上部にて夜風に当たっている。
この場所は私にとってお気に入りの場所だ。
王都ヘラスの大半を見渡すことが出来るし、何よりも酒を飲むのに打ってつけだ。
ちなみに、今飲んでいる酒は『昇天ウイスキー』という酒だ。オリジナルの酒で、度数は９５％だったりする。

「あれだけ飲んでまだ飲み足りねえのか？」
「あン？　ガトウか。まあな。竜族だからなんだかは知らねェけど、足りねェんだよな」
「種族的な関係はないだろうな。あれだろ、神格の関係じゃねえか？」

そのようなことを言われても分からぬのだがな。
仮にそうだったとしても、なんの関係があるのだろうか。
あれか？　ラファエルは酒好きだったとでも言うのか？
もしそうだったのであれば、どれだけ飲めば気が済むのだと言ってやりたい。

「ガトウ、訊きてェことがある」
「気が合うな。俺もお前さんに言わねえといけないことがあったんだ」
「俺はあとで構わねェから、先に言ってくれ」

私がそういうと、ガトウが何やら神妙な表情となる。
もしも私の考えとガトウが考えていることが同じならば、予想通

りの言葉が来るはずだ。
そして、私の予想通りの言葉がガトウの口から放たれた。
「最近、『憑格』がめっきり減った。しかもただ減ったわけじゃねえ。現れてから、何者かに消滅させられている」
「……」
ガトウの言葉に、私は月を見上げながら耳を傾ける。
分からなかったことではない。『憑格』の出現率自体は減っていない。
私が赴く前に何者かが『憑格』を消滅させているのだ。
私しか消滅させることが出来ないはずの『憑格』を……。
「消滅させているその何者かの目撃証言もある」
「そのイカレポンチはどんな姿をしてんだ？」
「ネットに目撃した奴らの証言がある。見てみろ」
ガトウはそういいながら、事前に持ってきていたノートパソコンを取り出し、私の前に出してきた。
最初から見せる気満々だったのだろう。既に書き込みがあったサイトが開かれている。
その中には『憑格』を消滅させている何者かの姿を映した映像が残っている。
「……ッ！！」
だが、その映像を再生した瞬間、私の全細胞が沸き上がるような感覚に襲われた。
目を見開き、手に持っていたウイスキーの入っているグラスを落としてしまう。

言葉に表すことが出来ないような感覚に陥り、体が震えた。
鎖に繋いでいたバケモノが暴れだすかのように、記憶の中の人物が蘇る。

「こいつが『憑格』を消滅させてる……ってクロカミ？　おい、クロカミ！！」
「なぁ、ガトウ……。俺、こいつのこと……知ってる……」

声が震える。武者震いでもなければ、恐怖で震えると言うわけでもない。
映像に残っている何者か。この人物は私にとって、大切な人物だ……。
赤色の髪を肩の辺りで切り揃えてあり、髪の一部に白のメッシュが入っている。
七分のズボンに下駄を穿いている。胸の辺りには包帯が巻いてあり、羽織っているはっぴは口元を隠すように閉じられている。
両手には三又に分かれた双剣が握られており、それを逆手に構えている。
左側の額から縦一閃に青いラインが刻まれており、眼は凍てつくような三白眼だ。
間違いない……。間違えられるわけ、ないじゃないか……。

「帰ってきたのか、夜光……」
「知ってるのか？　やっぱりクロカミの知り合いか。こいつは『三爪痕（トライエッジ）』、こう呼ばれている」
「『三爪痕（トライエッジ）』……？」
「あぁ。こいつは出会った者に必ず――――斬りかかる」
「ふざけるなッ！！」

私はそういってきたガトウの胸ぐらを掴みかかりながら、思わず

そう叫んでしまっていた。
当たり前だろ。夜光が見境なく誰かに斬りかかるなんてこと、あるわけがない。
やっと帰ってきた夜光が見境なく人に斬りかかる……そんなことは有り得ない。

「落ち着けよ。いったい何があったんだ」
「ッ……。うるせェ、アンタには関係ェねェだろ」
「お前さんがそういうならいいんだがよ」

私はガトウの胸ぐらを離し、再び月を見上げながらいう。
またやってしまった。心配してくれたガトウを突き放してしまった。
いつもこうだ。感情が高ぶり、激昂してしまうとこうなってしまう。
私は神格の力を取り込んでから、ありとあらゆる感情の変化が少なくなってしまった。
理由は分からないが、こうなってしまった。
強大な力を得てしまった代償と言うことなのかもしれん。

「……悪かったな」

私はガトウに一言告げ、最上部を後にする。
くそっ、胸糞悪い。夜光、帰ってきたと思ったらお前はいったい何をしてるんだ……。
俺には、今のお前が分からないよ……。

第五十九撃『現れたる三爪痕。テメェは、あいつなのか……？』（後書き）

雑談になりますが、最近私は『バカとテストと召喚獣』にハマってしまったのです。
他の作者様の二次を見てて自分も書きたくなってしまった、ということですね。
出来たらやりたいですが、今は不可能ですね。
せめてこれを完結するか、区切りのいいところで一回停止してからやるかのどちらかですが、後者の確率は低いです。
しかし、アイデアだけは浮かび上がってくる……。

・題名
《バカとテストと直死の魔眼（仮）》

直死の魔眼の力を持った人間が召喚獣を操作して、敵の召喚獣のテストの点数の死の点を突けば一発で０点に出来んじゃね？
という発想から生まれました。
主人公の名前は《黒神　式》……あれ？
この小説の主人公と同じじゃね？
違います、《織》と《式》の違いです。
け、決して考えるのが面倒だったわけじゃないからね（汗）

とりあえずもしかしたら短編で一回まとめるか、さらに連載を抱えるかもしれません。
そのときは感想お願いしますッ！！

では感想待ってますッ！！

第六十撃『夜光と三爪痕。どっちでもいい、とりあえず助けるから』（前書き）

※今回の話はかなりグダってる上に独自設定が入ります。
それを踏まえた上で……どうぞッ！！

第六十撃『夜光と三爪痕。どっちでもいい、とりあえず助けるから』

次の日、私の目覚めはとてもではないが気持ちの良いものとは言えなかった。
昨晩のガトウにやってしまったことを考えると、非常に顔が会わせづらい。
別にガトウは何かをしたわけではないというのに、私は八つ当たりのようなことをしてしまった。
はぁ……。いったいどのような顔をしてガトウと会えばよいのだろうか……。
気だるさを残した体を起こしながら、私はそんなことを考える。

「夜光が……ンなことするわけねェだろうが……」

起き上がった私は、昨日のガトウの言葉を思い出してしまい、思わず呟いてしまう。
十何年も待ったんだ。あいつらが帰ってくるのを、ずっと待っていたんだ。
それなのに、帰ってきたと思ったらいきなり人に斬りかかるだと？ふざけるにも程がある。
確かに夜光なら『憑格』を消滅させれてもおかしくはない。
夜光は『神格』を殺すためだけに造り出されて、実際に『神格』を五層も破壊した。『憑格』程度、相手になるはずもない。
だが、今はそこが問題ではない。ただ一つだけ、疑問が残っている。

（帰ってきて、なんで俺に教えてくれなかったんだ……？）

これが一つだけ残った疑問だ。
あれだけの別れ方をして、ようやく帰ってくることが出来たというのに、どうして私に教えてくれなかったのか……。
いくら考えてもそれればかりは分からない。
それにガトウが嘘をつくはずがないために、昨日のガトウの言葉には偽りがないはず。
そうなると夜光はどうして人を襲うんだ……。
分からない。とにかく、今は考えるのはやめにしよう。
あまり考えていても良いことなどないし、嫌な気持ちになるだけだ。

（あとで、ガトウに詳しい詳細を教えてもらうか……。場合によっては、俺が夜光を止めないといけねぇ……）

私と夜光はいわば同類だ。同じ旧文明の力を持ち、それを行使する。
だから、そんな夜光が旧文明の力を使って暴れてるというならば、私が『ラファエル』として止めねばならん。
そんなことを考えながら、部屋を出る。
相も変わらずここの侍女（メイド）さん達は私の世話を焼こうとする。
それを回避するためには、侍女（メイド）さんの思考を読むしかない。
はぁ……何故このように朝から疲れねばならんのだ？
どれもこれも夜光のせいだ。会ったら文句を言ってやる。

「シキ、おはようなのじゃ」
「あぁ、おはよう。昨日はちゃんと寝れたか？」
「うむ、いつも通りじゃ。ところで、シキ。お主は昨日は何を叫んでいたのじゃ？」
「……聞こえてたのか？」
「あのように大声で叫んでいたら嫌でも聞こえてしまうじゃろ……」

王宮の最上部とテオの部屋は割りと近い場所にある。
さすがにあそこまで大声を出してしまったならば、聞こえていたとしても不思議ではない。
テオの呆れたような表情を見て苦笑しながら、そんなことを考える。
私達はたわいもない会話をしながら、広間へと向かう。
もちろん朝食を食べるためだ。
そして広間へと到着すると、既にガトウとミカ、あとはシアさんが席についていた。

「……ガトウ。昨日は、その……悪かったな」
「気にしちゃいねえよ」
「それでだ。三爪痕（トライエッジ）のこと、教えてくれないか？」
「仲間じゃなかったのか？」
「だからこそ、だ。もしもあいつが噂通りのことをやってるんだったら、仲間である俺が止めないといけねェ」
「ふっ……。それでこそお前さんだ。これが、三爪痕（トライエッジ）の情報が載ってる場所だ」

ガトウがそういいながら、昨日と同じノートパソコンを取り出し、掲示板のようなところを開いていた。
そこには多数の書き込みがされており、情報には困らないようだった。
そして、私は三爪痕（トライエッジ）の情報を読む。
三爪痕（トライエッジ）に斬られた人は怪我の大小に関わらず、意識不明になる。
さらにいえば斬られた人の怪我がどれだけ酷くとも死には至らず、意識不明になるだけらしい。
三爪痕（トライエッジ）の現れる場所には必ず奇妙なバケモノがいるようだ。
これは間違いなく『憑格』を消滅させるために夜光が出てくるよ

うだが、やはり分かったことはほとんどない。

「どうだ？」

「……有力な情報はなし、だ。よく考えてみりゃ俺が分からねェことを、ネットで調べて分かるはずがねェ」

私でさえ分からない『神格』関係の話を、そこらの一般人が分かるはずがない。だが、確かに言えることはある。

まず夜光は『憑格』が現れた場所以外では目撃証言がない。

それ以外では何をしているかなどは一切不明だが、良くも悪くも『憑格』がいなければ夜光は現れないということだ。

次に『憑格』駆逐のために現れた夜光は、近くに居合わせた人を斬り、意識不明にするということだ。

これの理由も一切不明だが、止めないわけにはいかない。

つまりは、夜光を止めるには『憑格』が出た場所で夜光と会うしか方法はない、ということだ。

「三爪痕（トライエッジ）の実力は間違いなくクロカミと同等だ。……勝てるのか？」

「勝てる勝てないじゃねェよ。俺は、助けたいんだ」

そうだ。私は別に夜光を倒したいわけでも、殺したいわけでもはない。

ただ、私は夜光をただ助けたいだけだ。

もしもあいつが何かの事件に巻き込まれてるというならば、今度こそ助けてみせる。

などと考えていると、不意に私の体に異変が起きた。

まるで心臓を鷲掴みにされるような、血が逆流するかのような感覚に襲われる。

この感覚……忘れられるはずがない。

「クロカミ、分かってるな？」
「……分かってるさ。『憑格』だけじゃねェ。夜光も、いや――――――『執行者』も現れた」

ようやく分かった。夜光が人を襲う理由を……。
あいつは、自我がないんだ。自分の意思で自分の行動を決定するための自我がない。
故に『執行者』は自らの目的を果たすために、それに害を成しそうな可能性を持つ者を斬る。

「場所はどこだ」
「場所は……ウェールズだと！？」
「ウェールズだと？　つーことは、ナギの息子が危ねェ……」

私は『執行者』の力を感じとることが出来ても、場所までは特定できない。
逆にいえば場所さえ分かればどうということはない。
私はここととウェールズとを繋ぐ扉を創り、ウェールズへと向かった。

◇

旧世界のウェールズの山間にある小さな村。
どこにでもありそうな小さな村ではあるが、それは違う。
この村は『千の呪文の男（サウザンドマスター）』を慕い集まった癖のあるものが多い。
さらにいえばこの村の住人は魔法使いであり、それらが協力しあえば一軍隊にも負けない力を誇る。
だが、そんな村が今日、何者かにより襲撃された。
黒色の異形。形は様々ではあるが、その根本は同じ――――悪魔に襲来されたのだ。

何の前触れもなく、突然に襲来され、成す術もなく村人は次々に石化されていく。
村には火が放たれ、既に炎というなの海が広大に広がっている。
そして、そんな村に一人の少年が近づいていた。
赤色の髪を持ち、まだ幼さを残す顔立ちをしている少年だった。
彼は今の村の現状を信じることが出来なかった。それ故に彼は走り始めた。
だがそんな彼に現実を突き付けてくる。
石化している村の住人。目も当てられないような怪我をしている村の住人。焼け落ちた見慣れた家。
何もかもが信じられなかった。

「僕がピンチになったらって思ったから……？　ピンチになったらお父さんが来てくれるって……。僕があんなことを思ったから……！！」

『千の呪文の男（サウザンドマスター）』と『災厄の女王』の一人息子――ネギ・スプリングフィールド――は、これらの原因が自分にあると思い、泣き出してしまう。
実際は彼に非はない。だが、幼すぎたためにそういう考えに至ってしまった。
そんなことはあるはずがないのだ。たかだか四歳程度の子供がそのようなことを思ったところで、こんなことが起こるはずがない。
もしその程度でこのようなことが起こるならば、とうの昔に世界など消滅している。
そして、そんな彼の元に複数の影が近づいてきた。
しかも一つや二つではない。少なくとも三十以上の影が、ネギに迫る。
彼は動けない。今まで感じたことがない底知れない恐怖に体がすくみ、言うことを利かない。

一体の悪魔が、その大木のように巨大な腕を振り上げる。

「僕があんなこと思ったから……。お父さん……――――お父さん……！！」

少年はただ願い続けた。

もしも本当に英雄（ヒーロー）などと呼ばれた父親がいるならば、もしも本当にピンチになったら助けてくれるなら、村のみんなを助けてほしいと。

そう願うネギに、悪魔の腕が振り抜かれた。

空気を切りながら迫り来る悪魔の腕。

大木のように巨大な腕に殴り飛ばされてしまえば、ネギは間違いなく肉塊（ミンチ）となってしまうだろう。

もう涙で何も見えない。

そして、ネギに悪魔の腕がぶつかる瞬間、一陣の風が吹いた。

その風は迫ってきていた悪魔の腕を、その細腕で受け止めた。

男だった。赤色の髪に、長い杖。魔法使いを証明するかのようなローブ。

「――――雷の斧」

ただ一言、その男は呟いた。

それと同時に悪魔を雷の斧が脳天から一刀両断に切り裂く。

通常、魔法というのは詠唱をした方が強大な力を発揮する。

だが、この男の魔法は詠唱をしなくとも莫大な力を誇っていた。

そして、ここからは圧倒的だった。

迫り来る悪魔の群。圧倒的な数の暴力の前にその男はまるで虫を払うかのように、ゴミを払うかのように悪魔を消滅させていく。

彼が引いた右腕から雷が弾けた。

「――――雷の暴風」

その魔法はその名の通り暴風だった。

人間が放ったとは思えないような一撃に、悪魔の群が一瞬にして消え去る。

男の雷の暴風は焼けた村を吹き飛ばし、山をも吹き飛ばすほどの威力を秘めていた。

後に残ったのは悪魔の死体の山と、無惨にも破壊された村だけだった。

男はまだ生き残っていた一体の悪魔の首を掴み、宙吊りにしながら締め上げる。

「ソウカ……。貴様ガ……アノ……。フ……コノ力ノ差……ドチラガ化ケ物カワカランナ……」

ニィ、と男を侮辱するかのように悪魔は口元を歪める。

それが気に障ったのか、それとも他の理由からかは分からないが、男は悪魔の首の骨をなんの躊躇もなくへし折る。

ゴキィッ！！　という音はその場から離れていたネギの耳によく響いた。

ネギは逃げた。悪魔よりも恐ろしいモノを見たために、恐怖に耐えきれずに男と反対方向に走り出す。

まだ、悪魔が回りにいることを忘れて。

――――そして、『憑格』がいるということを知らずに。

「[redacted]――――――ッッッ！！！！！！」

ネギの前に現れた『憑格』の姿は、奇しくも悪魔と非常に酷似していた。

次から次へと現れる恐怖の対象に、ネギの思考が崩壊していく。
自分がなんのために逃げていたのか、どうして逃げていたのか、いったい何から逃げていたのかすらもがもう分からない。
さらにネギの後ろには一体の爵位級の悪魔。八方塞がりの状況の中、ネギに近づく二つの影。

「ネギ！！」
「ぼーず！！」
「お姉……ちゃん、スタンおじさん……」

ネギの声が震える。
ようやく現れた親しい二人の姿を見たとしても、この恐怖は払拭することが出来ない。
あまりにも強大な恐怖に、多少の救いではとてもではないが安心は出来ない。
それは爵位級の悪魔やスタンや、お姉ちゃん――ネカネ――にも言えることだ。
その恐怖に打ち勝つことが出来るか出来ないかで、行動の早さが別れる。

「六芒の星と五芒の星よ。悪しき霊に封印を――――封魔の瓶！！」

いち早く動いたスタンが、二つの驚異であるうちの一つの爵位級の悪魔を封印する。
だが、爵位級の悪魔を封印したとしても、まだ圧倒的な驚異がなくなったというわけではない。
『憑格』の実力は爵位級の悪魔がいくら束になろうとも、掠り傷一つつけることは出来ないだろう。
そんな相手に爵位級の悪魔一体に手こずるような二人が、勝てるどころか逃げ切れるはずもない。

（どうする……）

スタンは考える。

自分がこの場に残り、『憑格』の足止めをするという選択肢もあるが、時間を稼ごうとしても稼げるのはせいぜい数秒ほど。

とてもではないが、ネギをつれたネカネが逃げ切れるはずもない。

つまり、どうあっても『憑格』から逃げることなど、不可能ということだ。

――――『憑格』を消滅させることが出来る者が現れない限り、だ。

不意に『憑格』の体が真っ二つになる。

真っ二つになった『憑格』はうめき声すら上げることなく、黒い霧状となって消滅する。

そして、霧状となって消滅した『憑格』の後ろから一人の人物が現れた。

赤い髪に三白眼。忍冬（すいかづら）の首飾りに三又の双剣。これらの特徴を兼ね備えた人物を、スタンは知っていた。

「貴様は三爪痕（トライエッジ）ッ！？　――――ぐあっ！？」

「……」

スタンが叫んだ次の瞬間、双剣士――三爪痕（トライエッジ）――はスタンを自らを証明する三又の双剣で切り裂いていた。

一瞬の出来事であったために、ネギとネカネは何が起こったか分からなかった。

右肩から左下にかけて斬られ、倒れていくスタンをただただ見つめるしかなかった。

そして、スタンが倒れたと同時にネカネはネギを連れて走り出していた。

あれはヤバイ。悪魔やさっきの『憑格』などが比較にならないほどにヤバイ。あれは異質だ。一緒にいてはいけない存在だ。

ネカネの本能がそう告げる。

「――ッ!?　そんな……!?」

ネカネが走って逃げた先。そこには既に三爪痕（トライエッジ）が立っていた。

さっきと同じ体勢のまま、三又の双剣を逆手に構えて。

底知れない恐怖の前に、ネカネまでもが動けなくなる。

三爪痕（トライエッジ）の三白眼がネカネとネギを捉え、ゆっくりと、恐怖を煽るように一歩ずつゆっくりと近づいてくる。

だが、忘れてはならないことがある。

今この場にはネギとネカネ、三爪痕（トライエッジ）以外にももう一人、魔法使いが存在する。

「――――千の雷」

短く発せられた魔法の詠唱。

それと同時に三爪痕（トライエッジ）の真上より雷系魔法で最強を誇る魔法――千の雷――が降り注いだ。

鼓膜を破りかねないほどの爆音に、千の雷が飛来したときの余波で、ネギとネカネはその場から吹き飛ばされる。

それを、千の雷を放った張本人が壁などにぶつかる前に受け止めた。

ネカネは今の余波からネギを守るために庇ったのか、気絶してしまっている。

「ネカネお姉ちゃん……？」

「――――大丈夫。気絶してるだけだ」

姉を心配するネギに、男は優しく一言だけ告げる。
ネギとネカネを地に下ろすと立ち上がり、この場から逃げろとその大きな背中が語っていた。
男の視線は先ほど千の雷を落とした場所に向いている。
無詠唱の雷の暴風で山を吹き飛ばすほどの威力を秘めているのだから、千の雷の威力などは計り知れないだろう。
現に煙が晴れてきている部分から見える地面は、ドロドロに溶解されている。
それにも関わらず、三爪痕（トライエッジ）は無傷だった。
千の雷を放つ前と同じように三又の双剣を構え、煩わしげに男を見つめている。
そして、男の体から黄色に光る紋様が浮かび上がった。

「――――来い、俺の……『ラミエル』！！」
「ハァァァァァァァッ！！」

男がそう叫ぶと同時に、三爪痕（トライエッジ）が消えた。
消えた、というよりも動きが速すぎて捉えきれず、消えたかのように見えたという表現の方が適切だろう。
そして、次に見たときは三爪痕（トライエッジ）の三又の双剣を受け止める男の姿があった。
そこからは何があったかは、ネギには分からない。
消えることを繰り返す二人。もはや人間同士がやっているとは思えない動きを、捉えきれてはいない。
時折姿を見せはするものの、それでもすぐに消え去る。

「――――お前の存在を『掌握』する」
「ハァァァァッ！！」

男の言葉が発せられたと同時に三爪痕（トライエッジ）の回りの空間が異常な動き

を見せるが、それは三又の双剣を振るうとガラスが割れるかのような音を立てて消え去る。
それを見た男は、わずかに動揺した。あれを破ることが出来る奴がいるのか、と。
その男の動揺を、三爪痕（トライエッジ）を見逃すはずがない。
一瞬にして男との距離を埋めた三爪痕（トライエッジ）は、三又の双剣を男に突き刺した。
男の口から値が溢れ出る。うめき声を上げることなく、男は杖を持っていない腕を三爪痕（トライエッジ）の肩に乗せる。

「終わりだ……。お前の全てを――――『掌握』するッ！！」

男がそう叫んだ瞬間、男の顔を包んでいたローブが吹き飛んだ。
その男は『千の呪文の男（サウザンドマスター）』と呼ばれた英雄――ナギ・スプリングフィールド――だった。
三爪痕（トライエッジ）の双剣は、神格に対しては莫大な威力を誇る。
今の一撃だけで、ナギは相当なダメージを受けている。
今の一撃も決死の一撃だったのだろうが、三爪痕（トライエッジ）には――――当たらなかった。

「チッ……マジかよ……」
「……」

膝をつき、三爪痕（トライエッジ）を睨み付けるナギに向かって、三爪痕（トライエッジ）は近づいていく。
三爪痕（トライエッジ）――『執行者』――の目的は、神格の力を持つ者を殺すこと。
なんの因果か、ナギは神格の力を手に入れてしまっていた。
つまり、今のナギは三爪痕（トライエッジ）の破壊標的と認識されている。
三又の双剣が振り上げられる。神格の力を手に入れてしまったナ

ギの場合、斬撃を受けすぎた場合、意識不明ではなく死に至ってしまう。
　このままではマズイと感じ取ったナギをよそに、三爪痕（トライエッジ）はその場から後ろに大きく飛躍した。
　理由は簡単だ。大量の蒼色の魔力弾が降り注いできたからだ。

「大丈夫か、ナギ」
「シキ……か。大丈夫だ」
「……時間がなさそうだな。お前はそいつらを連れて逃げろ」

　ナギを助けたのは、狙撃手であるシキだった。
　シキは三爪痕（トライエッジ）を睨み付けながら、ナギにいう。
　ナギはシキの言葉に一回だけ頷くと、ネギとネカネを連れてその場から離れていった。
　そして、三人が離れていったのを確認すると、シキはライフルを納める。

「久しぶりだな、夜光」
「……」
「今まで何やってたんだ？」
「……」
「フィオナはどうしたんだ？」
「……」

　シキの問いに三爪痕（トライエッジ）は一言も言葉を発することがない。
　それればかりか、今までの戦いの中で始めて武器を構える。
　それを見たシキだったが、武器を構えようとはしない。
　戦う気がないのだ。最初から、三爪痕（トライエッジ）と交戦する気など、ありはしなかった。

「夜光、お前、どうしちまったんだよ……」
「……」

やはり、シキの問いに答えない。
すると、三爪痕（トライエッジ）の体がピクリ、と何かに反応した。
そして、三爪痕（トライエッジ）はシキに何かをするわけでもなく、ただこの場から消えた。

◇

同時刻。
シキと三爪痕（トライエッジ）が対峙している場所から退避したナギとネギとネカネ。
ここに来るまでに三爪痕（トライエッジ）に斬られた人達を安全なところに避難させたあとに、村の外れに来ていた。

「すまない……。来るのが遅すぎた……」

ナギは、こちらを見上げているネギにそう告げた。
一歩ずつ近づいていき、ネギの元まで来るとネギの目線の高さまで体勢を低くする。
未だにナギに恐怖を抱いているネギの頭に、優しく手を添える。

「この杖をやろう。俺の……形見だ」

そして、苦し気に顔を歪めながら、ネギに自らの愛用である杖を託す。
杖の重さにネギが耐えきれずによろけ、それを見たナギが微笑む。
三爪痕（トライエッジ）に斬られた傷は決して深いわけではない。
だが、神格に対する効果は絶大だ。それだけナギの体に負担をか

ける。

「お、お父、さん……？」

「お前も、今の奴には気をつけろ……。お前は俺の息子なんだ。いざとなったら、シキを頼れ」

ナギがそう告げた途端、まるで空に飲み込まれるかのようにナギの体が浮かび上がる。

ネギはナギに手を伸ばすが、その手は届くことはない。

次の瞬間。ナギの姿は空に消えた。ネギは消えたナギを見て、その場で膝をつく。

そして、膝をついたネギは先ほどまでのことを考える。

三爪痕（トライエッジ）に斬られて意識不明に陥ったスタン。

自分を助けるために斬られてしまったナギ。

この時、ネギの中で何かが疼くのを感じた。復讐というなの炎が、ネギの中に生まれた。

「三爪痕（トライエッジ）……。僕はお前を、許さない……！！」

◇

あれから既に三日が経過した。

私が到着したときには既に『憑格』は夜光によって消滅させられ、わずかに生き残っていた村人も意識不明に陥っていた。

私の能力で意識不明を何とか出来ないかとも考えたが、どうやら根本をどうにかせねば意識は戻らないようだ。

そしてあれから三日後。あの事件の生き残りの少年――ネギ・スプリングフィールド――と対峙していた。

「強くなりてェ……って言われてもな」

「僕は強くなりたいんです。スタンおじいちゃんを助けるために……」
「……」

口では助けたいって言ってはいるが、実際はそんなことではないのだろう。
目には復讐の炎が宿っている。昔の私と同じだ。復讐に目が眩んで、ただひたすらに強くなりたいと願っている。
復讐の対象は三爪痕（トライエッジ）――夜光――なんだろう。
だが、この子を間違った道に行かせるわけにはいかない。
私の過ちを、二度と繰り返させるわけにはいかない。

「分かった。ただし、俺は魔法は教えられねェ。それ以外なら教えてやる」
「はい、お願いします！！」

私はネギの返事を聞きながら、天を仰ぐ。
仕方ない……。私が夜光とフィオナに道を正してもらったように、私はネギの道を正すしかない、ということか。
ため息を吐きながら、私は拳を握った。

第六十撃『夜光と三爪痕。どっちでもいい、とりあえず助けるから』（後書き）

どうしよう……。

バカテスブーム到来したために何となく執筆してたら……プロローグ合わせて四話も仕上がってしまった……。

しかも五千字平均で……。

これは連載させた方が良いのか、させない方が良いのか悩みますね……。

では、感想待ってますッ！！

第六十一撃『帰ってきた狙撃手。え……？　嘘だろ……？』（前書き）

ようやく合宿から帰り、執筆が開始できました……。
さて、あとがきには重要なことがありますので最後まで見てください。
では、どうぞッ！！

第六十一撃『帰ってきた狙撃手。え……？　嘘だろ……？』

（久しぶりだな、ここに帰ってくるのは）

あれから早くも五年が経過し、私はようやくウェールズから自宅に帰ってきていた。

しかし……ネギの修業の熱心さには最早呆れるしかなかったな。

魔法学校に通いながら私の修業を受けるというのは、まだ二桁にも満たない子供には辛いだけだろう。

それなのにも関わらず、ネギは修業をやり続けた。

まあ、基礎的な能力から高めていったために、今のネギでもまだマナには勝てないだろうな。せいぜいアスナと同等というくらいだ。

確かに飲み込みは早かったが、私は魔法は教えられないからな。

武術の方しか成長はしていないだろう。

現に使える魔法の量は少ないし、無詠唱も出来ない。武術とも連動できないしな。

（五年っつったら、マナ達はもう中学生か。今の時間帯は学校に行ってるくらいか……）

今の時間帯はまだ昼にもならないくらいの時間帯だ。

サボりでもしていなければ、家にはイヴやエヴァさんくらいしかおるまい。

そんなことを考えながら家の扉を開けたのだが、そこで思わず固まってしまった。

いや、もしもこんな状況に陥ったならば、誰しもが固まってしまうはずだ。

何故かって？　理由など簡単さ。

「なんじゃこりゃ――――――――――ッ！？」

――――家の中が人形まみれでファンシーなことになっていたからさ。

待て待て……私がこの家を出た日。つまりは五年前は至って普通の部屋だったと私は記憶している。

だが今の家はなんだ。前には一つたりともなかった人形が、今は溢れかえっている。

何故だ、何故なんだ……？

マナとアスナは寮暮らしで家には帰ってこんし、家には私はおらん。

すると必然的に家にはイヴとエヴァさんしかいないことになるのだが……ん？　エヴァさん？

「そういうことか……」

考えてみれば実に簡単なことだったではないか……。

私の家にはエヴァさんがいる、ということはエヴァさんの色に私の家が染め上げられることになる。

くっ……私としたことが後先考えずに家を飛び出してしまったようだな……。

全く……私の家に来てまで自分の趣味に走らないでもらいたいものだ。

というか、私よりも歳上のくせにファンシーな人形を集めるのはどうかと思う。

まあ、気にしていたらキリがないから気にしないでおこう。

（とりあえず久しぶりに帰ってきたし、旅団にでも行くか）

旅団の方はおそらくイヴが何とかしてくれているとは思うが、今までほったらかしにしていただけあって、心配なところがある。
今までほったらかしにしていたから何も言えないがな……。
ふむ、よくよく考えてみれば旅団に行ったところで何を言われるか分かったものではないな。
今までいなかっただけに何を言われても文句は言えん。
後回しにしても面倒だし、さっさと怒られるに限るな。
そんなことを考えながら、私は麻帆良にあるはずの旅団に向かった。

◇

麻帆良学園にある喫茶――銀竜の旅団――の場所に向かうと、やはり時間的な問題で誰もいなかった。
周りを見渡してみても、五年前となんら変わりない風景だった。
もちろん旅団の見かけも変わっていなかった。ただ、少し錆びれているように見える。
まあ、時間が経ったのだから仕方がないだろう。
私はそんなことを思いながら、こっそりと旅団の中を覗く。

「ふむ……。いつになったら帰ってくるのだ、あの雑種は」
「知るか。そのうち帰ってくるだろ」
「そのうちでは駄目なのだ。何故我が雑種の手伝いをせねばならんのだ」
「ぐちぐち言うな、鬱陶しい。そのうち帰ってくるだろ」
「だから――――」
「うるさいと言っているだろ！！」

な、なんてシュールな光景なんだ……。
メイド服を着用しているイヴと、ゴスロリの服を着てポテチをか

じるエヴァさんの言い合いだ……。
しかもイヴに至ってはメイド服のスカートにスリットを入れて、太ももがチラリと見えるようにしているではないか。
イヴは只でさえ美人なのだから、そのようなことをされれば鼻血の海ではないか……。
かくいう私も今は鼻を押さえてしまっている。
何故かって？　イヴが私に気づかないまま足を組んでいるからだ。
太ももがチラ見せになっているために、鼻血が出そうになっているのだ。
それを堪えられるのが私だがな。

（それにしても、エヴァさんもイヴも変わんねェな）

イヴは現代の常識をある程度身に付けたみたいではあるが、それを守りはしないだろう。
エヴァさんに至っては常識などお構い無しといった感じだな。
まあ、エヴァさんが常識など気にしていたら笑ってしまうがな。
とりあえず出ていきたいのだが、何やら出ていきにくい。
私が帰ってくるか帰ってこないかで口論しているのだから、妙に出ていきにくい。

「――――ところで、貴様はいつまでそこに隠れているつもりだ？」
「――――そうだな。盗み聞きとは趣味が悪い」
「ゑ？」

なんてことを考えていると、不意に後ろから声が聞こえた。
しかも旅団の中を見てみれば、先程までそこに居たはずのエヴァさんとイヴの姿がない。
……と、いうことは私の後ろにいるのはまさか……。
ギギギギ、と壊れたブリキ人形のように首だけを後ろに向けると、

そこにはエヴァさんとイヴが立っていた。
しかもエヴァさんに至っては『断罪の剣』を構えている。

（や、ヤバイ……。色々な意味で……）

とりあえずこのようなところでドンパチしてしまえば、麻帆良の魔法教師達に気付かれてしまうので、認知阻害を『創造再生』で構築する。

認知阻害を展開したとはいえ、結局は私がやられることは変わらないのだがなぁ……。

エヴァさんもイヴも殺る気満々だからな。

戦闘を避けることは不可能だろう。

瞬時にそれを悟った私は、前に本で読んだ武術の構えをとる。

この二人相手に試してみるというのも、悪くないからな。

「――――虚刀流一の構え、鈴蘭」

「はん、得意な遠距離戦でなく武術でやるつもりか？　私も随分嘗められたものだなァッ！！」

「嘗めてなんかいませんよ。貴女だから、試せるんですよッ！！」

エヴァさんは私の目の前にまで瞬時に迫ると、断罪の剣を私の胴体目掛けて躊躇なく突き出してくる。

……って、私がこういった類のダメージが効かないからとはいえ、少しは躊躇ってもらいたいのだが……。

内心でエヴァさんの容赦のなさに苦笑しながら、体を横に傾ける。

この構えはあることだけを目的とした構えだ。それは――――。

「虚刀流、菊ッ！！」

――――刀を折ることを目的とした構えだ。

私は断罪の剣を半身で背中側を通るようにし、肘の関節に刃を挟めて、梃子の原理で刀を折る。
もちろん断罪の剣は魔力で構築されているが、それらを無視して私は断罪の剣を折っている。
虚刀流は純粋な武術だ。そこまでの力はない。氣などを使って強化すればまた別だがな。
とりあえず断罪の剣を折られて体勢を崩しているエヴァさんの顎に向かって、掌を振り上げる。
だが、エヴァさんは後ろに体を仰け反らせることにより、その一撃を回避する。
さすがと言うべきか、本来の力を取り戻したエヴァさん相手にはこの程度の動きはお見通しのようだ。

「嘗めるなよ、クロカミ。いかに貴様が力を手に入れようとも、そう簡単にはやらせん」
「分かってますよ。俺が師に選んだ人がこの程度でくたばってもらっちゃ、こっちが拍子抜けですよ」
「いうではないか。ならば、もう少し本気で行くぞ」

刹那、体勢を仰け反らせていたエヴァさんの姿がぶれて、その場から消える。
――――瞬動。これには『抜き』と『入り』の二つの動作があり、それを気づかせないほどになると、『縮地』の域になる。
今のエヴァさんの瞬動は限りなく縮地に近い瞬動だ。
だが、いかにそこまでの域になろうとも、点と点を移動する奴らと戦ってきたのだ。
それを察知するなど、造作もない。

「虚刀流、牡丹(ぼたん)ッ！！」
「なッ！？　ぐ、ぅ……ッ！！」

腰の捻りを加えた後方回し蹴り。これが『虚刀流・牡丹』だ。
一々向き直って受け止めてから反撃するのは面倒だったために、現れると予測した場所に後方回し蹴りを放ったに過ぎない。
案の定、私が想定した場所に現れたエヴァさんは牡丹を受けて、苦し気に顔を歪めていた。
ただ、咄嗟の判断で牡丹を受け止めたエヴァさんには感心するしかない。
普通なら直撃してもいい攻撃だったのだが、エヴァさんは受け止めるだけでなく、力を受け流している。
伊達に私よりも生きてはいない、と言ったところか。

「我を忘れるな、雑種ッ！！　以前の屈辱、ここで晴らすッ！！」
「いいぜ。ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっているだろうけどな」

そして言ってみたかったセリフを、こちらに向かってくるイヴに言い放つ。
この虚刀流が載っていた書籍には、戦うときの決めセリフはこれだと載っていたが……予想以上にカッコいいな。
とにかく、再び虚刀流の基本となる構えをとり、イヴと近接戦（インファイト）を開始する。
イヴの拳の一撃一撃は予想以上に強力で、受け止めるにも苦労する。
神格の力は『憑格』よりはあるが、今の私ほどと言うわけではない。
それなのに、イヴの拳を受け止めるのは不慣れな虚刀流じゃ精一杯だ。
（いつ以来だろうな、『精一杯』なんて思うのは）

そう考えている時点で精一杯などではないような気がするが、実際はかなり精一杯だ。

まあ、虚刀流を使っているときではの話だがな。

「我がなぜ『王』と呼ばれたか分かるか？」

「さあな。神格の力が強かったから、とかじゃねェの？」

「それもある。しかし、それ以前に我は全てにおいて――――」

そこまでいうとイヴの気配が唐突に消えた。

姿が消えるというのは、何度も体験したが故に驚くことはない。

だが、目の前にいて尚且つ接近戦（インファイト）を繰り返していたイヴの気配が消えたのだ。

これにはさすがの私も驚かざるを得ない。

「――――頂点に立っていたからだ」

「ご、あ……っ」

不意にやって来た腹部への衝撃。気配もまるで感じずに、懐に入るのを許してしまった。

ちっ、慢心していた。まさか今程度のイヴでもここまでの力を誇っていたというのか……。

マズイな。今の一撃で内蔵がかなり破裂させられたな。

やっぱり痛い。例えどれだけ強くなろうとも、痛いものは痛いのだ。……戦闘中は気にならないほどの痛みだが。

口から溢れ出てきた血を拭いながら、笑みを浮かべる。

――――久しぶりに、手加減で戦える。

「虚刀流七の奥義、落花狼藉（らっかろうぜき）……」

イヴの拳を振り払ったあと、体を捻って右足をイヴの頭の上まで振り上げる。
振り上げた足を斧に見立てて、イヴに向かって勢いよく振り下ろす。
『落花狼藉』をイヴは両手を交差させることにより防ぐが、威力は殺しきれずそのまま足元に伝わり、コンクリートの床を粉砕する。
イヴの足場が粉砕して、クレーターのようになる。
もちろん手加減をした状態の『落花狼藉』だ。大した威力はない。
それに……私は攻撃を防ぎきる前に攻撃をしないなどと、優しい性格はしていない。
足に力を入れて振り抜き、足が地に着いたところで力を籠める。

「虚刀流三の奥義、百花繚乱（ひゃっかりょうらん）……」
「ぐ、おぉぉ……っ！！」

『落花狼藉』で上から振り下ろした足を、今度は膝蹴りの要領で振り上げる。
最初の一撃で体勢を崩していたイヴは、直撃は避けたものの、体勢は完全に崩れ、宙に放り出された。
それを見逃すような私ではない。戦いとは、その一瞬一瞬がチャンスでありピンチなのだから。

「虚刀流六の奥義、錦上添花（きんじょうてんか）……」

宙に浮かび上がったイヴの両脇を、水平手刀で打ち付ける。
だが、イヴは『錦上添花』すらをも防ぎきった。
あれだけ体勢が崩れていながら、即座に反応し、イヴは広げていた両手を脇に持ってきて守りを固める。
いい判断だ。私が使った虚刀流の奥義をここまで防ぎきれるのは、おそらく魔法世界と旧世界とを集めても五人と居まい。

しかしこれで最後だ。ここまで体勢が崩れた以上、次の攻撃は防げまい。

「虚刀流二の奥義、花鳥風月（かちょうふうげつ）……」

半身になり、私は左手を完全に無防備となったイヴへと突き出す。

さすがのイヴもこれには反応が出来ないのか、悔しげな表情をしているのが見える。

普通ならばこのまま振り抜くのだが、私はイヴを殺したいわけではない。

そもそも、何故私はイヴとエヴァさんと戦っていたのだろうか？

そんなことを考えながら、私は当たる直前で腕を止める。

「な？　八つ裂きになりそうだった……ろ？」

「ぅ、ぅ……」

「あ、あれ？　イヴ？　なんでそんな泣きそうな目で俺の目を――――」

泣きそうにこちらを睨み付けているイヴに言葉をかけようとしたのだが、不意に両目に激痛が走る。

最初はなんの痛みだが分からなかったのだが、これはイヴに目潰しを喰らったのだとようやく理解する。

そして何をやられたかを理解すると、なんだか痛みが二割ましになったように思える。

つまり何が言いたいかと言うと。

「目がァ――――ッッッ！？！？！？　目が焼けるように痛い――――ッッッ！？！？！？」

「貴様があのように本気を出すから悪いのだ。万全ならともかく、今の我に本気を出すとは何事だ」

「いや本気なんかだしてな――――目に連続して痛みがァッッッ！？！？！？」

「私など途中から介入出来なかったではないか。全く……手加減もほどほどにしろ」

こ、この声はエヴァさんだろうか。そういえば途中から空気だったな……。

結果的にはエヴァさんにもイヴにも勝つことは出来たのだが、未だに戦い始めた理由が分からん。

私は目を駆け抜けている激痛にのたうち回りながら、そのようなことを考える。

……というか、何故手加減しているのが分かったのだろうか？

まあ、深く考える必要もあるまい。

「で、なんで俺達は戦ってたんだ……？」

「「知らん」」

……知らん、なんて言われたらなんと言えば良いのだ……。

私はせっかく帰ってきたのに、無駄に目を痛めるという結果に終わるのだった。

◇

私とエヴァさんとイヴが無駄な戦いを繰り広げてから早数時間。放課後となっていた。

さすがに戦いの傷跡を残すわけにはいかなかったために、『創造再生』で修復してある。

とりあえず三人でたわいもない話をしながら、私はとある二人を待っていた。

とある二人とは――――。

「おかえり、シキさん」
「やっと帰ってきたのね、シキ」
「……え？　お前ら、まさかとは思うがマナとアスナ……？」

――――マナとアスナのことだ。
私の問いに、二人は一回だけ首を縦に動かす。
ふむ……五年も会っていないとはいえ、ここまで容姿が変化するとは思わなかったな……。
アスナは五年前のような無表情などとは縁がないような活発な表情をしているし、マナに至っては本当に中学生かと問いたくなるような抜群のスタイルを誇っている。
……マナ、お前はこの五年間でいったい何をすればそのようになるのだ？
是非とも教えてもらいたいものだ。

「今まで何をやってたんですか？」
「ウェールズで弟子とってた」
「私達の修業をほったらかしにするほどのことだったの？」
「いや、別にそうじゃねェけどさ」
「そうじゃないなら、私達の側からいなくなる必要などはないはずですよね？　シキさん」

おぉう。何なんだろうか、このマナの異様な威圧感は。
今にも銃で私の死の点を貫いてきそうな勢いではないか。現に『直死の魔眼』を解放しているしな。
おっ、『直死の魔眼』の使い方が五年前よりも格段に上手くなっているな。
……ではなく、何故にマナはそこまで殺る気なんだ？
先ほどのエヴァさん叱りイヴ叱り……何故私の周りには殺る気な

輩が多いのだ。

「マナったらさ、シキがいなくなってから――――」
「――――アスナ、死にたくなかったら余計なことは言わないことをオススメする」
「あ、危ないわね!?　分かったわよ!!」

何かをいいかけたアスナのこめかみに、瞬時に拳銃を突き付けたマナ。

なるほど、私が居なくとも修業を続けていたと言うことか。
そうでなければ、このような動きを咄嗟に出来るはずがないし、それを受けて冷静でいられるはずもない。
第一に、何気ない動作の一つ一つが洗礼された良い動きだ。

「こいつらは私が鍛えたのだ。感謝しろ、クロカミ」
「ついでに言えば我も鍛えた。感謝するがいい」
「へいへい、ありがとよ」

どや顔でそう言ってきた二人に、私は適当に返事をする。
別に二人を鍛えてくれなどと言った覚えはないし、二人が勝手にやったことだ。
多少は感謝するが、どや顔をされるほどのことではないと私は思う。
まあ、やってもらったのだから礼の一つは礼儀と言うものだろう。

「なあ。イヴとエヴァさんにどんな修業つけてもらったんだ?」
「お、思い出したくもない……。あれは修業というより、ただのイジメだ」
「そう……よね。私なんか何回崖から突き落とされたことか……」
「なにやられたんだよ……。つーか崖から突き落とされるって、お

い」

ダイオラマ球を使ったとしても、いったいどこのエリアで修業を行っていたのやら……。

崖から何回も突き落とされたというのを聞くところ、突き落とされたのは一回や二回の話ではないだろう。おそらくは十回や二十回……で済めば良いのだがな。

よくよく考えてみれば、エヴァさん一人でも今のマナやアスナ程度なら片手間で相手に出来るし、それくらいならイヴも出来るだろう。

相性的に言えばエヴァさんよりも、イヴの方が相性が悪いかもな。なんせマナはエヴァさんの魔法を殺せるし、アスナに至っては無効化出来るからな。

あっ……人形使い（ドールマスター）を使えば相性などは関係ないか。

結果的にはエヴァさんもイヴも、戦ったならば死にかけると言うことか。

「じゃあ、今日からは俺が修業つけてやるよ。もちろん崖から突き落としたりはしねェからよ」

「や、やっと崖から落ちないで済む……」

「今日からようやくまともな修業が出来るな……」

……どれだけ二人の修業が嫌だったのだろうか。

アスナに至っては涙を流すほどに嬉しがっているではないか。

何気にマナも小さくガッツポーズを取っているが、まあ、気付かなかったこととしておこう。

あと、喜んでいる二人には申し訳ないが、残酷なお知らせをするとしよう。

「今日から銃、使っていくから」

「「……」」

私がそういった直後に、二人の動きがピタリと止まる。
当たり前だ。今までの修業では銃器は使用していなかった。
まだ使うほどには強くなっていなかったからな。とはいえ私が銃器を使ったときの強さは知っている。
ようやく地獄が終わったと思ったところに、さらに死刑宣告をする……。固まってしまうのも無理はない。

「じゃあ、早速修業始めるか。ただしその頃には、お前らは蜂の巣になってるかもしれないけどな」
「「自重しろ、銃神ッ！！」」

二人のツッコミを受けながら、私はあっはっはと笑う。
今日から再び麻帆良生活が始まる。
充実した毎日が送れることを祈りながら、私は空を見上げる。

第六十一撃『帰ってきた狙撃手。え……？　嘘だろ……？』（後書き）

本日を持ちまして『その竜族は狙撃手なり』を打ち切りにはしませんが、不定期更新とさせて頂きます。

理由としてはリアルが忙しくなったというのがあります。

部活のあとの執筆は死ねます……。

さらに8月24日から8月26日までは執筆が出来ないため、次回8月24日の更新の次は少し遅れます。

不定期とはいえ、基本的には三日に一回。最低でも一週間に一回にさせてもらいます。

では、感想待ってますッ！！

第六十二撃『虚刀流と中国少女。ただしその頃には、アンタは八つ裂きになってる』

某月某日、火曜日。

今日は見事なまでの快晴だった。照り付ける太陽は、私の身を焼き尽くすのではないかというほどに暑い。

何が楽しくてこのような暑い体験をせねばならんのかは分からんが、文句を言ってても始まらない。

私が麻帆良に帰ってきてから既に数日が経過した。

あぁ……やりたいことをやれるというのはこのように素晴らしいことだったのだな……。

こちらに帰ってきてからそれをよく実感させられる。

（ウェールズじゃあ、暇があればネギが修業修業ってうるさかったからな……。あとはネカネが料理を教えてくれって言ってきたことくらいか……）

今更ながらに考えてみると、ウェールズでは私がやりたいことが出来なかったな……。

まあ、誰かの面倒を見るというのは嫌いではないから、別に嫌ではなかったがな。

前世では本当の妹の面倒をよく見ていたし、転生してからも面倒をみることは多いな。

そんなことはさておき。現在私たちは、旅団で使う材料の買い出しをするために麻帆良を離れ、近くの街に来ている。

さすがというべきか、既に『銀竜の旅団』の看板娘となったイヴの人気は凄まじい。

客も男だけでなく女も来ており、同性にも異性にも人気があることを伺える。

『ぬぅ……暑い……。これはなんとかならぬものか……？』

その人気の張本人であるイヴは、私の隣を歩きながらそのような文句を垂れている。

何も買い出しは私一人で来たわけではない。息抜きも兼ねてイヴと一緒に来ている。

ちなみに、イヴの姿は旅団の衣装のままだ。メイド服のスカートにスリットを入れている、実に妖艶な衣装だ。

実のところ、私も目のやり場に困っている。

『我慢しろよ。こればっかりはどうしようもねェよ』

『むぅ……我が魔法を使えればこのような暑さは関係ないものを……』

『ん？　確かに旧魔法使えばこんな暑さは関係ねェな』

『もしくは太陽を破壊するのも良いかもしれん……』

『そ　れ　だ　！　！』

『冗談だ、馬鹿者。さすがの我でも、現代の文明が太陽なしでは生きられないことは把握済みだ』

まさかイヴが冗談を言えるくらいになっているとは驚きだ。

以前ならば私の考えに同意していてくれたはずだからな。

とはいえ私も太陽を破壊する気など毛頭ない。

破壊したとしても『創造再生』を使えばどうということはないがな。

『おい、雑種。さっさと買い出しを済ませるぞ。客を待たせるわけにはいかん』

『へぇ。まさかイヴが他人のために動こうとするなんてな』

『べ、別に我は他人のために動いているわけではない。ただ、我を

待っていてくれる者のために動いているのだ。王とは孤高でなければならぬが、それで失敗しているしな』

なるほど。日々学んでいるというのも強ち間違いというわけでもなさそうだ。

孤高の存在が、どれだけ強いかも弱いかも知っている。

だからこそ、イヴは孤高ではない道を選んだということだろう。

そのイヴの変化が、私にとっては嬉しい。

『じゃあ早く買い出しを済ませて帰ろうぜ？　客が待ってるはずだ』

『うむ。早く済ませよう。まずは――――』

イヴと一緒に買い出しをするというのも、悪くないかもしれんな。

私はそんなことを思いながら、買い出しを続けた。

◇

某月某日、水曜日。

今日の天気は昨日のように焼き尽くすような暑さではなく、ほどよく涼しい風が吹く日だった。

いくら旧魔法で暑さを軽減させることが出来るとはいえ、執事服を着ているのは気持ち的に暑いものがある。

今日のように涼しい日には、執事服でも暑さを感じない。……まあ、結局は旧魔法で暑さを軽減させるから意味ないのだが……。

さて。ほどよく涼しい一日のおかげ、というわけではないが、銀竜の旅団の客足は多い。

さすがに接客対応のイヴと、総合対応の私の二人ではキツいものがある。

注文の品を私にいうのもイヴ一人だし、慣れてきたがやはり大変だな。

『大変そうだな、クロカミ』
『エヴァさん？　大変そうだと思うなら手伝ってもらいたいんですが……』
『なぜ私がやらねばならんのだ。そのように面倒なこと、私がやるわけないだろう』
『はぁ……』

エヴァさんの言い分にはもはや溜め息しか出てこない。
私が注文の品を作っている脇で、エヴァさんは椅子に座ってゆっくりとしている。
……いったい何用でここまでわざわざ足を運んでぐだっているのやら……。
どうせ暑くなってくるのだから、クーラーの効いた家でゆっくりとしていれば良いものを。
というか、なにもする気がないならここにいないでもらいたい。

『エヴァさん、何もしないなら家に戻っててください。冷蔵庫に昼飯と、棚にお菓子が入ってると思います』
『子供か！？　貴様、私を子供扱いをしているのか！！』
『何言ってるんですか……。エヴァさんは実年齢はともかく、肉体年齢と精神年齢は子供でしょうに』
『それは真祖の吸血鬼（ハイデイライト・ウォーカー）のせいだ！！　全く……とにかく、子供扱いするな。腹立つ』

別に子供扱いをしたわけではなかったのだが、どうやらエヴァさんには子供扱いされたと思う言い方だったようだ。
これでもエヴァさんは私の師なのだから、食事には困らないようにと言っておいたのだがな。
なんにしても、エヴァさんの機嫌が悪くなってしまったのは間違

いない。
ふむ。エヴァさんは一度機嫌が悪くなると、立て直すまでが異常に面倒だ。
放っておいても良いのだが、それだと後々に面倒なことになる。
はてさて、どうしたものか……。

『エヴァさん、機嫌直してください。今度買い物でもなんでも付き合いますから』
『ふむ……ならば、今度私に料理のフルコースを作れ。それで我慢してやろう』
『分かりました、師匠（マスター）。あとお願いですから手伝うか帰るかどっちかにしてください』
『では、ここでゆっくりさせてもらう』

……どうあってもエヴァさんはここから動く気はないらしい。
仕方ない。今日はエヴァさんがゆっくりしているのを妬みながら、旅団の仕事に専念することにしよう。

◇

某月某日、木曜日。
今日は昨日のように涼しい気候とはお世辞でも言えないほどに暑く、エヴァさんがクーラーの効いた家でぐだっている。
さすがにここまで暑くてはイヴもやる気が出ないらしく、今日は旅団を急遽休業することにした。
イヴの肉体は限りなく人間に近く、限りなく神格に近いものとなっている。つまりはイヴの肉体でも日射病になるということだ。
看板娘となっているイヴが倒れてしまっては、私としても困る。
例え看板娘でなかったとしても、非常に困る。
そういえばエヴァさんは日射病とかにはなるのだろうか？

花粉症にはなったりはするようだが、日射病は見たことがないな。
真祖は不老不死なだけであって、病気にかからないということはないのだろうか？
自動再生（オートリバース）の能力もあるのだし……いや、花粉症にかかる時点でもはや分からんな。

『おい、クロカミ。この弁当はマナかアスナのものではないのか？』
『ん？　これはマナのだな。ったく、忘れんなっつったのに何やってんだか……』

何やら今日は昼飯に弁当が食べたいというからわざわざ作ったというのに、忘れていくとはどういうことだ。
ふむ……昼飯を食べるということは昼飯代も持っていってはいないだろうし、ここは私が届けるしかないな。
イヴは外に出たがらないし、エヴァさんも出たがらない。
その前にエヴァさんは面倒なことに、麻帆良の自称正義の魔法使い（マギステル・マギ）に目をつけられているからな。
迂闊に学園の中を歩かせるわけにはいくまい。

『とりあえずマナに弁当届けに行ってくるから、大人しくしててください』
『貴様……昨日から子供扱いするなと何度いえば良いのだ！！』
『スミマセン。では、行ってきます』
『おい、まだ話は終わっていないぞ！！』

エヴァさんが何かを言っていたようだが、小言に付き合っているほど私は暇ではないので、それを無視して外に出る。
相変わらずの太陽の照りつけ具合に、もはや殺意すら抱ける気がする。
おい太陽、壊（ころ）されたくなかったらその照りつけ具合を調整しやが

れ。
　なんてことをぐちぐち言っていたとしても、この暑さが引けるわけではない。
　それに、世界を照らすのが太陽の仕事なのだから、それを否定してやるのはあまりにも外道だ。
　ここは、我慢して生活するしかあるまい。

『ねえ、あの人って「銀竜の旅団」の店長さんだよね？』
『ほ、ホントだ！！　最近帰ってきたって言ってたけど、噂通りカッコいいね？』
『なんかクールって感じよね？　でも店長さんってイヴさんと付き合ってるって話だよ？』
『違うよ。何気に旅団に顔出してるエヴァちゃんって言ってたよ？』

　なんてことを考えながら女子中等部のマナの教室に向かって歩いていたのだが、何やら妙な話が耳に入る。
　私がイヴやエヴァさんと付き合っているだと？　いったいどのように見れば付き合っているように見えるのだ。
　ついでにいえば私は既婚者だ。浮気をするつもりなど毛頭ない。
　ただ、カッコいいと言ってくれたのは素直に喜ぶとしよう。女に間違えられることはあれど、カッコいいなどと言われることは少ないからな。
　そして、ようやくマナのクラスである１―Ａに到着した。
　１―Ａの教室のドアをガラリと開けて、私は言う。

『マナはいるか？　弁当忘れてるぞ？』
『し、シキさん！？　いきなり何してるんですか！？』
『あ？　弁当忘れてるから来たんだが』
『だからって来ないでください』

何やら弁当を届けに来たのだが、マナが若干頬を赤に染めて恥ずかしそうにしている。
何が恥ずかしいのかは分からぬが、クラスの皆がポカンとしているではないか。
……というか来ないで下さいというのはかなり傷つくな……。
ん？　何やら妙な視線を四つほど感じるのだが、いったい何事だろうか。

『マナ。なんか視線を感じるんだが……』
『気のせいです』
『いや、確かに――――』
『気のせいです。シキさんに視線なんかありません』

それもそれで非常に傷つくのだが、何故にマナは私の言葉をそこまで否定するのだろう。
まあ、別に弁当を渡すのが私の目的だったわけで、他に特に目的があるわけではない。
さっさと退場することにしよう。

『分かったよ。じゃあ、今度から忘れ物するんじゃねえぞ？』
『わ、分かりましたから早く帰ってください』
『へいへい。じゃあな』

私はマナに手を振りながら、１―Ａの教室をあとにすることにした。
それにしても、最後まで私の背中に視線を送っていたのはいったい誰だったのだろうか？

◇

某月某日、金曜日。
さて、今までの話が全て回想であったことはお分かり頂けただろうか？
何故ならば「　」が『　』になっていたからな。なに、別に大した意味はない。
ただ、今の状況を説明するためにはこの回想が必要だったのだ。

「これより、異端審問会を始める。被告、黒神織を拘束する」
「はぁ……」

現在、私は世界樹の下で黒覆面で鎌を持っている麻帆良の学生に取り囲まれている。
ざっと数を数えたところ、人数は二百人ほどもいた。
やれやれ、いったい何故私がこのような輩に取り囲まれねばならぬのだ？
このようなおかしな輩に恨みを売った覚えはないし、第一に何故鎌などを所持しているのだ。
普通の学生が鎌などを持っているのはおかしいと思うのだがな。
そもそも、被告って私が何か罪を犯したとでもいうのか？

「罪状は……不特定多数の美女、美少女とイチャイチャしたこと。よって……尋問を開始する」
「やってみろ。ただしその頃には、アンタらは八つ裂きになっているだろうけどな」

よく分からないが、このような異端審問会などといった変な集団にやられてたまるか。
たかが普通の学生が二百人程度集まろうとも、私に掠り傷一つ与えることは不可能だ。
……というか、逆に掠り傷程度でも付けられた暁には、本気でへ

こむな。
そんなことを考えながら、虚刀流の最も基本となる構えをとる。
『やっちまえぇ――――――――――――――――――――ッッッ！！！！！！』
「はぁ……。面倒だ……」
叫びながらこちらに突撃してきた異端審問会にため息を吐きながら、とりあえず構える。
異端審問会の動きはいうなれば自分の犠牲を何とも思わない、そういった動きだ。
やれやれ、このような輩が一番やりにくいのだが、まあ、とりあえずは気絶する程度にしておけばよいな。
そんなことを考えながら、私は無闇に飛び掛かってくる異端審問会の輩を次々に気絶させていく。
全く……鎌の扱いがなっていないな。そのようなやり方では鎌の刃をダメにしてしまう。
これは早々に全員を気絶させたあと、手入れを行うしかなさそうだな。
では、さっさと終わらせることにしよう。
「虚刀流、七花八裂――――応用編」
虚刀流の七つの奥義――『鏡花水月』、『花鳥風月』、『百花繚乱』、『柳緑花紅』、『飛花落葉』、『錦上添花』、『落花狼藉』――の一つ一つを別の対象に叩き込む虚刀流の応用方。
本来ならばこの七つの奥義を一つの対象に叩き込むのだが、状況が状況なだけに応用編を使うしかなかった。
氣も織り混ぜているために、当たらずとも余波で気絶するだろう。
だいたい、私に虚刀流すらも使わせた時点で異端審問会の輩は恐

ろしいと言える。
ふぅ。恐ろしい敵だった。

「ようやく見つけたアル！！」
「あン？」

などと考えていると、今度は少女の声が私の後ろから聞こえてきた。
振り向いてみればそこには昨日マナの教室で見かけた少女と、マナがいた。
少女の方は何故かヤル気満々で、マナの方は何故か呆れたような疲れたような表情をしている。
マナがいるから先ほどの異端審問会のような輩ではないのは分かるが、何故に私を探していたのだろう。
そして、少女は私を指差しながら言ってきた。

「ワタシと勝負してもらうアル！！」
「……は？　なんで勝負なんかしねェといけねェんだよ」
「それはワタシが強い奴と戦いたいからネ」

理由がワケわからん。
なんで強い奴と戦いたいからといって、わざわざ私を探しに来るのだ。
どう見ても少女は一般人だ。それに、一般人の中でいえば達人と呼ばれる域に達しているだろう。
ただ私たちのような存在から見ればこの少女クラスはごまんといるわけで、戦うには値しない。
戦うにしてもマナはおろかアスナにすら勝てないだろうに。
というか、また妙な視線を感じるんだが、いったい何事だというんだ？

なんてことを考えながら、近づいてきたマナに話しかける。

「（マナ。あいつはいったい何なんだ？）」

「（彼女は古菲（クーフェイ）。言っていることに嘘偽りはありません。たぶん戦うまでは納得しないと思いますよ）」

「（えー……。スゲー面倒な相手だな……。なに？　戦えばいいの？）」

「（一応、中国拳法を極限まで高めてますので、ある程度戦えると思いますよ）」

いや、中国拳法を一般人の領域で極限まで高めているとはいえ、戦うことになど意味はないだろうに。

戦いたいというならば仕方はないが、はたしてこの戦いに意味などあるのだろうか……。

「仕方ない。古菲って言ったか？　いいだろう。その勝負、受けて立つ」

「その答えを待てたアルよ。全力で行くアル」

「良いだろう。ただしその頃には、貴様は八つ裂きになっていても構わないのだろう？」

中国拳法の構えを見せた古菲だったが、不意に私の口調が変わったことに驚いていた。

ここはさすが武人というところだろう。

私の雰囲気が武人のものとなったのを敏感に感じとり、構えが強張っている。

もちろん私が本気を出すなどと言うことはない。

私の動きを見て少しでも学ぶところがあればそれで良い。

そして私は、虚刀流七の構え『杜若（かきつばた）』を古菲に見せる。

足を平行に前後へと配置し、膝を落とし、腰を曲げ、上半身を軽

く前傾。
両手は貫手の形で、肘を直角の角度に。体重は前方にかけ、若干前のめりに体勢に。
今にも動き出しそうなこの構えが『杜若』だ。

「――――行くぞ」

私は小さく呟くと、古菲に向かって飛び出す。
今までに見たことがない速さだったのか、古菲は面食らっているような表情を見せてくる。
……ヤバイ。いきなりやり過ぎてしまっただろうか？
一般人ということを考慮した上でこれを使ったのだが、まさか私の一般人に対する面識がここまで誤っていたとは……。
まあ、まだ戦いは始まったばかりだ。
この動きに対してどういった反応を見せるかどうかで、戦局が変わる。

「見切れないほどじゃないアル！！」

古菲は私の動きに合わせて掌打を繰り出してくるが……鈍い、鈍すぎて話にならん。
だいたい、『杜若』の構えは剣速が速ければ速いほど、次の虚刀流の技に繋ぐことが可能になる。
つまりは相手の動きを見切った上での動きとなる。
このように鈍い動きでは、次に繋げることなど造作もない。
私は古菲の掌打が当たる手前で地を蹴りだし、バネのように脚をたたむ。

「虚刀流七の奥義――――『落花狼藉』！！」

そしてそのまま脚を斧に見立てて、全体重と脚力を乗せた前方三回転踵落とし――『落花狼藉』――を古菲に向かって放つ。
だが、古菲はもはや私の速度についてこれてはおらず、私を見たまま棒立ちになってしまっている。
このまま脚を振り下ろしても良いのだが、さすがに棒立ちになっている少女に『落花狼藉』を当てるわけにもいくまい。
私は振り下ろした脚を古菲ではなく、その手前に打ち付ける。
古菲はそこでようやく割れに返ったのか、よろりとふらつく。
転びそうになっていたので、私は腕を握ってそれを阻止する。

「分かったか？　今のお前じゃ相手にならない」
「……」

私は古菲を改めて立たせてから、彼女に向かってそう言う。
確かに強い奴と戦うという行為自体は悪くはない。
悪くはないが、相手の実力を測れていない状態で戦いを挑むのは頂けない。
相手が私だったから良かったものの、もしも相手が血も涙もない輩であれば今ので間違いなく殺されている。
……とはいえ、現代社会ではそのようなことは有り得ぬがな。

「……これアル……。これが、ワタシの求めていたものアルよ」
「あン？　求めていたって、何を求めてたんだ？」
「この抜き身の刀のような鋭さ、触れただけで斬れそうな雰囲気……これがワタシの求めていたものアル」

抜き身の刀のような鋭さ、触れただけで斬れそうな雰囲気……って言われても、私はそれを意図してやっているわけではないのだがな。
そして古菲は何故か目を輝かせながら、私に言ってきた。

「ワタシを鍛えてほしいアル！！　さっきの虚刀流を教えてほしいネ！！」
「虚刀流を？　……まあ、別に構わねェけど……」
構わないが、マナとアスナの他にも古菲の修業を見るのは、正直言えば面倒だ。
マナとアスナは一般人の域を出て、準チートになっているからそこまでではないが、古菲に至っては基礎からやらねばならん。
応用が出来るようになってからの基礎というのは、面倒なものだ。
「これからよろしくアル！！　えと……」
「……黒神織だ」
「よろしくアル、織老師！！」
老師というのは私のガラではないと思うのだがな……。
これで四人目の弟子の存在。私程度が弟子をそんなにとってても良いのだろうか？
それは分からないが、出来るだけのことはやろう。
私はそんなことを考えながら、煙草をくわえた。

◇

『虚刀流七の奥義――――「落花狼藉」』
麻帆良の世界樹の下にて組手を行っている二人の男女――シキと古菲――を見ている一つの影。
近くには映像を残すためのビデオカメラが設置されており、古菲ではなくシキの動きを映像として録画している。

（これが、この時代の銃神様カ……。さすが銃神様ネ）

シキの動きを見ながらそのようなことを考える一人の少女。
彼女の名前は超鈴音（チャオ・シンシェン）。未来を変えるために未来からやってきた正真正銘の未来人だ。

（今のアナタの実力……拝見させてもらうヨ）

鈴音は懐から一対の双銃を抜き放つ、それを見ながら思う。
そして彼女の体には、わずかに黄色の紋様が浮かび上がっている。
物語の歯車はまだ正常に動いている。それをこのまま正しく導けるかどうかは、彼にかかっている。

第六十二撃『虚刀流と中国少女。ただしその頃には、アンタは八つ裂きになってる』

新しく『バカとテストと直死の魔眼』を投稿しました。
ぜひ見てくださいッ！！
感想待ってますッ！！

第六十三撃『修業三昧。死して尚、一片の悔いなし……なわけねェだろうが！！』

私が古菲を弟子にしてから早一週間。この一週間で私は出来うる限りのことを教えた。

教えたと言っても、基礎からの基盤造りと虚刀流の技の知識を教えたに過ぎない。

基礎の固定はやはりと言うべきか一週間やそこらで完成するはずもなく、少々一般人を逸脱したに過ぎない程度となっている。

そもそも、虚刀流は一般人程度の身体機能では扱うことは不可能だ。

無理をして扱おうとすれば肉体が保たずに崩壊してしまうだろう。奥義ともなればその程度で済むかどうかすら分からん。

ちなみに。修業はダイオラマ球を使用せずに、毎朝古菲が学園に行く前に行っている。

魔法を知らない古菲にわざわざ魔法を教えるつもりもないし、知って変なことに巻き込まれてもらっても私が困る。

「虚刀流、『薔薇』！！」

全体重を片足一本に乗せた飛び蹴り。ようやく虚刀流を使えるようになってきたはいいが、やはりキレが甘い。

組んでいた腕を解いて、片腕で古菲の『薔薇』を受け止め、脚を掴む。

そしてそのまま古菲を世界樹の幹に向かって投げ飛ばす。

バランスを崩した古菲だったが、空中で体勢を整えて、脚のクッションを使って世界樹を足場にして、勢いを吸収する。

さらにそのまま吸収した勢いを脚のバネに乗せ、再び私に突撃を繰り出してくる。

一般人を逸脱した古菲ならば、この程度の動きは造作もない。
もちろんこの程度で古菲も満足などはしてはいないだろう。

「虚刀流、『牡丹(ぼたん)』ッ！！」

空中で腰を捻って勢いをつけながら、私の目の前に着地し、そのまま後方回し蹴りを放つ。
それを私は半歩だけ後ろに下がることにより回避するが、古菲はそれを読んでいたかのように即座の次の行動に出る。

「虚刀流、『菫(すみれ)』ッ！！」

後方回し蹴りの勢いを腕に移動させ、私の足首を掴み古菲はそのまま真上へと力任せに投げ飛ばそうとする。
『虚刀流、菫』は虚刀流の剣技にしては珍しい投げ技だ。
あまり使い所がないと思っていたのだが、このように応用してくるとは思わなかった。
だが、そう安々と投げ飛ばされるわけにはいかない。
私は古菲が力を入れる前の一瞬の隙をついて拘束から避難し、そのまま懐からコインを取り出して指で弾く。
――――『羅漢銭』。中国の暗器の一種で、平たく言えばただの銭投げだ。
どこにあるただのコインを投げるだけの技だが、極めれば一瞬の隙で何百打と撃ち込むことも可能だ。

「ぐ、う……っ！？」
「隙だらけだ」

私が指で一つだけ弾いたコインは見事に古菲の額に直撃し、古菲の体が後ろに仰け反る。

そして私は今の古菲が避けられるか避けられないか程度の速度でコインを弾いていく。

一度体勢を崩した古菲ではあったが、そこからの復帰は驚くほどに速い。

もちろん私が仕込んだからだ。敵が自分より強かろうと弱かろうと隙を見せるわけにはいかない。

『虚刀流』や『氣』などの前に、基礎の時点でそれを叩き込んでいる。故にしっかりやってもらわねば困る。

回避行動も教えたが、やはり実践ともなれば違うのだろう。なかなかに動きにくそうにしている。

――――が、ここまで動けているならば一週間程度の時間で良くやった方だ。

などと考えていると、羅漢銭の止まったわずかな隙を見て古菲が小さくステップを踏む。

そして不意に古菲の動きが早くなる。

（瞬動術（クイック・ムーヴ）か……。教えてもいないのに良くできるものだ……）

私は自分が弟子にする者達の才能にただただ感心するしかない。

私には『氣をある程度扱える力』と生前からやっていた射撃しか出来なかった。

今でこそ様々なことをそつなく行うことが可能だが、これだけの短時間でそれが出来たかといえば出来ないと答えるしかない。

羨ましくないといえば嘘になるが、今の私には誰かを護れるだけの力があるはずだ。

だから今は、その力を誰かに教える必要があるのかもしれんな。

「虚刀流、『木蓮（もくれん）』！！」

そのようなことを考えている間に、接近してきていた古菲は私の

顎に向かって跳び膝蹴り――虚刀流、木蓮――を放ってきていた。
この場合ならば『薔薇』を使った方が良かったと思うが、間違った判断ではない。
首を僅かに横に傾け、『木蓮』を回避し、古菲の背後をとる。
そして首の頸動脈に指をピタリと当てる。

「チェックメイトだ」
「うぅ……また惨敗アル……」
「あのな。最初ってのはそんなもんだし、俺が相手なんだぜ？」
「何気に自慢されてるのが悔しいアル……」

頸動脈から指を話したあと古菲がそのようなことを言ってくるが、別に自慢をしたわけではなく、事実を述べただけなのだが……。
『神格』を打ち倒し、大戦期を生き抜いてきたのだからこの程度は自慢にはならん。
だいたい、修業を一週間程度やったくらいで、私に触れられると思う方がどうかしている。
マナやアスナですらもまだ触れさせてはおらぬのだからな。

「ほら、朝の修業はこれで終わりだ。さっさと学校行け。遅刻するぞ」
「分かたアル。学校が終わったらまた修業するアルよ！！」
「へいへい。分かったからさっさと行け。遅刻するぞ」

私の言葉を聞いた古菲は時間を確認したあと、急いで走り始めていた。
おそらく遅刻しそうになったからだろう。だから早く行けと言ったのに。
さて、朝の修業も終わったことだし、あとは放課後まで旅団の仕事をして、放課後はまた修業だな。

……なんか、旅団の仕事する以外の時間は修業に当てているような気がするのだが、気のせいだろうか？

◇

「はぁ……」

空は快晴で蒼天だというのに、私の口からは一つのため息。

ため息を一つ吐く度に息と一緒に幸せが逃げていくような気もするのだが、出てしまうものは仕方がない。

さて。私がなぜこのようにため息をついているかと言えば、目の前に広がっている光景のせいだったりする。

「「「……」」」

無言で睨み合う、三人の女の子の姿。マナとアスナと古菲だ。

そう。このため息の元がこの三人なのだ。

古菲が修業をやっているのに即発されたのか、最近は修業に付き合っていなかった二人が修業をしてくれと頼み込んできたのだ。

しかもマナとアスナは一緒に来たのではなく、あくまでも個々として頼みにきた。

二人が睨みあっていたところに運悪く古菲もやって来てしまい、事情を知って今の状況に至る。

何が嫌なのかは分からないが、三人とも個人での修業を望んでいる。

私としては一人も二人も三人も変わらないのだが、それでも個人での修業を望んでいる。

（どうでも良いけど、早く決めてくれ。じゃねェとまた異端審問会とやらが来ちまうからな）

あの一件以来、私が女性と話していたりすると、異端審問会の奴らが襲撃を仕掛けてくるようになった。
つまりは今の状況は異端審問会がやって来る原因になるわけで、早く誰が修業をするのか決めてもらいたい。
私が再びため息をつきながら考えているものの、決着がつかないどころか、一向に進展すらしない状況にある。
おそらくこのままにしていれば、話がつくなどということは一生有り得はしないだろう。
仕方がない……。手っ取り早くやるために今日は別メニューにしよう。

「はい、注目！！　誰が修業するか一向に決まらないので、今日は三対一の模擬戦を行う！！」
「「「え～……」」」
「え～、じゃねェよ。お前らがさっさと決めないのが悪いんだろ。場所はダイオラマ球を使うから、マナとアスナは古菲を案内してくれ。
集合は今から三十分後だ。三人で動くのは初めてだと思うから、作戦をしっかり立てるように」

私は三人にそう告げると、世界樹を一旦あとにする。
ダイオラマ球を使う予定はなかったのだが、まあ、これくらいは教えたとしても問題あるまい。
それに魔法のことを知ったとしても、それに負けないくらいに私が鍛えれば問題はない。
そんなことを考えながら、私は自宅へと向かった。

◇

シキが去ったあとの世界樹の下に取り残されたマナ、アスナ、古菲の武術系少女の三人。
自分としては個人での修業を望んでいたのだが、いがみ合ったせいでまさかの三対一の模擬戦を行う羽目となってしまった。
嫌というわけではないが、やはり個人でやってもらいたいという気持ちがある。
それに、初めての三人での戦いになるのに相手がシキというのはいくらなんでもレベルが高すぎる。

（私はシキさんと二人きりでやりたかったのだが……）
（シキと戦うのに他に二人もいたら戦いにくいわよ）
（ワタシは修業が出来るなら問題ないアル）

しかも気持ちがこれほどまでにバラバラとなると、戦いになるかどうかすらも分からない。
……とはいえ三対一の模擬戦を行うこととなっているのだから、ただ単に負けるわけにはいかない。
せめて彼をガッカリさせない程度の動きを出来るようにはしたい。
その気持ちだけは、気持ちがバラバラの三人も一緒だ。
とにかく、実力が違いすぎる以上、人数差を利用して普段よりも良い動きを見せるしかない。

（そういえば、アスナは大丈夫だが、古（クー）はシキさんの動きを知っているのか？）

ふとした疑問がマナの脳裏をよぎる。
アスナは魔法も知っているし、シキの本領である銃器での戦い方も知っている。
だが古菲はあくまでも一般人の中でシキに鍛えてもらい、しかも一週間程度の面識でしかない。

シキが本来は肉弾戦よりも銃器戦を得意としていることなど、知るはずがないだろう。
羅漢銭も銃器というよりも暗器と言った方が正確である。

「古、シキさんと戦うにあたって言っておくことが複数ある」
「老師についてアルか？」
「あぁ。まずシキさんは典型的な遠距離型だ。遠距離型といっても、正直近距離でも勝てる気はしない」

マナの言葉に古菲は目を見開く。
古菲は今までシキは虚刀流などを使っている武人なのかと思っていた。
だがマナの話を聞く限り虚刀流などと言った武術はあくまでも狙撃のおまけで、メインは狙撃だ。
しかも今の古菲ではシキがどこから狙撃をしてくるか分からない。
どう考えても三人で戦うならば古菲が足手まといとなる。

「私がシキさんの弾を弾いて場所を探すから、アスナと古でシキさんを叩いてくれ」
「分かったわ。だけど、シキと狙撃戦やって勝てるの？」
「うっ……。勝てなくてもやるしかない」
「確かにそうだけどね。くーふぇもシキの狙撃を見るのは初めてだと思うけど、大丈夫よね？」
「うむ、任せておくアル」
「じゃあ作戦を立てる。無難な作戦だけど上手くやればシキさんに一撃を与えることも――――不可能じゃない」

マナの言葉に今までいがみ合っていたとは思えないほどに真面目に頷き、話を聞く体勢となる。
そしてマナから作戦の概要が話される。

ダイオラマ球の場所の指定はされていないために、おそらく選ぶ場所は自由なのだろう。
ならば選ぶのは狙撃を行いやすい遮蔽物がある場所だ。
もちろんその場合はシキからしても動きやすくなるが、そこは前衛がいるということを利用しての戦略だ。
狙撃をしたあとに同じ場所に止まっていれば、場所がバレるのは必須だ。
シキ程の銃神となればそのような失態は犯さないが、あくまでも模擬戦のためそこまではしないだろう。
そして場所が明白となればあとは全力を叩き込むのみ。

「攻撃は最大の防御だ。守りに徹した瞬間、私達の負けだ」
「そうね。よし、今日こそシキに一撃を叩き込むわよ！！」
「おうアル！！」

三人はそう言い合うと、お互いに拳をぶつけ合う。
そして、そのままダイオラマ球があるはずのシキの家へと向かった。

◇

「来たか。どうだ？　良い作戦は浮かんだか？」

私が世界樹から去ってから約三十分後。時間きっかりに三人はやってきた。
しかも何やらいい策でも浮かんだのか、妙に自信に溢れた表情をしている。
ただ、古菲だけは何やら不思議そうな表情をしているが、ダイオラマ球を始めてみたならば致し方あるまい。

「えぇ。これならシキさんにも負けない」
「今日こそシキを負かしてみせるんだから！！」
「勝負アル、老師！！」

……どれだけいい策が思い付いたのだろうか。
今まで勝つ負けるの前に私に掠り傷一つも与えられなかった三人が、私に負けないなどと言ってきた。
私は三人のレベルでは勝つのは困難なレベルでやるつもりなのだが、はたして本当に勝てるのか？
ふむ、久しぶりに楽しみになってきたな。

「なら行くか。場所は『廃都』でレベルは『中級』、障害物は『有り』で」

三人の言葉に内心で楽しみにしながら、ダイオラマ球に場所の設定を行い、中に入る。
すると一瞬にして背景は廃都へとなり、ビルや様々な建物が崩れたりしたままの姿で残っていた。
障害物を無しにすればこういったビルなどはなくなり、ただ足場が悪い程度にしかならない。
そして古菲はというと……別段驚いた様子はなかった。
あれ？　珍しげには見ているが何故驚いた様子がないのだ？　普通ならば驚くところだというのに。
まあ、いい。今は古菲が驚いているかどうかではなく、模擬戦を行うのが目的だからな。

「さっそく始めるぞ。――――せいぜい背中には気を付けな」

私は三人にそう告げるとトン、と軽く地を蹴り出して三人から五百メートルほど距離を置く。

マナとアスナは驚いてはいないが、ここまで人間離れした動きを見たのは初めてのようで、さすがに驚いた表情をしている。
ちなみに眼は魔力で強化して『鷹の眼』を使っているために、現在は半径百キロ圏内ならば針の穴のように小さな場所までもがはっきりと見える。
それに伴って狙撃の方も半径百キロ圏内ならば、眼を瞑ってでも確実に被弾させることが可能だ。
まあ、今はそこまではやらないがな。
さて、あの三人がどのように動くのか見ものだな。
とりあえず聴力も魔力で強化して、何を話しているか聞くとするか。

『予想通りシキさんは狙撃に徹するみたいだ』
『でもどうするの？　シキの位置からだと私達バレバレじゃない？』
『そうアルよ。遠距離の武器に対してはただひたすらに距離を詰めるしかない……って老師が言てたアル』
『分かってる。だがこのまま狙われるのを待つより、一気に殲滅した方がいい』

マナはそういいながら、私に以前に創ってほしいと言ってきた無制限武器庫――ピアスタイプ――に手をかざす。
この無制限武器庫には文字通りどれだけの武器を詰め込むことが可能だし、自分の呼び出したい武器を思い浮かべるだけで取り出すことが可能だ。
……ってマナが持っているのは私が創ったコレクションの中の一つではないか！？　しかも中々にエグいのを持ってくるではないか……。
――――『六道通』形状はＳｍｉｔｈ　＆ａｍｐ；　Ｗｅｓｓｏｎ　Ｍ５００ハンター・マグナムリボルバーで接近戦用に上部に打突部、下部に刃を仕込ませてある

これは実弾を六つの概念を与え、魔弾に変化させて撃つ拳銃だ。
これを使うのに本人の魔力はほとんど必要としないため、一般人でも扱える者は扱うことが出来る。

『シキさんの持ってたコレクションの中から、特に強力なのを選んできた』
『そ、それってシキが触るなって言ってた奴じゃ……』
『あぁ。シキさん相手にならこのくらい、まだ火力不足だ』

確かにそれでは火力不足だが、そうにしても強力なのを選びすぎだろうに……。
しかも厄介なことに六道通の魔弾の中には、運命や生命に絶対的な否定を与える『一撃必殺』の魔弾や、壁や遮蔽物を無視して対象に当てる『百発百中』などがある。
幸いなのは二つの魔弾を同時に使えないことだが、この場での六道通はかなり有利な武器だと言えるな。
『百発百中』に至っては対象を絞り込んでいれば例え相手がどこにいるか分からなくとも、追尾弾としての効果もある。

（この場所がバレるのも時間の問題か……）

廃都のビルの影から三人を見ながら、私は外套の懐から一枚のカード――アーティファクトカード――を取り出す。
実のところ、テオと仮契約（パクティオー）したのは良かったのだが、未だにアーティファクトは使ったことがないため、形状も効果も分からん。
そのどちらもが使ってみれば分かることだがな。

『「百発百中」で放った弾丸の先にシキさんがいる。アスナと古はそこを叩いてくれ』
『分かったわ。準備はいい、くーふぇ？』

『もちろんアル。アスナの方こそ、しっかりやるアルよ？』

マナが六道通を天に掲げながら言うと、アスナと古菲の二人もそれぞれの武器を構える。

古菲は自分のにくたいが武器であり、刀なのだがな。

アスナは以前と同じで大剣を構えている。ちなみに咸卦法は既に使用している。

それを見た私は口元を歪ませながら、小さく呟く。

「――――来れ（アデアット）」

するとアーティファクトカードがデザートイーグル――『九曜の鷹』――へと姿を変える。

この九曜の鷹も六道通と同じで、実弾を魔弾へと変化させて放つものだ。七つの魔神と二つの星神に祝福されし魔弾に変え撃つ拳銃、それが九曜の鷹だ。

そして私は、九曜の鷹の引き金に指をかける。

その刹那、私が隠れていたビルの壁を透き通って私に真っ直ぐに迫ってくる。

さらにその後ろには、大剣を構えている咸卦法アスナと虚刀流古菲がついてきている。

「――――月神」

だが私は慌てずに九曜の鷹の銃口を向け、引き金を引く。

銃口から放たれた魔弾は相手に向かっていくわけではなく、私の前に魔力が薄く膜状に展開される。

月の光は照らす者を優しく包み込む。故に『月神』の魔弾は放った者を包む結界となる。

『月神』によって進行を阻まれた古菲とアスナは一旦体勢を整え、

マナが放った『百発百中』は消滅する。

「去れ（アベアット）。――――歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）」

「――――ッ！？　くーふぇ、下がって！！」

「ラジャアル！！」

さすがにアスナは判断が早いか……。

歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）は構えた双銃から魔力弾を連続して放つ銃技だ。

しかも魔力弾には壁に当たると反射するという概念が籠められており、ビルの部屋の一角のこの場では十分に通用する。

アスナは古菲を自分の後ろに待避するように言うと、持ち合わせていた大剣を大きく振りかぶる。

その際に魔力弾がアスナに被弾したように見えるが、アスナには反魔法上（アンチマジックフィールド）が備わっているため、実質的には痛みはおろか、痒みすらもまるでない。

そしてアスナは振りかぶった大剣を一気に振り下ろす。

振り下ろした衝撃波で歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）の魔力弾が消滅させられ、私にまで迫ってくる。

それを回避するために事前に作っていた退路を、アスナの方を向いたまま一息で通り抜ける。

「シキさん、貴方がこっちに退路を作っていることなど、予想済みだよ」

「へェ、そりゃマズったな」

だがその先にはマナが待ち受けていたらしく、私の背中に六道通の銃口がピタリと当てられている。

あとは引き金を引き『一撃必殺』の魔弾を放てば、マナが私に一撃を与えることは可能だろう。

しかし、私もこの三人の師をしているからな。そう安々と一撃を

決めさせる気は毛頭ない。
今までゆっくりとしていた動きを加速させ、マナの方に向き直る。
そして双銃を動かしてマナの六道通を上段に弾き、片方の銃をマナの眉間に向ける。

「シキさん。貴方の相手は私だけじゃない」
「分かってるさ。だから――――」

私はそう言いながらもう片方の銃を、たった今通ってきた道に真っ直ぐに向ける。
するとそこからは物凄い速さでこちらに迫ってきている古菲の姿があった。
ビルにてアスナが大剣を振り上げたのを見ると、どうやら大剣の刃に古菲を乗せて力任せにこちらに投げ付けてきたようだな。
全く……後先考えて行動してくれ。これで私が行動を起こさねばどうするつもりだ。
とりあえず銃を向けた私は引き金に指をかけながら口を開く。

「双銃を使ってるんだぜ？」

私は双銃の引き金を同時に引く。
双銃の銃口からは蒼色の魔力弾が放たれ、マナと古菲の二人を飲み込む。
魔力弾を喰らった古菲は吹っ飛ばされはしたもののアスナに受けてもらい、マナは虚空瞬動を使って無事に着地している。
もちろん私が撃った魔力弾は非殺傷に設定してある。
修業で死んだなどとあっては、今まで苦しい思いをしてきた意味がないからな。
吹っ飛ばされた二人の安否を確認したあと、容赦なく私は魔力弾を撃ち込む。

私の双銃――『虚空ノ弾雨』――の瞬間連射数は毎秒二万発だが、今は五秒で二十発程度の出力で狙撃している。

今の三人のレベルに合わせるならば、これくらいがちょうど良いからだ。

そして案の定、マナは自らの魔力弾で相殺させ、アスナはその大剣で凪払っている。

……ん？　先程私が弾き飛ばした古菲の姿がなくなっているではないか。

「もらったアル！！　虚刀流七の奥義！！」

（む？　奥義はまだ知識にしかないはずだが……？）

私が古菲の姿を見つけたのと、そう疑問に思ったのはほぼ同時だった。

確かに私は古菲に虚刀流の知識とそれに見合うだけの肉体作りを手伝っている。

修業でも虚刀流の奥義以外は実演して見せた。だが、奥義だけは見せていないはずだ。

なんてことを疑問に思っている間に、古菲は自らの右足を斧と見立てるために、振り上げている。

「――――『落花狼藉』！！」

「甘いな。普通の虚刀流も満足に使えないのに、奥義なんてのはもっての他だ」

私は『落花狼藉』にて振り下ろされた右足を必要最低限の動きで回避し、そのまま体を入れ換えるようにして古菲を地に向かって投げ飛ばす。

この高さから頭から落下してしまうとさすがにまずいので、古菲の落下先に巨大なクッションを『創造再生』で創りあげる。

そしてアスナとマナの方に目を向けてみたが、既にその場には二人の姿はない。どこに行ったのかと考える前に、私の前後より二人の影が迫る。

（なるほど、最初の俺の魔力弾を受け止めるのを囮にして古菲を突っ込ませたのかと思ったが、その古菲の突撃すらも囮ということか）

使えるもの、出来ることを最大限に活用した防御を捨てた攻撃型の戦略。この戦略には欠点があり、仲間との連携が上手くとれない場合は逆に自らの首を閉めることとなる。

その点は即席のパーティーではあるが、クリアしている。他にも様々な欠点があるが、気になるほどではない。

防御を捨てた攻撃戦。つまり、これは電撃戦ということか。

私に対して守りに徹すれば勝機はやってこないことを理解した上での作戦……悪くない。

現に模擬戦で遊んでいたとはいえ、この三人は私が作った隙を見事に突いてくれたのだからな。

前からの大剣（アスナ）、後ろからの魔弾（マナ）。見事な動きだとしか言いようがない。

――――が、悪いがまだ一撃を受けてやるわけにはいかないな。

「なっ！？」

「えっ！？」

二人は見事に驚愕した声を重ね合わせる。

その理由は至極簡単だ。私が二人の目の前から姿を消したからだ。

消したといってもなんてことはない。ただ、二人の動体視力では追い付けないほどの速さで二人の死角に回ったに過ぎない。

もちろん標的である私が目の前から消えれば、前後から攻撃を放った二人はお互いの攻撃を受けることとなる。

まあ、さすがにそれは可哀想なのでお互いに殺ってしまう前に終わらせてしまおうか。
そう考えた私はマナとアスナの顔面に掴みかかり、そのままさっき古菲を落下させたクッションのところまで急降下する。
そして一定の高さまで来ると、私は二人を投げ飛ばした。

「くっ、まだ、終わったわけじゃないッ！！　済まない、先に謝っておく」
「へっ？　ぶへっ！？」

だが投げ飛ばされたマナはまだ諦めがつかなかったらしく、あろうことかアスナの顔面を踏み台にして再度私に迫る。
これればかりは予想外だったとしか言いようがない。とにかく、こちらに向かってきたマナを迎え撃つべく双銃を構える。
途端、マナの眼がすぅーっと蒼色に変化する。直死の魔眼を使ったのだ。
旧世界に来てから魔眼を使うことは少なくなったが、長年訓練し続けた魔眼の扱いが劣るはずがない。
むしろさらに使えるようになったのではないかと錯覚させるほどだ。

（いいぜ。マナが本気なら、こっちもそれ相応の弾丸で相手してやるよ）

双銃の銃口をこちらに向かってくるマナに向ける。同じようにマナも六道通を構える。
距離が徐々に詰まってくる。引き金には指がかかり、いつでも撃つ準備は出来ている。
直死の魔眼は私の死の点を捉える。これはもはや模擬戦ではない。
――――死合だ。

そして私達は同時に引き金を引いた。
この一騎討ちは単純に一発の弾丸にどれだけの魔力を込められるかで勝負が決まる。
だが、六道通を使った以上はそれだけではない。

（いつの間にか、俺が思ってたよりもマナは強くなってたのか……）

マナの直死の魔眼と六道通の『百発百中』を合わせれば、魔力弾同士の撃ち合いでも、その魔力弾を透き通って相手に喰らわせることが可能だ。
つまり、マナは私の死の点に魔力弾を撃ち込むことが出来――――。

「くっ……足りなかった、か……」

――――はしなかった。
この一撃は予想できなかったわけではないが、マナがそこまでの考えを思い付いたのに師としては素直に嬉しかった。
だが、それと同時に師として想定内の一撃を受けてやるわけにはいかない。
よって私は百発百中の魔力弾に、瞬時に破壊の概念と『百発百中』の概念を与えた魔力弾を当てて相殺した。
マナはよくやった方だ。私に咄嗟の判断をやらせたのだからな。

「よくやったな、マナ。随分強くなったよ」
「え、あ、えっ……？」

私はそう言いながら、落ちていきそうになったマナを抱き抱える。
膝の後ろと首の後ろにに手を回したことにより、マナと顔が一直線に向かい合うために分かってしまったのだが、何やらマナが混乱

気味だ。
　はて、何があったのだろうか？
　そんなことを思いながら、アスナと古菲が乗っているクッションの脇へゆっくりと降り立つ。

「即席のパーティーにしては上出来だった。評価としてはＡ評価だ。俺の裏をかいてさらには隙も突く……今までだったら出来なかったことだからな」
「は、初めて誉められたかも……」
「老師に誉められたのは初めてアルよ。あとこんな摩訶不思議な動きも初めてアル」

　私はそのように驚かれるほどに今まで誉めていなかったのだろうか……？
　というか、古菲は自分がやった動きに対して摩訶不思議とは……どこか抜けているような気がする。

「あ、あの、シキさん。私はもう大丈夫ですから……お、降ろしてください」
「ん？　あぁ、分かった」

　動きすぎて体が熱いのか、頬を赤く染めているマナにそういいながら、私はゆっくりとマナを降ろす。
　しかし一番動いていたのはマナだ。今までの緊張の糸が切れたのか、地に降ろしたマナは足元から崩れるように倒れそうになる。
　間一髪で腕を掴んで支えたから良かったものの、反応できなかったら顔面から強打していただろうな。
　危ない危ない。せっかくの可愛い顔が台無しになってしまうところだった。

「やっぱ駄目じゃねェか。部屋まで運んでやるからそれまで我慢しろ」

「す、すみません……」

一度降ろしたマナを再び抱えて、ダイオラマ球を出る。

そしてマナを部屋に連れていったあと、今日の修業を終わりにして解散するのだった。

第六十四撃『麻帆良祭と自律人形。なるほど……面倒だ』（前書き）

今回は短い上にクオリティが低いです……。
では、どうぞッ！！

第六十四撃『麻帆良祭と自律人形。なるほど……面倒だ』

古菲の修業も基礎の段階から応用の段階に入り、割りと落ち着いてきた今日この頃。
旅団の仕事も中々に充実してきており、戦いなんてものを忘れられる日々を送っていた。
最近では『憑格』の出現もめっきり減り――正確には夜光が倒してるだけだが……――私は平和なときを過ごすことが出来ている。
そんな平和な日常の中、旅団にある訪問者が訪れていた。
時間的には学生は授業を行っている時間帯で、普通ならば誰も来ないはずのこの時間帯にだ。
特徴的なのは無駄に長い髭と、同じように無駄に長い後頭部を持つ学園長だった。

「ふぉっふぉっふぉっ。『帝国の影』殿が喫茶店とは、奇妙な光景じゃのう」
「よく言われるよ。私を知っている者なら皆が口を揃えて、な」

実際、エヴァさんには喫茶店の店長をやるなどと言ったときはかなり笑われたものだ。
まあ、あのときはエヴァさんの制服姿が似合いすぎていたから私が似合わないのかとも思ったが、そうではないようだ。
だがやりたいことをやっているのだから、そのことが嫌なわけではない。

「それで、用件はなんだ。わざわざ麻帆良の最高権力者が出向いてくるほどのことか？」
「うむ。別に大したことではないのだがの。ただ、お主に頼みたい

ことがあって来たのじゃ」
「頼みたいこと？　私に頼むということは、何か厄介事か？」
「だから大したことではないんじゃよ、本当に」

大したことがないというのに、わざわざ出向いてくる必要はないのではないかと思うのだが……。
私を学園長室に呼べば老体を引きずって出てくる必要もなかったろうに。
老体と言ったが、実際はかなりの猛者で正直老体などと言っても麻帆良内で学園長に勝てるのは、おそらく私やイヴ、エヴァさんと言ったあたりだろう。
さすがにマナやアスナ、古菲達では学園長に勝つことは出来まい。

「本当はお主を呼びたかったのじゃが、以前にマナ君に銃を突きつけられてのぅ……」
「……すみません、学園長。今度私がしっかりと話しておきます」
「別に構わんよ。元気なのが一番じゃからな」

そういって笑ってくれる学園長だが、失礼極まりない行動をマナがしてしまったのもまた事実。
というか、何故にマナは私が麻帆良の女子中等部の中に入らせることを、あそこまで頑なに拒むのだろうか？
別に取って食おうなどと考えているわけでもないのだから、入るくらい構わないだろうに。
麻帆良学園女子中等部にも男性職員はいるのだからな。タカミチとか。

「そう言えば最近は古菲君の修業も見ているそうじゃな」
「えぇ、まあ。強くなりたいと思うのは別に悪いことではないですから」

私は学園長の席の前のテーブルにコーヒーを置きながら、そういう。
ちなみに学園長にはマナが無礼なことをしてしまったために、これはサービスとして提供している。
せめてこれくらいはした方が良いだろうからな。

「あまり魔法には関わらせたくはないのじゃが、シキ殿がいるならば安心じゃ」
「大丈夫ですよ。私がいなくても、そのうち魔法世界でも十分に通用するくらいにしますから」
「……それはそれでやりすぎではないかの？」

そんなことはないと思うのだが、もしかしてこれは私だけなのだろうか？
別にチート仕様になろうがならなかろうが、本人の承諾がとれているならば関係あるまい。
私はチート改造を無理矢理に行っているわけではない。

「マナ君は魔眼、古菲君は虚刀流、アスナちゃんは咸卦法……ちとやりすぎではないかの？」
「私からしたらまだ足りないくらいだと思いますがね」
「お主と一般人を一緒にしてはいけないと思うのは儂だけではないはず」

何故か呆れたような声を出しながら項垂れる学園長。
はて、私は何か学園長を項垂れさせるようなことをやったのだろうか？
確かに私と一般人を一緒にしてはいけないと思うが、学園長も十分に一般人と一緒にしてはいけない。……主に種族的に。

「それで、ここに来た理由をそろそろ話してもらえないか？」
「うむ、そうじゃな」

そういって学園長は静かに目を閉じる。
すると先程までは穏やかな空気だったのだが、不意に張りつめた糸のような雰囲気が私達の間に流れる。
それを見た私はほぼ反射的に気を引き締めていた。
この学園長がこのような雰囲気になるくらいなのだから、きっと何か重大な用件なのかもしれん。
そして学園長は閉じていた目をスッと開き、言葉を発する。

「うちの孫を嫁になどどうじゃろうか」
「……は？」
「シキ殿になら孫娘（このか）を預けられるしのぅ」

学園長の言葉に思わず頭を押さえてしまった私はおかしくはないはずだ。
なぜあれだけの雰囲気を醸し出しながらも、出てきた言葉がそのようなことなのだ……？
しかも私にそのような話を持ちかけてくること自体間違っている。

「悪いが私は既婚者だ。というか、知らないわけではあるまい？」
「そうじゃったか。して、相手は誰じゃ？」
「ヘラス帝国第三皇女……こういえば分かるだろう？」
「ふぉっ！？　まさか本当かの？　うむ、それは知らんかったわい」

第三皇女といえど皇女であることには変わりはないのだから、結婚したことが知られていなければおかしいと思うのだがな。
しかも相手が一時だが『死の恐怖』とまで呼ばれた私なのだから、

情報が広まるのは早いはず……。
まあ、知らなかったろうが知っていたろうが大した差はない。このかと結婚する気など毛頭ないし、このかの気持ちも考えねばならんしな。
それに、このような話をするためだけに来たというならばさっさと立ち去ってもらいたい。
私とてゆっくりしたいと思うときはある。

「話はそれだけか？　ならば早く戻ってはどうかね？　貴方は学園長という立場なのだ」
「ふぉっふぉっふぉっ。本題はここからじゃよ。なに、先程から言っているように大したことではない」
「……」

さっきのは冗談を言っているような目には見えなかったのだがな……。
まあ、とにかく。学園長が直々に出向いてきたのだから話ぐらいは聞いてやるとしよう。
依頼であるならば受けない手はない。

「シキ殿ももうじき麻帆良祭があるのは知っているじゃろ？」
「……確か、学園全体で行う祭りで、外部の人間も招き入れる、というのではなかったか？」

マナやアスナ、ついでに古菲の話だと麻帆良祭とは全学園合同の学園祭らしい。
中、高の中間テストが終わってからが本格的な準備期間。
大学の人達は部費のほとんどを学園祭で稼ぐサークルばかり故、かなり気合いが入っているようだ　開催期間中は様々な出店やイベントが目白押しの大騒ぎ……ということだ。

ちなみに学園祭のイベントの一つに格闘大会――名前はなんだったか？――があるらしい。

「そうじゃ。毎年なんじゃが、歯止めが効かなくなってのぅ。そこで祭りのクライマックスで『学園全体鬼ごっこ』をやろうと思っておるのじゃ」

「それはまた大変なことで……。それで、用件とはなんだ？　まあ、大体は察したがな」

「シキ殿には『学園全体鬼ごっこ』の鬼役をやってもらいたいのじゃ」

やはり、か……。この話を持ち掛けた時点でまさかとは思ったが、まさにその通りだったな。

学園全体での鬼ごっことなれば怪我人も出る可能性があるから、魔法先生や魔法生徒を鬼にするわけにはいかない。

おそらくは参加させて内部からの怪我人を出るのを防ぐのだろう。

となると、麻帆良祭のクライマックスでさらに盛り上げられるほどの鬼といえば、この学園では私くらいのものだろう。

麻帆良祭を盛り上げつつも怪我人防止に勤しむ……ふむ、やはり学園長は尊敬に値する。

「さすがにシキ殿一人では大変じゃろうから、友人方も連れてきてもらいたいのじゃが……どうかの？」

「まあ、捕まえるのは私一人でも十分だが、それではつまらないだろうからな。分かりました。二、三人連れてきます」

「ふむ。……ところで、その者達は美人かの？」

（……ンなこと訊いてどうすんだよ）

学園長の言葉にため息をつきながら、そう考える。

連れてくるって言ってもシェリルやユーリはアリアドネーのこと

があって忙しいだろうから、呼ぶのはティアとエルかな。
あとは私とイヴを入れて鬼が四人……うむ、少ないな。
まあ、なんとかなるだろう。

「話は分かりました。麻帆良祭までは頭数を揃えておきます」
「うむ。お願いしますぞ、『帝国の影』殿」
「了解した。大船に乗った気で居ると良い」

学園長は私にそう告げると、学園に戻っていってしまった。
さて、私はしばらくゆっくりとさせてもらうとしよう。

◇

「買い出しはこれで全部……だな」
「それほどの量ならば一人でも十分だろうに」
「たまには二人で来るのもいいだろ」
「別に構わぬが……」

私は旅団で使う材料を買い出しに行き、買い物袋を片手に歩きながらイヴと話す。
最近はイヴを外出させていなかったから、一緒に来ただけだったのだが何やらお疲れの様子。
『憑格』の探索はミカエルだけに任せていると思ったのだが、どうやらそういうわけでもないようだな。
それにしても……本当に疲れているようだな。いつもは鋭さを感じさせる雰囲気があるのだが、今はそれを感じられない。いったい何があったのやら。

「疲れてるなら少し休むか？　連れてきたのは俺なんだから何か奢るぞ？」

「ふむ……では、喉が乾いた。飲み物を頼む……」
「はいよ。ちょっと待っててくれ」

私はイヴにそう言ってベンチに座らせたあと、飲み物を買うために自販機に向かう。
ってイヴはなに飲むんだ？　まあ、いいや。無難にお茶でも選んでおけば大丈夫だろう。
自販機に金を入れながら、そんなことを考える。
ふと視線を傾けてみれば、橋に寄り掛かっている少女の姿が見えた。

（なにやってんだ？　って、はあっ！？）

するとその少女は何を見つけたのかは分からないが、いきなり橋から飛び降りやがった。
さすがにこの平和ボケしている日常でそのようなことがあれば、いくら私とて驚くということはある。
自販機からお茶を取り出すことも忘れて、私は急いで走り出す。
橋から私も身を投げ出し、少女の体を抱き抱える。

（うおっ！？　お、重い……っ！？）

女性に対して失礼ではあるが、抱き抱えた瞬間の感想がそれだった。
見かけはとてもスレンダーで重そうには見えないのだが、抱き抱えてみると少なくとも見かけ以上の重さがある。
思わず面食らってしまった私は少女を離してしまいそうになるが、なんとかそれは回避する。
そしてそのまま虚空瞬動を使って戻ろうとしたのだが、少女が何かに手を伸ばしていたのが見えた。

（猫……？　そういうことかよ）

ようするにこの子は猫を助けるためにわざわざ橋から川に飛び降りた……ということか。

助けるのは一向に構わないが、後先考えて行動してもらいたいのだがな。

まあ、せっかくここまで来たのだからついでに猫も助けておくとしよう。

少女を抱き抱えている逆の手で猫を掴み、そのまま水面を蹴って地に降り立つ。

「大丈夫か？　どこか怪我してないか？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

「どういたしまして。怪我がなくて何よりだ」

礼儀よく頭を下げてきた少女を改めて見てみたのだが、この子……人間じゃない。

だって頭の両側に変なアンテナついてるし。普通にロボットだよ。

というか、今の世の中でこのように人間らしく動くロボットなどいただろうか？　声も抑揚がついていて人間らしいしな。

ついでにいえば麻帆良学園に通ってるみたいだ。制服着てるし。

「俺は黒神織。銀竜の旅団の店長だ。よろしくな」

「絡繰茶々丸（からくりちゃちゃまる）です。よろしくお願いします、シキさん」

「あぁ、よろしく。茶々丸さん。じゃあ、気を付けてな」

私は茶々丸さんにそういうと、ベンチに座っているイヴのところへと向かう。

やれやれ。せっかくお茶を買ったのに遅くなっちまったな。

文句を言われるのを覚悟して私はイヴのところに戻った。

◇

「銃神のデータは集まったカ、茶々丸」
「大した情報はありませんが、ある程度は集めました」

とある研究室にて超鈴音（チャオシンシェン）と茶々丸が向かい合っていた。
茶々丸は超鈴音の知識とハカセ――葉加瀬総美――の技術、そして科学と魔法の融合により生まれた機械人形だ。
戦闘能力はさながら、様々な面にて優秀な力を誇る機械だ。
もちろん情報収集力にかけても右に出るものはない。

「これが黒神織……シキ・K（クロカミ）・アスタロトの戦闘データです」

そういって茶々丸が提示したデータはシキ・K（クロカミ）・アスタロトが今までに行ってきた戦闘の記録だ。
大戦期の戦闘データはもちろんのこと、かなり細かいところまで詳細が調べ上げられている。
――――シキ・K（クロカミ）・アスタロト。
大戦期において帝国側に雇われた、傭兵。主な武装は銃器であるものの、遠距離型というわけでもなく遠・近共に魔法世界屈指の実力だといえる。
大戦期のみならず、前にも後にも『紅き翼（アラルブラ）』を圧倒し、勝利を納めたのはこの人物だけといえる。
数年前までは『死の恐怖』の二つ名で知られていたが、現在は『帝国の影』と呼ばれ、帝国の英雄扱いをされている。
尚、これ以降の情報は機密事項となっているため閲覧は不可。

「百八文字のパスワード……。ふむ、これには骨が折れそうネ」

超鈴音はパソコンを開きながらそのようなことを呟く。
百八文字のパスワードで封鎖されていようとも、超鈴音にとってはその程度のことでしかない。
そして、すぐにパスワードが解けた無機質な音が部屋に響き渡る。
パスワードを開き、情報に目を通した超鈴音は口元をわずかに歪める。

「ふむ、やはり貴方が起源だったようだ」

超鈴音がそう呟くと、体からわずかに黄色の紋様か浮かび上がる。
あと一年。あと一年で彼女の計画が始まる。

第六十五撃『麻帆良祭当日。祭りって……疲れるかも』

麻帆良祭当日。
普段はあらゆる学業機関が揃ったマンモス学園と知られるここ、麻帆良学園都市だが、今日は一味も二味も違う。
周りを見渡せば奇抜な格好をしている輩はおるし、祭りと言わんばかりの装飾が成されている。
さらにいえば既にどこのサークルも活動を開始しており、外部からの来訪者に勧誘活動を開始している。
そんな中、私はといえば――――。

「シキさん。くれぐれも教室（２―Ａ）には来ないでください」

銀竜の旅団にてマナにそんなことを言われていた。
何故だろう。私が２―Ａに行くようなイベントが発生する度にマナに釘を刺されているような気がするのだが……。
どうしてマナはそこまで私が教室に行くことを拒むのだろうか？
弁当を届けに行ったときも異常に早く帰ってくれと急かされていたしな。

「なんでそこまで俺が教室に行くの嫌がるんだ？　別に暴れるわけじゃねェんだからいいじゃねェか」
「駄目です。シキさんは無意識にフラグを立てますから。ロリコンになりたくなかったら来ないでください」
「あの……中学生にロリコンもくそもねェんじゃね？」
「シキさんは何歳ですか？　少なくとも中学生の三倍は生きてますよね？」

ふむ……よくよく考えてみれば確かにそうかもしれん。
こっちに来てから四十年ほど経っているから、前世と合わせれば五十七歳……とはいえ中学生はロリコンの部類に入るのだろうか？

「つーか無意識にフラグ立てるって……エロゲーじゃあるまいし」
「そのエロゲーの主人公並にフラグを立てる貴方が何を戯れ言を……」

なんでマナにそんな悲しい目で見られねばならぬのだろうか……？
ずっとマナに言われてきたが私はそこまでフラグを立ててきたのだろうか？
少なくとも私はテオ√しか攻略はしていないはずなのに、ここまで言われる羽目になろうとはな。

「そう言われても2―Aの奴らに来てくれって頼まれてるし」
「……なに？　ちなみに誰にですか？」
「あ？　雪広に綾瀬、あとはこのかくらいかな」
「くっ、既にそこまで毒牙にかかったら者が……。だが、私の弾丸に不可能はない。生きているなら、フラグだって殺してみせる」

直死の魔眼を開眼しながらマナはそんなことを言うのだが、危ないから止めてくれ。
フラグとやらもマナに撃たれたら完膚なきまでに消滅してしまうが、まあ、それで満足するというなら多少の犠牲もやむなしか。
しかも毒牙にかかったわけではないだろうに。
このかと雪広はアスナ繋がりで出会っただけだし、綾瀬は依頼を通じて出会っただけなのだからな。
言ってはいなかったが行くのは別に2―Aだけではない。高等部や中等部の他のクラスからも来てほしいと頼まれている。

「わーったよ。行くのは変えねェが、長居はしねェからそれで勘弁してくれ」
「……分かりました。それで手を打ちます」

しぶしぶといった感じに了承してくれたマナではあったが、2―Aに行くのにここまで疲れるとは思わなかった。
2―Aの出し物は確か茶店……だったか？　何をするか話してくれないから分からないんだよな。
まあ、何にしろ許可は得たのだから行けば分かるだろう。
それに麻帆良祭は銀竜の旅団でも稼ぎ時だからな。どちらにしろ長居はする気はない。
ただでさえ三日目は鬼ごっこの鬼役で時間が削られるのだからな。

「じゃあ行ってきます」
「あぁ。行ってらっしゃい」

マナを見送った私はとりあえず息を吐く。
朝からどうしてここまで疲れないといけないのだろう……などと思っていても始まらない。
旅団の開店まではまだ時間があるし、さっさと助っ人達を迎えに行くとしよう。
旅団の手伝いもしてもらうからな。男というのは意外と単純だからな。美少女という部類の前には勝てないのさ。

（……二次元の中だけな）

おっと、メタな発言ばかりをしていると偉い人に怒られてしまいそうだな。
下らないことを考えるのはここまでにして、迎えに行くとしよう。
美少女助っ人達を。

◇

「ふーん……。前はよく見てなかったけど、よく見ると中々いい場所だな」
「……うん。あと、カッコイイ」
「相変わらずだな、お前も……」

あれから一時間と少し。私は美少女助っ人達――ティアとエル――を連れて銀竜の旅団の中にいる。
以前に私を尾行したときにここも立ち寄ったのか知っている素振りを見せたが、どうやらここまで細かくは見ていなかったらしいな。
そしてエルは私の執事服を見て何故かうっとりし、それを見たティアが呆れている。
ちなみにティアの服装もエルの服装も魔法世界のものだが、今の麻帆良祭の中ではそこまで逸脱しているわけではない。
注目を浴びていることには変わりはないがな。

「で、オレ達の仕事は麻帆良祭の三日目の最後なんだろ？　それまでなにやるんだ？」
「もちろん旅団の手伝いをしてもらうさ。ただでさえ忙しい中、麻帆良祭の最中になったら手が足りないからな」
「……エルは、構わない」
「エルがいいなら、オレも構わねえよ」

ティアもエルも快く旅団の手伝いをすることを了承してくれたか。
正直ティアを説得するのは面倒だと思っていたのだが、簡単に済んで何よりだ。
……まあ、まだあいつのことを話してはいないからな。一度顔はあわせているだろうが、やはり壁はとれぬだろうな。

「む？　貴様はウリエルの適応者か？　なぜ貴様がここにいる？」
「テメェには関係ねえだろ、神格王」
「ウリエルごときが生意気な口を利くな。――――潰すぞ」
「やってみろよ。生きてるなら、テメェだって――――殺すぞ」

出会い頭にある程度取り戻した神格の力を解放するイヴと、直死の魔眼を解放してナイフを構えるティア。
あぁ……やはりこの二人、というかティアはイヴを認められないみたいだな。
ティアはイヴの加護を受ける代わりに親友を騙し、世界を破滅に向かわせるための傀儡としてイヴに動かされていたのだから、認められるはずもないか。
そのせいでと言うわけでもないが、ティアには一度殺されているしな。

「喧嘩するんじゃねェよ。今さら睨み合ったって仕方ねェだろうが」
「「……」」

私の言葉を受けて神格の力と魔眼の力を閉じるイヴとティアだったが、睨み合うのは変わらない。
はぁ……もしかしたらこの二人を合わせたのは間違いだったのかもしれん……。
今さら後悔しても仕方ないが、今後からはこの二人を絶対に会わせないようにしよう。うん、そうしよう。
溜め息をつきながら考えていると、ふと執事服の裾が引っ張られたような感覚を感じた。
視線を傾けてみればそこには――――。

「……似合う？」

メイド服を着用したエルの姿があった。
……って、いつの間にメイド服を着用したんだ？　確かに着せる気ではあったが、まさか自分から着るとは……。
しかもかなり似合っている。以前にイヴが着用していたミニスカメイド服をエルが着用している。
ちなみに今のイヴのメイド服は、スカートに縦のスリットをいれている太ももチラリのメイド服だ。

「おう似合うぞ。じゃあエルとイヴはそのままメイド服で、ティアは着物な」
「着物？　それって鏡んところで着たやつだよな？」

鏡、というのは自分を映すアレではなく、一条鏡という平行世界の住人のことだ。体内に水星生物を飼うってのはどうかと思うがな……。
そこでティアは一条の嫁達に着せ替え人形のようにされて、色々な服を着せられていたな……。
噂に聞いたのだが、最近また新しい世界に行ったらしい。相変わらず奇想天外な人生を歩んでいるな、あいつも……っと、話が逸れたな。
とにかく、ティアには着物を着て接客をしてもらおう。

「つーことで着物に着替えてきてくれ」
「着替えるのは別に構わないけどさ、オレ、着物の着方なんて知らないぜ？」
「安心しろ。奥の部屋にちゃんと着方を教えてくれる奴が居るから」
「そうなのか？　まあ、シキさんには色々世話になってるしな。それくらい構わねえよ」

ティアはそういうと旅団の奥の部屋に入っていった。……ちらっと、というか思いっきりイヴを睨み付けた後に。

止めてくれ。ただのにらみ合いに本気の殺気をぶつけ合うのは。エルがビビっているではないか。

エルはイヴやティアのようにチートではないのだから、チートの本気の殺気のぶつかり合いに耐えきれるはずがなかろう。

しかもアレか、ティアは本気の殺気をぶつけると直死の魔眼が勝手に発動するのか？

怒りで魔眼が発動するなど制御（コントロール）が出来ていない証ではないか。全く……しっかりしてほしいものだ。

「雑種。まさかとは思うがウリエルにも手伝わせる気か？」

「もちろんそのつもりさ。何か問題でもあるか？」

「大有りだ。前々から思っていたことではあるが、ウリエルは気に食わん。それにウリエルの助けなど必要ない」

「まあ、お前がティアを嫌うのは勝手だが、三日間は我慢してくれ」

私がイヴにそういうと、イヴは苦虫を噛み潰したような表情になった挙げ句そっぽを向きやがった。

……イヴとティアはここまで仲が悪かったのか？

確かに神格事件のいざこざはとれたとは思っていないが、ミカエルですらも打ち解けているのだから大丈夫だと思っていたのだが……。

基本的に嫌いな奴が居なさそうなティアがここまで嫌がるのだから、いざこざを解消するのは大変そうだな。

「……喧嘩はダメ」

「そうだよな。でもこればっかりは俺じゃあどうしようもねェ」

「……仕方ない」

「そう、仕方ないんだよ。これはあいつらの問題だからな」

これぱかりは仕方がない。私が仲を取り持ったとしても本人達の意思で打ち解け合わねば意味がない。
それまでは喧嘩が増えてしまうのは致し方ないことだろう。ただ……殺し合いをしない程度には止めねばならんがな。

「着終わったぜ。これで良いのか？」
「あぁ。つーか相変わらず両儀式だな」
「……似合ってる。そっちの方がいい」
「だから両儀式って誰だよ……。エルはサンキューな」

私の言葉に呆れ顔で返答してくる両儀式……じゃなくてティア。
着物を着ているとティアは本当に両儀式と見分けが全くつかないな。似すぎてて笑えてくるくらいだ。
だがまだ足りない。着物に直死の魔眼、ナイフが揃ってはいるものの両儀式の特徴的なアレがない

「あとはこれを羽織ってくれ」

私はそう言いながら『創造再生』で赤色の革のジャケットを創る。
やはり両儀式といえば赤の革ジャンだな。これが無ければ両儀式でないと言っても過言ではない。……私にとっては。

「接客するのに革ジャンってどうかと思うぜ？」
「バカ野郎ッ！！　そこまでやって革ジャンを着ないなんてどうかしてるぞッ！！」
「そ、そこまで力一杯に語ることか？」

語ることです。両儀式を知っている人にとっては革ジャンを羽織るか羽織らないかでかなり違ってくる。……私だけかもしれんが。

とにかくここまで両儀式に似ているのだから革ジャンを羽織ってもらわねば私の気が済まん。

……という念を込めた眼差しでティアを見つめていると、ティアは渋々といった感じに革ジャンを羽織る。

そんなティアに私は精一杯の笑みを浮かべながらサムズアップをする。

さすが平行世界の両儀式。似合いすぎて笑えるぜ。

「じゃああとは語尾に『にゃん』をつけてくれないか？」

「なっ！？　な、なんでそんな語尾つけないといけねえんだ……に、にゃん」

「ごふぅっ！？　や、やるな……だが俺を倒しても第二、第三の刺客が……」

「アンタはどこの魔王だ……にゃん」

「たわらばっ！？」

ま、まさかティアの語尾に『にゃん』がここまでの破壊力をもたらすとは私とて予想外だった……。

最初こそ恥ずかしげにやっていたものの、二回目以降も若干恥じらいを持ちながらの語尾に『にゃん』も破壊力が凄まじい。

まるで某型月の水星生物に力一杯殴られたほどの衝撃だ。

「じゃあシキさんは語尾に『ゲス』をつけろにゃん」

「ぐっ……。意外にすぐに順応しやがるゲスね……」

「あー……どっかの小悪人みたいになっちまったにゃん。じゃあエルは『ザマス』だにゃん」

「ノリノリでゲスね。俺も大分慣れたでゲスが」

「シキさんには言われたくないにゃん。じゃあエルも」

「……ザマス」

「「……」」

エルの『ザマス』発言に思わず無言になってしまう私とティア。
うむ、予想以上にエルの『ザマス』発言が似合わなくて黙り込んでしまった……。
私の『ゲス』もティアの『にゃん』も大丈夫ではあったが、エルの『ザマス』はダメか……。

「やめようぜ、シキさん」
「そうだな……。ゴメン、ティア。俺が悪かった」
「いや、悪のりしたオレも悪い」

明後日の方角を見ながら私達はそんな会話をする。
後ろではエルが不思議そうに首を傾げているのだが、私にはそのように首を傾げている理由が分からないよ……。
まあ、悪ふざけはここまでにして早速旅団の仕事に取り掛かるとしよう。

◇

あれから数時間後。予想通り旅団の客入りは普段の数倍に及び、助っ人が居なかったら正直どうなっていたか分からなかった。
普段より客入りが多い理由の一部に『麻帆良祭限定少女二人組』が居るからというのもある。

「旅団の方、任せたぞ？」
「……任せて。ふんす」
「き、気合い十分って感じだな……。じゃあ行ってくるよ」

気合いが入っているエルに苦笑いをしながら、私は視線をティアとイヴの方に傾ける。

相変わらず殺気丸出しで、客には気付かれないようにやっているようだが、目が合う度に魔眼を解放したり神格の力をぶつけたりしている。

今回はティアもイヴも宛にはならんな。エルに任せておくしかない。……無口なのが心配なのだがな。

心配していても始まりはしないし、さっさと教室巡りを終わらせれば良いだけの話だ。そうすれば心配の種は尽きる。

（つーか俺が居なかったらあいつらが殺り合い始めたら止めれねェからな。人選ミスったな……）

麻帆良の中を歩きながらこっそりと溜め息をつく。

他に助っ人がいなかったとはいえ敵対していたウリエル（ティア）と神格王（イヴ）を会わせるのはまずかったか。

考えてもう一度溜め息。もしかすれば今日だけで二桁の溜め息をついたかもしれんな。

……気になる。非常に気になる。教室から帰ってきたらそこには死体の山があった、なんていう結末は想像したくない。

そう考えるだけでゆっくりとしていた足取りが無意識に早くなっていく。

そしてようやく辿り着いた2―Aの教室。

（普通の喫茶店だと思ったんだが……ちょっと違うな。強いて言うならこの黒板消しトラップとか）

教室のドアに挟まれた黒板消しを見ながら、再び溜め息。

麻帆良祭とはいえ、喫茶店に入るのに黒板消しトラップを回避しなければならないなんて馬鹿げている気がする……。

とりあえず溜め息をついていても仕方がないので、ドアを一気に開く。

それと同時に落ちてくる黒板消しを後ろに半歩下がることにより回避。

……したは良かったのだが、そこに向かっておもちゃの矢の襲来。しゃがみこんで回避するが、そこにさらに水入りバケツ襲来。

（何なんだ、この教室は……）

もう溜め息も出てこない。なぜ喫茶店に来たというのにこのように疲れねばならんのだ……。

今日ほどチートな肉体に感謝したことはない。

落ちてくるバケツの速度ははっきり言って止まっているのと同じくらいの速さにしか見えない。

都合よくそこに落ちていたモップを足で蹴りあげ、そのまま握る。

「喰らいやがれ――――――――――――――――ッッッ！！！！！！！」

そして今までのストレスを発散させるようにバケツを殴り飛ばす。

水の入ったバケツは水を一滴も漏らすことなく、教室の窓から飛んでいきすぐに見えなくなる。

そんな私の一連の動きを見ていた2―Aのメンバーは口を開けてポカンとしている。

……正直やり過ぎたかもしれん。反省はしている、後悔はしていない。

などと考えていると私の元に三つの人影が近づいてきた。

「さすが老師アル！！　あの程度じゃものともしないところに痺れるネ！！」

「シキさん。少しは人目を気にしてください」

「いらっしゃい、シキ。こっちよ」

三人というのはもちろんのことマナとアスナ、古菲のことだ。
古菲とアスナは大して気にした様子はなかったのだが、マナだけはかなり気にしているようだった。
……もしやあれを受けろとでもいうつもりだったのか？　あの程度であれば無意識に避けてしまうレベルなのだがな……。
ポカンとしている2―Aメンバーをよそに、アスナは私を席に座らせる。

「最初に訊きてェんだけど、ここって何喫茶なんだ？」
「……き、救護喫茶」

言いづらそうにしていたアスナは口ごもりながら答えてくる。
ようするにこの喫茶は教室に美人が揃っていることをいいことに、最初にトラップに引っ掻けて救護して金を巻き上げようというなんども極悪な喫茶のようだ。
まあ、麻帆良の異端審問会共（バカ）ならこれぐらいの方が嬉しいのかもしれん。
一般客からしたら怒り以外の何者でもないだろうけどな。
というか、よくこんなものを了承したものだ。

「シキさん。いらっしゃいませ、そしてさようなら」
「早ェよ……。どんだけ俺を帰らせてェんだよ」
「どのくらいかと訊かれれば殺したいくらいです」
「洒落にならんから止めてくれ」

チラリと見せる光るナイフ……マジで洒落にならん。
当たらなければどうということはないが、完全に制御（コントロール）が可能尚且つ応用が可能な直死の魔眼相手に死の点を隠すのは意外と面倒だったりする。

あくまでも難しいのではなく面倒だというだけだ。
直死の魔眼が相手とはいえ今なら負ける気はさらさらない。

「老師老師！！　これ見てほしいアルよ」
「あ？　『ウルティマホラ』参加申し込み書？　……俺に出ろってか？」
「嫌アルか？　修業の成果を見てもらいたかったアル」

なるほど……。この『ウルティマホラ』なるものに出れば古菲の虚刀流の修業の成果も見れるし、麻帆良の輩の実力も見れて一石二鳥……ということか。
おそらくは今の古菲に勝てるのは学生ではマナやアスナ、大人ではタカミチと銀竜の旅団のメンバーと学園長、あとはあいつくらいか……。
結果的に私と古菲がぶつかった時点で事実上の決勝だが問題はあるまい。

「いいぜ。修業の成果、見せてもらおうじゃねェか」
「いいネ。ただしその頃には、老師は八つ裂きになっているかもしれないアル」

言うようになったではないか。
これで三日目まで暇だった麻帆良祭の一日目が暇ではなくなったな。
さて。古菲の修業の成果、これで見せてもらうとしよう。

第六十五撃『麻帆良祭当日。祭りって……疲れるかも』（後書き）

麻帆良際編を書いていたら、七十一撃にまでなった……。
余りにも進みが遅いから少し省こうかなぁ……。
本当だったら最後にシキＶＳ夜光（トライエッジ）やろうと思ったのにあとに持ち越し……。
やるとしてもヘルマンさんのところかな？
百撃に入るまでできるかなｗｗ
では、感想待ってますッ！！

第六十六撃『ウルティマホラ開催。本選に進むのは……言わずとも分かるだろう』

救護喫茶なるものに足を運んでから早くも数時間が経過した。
最初は気が進まなかったが救護喫茶を去った後に誘われていたクラスに趣き、色々と出し物を見てきた。
正直言えばどのクラスも普通とは言い難いもので、簡単にするとおかしな店揃いだった。
まあ、本人達が良いならば良いのだろう。私が口を出すようなことではないからな。
そもそもこの学園には結界が張ってあるために、多少の摩訶不思議なことを普通と思い込むようになっている。
一部では結界の効力が効きにくい者が居るようではあるがな。
仕方がないといえば仕方がないからな。なんせ、この学園には明かせない秘密が多すぎる。
魔法などという小さな異常が小さく思えるほどにな。

（魔法なんかバレたって大したことねェけどな……。問題は別にある）

さすがにこっちはバレるわけにはいかない。この対処は仕方がないのだ。
……今はこのような話はどうでもいい。今は目の前の出来事に意識を向けるべきだろう。
今は夜。古菲に誘われた『ウルティマホラ』なる格闘大会のために開催場所に足を運んでいる。
しかし問題はそこではない。
問題なのは目の前で殺気を撒き散らしている二人にある。

「「……」」
（なんでこいつらがここに居やがるんだ……？）
殺気を撒き散らしながら睨み合っているのは、何を隠そう銀竜の旅団の助っ人のティアと正式店員のイヴだ。
会場に来てみて異常な雰囲気だと思ってその中心に来てみれば、この二人が睨み合っている現場に辿り着いた。
別に喧嘩するのも殺気を撒き散らすのも構わんが、周りの迷惑を考えて行動をとってもらいたい。
ティアもイヴのどちらも周りの迷惑を考えられるほどの年齢だ。分からないなら人生をやり直してもらいたいくらいだ。
というか、本当に何故この二人がこの場所に来ているのやら。まさかウルティマホラに参加する気ではあるまいな。
色々と疑問はあるが、まずはこの二人を止めることが先決かもしれん。
「お前ら、少しは周りの迷惑を考えろ」
「黙れ。貴様の口を挟むようなことではない。引っ込んでいろ、雑種」
「そうだな。悪いけどこればっかりはシキさんの出る幕はねえよ」
私の言葉に対して二人は振り向きもせずにそう言うと、再び殺気のぶつけ合いを始める。
最早チート同士の本気の殺気のぶつかり合いの奔流に耐えきれず、体調を崩す者までもが現れている。
早くこの二人の殺気のぶつけ合いを止めなければウルティマホラが中止になる以前に、ここにいる者全てに悪影響を与えかねん。
少しばかり荒業になってしまうがこの際止む終えん。
私は溜め息を一つつくと、ティアとイヴの首根っこを掴み離れさせる。

「くっ。邪魔をするなと先程から言っているだろうッ！！　目障りなのだッ！！　失せろ雑種ッ！！」
「チッ。うるさいんだよ。オレ達の問題に口を挟むなッ！！」

私の手を強引に振り払った二人は私に本気の殺気をぶつけながら、そのようなことを叫んできた。
あー……。せっかく穏便に済ませようと思っていたのだが、これ
ばかりは私と言えど我慢の限界だ。
もう堪忍袋の尾が切れちまったのでな。

「――――いい加減にしろよ、貴様ら」
「「ッ！？」」
「自分達がどれだけ周りに迷惑をかけてるか……分かっているのだろうな？」
「「……」」

二人は私の問いに答えない。否、答えられないのだ。
二人の本気の殺気を包み込むほどの殺気を二人に向けているからだ。
殺気を向けているとはいえ、この二人のように撒き散らしているわけではない。あくまでも二人だけが分かるようにしている。
そのためかティアもイヴも顔が青ざめているのが手にとるように分かる。

「喧嘩するのも殺気をぶつけるのも悪いことは言わん。だがな、周りの状況を見据えろ。だから貴様らは――――――――私に勝てんのだ」
「「……」」

少し厳しい言葉だったかもしれん。だが、私は事実を述べただけだ。

周りの迷惑――身の回りで起きている事象の状況――程度が分からないようならば、私に力がなかったとしても勝てるはずがない。

私の言葉に対して返す言葉がないのか、二人は拳を握り締めている。

きっと私は周りから甘い性格と見られているだろうが、そこまで甘いわけではない。

「少しは頭を冷やせ」

私はただ一言そう告げ、ウルティマホラの参加申し込みだけを済ませてその場をあとにする。

あの場に私がいたのでは頭を冷やそうにも冷やせないだろうからな。

それに、私がいなくなったから再び殺気のぶつけ合いを始めるようならば、本格的に二人には灸を据えてやらねばならん。

見放すことは簡単にできるが、私は私に関わる全てに関わり抜くと決めた。

そう簡単には……いや、絶対に二人を、全てを見放すことは未来永劫ないだろう。

ようやく出来た私の居場所だ。そう易々と手放すわけがない。

ふと周りを見渡すといつの間にか人気のない場所まで歩いてきていた。

どうやら思いの外考え事に囚われていたらしい。

「女性には優しいと思っていたのですが、貴方も怒るときがあるのですね？」

「当たり前だろ。周りの状況も見れねェんだからよ」

不意に後ろからかけられた声に私は特に驚くこともなく、普通に言葉を交わす。

振り向いてみればそこには『紅き翼（アラルブラ）』の一員である魔法使い――アルビレオ・イマ――が相変わらずのスマイルを浮かべながら立っていた。

ローブを羽織り、いつも通りのスマイルを浮かべているアルではあるが、やはり感じる力は微弱だ。

「まだ治りきってないのか？」

「えぇ。未だに世界樹の下で療養中です。この学園祭の期間の間だけ、こうして外に出られるわけです」

「……そうか」

事の全ては十年近く前に遡らなければならないのだが、今は特に語る必要はあるまい。

とにかくアルは十年近く前に大きな怪我を負い、未だに療養中ということだけを覚えておいてもらえれば構わない。

……というか、いつもいつも人の死角に現れるのだが、狙っているのか？

「それにしても……貴方が女性に殺気を向けるなんて、正直驚きましたよ」

「……お前の中で俺はどんな奴になってるんだ？」

「そうですね……女誑しの王族、といったところです」

「女誑しって……」

別に女性を誑した覚えはないのだがな……。

そもそも男だろうが女だろうが間違ったことを間違ったというのはおかしくはないはずだ。

ましてや先程までの状況ならば一旦頭を冷やさせるという意味で

も、自分より強大な殺気を当てる必要がある。
　少しやり過ぎてしまった気もするが、分からず屋にはあのくらいの方がちょうど良いだろう。

「間違いではないでしょう？　少なくともこちらから見ればそう見えるのですよ」
「そんなもんか？」
「そんなものです」

　別に女誑しをしたつもりはなかったのだが、端から見れば誑しているように見える……。
　何というか、複雑な気分だな。普通に接しているだけなのにそのように周りから見られていたとはな。
　何故女に見られることもある私が女誑しに見られるのか分からんが、もしそうならば歪んだ関係に見られてもおかしくはない。
　……不思議な話だ。女誑しか女顔なのかどっちかにしてもらいたい。

「で、お前は何のために出てきたんだ？」
「特に意味はありませんが、今年は随分と腕利きが多いみたいなので観戦に……といったところですよ」
「まあ、確かに腕利きが多いって言えば多いよな」

　まずは私の弟子である古菲。虚刀流の使い手で、一般人相手なら古菲に勝てる者はいまい。アスナとマナは参加するか分からないために除外しよう。
　他には先程に突き放したティアとイヴ。どうして参加することになったかは不明だが、とりあえずあの二人はチートだ。
　最後は私だ。まず『神格王』の力を取り込み『ラファエル』の力を持っている以上、この世界や魔法世界で負けることは愚か、傷一

つつけることは不可能だ。
確かに今年は腕利きが集まったと言えよう。
「お前は出ないのか……っていう質問は野暮か？」
「ふふふ……。参加するのは別に構いませんが、やはり今年は観戦に回らせてもらいます」
「別に参加してもしなくても俺は構わねェけどな。どうせ俺の勝ちだ」
「……それは否定できませんね」
当たり前だ。簡単に否定されてしまったら困る。
私が培ってきた、というわけではないが力を手に入れた以上は負けるわけにはいかない。
ましてや一度――正確には二度だが――なくしたこの命、他人のために使うというのも悪くはない。
護るためには一度たりとも負けるわけにはいかない。そう決めたんだ。
（そうだ。負けたら全てを失う。今度こそ失うわけにはいかないんだ、絶対に）
今まで私は負けた分だけ色々なものを失ってきた。これからも負ければきっと何かを失ってしまう。
もう二度と……誰かを失うようなことにはなりたくない。もう二度と、あんな気持ちは味わいたくない。
私の背には背負っているものがたくさんある。負ければ、全てを失う。
そう思った私は知らず知らずのうちに拳を握り締めていた。
「随分と気合いが入っているようですが、どうしたのですか？」

「何でもねェよ。さて、と……さくっと予選を終わらせるとするか」

私は相変わらずのスマイルを浮かべるアルにそういいながら、予選が行われるはずの会場に向かって足を進め始める。

正直さっきのことがあったからティアやイヴとは顔を合わせたくはないのだが、まあ、なるようになるだろう。

そんな楽観的な考えを抱きながら、私は会場に足を進めた。

◇

ウルティマホラのルールは至って簡単だった。

まず参加者をAからFまでのブロックに振り分けを行い、振り分けたブロック内で制限時間ありのサバイバルバトルを行う。

ブロック内でチームを組むのも良し、単独で撃破するのも良しだが最終的には最後まで残っていた二人が本選へと進むこととなる。

本選は十二人でのトーナメント形式。最後まで勝ち進み、全て勝ちきった者が優勝となる。

ちなみに、というか当たり前ではあるが武器の使用は禁止となっている。刀剣類、銃器などといった殺傷能力のあるものは禁止だ。

ただ殺傷能力がないと判断したのか、木刀やら木製バットの持ち込みが可となっているのだが……明らかにこれにも殺傷能力があるだろうに。

まあ、学園側が了承したというならば私が口を出すようなことではあるまい。

とりあえず今は、周りの状況を確認すべきかもしれんな。

（さて……どうしたものか……）

私はCブロックに振り分けられたのだが、何故かCブロックの全員に敵視されている。……何故だ？

ちなみに古菲はAブロックに振り分けられ、ティアはBブロック、イヴはEブロックに振り分けられている。
見事にバラバラに分かれたようだが、これはこれで安心している。もしもここでティアとイヴがぶつかったならば収拾が面倒だからな。
……ってそのようなことはどうでもいい。先ずは私に敵意を見せている輩をどうにかするべきだな。
なぜ敵視されているかは分からんが、こんな予選程度で考える必要はないな。

「相手はG級異端者だ！！　あのリア充をぶち殺せぇ――――――――――――――――ッッッ！！！！！」
「「「「「オォォォ―――――――――――――――――――――――ッッッ！！！！！」」」」」

あぁ……何となく理由を理解することが出来た。
私は異端審問会とやらに目をつけられている。このウルティマホラにも異端審問会の輩がいた……というよりもほとんどなのだろう。
これを機に私に復讐をしようという魂胆なのだろうが、考えが甘過ぎる。
ウルティマホラに参加するくらいだから少しは腕に覚えがある者が集まったのだろうが、それでも古菲にすら勝つことは不可能だ。
夢見ることくらいは誰にでもある権利だ。夢だけを見させてやるのも悪くあるまい。

（……手加減だけはしといてやるか）

とりあえず事前に仕込んでいたコインの束を手のひらに乗せ、一斉に襲い掛かってくる人数を数える。
襲いかかってきている人数は……二十三人か。無関心なのが三、四人ほどいるがそいつらは無視しても良いだろう。

そして某超電磁砲（レールガン）の少女のようにコインを指で弾いて頭に被弾させていく。電撃を纏わせることも可能だが、さすがにそこまでは出来ん。

危険云々の前に一般人に使うような技ではない。

「最後に言っておく。俺はかーなーり――――強い！！」

「「「「「「「「知ってるわッッッ！！！！！！」」」」」」」」

（じゃあ喧嘩売ってくんじゃねェよ……。返り討ちに遭うの目に見えてんだろうが……）

異端審問会の輩の反応に私は呆れながらそんなことを思う。

周りを見るとどうやら残りの面子での勝者は決まったらしく、既にCブロックには私ともう一人しか立っていない。

さて、Cブロックの勝者は決まったし残りのブロックの様子でも見させてもらうとするか。

◇

Aブロックの古菲。虚刀流をシキから伝授してもらい、奥義はまだ使いこなせるようにはなっていないものの、他の虚刀流の技は完璧といっていいほどの精度を誇っている。

とは言え一般人相手に虚刀流を使うわけにもいかなかった古菲は、元々の自分のスタイルである中国拳法を使って戦っている。

元々、古菲は中国拳法を達人の域にまで鍛え上げており、一般人の枠内に入っていたとしても彼女に勝てる者はそう多くないだろう。

しかも虚刀流を修業する仮定で自らの身体能力を底上げしているため、中国拳法を使った古菲相手であろうとも勝てる者は一般人にはいない。

現に麻帆良内では本来の強さを知られていない古菲を見掛けで弱いと判断し、襲いかかってきた敵を返り討ちにしている。

（……さすがに老師と比べるのは失礼アルな）

中国拳法で相手をしつつも、つまらないと感じてしまった古菲はそんなことを考えてしまう。

チートな銃神に鍛え上げられた以上、一般人相手に満足できるはずがないだろう。

とにかく、早く終わらせようと言わんばかりに古菲は次々と敵を撃破していく。

仮に古菲を強者として判断したところで、既に遅い。もうAブロックの人間は古菲を合わせて四人しか残っていない。

あとは自分が戦うまでもないと判断した古菲は構えをとき、敵に成り得る相手のブロックを見つめる。

その視線の先にはBブロックとEブロックの二人が映し出されていた。

一方、先程のことを考えていたCブロックにいるティア。

着物を着用し、その上から赤の革ジャンを羽織っているという奇抜な少女なら倒せると踏んだのだろうが、予想通りに返り討ちに遭っている。

本人としては動きに大したキレはないと思っているようだが、本人の思っている通り動きにいつものキレがない。

（くそっ……シキさんは何も思わねえのか……？　あんだけ利用されて、ようやく借りを返せるようになったってのに……）

考えているのは先程のやりとりについてだ。

以前に神格王（イヴ）に利用されて大切な人を裏切り、さらにはその大切な人の兄を殺した。

いくら逆らえなかったとはいえそれは許されざる行為だ。その落

とし前をつけるという意味でも、神格王（イヴ）とは決着をつけなければならない。
その結果が先程の殺気のぶつけ合いだ。仇を目の前にして冷静でいられるわけがない。

（さっきはダメでも、本選に進めば嫌でも殺りあえる……。そこで今度こそ――――――――殺す）

直後、ティアの雰囲気が急に変化した。まるで冷水でもかけられたかのような寒気がBブロックを襲う。
どうやらティアは知らず知らずの内に殺気を放っていたらしい。ついでにいえば眼が蒼色に染まっている辺り、直死の魔眼も発動しているようだ。
明らかに危険な雰囲気を纏っているティアに戦いを挑む者などいるわけがなく、本選に進むことが確定した瞬間だった。
そしてEブロック。ここでも尋常でない雰囲気を纏っている者がいる。
メイド服を着用し、スカートに縦のスリットを入れている金髪美女――イヴ――だ。
普段から唯我独尊の雰囲気を放っている彼女だが、それでも近寄りがたいと言うわけではない。だが今彼女が纏っている雰囲気は明らかに危険な雰囲気だ。

（我の邪魔をするとは無粋にもほどがあるぞ、雑種……。まあ良い。本選にてウリエル、貴様を――――――――殺す）

言わずともイヴの放っている雰囲気に近寄れるはずもなく、本選進出が確定した。
こうして次々に決まっていく本選進出者たち。
力を試したい者。力のある者を見たい者。殺し合いたい者。

様々な思考が入り乱れる中、本選の組み合わせが発表される。
一回戦……。
二回戦……。
三回戦、黒神織　ＶＳ　古菲。
四回戦……。
五回戦……。
六回戦、ティアレンス・バイシタル　ＶＳ　イヴ・サンライト。
こうして切って落とされたウルティマホラ本選。
果たして最後まで勝ち残るのは誰になるのか……。
それは参加者のみが語ることである。

第六十七撃『師弟対決。それはあまりにも呆気なく、あまりにも複雑で……』

正直、こういった組み合わせになるとは思ってはいなかった。
私を含めて四人が、本選に進む十二人の中にいるのだから一組くらいはぶつかり合う可能性はあった。もちろん四人がぶつかる可能性がなかったわけではない。
だというのに、まさかこんないきなりティアとイヴがぶつかるなどと誰が予想しただろうか。
少なくとも、私はこのような事態は予測していなかった。
しかも私と古菲も一回戦からぶつかることになろうとはな。ちょうど良いといえばちょうど良い。

（この組み合わせだとティアかイヴと戦うのは決勝か……。戦う理由もないし、どうしようか……）

私がこのウルティマホラに参加したのは、あくまでも古菲がどの程度成長したかを見るためだ。この大会で優勝するのが目的ではない。
つまりは一回戦でぶつかる以上、それが終わってしまえば戦う必要はなくなるということだ。
棄権してしまったとしても構わない。……が、今の状態のティアかイヴが勝ち上がることを考えれば、棄権してこの場を離れるのは得策ではない。
せめて勝ち上がったどちらかが棄権するか、危険な状態ではないことを確認する必要がある。
どうせ二人が戦うとなれば結界を張る必要になるだろうし、一回戦が行われている間はどのみちこの場にいなければならん。

（やれやれ……。無駄に強い奴らが周りにいると、止める側も辛いんだが……）

試合が始まるまではお互いに大人しくしているだろうし、わざわざ争うなどということはしないだろう。

……となれば私は自分の試合、古菲との試合に集中すれば良いということだ。

さて。私が古菲に虚刀流を教えてから大分経つが、どれ程強くなっているだろうな。今からでも楽しみだ。

そんなことを思いながら、現在行われている一回戦第二試合を見つめる。

ん？　第一試合？　そのようなものはとっくの昔に終わっている。私が注目すべき試合は正直にいえばない。ティアとイヴの試合に気を付けさえすればあとはどうでもいい。

なんてことを考えていると、第二試合も終わりを告げたようだった。

（やっと出番か……）

準備運動もかねて私は軽くストレッチを行う。

今回の戦いは古菲がどれぐらい強くなったかを見極める戦いだ。手抜きは出来ん。

そして準備運動を終えた頃に、舞台に上がるようにアナウンスがかかる。

試合の一つ一つにトトカルチョをかけているのか、周りの観客達はかなり注目している。

だが今更視線を気にするような私ではない。舞台に立ち、古菲が上がってくるのを待つ。

程なくして古菲はやってきた。何やら待ち焦がれたような、何か策があるような、そんな表情をしている。

「まさか一回戦から当たるとは思ってなかたアルよ、老師」
「あぁ。だが、こっちの方が好都合だろ？　無駄な試合をやらないで済む分、全力でやれる……そうだろ？」
「そうネ。ワタシの全力、老師に見せるアル」

古菲はそういいながら、明らかな突撃姿勢――虚刀流七の構え『杜若』――を見せる。
それに対して私はいつも通りの自然体。銃器を使えない以上、いつもの自然体が私に最も適している構えだ。
そして、試合開始の合図が鳴らされた。

◇

一回戦の組み合わせが発表された直後、古菲は目を見開いていた。
初っぱなからの自分が目的としていた人物との試合。可能性がないわけではなかったが、最初から当たるとは思っていない。
もしかしたら先程に殺気を撒き散らしていたティアやイヴとぶつかる可能性も有り得たのだ。
そうなれば、まず今の古菲の実力では太刀打ちは不可能。この二人がお互いに戦いたい、と思っていなければ付け入る隙はあっただろう。
しかし、今の二人には付け入る隙がまるでない。例え相手がシキでろうとも全力で殺しにかかるだろう。
それだけ今の二人は危険だった。
そのような可能性の中、古菲はシキへの挑戦権を手に入れた。

（遂に、老師にワタシの修業の成果を見せることが出来るアル……）

実は古菲はシキに隠れて、虚刀流の奥義を使った自分だけの技を

考えていた。
師匠にあたる人物であるシキに教えてもらった技だけを修業したとしても、シキを越えることは出来ない。
だから古菲だけは自分だけの、シキを越えるための技を開発していた。
完成したとまではいかないものの、つい先日、自分だけのオリジナルの技が出来た。
きっとシキは自分に対して手加減をしてくる。そこが狙い目だった。

（これが成功すれば、老師でも簡単には起き上がれないはずネ）

古菲はこの技に絶対的な自信を持っていた。
シキを出し抜き、自分の修業の成果を見せつけることが出来ると。
知らず知らずのうちに拳を握る手に力が入る。汗ばみ、体が震える。
これから戦う相手に恐怖を抱いているのか？　違う。これから戦う相手に武者震いしているのだ。

「古（クー）、自信があるみたいだが相手はシキさんだ。油断だけはするな」
「分かってるアルよ、マナ。油断してたら老師には勝てないネ」

古菲と一緒に一回戦の組み合わせを見ていたマナは、武者震いしている彼女にそう告げる。
油断はしていないだろうが、恐らくは受かれてはいるだろう。
仮に自分が同じ立場だったときのことを考え、マナは告げたがどうやらその通りのようだ。
口ではそう言ってはいるが、表情が緩んでいる。
溜め息を一つつくと、マナは古菲の額にデコピンを繰り出す。

「アイヤッ!?　な、何するアルかッ!?」

一口にデコピンといっても、チート人間――マナはチート半魔族（ハーフ）だが――の放つデコピンだ。

同じチート人間である古菲であるとはいえ痛いものは痛い。むしろ痛いで済んで良い方だ。

「浮かれていたからな。どうだ?　これで引き締まったんじゃないか?」

「ムムム……。浮かれてなんか――――あったアルけど……。フム、じゃあ今度こそ気を引き締めていくネ」

マナのデコピンを受けた古菲は今度こそ気を引き締めて、先に舞台に上がっていたシキの方を見つめる。

大丈夫。マナにも念を押してもらったのだ。浮かれているはずも、油断しているはずもない。古菲は自分にそう言い聞かせる。

模擬戦は今まで何回もしたことがある。だが、こういった正式な場で戦うというのは初めてだ。

本人も知らないうちに緊張してしまっている。

すると後ろから不意に声がかかった。

「超（チャオ）?　どうしたアルか?」

振り向けばそこには古菲の親友とも呼べる人物、超鈴音（チャオ・シェン）が立っていた。

「古が緊張してたみたいだたから、話しかけてみたヨ」

「……そうアルか?」

「自分で気づいてなかったのカ……?」

古菲の発言に超は呆れたと言わんばかりに溜め息をつき、苦笑しながらそういう。
マナも同じように溜め息をついていたが、古菲は気づいていない。

「古、実は頼みがあって来たヨ」
「頼み？　何アルか？」
「ウム。この試合、制限時間一杯に戦ってくれないカ？」

ウルティマホラの本選には一対一（サシ）の戦いであるために、制限時間が儲けられている。
決勝戦以外は十五分で、決勝戦のみは二十分の制限時間が儲けられている。舞台も十五メートル四方であるため、制限時間を一杯に使うというのはかなり難しい行為だ。
どれだけ慎重に戦ったとしても、十分くらいが限度だろう。
ましてや相手がシキだ。制限時間どころか十分持つかどうかすらも怪しい。

「それは別に構わないネ。だけどどうしてアルか？」
「ちょっとそれは言えないヨ。じゃあ、頼むネ」
「任せておくアル」

古菲と超は一度だけ手をぶつけ合い、古菲は舞台に向かって歩いていく。
緊張もちょうどよくほぐれた。あとは、自分の全力をぶつけるのみだ。

◇

試合開始の合図と古菲が飛び出したのはほぼ同時だった。
俗にいうクラウチングスタートの構えから脚のバネを最大限に活

用し、並の人間では到底出せそうもないほどの速さで私に突撃してくる。

十五メートル四方の舞台の大体端同士にいたため、空いた距離は十五メートルといって良いだろう。今の古菲の速度を考えれば、十五メートルの距離を埋めるのには一秒とかからない。

虚刀流七の構え『杜若』は基本的に他の虚刀流の技へと繋げるための、いわば接続技でしかない。

『杜若』自体を見る限りでは大したことはない。

しかし、『杜若』から接続される虚刀流の技に注意しなければならない。

そこから繋げるのに使い勝手が良いのは、『杜若』の勢いを全て乗せて放つ飛び蹴り――虚刀流『薔薇（ばら）』――だ。

その他にも脚を斧として見立て、踵落としの要領で放つ虚刀流七の奥義『落花狼藉（らっかろうぜき）』などが考えられる。

ただ、『杜若』は一歩で相手の懐に潜り込むのではなく、自由自在で相手にタイミングを逃させるための足運びが売りだ。

それが次に繋げる技にも関係してくる。

（一歩、二歩、三歩――――――――）

細かく刻んでくるようならば、そこまで大技を繰り出してくることはない。

逆に大きく踏み込んでくるようならば、それは間違いなく奥義へと繋げるためだ。

そして今回は――――――――奥義へと繋げるための足運び。

「虚刀流七の奥義――――『落花狼藉』ッ！！」

私の目の前で脚を舞台に叩きつけ、真上へと跳ぶ。

そのまま前方三回転宙返りで勢いをつけ、さらに『杜若』による

勢いをも右足に集束させる。
振り降ろされる右足はまさに斧の如く。正面から受けきるのは達人といえど不可能だろう。
両腕で防いだとしても良くて両腕の複雑骨折。最悪腕が千切れるどころか、脳天から引き裂かれて死に至るだろう。

（まずは様子見といくか……）

氣で受け止める腕を強化すれば骨折や怪我の心配はなくなるだろうが、痛みを感じるのはやはり嫌だ。
いくら強くなろうとも痛みを伴うのは実に嫌だ。なぜ攻撃を受けて効かないぞ、などと言えるかが分からない。痛いものは痛いだろうに。
振り下ろされた脚を捉えながら、私は真横に飛んで古菲から五メートルほどの距離を置く。
刹那、舞台の床が破壊される音が私の耳に届く。
振り下ろされた古菲の脚は標的を見失っても止まることはない。そのまま舞台の床に激突し、風穴（かずあな）を開ける。
だが古菲は全く気にした様子はない。振り抜いた脚を戻し、そのまま私との距離を縮める。

「――――ッ！！」

不意に感じた顔面への敵意。首を横に傾けると同時に古菲の拳が通り過ぎる。風を斬る音が目一杯聞こえ、直撃していたらなどということを連想させる。
まだ古菲は体勢を整えきれてはいない。体重を預けていると思われる左足に足払いを使い、体勢を崩させようとした。
もちろん彼女もその程度は予想済みだっただろう。私の足払いを僅かに体を浮かせることで回避し、空中に浮いたまま体を捻る。

「虚刀流――――『百合（ゆり）』ッ！！」

そしてそのまま腰の回転を入れた回し蹴り――虚刀流『百合』――を放ってくる。

避けることは実に簡単だ。自分ではないと思っている隙が山ほどあるからな。そこを突いてしまえば私の勝ちとなる。

とはいえ、弟子の成長を見極めるための試合なのに簡単に終わらせてしまっては面白くないだろう。ならば避ける以外の選択肢は一つしかない。

腕に氣を集中させると、私は古菲が放ってきた虚刀流『百合』を片手で受け止める。

最初こそ驚いていた古菲だったが、すぐに次の動きに移る。

「虚刀流――――『菫（すみれ）』ッ！！」

虚刀流にしては珍しい投げ技。使うことはほとんどないだろうが、極めておいても損はないだろう。

現に古菲はそれを使っている。

私の腕に自分の腕を絡ませるようにし、そのまま全体重を使って背負い投げのように私の体を投げ飛ばす。

こうやって私が体勢を崩している間に自分は体勢を整え、追撃を仕掛けようということか。

なるほど……。よく考えられた動きだ。

私は投げ飛ばされ、体勢を整えることなくただただ感心する。

とはいえ、追撃が来ることが分かっているのに体勢を整えないわけにはいくまい。全身の筋肉を使い、逆さになっていた体を元に戻して舞台に着地する。

「――――ッ！！」

視線を前に戻せば既に古菲が私に向かって拳を振り抜かんとしていた。

恐らく今回は虚刀流の技は使わず、自由自在の動きで来るだろう。

動きがバラバラで、虚刀流へと繋がる動きが全く見てとれない。

振り抜かれた拳は的確に私の顔面を狙っており、私はそれを内側から外側へと力のベクトルを変えることにより受け流す。

立て続けに繰り出される掌打、膝蹴り、回し蹴り、裏拳の数々を私は受け流すことにより古菲の体力を削る。

この試合が始まってから、私は一度たりとも自分から仕掛けてはいない。

それは実力を見るためというのもあったが、もう一つは体力を削るという目的があったからだ。

いかに技の精度とキレを持っていたとしても、それを使いこなせるだけの体力がなければ意味がない。

試合が始まってからまだ五分と経ってはいないが、お互いに休む暇がなかった以上、技を繰り出していた古菲の体力の消耗は激しい。

「はぁ……はぁ……ッ」

一旦距離を置き、私の出方を伺っている古菲の呼吸はかなり荒く、額から頬を伝って汗が流れ落ちている。

それに対して私は汗どころか呼吸すら乱れてはいない。

「さて。古菲、ここからが本番だ。お前の修業の成果……見せてみろ」

「当たり前アル。ただしその頃には、アンタは八つ裂きにやっているアルッ！！」

吠えるように古菲は叫ぶと、私に向かって走ってくる。

今度はいったいどのような動きを見せてくれるのだ？
私はそんな気持ちを抱きながら、構えた。

◇

「はぁ……はぁ……はぁ……ッ、」

試合開始から約十三分が経過した。持ち時間も残り二分ほどしかない中、虚刀流の担い手、古菲は限界を迎えようとしていた。
片手片膝を舞台の床につき、息を荒くしている。
既に手足は痙攣が止まらなくなっており、動けなくなる一歩手前などではなく、普通なら動けないはずだった。
それなのにも関わらず、僅か十四歳の少女は立ち上がろうとしている。
口元には笑みが浮かんでいる。

「まだ、終わてないアル……」
「……」

少女の、周りの音に掻き消されてしまいそうなほどに小さな呟きに、男は応えるように構える。
今までの自然体の形ではなく、しっかりとした武人の構え。
シキは正直なところ、古菲がここまで動けるとは思っていなかった。
だからこそ、汗をかくほどに動かされてしまっている。
――――制限時間、残り一分。
制限時間内に決着がつかない場合、ケータイなどのメール投票やその場での投票で結果が決まる。
こうなった場合は間違いなく古菲は敗北する。決めるならば、今しかない。

「虚刀流最終奥義――――」
（む？　虚刀流最終奥義だと？）
シキは古菲が放った一言に疑問を抱いた。
確かに虚刀流には『最終奥義』が存在している。だがシキは古菲にそれを教えてはいなかった。
最終奥義ともなれば肉体への負担もかなりの大きさと成り得るため、成長に異常を来さない程になったときに教えようと思っていたのだ。
なのに古菲は、自分の力で最終奥義に辿り着いた。
そして、古菲は懐に潜り込む。
「――――七（しち）」
虚刀流一の構え『鈴蘭』から放たれる『鏡花水月（きょうかすいげつ）』。奥義の中でも最速を誇る掌打が、シキの体を打ち上げる。
虚刀流二の構え『水仙（すいせん）』から放たれる『花鳥風月』は、さらに浮いた体を打ち上げる。
虚刀流三の構え『躑躅』。『百花繚乱』は、打ち上がったシキの溝を膝が捉える。
虚刀流四の構え『朝顔』から放たれる『柳緑花紅（りゅうりょくかこう）』は落ちてくるシキの胸を捉えた。
「――――花（か）」
古菲の猛攻は終わらない。
虚刀流五の構え『夜顔』。『飛花落葉』、合掌した手を開き、シキの胸へと叩きつける。
虚刀流六の構え『鬼灯』からの『錦上添花（きんじょうてんか）』はすっかりがら空き

となった両脇を水平手刀で捉える。
最後に、虚刀流七の構え『杜若』からの『落花狼藉』は全ての締めを彩るようにシキの後頭部を完全に捉えた。

「――――八裂（はちれつ）ッ！！」

虚刀流最終奥義『七花八裂』は虚刀流の七つの奥義を一瞬のうちに叩き込む、まさに最終奥義だ。
ただその威力と引き換えに負担が非常に大きく、今の古菲では耐えきれるものではない。
だがそれでも、今だけは立っているしかない。
足元には自らの最終奥義を叩き込み、初めて舞台に倒れ込んだシキがいる。

（やった……アルか？）

最早半信半疑で問うことしか出来なかった。
今までは一度たりとも地に伏せさせるどころか、膝を着かせることすらも出来なかった。
しかし今はそんな相手が舞台に倒れ込んでいる。
カウントは十二まで進んでいる。二十までカウントされたとき、古菲の勝ちが決まる。
立ち上がれば投票に持ち越しだろう。
そして――――――――シキが起き上がる。

「今のは効いたぜ、古菲。まさか自力でここまで来るなんてな」
「まさか、まだ足りないアルか……？」

信じられなかった。
自らの持てる力を出しきった一撃。これで終わらなければ、古菲

の勝ちはない。

「いや、十分だ」

シキは目を閉じて優しい口調で古菲に告げる。

するとシキの体が後ろに傾いていく。否、倒れていく。

「お前の勝ちだ、古菲」

この瞬間、会場が歓声に包まれた。

第六十七撃『師弟対決。それはあまりにも呆気なく、あまりにも複雑で……』

今回のシキは弟子の強さを見るため、強さを古菲より少し強い程度にしています。
弟子の成長を見れたため、わざと負けたに過ぎません。
以上、補足でした。
感想待ってますッ！！

第六十八撃『神格ＶＳ神格王。オレ／我はお前が気に入らねえッ！！』（前書き）

――――相容れないから、譲れないものがある。

お互いの信念はすれ違い、決して交わらない平行線。

そして今、二つの信念がぶつかる。

その竜族は狙撃手なり、始まります。

第六十八撃『神格ＶＳ神格王。オレ／我はお前が気に入らねえッ！！』

麻帆良祭一日目の夜に開催された、自分の力を披露するために開催された『ウルティマホラ』。

聞いた当初は参加しないつもりだったが、とある理由からオレ――ティアレンス・バイシタル――も参加することにした。

とある理由と言っても別に大したことじゃない。

ただ、オレの気に食わない奴が参加するからというだけの理由だ。

そいつとは絶対に相容れる気がしない。そもそも、オレとそいつは人間を組み上げている根源のそのものから違う。

だから、オレはそいつのことを――――殺したい。

あいつほど殺したいと思ったことは今までに一度もなかったし、未来永劫訪れるとは思えない。

この大会を理由に、オレはそいつを殺そうと思っている。

故にそいつと殺り合うまでは例え相手が銃神（シキさん）だったとしても、負けるわけにはいかなかった。

だがここで予想外の出来事が起きた。

「虚刀流最終奥義――――七花八裂（しちかはちれつ）ッ！！」

シキさんの弟子である少女――古菲――の一撃を受けて、シキさんは一回戦にて敗退した。

確かに予想外ではあったが、あれは明らかに弟子の成長に満足して戦わなかったクチだ。

勝ちは勝ちでも正式に勝ったとは言えない。

とはいえ、シキさんが勝とうが負けようが今はどうでもいい話だ。

――――一回戦第六試合。

これがオレの試合であり、参加した目的が達せられる場所だ。

イヴ・サンライト……。こいつは生涯を経ても受け入れることはない。
そして第四試合、第五試合と進んでいき、一回戦の最後の試合である第六試合に差し掛かる。

「……」
「……」

舞台に立つなり無言でにらみ合いを始めるオレと神格王。
当然だ。神格王はオレが神格王を嫌うのと同じように、オレのことを嫌っている。
殺気と殺気のぶつかり合い。竜巻の中心、もしくは台風の目になったかのように、殺気が渦巻く。
今回は殺気を撒き散らしたりはしない。オレが殺したいのは目の前のクソアマだけだ。
他に殺気を撒き散らしていたさっきの方がどうかしてた。
一度だけ眼を閉じ、次に開いたときには死の世界が視界に広がる。

――――直死の魔眼。

これほどまでに殺しに特化し、オレの目的に最適なものはない。
オレが平行世界で『両儀式』だっていうんなら、きっとそいつもオレと同じ感情を抱いてるのかもしれない。
あぁ……これほどまでに温かい鮮血をこの身に受けたいなんて思ったことはない。
この大会は基本的には刀剣類といった刃の武器を禁止にしている。
だからオレは着物の帯から一本の、ナイフと同じほどの長さの木刀を逆手に構える。
直死の魔眼を使えば、自分の得物なんかナイフだろうが定規だろうが変わらねえ。

万物の死というのは、そのモノの綻びのことだ。その綻びは何よりも脆く、触れただけでなくなるほどだ。

オレが木刀を逆手に構えると、神格王も構えた。

いや、構えたというよりも身構えたって言った方が正しいかもな。あいつは今まで旧魔法に頼ってきたとはいえ、肉弾戦にも長けている。

直死の魔眼が疼く。早く目の前の敵を殺せとオレに訴えかけてくる。

（慌てるな……。すぐに味わわせてやる。死って奴をな）

そして、試合開始の合図が鳴らされた。

それと同時にオレと神格王は動き出す。

右肩に一つ。左側の腰に一つ。胸のやや左に一点。死というなの断面図が視えた。もちろん狙うのは一点――死の点――だ。

一瞬にしてオレは踏み込み、何の迷いもなく木刀を突き出す。

だが神格王は自らの拳をぶつけることにより、木刀の進行を防ぐ。

木刀には氣を流して強化しているため、いかに神格王の一撃でも折れはしない。

拮抗するオレの木刀と神格王の拳。神格の力を発揮しているため、オレや神格王の体からは紋様が僅かに浮かび上がっている。

しかも神格王の方は本家のモノだ。瞳孔が縦割れになるほどに神格の力を放出している。

確かにこの強さは認めなきゃならねえ。だが――――。

（気に食わねえ……。周りの奴らを何とも思わないこいつが……ッ！！）

さっきのシキさんに止められる前のオレもきっとこうだったんだろうな。

思い出すだけで嫌気がさしてくる。
でも気に食わないものは気に食わない。
オレには、原初の神格（ウリエル）の記憶がある。
その理由は、オレが神格王の復活の手駒に強制的にさせられ、加護を受けたことが原因だと思っている。
もちろん本当の理由も、原初の神格（ウリエル）のこともオレには関係ない。
だが。それを踏まえた上でも、神格王は気に食わねえ。
旧文明時代には神格王の統制に納得がいかなくて、戦争が少なからず勃発していた。
敵は雑魚だったとはいえ、苦戦させられることもあった。
その仮定で仲間の一部が死の危険にさらされた。少ない人数だったが、それでも助けないわけにはいかない。
だから神格（ウリエル）はそいつらを助けようとした。
そんな神格（ウリエル）に神格王は何て言ったと思う？
『捨てろ。たかが少数のために、時間を割く必要などない。雑魚には用はない』
ふざけるんじゃねえよ。
テメェに見殺しにされた奴らは、テメェを信じて戦ってきたってのに捨てろだと？
オレ本人がそのときの神格（ウリエル）じゃないのが悔しい。
もしオレがそんなこと言われたんだったら、何の迷いもなく殺してたところだ。
結局、神格（ウリエル）が自らの危険も省みず皆を助けた。
だってのに神格王は余計なことをするなと言うだけ……。
いくらオレじゃなくてもこれには耐えられないはずだ。なのに原初の神格（ウリエル）は耐えた。
（でもさ、オレは耐えられねえよ。だからオレが、アンタの分まで

あいつをぶちのめす）

生憎とオレはそこまで出来た人間じゃない。

気に食わない奴がいれば殺すし、納得がいかないことがあればそれに反発する。

木刀を改めて握り直し、神格王の拳を無理矢理押し返す。

が。押し返したはずのオレが後退する羽目になった。

ちっ、これは単純な力負けか……。

オレが木刀を振り抜く力よりも、神格王が拳を振り抜く力が強かったために、オレの体が耐えきれずに後ろに放り出された……ってことだ

舞台の端まで弾き飛ばされたオレは両足と片手で踏み止まり、神格王を睨み付ける。

「どうした？　その程度か、ウリエル。その程度では物足りぬ。せいぜい……我を楽しませろッ！！」

「なんでかな……。せっかく強い奴と戦えるってのに全然楽しくない。それはさ、神格王……お前が気に入らないからだッ！！」

相手が神格王じゃなくて、それくらい強い相手だったらきっとオレは今頃楽しめてたはずだ。

なのに楽しめないのはやっぱり相手が神格王だからだ。

だからオレは今日ここで、あいつを殺す。

何千年も前からの因縁を、今ここで絶ちきって、全てを終わらせてやる。

両足に力を込めて飛び出す。赤の革ジャンが風を受けてはためき、魔眼が一点を捉える。

「オォォォォォォォォォォッ！！」

「くたばれエエエエエエエッ！！」

再びぶつかり合う木刀と拳。
ギチギチと拮抗する二つの信念はお互いに引くことを知らない。

◇

戦いが始まってからすぐにウリエルが我の懐に潜り込んでくる。
奴の右手には短めに作られた木刀が逆手に構えられている。
ふん、たかが木で作った刀で我に敵うとでも思っているのか？
もしそうであるならば腹立たしいことこの上ない。
我は少々取り戻した本来の力を解放し、奴の木刀に自らの拳をぶつける。
身体に浮かび上がる紋様は、神格の力を内包しているということを表す、いわば証明書のようなものだ。
仮にも奴はウリエルの神格だ。浮かび上がるのに何の不思議もない。
拳と木刀をぶつけ合ったことにより、その二つの衝撃の余波が周りに散らされる。

（気に食わん……。たかが雑種ごときに拘る貴様がッ！！）

今のウリエルも原初の神格（ウリエル）も何ら変わらない。全く同じようなことに拘っている。
遥か昔。我らが世界を支配していたとき、我を頂点とした八人が最強だった。
我の何が気に食わぬかは未だに理解し得ぬが、我に反乱の意思を見せる雑魚共があとを絶たなかった。
もちろん我らに逆らう愚か共には、制裁を加えねばならん。
我らに逆らうという意味を体で覚えてもらわねばならぬからな。
だというのに雑魚を撃退するために向かわせた隊が、逆に殲滅さ

せられそうになるなど、恥さらし以外の何者でもない。
兵が減るのは頂けないが、全体の士気を下げるわけにはいかん。
だから我はそ奴等を切り捨てた。
いくら我でも全てにおいて冷酷な判断を下すわけではない。
全体の一割程度の輩を助けるために兵を注ぎ込み、犠牲を増やすような真似は出来ん。
だが、ウリエルはなんと言ったと思う？

『ふざけるな。見捨てて良い奴等なんか、いるわけないだろ。オレはあいつらを助けにいく。例えどんな犠牲を出してもな』

バカにも程があるだろうが。
どんな犠牲を出しても助けるだと？
それこそふざけている。犠牲を一割程度で済ませられる戦いに、何故犠牲を増やすような真似をせねばならんのだ。
戦とは冷酷にならねばならん。ましてや我は王、兵の生存を最優先に考えて動かねばならん。
そのためには一を切り捨て、九を残さねばならんのだ。
だからこそウリエルの動きは気に入らん。一を助けて、九を危険に晒すなどというのは有り得ぬことなのだ。

（いかに何と言われようと、我には王としての責務がある。勝手な行動を行い、兵を危険に晒した罪は大きいぞ）

我は拳に押し返す圧力を感じ、それを力尽くで押し返す。
我に力で勝とうなどというのは不可能だ。我とウリエルには絶対的な力の壁がある。
だいたい、我は王としてウリエルだけには負けるわけにはいかんのだ。
そして我に弾き飛ばされたウリエルが、蒼色の瞳を我に向けて睨

み付けてくる。

「どうした？　その程度か、ウリエル。その程度では物足りぬ。せいぜい……我を楽しませろッ！！」

「なんでかな……。せっかく強い奴と戦えるってのに全然楽しくない。それはさ、神格王……お前が気に入らないからだッ！！」

ウリエルはそう叫ぶと我に向かって突撃を繰り出してきた。

まるでよくしならせた弓から放たれた矢のごとく、ウリエルは勢いよく飛び出してくる。

夜の闇の中に光る蒼色の二点はあまりにも滑稽だ。

何千年も前からの因縁。それを今ここで終わらせるためにも、我は奴を殺さねばならぬ。

「オォォォォォォォォォォッ！！」

「くたばれェェェェェェッ！！」

再びぶつかり合う拳と木刀。

信念は曲げられぬ。

我は王として、兵を率いる者として護れる者は護らねばならんのだ。

◇

「全く、あいつらは……」

第六試合。

今までの試合とは比較にもならないほどの激闘を繰り広げているなか、第三試合にて敗退したシキは溜め息をついていた。

試合で受けた外傷は本人からすれば外傷にはなっておらず、現在

は傷を癒して試合を観戦している。
一方、試合で限界を超えた力を使った古菲は気を失ってしまい、医務室にて休養をとっている。
次の試合までに目を覚まさなければ棄権扱いになる。
話を戻そう。
現在、第六試合で戦っているのはティアとイヴ。
互いに全力で戦っているために、ただ一度の接触でもかなりの被害が出る。

（少しは考えろっての……。まぁ、今のあいつらに言っても無理かもな）

再度溜め息。二人の因縁をシキが知っているわけではないが、止められないということだけは理解できる。
両手を合掌させ、舞台に開いた両手を一度だけ触れさせる。
すると十五メートル四方の舞台に視覚出来ない結界が展開され、周りへの被害を遮断した。

「大変ですね、アナタも」
「まあな。でも仕方ねェさ。これはあいつらの問題だからな。これからも殺気撒き散らされるより、決着をつけといた方がいいだろ」
「そうかもしれませんね」

毎度のことながら、不意に後ろから現れたアルにシキは驚くこともしないで受け答えをする。
そんな会話をする一方で、二人の戦いはヒートアップする。

ぶつかり合う木刀と拳。
お互いに引くことを知らない一撃は、余波を撒き散らしているが結界に阻まれて被害が出ることはない。

蒼の瞳が視るのは胸のやや左にある一点。
力が拮抗するなか、先に動き出したのは木刀を逆手に構えたティアだ。
自分が向けた木刀を押し返すように振るわれた拳のベクトルを、自分が回転することにより後ろに受け流す。
いきなり拮抗状態を解除されたため、イヴは前につんのめる形で体勢を崩した。

（ここだ――――――）

体勢を立て直してから、相手に敵意を向けるまでのコンマ数秒のタイムラグ。そこが狙い目だ。
たかがコンマ数秒のタイムラグとはいえ、それはティアにとっては十分な攻め手となる。
右肩に視える死と言う名の断面図。貫かなくとも、断面図をなぞればそれだけで万物は死に至る。
それには例外はない。それが霊体だろうが魔力だろうが、生きている限りは死ぬのは道理。
故にこの魔眼からは逃れられない。

「――――ッ！！」

一気に木刀を振り下ろす。しかしその木刀が標的を捉えることはない。
避けたのだ。あの体勢のまま木刀の一撃を察知し、片手で無理矢理方向を変えて木刀の範囲外に身を置いた。
まさか避けられるなどと思ってなかったのだろう。顔を驚愕の色に染め、目を見開いている。
もちろんそのまま立ち止まる気は毛頭ない。
驚きつつも体は次の動きに移行している。

方向転換したイヴは今度こそ体勢を完全に崩している。立て直すには先程よりも時間がかかるはずだ。
それを見越した上での接近。
そしてティアは事前に帯に差しておいた本来の長さよりもやや長めの木刀を抜き放ち、短めの木刀を捨てた後に両手で構えた。

（――――ッ！？　変わった？　姿が？　いや、違う……。貴様は誰だ……ッ！！）

話を変えよう。
その昔。侍達は刀を抜いた時点で、殺し殺されることを当然のように受け入れたという。
それは心構えからなどというわけではない。刀を握った瞬間に、彼らは覚醒するのだ。
殺し合うためだけの肉体。生き残るだけの頭脳に。
今のティアはまさしくそれだ。先程の『殺人姫』と今の『殺人鬼』とはわけが違う。

（構え。自己暗示による強さの変態。……面倒なことをッ！！）

イヴはティアをナイフと直死の魔眼を使って戦うスタイルだと決めつけていた。
しかし実際はどうだ。この女は、本来刀を手にする殺人鬼だ。
今の彼女に比べれば、普段の彼女など足元にも及ばない。
両手で構えられた木刀からの、下段から上段への振り上げ。
風を纏いながらも風を切り裂き、無防備な顎へと向かう。
回避は間に合わない。ならばどうする？
いかに相手が自己暗示による変態、つまりこれからが本来の彼女の力とはいえ自分には負けられない理由がある。
だから――――――――――考えるのをやめた。

「――――っ！！」

木刀が空を切り裂く。
そこには何もなかった。
元から何もなかったように、ただただ寂しい空間があるだけだ。
外したと思うと同時に標的の姿を探した。
前後左右。どこにも姿はない。
ならば敵は？

「――――――――上か」

轟、という今までに発せられなかった衝撃音。
人間同士の戦いが放つにしては不自然な音。
爆発物が爆発したような音の発信源には、二人の女がいるだけ。
木刀を両手で構えて振り上げる女と、空中から踵落としを繰り出す女。
ティアの足場が衝撃に耐えきれずに、体が沈んでいく。だが、ティアの体は揺るがない。
何の苦もないと思わせる無表情は、蒼く光る二点を妖艶に映す。
驚くべきはイヴの方だろう。
踵落としを繰り出すイヴは、宙に浮いたまま動かない。
そう、動かないのだ。
重力に逆らうように地に立たない彼女の姿は、明らかに異常だ。
だが。それを物ともしないほどに二人の戦いは異常だった。

「オレは――――」
「我は――――」

唐突に、二人の女は口を開いた。

全く同じタイミングで、平坦で真っ直ぐな呟き。
状況俄然と変わらない。拳と木刀をぶつけ合わせているだけ。
お互いにこれから何を言わんとしているか理解することが出来た。
出来たからこそ、腹立たしい。
同じ思考、同じ行動をこれから行おうとしているのだ。
考えるだけでも嫌気が差す。これから先、未来永劫としてこの二人が同じことをすることはないだろう。
そして二人は同時に吠えた。

‘――――お前が気に入らない――――’

空間が悲鳴を上げた。
二人のどちらでもなく、その場所が二人に耐えきれずに崩壊する。
舞台は原爆が落ちたように消え去り、地にはクレーターが出来上がる。
結界は砕けはしなかった。だが、輝が入ったことには変わりない。
二人が吠える。
身体に神格の証である紋様を鮮明に映し出しながら。
木刀が蹴りの力を受け流す。
拳が顔面に振るわれる。
それを避けて反撃を繰り出し、再び拳とぶつかり合う。
力が拮抗するが故に、負けられない。
どちらにも信念というものがある。
『一』を切り捨て『九』を得る者と、『九』を切り捨て『一』を得る者。
全く正反対である二人がぶつかり合うのは道理。
しかし、だからこそ。二人はお互いにお互いが羨ましい。
力を受け流すのは、最早逃げるのと同義。

逃げられない戦いの中、二人は最後の力を振り絞る。
上段から振り下ろされた木刀と、真っ直ぐに振るわれた拳。
腕のところどころから血が吹き出し、木刀は限界を迎えようとしている。
そして、二人は同時に弾けた。
決着がつかないままに。

◇

……。
……。
……。

‘ここはどこだ……？’

自分でも分からない空間で、少女は目覚めた。
実感のない身体のおかげで、これが夢だということにすぐに気付く。
先程の試合はどうなったのだろう、と考える思考すらもまともに残っていない。
ふと、視界には二人の女が見えた。
片方は見たことがある。だがもう片方は？
見たことはない。だけど、自分に近いモノを感じる。

‘――――――――’
‘――――――――’

二人が会話をしているが、聞き取れない。
自分の聴覚がイカれてしまったのか、はたまた声が出ていないのか。

そんな些細なことはどうでもよかった。
今はただ。例え聞き取れないとしても、二人の会話を聞いていたかった。

‘――――――――’

金髪の女の言葉に、蒼眼の女は俯いた。
そして、蒼眼の女もまた叫ぶ。
怒りをぶつけ合い、喧嘩をしているようにも見える。
だけど、悲しんでいるようにも、悔やんでいるようにも見える。
ふと、蒼眼の女が崩れ落ち、金髪の女がそんな女を抱き締めた。

‘あぁ、そうか……。あいつはきっと……’

少女の視界は徐々に暗くなっていく。
これは夢だ。
少女は夢から覚めて、現実に戻る時間が来たようだ。

◇

今度こそ、オレは目を覚ました。
大方ここは医務室の天井だろう。見たことがなくて当然だ。
体が思うように動かない。当たり前だ。あんな自己暗示による強さの変動をやったんだからな。
昔、オレはシキさんから『両義式』について話を聞いたことがあった。
もしオレが平行世界の『両義式』なら、同じようなことが出来るんじゃないか、と思った。
正直確証はねえ。『両義式』は刀の使いに長けていたからこそ、それが使えた。

基本的にはオレはナイフを使う。出来るはずがなかった。
だが、自己暗示により自分の肉体を作り替えるならば、理想の肉体を作れるのではないか。結果は上々。
それでもオレは勝てなかったわけだが……。

「聞いてんだろ、神格王」
「……」
「お前も見てたんだろ、さっきの夢。なんでオレにその記憶を寄越さなかった」
「……」

隣にいるだろう神格王は答えない。
答える気がないのか、それとも気づいてないのかは分からないが、言いたいことは言わせてもらう。

「原初の神格（ウリエル）がどう言おうと、オレはお前を許さない」
「……」
「だから、オレがお前を殺すまでは死ぬんじゃねえぞ」
「……当たり前だ」

それだけを聞ければ問題ない。
きっとオレはこれからも神格王を殺したいという殺人衝動に見舞われるだろう。
だがまぁ……それはあとでにしてやる。
原初の神格（ウリエル）が、もう許してたんだからな……。

第六十八撃『神格ＶＳ神格王。オレ／我はお前が気に入らねえッ！！』（後書き）

前書きはリリカル風にしてみました。
特に理由はありません（笑）
さて、ウルティマホラはこれにて閉幕になります。
優勝者？　ご想像にお任せします（笑）
次回からは『学園全体鬼ごっこ』になりますが、次々にキャラが登場！！
本当だったら参加させないつもりだったあの人まで参戦！？
そして話は変わりますが、募集してみたいと思います。

一、シキへの依頼

これはシキにやってもらいたい依頼を送ってもらえると嬉しいです。
ネギが麻帆良に来たとしても、余りイベントに関わる気はないので、依頼があると助かります。

二、『銀竜の旅団』への来店。

こちらは所謂コラボの形になります。
とある作者様から嬉しい言葉がありましたので、その作者様とは麻帆良祭が終わったあとにコラボをします。
『銀竜の旅団』にご来店したい方は是非感想に（笑）

では、失礼します！！

第六十九撃『麻帆良際三日目。やれやれ、人員不足か……』

麻帆良際三日目。

一日目の激闘が嘘であったかのように学園は賑わい、パレードなどが行われている。

昨日はさすがに激闘のあとだったということもあり、銀竜の旅団は休みにしていた。

とはいえ、さすがに三日目は旅団も稼ぎ時ではあるのために開店せねばならんのだが、問題が発生している。

ウルティマホラの戦いは、明らかに常軌を逸していたし、第六試合などその代表例だった。

そしてその第六試合で戦った二人は旅団のヘルパーだったのだが、現在はベッドで療養中である。

あそこまでの疲労と怪我、さらに限界を超えた力を使ったのだから反動が返ってきたとしても何らおかしくはない。

現にあの二人は全く動けず、痛みにより唸っている。

自業自得だといえばそれまでだが、何となく罪悪感があるのは何故だろう？

「……？」

私がそんなことを考えながら唸っているのだが、ウルティマホラに参加していなかったエルが不思議そうに見つめてくる。

ヘルパーはエルがいるのだが、さすがに一人ではキツいな。

さらにいえば麻帆良際の最後に行われる『学園全体鬼ごっこ』の鬼役も私を含め、二人しかいない。

ふむ。予想外な事態だ。

まさか少なくなるなどとは思っていなかっただけに、控え要員を

用意していなかったな……。
この際二人だけで全員を捕まえるというのも悪くはないかもしれんな。

「……ユーリ、呼ぶ？」
「ん？　そうしたいのは山々だが、ユーリも忙しいだろうからな」

ユーリはシェリルと違ってアリアドネーの最高権力者ではないものの、かなりの地位を持っている。
たかがこんなイベントのために出向くことなどできないだろう。
もちろんシェリルなど万に一つも来る可能性はない。

「……大丈夫。ユーリはブラコンだから」
「それは関係ないと思うんだが……」
「……でも、やる方が、やらないよりもいい」
「まぁ、そう言われたら確かにそうだな」

私の言葉を受けて、エルが私達五人の間だけで使える通信機を取り出し、ユーリに通信をし始めた。
声は小さいために何を言っているかは分からないが、そこまで気にする必要はないだろう。
もしこちらに来ることになるならば私は扉を創れば良いだけだからな。
腕を組み、エルが通信を終えるのを待つこと数分。ようやくエルが通信を終えたようだった。

「どうだ？　ユーリは来れそうか？」
「……（こくん）」

私の問いにエルは一度だけ頷く。

それを見た私は両手を合掌させ、そのまま『創造再生』で扉を創りあげ、アリアドネーに向かった。

◇

魔法学術都市アリアドネー。

学ぼうとする意思さえあれば例え死神であろうと受け入れる、どんな権力にも屈指ない世界最大の独立学術都市国家。

大戦時には中立の立場に立っていた、連合・帝国にならぶ第三の勢力といえる。

そこの最高責任者とも呼べる女性――シェリル・アリウス――は難しい顔をしながら書類とにらめっこをしている。

本来彼女は、事務室で書類仕事をしたり、学校などの責任者になるのは向いてはいない。

向いてはいないというのはその仕事が出来ないという意味ではなく、肌に合っていないという意味だ。

魔法世界でも屈指の剣士であるシェリルは、強い者を常に求めている。

攻めぎあい、剣技を競い合うことを娯楽としているほどだ。

ここ数年、というよりも十数年はまともな戦いを行っておらず、アリアドネーの最高責任者としての仕事しか行ってはいない。

（はぁ……。筆を持つだけの仕事は、退屈ですね。いつものことながら……）

筆を手にしているシェリルは溜め息をつきながら、窓の外を見上げる。

常に凛とした雰囲気を纏っている彼女だが、今はどことなく萎れているように見える。

心なしか、ポニーテールが垂れている気がする。

壁に立て掛けてある野太刀も随分と古くさくなったようにさえ思える。

ふと、シェリルがいる部屋の扉が開けられた。

そこには手に大量の書類を持った竜族の女性がいる。

褐色の肌に赤色の長髪。大人の雰囲気を持っているが、どことなく少女の幼さを残している。

「あっ。シェリルさん、またサボってる」

「サボってなどいません。だらけているだけです」

「全然変わらないですよ……。まだまだ書類あるんですから頑張ってください」

「はぁ……。困ったものです」

「やれやれだぜ……って言えばいいんですか？」

どこぞの超能力者のようなシェリルの言葉に、どこぞの本名不明の高校生のセリフで返すユーリ・アスタロト。

彼女もまた、このアリアドネーの関係者であり、シェリルの弟子だったりする。

現在は師であるシェリルから免許皆伝を授かっている。

アリアドネーの魔法学院には魔法はもちろんのこと、自分のスタイルに合わせた選択授業を行っている。

魔法剣士と魔法使い、さらにはかつて英雄とされた銃神の影響を受け、魔法銃士という三つの部門に分かれている。

銃神に憧れて魔法銃士の部門を選ぶ者も多いが、シェリルに憧れて魔法剣士の部門を選ぶ者も少なくはない。

その魔法剣士の部門の担当教師を、ユーリが行っているのだ。

現在は授業も終わり、休憩の時間となっている。

「平和ですねぇ……。大戦期とか神格事件が嘘だったみたいに」

「平和すぎるのも考えもののような気はしますがね……。少しくら

いは問題が起こっても良さそうなものですが……」
「物騒なこと言わないでくださいよ。せっかく平和なんですから」
「誰か事件を持ってきてはくれないでしょうか……」
（ダメだこの人、なんとかしないと……）

きっとユーリが思ったことは皆が思ったところだろう。
ユーリのように授業に顔を出しているならともかく、シェリルには他の仕事もありそんな暇はない。
戦うことが職業のようなシェリルには、ここの職業についてしまったのは運が悪かったとしか言いようがない。
とにかく、今のシェリルは血肉に餓えている狼と同じなのかもしれない。

「ユーリさん」
「はい。何ですか？」

書類を運び終えたユーリは、部屋に置いてあったコーヒーセットを使って自分とシェリルの分を淹れながら答える。
たった数秒でコーヒーを完成させたユーリは、次のシェリルの言葉を待ちながらコーヒーをシェリルの前の机に置く。

「私と模擬戦をしましょう」
「ふぇ？　えぇぇぇぇっ！？　シェリルと！？」
「私以外に誰とやるんですか……。ちょうど良いではないですか。どのくらい成長したか見てあげます」
「い、いえ、遠慮します……」

いかにユーリとはいえシェリルに剣術で勝てるはずがない。
キャリアが違いすぎる。シェリルは濃厚な戦いの記録を身体に刻んでいるが、ユーリはそうではない。

あくまでも戦えるだけの、見せかけの強さなのだ。
模擬戦と称しているがおそらく彼女が満足するまでやめはしないだろう。
そうなればユーリはボロボロの一途を辿るだろう。
それだけはなんとかしないといけない。
不意にユーリの太ももの辺りが振動した。
何かと思いながらそれを確認してみると、それは通信機のようだった。
しかも相手は魔法学院時代からの親友であるエルだ。
これはチャンスとばかりにユーリはシェリルに告げる。

「し、シェリルさん、エルちゃんから通信が来たのでその話はまた今度で……。……エルちゃん？」
『……？　何か、用事でもあったの？』
「ううん。むしろエルちゃんが通信してくれて助かったよ……。それで、何か用事？」
『……うん。シキのお店を手伝ってほしい』
「シキ兄の？」

ユーリは首をかしげながら、エルにそう聞き返した。
そしてどうしてエルがシキの手伝いをして、なぜ人手が足りなくなったかを聞いた。
それを聞いたユーリはというと、呆れるしかなかった。
なんせティアは手伝うために来たというのに、戦って動けなくなったというのだから。

（ティアちゃんらしいっていえばティアちゃんらしいかな……。みんな全然変わってないなぁ）

そう思うと笑みが自然に溢れてくる。

魔法学院を卒業してから既に十数年が経過している。卒業してからというもの、アリアドネー仲良し三人組とまで呼ばれた三人もあまり会う機会がなくなっていた。

それぞれの道が険しく、道草を食っている暇などありはしなかったからのだから。

いかに十数年で会う回数は数えるほどといえ、築いてきた友情が簡単に崩れるものではないということを、ユーリは改めて実感した。

「大丈夫。僕は行けるよ」

『……シェリルさんは……？』

「シェリルさんも連れてった方がいいの？　じゃあ訊いてみるよ」

通信機から一旦視線を逸らして、シェリルの方に視線をむける。

そこには黙々と書類仕事をこなすシェリルがおり、気を逸らさせたくなくなってしまった。

いつもはだらけている人物がこう黙々としているのだから、そうなるのも仕方のないことだろう。

「あのシェリルさん。もし良かったら旧世界でシキ兄のお店のお手伝いしませんか？」

「シキくんの？　……行きましょう。彼の近くにいれば何かが起こるに違いありません」

「あ、あはは……そうですね……。というわけでシェリルさんも行くよ」

『……分かった。すぐに迎えに行く』

ユーリの言葉にエルはそう答えると、通信が途切れた。

すぐに来ると言うことは、本当にすぐにこの場に現れるのだろう。

なんせ旧世界と魔法世界の垣根を越えてコンマ一秒で移動できる銃神が側にいるのだから。

とはいえ、こちらはすぐに移動することは出来ない。
例え一日であろうとも、最高責任者である二人が抜けるのは騒ぎを起こす原因になりかねないからだ。
そんなことを考えながらシェリルの方を振り向くと、シェリルが何かをしているのが目に入った。

「シェリルさん……手回し、早いですね……」
「当たり前です。こんな楽しそうなイベントに参加しないわけがありません」
「聞いてたんですか……」

どうやら先程に熱心に書類仕事をしていたのは間違いだったらしく、代理人書類を書いていたらしい。
代理人書類というのは、最高責任者が不在のときに代理を立てるための書類だ。
それは本来ならば一日から二日かけて許可を出されるのだが、あいにくとこれを承認するのはシェリルの役目。
許可も何も自分が許可をすればそれだけでいいのだ。
そしてほどなくしてシェリルの部屋に、いきなり扉が現れた。
驚くことはない。この扉が現れることは驚くに値しないからだ。
そこから現れたのは一人の銃神。

「あん？　なんだ、準備万端みたいだな」
「当たり前です。では行きましょうか」

現れた銃神の言葉にシェリルがそう答えると、ユーリは若干呆れたように苦笑いする。
そして、扉を潜った。

◇

ユーリはともかく、シェリルまでもが私の店を手伝ってくれるとは思わなかったな。
しかも何やら久しぶりに羽を伸ばせるとばかりに周りを見渡している。
とはいえ今から店の手伝いをやらせるわけにもいかないだろう。
今日の夜に行われる『学園全体鬼ごっこ』の説明もせねばならぬからな。

「シキ兄、ティアちゃんってどこにいるの？　お見舞いに行きたいな」
「それは私も同感ですね。久しぶりにティアさんにも会いたいですし」
「そっか。じゃあ行くか。でもこっからだと微妙に遠いんだよな……」

そんなことを呟きながら、私達はティアがいる救護室に向かって歩き出す。
『銀竜の旅団』がある場所はウルティマホラを行っていた場所からかなり離れており、その場所の近くにある救護室に行くのは以外にも時間がかかる。
しかもこうも人で賑わっているとなると、通常よりも時間がかかる恐れがある。
別に屋根の上などを移動しても構わぬならそうするが、さすがにそこまではしない方がよいかもしれんな。
なんてことを考えていると、私の手を誰かが握ってきた。見てみればそれはユーリだということが分かった。

「えへへっ。シキ兄、手繋ごう？」
「いい歳こいて手なんか繋ぐのか？」

「はうっ……。だ、大丈夫だもん！！　竜族は人間に比べて成長が遅いから！！」

そのような問題なのだろうか……？

確かに竜族は人間に比べれば肉体の成長は遅く、何十年も生きた私でさえまだ二十代前半の肉体を保っている。

ユーリに至っては十代後半の肉体年齢だし、人間の女性からしたら歳をとったように見えないのは羨ましい限りだろう。

まぁ、これが人間と亜人との違いなのだろう。

なんてことを考えているのもつかの間、今度は逆の手を握られる感覚が来る。

「お前もか。俺と手なんか繋いでなんか意味でもあるのか？」

「……ある。シキには分からない」

「そ、そうか。まぁ、これなら迷子にもならないだろうし別にいいか」

「なんでそのような考えになるのでしょうか……。鈍感振りは健在のようですね……」

何故かシェリルに呆れられてしまったのだが、なにか間違ったことでも言ってしまったのだろうか？

いやはや相も変わらず女性の考えていることは理解できん。

そして何気ない会話をしながら、ようやく救護室に到着することが出来た。

カーテンを開けて、ティアがいると思われるベッドを見る。

「ん？　おぉ……ユーリにシェリルさんか。どうしたんだ？」

するとそこには全身が包帯だらけのティアがいた。

昨日も私はここにやって来たのだが、体勢が全くといっていいほ

どに変わっていない。
やはりあれだけの戦闘を行い、まだ二日しか経過していないのだから動けるはずがないか。
あれで動けるならば神格の力があるか、完全無欠のチートな肉体を得ているかのどちらかだろう。
残念ながら今のティアには神格の力もなければ、完全無欠のチートの肉体をもない。
あと二、三日は動けはしないだろう。

「ティアちゃん、そんなに無理しちゃダメだよ？　ティアちゃんだって女の子なんだから」
「あのな、オレを女扱いする奴なんかユーリとエルくらいだぜ？」
「え～、そんなことないよ～。シェリルさんだってシキ兄もティアちゃんのこと女の子だと思ってるはずだよ？」
「……」

なんだ、そのユーリを何とかしてくれと言わんばかりの目は……。
私に助けを求めても無駄だというのがなぜ分からないのだろうか。
義理とはいえユーリは私の妹だ。一度言ったことを曲げるようなことはしまい。
それに、私もユーリと同じ考えだ。

「俺もティアは女の子らしいと思ってる」
「ほらねほらね？　だから無理しちゃダメだからね」
「それはユーリだけには言われたくないよ。……まぁ、努力する」

ティアは小さくそう呟くと私達がいる側と反対側を向く。いわゆるそっぽを向くという奴だ。
こういう反応が女の子らしいと私は思うのだが、ユーリはどこ辺

りが女の子らしいと思ったのだろうか？
私の感性はどことなくずれているからな。他人がどう思っているかは分からぬ。
なんてことを考えていたのだが、ユーリがプルプルと震えているのに気付いた。
はて、いったい何があったのだろうか？
そして次の瞬間。何があったかを理解することが出来た。

「ティアちゃんかわいい～～～～っ！！」
「ちょっ、待――――――――」

刹那。生物が発したとは思えないほどの悲鳴が救護室に響き渡った。
ユーリ……それはないだろう……。
今のティアはほんの少し動いたくらいで刀を二、三本突き刺される激痛が来るというのにも関わらず、思いきり抱きついたのだからその痛みは想像を絶するだろう。
これには同情をせざるを得ない。合掌。
もはやティアは痙攣して顔が真っ青になっており、生きているのが辛そうだ。

「ご、ごめんね、ティアちゃん……」
「だい……じょうぶ……」
「大丈夫には見えないのは私だけではないはずでしょう……」
「……合掌」
「ドジなのはアリアドネーの重役になっても変わってないみたいだな」

というよりむしろ酷くなったとさえ思える。
明らかに重症を負っているティアに問答無用で抱き着く辺り、『

うっかり』のスキルも付与されたのかもしれんな。
そしてティアよ。ユーリに心配をかけたくないのは分かるが、だからって無理して言葉を発する必要はないだろうに。
……あとで『創造再生』を使って怪我を治した方がいいな。というより一昨日の時点でやれば良かったな。

「とりあえず『学園全体鬼ごっこ』の説明をするけどいいか？」
「……構わない」
「別に構いません」
「う、うん。ホントにごめんね、ティアちゃん」

未だに顔が真っ青で嫌な汗を流すティアに謝るユーリを見て苦笑する。
あの痛みが引くのはいったいどれくらいになるだろうか？
そんなことを考えながら、私はユーリとエルとシェリルに『学園全体鬼ごっこ』の説明を始めた。

◇

「なるほど……。ですがそのように大掛かりなことを我々四人だけで大丈夫なのでしょうか？」
「大丈夫じゃね？　大掛かりっていっても別に戦うわけでもねェし、たかが鬼ごっこだ。四人もいれば大丈夫だ」

説明を終えて一番最初のシェリルの疑問に、私は適当に答える。
鬼が四人に対して逃げる側は文字通り桁が違うが、この学園内で逃げるとなればそこまで逃げる場所は限られてくる。
それに、異端審問会に属している輩ならばシェリルやユーリ、エルなどの美人が鬼とあらば自分から捕まりに行きそうな気もするが……そこは気にしないでおこう。

さて、『学園全体鬼ごっこ』が始まるまであと数分しかない。
着々と準備も進んできているようだし、私達も動き出すとしよう。

「鬼は最初世界樹の下で待機だってよ。案内するからついてきてくれ」
「……（こくん）」
「分かりました」
「分かったよ。ティアちゃん、ホントにごめんね……？」

最後までユーリはティアに謝り続けていたが、ティアは気にしてはいないだろうな。
こうして、『学園全体鬼ごっこ』の幕はあと少しで切って落とされる。

第七十撃『麻帆良祭クライマックス。さぁ、鬼の数を数えろ！！』

麻帆良祭の最終日。
そこで行われる麻帆良全体を巻き込んだ鬼ごっこがある。
私、龍宮真名（マナ・アルカナ）は当初は適当に逃げて捕まろうと思っていた。こんな下らないことに参加する意味もなければ、生き残る意味もない。
しかし、だ。私はてっきり鬼役は麻帆良の魔法先生共がやると思っていたのだが、どうやらそれは私の認識違いだったようだ。
魔力で視力を強化し、鬼が待機しているはずの世界樹の下を見る。

（なんでシキさんが鬼役なんだ……！？）

銀色の長い髪。中性的な顔立ちは男女ともに魅了するほどに整っている。執事服を着こなし、切れ長い瞳は全てを見透かしているようにさえ思える。
そこにいたのは私の師であり、銃神であるシキ・K（クロカミ）・アスタロトだった。
だがシキさんだけがそこにいるわけではない。
他にもポニーテールの女――確かシェリルさん……？――や竜人の女――こっちはユーリさん？――、あとは無口そうな女――……エルさん？――がシキさんの周りにいる。
きっと彼女達はシキさんの昔からの知り合いなのだろう。四人は親しげに離しており、ユーリさんとはかなりベタベタしている。

（シキさん。貴方はどこにいても女性と一緒みたいだな……。さすが朴念稔のフラグ一級建築士だ……）

私と出会う前、つまりは大戦期や神格事件を通して出会ってきた

のだろうが、どうしてシキさんの周りにはこうも女性ばかりが集まるのだろうか？

まだ私がヘラスにいたときは皇女であるテオドラ皇女。魔眼の使い方を教えてくれたティアさんなどが挙げられる。

ティアさんは別にシキさんに恋愛感情は抱いていないみたいだが、テオドラ皇女とは既に結婚している。

これ以上フラグを建てたらテオドラ皇女に何を言われるか分かったものじゃない。

なんてことを私が考えていても仕方がない。

これはシキさんの問題なのだ。

今考えるべきなのはシキさんの鈍感ぶりではなく、『学園全体鬼ごっこ』をどうするかどうかについてだ。

（シキさんが相手なら、どう足掻いても逃げ切るのは不可能に近いな……）

仮に相手が魔法先生だったならば、逃げ切るのは赤子の手を捻るよりも簡単だ。

だが相手がシキさんとなれば私が全力で逃げたとしても、赤子の手を捻るよりも簡単に捕まえられてしまうだろう。

さらにいえばあの周りにいる女性達もシキさんまでとはいかないが、確実に相当な手練れだろう。

少なくとも私やアスナや古（くー）、いや……この学園にいる誰だろうとあの三人に勝てはしない。

それにシェリルさんからは私と近い何かを感じる。

私は半魔族（ハーフ）だが、シェリルさんは純粋な魔族だろう。

とにかく、相手がシキさんなら逃げ切らないわけにはいかない。

（そうなるとまずは、『学園全体鬼ごっこ』のルールをしなければな……）

――――学園全体鬼ごっこ。

それは文字通り学園全体の生徒が鬼から逃げるという、超規模な鬼ごっこだ。

逃げることが出来る範囲は麻帆良学園の敷地内ならどこまででも可能で、建物の中に入るのは禁止されている。

開始時刻は午後の六時からで、午前零時までの計六時間を逃げ切れば勝ちとなる。

逃げ切ることが出来ればそれ相応の賞品が与えられるが、それはあくまでも逃げ切ることが出来ればの話だ。

鬼役は全部で四人。これだけを聞けば逃げ切るのは簡単に思えるが、この戦力の大きさを知っている私たちからしたら絶望的だ。

ただ、私たちに勝機がないわけではない。

この鬼ごっこで原則的に禁止されているのは敷地内から出ることと、建物の中に入るということだけだ。

武器の使用まで禁止されているわけではない。

つまり、鬼に対しての武器の使用は有効になる。

まさか鬼役に大して武器を使う生徒がいるとは思ってはいないだろうからな。それを逆手にとらせてもらう。

（武器に困ることはない……。あとはいかに周りに気を配れるだけか……）

遠距離型である私にとってはこれは有利にことを運べる。

シェリルさんやユーリさん、エルさんの戦闘スタイルは分からないが、会わないようにすればどうということはない。

六時間……たった六時間さえ生き残ればいいのだ。だがこの六時間はかなりキツくなる。

これも修行だと考えればまだ良いかもしれないな。

「なに怖い顔してるの？　何かあったの？」
「……アスナか。古はどうしたんだ？」
「くーふぇはまだ一日目の疲労で動けないみたい。明日あたりには動けるようになると思うけど……」
「そうか。今日ばかりはそれで良かったかもな」
「どういうこと？」

私の言葉に素直な疑問を抱くアスナ。確かに鬼役の存在を知らないからこんな風に出来るんだろう。
鬼役が誰かを知ったときの表情を想像するだけで楽しみだな。
そんなことを考えながら、私は鬼役の存在を教えた。
すると予想通り、いや、予想以上の反応をしてくれた。
さすがアスナは面白いな。見ていて飽きない。
とりあえず鬼役がシキさん達であることは教えた。あとはどういった対策をとるかだな。

「でもさ、シキ達は一般人に合わせるんだから私達にアドバンテージがあるんじゃない？」
「……残念だが、それはないよ。そのアドバンテージはアドバンテージになり得ない」
「どうして？」
「分からないのか？　シキさん達は手加減してるんだ」

私の言葉でアスナはようやく私達にアドバンテージがないことを理解した。
そう、私達には一般人と比較してのアドバンテージは存在していない。むしろ私達の方が不利だとさえ言える。
確かにシキさん達は一般人に合わせて手加減をしている。
だがそれはあくまでも一般人に対してであって、私達を相手をするときは私達にレベルを合わせればいい。

つまりは見つかれば私達の方が体力を使うことになり、結局はアドバンテージはなくなるのだ。
こんなところで嫌なツケが回ってくるとはな……。
逃げる理由がないとはいえ、相手がシキさん達なら簡単に捕まるわけにはいかないんだ。

「武器の使用が禁止されていないんだ。私は武器を使うがアスナはどうする？」
「どうするって言われても私は肉体強化と大剣だから……どうやっても遠距離は無理ね」
「そうなると純粋に逃げるしかないな。私と一緒に来るならある程度は援護する」
「うーん……じゃあマナに任せる」

ある程度はといっても私に余裕がある間だけだ。それに、いざとなればアスナを囮にして逃げることも出来る。
援護をしてやるといってるのだから、それくらいは担ってもらわないとな。
……まぁ、アスナを囮にしても何分時間を稼げるかは目に見えているから、結局は自分の力に頼るしかないか。

「ねぇ、私を囮にしようとか考えてない？」
「さてな。考えてると思ってるなら、そうならないように気を付けるといい」
「それじゃ一人じゃ出来ないからマナに頼ってるのに意味ないじゃない！？」

なんだ文句の多い奴だ。
私だって誰かを構ってる余裕なんてないんだから、援護するだけでもありがたく思ってもらいたい。

……というか、なんで私がアスナを囮にしようなんて考えているのが分かったのだろうか？

昔、シキさんが言っていたが、女には他の人間の思考を読む力があるらしい。

聞いたときは馬鹿馬鹿しいと思っていたが、今のアスナの反応を見ると強ち間違ってないのかもしれない。

となると私にも使えるはずなんだが、未だに使ったことはないな。というより使えないだろ、普通は。

なんてことを考えていると、世界樹の方から花火に似たものが打ち上げられる。

学園全体鬼ごっこの開始の合図だ。

「行くぞ、アスナ。たった六時間だ。絶対に生き残る」

「当たり前よ。シキ達を負かしてやるんだから」

私とアスナは拳をぶつけ合わせながら、世界樹の方を見る。

そこから四人の人影が四方に散った。

◇

学園全体鬼ごっこの開始を知らせる花火にも似た音。

それを聞いた私達は、今まで行っていた会話を中断して三人の方に向き直る。

今から六時間は私達四人は鬼役として麻帆良の生徒達を捕まえなければならない。

もちろん捕まえるというのはあくまでも鬼ごっこでの話だ。実際に捕まえるわけではない。

私達四人がいれば正直六時間どころか、二十分ももたないだろうが、あくまでも生徒を楽しませるためのイベントだ。

空気を読まないで次々に捕まえていくことなどしたくはない。

とはいえ、役割を決めないことには始まりはしないだろう。

「よし。じゃあシェリルは東、ユーリは西、エルは南だ。俺は北に向かう」

「分かりました。ところで気になったのですが……」

「ん？　なんかあったのか？」

「えぇ。この鬼ごっこには魔法先生は参加してはいないはずですよね？」

「あぁ。全ての魔法先生は生徒に危険がないようにしてるからな」

「分かりました。となると……」

私の言葉で何を理解したのかは分からないが、シェリルは顎に手を当てて何かを考え込んでしまっていた。

……いったい何を考えることがあるのだろうか？

考えても分からないが、シェリルにはシェリルの考えがあるのだろう。それを一々詮索する必要はあるまい。

こんな会話をしている間に生徒達はバラバラに散り、まばらになってきている。

さて。全員を捕まえる気ではあるが、いったい何人私達に足掻くことが出来るだろうか……。

アスナやマナは最後まで残ることを想定し、あとは何人残るかが楽しみだな。

「じゃあ行こうか。三時間経ったらもう一回集合するか」

「……承知」

「うん。分かったよ、シキ兄。僕、頑張るからね？」

「期待してるぜ？　――――散！！」

私がそういうと三人が一斉に私が指示した方角に向かって飛び出すのが見えた。

同じように私も飛び出し、私から逃げている生徒をロックオンする。
さすがに瞬動も虚空瞬動も、それに準じた力を使うわけにもいかないために今は走っている。
今さらに考えてみればこのように走るなど珍しいかもしれんな。
大抵の場合急いでいる時は瞬動などを使っているからな。
とはいえ、走ったとしても結構な速さが出る。ここで余りスピードを上げれば面白くはない。

（こんなことが出来てるって思うと、平和を実感できるな……）

ここ数年は戦いという戦いを経験してはいないが、修業はマメに行っている。
このように平和な日常を見ていると修業など必要ないように感じる。
だが、それは間違いだ。今このときにも、夜光がきっと動いている。
私も『憑格』に対して何か手を打っておいた方がよいかもしれんな。

（……こんな考えはやめるか。今はこの日常を楽しもう）

すぐに暗い考えになってしまうのは、いわば私の癖のようなものだ。
とりあえず暗い考えを頭の中から弾き出し、私に見つかってしまい走っている生徒達に視線を向ける。
数は……二十人ほどといったところか。
大方、一人で逃げ切るのは不可能だと悟った者達がパーティーを組み、最後まで生き残ったパーティーのメンバーと賞品を分け合うつもりだったのだろう。

だが。悪いがそれを見過ごすことは出来ん。なんせ、私は鬼なのだからな。
鬼の役目は逃げる者達全員を捕まえることだからな。
そんなことを考えながら、私は生徒達に捕まえたという合図であるタッチをする。

『チクショーッ！！　始まったばっかでこれかよ！！』
『てかせっかくチーム組んだのに集まってたら意味なくね！？』
『アホかよ俺らは！？』
『アホだアホだ～～～』

捕まったことで走るのをやめた生徒達が、笑い合いながらそんな会話を交わす。
さすが麻帆良祭といったところか、捕まったというのにも関わらず楽しそうにしている。
まぁ、捕まったことで気分を害してもらっても私が困るわけだし、この反応で良かったかもしれんな。
この『学園全体鬼ごっこ』で捕まった者達はこれが終わるまで、世界樹の下で待機していなければならない。
世界樹の下には様々な出店が出ており、開始直後に捕まったとしても飽きないように考慮されている。

「ルールは分かっているな？　捕まってもまだまだ何が起こるか分からん。気を抜かず待機していると良い」
『了解ッスッ！！』
『つかよく見たら銀竜の旅団の店長じゃね？』
『……リア充に捕まえられたあああああああああ！？！？！？』

鬼役が私（シキ）だとようやく理解した生徒達の一部が、何故か絶望した

ような表情で膝をついていた。
リア充というが、別にリア充にはなっていないような気がするのだがな……。
毎日は忙しいし、エヴァさんやイヴは唯我独尊だし、面倒事が舞い込んできたりと中々に騒がしい生活を送っていると私は思っている。
未だに異端審問会の輩に絡まれたりもするし、どう考えてもリア充にはなれんと思う。
とりあえずざめざめと泣いている生徒を見て私は苦笑いをしながら、次の標的を探すために周りを見渡す。
さすがに鬼を前にして出てくる輩はおらぬか。まぁ、探すというのも鬼の努めであり楽しみというものだ。

『ゲッ、こっちにも鬼がいやがるぞ!?』
『さっきのポニテ美人もヤバかったけどこっちの銀髪美人もヤバイぞ!?』
『あれ？　あの人、銀竜の旅団の店長さんだよ？』
『ホント!?　さ、サイン……って鬼役だから貰えないよぉ……』

辺りを探していると、通路の角からまたもや複数人の生徒が現れた。しかも今回は男子生徒だけというわけでもなく、女子生徒も混じっていた。
……というか、私からサインなど貰ったとしても魔法世界でないのだから何の意味もないと思うのだがね。
魔法世界であれば私のサインはかなり値打ちがあるらしい。
なにやらオークションでとてつもない額で売り出されていたのを見たことがある。
しかしまぁ、鬼を前にしてよくもそこまで気楽にいられるものだ。
少しはマズイと思ったらどうかね？

（……捕まえてもいいんだろうか？）

私を前にして何か言い争いを始めているため、捕まえてもいいのか悪いのかを戸惑ってしまう。

……このまま言い争いを傍観していても始まらないだろう。いや、正確には鬼ごっこは始まってはいるが……。

とにかくこの言い争いを待つわけにもいかんな。

「捕まえた。少しは周りを見た方がいいぞ？」

『さ、触ってもらえた……？　きゅぅ……』

『あ、あれ！？　そんなに嬉しかったの！？』

『くっ、さすがフラグ一級建築士……だが僕は負けない！！』

『お前じゃ勝ち目ねーだろ』

『ぐさっ！？　痛い……あの夏に彼女に言われた別れの言葉が痛い！！』

『知るかァッ！！』

……なぜ私が捕まえる者達はこのように変わり者が多いのだろうか？

一人の女子生徒は私に触れられたのかそんなに嫌だったのか気絶してしまい、二人の男子生徒は漫才を繰り広げている。

ところで、あの夏に彼女に言われた別れの言葉が知りたいのは私だけだろうか？

そんなことはさておき。

学園全体鬼ごっこはまだ始まったばかりだ。探すのは……といっても全員の居場所は既に捉えているのだが、まぁ、そこは気にしないでおく。

とにかく、一々探すのは面倒極まりないが、今はじっくりと探していくとしよう。

そんなことを考えながら、私はたった今捕まえた生徒達に世界樹

の下に行くように促して、再び走り始めた。

◇

シキ君に頼まれ『学園全体鬼ごっこ』なる物の鬼役をやっている私、シェリル・アリウス。

現在、一時間ほど経過した時点で私が捕まえた数はおそらく五百ほどに及ぶでしょうが、この学園全体の生徒総数は五桁ほどもいるはず。

一時間ほどしか経過していないとはいえ、もしかすればこの数は少ないのかもしれませんね……。

とはいえ、久しぶりの休日ということもあり、中々に楽しいイベントですね。

本来ならば逃げる立場に回ってみたかったのですが、これはあくまでもこの学園の生徒達が主役。

私のような外部の人間がそこに入り込む余地はないでしょう。

などと考えながらも私は捕まえることをやめない。

シキ君にはある程度は逃げられるようにして、何回かに数回は振り切らせろと言われていますが……正直この麻帆良の生徒は私の斜め上を行く。

まさか鬼役に対して反撃を繰り出してくるなどと、誰が考えるでしょうか。

（さすがにアレは焦りましたね……）

鬼役に対しての妨害工作や、武器の使用に関しては禁止令は出されてはいませんが、いったい誰が鬼役に対して反撃をすると考えるでしょうか？

否、誰も考えるはずがありません。基本的に近づけば捕まるというのに、玉砕覚悟で突っ込んでくるというのはあまりにも得策では

ない。

……と、私は思いますがこれはこれで面白い。

何人か一組でチームを組み、逃げ切れなくなれば誰かを囮にして残りのメンバーは鬼から逃げる。

その囮は捕まってしまうかもしれませんが、逃げ切った他のメンバーがいれば賞品は山分けに出来る。

在り来たりな作戦ではありますが、とても効果的と言えるでしょう。

（といっても、逃がす気はありませんがね）

確かに効果的ではありますが、その囮が鬼である私を足止め出来なければ元も子もありません。

……きっと私は受かれているのでしょう。麻帆良の生徒さん達の動きをいつも通り先読みし、捕まえてしまった。

アレはさすがに大人気なかったと思い、反省しています。

で、ですが今の娯楽が何もなく、暇を持て余していた私に助っ人を頼むが悪いのです。私は何も悪くはありません……。

ふと視線を上へと傾けると、屋根から屋根へと飛び移る二人の生徒の姿が見えた。

一人は黒曜石のような黒髪に褐色の肌の少女。もう一人は青と緑のオッドアイにツインテールの少女。

（あれは……マナさんとアスナさん？　しばらく見ない間に大きくなりましたね）

私が彼女達と出会ったのは、彼女達がまだ小学校一年生辺りのとき。そのことを考えると今の二人は成長したと言えるでしょう。

それと同時に、私の標的でもある。私は鬼で、彼女達は麻帆良の生徒。追いかけない理由がない。

私はコンクリートの床を軽く蹴り、跳躍して屋根の上へと飛び乗る。もちろん、二人を先回りしたような形で。

「お久しぶりです。マナさん、アスナさん」

「ちっ、しくじったか……」

「でもシキじゃなかっただけまだマシじゃない？　どっちにしろキツいのは変わんないけど」

私の言葉に対して即座に双銃を構えるマナさんと、木刀を構えるアスナさん。

この二人はもはや一般人の部類には判定されない。むしろ私たち側の人間だと言えるでしょう。

ならば、ある程度は手加減はしますが、武人に対しての動きでも構わないでしょう。

武器を構える二人に対して私は素手。ですがわざわざ戦う必要はどこにもありません。ただ一度だけ、二人に触れれば良いだけの話。

この足場の悪い屋根の上の場合は、恐らくアスナさんは見掛けだけでマナさんが本命でしょう。

狙撃の場合は足場が悪くとも、剣士ほどは影響はないはずですから。

お互いに隙を探り合う。距離を一定に保ち、いつでも動けるようにする。

そして、マナさんの眼が蒼色に染まり上がると同時に動き出す。

（狙うは――――――――）

とりあえず前衛であるアスナさんはほとんど機能はしない。ならば狙うのは後衛であるマナさん。

マナさんの狙撃はシキ君仕込みの正確無慈悲な狙撃のはず。狙いを外すなんてことは考えない方がいい。むしろ全弾見切るつもりで

いかなければならない。
完全に鈍った体を解すにはちょうどいい相手でしょう。
私はそう思っていたが、それはすぐに思い上がりだということを知らされる。

「――――ッ！！」

前衛（アスナさん）を無視してマナさんに動いていたのですが、捕まることを物ともしないとばかりにアスナさんが打ち込んでくる。
仮にもアスナさんもシキ君を師と仰いでいる者の一人……侮っていること事態由々しきことだ。
私は走り出した勢いを急停止させ、そのままバック宙の要領でその場から回避する。
そこでマナさんが動いた。引き金にかけていた指を引き、銃口から魔力弾を放つ。
しかし狙いは私というわけではない。私が足場として着地しようとしている屋根だ。
見る限りでは魔力弾には大した威力はない。狙いが見えないまま着地しようとしたのですが、その瞬間に魔力弾に当てられた屋根が破壊された。

（そういえばマナさんには『直死の魔眼』があると言っていましたね……）

私を直接狙わなかったのは、おそらく『直死の魔眼』で私を殺してしまわないためなのでしょうが……嘗められたものですね。
命をかけた戦いも経験したことがない小娘に手加減されるというのは、私のプライドに関わる。
屋根に穴を開けたのはそこに私を落とすため。
そんなちんけな罠にかかるほど、私はおちぶれてはいない。

虚空瞬動で方向を転換させ、私は二人の背後に回るように移動する。

「くっ、速い……」

「マナ、伏せて！！」

マナさんが伏せると同時に、アスナさんの木刀が横凪ぎに振るわれる。

それを軽く後ろに引いて回避したが、私が次の行動に移る前にアスナさんとマナさんは逃げてしまっていた。

逃がした、というのもありますが、私が見せた隙を的確に突いてくる辺りやはりシキ君を師事しているだけのことはある。

（これは残りの一時間辺りは面白くはなりそうですね……）

私は瞬動を使用して逃げていく二人を見ながら、僅かに頬を綻ばせた。

◇

同時刻。

時を同じくして鬼役をしていたエル・イーグルスも多数の生徒を捕まえていた。

エルは美人の部類に入る女性ではあるが、基本的に無口無表情であるために、そんな彼女から追い掛けられるのは正直寿命が縮む勢いである。

そんなことを知らないエルは、黙々と生徒を捕獲していく。

（……まだ一時間）

エルが捕まえた人数はまだシェリルが捕まえた人数の半分ほどだ。
人口が五桁にも及ぶ麻帆良の生徒を六時間以内で捕まえるのだとしたら、かなり心許ない数値だ。
そもそもエル・イーグルスという存在は手加減というものを知らなかった。
今まで、どの局面に対しても全力であたり、死力を尽くしてきたために手加減などをすることが出来なかった。
それは今も同じで、手加減な度したことがないために、加減が分からないのだ。
故に今のエルは一般人が行ったときの鬼より少しタフなだけで、（鬼としては）大した恐怖にはなり得ていないのだ。
このままでは四人で全員を捕まえるには、最終的には本気を出さなくてはならなくなるかもしれない。

（……あれ？）

ふと、エルの視線の先に一人の少女が映った。
麻帆良の制服に身を包んでいることから、少女は麻帆良の生徒なのだろう。身長はかなり高めで、糸目である。
しかし問題はそこではない。身のこなしが普通とは違っていた。
言うなれば戦いを知っている者の動き。
そして、書物を結構読み漁っているエルの思考にある二文字が浮かび上がった。

（……忍者？）

そう。エルが糸目の少女と重ね合わせたのは『忍者』という存在だった。
なんの武術も身に付けていない者には分からないだろうが、糸目の少女の動きは目立たないがかなり効果的と言える。

自らの気配と足音を消して、鬼役から死角となる場所を移動している。おそらく麻帆良の魔法先生でも騙せるほどだろう。
だが相手が悪かった。仮にもエルは神格事件も大戦期も経験し、魔法世界でも上位に食い込むほどの力となっている。
さすがに騙すことなどは出来ないだろう。

（……捕まえる）

そうと決まればあとは行動するのみ。
まだこちらの存在に気付いていない糸目の少女に向かって、エルは急接近する。
もちろん相手が一般人と違うため、少しだけ出力を上げている。
ある程度接近されたところでこちらの存在に気付いた糸目の少女は、エルが並の武人でないことを瞬時に見抜いて本気で逃走を開始する。
一瞬のうちに本気で逃げなければ捕まると思ったのだろう。
建物の壁を連続で蹴り、屋根の上へと逃げる。

（……逃がさない）

糸目の少女が何回か壁を蹴ってようやく上にたどり着いたにも関わらず、エルはたったの一回の踏み込みだけで屋根の上へと上がる。
しかし、それと同時にエルへと手裏剣が投げ付けられ、それを隠し持っていたモデルガンで撃ち落とす。
ちなみに弾丸は魔力で強化しただけの普通の玉だ。
この程度では足止めにもならないと悟っていたのか、糸目の少女はエルの周りを高速で動き、鎖で身動きを取れないようにした。
捕まらないことを前提とした動きだが、少し間違えれば捕まっていただろう。

「普通ではないと思っていたでござるが、まさかここまでとは……」

糸目の少女は鎖で身動きを取れなくしたエルを見ながら、そのようなことを呟く。

ある程度距離を置き、何があっても対応できるようにしている辺りエルを強者だと思っているのだろう。

しかし、それでもまだ甘い。糸目の少女はまだエルを嘗めている。

「……それで」

ポツリと呟いたエルの言葉に、糸目の少女は警戒の色を見せる。

だがこの時点でその反応は間違いだ。エルを動けなくした時点で逃げれば良かったのだ。

正直に言おう。

――――エルと少女との実力は、天土地ほどに違う。

「捕まえたつもり？」

鎖で捉えられているように見えるが、実際はそんなことはない。

両手を広げれば千切れるほどだ。　鎖を千切ったエルは表情を驚愕の色に染めている糸目の少女に迫る。

そして、糸目の少女に触れた――――刹那、糸目の少女の体が丸太に変わる。

いわゆる変わり身の術という奴だ。

「……」

逃げられたのではない。逃がしたのだ。

このレベルの相手がこんな序盤で捕まえられるのは面白くないと判断したのだ。

千切った鎖を捨てながら、エルは再び生徒を探し始めた。『学園全体鬼ごっこ』はまだ始まったばかり。

残りの制限時間――――四時間五十二分。

第七十一撃『逆転の風。さぁ、鬼の数を数えろ！！』（前書き）

今回で麻帆良際編終了です！！
では、どうぞ！！

第七十一撃『逆転の風。さぁ、鬼の数を数えろ！！』

「なんとか逃げ切ったか……」
「でも見逃してもらった気がするけどね」

アスナの言葉に、私はそうだなと一言だけ答える。
逃走に私とアスナが使ってきたルートから、シェリルさんや他の鬼役が追いかけてきていないかを確認しながら、私は双銃をイヤリング型の武器庫にしまう。
周りに誰もいないことを確認すると、直死の魔眼のスイッチもオフにし、溜め息にも似た息を吐く。

「でも、まさかこんな早くから見つかるなんて思わなかったわね」
「あぁ。しかもシキさんの次に面倒な人に目をつけられた」

アスナの言ったように、終盤になればシキさんや他の人達ともぶつかると思っていたが、まさかこんな序盤から当たるとは思わなかった。
シェリルさんがなんとか私達を侮っていたから隙を突き、事なきを得ることが出来たが、次もこう上手くいくとは思えない。
それに、シェリルさんは私達をわざと逃がした節がある。
まるで楽しみは後に残しておこうと言わんばかりの態度だ。
一死報いたいところではあるが、今の私とアスナではどうにかなる相手じゃない。
手加減してくれてたさっきならいざ知らず、次に見つかったら逃げ切れはしない。

「どうする？　こんな早くから見つかったってなると、この先に見

つからないなんて保証はないし……」
「今はまずシェリルさんとシキさんにぶつからなければ問題はないよ」
「え？　それじゃ、ユーリさんとエルさんには勝てるってこと？」
「バカなことを言うな。無理に決まってるだろ」
「……」

なんだその期待させておいてそんな答えかよ、みたいな目は……。
いくらユーリさんとエルさんが、シキさんやシェリルさんよりも実力が劣っているとはいえ、今の私達よりは確実に一回りも二回りも強い。
まともに正面からやり合ったら五分持てば良い方だ。
だけど、これは本当の戦いなんかじゃない。ただの鬼ごっこ、そこが付け入る隙になる。

「おそらくユーリさんとエルさんは鬼ごっこ向きの人達じゃない」
「鬼ごっこ向きの人達じゃない？　それってどういうこと？」
「正確にはこの鬼ごっこ、だがな」

私はそういいながら、アスナに説明を始めた。
まずシキさんとシェリルさんは実力が高いことから、手加減のやり方を知っているはずだ。そうじゃなきゃ模擬戦でもしたときに相手にならないからな。
対してユーリさんとエルさんはおそらくやり方を知らないはずだ。きっとシキさんには手加減するように言われてるはずだが、やり方を知らないなら強さを極端に下げなければならない。
私達相手でも極端に手加減した状態なら、いくらでも逃げることはできる。

「ただ……これはシキさんとシェリルさんに会わなかったときの話

だがな」
「つまり、二分の一の確率で捕まるってこと？」
「そう言うことになるな。まぁ、いざとなれば私には奥の手がある」
「そう言いながら私を見ないでほしいんだけど？　やっぱり囮にする気なんじゃないの！？」
「当然」
「即答しないでよ！？　バカマナ！！」

心外だ。私の学校の成績はアスナよりも良い。とはいえ、アスナも中々に点数はいい。
……今はそんなことはどうでもいい。
本当の戦いならさすがに囮なんかには出来ないが、たかが鬼ごっこなら囮にしたってバチは当たらないはず。
元々、接近戦が得意なアスナは鬼役が自分より格上な以上、一般人にカテゴリされても間違いない。
少しだけ一般人よりも有利というだけの話だ。
かくいう私も遠距離型とはいえ、一番厄介なシキさんが遠距離型であるから動きは先読みされてしまう。
結局は私もアスナも一般人よりほんの少し有利というだけに過ぎない。

「私も遠距離の戦い方、修業した方がよかったかな……？」
「繊細な作業が不向きなアスナじゃ無理だよ。銃を甘く見ない方がいい」
「いや、見てないけど。嘘に決まってるじゃん。こんなことのために不向きなことしても意味ないしね」

アスナはそう言いながら笑みを浮かべる。
なんだ、分かってるじゃないか。自分が銃を使う才能がないことくらい。それに、アスナは銃なんか使わなくても十分に強くなれる。

こんな話をしながらも私は警戒を怠らない。いつ、どこから仕掛けてくるか分かったものじゃない。

なんてことを考えていると、不意に真上から何者かの気配を感じた。

アスナも同じように気配を感じ取ったのか、木刀を構えたのだが、誰が来たかを確認すると構えを解いた。

「楓か。驚かせるな」

「すまないでござる。鬼役に出くわしたでござるよ」

「……特徴は？」

「特徴でござるか？　むーん……無口そう、でござったな」

「エルさんね。でも、エルさんから逃げるなんてさすが楓ちゃんね」

「いや……。手加減されていたでござるからな」

……なるほど。今の話によればエルさんは楓クラスにまでは落ちてるということか。

楓には悪いが、私とアスナなら楓を越えることなどは容易い。ならば私達でもエルさんから逃げることは出来る、ということだな。

それにここで楓に会ったのも何かの縁だ。一緒に行動するのも悪くない。

「楓、鬼役の実力は確実に私達より上だ。ここは協力した方がいい」

「あいや分かった。拙者としても二人と一緒の方が心強い」

よし。私達三人がいればエルさんとユーリさん、もしかしたらシェリルさんに出会しても逃げることが出来るかもしれない。

シキさんに出会せば確実に捕まるが、逆にいえば見つからなければいいんだ。

そこのところは注意しておけば問題ない。

「いつまでも止まっているわけにはいかない。なるべく見つからなそうな場所に行こう」
「そうね。楓ちゃん、頑張ろうね」
「にんにん。分かったでござる」

残り時間はまだ四時間半もある。
……生き残れるかは心配だが、やるしかない。

◇

――――学園全体鬼ごっこ、残りの制限時間、一時間二十七分。
あれから既に三時間以上が経過した。さすがにあのペースでは全ての生徒を捕まえきれないと判断した私は、ペースを上げて生徒捕獲に乗り出した。
一時間で三桁程度の人数しか捕まえられなかったために、ペースを上げたのだったのだが……少々やり過ぎてしまったかもしれんな。
麻帆良学園全体に感じる人間の気配は、鬼役である私達や魔法先生を除けば、その数は四捨五入をしたとしても百人にも満ちてはいない。
……マズイな。さすがに全員を捕まえるつもりだったとはいえ、こんなにも早くに百人ほどしかいないとはな。

（まぁ、考えても仕方ねェか）

まだマナやアスナといったチートなメンバーは残っている。
何故か今は私も知らない誰か二人と一緒にいるようだが、あの二人が一緒の行動に選んだ以上、普通ではないのだろう。
さて。今私がこんなことを考えているうちに、シェリルやエル、ユーリが次々と生徒を捕まえているようだな。

残っている数はどんどんと減っていっている。八十……七十五……七十……随分と短い時間で捕まえていくものだな。

（このままなら俺が動かなくても済みそうな気がするが……。仕方ない、意図的にあいつらを残してるみたいだが、そろそろ終幕（フィナーレ）といくか）

とん、とコンクリートの床を蹴りだし、アスナ達四人の気配のする方向へと向かう。

私が接近してくるのに気づいたのか、今までゆっくりだった動きが速くなり、私から離れていくのが分かる。

しかもただただ適当に動いているのではなく、何か目的があって移動しているように思える。それと同時に思う。

私をとある場所に誘い込んでいるように感じる。

なんだ？　あと一時間以上もあるというのに私に狙われ、尚且つ逃げ切るための策でもあるというのか？

もしそうであるというならば、私はその策にあえて乗るとしよう。せっかくの祭りだ。

罠と分かっていたとしても、それに乗るのが興というものだ。

（……なんだ、他の三人も気づいたってのか？）

私が四人の元に向かっていると、シェリルら他の三人も四人に気づいたのだろう。おそらく罠と分かりながらも私と同じようにかかりに来たのだろう。

……あの四人は本当に大丈夫なのだろうか？

堂々と罠を仕掛けており、さらに誘い込んでいるのを見ると誰が相手でも罠にかける自信があったのだろうが、四人同時に相手に対処は出来るのだろうか？

少なくとも、私たち四人が集まり戦うとなれば魔法世界を滅ぼす

ことは可能な実力になる。
そんな私達を相手に罠を仕掛けられるのか……手加減をしているとはいえ、私が心配になってくる。
罠が失敗すれば捕まってしまうというのは分かっているだろうに。

「シキ君も、あの者達のところに向かうのですか？」
「あぁ。思いっきり誘ってやがるからな」
「そうですか……。私達を相手に大丈夫なのでしょうか？」
「お前も考えてたのか。まぁ、行ってみるしかないだろうな」

シェリルとエル、ユーリを連れてあいつらが誘っていると思われる場所へと着地する。
そこは至って普通の路地だった。路地とはいえ、そこは複雑に絡み合っているあまり人通りのなさげな通路……。
見た限りでは罠が相当に仕掛けられているようだが、簡単に見破ることが出来るほどに安易な仕掛けだ。
まさか、こんなのが私達を捉えるための策だとでもいうのか？

（気配は……四つ？　いや、四つの一つが異様に薄く、さらに薄い気配が十六体……どういうことだ？）

考えられる理由は分身を作った、というところだが、いったいどこの忍者が分身を作ったのやら……。
仲間の一人に忍者でもいるのか？
なんてことを考えていると私たちの周りに鎖が展開される。しかもその鎖には爆符が大量に取り付けられている。
……まさかここで爆発させる気か？
そして次の瞬間。大量に取り付けられている爆符が次々に爆発し始めた。連鎖が連鎖を呼び、次々に大きな爆発になっていく。
両手を一回だけ合掌させ、そのあとに周りに結界を創り上げる。

爆発は私が創りあげた結界に阻まれて直撃こそしなかったものの、爆風により周りが見えなくなってしまった。

（さて、これで一つ目の策は終わったぞ。次はどんな策を俺に見せてくれるんだ？）

爆風により視界が確保できない以上、気配でこいつらの居場所を察知するしかない。

もちろんそんなことは息をすることに等しい。まさか、あいつらもこの程度で私の包囲から逃げられるとは思ってはいないだろう。

敵方が動いた。分身を使っているために気配を多く感じるが、気配が薄いモノを集めれば結局は一つの気配となる。

現時点ではこの気配の薄い相手は無視して構わないだろう。

とはいえ、敵意を持って向かってくる相手を無視するわけにもいかないか。

右からきた一人の腕を掴みあげ、後ろから接近してきた一人に打ち付ける。さらにそのまま後ろ足を振り上げて一人を吹き飛ばし、空中で腰を捻って待機していた一人を蹴りつける。

（分身だけでやるつもりか？　嘗めているのか、策のつもりか……。……ん？）

ふと、私の手足に呪符的なものが貼り付けられていることに気づいた。それを確認すれば爆符であることに気づいた。

どうやら分身による攻撃はあくまでも陽動で、本命は爆符による爆撃攻撃。しかも張られているのは一枚や二枚ではない。

そして、爆符が光り始めたと思った瞬間に爆符は爆発を起こした。

先ほどの鎖爆符のように連鎖の嵐を産み、一枚の爆符ではあり得ないような大爆発を発生させる。

この爆発は私を一番の対象とし、周りの三人を巻き込めれば良し。

巻き込めずとも私は撃破できる、というところだろう。

（甘いな。それでは逃げ切れ……あ？　逃げてねェじゃん）

これは『学園全体鬼ごっこ』という鬼から逃げるためのイベントであり、私達を撃破するイベントではない。

だというのにも関わらず、こ奴等は私を撃破せんばかりの勢いで反撃してきている。

……私が言えた義理ではないが、目的が変わってきていないか？

ふとした疑問が浮かび上がったが、おそらく鬼役のシェリルやユーリ、エルもその事には気づいてはいないだろう。

否、気づいていないのではなく忘れさせられている。

「――――もらったァッ！！」

「む？」

後ろから聞こえてきたアスナの声に反応し、私は振り向き様に拳を突き出す。

ちなみに先ほどの爆発で私が受けたダメージは皆無で、服が汚れた程度の損害しか出てはいない。

アスナは突き出された拳を木刀で防ごうとするが、私は私が突き出した拳のベクトルと、木刀が反発しようとするベクトルを同じ方向に修正する。

簡単にいえば私のただの拳による一撃が、普段よりも強力になるということだ。

案の定。耐えきれなかった木刀は真っ二つに折れ、私の拳はアスナに向かう。そして私がアスナに触れて、アスナを捕獲する。これで残りは三人。

「刹那！！」

「――――神鳴流奥義……雷光剣！！」

マナの声が聞こえてきたかと思えば、後方から懐かしい剣技の担い手が私に雷光剣を振り下ろそうとしていた。

さらにその後方からはマナが双銃を構えており、正面からは忍者少女とその分身たちが巨大な手裏剣を投げつけようとしていた。

なんだ、何が目的なんだ？　私達を相手にこのような小細工は無意味だと分かっているだろうに。

……狙いは私達を戦闘不能にすることではなく、別にあるとでもいうのか。

「歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）！！」

雷光剣を使おうとしている神鳴流少女の後ろから、私が一度だけ見せたことがある銃技『歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）』を使ってきた。

これは威力が若干低くなる代わりに、弾数と反射性に優れており、狭い場所で使えば絶大な力を発揮する。

おそらく、私達をこのように狭い路地に誘い込んだのはこの銃技を発動するためだろう。

後方からは雷光剣、前方からは大量の巨大な手裏剣、そして全体攻撃として全方位型の弾丸。

私ならともかく、肉体的には生身のユーリやエルは怪我をしてしまうかもしれんな。

シェリルはそれくらいでは傷一つ付かぬだろうがな。

「ユーリ、使って良いぞ」

「えっ？　でも、相手は生徒さんだよ？」

「構わん。そのうち一人は俺の弟子だからな」

「そういう問題なのかなぁ……？」

そういう問題だ、と答えながら足元に落ちた木刀を蹴り上げ、呆れ気味な表情をしているユーリに渡す。
私も指輪型の無限武器庫から非殺傷型の銃と、刃を潰してある小太刀を取り出す。
するとその銃と小太刀がすぐにエルとシェリルに奪われた。
……元々渡すつもりではあったが、せめて一言ぐらい声をかけてもらいたい。

「魔力装填――――魔刀炎影化。夜笠(よがさ)一刀流一ノ型『椿』」

木刀を上段に構えたユーリは炎系の魔力を木刀に流し込み、木刀に炎を纏わせる。
とはいえ、木である木刀に炎系の魔力を流し込んでいる以上、雷光剣を受け止めたり弾き返したりするのは一回が限度だろう。だが、単純な剣技でいえばユーリが上。
弘法筆を選ばず、ということわざがあるだろう。
――――夜笠一刀流。この剣技は主に男というよりも、女のためにユーリが作り上げた剣技だ。
これには男のような力業は必要ではなく、見切ることができる『目』さえあればどれだけ力が無かろうと簡単に勝つことが出来る。
そのうちの一ノ型『椿』は相手が近接型であることが前提だが、相手の動きが振り抜かれる前に剣を前に置いてくるだけでいい。
するとどうだろう。振り抜かれる前に置かれるということは、振り抜くと同時に自ら攻撃にあたりにいくということだ。
それは神鳴流少女も例外ではない。夜笠一刀流一ノ型『椿』の一撃を避けきることが出来ず、ユーリに捕まえられていた。

「夜笠二刀流一ノ型『紅椿(あかつばき)』」

一方、小太刀を構えたシェリルは夜笠一刀流の応用型である夜笠

二刀流を使用する。
夜笠二刀流は一刀流とは違って置いてくるというよりも、受け流し、やり返すといった方が主流な剣技だ。これもユーリが開発をしたのだが、完成させたのはシェリルだ。
小太刀を構えたシェリルが、こちらに向かってくる無数の巨大な手裏剣の軌道を見切り、そのベクトルに逆らわないようにしながら全て受け流していく。
だが、二刀流一ノ型『紅椿』の真骨頂はまだ終わらない。
受け流した手裏剣はベクトルに逆らわないで受け流したことにより、そのまま投げた忍者少女へと帰っていく。
余りの予想外の攻撃に反応しきれずに、忍者少女はそのままシェリルに捕らえる。

「……歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）」
「なっ！？」

驚いたのはマナだった。
それもそうだろう。マナは私があの技を見せてから何日も修業を重ねて、ようやく使えるようになったというのに、エルは見ただけでそれを我が物としたのだからな。
エルの技術面での才能は常軌を逸している。どれだけ高度な銃技だろうとも、何回か見ただけで構造を理解・把握することが出来る。
これだけであれば私をも凌駕している。
しかもマナが驚いた理由はそれだけではないだろう。
歪んだ交響曲（ショットガン・パラドックス）は最初に撃ったときこそ軌道が読めるが、壁などに反射してからはランダムに動くために見切ることは困難になる。
ましてやランダムに動く魔力弾を全て撃ち漏らすことなく、撃ち落とすのは私以外では不可能に近い。
それなのにも関わらず、それをエルはやってのけたのだ。驚かない方がおかしい。

そして、驚きの余りに動けなくなっているマナは、これ以上ないほどに隙だらけで、捕まえない方が無理だ。

「これで全部、か。案外あっけなかったな」

「……エルが強いから」

「あはは……。戦いを知らない学生と比べちゃダメだと思うよ？」

「ですがまだ一時間以上もありますが、どうするのですか？」

シェリルに言われて時間を確認してみると、確かに一時間以上も時間が余っている。

なるべく時間一杯にまで引き延ばしてくれと言われていたのだが、こうまで時間が余ってしまった場合はどうすれば良いのだろうか？

最初のペースが遅すぎたから上げてしまったのだが、終わったあとでやり過ぎてしまった思っても遅い、ということか。

「……これで、布石は整った」

「なに？」

「シキさん。悪いけど、私達の勝ちだ」

捕まえられて壁に体重を預けていたマナが、勝ちを確信したような表情で私に告げてくる。

その表情からはハッタリではなく、本当に布石が整ったということが伝わってくる。

学園全体鬼ごっこは私達が全員が捕まえた時点で終了のはずだ。

だというのに布石が整ったとはどういうことだ？

「学園全体鬼ごっこの鬼は知らない裏ルール、それが適応される」

「鬼が知らない裏ルール？　なんだ、それ」

「残り時間が一時間以上余って全員が捕まった場合、逃げる側と追いかける側が逆転する……その意味が、分からないあなたじゃない

はずだ」

マナがそういった刹那、世界樹の方向から花火にも似た音が発せられた。それと同時に周りが急に騒がしくなる。

この戦いに集中していたために気づいてはいなかったが、この路地の全ての通路の先に大量の気配が密集しているのが分かる。

ようやくマナ達の作戦の全貌を理解することが出来た。

この路地に私達を誘い込んだことから、作戦が始まっていた。

自分達が捕まることを想定しつつ、捕まったあとで裏ルールが適応されることを考慮した上で、私達の体力を削るために戦っていた。

倒せずとも、多少は動きを鈍らせることが出来ればと考えての作戦なのだろう。

さらにいえばなるべく私達の意識を自分達に向けさせて時間を稼ぎ、周りに人員を配置させる。

今この時点で追う側と追いかける側の立場は逆転して尚且つ、追われる側となった私達は文字通り袋の鼠ということになる。

どうやら私達はここに誘い込まれた時点で、マナ達の作戦にはまっていたということか。

「ククク……。クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァッ!!!!!」

それを理解した私は笑いを堪えきれずに、天を仰ぎながら盛大に笑う。

いつ以来だろう。ここまで周りの目も気にせず、盛大に笑ったのは。

私がここまで笑ったのを見たことがなかったユーリを含めた皆は、全員驚いたような顔をしている。

そうか、そうだったな。私はこの世界に来てからここまで笑ったことはなかったな。

「甘い……甘すぎる……。その程度で、私を捕まえられると思っているのか？」
「あぁ。いくらあなたでも、手加減した状態でこの数は相手にできないはずだ」
「それを嘗めているというのだ。どうせなら、シェリル達と一緒に追いかけてこい。私一人で貴様ら全員を撒いてみせよう」
「いいでしょう……。なら――――勝負だ！！」

残りの制限時間一時間にして、私一人対学園全体とシェリル達の戦いが始まった。
こうして、学園祭は過ぎていくのだった。

◇

学園祭も去っていき、季節は始まりの季節である冬となる。
物語の歯車は加速し、新たなる物語の序章が始まる。

第七十一撃『逆転の風。さぁ、鬼の数を数えろ！！』（後書き）

あと幕話を幾つか挟んで雨季様のコラボとなります。
最初に言っておきます……どうしてこうなった……。
最長です。しかも二話構成です。
では、感想待ってます！！

幕撃『ある日の銃神。平行世界の自分』（前書き）

ふと思い浮かんだ話です。
もしかしたらこういうのもありなんじゃないかと思いました。
では、どうぞ！！

幕撃『ある日の銃神。平行世界の自分』

ガタンガタン、という振動が身体を揺らす。
その揺れというのはどちらかといえば心地の良いもので、少しでも気を抜いてしまえば寝てしまいそうだ。
電車の窓から眺める景色は、まるで時間が経過するのを表すかのように緩やかに、ただただ緩やかに流れていく。
視線の先に映る山は、秋真っ盛りというのを示すように紅に装飾されている。
男の一人旅というのも、存外良いかもしれない。
数時間動いていなかったために固まってしまった筋肉をほぐす意味でも、体を伸ばす。
電車の乗るなんていったいいつ以来だろう。
私、シキ・K（クロカミ）・アスタロトはそんなことを思う。
季節は秋。麻帆良際という一大イベントを終え、学生達が気だるさを感じながらも学業に勤しむ季節。
そんな中。私といえば北海道に向かうために電車に乗っている。

（考えてみたら、四十年ぶりか……。あそこに行くのは）

北海道。私がこの世界に来る前、つまり転生する前の世界で生まれ育った土地だ。
別段予定して行こうと思ったわけではない。ただ、ふと行ってみようと思い立ったに過ぎない。
それに、仮に私が生まれ育った家がある場所に行ったとしても、そこに家が分からない。
それ以前に道のりから合っているかが分からない。
この世界は『魔法先生ネギま！』という漫画を元にして生まれた、

いわば仮想世界のようなもので、私がいた世界と同じとは限らない。
あくまでも平行世界というだけで、何もかもが同じとは限らない。

（不安……か。俺が不安なんて、どうかしてる）

内心ではそこに行くことに不安を抱えている。
この世界にもしも私の世界と同じ経過を辿っていたとしても、そこには『黒神織（わたし）』の親はいない。
いるのは私と、唯一血の繋がりをもった妹の『黒神茜奈（せんな）』のみだ。
今にして思えば、私が不意にこのような行動に移ったのは、後悔していたからなのかもしれん。
私のせいではないとはいえ、私が死んでしまったことにより本来の世界の茜奈を一人にしてしまった。
きっと寂しい思いをしているだろう。
だから私はせめて、こちらの世界の茜奈だけでも寂しくないようにしたいとでも思ったのだろうか……？
仮にそうなのだとしたら、滑稽だな。
無意味だと分かりながらもその偽善を突き通す。
……なんとも哀れな道化だ。

（俺は……茜奈に会う資格があるのか……？）

もうすぐ私の生まれ育った家に到着するというのに、私の中ではそのような不安だけが流れる。
そして、電車が停止した。

◇

あぁ、懐かしいな……あれから、何一つ変わっていない。
私が転生してから四十年以上の時を経たというのにも関わらず、

私が茜奈と遊んでいた公園も、よく居眠りをしているばあちゃんが店主をしてる本屋も、何一つ変わっていない。
ここが、私がいた世界ではないことは十二分に理解している。
だけど、それでも懐かしく感じてしまう。
この街で味わった空気も雰囲気も、私が生まれ育った場所そのものだ。
肌寒い中路地を歩き、角を曲がればそこには懐かしき光景が広がっていた。

（……帰ってきたのか）

自分でもよく覚えていたものだと思う。
本来の世界では十七年、こちらでは四十年以上もの歳月を経たというのに、私の足取りは自然にある場所に向かっていたのだから。
視線の先には一つの表札。『黒神』と書かれた表札が掲げられている。
ここは紛れもない私の家であり、『黒神織（オレ）』の家である。
何てことのない、どこにでもありそうな極々普通の家。
ここに住んでいる間は特に何も思わなかったが、こうしてみると感慨深いものがある。
ふと右腕が動き、インターホンを押そうとしていることに気付いた。
私は首を左右に振りながら、右腕を左腕で抑える。

（いったい何をしてるんだろうな、俺は……）

確かに私は黒神家の人間ではあるが、この世界の黒神家の人間ではない。
今の私にはアスタロト家とヘラスの皇族が家族としているが、血の繋がった家族は誰一人いない。

……帰るか。いつまでもここにいる理由はないからな。平行世界の『黒神家』の存在を確認することが出来ただけ、収穫というものだ。

そう考え、引き返そうとする私の耳に声が聞こえてきた。

『行ってくるよ母さん！！　ほら、行くぞ茜奈！！』

『ま、待ってよお兄ちゃん……！！』

その声が聞こえてくると同時に『黒神家』の扉が開き、私の腹部辺りに誰かにぶつかられたような衝撃が来た。

聞いたことがある少年と少女の声……。間違いない。否、間違えようのない声だ。

一人は茜奈の声。もう一つは――――――――。

「アンタ、誰だ？」

「お兄ちゃん、人にぶつかったら謝らないと……。ご、ごめんなさい」

パッと見れば少女と間違えそうなほどに中性的な顔立ちをし、特徴的な黒色の髪は短めに切り揃えられている。

反抗的なつり目は、どちらかといえば不快感をあまり感じない人懐こさを感じさせる。

こいつは――――――――私、いや、『オレ』だ。

まさか、平行世界の自分と対面することになろうとは思わなかった。いや、考えればすぐに分かったことだろう。

それに、この世界では私の母が生きている。それが嬉しい。

「いや。私がここに立っていたのが悪い。すまなかったな」

「別にいいけど。行こうぜ、茜奈！！」

「う、うん……」

『オレ』は私にそういうと、私の横を通り抜けて走り出してしまった。
しかし。妹である茜奈だけは『オレ』と一緒に走り出さずに、不思議そうに私の顔をジッと見つめている。
私に何か用事でもあるのだろうか？
悲しいようだが、私とこの世界の茜奈は初対面だ。何か言葉を交わすような接点はない。
すると茜奈は、私を見上げながら口を開いた。

「お兄……ちゃん？」
「ッ！？」

思わず目を見開いてしまうのが自分でも理解できた。
何故私が、茜奈の平行世界の兄であることが分かったのだ？
有り得ない。仮に私が『オレ』と雰囲気が似ていたとしても、ここまで姿形が変わった私を相手に兄だと言えるはずがない。
ならば何故茜奈は私を兄と言ったのか……それは私には分からない。
ただ言えることは、

「私は君の兄ではない。早く行ったらどうだ？　君の兄が待っているよ？」
「うん。じゃあねお兄ちゃん！！」

茜奈は私にそう告げると、『オレ』を追いかけて走り出した。
『オレ』は既に道路を渡り、走っている茜奈に早く来るように手を振りながら叫んでいる。
しかしここで私は嫌な予感がした。今までの経験上、こういった場面での私の予感は第六感のようなもので、予知しているようにさ

え思える。
そしてすぐに、私の悪い予感は的中した。
茜奈は早く『オレ』のところに行くことに夢中になっていたのだろう。
道路の先から走ってきているトラックの存在に気づいていない。
道路の半分ほどまで来て気付いたはよいが、既に少女の肉体では避けきれるような距離ではない。
しかもそれを助けようとして『オレ』が道路から飛び出し、茜奈を抱き抱えているではないか。

（間に合え！！）

足の裏に十分に氣を収束させ、自分でも驚くくらいの速さでその場から飛び出した。
よくしならせた弓から達人が矢を放つかのような勢いで飛び出し、私はトラックに二人が跳ねられる前に抱き抱えてその場から離脱した。
そして二人を安全な場所に降ろした私は、思わず叫んでしまっていた。

「何を考えているんだ！！　一歩間違えば死んでいたぞ！！」
「ひゃう……！！」

叫んでしまってから気付いたが既に時遅し。
私に叫ばれた茜奈は私を怯えた眼差しで見ながら、『オレ』の背中に隠れてしまった。目の端には涙も浮かんでいる。
これはトラックに轢かれそうになったからか、私から怒鳴られたからかどちらかと訊ねられれば、間違いなく後者だと言える。
悪いと思い謝ろうとしたが、私が茜奈に謝る前に『オレ』が口を開いた。

「アンタ、なに茜奈を泣かせてんだ！！」
「……貴様も貴様だ。なぜ妹に注意をしてやらなかった」
「た、確かにオレの不注意で茜奈を危ない目に遭わせちまった……。だけど、これとそれとは別問題だ！！」

私を見て怯えながら、『オレ』は真っ直ぐに睨み付けてくる。
仕方のない話だ。先ほど怒鳴っただけではなく、私は容姿から怯えられるような形だ。銀色の髪につり上がった蒼の瞳。
今これだけの要素が揃いながら、怯えない子供などいるはずがない。
私は睨み付けてくる『オレ』の目をジッと見据え、目を逸らさない。負けじと『オレ』も目を逸らさないようにしている。

「オレ、アンタが嫌いだ。助けてもらったことは感謝するけど」
「奇遇だな。私も貴様が嫌いになったところだ」

平行世界の私だとはいえ、大切な存在を危険に晒した挙げ句に、怪我をしてるかしていないかの確認もしない奴など気に食わぬ。
さらにこの態度だ。目上の人間に対する態度ではないだろう、それは。

「アンタ、名前なんて言うんだ。オレは『黒神織』だ」
「私か。私は、『クロカミシキ』だ」
「え……？」

私の名前を聞いた途端、『黒神織』は驚いたような声を発した。
当然といえば当然かもしれん。まさか、偶然出会い嫌いになった男と同じ名前だとは思うまい。
驚いたような表情をしている『黒神織』をよそに、私は帰るため

の電車に乗るために脇を通り過ぎて歩き出す。

「強くなれ。私が嫌いならば、いつか倒しに来るが良い」

「……」

「それが出来ぬならば、せめて妹を護れるようになれ」

私は振り向かないまま、後ろにいるはずの『黒神織』に向かってそう告げる。

そして立ち止まることがないまま、私はその場をあとにした。

◇

『クロカミシキ』が立ち去ったあと、織と茜奈はその場から動くことが出来なかった。

確かに『クロカミシキ』の言ったように、一歩間違えてしまえば織は茜奈を失ってしまうところだった。

あの場で『クロカミシキ』がいなかったら、と考えると幼き歳ながら織はゾッとしていた。

妹を護れなかったことに悔しがりながら、織は拳を握りしめる。

ふと目線を前に傾けると、首飾りのような宝石が落ちていることに気付いた。ひし形の赤色の宝石を、取り囲むように枠が取り付けられていた。

（あいつの落とし物か……？　つーか、テメェに言われなくても分かってるっつーの）

首飾りを拾い上げながら先ほどの『クロカミシキ』の言葉を思い出す。

妹を護れるようになるなんて当たり前だ。妹だけじゃなく、家族も護ると織は首飾りを握りしめる。

剣道でもやろうかな、と織は思いながら歩き出す。
とある秋の休日。
こうして『黒神織』と『クロカミシキ』は最悪な出会いを交わした。

幕撃『ある日の銃神。平行世界の自分』（後書き）

変なフラグを立ててますが、これは回収するかは未定です。
では、感想待ってます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0443r/

その竜族は狙撃手なり

2011年10月11日08時54分発行